鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　23

平成18年度発掘調査報告

（第１分冊）

若宮大路周辺遺跡群
能蔵寺跡
甘縄神社遺跡群
円覚寺旧境内遺跡
浄妙寺旧境内遺跡
報国寺遺跡
報国寺遺跡

平成19年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　23

平成18年度発掘調査報告

（第１分冊）

若宮大路周辺遺跡群
能蔵寺跡
甘縄神社遺跡群
円覚寺旧境内遺跡
浄妙寺旧境内遺跡
報国寺遺跡
報国寺遺跡

平成19年３月

鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群

甘縄神社遺跡群

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成15年度及び平成16年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として15ヶ所の調査成果を掲載しています。特に浄妙寺旧境内遺跡（地点⑤）では大量の瓦が出土するとともに2時期以上にわたって存在した池跡の遺構が発見されたことから、六浦道沿いの場所に池をともなう屋敷もしくは寺院のあったことを推定し得る大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成19年3月31日
鎌倉市教育委員会

例　言

1　本書は平成18年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。

2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

(第１分冊)

ごあいさつ
例言
平成18年度調査の概観

1　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目283番の一部地点
第１章　遺跡の位置と歴史的背景 …… 4
第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層 …… 5
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 8
第４章　まとめ …… 44
2　能蔵寺跡（No.314）材木座二丁目294番３外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 59
第２章　調査の概要 …… 62
第３章　検出遺構出土遺物 …… 68
第４章　まとめ …… 94
3　甘縄神社遺跡群（No.177）長谷一丁目227番25地点
第１章　調査地点概観 …… 110
第２章　調査の概要 …… 118
第３章　調査の成果 …… 119
第４章　常滑集中出土について―まとめにかえて …… 136
4　円覚寺旧境内遺跡（No.434）山ノ内字瑞鹿山393番３地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 146
第２章　調査の経緯 …… 148
第３章　発見された遺構と遺物 …… 149
第４章　まとめ …… 165
5　浄妙寺旧境内遺跡（No.408）浄明寺三丁目３番２地点
第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 178
第２章　調査の経過と層序 …… 181
第３章　検出した遺構 …… 183
第４章　出土した遺物 …… 189
第５章　まとめ …… 219
6　報国寺遺跡（No.306）浄明寺二丁目474番11外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 244
第２章　調査の概要 …… 247
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 252
第４章　まとめ …… 278
7　報国寺遺跡（No.306）浄明寺二丁目474番12地点
第1章　調査の概要 …… 293

第2章　検出遺構出土遺物 …… 298
第3章　まとめ …… 322

(第２分冊)

8　極楽寺中心伽藍跡（No.290）極楽寺三丁目1028番1の一部地点
第１章　環境と立地 …… 3
第２章　調査の概要 …… 5
第３章　遺構と遺物 …… 6
第４章　調査成果 …… 19
9　横小路周辺遺跡（No.259）二階堂字四ツ石115－3地点
第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 32
第２章　調査の経過と層序 …… 33
第３章　検出した遺構 …… 39
第４章　出土した遺物 …… 47
第５章　まとめ …… 47
10　若宮大路周辺遺跡群（No.242）御成町126番１地点
第１章　環境と立地 …… 67
第２章　調査の概要 …… 75
第３章　発見遺構 …… 76
第４章　出土遺物 …… 78
第５章　調査成果 …… 83
11　保寿院跡（No.250）西御門一丁目922番４地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 94
第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層 …… 96
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 99
第４章　まとめ …… 129
12　円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内松岡1377番6地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 145
第２章　調査の概要 …… 146
第３章　発見された遺構と遺物 …… 149
第４章　まとめ …… 162
13　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目402番9ほか地点
第１章　調査地点の概観 …… 172
第２章　調査の概要 …… 182
第３章　発見された遺構と遺物 …… 186
第４章　まとめと考察 …… 240
14　材木座町屋遺跡（No.261）材木座一丁目921番5外地点
第１章　遺跡概観 …… 265
第２章　検出された遺構と遺物 …… 268

第３章　まとめ …… 279
15　能蔵寺跡（No.314）材木座二丁目294番3外地点
第１章　調査概要 …… 291
第２章　検出された遺構と遺物 …… 295
第３章　まとめ …… 322
第４章　能蔵寺跡の花粉化石 …… 323

平成18年度調査の概観

平成18年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査３件を含む29件であり、調査面積は1706.55㎡であった。これを前年度の30件、1,535.99㎡と比較すると件数では１件の減少であるが、調査面積では170.56㎡の増加（対前年度比11.11%増）となっており、ここ数年間、少しずつではあるが調査面積は増加の傾向にある。調査面積は平均で１件あたり58.84㎡（前年度は51.19㎡）であり、１件あたりの調査面積についても前年度より増加の傾向が窺われる。調査原因は個人専用住宅の建設が27件、自己用店舗併用住宅の建設が２件である。これら29件の工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が18件（62.1%）、地盤改良工事が９件（31.0%）、車庫、擁壁等の築造が２件（6.9%）となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因（27件：93.1%）になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査原因、面積及び期間等については「平成18年度調査地点一覧」を参照。）

1　玉縄城跡（No.63）

市内北西部の植木字植谷戸に位置し、玉縄城跡の縄張りにおいては南西外郭部として位置付けられる丘陵の東側山裾に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、玉縄城跡に関わる16世紀代の土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。

2　甘縄神社遺跡群（No.177）

市内中心部からやや西寄りの長谷一丁目に位置し、遺跡名の由来となった甘縄神明社の東側約150ｍの場所に所在する。個人専用住宅の建設に付帯して実施される車庫の築造にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀にかけての土壙、柱穴、溝跡、井戸等が発見された。

3　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

市内中心部から東側にあたる二階堂字荏柄に所在し、調査地点の北側に鎮座する荏柄天神社の参道の西側に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴、溝跡、井戸等が発見された。最下層では中世以前の遺物（須恵器等）も若干量出土している。

4　北条時房・顕時邸跡（No.278）

市内中心部の雪ノ下一丁目に位置し、国指定史跡若宮大路の西側に隣接する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする自己用店舗併用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴、溝跡、かわらけ溜り等の遺構が確認され、中世の木製品・かわらけ・金属製品が良好な遺存状態で発見された。なお、調査で確認された溝跡は若宮大路に関わる可能性がある。

5　西御門遺跡（No.325）

市内中心部北東側にあたる西御門一丁目に所在し、市立第二中学校の東側に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の地業面、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が確認された。

6　高徳院周辺遺跡（No.327）

市内中心部の南西側にあたる長谷五丁目に所在し、大仏の西側に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設に発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の礎石建物、地業面、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が確認された。

7　下馬周辺遺跡（No.200）

市内中心部の由比ガ浜二丁目に所在し、鎌倉駅から400ｍほど南に位置する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする店舗併用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の方形竪穴建築址、土壙、柱穴等の遺構が発見された。

8　名越ヶ谷遺跡（No.231）

市内中心部から東方の大町四丁目に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴、溝跡等が確認された。本調査地点の東側丘陵上に所在する遺構群との関連性が注意される。

9　佐助ヶ谷遺跡（No.203）

市内中心部から西方の佐助二丁目に位置している。本調査地点の西側約100ｍに銭洗弁天宇賀福神社が所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の地業面、土壙、柱穴等が確認された。

10　笹目遺跡（No.207）

市内中心部のやや西側に所在し、南北に長大な谷戸のほぼ中央部東側にあたる笹目町に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、地業面、土壙、柱穴等の遺構が確認された。最下層では古代の土師器・須恵器も若干量出土している。

11　高徳院周辺遺跡（No.327）

市内中心部の南西側にあたる長谷五丁目に所在し、前述の調査地点６の南側に隣接する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の地業面、礎石建物、土壙、柱穴等の遺構が確認された。遺構の展開等は調査地点６と様相を同じくする。

12　由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）

市内中心部の由比ガ浜二丁目に位置し、若宮大路に立つ一の鳥居から南東約100ｍに所在する。地下室の設置を含む個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、砂丘を掘り込んでつくられた中世の方形竪穴建築址、土壙、柱穴、溝跡等の遺構を確認した。なお、地鎮の可能性がある土壙も確認されている。

13　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

市内中心部のやや北東となる雪ノ下四丁目に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設が実施されることとなり発掘調査を実施した。

調査の結果、滑川の旧河道、土壙、柱穴等を確認した。弥生土器も若干量出土している。

14　今小路西遺跡（No.201）

市内の中心部にあたる御成町に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、建物跡、土壙、柱穴等の遺構が確認された。遺物資料としては肩部に三鱗文の型押がある常滑産の大甕が埋設された状態で出土した点が特記される。

15　能蔵寺跡（No.314）

市内中心部のやや東となる材木座二丁目に所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、14世紀から17世紀にかけての土壙墓が多数確認された。土壙墓はかわらけ及び銅銭などの副葬品を有する事例がある一方で、副葬品をもたない事例の双方が認められる点など、中世における墓制の一端が良好に窺える事例である。

16　長谷小路周辺遺跡（No.200）

市内中心部のやや南側にあたる由比ガ浜三丁目に所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する自己用店舗併用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の道路状遺構、土壙等の遺構が発見された。確認された道路状遺構は、現在の調査地点の北側を走る県道鎌倉・葉山線と平行している。

17　宇津宮辻子幕府跡（No.233）

市内中心部にあたる小町二丁目に所在し、鎌倉駅の北東約300ｍに位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の礎石建物、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。発見された建物は軸線が若宮大路に並行するという特徴が認められる。

18　大慶寺旧境内遺跡（No.361）

市内西部の寺分一丁目に所在している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴、池に伴う堤等の遺構が発見された。若干量ではあるが古代の土師器等も出土している。

19　西御門遺跡（No.325）

市内中心部からやや北東側となる西御門一丁目に位置し、調査地点の東側約100ｍには国指定史跡法華堂跡（源頼朝墓・北条義時墓）が所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀頃と考えられる土壙、柱穴、溝跡、トイレ状遺構等の遺構が確認された。

20　西御門遺跡（No.325）

前述の調査地点19の西側に隣接する。基礎工事および地下室の築造を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の地業面、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。

21　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

市内中心部のやや東側にあたる二階堂字荏柄に位置し、荏柄天神社の参道に面した場所に所在している。鋼管杭の設置による基礎工事と地下室の築造を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の掘立柱建物、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。遺物資料としては中世の瓦が多数出土していることが注意される。

22　福泉やぐら群（No.447）

市内北部の今泉三丁目に位置する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、近世の段切り跡、中世の土壙、柱穴等が発見された。古代の土師器・須恵器も若干量出土している。

23　大倉幕府跡（No.253）

市内中心部の東側となる雪ノ下三丁目に位置し、源頼朝によって開府された最初の幕府である大倉幕府の推定地と考えられている清泉小学校の南側約50ｍに所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴、溝跡等が発見された。最下層では古代の土師器等も出土した。

24　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

市内中心部にあたる小町一丁目に所在し、鎌倉駅の北東約300ｍに位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の方形竪穴建築址、土壙、柱穴等が発見された。

25　極楽寺旧境内遺跡（No.261）

市内中心部の南側となる極楽寺三丁目に位置し、江ノ島電鉄極楽寺車庫の南東約100ｍに所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴等が発見された。

26　円覚寺旧境内遺跡（No.434）

市内中心部のやや北側となる山ノ内に位置し、円覚寺の南側約200ｍに所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人住宅兼事務所の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の土壙、柱穴、杭列等が発見された。

27　材木座町屋遺跡（No.261）

市内中心部の東側となる材木座二丁目に位置し、妙長寺の北側約50ｍに所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

28　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

市内中心部の東側となる二階堂字荏柄に位置し、荏柄天神社の南西約50ｍに所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

29　今小路西遺跡（No.201）

市内中心部となる由比ガ浜一丁目に位置し、江ノ島電鉄和田塚駅の北側約50ｍに所在している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

本誌掲載の平成15・16年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①★	若宮大路周辺遺跡群(N0.242)	小町ニ丁目283番の一部	自己用店舗併用住宅(杭基礎構造)	都市	150.16㎡	平成15年4月14日～平成15年6月20日
②★	能蔵寺跡(N0.314)	材木座四丁目274番2の一部	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	45.00㎡	平成15年5月29日～平成15年7月21日
③★	甘縄神社遺跡群(N0.177)	長谷一丁目227番25	個人専用住宅(地下車庫)	都市	36.20㎡	平成15年6月17日～平成15年7月10日
④★	円覚寺旧境内遺跡(N0.434)	山ノ内字瑞鹿山393番3	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	36.00㎡	平成15年6月23日～平成15年7月24日
⑤★	浄妙寺旧境内遺跡(N0.408)	浄明寺三丁目3番2	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	37.13㎡	平成15年7月1日～平成15年8月8日
⑥★	報国寺遺跡(N0.306)	浄明寺三丁目474番11外	個人専用住宅(杭基礎構造)	社寺	35.00㎡	平成15年6月23日～平成15年7月25日
⑦★	報国寺遺跡(N0.306)	浄明寺三丁目474番12	個人専用住宅(杭基礎構造)	社寺	21.00㎡	平成15年7月30日～平成15年8月31日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑧★	極楽寺中心伽藍跡(N0.290)	極楽寺三丁目1028番1の一部	個人専用住宅	社寺	43.00㎡	平成15年5月28日～平成15年6月27日
⑨★	横小路周辺遺跡(N0.259)	二階堂字四ツ石115番3の一部	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	80.00㎡	平成15年8月9日～平成15年9月27日
⑩★	若宮大路周辺遺跡群(N0.242)	御成町126番1	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	18.00㎡	平成15年10月25日～平成15年11月21日
⑪★	保寿院跡(N0.250)	西御門一丁目922番4	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	76.00㎡	平成16年1月9日～平成16年3月6日
⑫★	円覚寺門前遺跡(N0.287)	山ノ内字松岡1377番6	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	49.30㎡	平成16年1月20日～平成16年3月13日
⑬◎	若宮大路周辺遺跡群(N0.242)	小町ニ丁目402番9外	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	191.00㎡	平成16年3月10日～平成16年5月16日
⑭▲	材木座町屋遺跡(N0.261)	材木座一丁目921番5外	個人専用住宅(表層地盤改良)	都市	10.50㎡	平成16年6月17日～平成16年6月30日
⑮▲	能蔵寺跡(N0.314)	材木座二丁目294番3外	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	48.00㎡	平成16年7月20日～平成16年9月22日

★印は平成15年度実施の発掘調査
◎印は平成15年～16年度実施の発掘調査
▲印は平成16年度実施の発掘調査

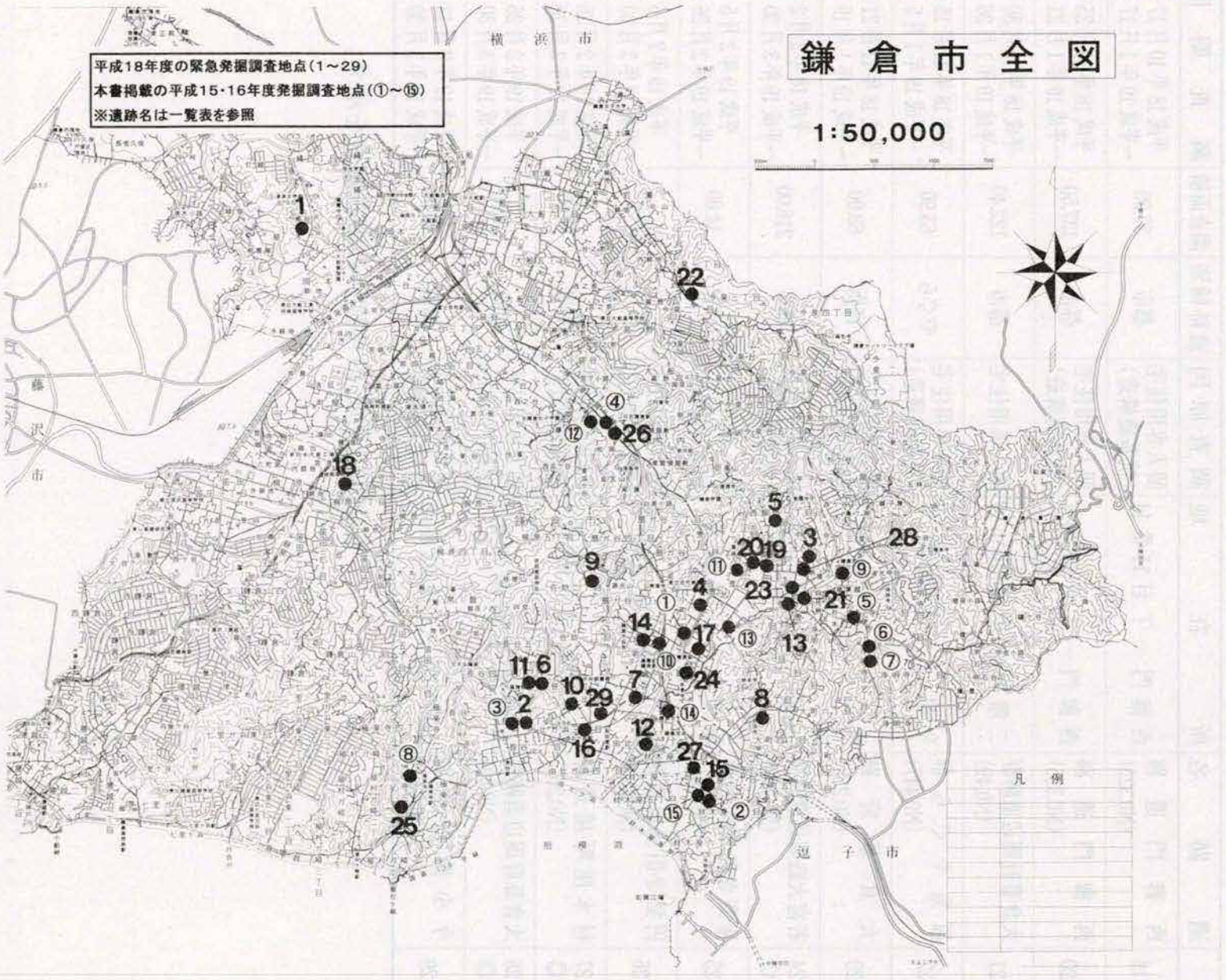
平成18年度発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1★	玉縄城跡(N0.63)	植木字植谷戸198番	個人専用住宅(杭基礎構造)	城館	98.00	平成18年2月6日～平成18年4月6日
2★	甘縄神社遺跡群(N0.177)	長谷一丁目227番24	個人専用住宅(車庫の築造)	都市	93.50	平成18年2月21日～平成18年5月2日
3★	大倉幕府周辺遺跡群(N0.49)	二階堂字荏柄76番7外	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	33.00	平成18年2月23日～平成18年4月25日
4	北条時房・顕時邸跡(N0.278)	雪ノ下一丁目269番1の一部	自己用店舗併用住宅(杭基礎構造)	都市	35.00	平成18年4月4日～平成18年6月13日
5	西御門遺跡(N0.325)	西御門一丁目55番5	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	30.00	平成18年4月4日～平成18年5月29日
6	高徳院周辺遺跡(N0.327)	長谷五丁目337番7	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	46.75	平成18年4月17日～平成18年6月16日
7	下馬周辺遺跡(N0.200)	由比ガ浜二丁目19番1	店舗併用住宅(杭基礎構造)	都市	82.40	平成18年4月25日～平成18年6月13日
8	名越ヶ谷遺跡(N0.231)	大町四丁目1858番4	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	9.75	平成18年5月1日～平成18年6月7日
9	佐助ヶ谷遺跡(N0.203)	佐助二丁目667番3外	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	33.00	平成18年5月17日～平成18年7月3日
10	笹目遺跡(N0.207)	笹目町316番10	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	42.50	平成18年6月15日～平成18年7月24日
11	高徳院周辺遺跡(N0.327)	長谷五丁目337番15	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	39.00	平成18年6月28日～平成18年9月11日
12	由比ガ浜中世集団墓地遺跡(N0.203)	由比ガ浜二丁目1014番57	個人専用住宅(地下室)	都市	49.50	平成18年6月28日～平成18年8月7日
13	大倉幕府周辺遺跡群(N0.49)	雪ノ下四丁目570番1	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	32.00	平成18年7月12日～平成18年8月24日
14	今小路西遺跡(N0.201)	御成町176番7	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	55.00	平成18年7月18日～平成18年9月25日
15	能蔵寺跡(N0.314)	材木座二丁目293番2	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	52.50	平成18年8月10日～平成18年11月2日
16	長谷小路周辺遺跡(N0.200)	由比ガ浜三丁目254番1	自己用店舗併用住宅(地盤の柱状改良)	都市	33.00	平成18年8月21日～平成18年10月3日
17	宇津宮辻子幕府跡(N0.239)	小町二丁目388番2の一部	個人専用住宅(杭基礎構造)	官衙	63.00	平成18年8月23日～平成18年11月2日
18	大慶寺旧境内遺跡(N0.361)	寺分一丁目943番2外	個人専用住宅(杭基礎構造)	社寺	56.10	平成18年9月19日～平成18年11月2日

★印は平成17年度からの継続調査を示す。

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
19	西御門遺跡 (N0.325)	西御門一丁目11番14	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	57.00	平成18年10月17日 ～平成19年1月17日
20	西御門遺跡 (N0.325)	西御門一丁目681番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	137.50	平成18年10月25日 ～平成19年1月23日
21	大倉幕府周辺遺跡群 (N0.49)	二階堂字荏柄3番6外	個人専用住宅	都市	122.40	平成18年10月30日 ～平成19年1月26日
22	福泉やぐら群 (N0.447)	今泉三丁目292番外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	やぐら	63.90	平成18年11月15日 ～平成19年1月5日
23	大倉幕府跡 (N0.253)	雪ノ下三丁目637番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	官衙	68.00	平成18年11月21日 ～平成19年1月19日
24 ◎	若宮大路周辺遺跡群 (N0.242)	小町一丁目333番2	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	216.00	平成18年2月2日 ～平成19年3月30日
25	極楽寺旧境内遺跡 (N0.261)	極楽寺三丁目330番6	個人専用住宅 (半地下駐車場)	社寺	14.00	平成19年2月5日 ～平成19年2月26日
26	円覚寺旧境内遺跡 (N0.434)	山ノ内字瑞鹿山398番	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	40.25	平成19年2月6日 ～平成19年3月30日
27 ◎	材木座町屋遺跡 (N0.261)	材木座二丁目208番1	個人住宅兼事務所 (地盤の柱状改良)	都市	45.00	平成19年2月26日 ～平成19年3月30日
28 ◎	大倉幕府周辺遺跡群 (N0.49)	二階堂字荏柄76番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	42.00	平成19年2月26日 ～平成19年3月30日
29	今小路西遺跡 (N0.201)	由比ガ浜一丁目213番12	個人専用住宅 (地下室・杭基礎構造)	都市	10.50	平成19年3月12日 ～平成19年3月30日

◎印は平成19年度への継続調査を示す。


鎌倉市全図
1:50,000
平成18年度の緊急発掘調査地点(1～29)
本書掲載の平成15・16年度発掘調査地点(①～⑮)
※遺跡名は一覧表を参照
横浜市
藤沢市
逗子市
凡例

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目283番の一部地点

例　言

1．本書は、鎌倉市小町二丁目283番の一部における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査報告である。
2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成15年４月14日～同年６月11日にかけて実施され、調査面積は150.16㎡である。出土遺物は鎌倉市教育委員会が保管している。資料整理にあたっての遺跡略記号はWSYである。
3．調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体：鎌倉市教育委員会
調 査 担 当：滝澤晶子（日本考古学協会員）
調査補助員：安達澄代・安藤龍馬・岩澤智和
調査協力者：奥山利平・河原龍雄・藤枝正義・田口康雄・荻野勲・篠原敏夫・安達越郎（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4．本書の遺構･遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図　１／40・１／80（遺構図の水糸高は海抜高を示す。）
遺物実測図　１／３・１／６
5．遺物実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線 —·—·—　使用痕の範囲 ⟷
調整の変化点 ———　加工痕の範囲 ⟷
6．本書の執筆・編集は以下の者が行なった。
第1章　宮田眞　第２・４章　滝澤晶子　第３章　遺構：滝澤　遺物：森孝子　編集　滝澤
7．本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
遺構図版　滝澤晶子・森孝子
遺物図版　宇賀神雅子・河内令子・坂倉美恵子
遺構写真　滝澤晶子
遺物写真　森孝子
8．また、発掘調査に際して多大な御協力を頂いた建築主に深く感謝の意を表する。

目　　次

本文目次

第１章　遺跡の位置と歴史的背景……4
第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層……5
第３章　検出遺構と出土遺物……8
第４章　まとめ……44

図版目次

図１　遺跡周辺図……5
図２　遺跡位置図……6
図３　グリッド配置図……7
図４　基本土層図……7
図５　1a面遺構配置図……8
図６　１面遺構配置図……9
図７　遺物溜り１～３……10
図８　掘立柱建物１・２……11
図９　柱穴列１・２……12
図10　道路状遺構……12
図11　井戸１・２……13
図12　土坑１～４……13
図13　1b面遺構配置図……14
図14　溝１～３……15
図15　古代遺構配置図……16
図16　表土層出土遺物……18
図17　1a面出土遺物……19
図18　遺物溜り１出土遺物……20
図19　遺物溜り２出土遺物……20
図20　遺物溜り３出土遺物……21
図21　掘立柱建物１出土遺物……22
図22　井戸１・２出土遺物……22
図23　土坑１・２・３出土遺物……23
図24　1面出土遺物(1)……24
図25　1面出土遺物(2)……25
図26　1面出土遺物(3)……26
図27　1面出土遺物(4)……27
図28　溝１・２出土遺物……28
図29　1b面出土遺物(1)……29
図30　1b面出土遺物(2)……30
図31　1b面出土遺物(3)……31
図32　1b面出土遺物(4)……32
図33　古代河川出土遺物……32
図34　中世層出土の古代遺物……33

写真目次

図版１　A. 調査前風景……45
B. 1a面土丹地業……45
C. １面全景……45
図版２　A. １面全景……46
B. 遺物溜り１……46
C. 遺物溜り２……46
図版３　A. 遺物溜り３……47
B. 掘立柱建物１……47
C. 同上……47
図版４　A. 柱穴列２……48
B. 道路状遺構……48
C. 同上……48
図版５　A. 井戸１……49
B. 井戸２……49
C. 溝１……49
図版６　A. 溝２……50
B. 同上……50
C. 古代河川……50
図版７　出土遺物(1)……51
図版８　出土遺物(2)……52
図版９　出土遺物(3)……53

第１章　遺跡の位置と歴史的背景

本調査地は鎌倉市小町二丁目283番の一部にある。JR鎌倉駅を起点とすると北東に約220m、若宮大路の二の鳥居からは北西約30mの距離の若宮大路と小町通りの中間地点に位置し、鎌倉を訪れる観光客が最も多く立ち寄る繁華な一画に当たる。

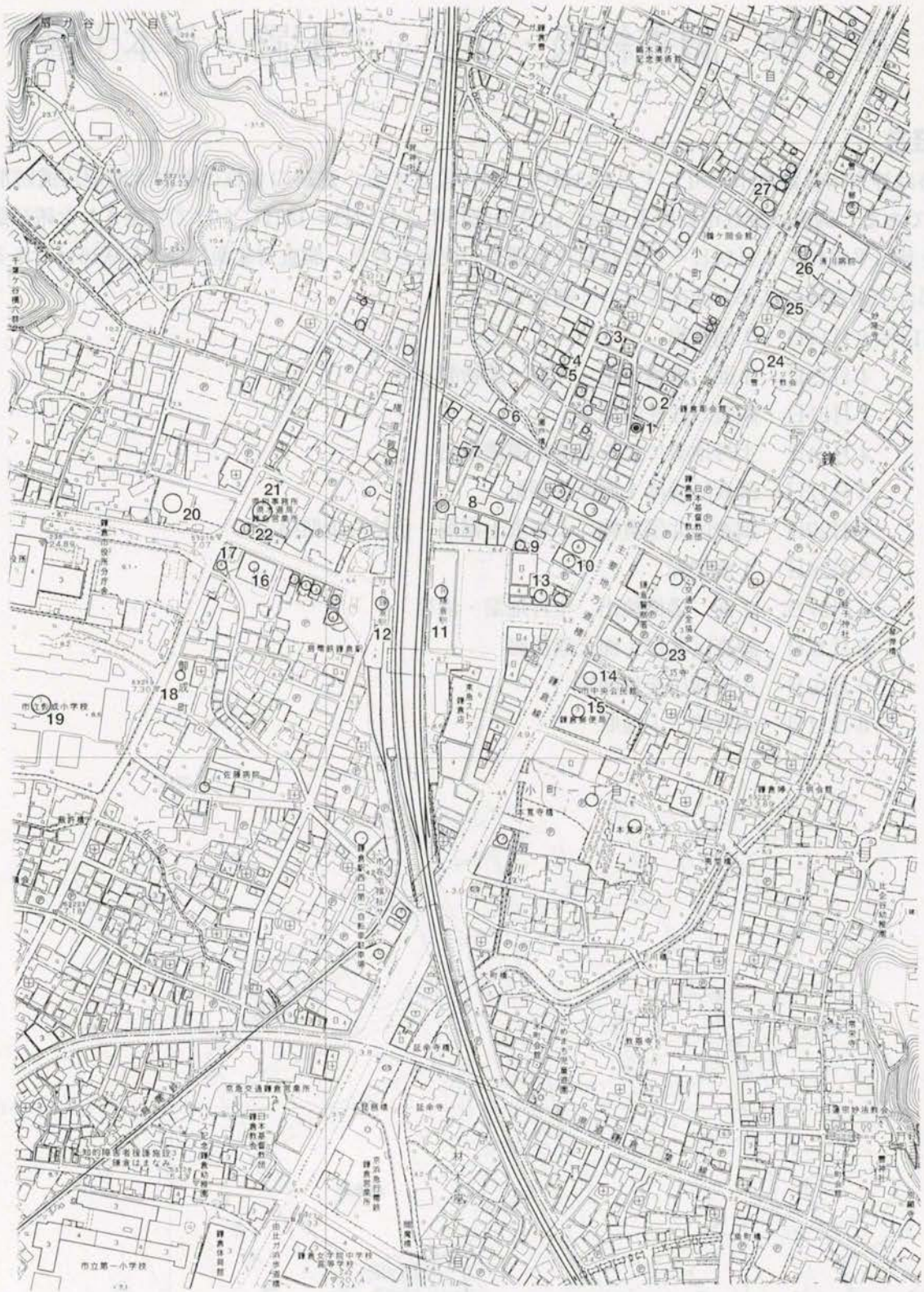
本調査地の遺跡名「若宮大路周辺遺跡群」（神奈川県遺跡台帳№242）は、若宮大路を中軸に北は鶴岡八幡宮社頭、南は下馬四つ角（大町大路＝県道鎌倉・葉山線との交点）までの南北約1.1㎞、東西約700mの広範な地域に付された遺跡名称で、その範囲内には「北条泰時・時頼邸跡」（神奈川県遺跡台帳№282）、「北条時房・顕時邸跡」（同№278）、「宇都宮辻子幕府跡」（同№239）など他遺跡をも包括する。

「若宮大路」は言わずと知れた鶴岡八幡宮の参道で、中央部分には「段葛」と呼ばれる高みが築かれ、将軍等が公式に参詣する際に使われていた。若宮大路の造営については、寿永元年（1182）３月源頼朝が妻・北条政子の安産祈願に際し、頼朝自らが発願・監督をし、北条時政をはじめ重臣らも皆土石を運んだと伝えられている。

頼朝は、京都の平安京を模して鎌倉の都市計画をしたと言われ、この若宮大路を朱雀に擬え南北の基軸に据え町割を進めた。現在の「二の鳥居」の北側の若宮大路沿いには、北条氏をはじめとする有力御家人達が屋敷を構えた。特に大路東側には北条氏嫡流の拠点が代々営まれ、13世紀に入ると「若宮幕府」・「宇都宮辻子幕府」など政治中枢機関や、将軍御所などが置かれた。

近年の若宮大路沿いの地域では頻繁に発掘調査が実施され、東西両側の大路側溝（堀）が複数地点で検出されるなど、若宮大路の規模（道幅）を知る上で大きな手がかりをもたらしている。それによると中世の若宮大路（二の鳥居以北）の道幅は、現在の大路で見ると車道と歩道を合わせた距離が当時の道幅に相当すると考えられる。また最近の調査からは、大路に対して直交方向の道路遺構や、大路側溝をまたぐ橋脚・門になる可能性をもつ空閑地が検出（26地点）されるなど、若宮大路に言われてきた諸々の従来説に対して、新たな疑問と課題を投げかけている。

また今回調査するに当たって、直接関連がもたれると考えられる北隣の豊島屋本店用地の調査では、かなりの規模になると考えられる柱間７尺を測る掘っ立て柱建物が検出され、さらに建物の直ぐ北側からは敷地内の排水が目的と思われる東西方向の小規模な溝が見つかり、その覆土からは夥しい数の一括廃棄された折敷が出土するなど、活発な人の営みが確認されている。



1．本調査地点
2．小町２丁目283-６地点
3．小町２丁目5－８地点
4．小町２丁目12-５地点
5．小町２丁目12-18地点
6．小町２丁目63-３地点
7．小町１丁目116地点
8．小町１丁目106-１地点
9．小町２丁目65-21地点
10．小町１丁目67-２地点
11．蔵屋敷東遺跡
12．〃
13．小町１丁目75-１地点
14．（推定）藤内定員邸跡遺跡
15．小町１丁目305・308地点
16．諏訪東遺跡
17．御成町788-３地点
18．御成町786他１地点
19．今小路西遺跡
20．千葉地遺跡
21．千葉地東遺跡
22．御成町228番２地点
23．小町１丁目322地点
24．小町１丁目１-66-３地点
25．宇津宮辻子幕府跡
26．北条泰時・時頼邸跡
27．北条時房・顕時邸跡（雪ノ下１-274-２地点）

図１　遺跡周辺図

第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層

調査経過

遺跡は神奈川県鎌倉市小町二丁目283番の一部に位置する。遺跡の名称は若宮大路周辺遺跡群（No.242）である。調査は鎌倉市教育委員会により平成15年２月12日～14日にかけて実施された確認調査の結果を基に平成15年４月14日～６月11日に本調査が実施された。調査対象面積は約150.16㎡である。敷地の都合上調査区を北部と南部に分けて調査した。

平成15年４月14日　１面検出
４月19日　１面　遺構検出　井戸・遺物溜り等
４月21日　銅製の注ぎ口出土
４月24日　土丹地業による道路状遺構検出
５月17日　調査区南部１面全景撮影
５月20日　調査区北部重機による表土掘削　子持ち山皿出土
５月26日　１面精査
５月27日　１面　遺構検出　土丹地業・溝等
６月６日　調査区北部１面全景撮影
６月10日　古代河川全景撮影
６月11日　調査終了・撤収

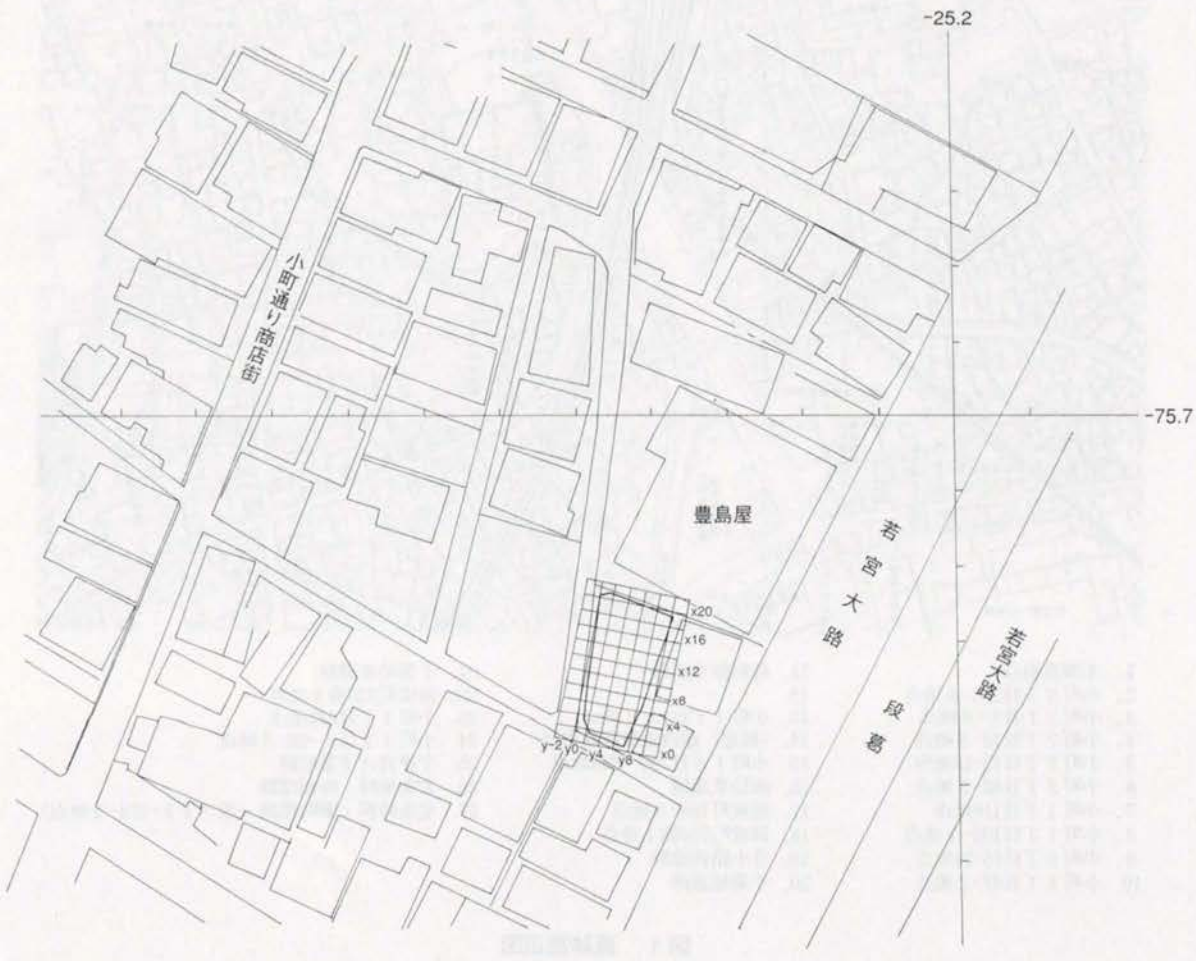


図２　遺跡位置図

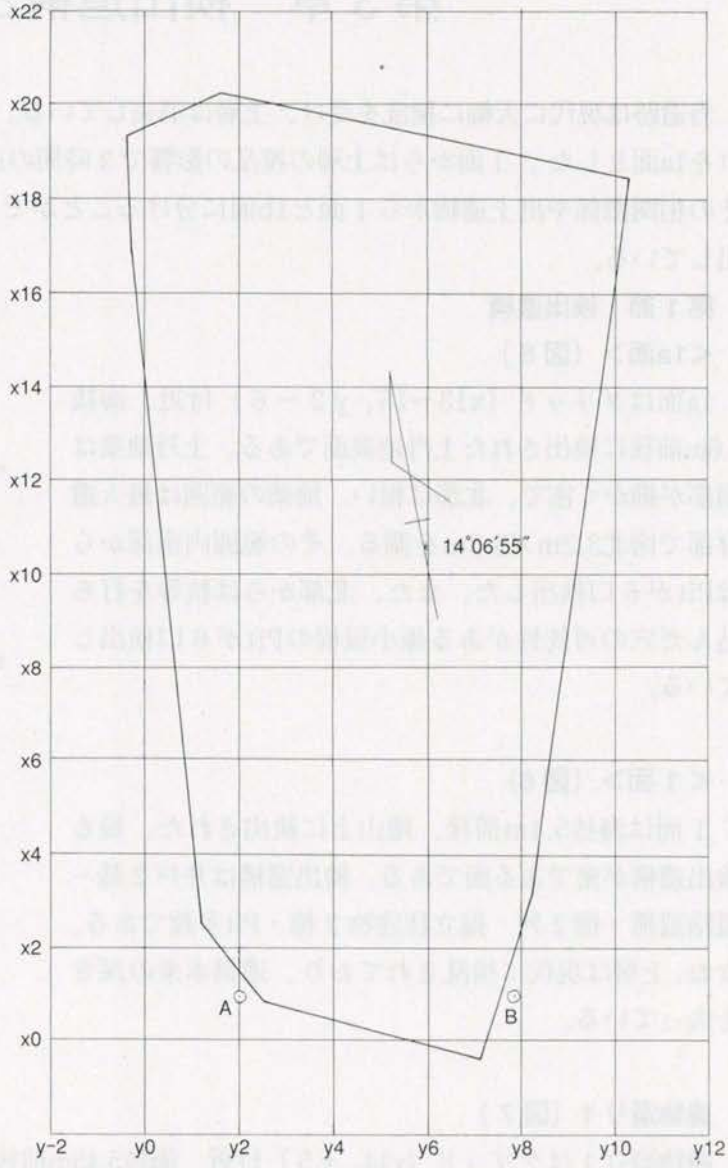
グリッド配置（図３）

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。国土座標（エリア９）との合成点は　A点　グリッド（x１、y２）＝国土座標（X－75.7428、Y－25.2490km）　B点　グリッド（x１、y7.85）＝国土座標（X－75.7435、Y－25.2433km）である。グリッドx軸は磁北に対して14° 06′ 55″ 東に傾く。

基本土層（図４）

現地表は海抜6.0m前後を測る。調査区の大部分が現地表下１m前後現代撹乱で消失している。遺構が検出された土層は黒褐色粘質土の地山である。ただし、海抜5.6m付近に良好な土丹地業が検出し、これを1a面としている。また、１面は複数時期の遺構がほぼ同一レベルに混在して検出し、遺構同士の相関関係や、出土遺物から２時期に分類し、便宜上１面と1b面と呼称する。そのさらに下層に古代遺構が検出した。

図３　グリッド配置図



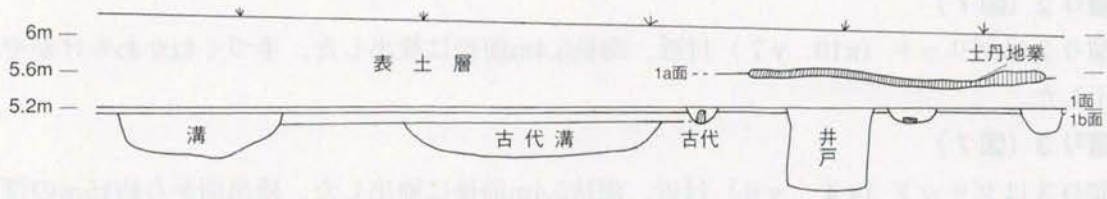


図４　基本土層図

第３章　検出遺構と出土遺物

当遺跡は現代に大幅に撹乱を受け、上層は消失している。ただし一部分遺存している箇所があり、それを1a面とした。１面からは上層の撹乱の影響で２時期の遺構群がほぼ同一レベルで検出しているが、その相関関係や出土遺物から１面と1b面に分けることができた。また、さらに下層には古代河川が検出している。

第１節　検出遺構

＜1a面＞（図５）

1a面はグリッド（x13～15、ｙ２～６）付近、海抜5.6m前後に検出された土丹地業面である。土丹地業は南部が細かく密で、北部は粗い。地業の範囲は最大遺存部で南北3.2m×3.3mを測る。その範囲内南部からはPitが６口検出した。また、北部からは杭等を打ち込んだ穴の可能性がある極小規模のPitが６口検出している。

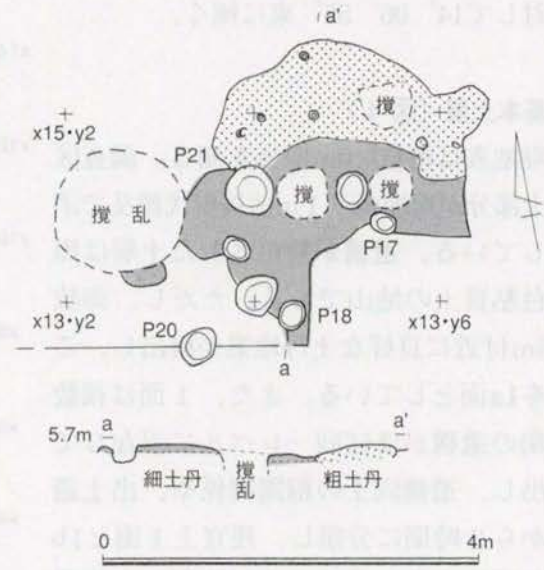


図５　1a面遺構配置図

＜１面＞（図６）

１面は海抜5.4m前後、地山上に検出された。最も検出遺構が密である面である。検出遺構は井戸２基・道路遺構・柵２列・掘立柱建物２棟・Pit多数である。なお、上層は現代に撹乱されており、遺構本来の深さを失っている。

遺物溜り１（図７）

遺物溜り１はグリッド（x14、ｙ５）付近、海抜5.45m前後に検出した。渥美の甕の破片と手づくねかわらけを主に東西1.1m南北１mの範囲に出土した。

遺物溜り２（図７）

遺物溜り２はグリッド（x10、ｙ７）付近、海抜5.4m前後に検出した。手づくねかわらけがやや散乱して出土した。

遺物溜り３（図７）

遺物溜り３はグリッド（ｘ４、ｙ６）付近、海抜5.4m前後に検出した。検出面から約15㎝の深さの浅い掘り込みに手づくねかわらけがまとまって出土した。

掘立柱建物１（図８）

掘立柱建物１はグリッド（x10～14、ｙ２～８）付近、海抜5.4m前後に検出した。検出規模は確認し得た範囲で南北２間、東西３間で８口の柱穴で構成される。柱穴間の距離は芯々で、210㎝前後を測る。深さは検出面から20～40㎝前後を測る。７口の柱穴に礎板が検出され、Ｐ６は下駄が礎板転用されていた。南北軸線方向はN－22°－Eである。

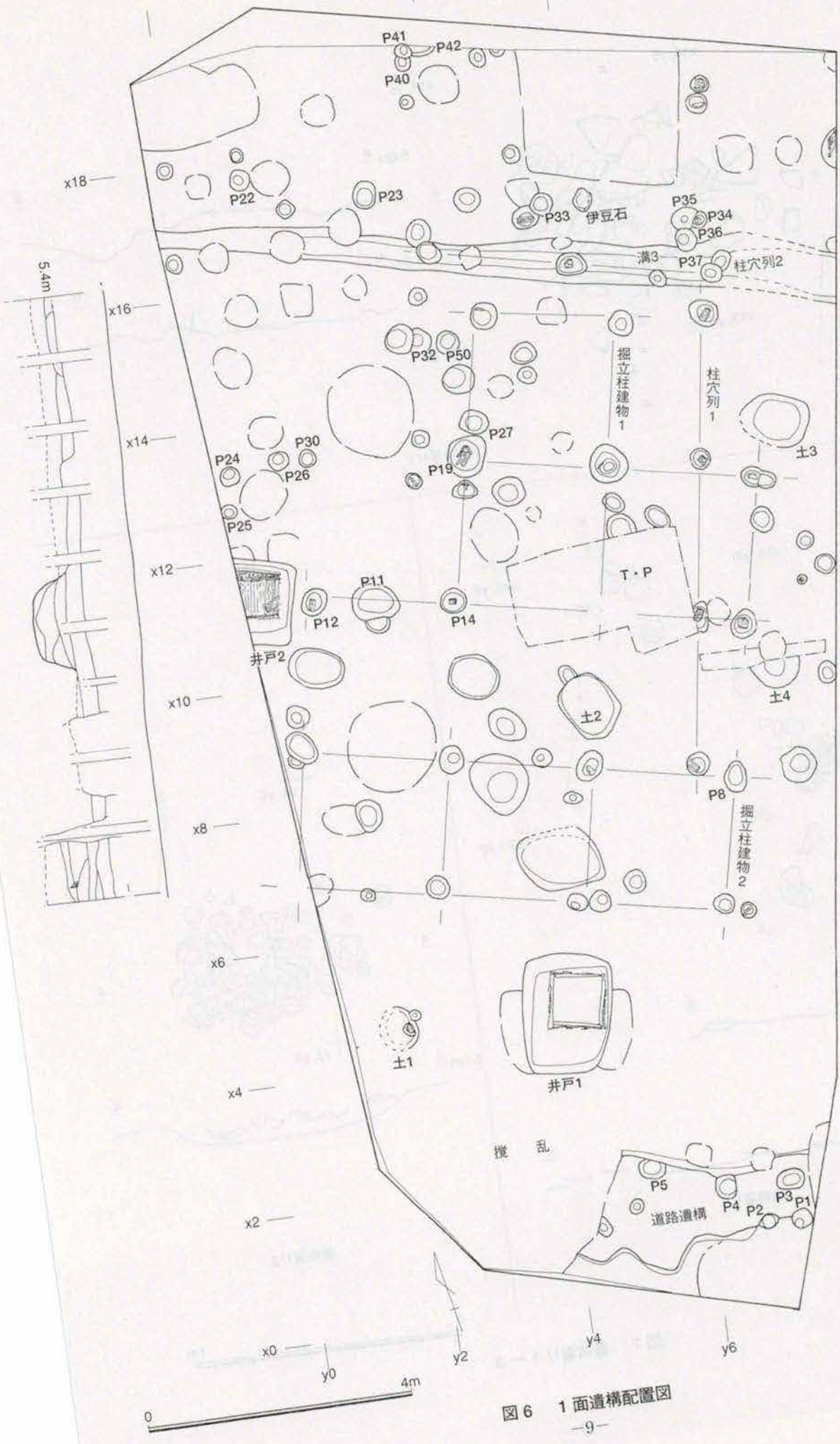
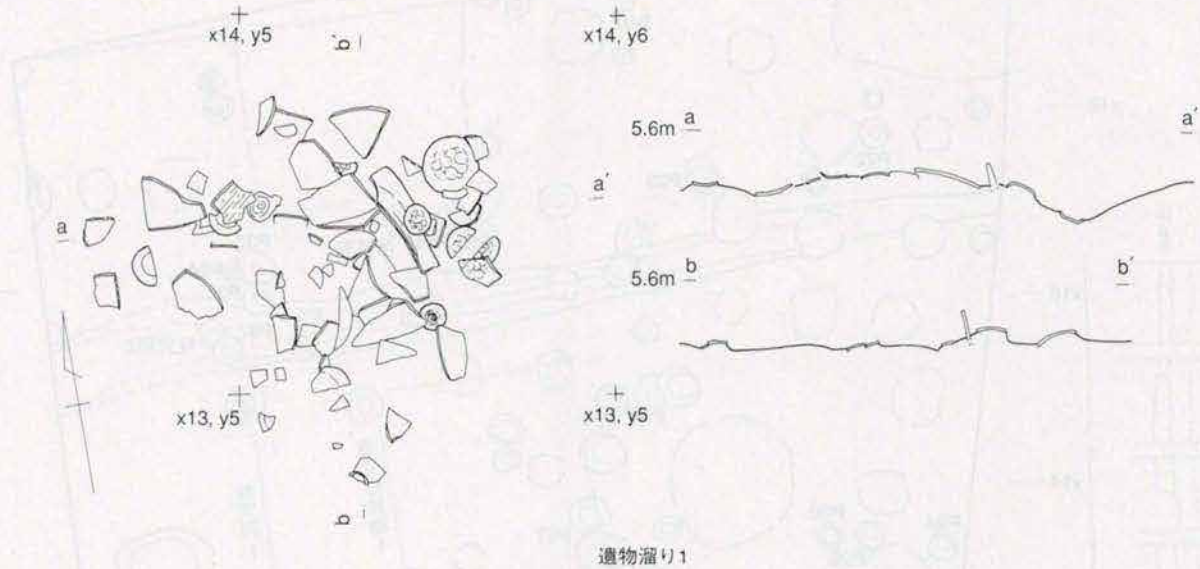

P41
P42
P40
P22
P23
P33
伊豆石
P35
P34
P36
溝3
P37
柱穴列2
5.4m
x18
x16
x14
x12
x10
x8
x6
x4
x2
x0
y0
y2
y4
y6
y8
4m
0
P32
P50
掘立柱建物1
柱穴列1
P27
P30
P24
P26
P19
土3
P25
T・P
P11
P12
P14
井戸2
土4
土2
P8
掘立柱建物2
土1
井戸1
撹乱
P5
P4
P2
P3
P1
道路遺構

図6　1面遺構配置図


x14, y5
x14, y6
5.6m a
a'
5.6m b
b'
x13, y5
x13, y5
遺物溜り1

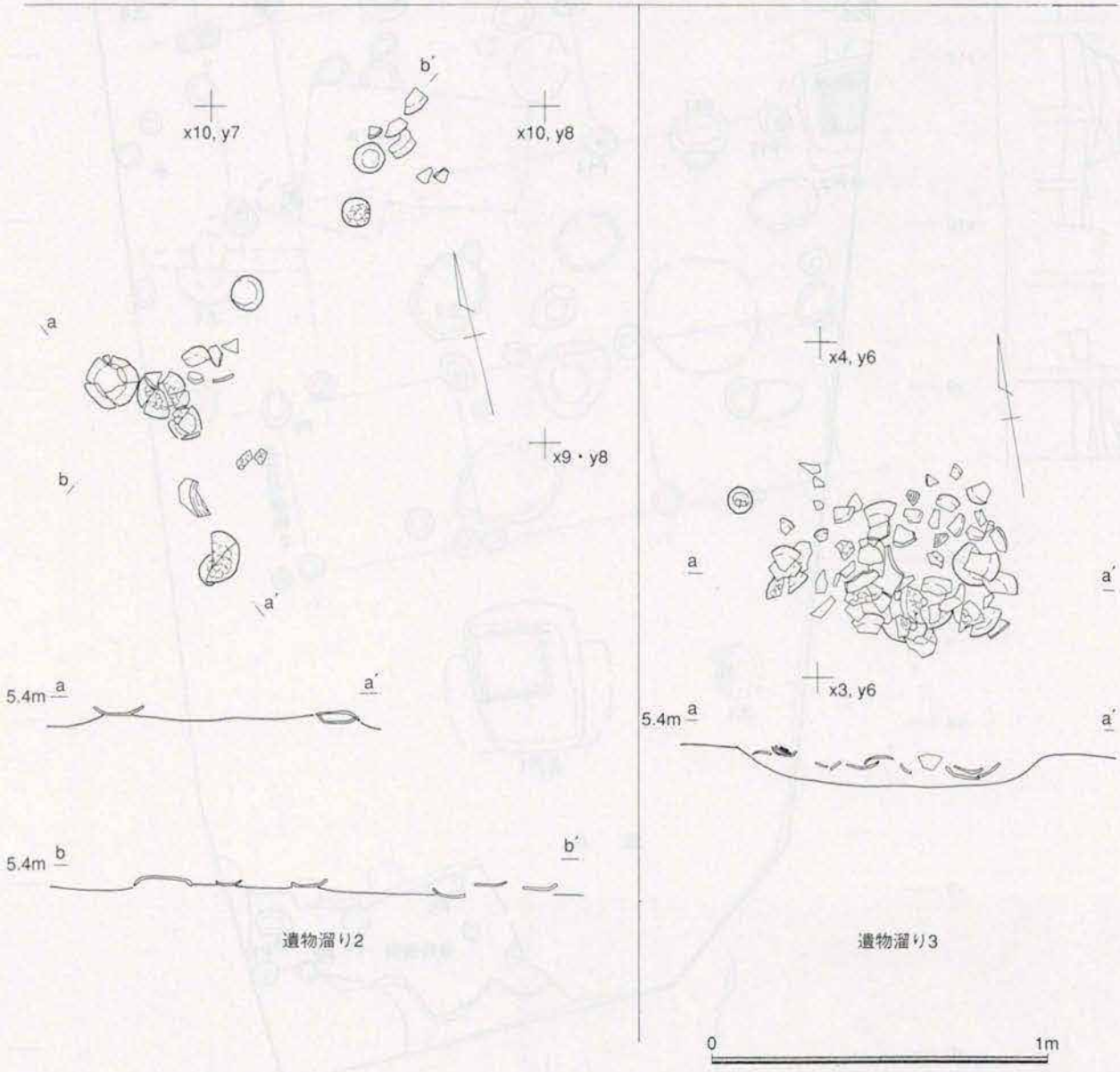

x10, y7
x10, y8
x9・y8
x4, y6
x3, y6
5.4m a
a'
5.4m b
b'
遺物溜り2
遺物溜り3
0
1m

図7　遺物溜り1～3

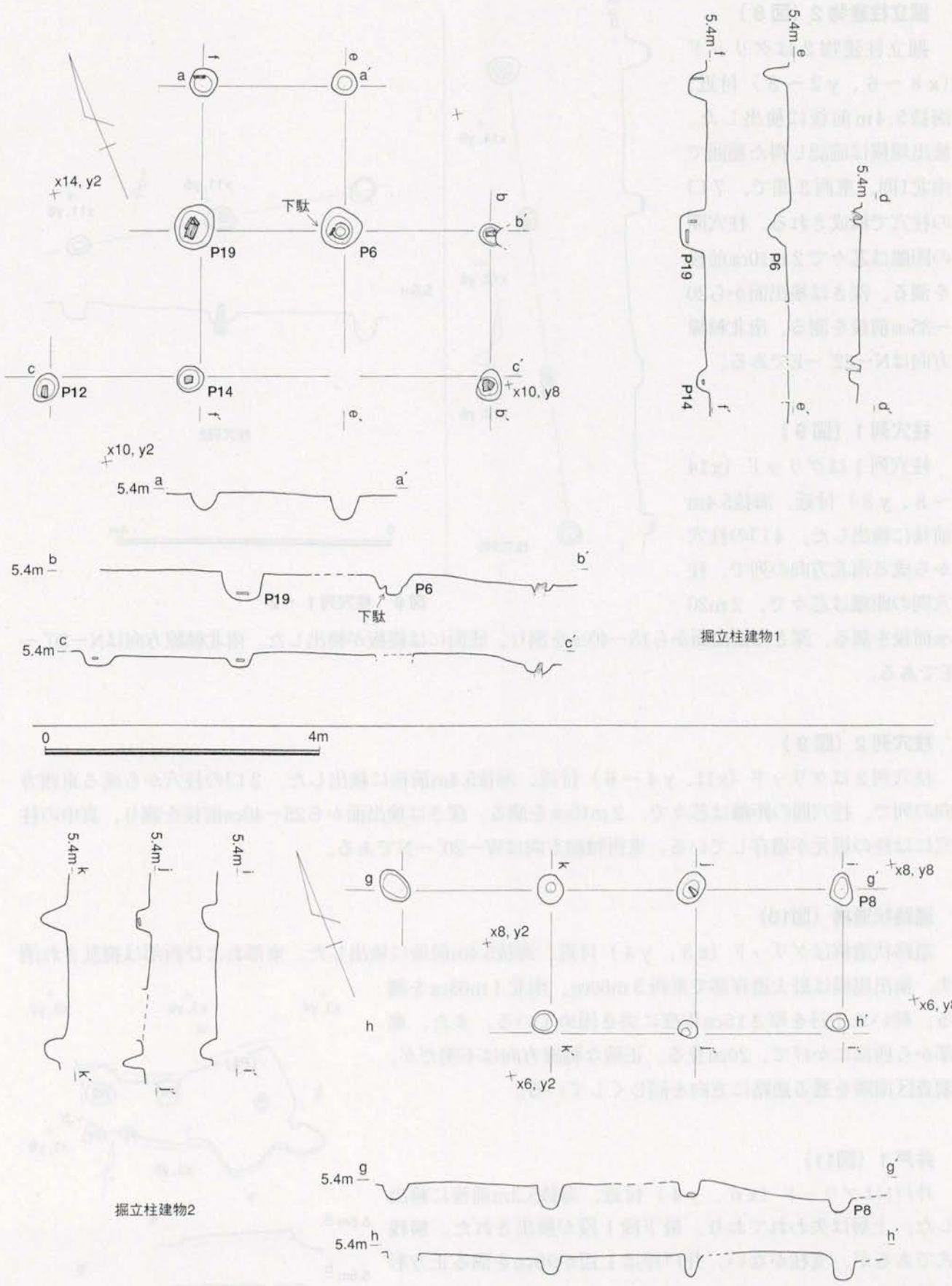

x14, y2
下駄
P19
P6
P12
P14
x10, y8
x10, y2
5.4m
掘立柱建物1
0
4m
x8, y8
x8, y2
x6, y8
x6, y2
掘立柱建物2

図８　掘立柱建物１・２

掘立柱建物２（図８）

掘立柱建物２はグリッド（ｘ８～６、ｙ２～８）付近、海抜5.4ｍ前後に検出した。検出規模は確認し得た範囲で南北1間、東西３間で、７口の柱穴で構成される。柱穴間の距離は芯々で２ｍ10㎝前後を測る。深さは検出面から20～35㎝前後を測る。南北軸線方向はN－22°－Eである。

柱穴列１（図９）

柱穴列１はグリッド（x14～８、ｙ８）付近、海抜5.4m前後に検出した。４口の柱穴から成る南北方向の列で、柱穴間の距離は芯々で、２ｍ20㎝前後を測る。深さは検出面から15～40㎝を測り、底面には礎板が検出した。南北軸線方向はN－20°－Eである。

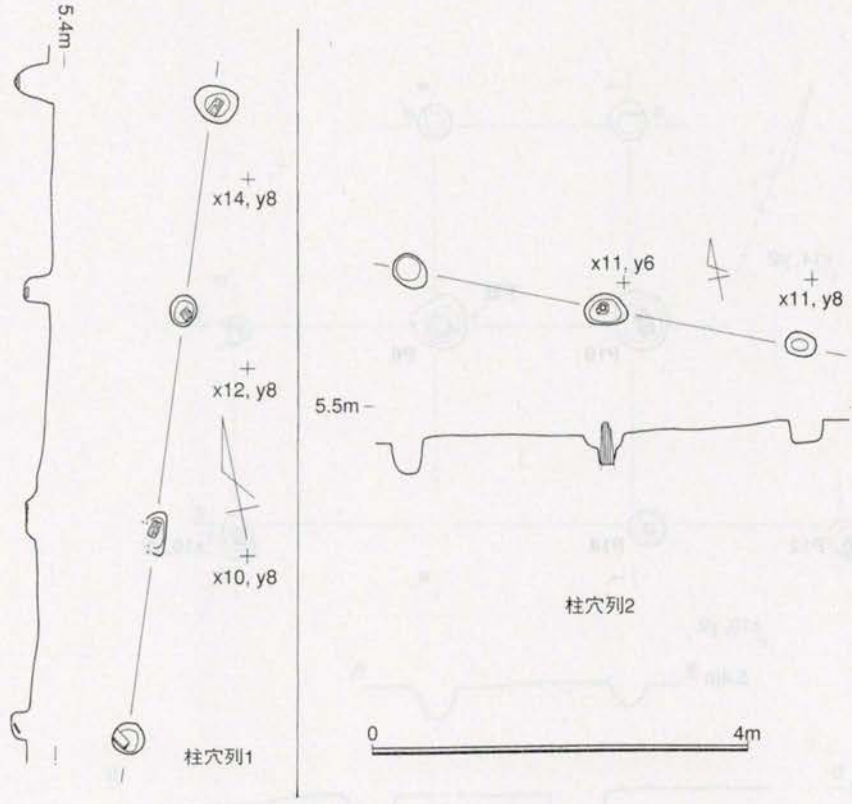


図９　柱穴列１・２

柱穴列２（図９）

柱穴列２はグリッド（x11、ｙ４～６）付近、海抜5.4m前後に検出した。３口の柱穴から成る東西方向の列で、柱穴間の距離は芯々で、２ｍ10㎝を測る。深さは検出面から25～40㎝前後を測り、真中の柱穴には柱の根元が遺存している。東西軸線方向はW－20°－Nである。

道路状遺構（図10）

道路状遺構はグリッド（ｘ３、ｙ４）付近、海抜5.4m前後に検出した。東部および西部は撹乱され消失。検出規模は最大遺存部で東西３ｍ60㎝、南北１ｍ68㎝を測る。砕いた土丹を厚さ15㎝程度に突き固めている。また、東部から西部にかけて、20㎝登る。正確な軸線方向は不明だが、調査区南隣を通る通路に方向を同じくしている。

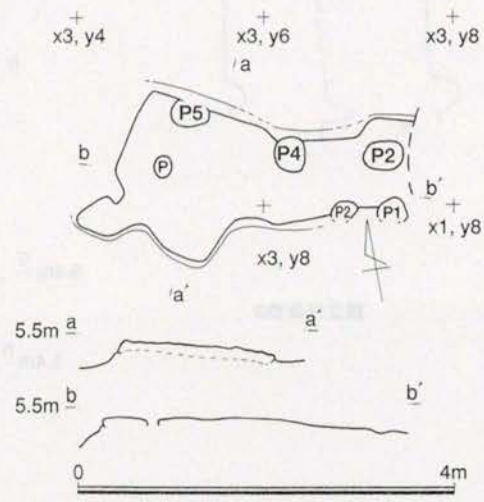


図10　道路状遺構

井戸１（図11）

井戸1はグリッド（ｘ６、ｙ４）付近、海抜5.3m前後に検出した。上層は失われており、最下段１段が検出された。横桟式であるが、支柱がない。井戸枠は１辺が90㎝を測る正方形を呈す。

井戸２（図11）

井戸２はグリッド（x12、y－２）付近、海抜5.2m前後に検

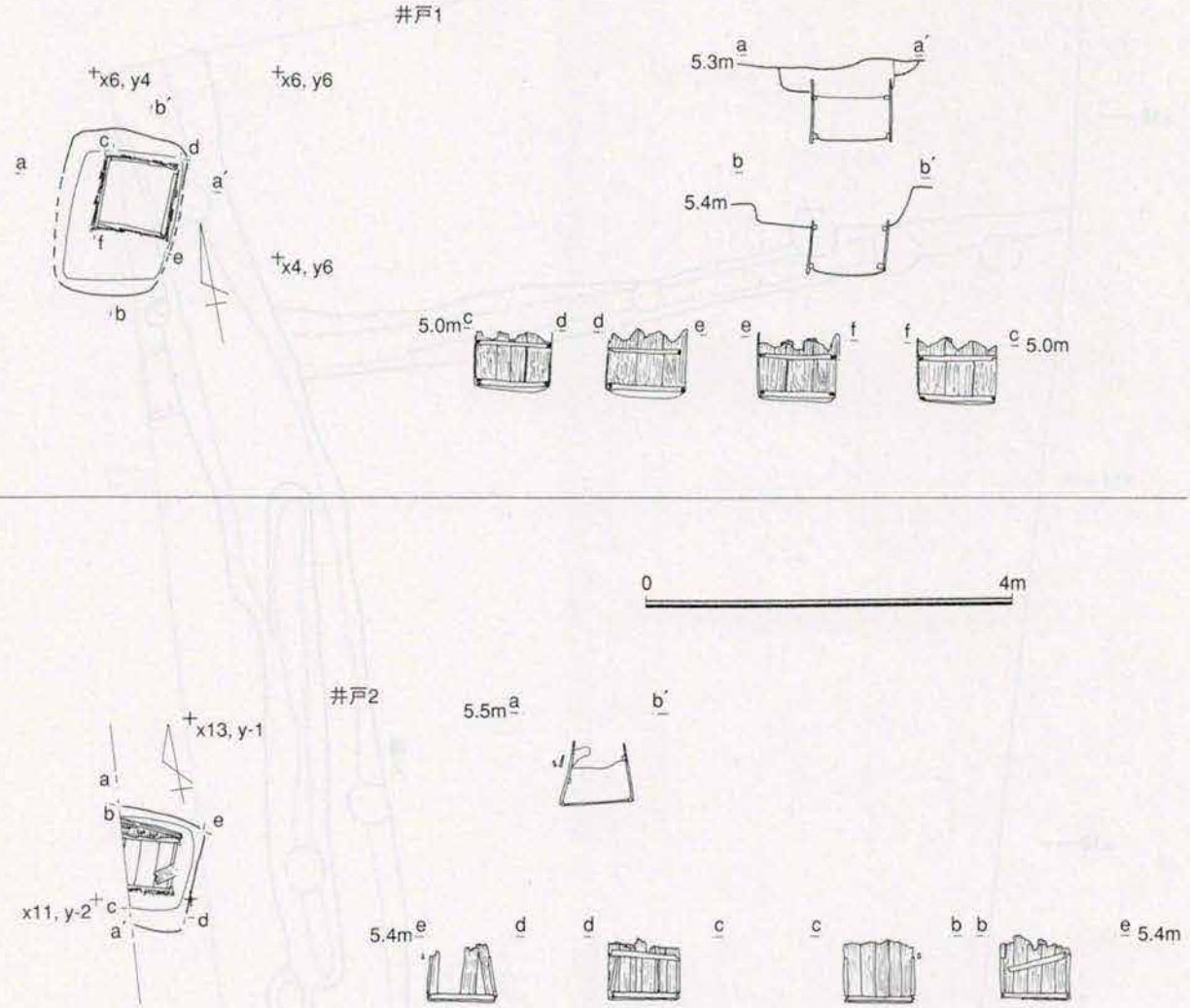


図11　井戸１・２

出した。西部は調査区外。上層は失われており、最下段１段が検出された。横桟支柱式の井戸である。底面には床板が張られている。井戸枠は１辺が80cmを測る正方形を呈す。

土坑１（図12）

土坑１はグリッド（x５、y２）付近、海抜5.2m前後に検出した。平面形は推定で直径70cmを測る円形を呈し、深さは検出面から20cmを測る。覆土からは伊豆石と木片が出土した。

土坑２（図12）

土坑２はグリッド（x９、y４）付近、海抜5.4m前後に検出した。平面形は100cm×80cmの不整円形を呈し、深さは検出面から42cmを測る。

土坑３（図12）

土坑３はグリッド（x13、y８）付近、海抜5.2m前後に検出した。平面形は80cm×100cmの不整円形を呈し、深さは検出面から15cmを測り浅い。

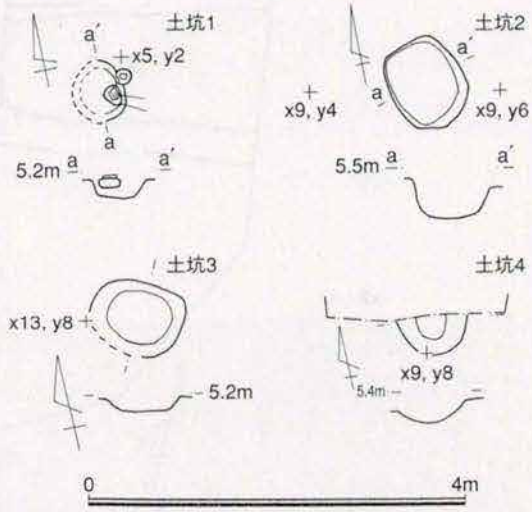


図12　土坑１～４

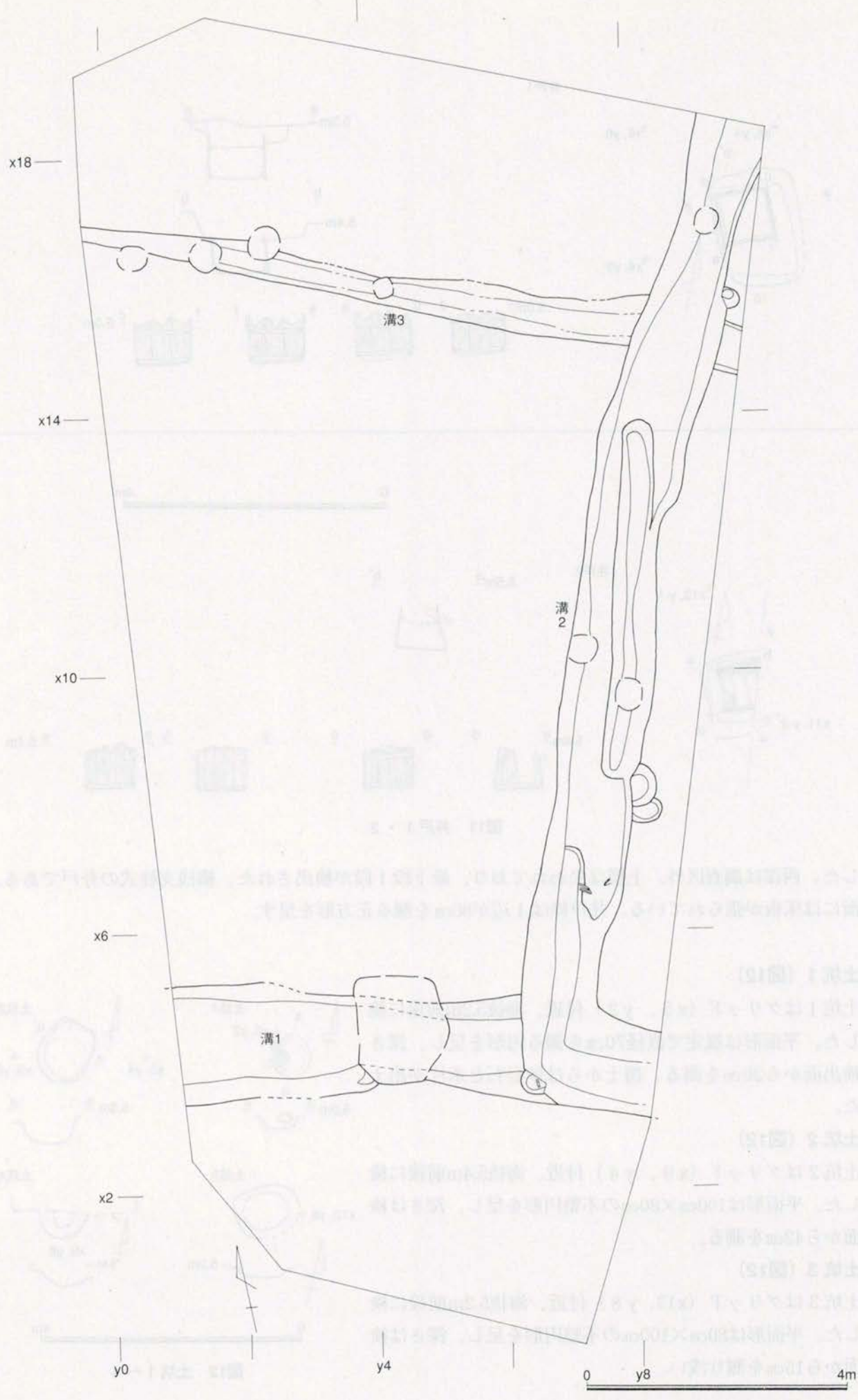


図13　1b面遺構配置図

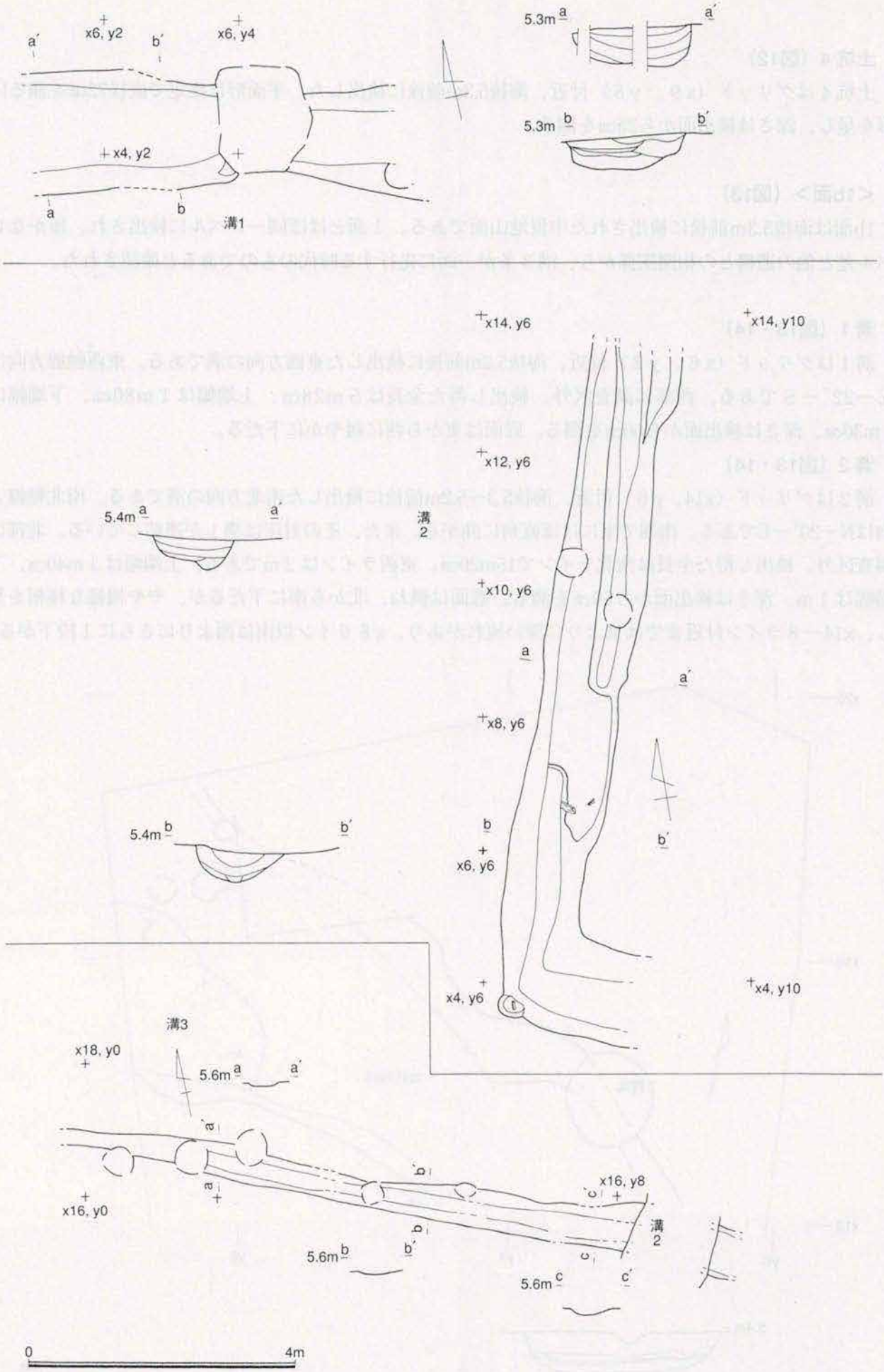

x6, y2
x6, y4
x4, y2
溝1
5.3m
5.3m
溝2
5.4m
x14, y6
x14, y10
x12, y6
x10, y6
x8, y6
x6, y6
x4, y6
x4, y10
5.4m
溝3
x18, y0
5.6m
x16, y0
x16, y8
5.6m
5.6m
0
4m

図14　溝１～３

土坑４（図12）

土坑４はグリッド（ｘ９、ｙ８）付近、海抜5.3m前後に検出した。平面形は推定で直径72㎝を測る円形を呈し、深さは検出面から25㎝を測る。

＜1b面＞（図13）

1b面は海抜5.3m前後に検出された中世地山面である。１面とほぼ同一レベルに検出され、僅かなレベル差と他の遺構との相関関係から、溝３条が一面に先行する時代のものであると確認された。

溝１（図13・14）

溝１はグリッド（ｘ６、ｙ２）付近、海抜5.2m前後に検出した東西方向の溝である。東西軸線方向はＥ－22°－Ｓである。西部は調査区外。検出し得た全長は５ｍ28㎝、上端幅は１ｍ80㎝、下端幅は１ｍ30㎝、深さは検出面から60㎝を測る。底面は東から西に緩やかに下だる。

溝２（図13・14）

溝２はグリッド（x14、ｙ６）付近、海抜5.3～5.2m前後に検出した南北方向の溝である。南北軸線方向はN－20°－Eである。南端で東にほぼ直角に曲がる。また、その対岸は溝１が連結している。北部は調査区外。検出し得た全長は南北ラインで15m20㎝、東西ラインは２ｍである。上端幅は１ｍ40㎝、下端幅は１ｍ、深さは検出面から50㎝を測る。底面は概ね、北から南に下だるが、やや複雑な様相を呈し、x14～８ライン付近までは東よりに深い流れがあり、ｘ８ライン以南は西よりにさらに１段下がる。

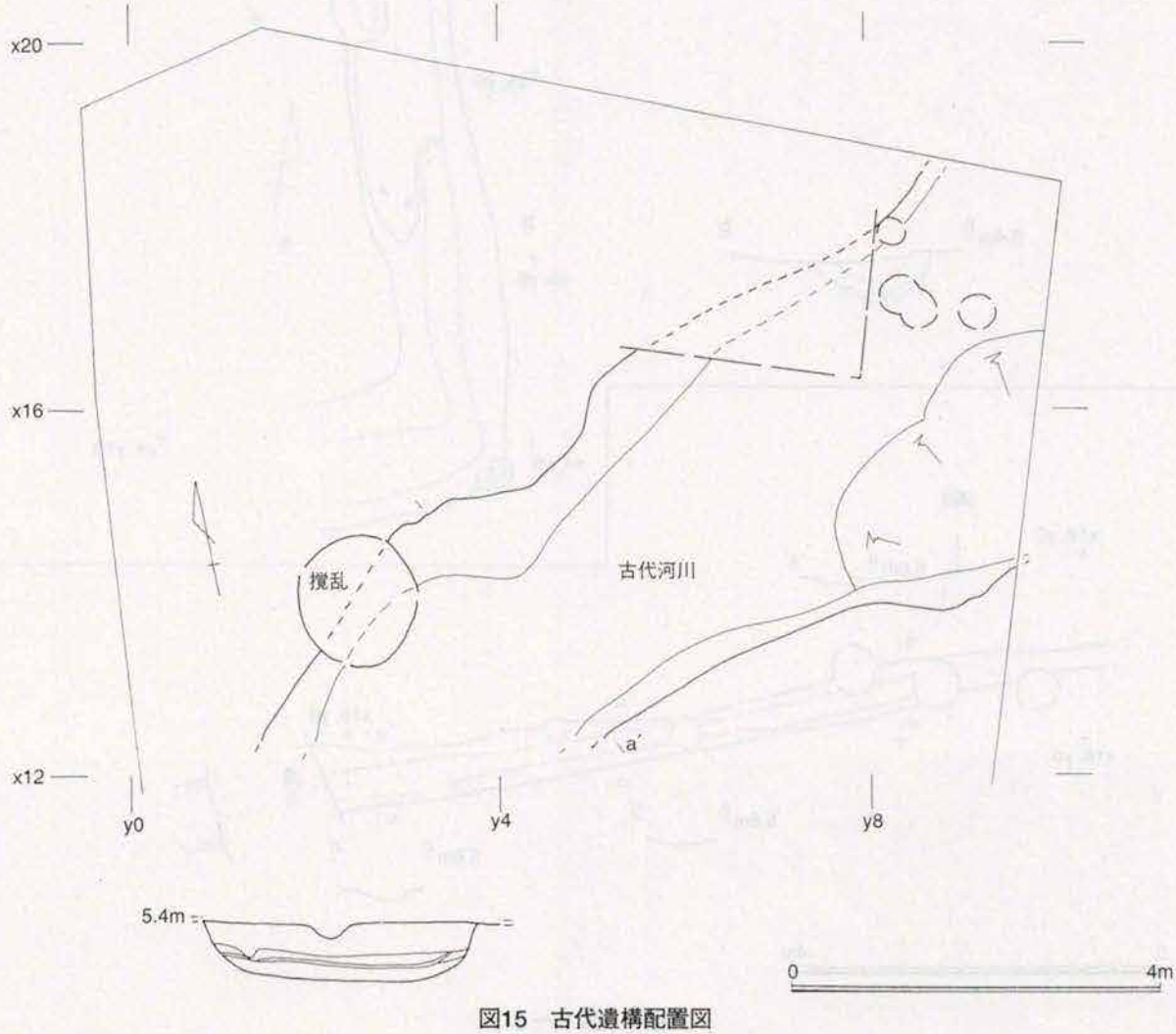


図15　古代遺構配置図

溝３（図13.・14）

溝３はグリッド（x18、ｙ０）付近、海抜5.5～5.2m前後に検出した東西方向の溝である。東西軸線方向はE－20°－Sである。東部および西部は調査区外に広がる。検出し得た全長は10m10㎝である。この溝は上層が削平されており、底部付近のみ検出された。特に、西部は浅く、その深さは検出面から５㎝程度しか遺存していない。

溝１～３は敷地の区画溝である。相互の位置関係は溝３-溝２・溝２-溝１がほぼ90°で配置され、溝３-溝１間の距離は芯々で11m60㎝を測る。また、溝２は溝３と交差し、さらに、溝２は東へ曲がり、別区画を構成している。即ち、当調査区内で５ヶ所に区画されている様相が見て取れる。

＜古代遺構＞（図15）

古代遺構は中世遺構とほぼ同一レベルに検出した河川遺構である。

古代河川（図15）

古代河川はグリッド（x12～20、ｙ１～９）付近、海抜5.4m前後に検出した。方向は北東から南西にごく緩やかに下だり、軸線方向はN－66°－Eである。検出し得た全長は10m50㎝である。最大上端幅は３m52㎝、最大下端幅は２m70㎝を測る。深さは検出面から65㎝前後を測る。下層には有機物が堆積していた。

第２節　出土遺物

概括

今回出土した遺物は整理箱20箱で、調査面積に比し、出土量が多い。出土遺物は中世遺物が大部分を占めており、その器種の組成はかわらけを主体とし、舶載陶磁器、国内搬入陶器、土製品、金属製品、石製品、木製品等の鎌倉における他の中世遺跡と同様の様相である。古代遺物も古代遺構の覆土、あるいは中世層に混入して少量出土した。

本遺跡地の出土遺物の主体を成すかわらけは、圧倒的に手づくね成形の出土比率が高く、糸切り成形のものがそれを補足するといった様相を呈している。また、出土した手づくね成形のかわらけは初現のものから終末期に比定される13世紀第２四半期のものまで幅広く確認された。また、出土した糸切りかわらけの中に鎌倉創建期に遡るものが発見されたことも注目される。

舶載陶磁器類は同安窯系の青磁の櫛劃文碗及び、皿、龍泉窯系の青磁劃花文碗が主体となっており、その凡そ90％を占める。このように鎌倉初期に比定される古手の陶磁器類がまとまって出土したのは特筆すべきことである。この出土状況は、同遺跡群内の小町１丁目322番地・鎌倉スポーツクラブ用地内の出土状況と酷似する。他の磁器類は白磁、青白磁が少量出土している程度である。あえて言うなら鎌倉の遺跡地では出土例が希薄な白磁端反碗が出土していることが注目点である。また、陶器類では黄釉の盤が２点出土している。

国内産陶器類では、常滑窯、渥美窯、山茶碗窯系の製品が出土した。ほぼ同量の出土であるが、若干、渥美窯の製品の出土比率が高い様相である。

また、土製品は手焙り、瓦が出土している。手焙りは小片が２点、瓦は過去の調査においても出土例の少ない永福寺創建期に相当する瓦が発見されたことを明記する。また、特殊な土器として脚付の土器皿が出土している。

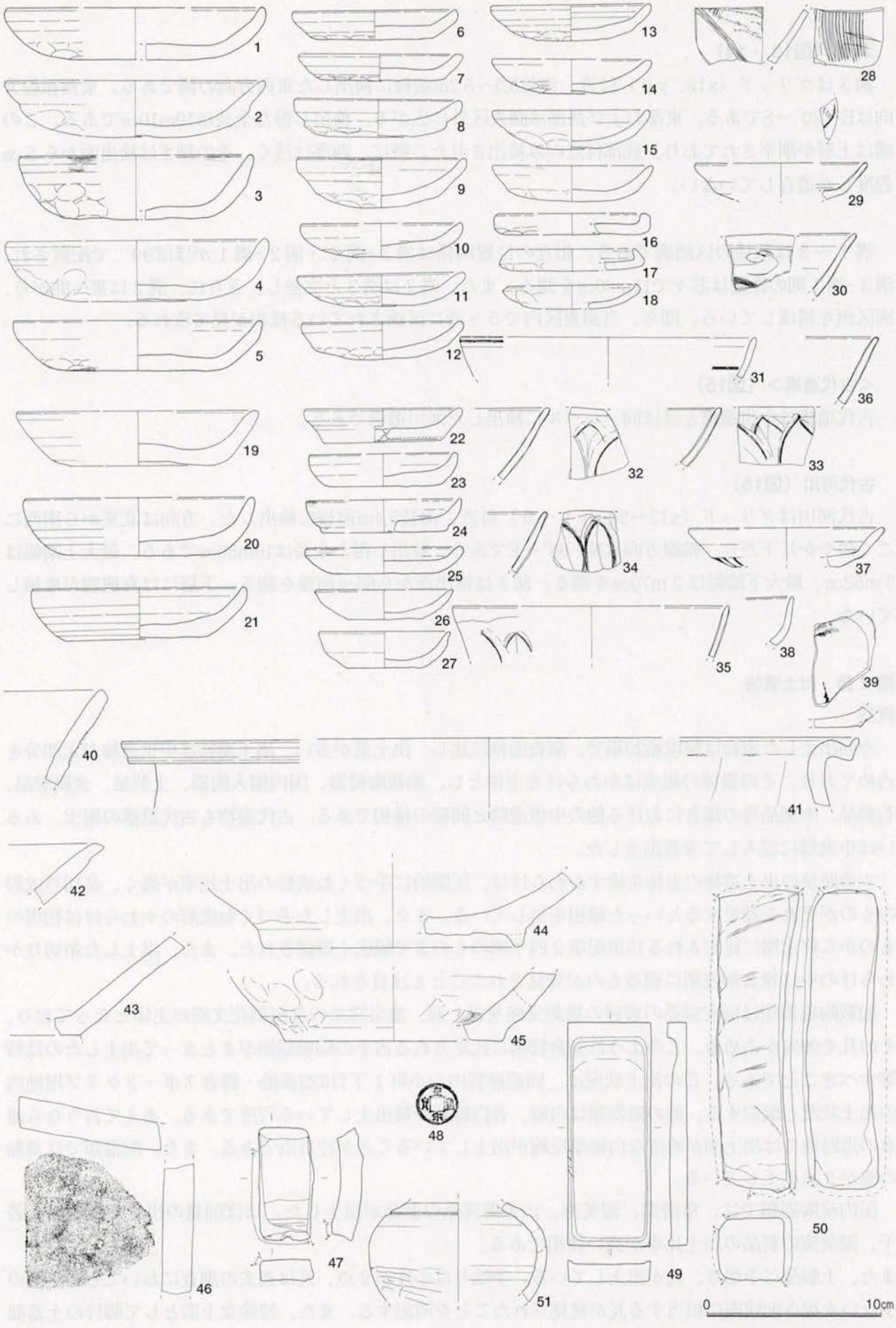

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
48
46
47
49
50
51
0
10cm

図16　表土層出土遺物

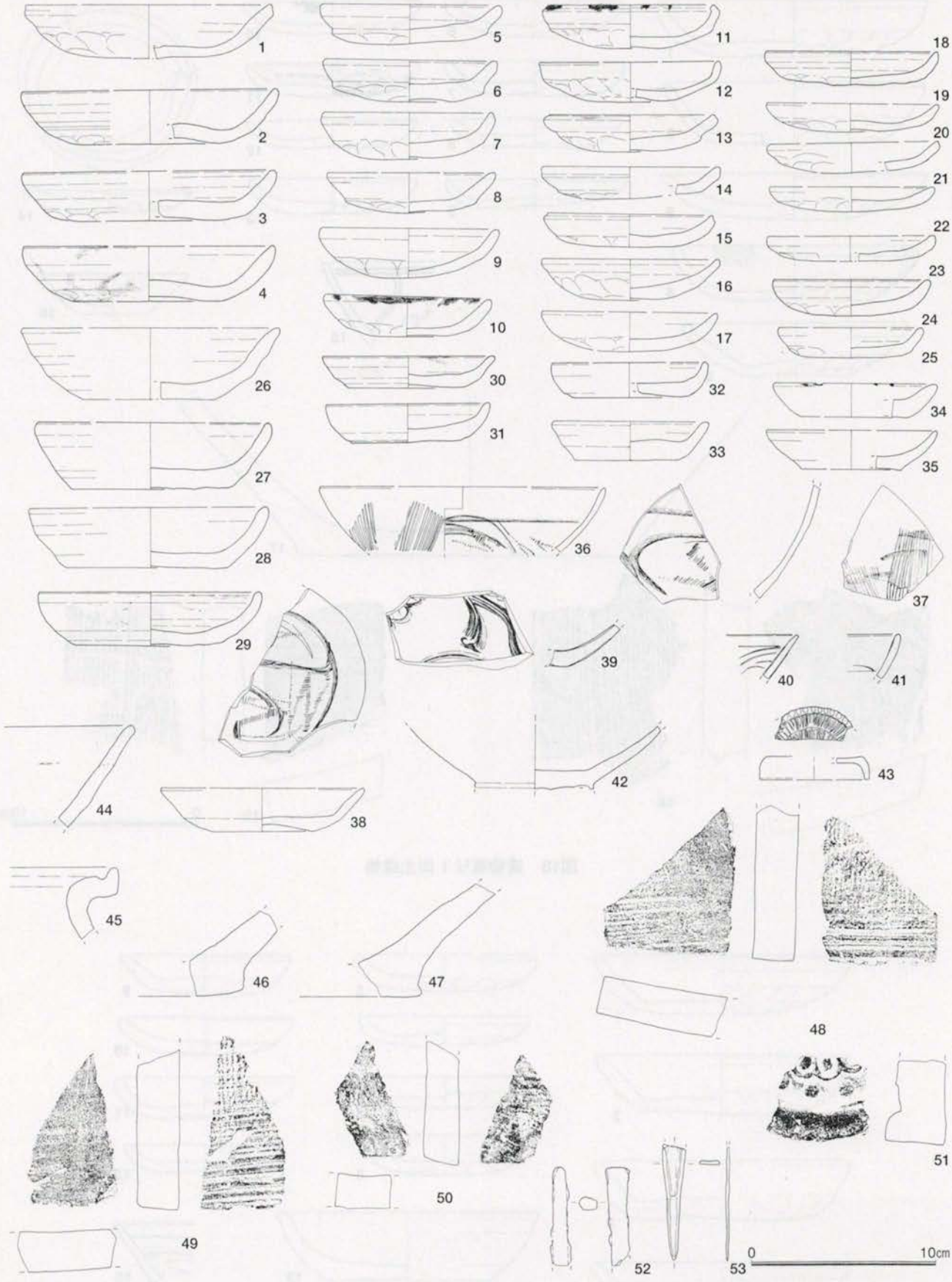

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
0
10cm

図17　1a面出土遺物

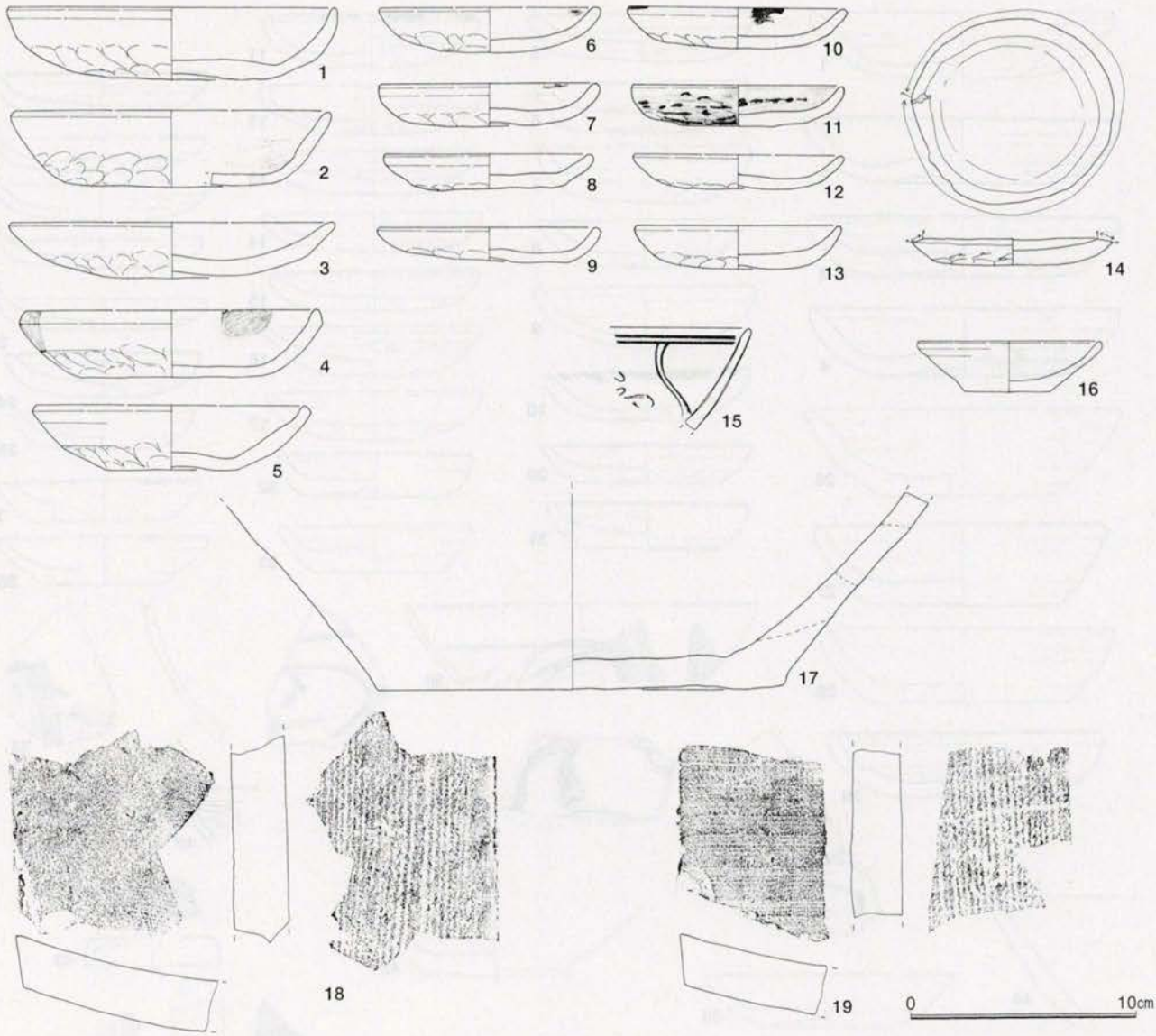


図18　遺物溜り 1 出土遺物

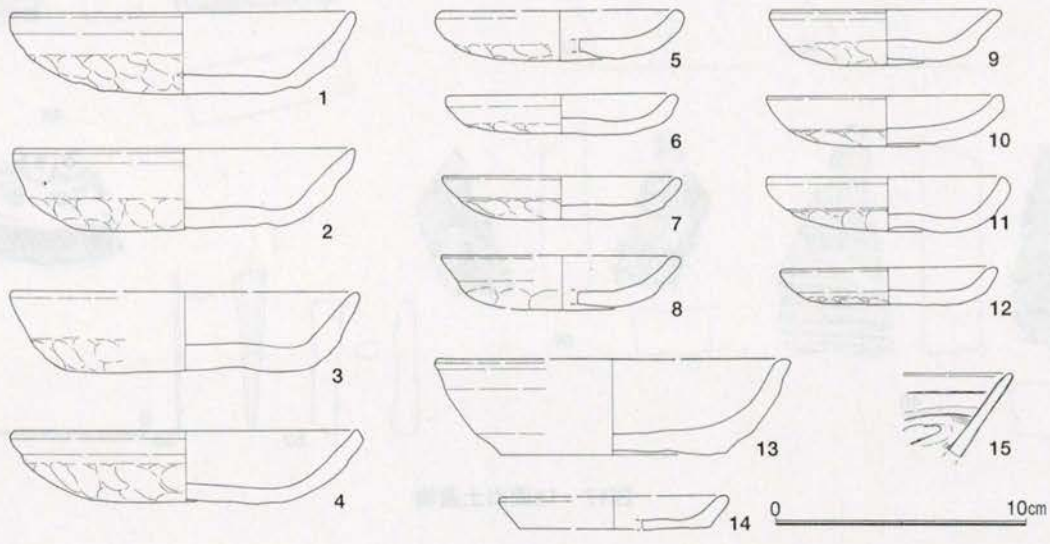


図19　遺物溜り 2 出土遺物

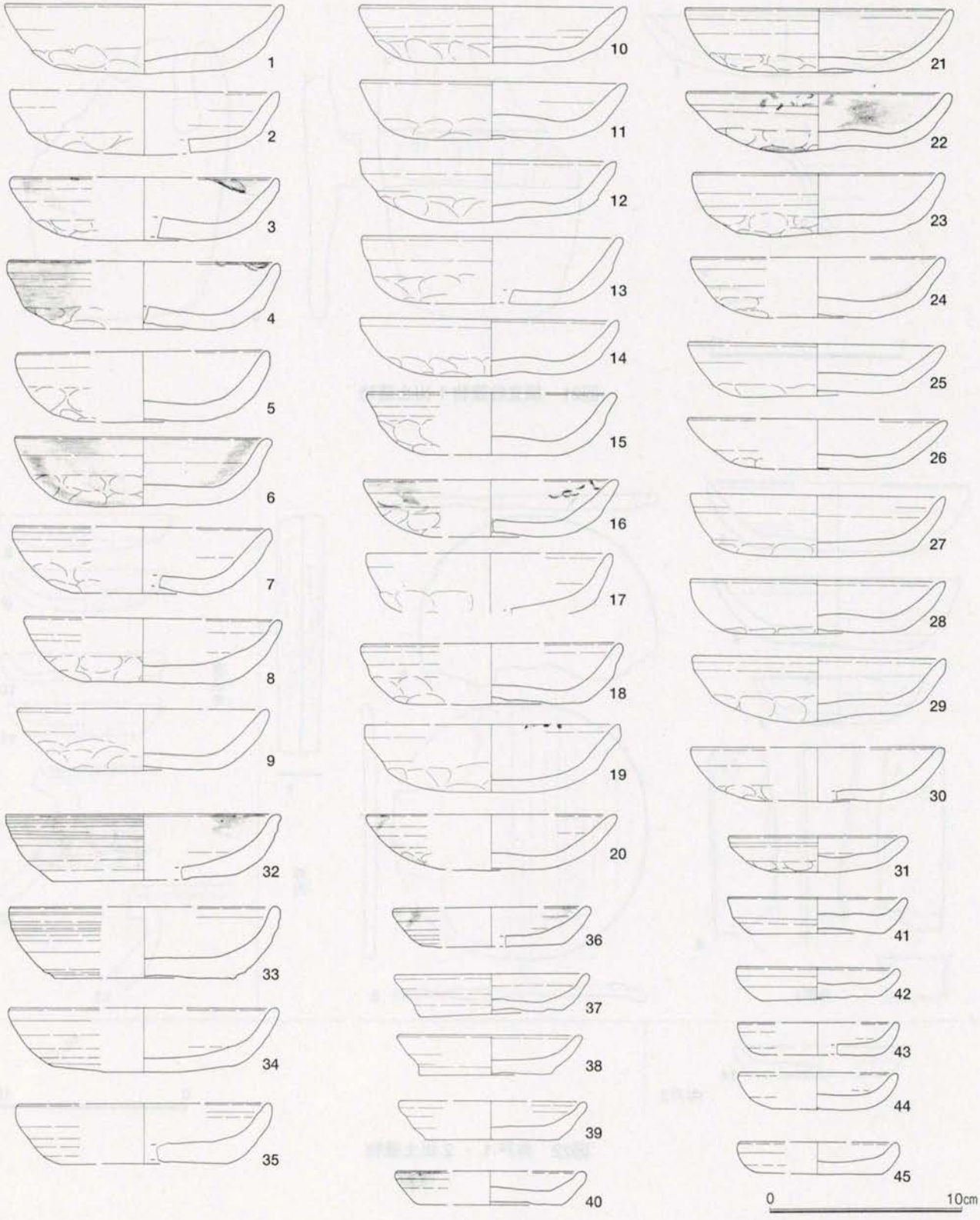


図20　遺物溜り 3 出土遺物

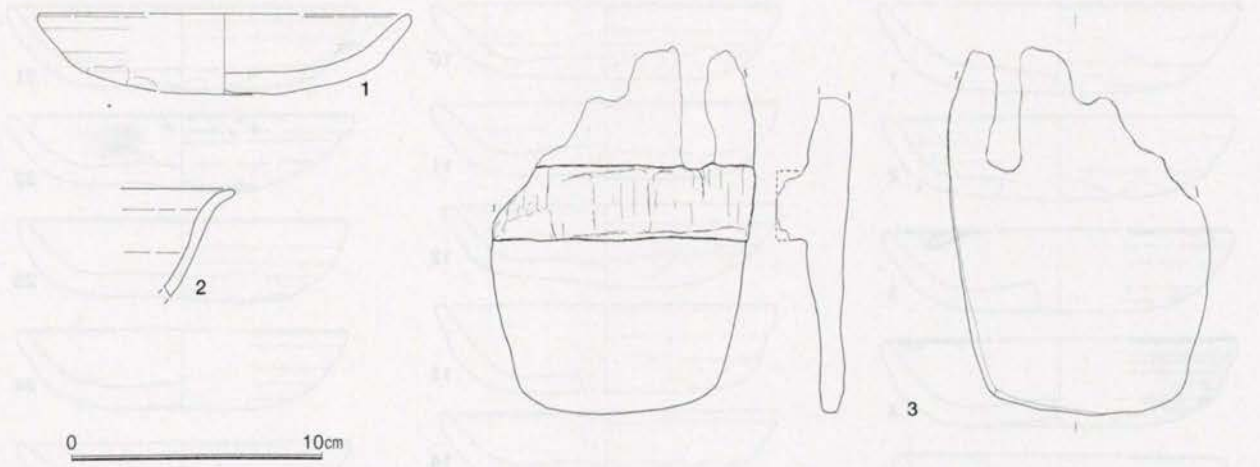


図21　掘立柱建物１出土遺物

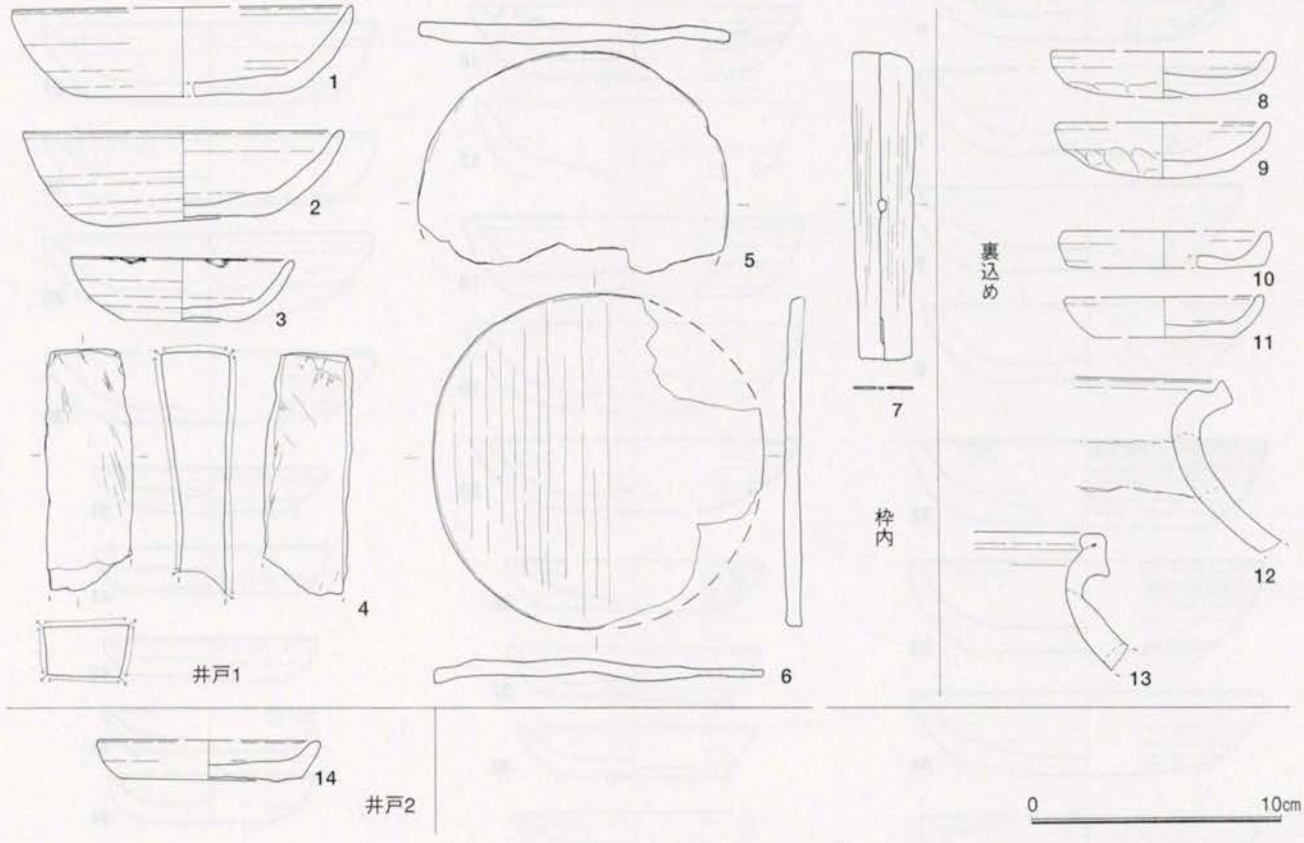


図22　井戸１・２出土遺物

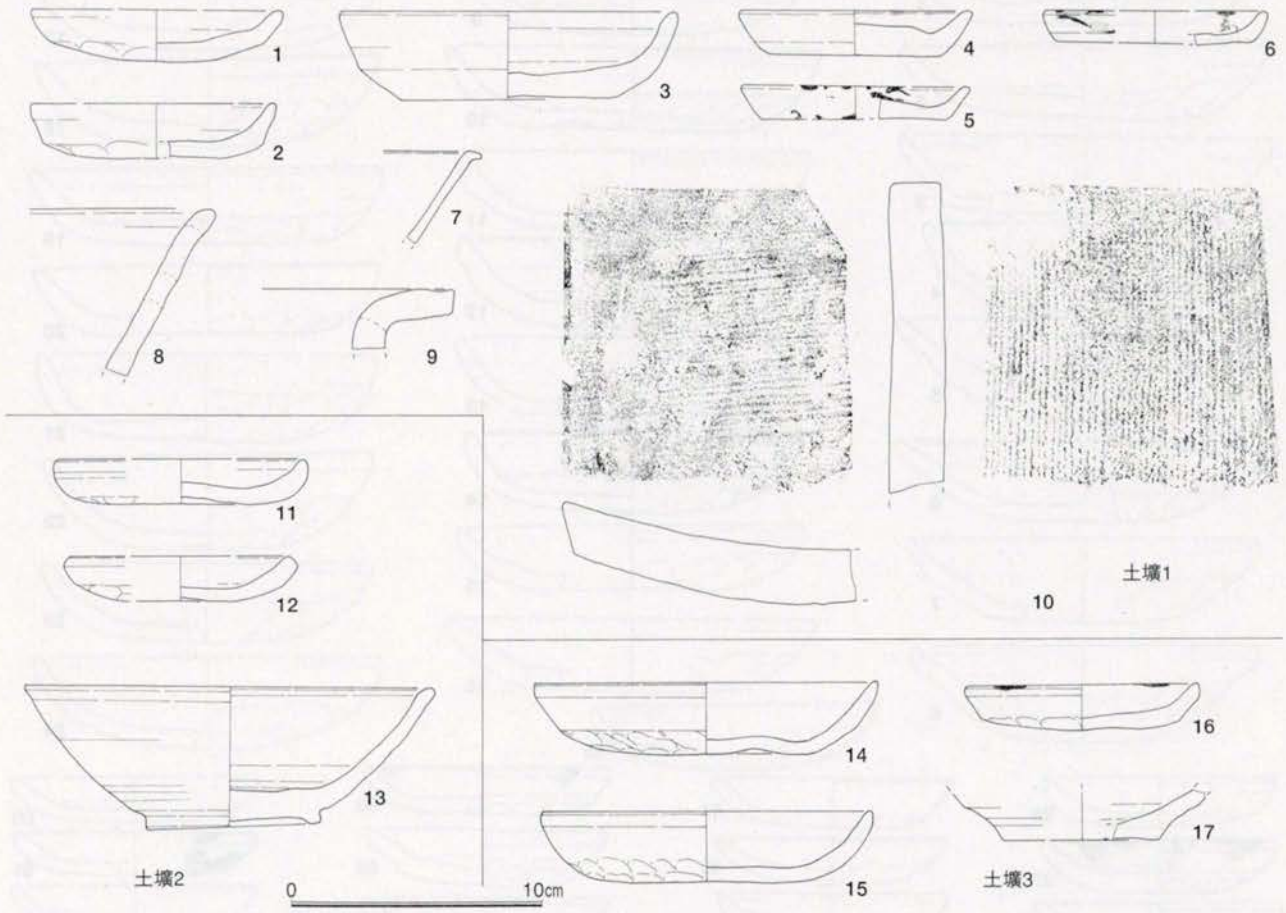


図23　土壙１・２・３出土遺物

金属製品は主に鉄釘が発見されており、他は銅銭が１枚の出土である。

石製品は硯が１面、他は砥石である。砥石は中砥、仕上げ砥が出土しているが、中砥の比率が高い。

木製品は下駄、箸、篦、曲げ物の底板等生活雑器の類である。

古代遺物は小片の土器類、瓦が若干の出土したが瓦の発見は稀有なものである。

以上、出土遺物の概観を述べたが、本調査地点は出土遺物の様相から、古代～13世紀第２四半期の年代に比定される遺跡であることが確認された。本遺跡地からは３面の中世生活面が検出されたが、出土遺物の様相から中世第１面である1a面は13世紀中頃、中世第２面である１面、中世第３面である1b面は同一レベルで検出されており、あまり時期差が感じられないと判断され、12世紀末～13世紀第一四半期に比定されると想定される。本遺跡地の前期である１面、1b面からはかわらけ、舶載陶磁器類が纏まって多数出土しており、また、展開する遺構群の様相から本遺跡地が最も繁栄した時期であることを示している。同時に中世初期の鎌倉草創期の様相を明示しており、良好な資料となり得えたと思われる。

以下、各々遺物についての注目点を述べる。

かわらけ

本遺跡地から出土したかわらけは鎌倉時代前期までに比定される古手のものが主体である。そのかわらけの大半は、12世紀末～13世紀第１四半期の年代に比定できる宗臺編年鎌倉Ⅲ期（以下、　期）の年代観を示すものである。これは本遺跡地の1面、1b面に比定される。また、混入品ではあるが、土坑３から出土した図23-17、及び1面出土の図25-13の糸切りのかわらけは八幡宮国宝館第６面の出土のか

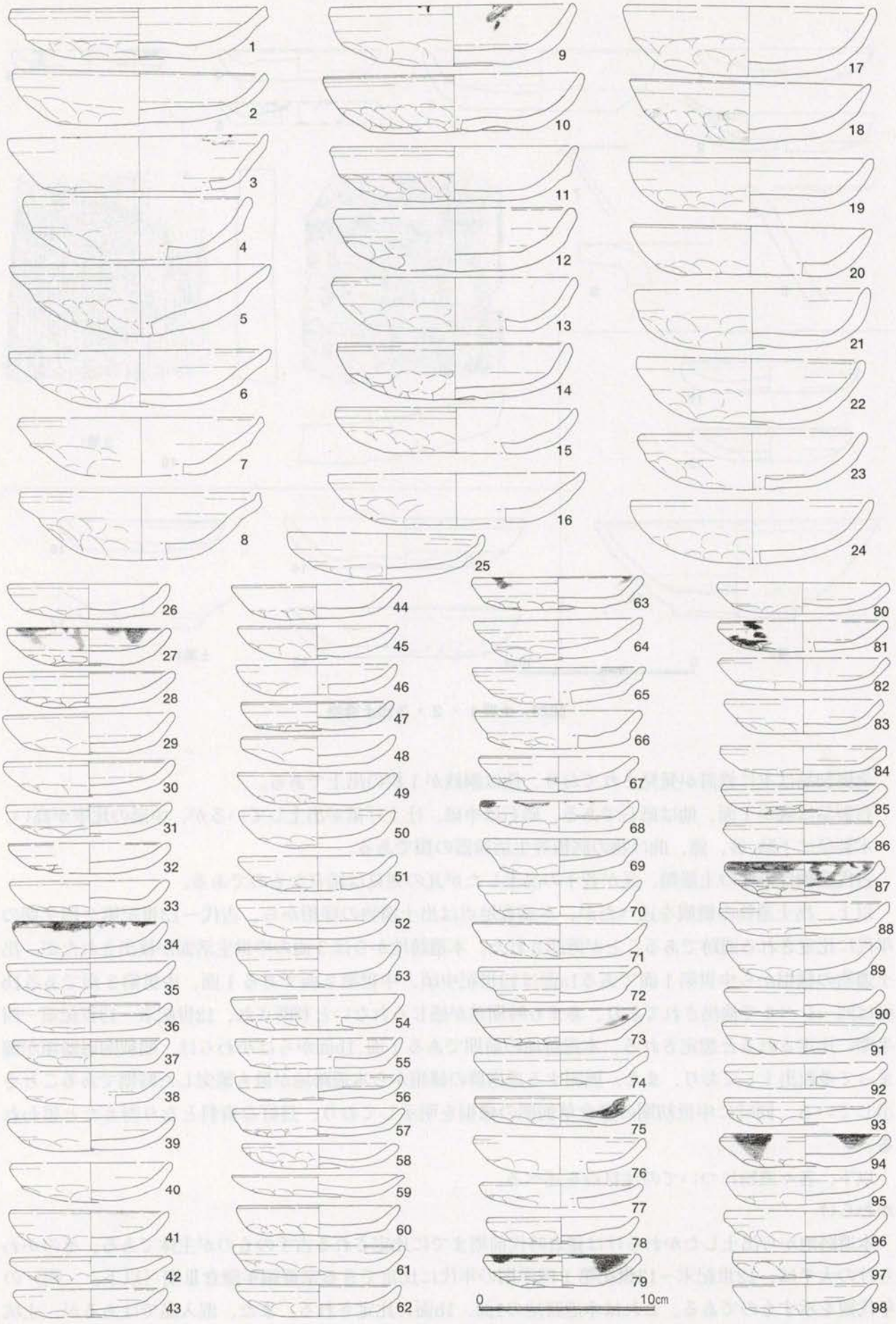

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
0
10cm

図24　1面出土遺物（1）

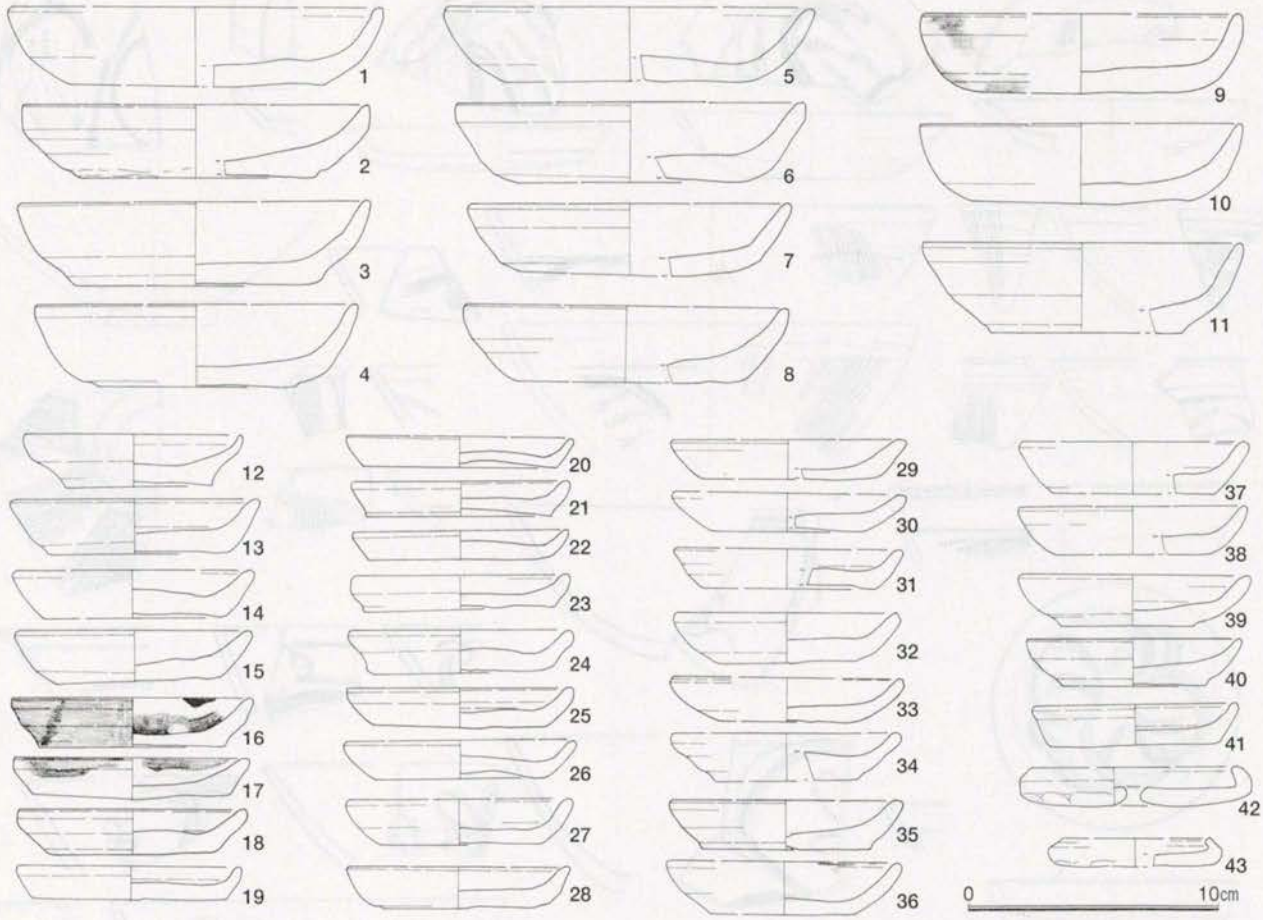


図25　1面出土遺物（2）

わらけに比定され、鎌倉Ⅰ期に相当する永福寺創建以前のもの出非常に希少価値の高いものである。また、本遺跡地のかわわけの出土傾向の特長として、手づくね成形のかわらけの出土率が高いことは前述したが、その出土率はかわらけ全体の73%を占めており圧倒的な量である。その出土比率は本遺跡の後期に当たる第1a面においても継続される。しかし、時代が下るにつれて器型が変化し、手づくねかわらけ、および糸切りかわらけ共に縮小化の傾向を示す。また、手づくねかわらけは腰高となり器高は高くなるが、口径の減少による縮小化は否めない。

輸入陶磁器類

青磁、白磁、青白磁、黄釉が出土しているが、青磁が90%の高い比率を占める。その中でも、同安窯系Ⅰ類（櫛掻劃花文碗・Ⅲ）、及び龍泉窯系劃花文碗（1-4b類）・龍泉窯系劃花文Ⅲ Ⅰ類の出土が際立つ。

本遺跡地における1a面での青磁の出土状況は鎌倉Ⅳ期に比定できる龍泉窯系劃花文碗（1-4a類）、龍泉窯系1-5類が主体であり、内、龍泉窯系劃花文碗（1-4a類）が大勢を占めた。26—38は内面底部に「河濱遺範」の文字のスタンプ文（1-5d類）が認められる。1面以下からは同安窯系Ⅰ類（櫛掻劃花文碗・Ⅲ）、及び龍泉窯系劃花文碗（1-4b類）・龍泉窯系劃花文Ⅲ Ⅰ類が出土し、同安窯系の製品と龍泉窯系の製品が相半ばする。宗臺編年では鎌倉Ⅲ期に比定されるものであある。また、この青磁の出土量の多さは注目すべきもので、鎌倉の過去の調査事例においても稀である。

白磁は若干の出土量であるが、碗Ⅶ・Ⅷ類・合子・口兀Ⅸ類が出土しており、宗臺編年Ⅲ期に比定されるものが多い。

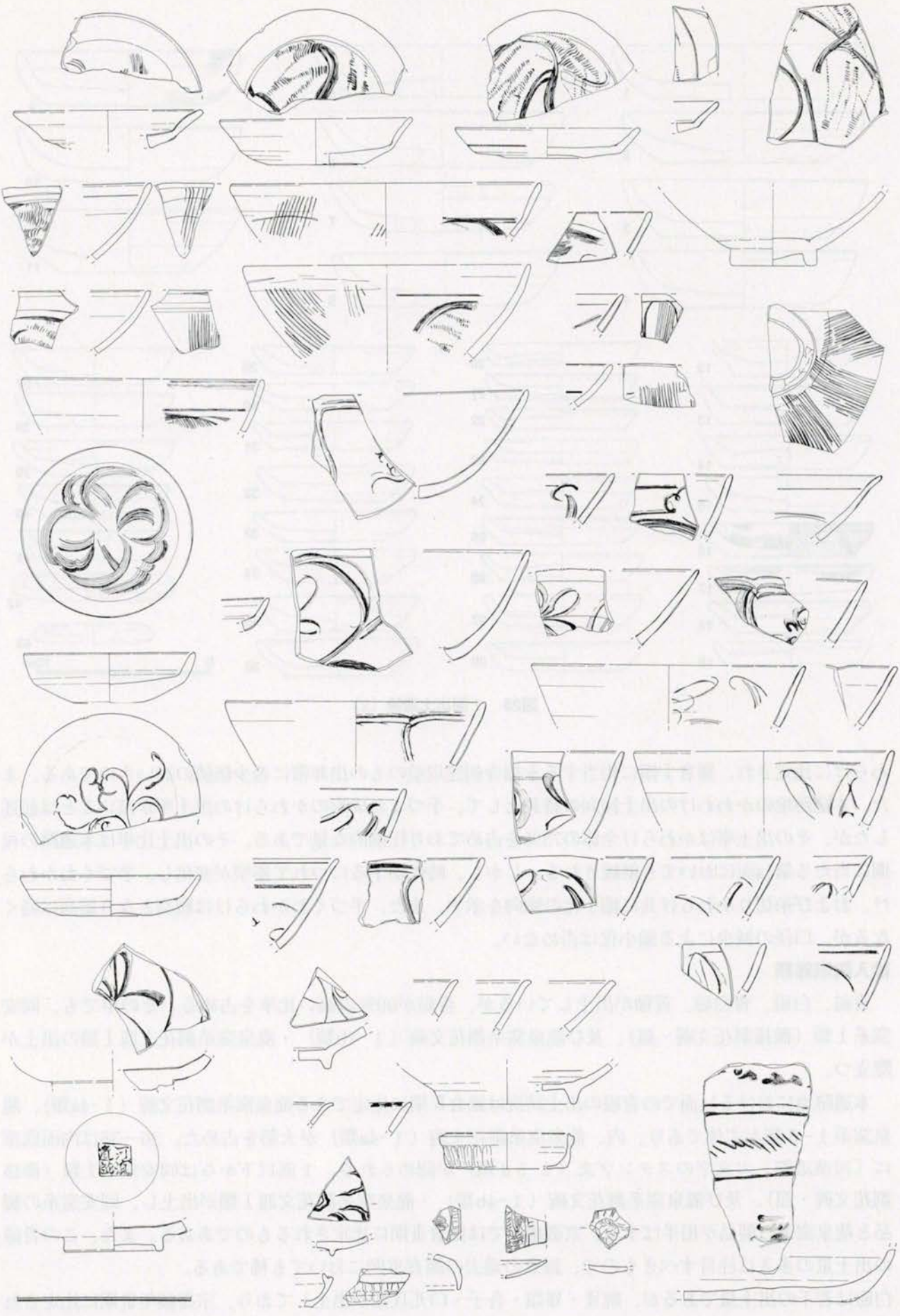


図26　1面出土遺物（3）

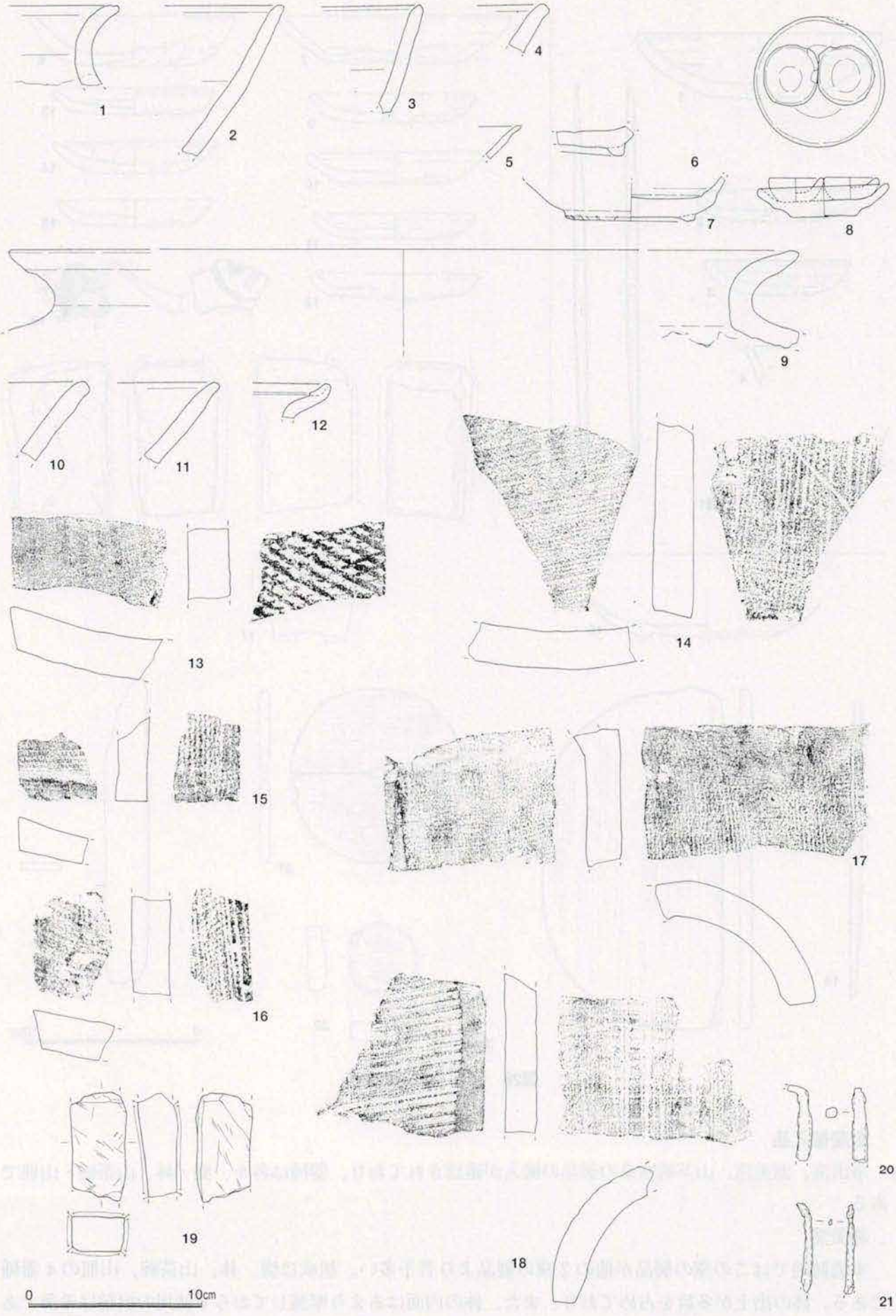


図27　1面出土遺物（4）

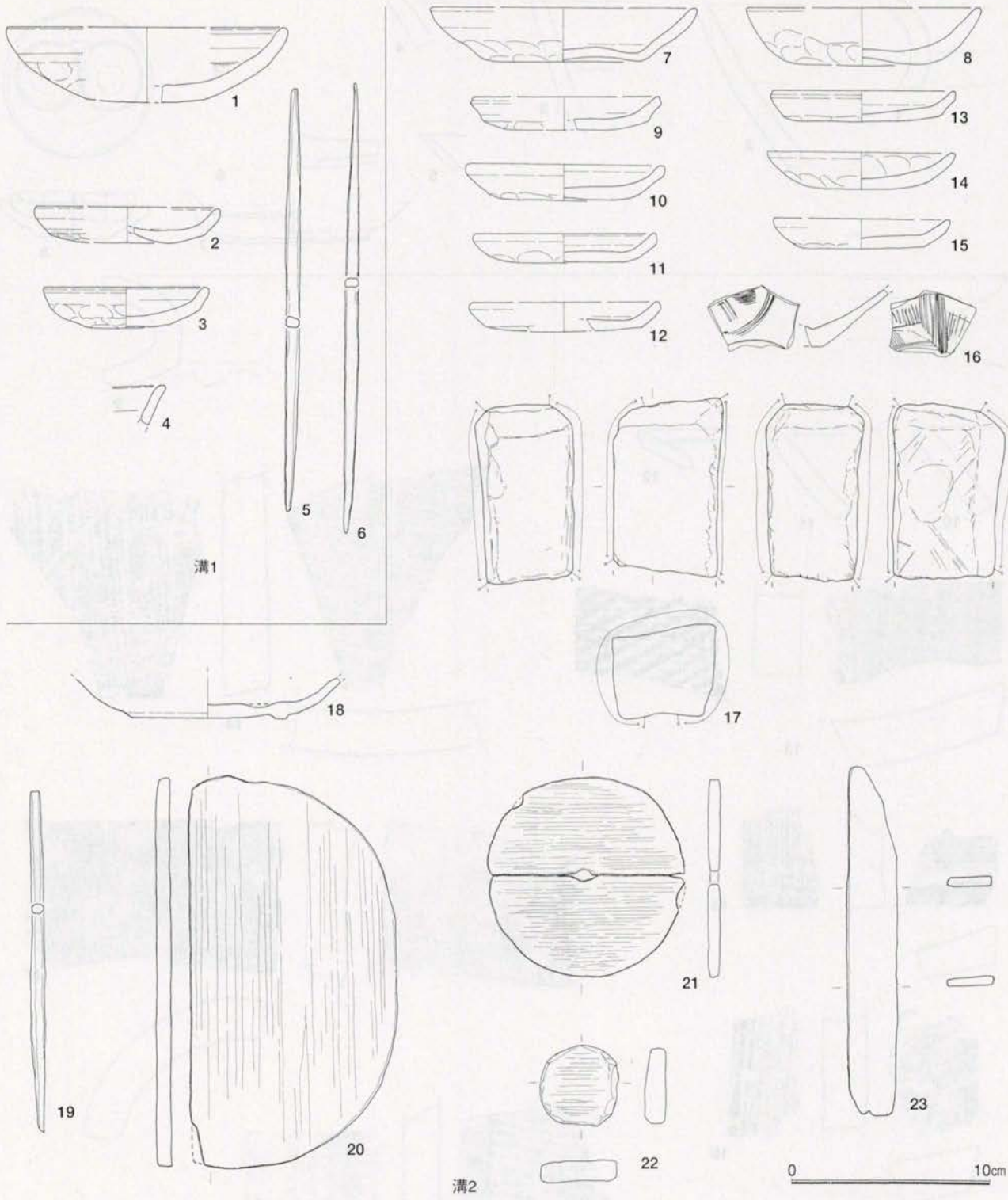


図28　溝１・２出土遺物

国産搬入品

常滑窯、渥美窯、山茶碗窯系の製品の搬入が確認されており、器種は各々、甕・鉢・山茶碗・山皿である。

渥美窯

本遺跡地ではこの窯の製品が他の２窯の製品より若干多い。組成は甕、鉢、山茶碗、山皿の４器種である。鉢の出土が多数を占めており、また、鉢の内面はあまり摩滅しておらず使用の痕跡は希薄である。

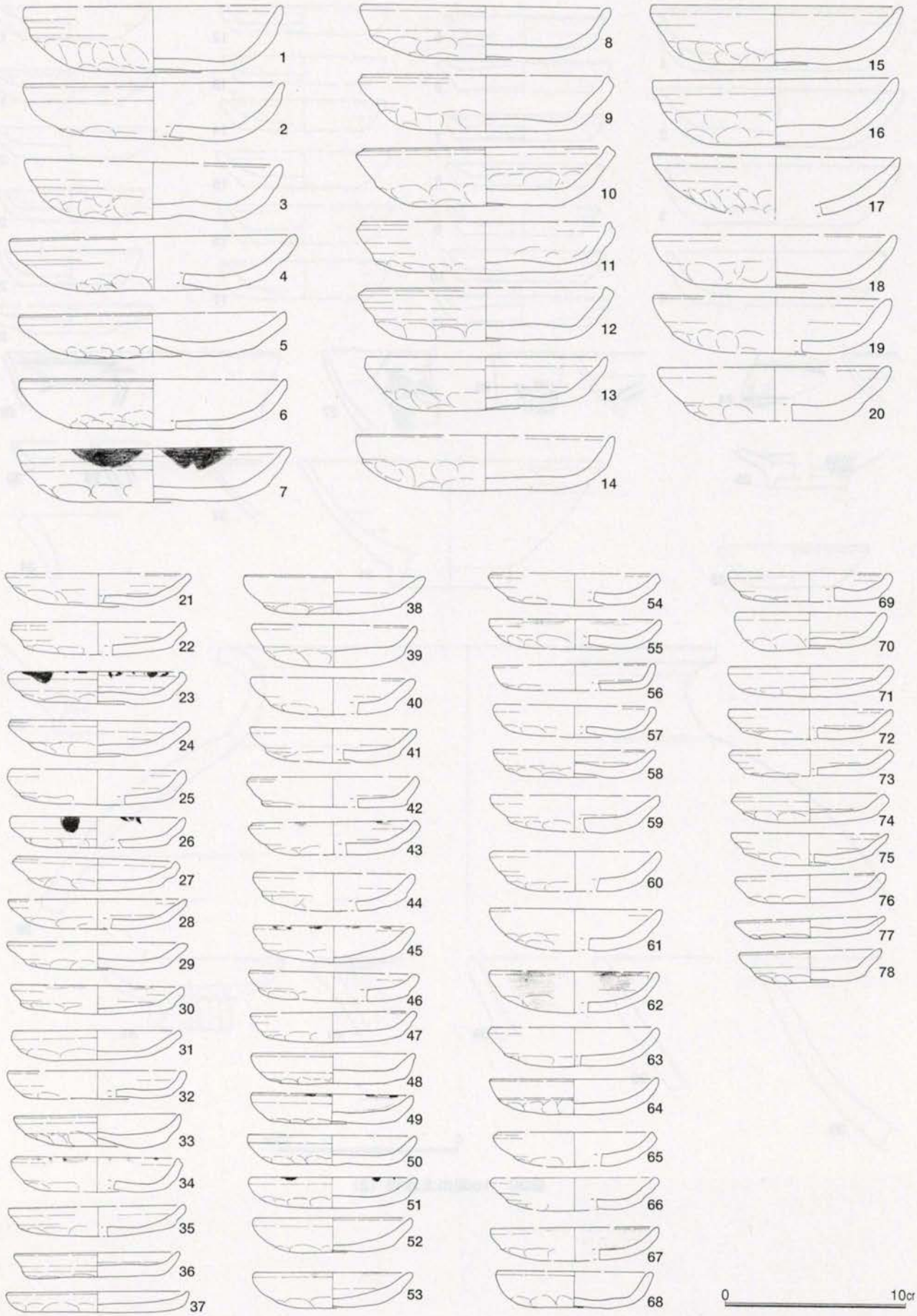


図29　1b面出土遺物（1）

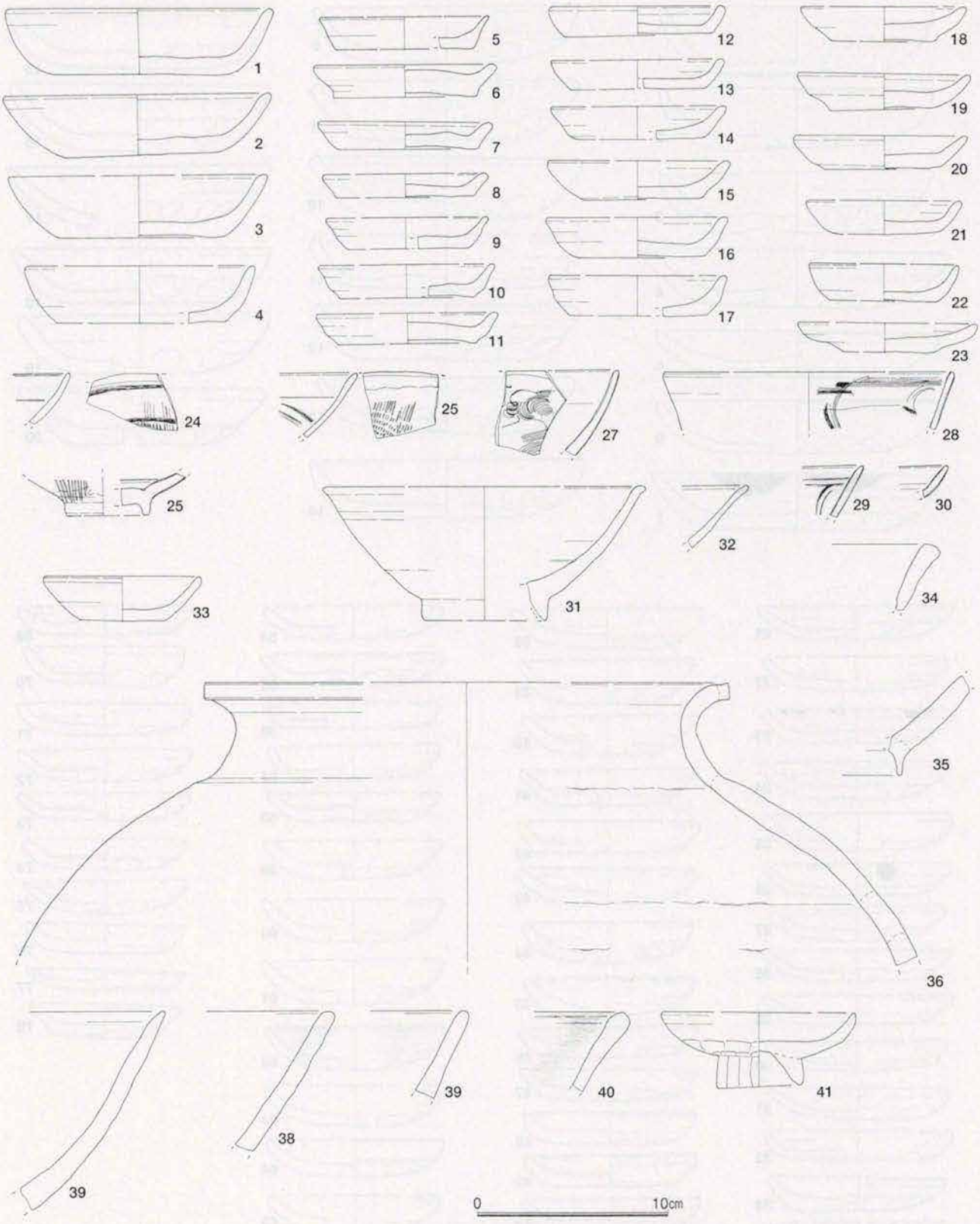


図30　1b面出土遺物（2）

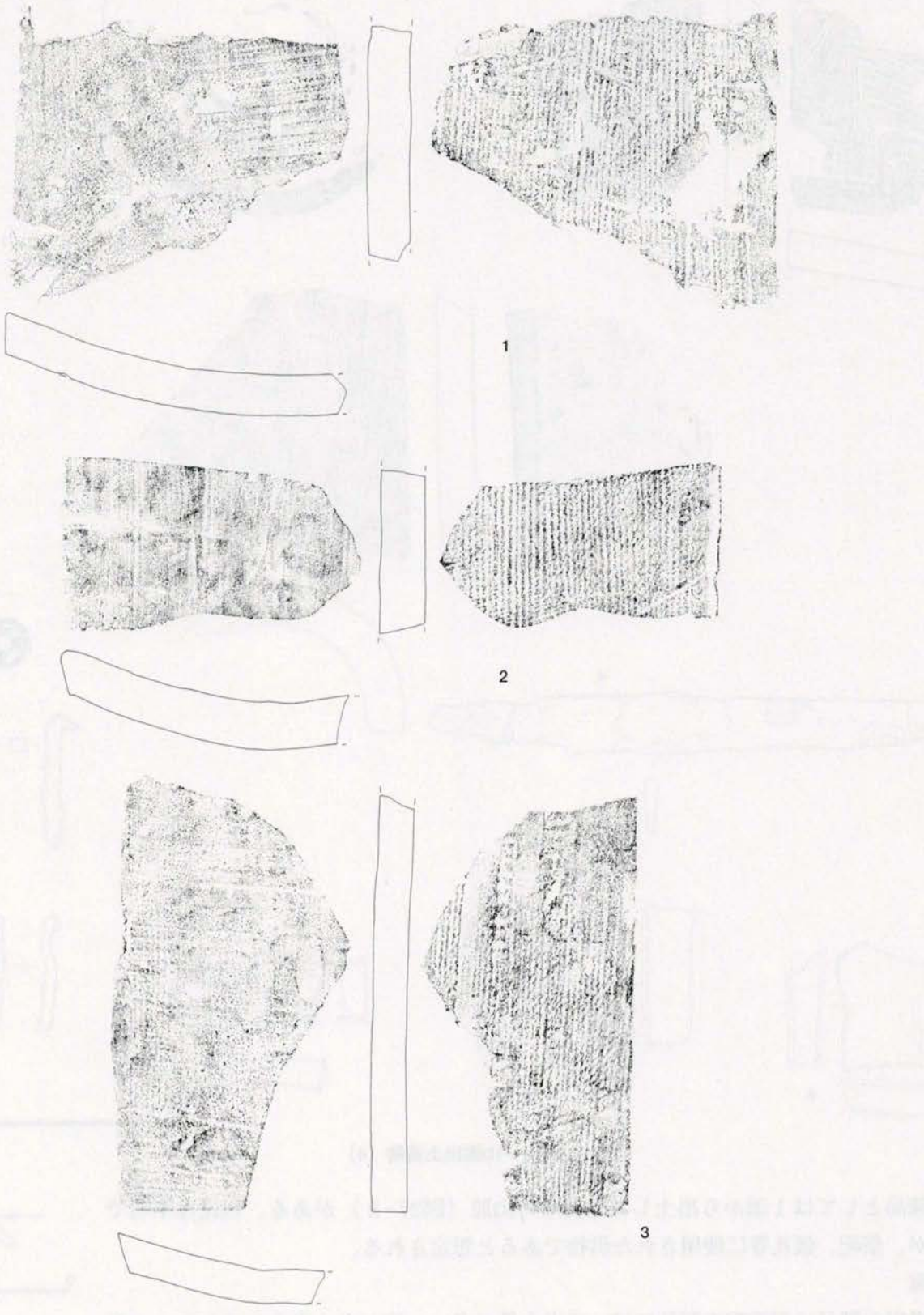


図31　1b面出土遺物（3）

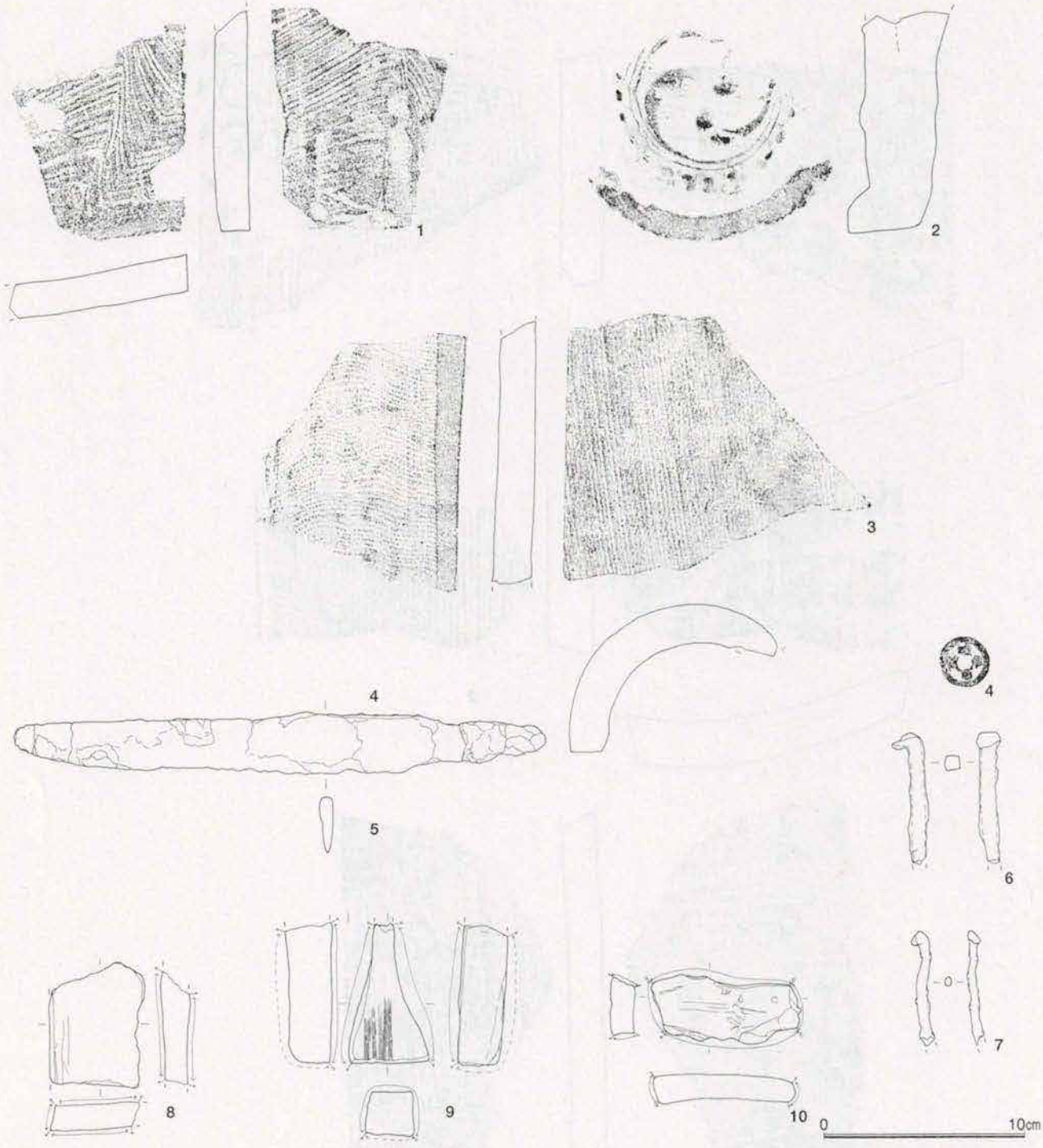


図32　1b面出土遺物（4）

特殊品としては１面から出土した子持ちの山皿（図27-８）がある。用途は不明であるが、祭祀、儀礼等に使用された供物であると想定される。

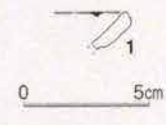


図33
古代河川出土遺物

常滑窯

常滑用の製品は渥美窯の製品に続いて出土量が多い。甕が多く出土しており、４型式から6a形式までの鎌倉前期に比定されるものである。

山茶碗窯系

本遺跡地からの出土量は少ない。製品の組成は鉢、山皿で、鉢がその多数を占める。鉢の内面は非常に摩滅しており、使用した痕跡を顕著に示す。また、遺物溜り１から出土した山皿（図18-16）は宗臺

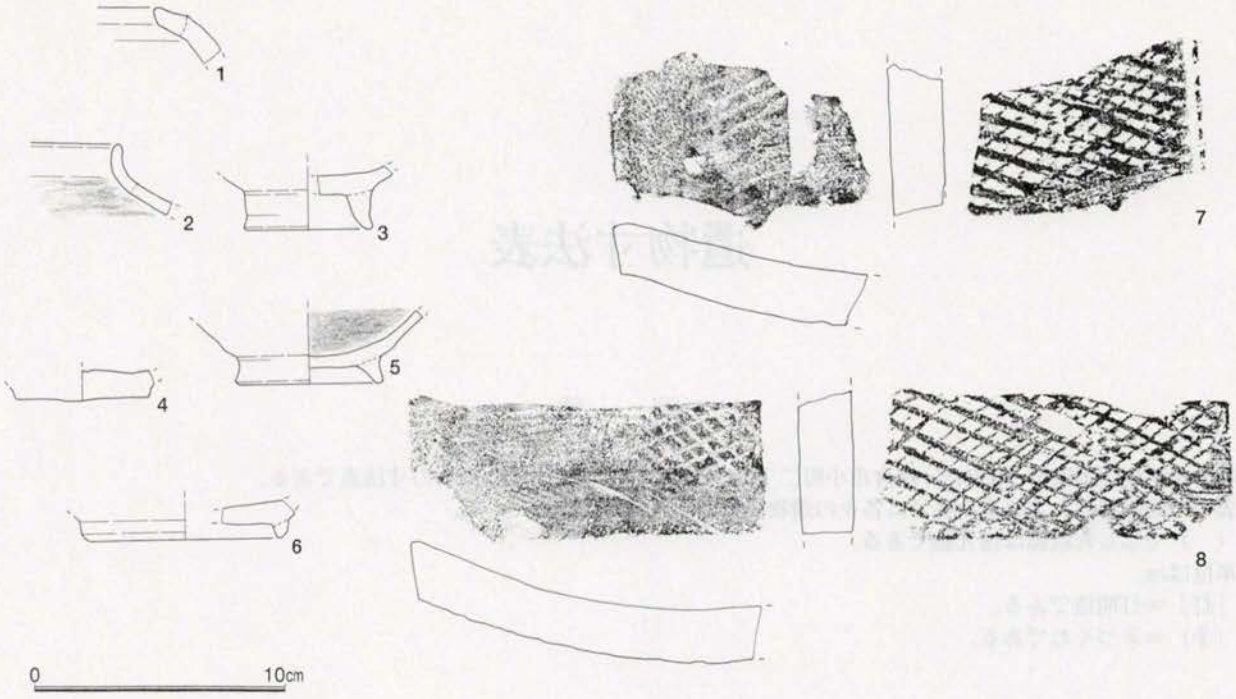


図34　中世層出土の古代遺物

編年鎌倉Ⅲ期に相当し、12世紀後半と想定される東遠江の産である。

土製品

手焙り

瓦質、土器質の２種類の小片のみの出土で産地は不明といわねばならないが、おそらく瓦質のものは搬入品（奈良火鉢）、土器質のものは在地産であると推定される。

特殊品

1b面からかわらけ質の脚付き土器皿（図30-41）が出土している。日常品とは想定出来ず、儀礼時に使用したと祭祀具と推測される。前出の渥美窯の子持ち山皿もまた、儀礼時の供物と考えられ、時期もほぼ同時代であることから、該期の儀礼具の一端が窺えたのではないかと思われる。

瓦

瓦の出土量は少ないが、鎌倉前期、及びそれを遡る古手ものが出土しており注目される。

31-１・２・３は永福寺創建時に比定される鎌倉幕府草創期のものであり、出土例は多くはないため、さらなる鎌倉前期の追加資料になり得ると思われる。

古代遺物

古代河川から土師器の小片、また、中世層から土師器、須恵器、瓦が出土した。土器類は小片であり、特筆すべきものはない。また、年代を特定するには明確さにかけるものである。

古代の瓦は２点（図34-７・８）出土した。本遺跡地の近隣には奈良時代の役所遺構を検出した今小路西遺跡がある。また、近辺にあると推定されている官寺の遺構は現在のところまだ検出されてはいないが、本遺跡地からの距離を考えあわせると、それら官衙の建物に使用されていた可能性も想定され、関連が注目されるところである。

以上、遺物の概観を述べてきたが、かわらけ及び舶載陶磁器の出土量及び出土傾向は武家屋敷を多く検出した若宮大路周辺遺跡内においてもかなり、ランクの高い屋敷跡の様相を窺わせるものであったと思われる。

<参考文献>

「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究XIII』宗臺秀明、日本中世土器研究会編、1998年12月

遺物寸法表

例　言

・若宮大路周辺遺跡群（No.242）鎌倉市小町二丁目283番の一部地点出土の遺物の寸法表である。
・表中の図版番号および遺物番号は各々の遺物実測図版番号と一致している。
・（　）で示した数値は復元値である。
・単位はcm。
・「灯」＝灯明皿である。
・（手）＝手づくねである。

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調(胎土)	色調(釉/器表)	備考
16	1	表土層	土器	(手)かわらけ	(15.2)	—	(3.0)	淡燈色系		
16	2		土器	(手)かわらけ	(15.1)	—	(3.3)	淡燈色系		
16	3		土器	(手)かわらけ	(13.6)	—	(2.6)	灰白色系		灯
16	4		土器	(手)かわらけ	(15.3)	—	(3.5)	淡燈色系		
16	5		土器	(手)かわらけ	(14.6)	—	(2.9)	燈色系		灯
16	6		土器	(手)かわらけ	9.6	—	1.6	肌色系		
16	7		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	(1.6)	燈色系		
16	8		土器	(手)かわらけ	9.6	—	2.1	灰白色系		
16	9		土器	(手)かわらけ	9.9	—	2.7	淡燈色系		灯
16	10		土器	(手)かわらけ	9.4	—	1.9	肌色系		
16	11		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.9	灰白色系		
16	12		土器	(手)かわらけ	9.4	—	2.2	肌色系		
16	13		土器	(手)かわらけ	9.2	—	2.1	淡燈色系		
16	14		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	(2.0)	灰白色系		
16	15		土器	(手)かわらけ	9.1	—	2.2	灰白色系		
16	16		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	(1.2)	燈色系		内折れ
16	17		土器	(手)かわらけ	(7.6)	—	(1.2)	淡肌色系		内折れ
16	18		土器	(手)かわらけ	(8.0)	—	(1.4)	肌色系		内折れ
16	19		土器	かわらけ	14.1	8.5	3.1	燈色系		灯
16	20		土器	かわらけ	(13.5)	8.0	3.3	淡燈色系		
16	21		土器	かわらけ	12.5	8.2	2.9	淡燈色系		
16	22		土器	かわらけ	9.2	6.7	1.9	肌色系		穿孔
16	23		土器	かわらけ	(8.6)	(6.4)	1.9	灰白色系		
16	24		土器	かわらけ	(9.1)	(7.1)	2.0	灰白色系		灯
16	25		土器	かわらけ	(9.2)	(6.1)	1.5	燈色系		灯
16	26		土器	かわらけ	8.0	4.2	1.7	肌色系		
16	27		土器	かわらけ	(7.6)	(4.3)	2.1	肌色系		
16	28		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰白色系	褐緑色	同安窯系
16	29		青磁	櫛掻文Ⅲ	—	—	—	灰白色系	褐緑色	同安窯系
16	30		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰白色系	褐緑色	龍泉窯系貫入顕著
16	31		青磁	劃花文碗	(17.0)	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
16	32		青磁	蓮弁文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
16	33		青磁	蓮弁文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
16	34		青磁	蓮弁文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
16	35		青磁	蓮弁文碗	(16.0)	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
16	36		青磁	碗	—	—	—	灰白色	褐緑色	龍泉窯系貫入顕著
16	37		青磁	Ⅲ	(11.2)	—	—	灰白色	灰色	龍泉窯系
16	38		白磁	小碗	—	—	—	白色	白色	
16	39		黄釉	盤	—	—	—	白褐色	黄褐色	貫入顕著
16	40		常滑	鉢	—	—	—	淡茶褐色	淡燈色	
16	41		常滑	甕	(42.6)	—	—	淡茶褐色	赤茶色	
16	42		渥美	鉢	—	—	—	暗灰色	黒灰色	
16	43		渥美	鉢	—	—	—	暗灰色	暗灰色	内面磨滅顕著
16	44		渥美	鉢	—	(15.0)	—	灰色	灰色	
16	45		瓦質	手焙り	—	12.5	—	灰色	肌色	底部内面煤付着
16	46		瓦	平瓦	—	—	1.7	暗灰色	黒灰色	
16	47		研磨製品	すり常滑	—	—	—	暗灰色	黒茶色	甕頸部
16	48		銅製品	皇宋通宝						
16	49		石製品	硯	13.0	4.7	1.0			
16	50		石製品	砥石	—	3.7	3.6			中砥
16	51		土師器	小壷	—	—	—	燈色	燈色	
17	1	1a面	土器	(手)かわらけ	(13.5)	—	3.0	肌色系		灯
17	2		土器	(手)かわらけ	(14.1)	—	2.9	燈色系		
17	3		土器	(手)かわらけ	(14.0)	—	2.6	淡燈色系		
17	4		土器	(手)かわらけ	(13.9)	—	2.9	肌色系		灯
17	5		土器	(手)かわらけ	10.0	—	2.1	肌色系		
17	6		土器	(手)かわらけ	9.6	—	2.2	肌色系		
17	7		土器	(手)かわらけ	9.6	—	2.6	灰白色系		
17	8		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	2.2	燈色系		
17	9		土器	(手)かわらけ	9.9	—	2.7	灰白色系		
17	10		土器	(手)かわらけ	9.2	—	2.3	灰白色系		灯
17	11		土器	(手)かわらけ	9.7	—	2.4	燈色系		灯
17	12		土器	(手)かわらけ	(9.9)	—	2.1	燈色系		灯
17	13		土器	(手)かわらけ	9.5	—	2.1	淡燈色系		灯
17	14		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.8	肌色系		
17	15		土器	(手)かわらけ	9.5	—	1.8	燈色系		
17	16		土器	(手)かわらけ	9.7	—	2.3	燈色系		
17	17		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	2.3	肌色系		
17	18		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	2.0	灰白色系		灯
17	19		土器	(手)かわらけ	9.5	—	1.7	灰白色系		

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調(胎土)	色調(釉/器表)	備考
17	20		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	1.6	淡燈色系		
17	21		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.7	淡灯色系		
17	22		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.4	肌色系		
17	23		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	1.4	肌色系		
17	24		土器	(手)かわらけ	8.6	—	2.0	肌色系		
17	25		土器	(手)かわらけ	(8.0)	—	1.7	肌色系		
17	26		土器	かわらけ	(14.2)	(7.2)	4.0	白褐色系		
17	27		土器	かわらけ	(13.0)	8.7	3.6	燈色系		
17	28		土器	かわらけ	(13.2)	8.7	3.2	肌色系		
17	29		土器	かわらけ	12.3	8.0	3.0	肌色系		灯
17	30		土器	かわらけ	9.4	6.4	1.8	白褐色系		灯
17	31		土器	かわらけ	9.0	6.0	2.2	白褐色系		
17	32		土器	かわらけ	(8.7)	(6.2)	2.0	白褐色系		
17	33		土器	かわらけ	8.6	5.7	2.3	燈色系		
17	34		土器	かわらけ	(9.1)	(5.8)	1.9	燈色系		灯
17	35		土器	かわらけ	(9.4)	(5.4)	2.1	肌色系		
17	36		青磁	櫛掻劃花文碗	(15.6)	—	—	灰色	灰緑色	同安窯系
17	37		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰色	灰緑色	同安窯系
17	38		青磁	櫛掻劃花文皿	(10.2)	5.5	2.4	灰白色	灰色	同安窯系
17	39		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	褐味灰緑色	龍泉窯系
17	40		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	褐味灰緑色	龍泉窯系
17	41		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	褐味灰緑色	龍泉窯系
17	42		白磁	碗	—	—	—	白色	白灰色	
17	43		青白磁	合子	(5.0)	—	1.3	白色	水青色	
17	44		常滑	鉢	—	—	—	灰褐色	茶色	内面降灰多
17	45		常滑	甕	—	—	—	灰色	茶色	内外面降灰
17	46		渥美	甕	—	—	—	灰暗灰色	灰暗灰色	内外面降灰
17	47		渥美	甕	—	—	—	灰暗灰色	灰暗灰色	内外面降灰
17	48		瓦	平瓦	—	—	2.2	灰色	灰色	縄目叩文
17	49		瓦	平瓦	—	—	2.4	灰色	灰色	縄目叩文
17	50		瓦	平瓦	—	—	1.8	燈色	紫赤色	
17	51		瓦	軒丸瓦	—	—	2.5~3.2	灰色	褐灰色	
17	52		鉄製品	釘	—	—	—			
17	53		骨製品	笄	—	—	0.2			
18	1	遺物溜り1	土器	(手)かわらけ	14.6	—	3.1	肌色系		灯
18	2		土器	(手)かわらけ	(14.2)	—	3.4	肌色系		
18	3		土器	(手)かわらけ	(14.4)	—	2.5	肌色系		
18	4		土器	(手)かわらけ	(13.3)	—	2.9	肌色系		灯
18	5		土器	(手)かわらけ	(12.3)	—	2.9	肌色系		
18	6		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.9	白褐色		灯
18	7		土器	(手)かわらけ	9.7	—	1.9	肌色系		灯
18	8		土器	(手)かわらけ	9.4	—	1.6	肌色系		
18	9		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.5	燈色系		
18	10		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.7	白褐色		灯
18	11		土器	(手)かわらけ	9.4	—	1.8	肌色系		灯
18	12		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.5	肌色系		
18	13		土器	(手)かわらけ	9.1	—	2.0	燈色		
18	14		土器	(手)かわらけ	—	—	—	肌色系		口縁部研磨痕あり
18	15		青磁	劃花文碗	—	—	—	白色	淡青緑色	龍泉窯系貫入顕著
18	16		東遠江	山皿	8.3	3.9	2.3	灰色	灰色	
18	17		常滑	甕	—	18.0	—	灰色	茶色	内外面降灰
18	18		瓦	平瓦	—	—	2.4	黒灰色	黒灰色	縄目叩文
18	19		瓦	平瓦	—	—	2.2	黒灰色	黒灰色	縄目叩文
19	1	遺物溜り2	土器	(手)かわらけ	13.8	—	3.2	肌色系		
19	2		土器	(手)かわらけ	(13.7)	—	3.3	肌色系		
19	3		土器	(手)かわらけ	(14.0)	—	3.2	淡燈色系		
19	4		土器	(手)かわらけ	14.0	—	2.8	肌色系		
19	5		土器	(手)かわらけ	(10.0)	—	2.0	淡燈色系		
19	6		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.3	白褐色系		
19	7		土器	(手)かわらけ	9.6	—	1.7	淡燈色系		
19	8		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	2.2	肌色系		
19	9		土器	(手)かわらけ	9.3	—	2.2	淡燈色系		
19	10		土器	(手)かわらけ	9.7	—	2.2	淡燈色系		
19	11		土器	(手)かわらけ	9.7	—	2.2	白褐色系		
19	12		土器	(手)かわらけ	8.7	—	1.4	淡燈色系		
19	13		土器	かわらけ	(14.2)	9.0	3.9	白褐色系		
19	14		土器	かわらけ	(9.2)	(7.6)	1.3	淡燈色系		
19	15		青磁	劃花文碗	—	—	—	白灰色	緑灰色	龍泉窯系
20	1	遺物溜り3	土器	(手)かわらけ	14.6		3.6	燈色系		
20	2		土器	(手)かわらけ	(14.0)		3.4	燈色系		灯

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調(胎土)	色調(釉/器表)	備考
20	3		土器	(手)かわらけ	(14.0)	—	3.6	白褐色系		灯
20	4		土器	(手)かわらけ	(14.2)	—	3.5	白褐色系		灯
20	5		土器	(手)かわらけ	(13.2)	—	3.7	燈色系		
20	6		土器	(手)かわらけ	(13.4)	—	3.6	白褐色系		灯
20	7		土器	(手)かわらけ	(13.5)	—	3.5	肌色系		
20	8		土器	(手)かわらけ	(13.2)	—	3.3	肌色系		
20	9		土器	(手)かわらけ	(13.1)	—	3.2	肌色系		
20	10		土器	(手)かわらけ	14.0	—	3.0	淡燈色系		
20	11		土器	(手)かわらけ	14.0	—	3.0	淡燈色系		
20	12		土器	(手)かわらけ	13.4	—	3.2	淡燈色系		
20	13		土器	(手)かわらけ	13.6	—	3.5	白褐色系		灯
20	14		土器	(手)かわらけ	13.5	—	3.0	肌色系		
20	15		土器	(手)かわらけ	13.0	—	3.2	肌色系		
20	16		土器	(手)かわらけ	(13.2)	—	3.0	肌色系		灯
20	17		土器	(手)かわらけ	(12.8)	—	3.7	肌色系		
20	18		土器	(手)かわらけ	(13.6)	—	3.1	肌色系		
20	19		土器	(手)かわらけ	(13.4)	—	3.6	白褐色系		
20	20		土器	(手)かわらけ	(13.1)	—	2.9	白褐色系		
20	21		土器	(手)かわらけ	14.0	—	3.4	白褐色系		
20	22		土器	(手)かわらけ	14.0	—	3.0	白褐色系		灯
20	23		土器	(手)かわらけ	13.2	—	3.1	淡燈色系		
20	24		土器	(手)かわらけ	(13.2)	—	3.2	淡燈色系		灯
20	25		土器	(手)かわらけ	13.5	—	2.7	肌色系		
20	26		土器	(手)かわらけ	(13.6)	—	2.6	淡燈色系		
20	27		土器	(手)かわらけ	13.4	—	3.3	肌色系		
20	28		土器	(手)かわらけ	13.4	—	2.8	肌色系		
20	29		土器	(手)かわらけ	13.2	—	3.3	燈色系		
20	30		土器	(手)かわらけ	(13.2)	—	2.9	燈色系		
20	31		土器	(手)かわらけ	9.4	—	1.8	燈色系		灯
20	32		土器	かわらけ	14.3	9.4	3.6	白褐色系		
20	33		土器	かわらけ	(14.2)	(9.4)	3.6	肌色系		
20	34		土器	かわらけ	(14.1)	(9.7)	3.3	肌色系		灯
20	35		土器	かわらけ	(13.4)	(9.0)	3.1	肌色系		
20	36		土器	かわらけ	(10.3)	(7.4)	3.1	淡燈色系		灯
20	37		土器	かわらけ	10.1	7.4	3.1	白褐色系		
20	38		土器	かわらけ	9.6	7.4	3.1	白褐色系		
20	39		土器	かわらけ	(9.8)	(6.8)	3.0	白褐色系		
20	40		土器	かわらけ	(10.0)	7.6	1.8	白褐色系		灯
20	41		土器	かわらけ	9.5	7.0	1.9	淡燈色系		
20	42		土器	かわらけ	8.6	5.9	1.7	燈色系		
20	43		土器	かわらけ	(8.5)	(6.2)	1.7	白褐色系		
20	44		土器	かわらけ	(8.4)	(4.8)	1.9	白褐色系		
20	45		土器	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.7	白褐色系		
21	1	掘立柱建物1	土器	(手)かわらけ	(15.0)	—	3.3	白褐色系		灯
21	2		白磁	碗	—	—	—	白色	緑白色	
21	3		木製品	下駄	—	—	—			
22	1	井戸1(枠内)	土器	かわらけ	(13.7)	(8.4)	3.6	燈色系		
22	2		土器	かわらけ	12.9	7.5	3.6	燈色系		
22	3		土器	かわらけ	9.0	4.6	3.5	燈色系		灯
22	4		石製品	砥石	—	—	—			中砥
22	5		木製品	底板	—	12.4	0.8			
22	6		木製品	底板	—	13.2	0.6			
22	7		木製品	不明	12.2	2.4	0.1			
22	8	井戸1裏込め	土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.9	白褐色系		
22	9		土器	(手)かわらけ	(8.7)	—	2.2	肌色系		
22	10		土器	かわらけ	(8.5)	(8.0)	1.5	白褐色系		
22	11		土器	かわらけ	(8.0)	(5.5)	1.7	白褐色系		
22	12		常滑	甕	—	—	—	暗灰色	茶色	表面降灰
22	13		常滑	甕	—	—	—	暗灰色	茶色	表面降灰
22	14	井戸2	土器	かわらけ	9.0	7.2	1.7	肌色系		
23	1	土坑1	土器	(手)かわらけ	(10.0)	—	2.0	肌色系		
23	2		土器	(手)かわらけ	(9.7)	—	2.2	肌色系		
23	3		土器	かわらけ	13.5	8.4	3.4	淡灯色系		
23	4		土器	かわらけ	9.2	6.8	1.7	肌色系		灯
23	5		土器	かわらけ	9.0	7.2	1.3	肌色系		灯
23	6		土器	かわらけ	(9.0)	7.6	1.2	肌色系		灯
23	7		白磁	碗	—	—	—	白灰色	灰色	
23	8		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	白褐色	灰燈色	
23	9		常滑	甕	—	—	—	灰色	茶色	内外面降灰
23	10		瓦	平瓦	—	—	2.1	暗灰色	暗灰色	縄目叩文

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調胎土)	色調釉/器表)	備考
23	11	土坑2	土器	(手)かわらけ	(10.1)	―	1.8	白褐色系		
23	12		土器	(手)かわらけ	(9.2)	―	1.9	燈色系		
23	13		渥美	山茶碗	16.4	7.1	5.6	灰色	灰色	
23	14	土坑3	土器	(手)かわらけ	14.8	―	2.9	白褐色系		
23	15		土器	(手)かわらけ	13.3	―	2.9	白褐色系		
23	16		土器	(手)かわらけ	9.4	―	1.9	白褐色系		灯
23	17		土器	かわらけ	―	6.9	―	白褐色系		12C
24	1	1面(1)	土器	(手)かわらけ	14.8	―	2.9	淡燈色系		
24	2		土器	(手)かわらけ	14.6	―	2.9	肌色系		
24	3		土器	(手)かわらけ	(14.9)	―	3.1	肌色系		灯
24	4		土器	(手)かわらけ	(13.1)	―	3.6	肌色系		
24	5		土器	(手)かわらけ	(15.0)	―	4.1	肌色系		
24	6		土器	(手)かわらけ	(15.0)	―	3.1	肌色系		
24	7		土器	(手)かわらけ	(14.2)	―	3.4	淡燈色系		
24	8		土器	(手)かわらけ	(13.9)	―	3.9	淡燈色系		
24	9		土器	(手)かわらけ	14.2	―	3.4	肌色系		灯
24	10		土器	(手)かわらけ	(14.9)	―	3.3	白褐色系		
24	11		土器	(手)かわらけ	(14.2)	―	3.1	白褐色系		
24	12		土器	(手)かわらけ	(14.0)	―	3.5	白褐色系		
24	13		土器	(手)かわらけ	(14.1)	―	3.0	肌色系		
24	14		土器	(手)かわらけ	13.5	―	3.2	白褐色系		
24	15		土器	(手)かわらけ	(13.9)	―	2.6	白褐色系		
24	16		土器	(手)かわらけ	(14.6)	―	2.9	肌色系		
24	17		土器	(手)かわらけ	(14.6)	―	3.9	肌色系		
24	18		土器	(手)かわらけ	(13.9)	―	3.4	淡燈色系		灯
24	19		土器	(手)かわらけ	14.0	―	3.0	白褐色系		
24	20		土器	(手)かわらけ	(13.9)	―	2.7	燈色系		
24	21		土器	(手)かわらけ	(13.6)	―	3.4	白褐色系		
24	22		土器	(手)かわらけ	(13.2)	―	3.8	白褐色系		
24	23		土器	(手)かわらけ	(14.0)	―	3.2	白褐色系		
24	24		土器	(手)かわらけ	(14.0)	―	3.6	淡燈色系		
24	25		土器	(手)かわらけ	(11.3)	―	2.6	白褐色系		
24	26		土器	(手)かわらけ	9.4	―	2.4	白褐色系		
24	27		土器	(手)かわらけ	9.4	―	2.1	肌色系		灯
24	28		土器	(手)かわらけ	9.9	―	2.0	肌色系		
24	29		土器	(手)かわらけ	10.0	―	2.2	肌色系		
24	30		土器	(手)かわらけ	9.8	―	2.0	白褐色系		
24	31		土器	(手)かわらけ	9.6	―	1.9	白褐色系		
24	32		土器	(手)かわらけ	(9.3)	―	1.8	燈色系		
24	33		土器	(手)かわらけ	(9.1)	―	1.9	肌色系		
24	34		土器	(手)かわらけ	9.0	―	2.1	肌色系		灯
24	35		土器	(手)かわらけ	9.7	―	2.0	淡燈色系		
24	36		土器	(手)かわらけ	9.4	―	1.6	白褐色系		
24	37		土器	(手)かわらけ	9.0	―	1.6	肌色系		
24	38		土器	(手)かわらけ	(9.5)	―	2.0	淡燈色系		
24	39		土器	(手)かわらけ	9.6	―	1.8	肌色系		
24	40		土器	(手)かわらけ	(9.3)	―	2.3	肌色系		
24	41		土器	(手)かわらけ	9.2	―	2.3	白褐色系		灯
24	42		土器	(手)かわらけ	(9.4)	―	1.5	淡燈色系		
24	43		土器	(手)かわらけ	(8.9)	―	1.6	肌色系		
24	44		土器	(手)かわらけ	9.8	―	2.0	肌色系		
24	45		土器	(手)かわらけ	9.2	―	1.9	肌色系		灯
24	46		土器	(手)かわらけ	(9.2)	―	1.7	白褐色系		
24	47		土器	(手)かわらけ	8.7	―	1.6	白褐色系		
24	48		土器	(手)かわらけ	8.9	―	1.7	淡燈色系		
24	49		土器	(手)かわらけ	(9.2)	―	1.8	白褐色系		
24	50		土器	(手)かわらけ	(9.0)	―	2.1	白褐色系		
24	51		土器	(手)かわらけ	(9.1)	―	2.0	淡燈色系		
24	52		土器	(手)かわらけ	(9.2)	―	2.3	燈色系		
24	53		土器	(手)かわらけ	9.4	―	2.3	肌色系		
24	54		土器	(手)かわらけ	(9.9)	―	2.0	白褐色系		
24	55		土器	(手)かわらけ	(9.5)	―	1.8	肌色系		
24	56		土器	(手)かわらけ	(9.6)	―	1.3	白褐色系		
24	57		土器	(手)かわらけ	9.8	―	1.6	肌色系		
24	58		土器	(手)かわらけ	9.0	―	1.5	白褐色系		
24	59		土器	(手)かわらけ	9.9	―	1.3	白褐色系		
24	60		土器	(手)かわらけ	9.2	―	1.7	白褐色系		
24	61		土器	(手)かわらけ	9.9	―	1.8	白褐色系		
24	62		土器	(手)かわらけ	9.5	―	1.9	白褐色系		
24	63		土器	(手)かわらけ	9.9	―	1.9	燈色系		灯

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調胎土)	色調釉/器表)	備考
24	64		土器	(手)かわらけ	9.7	—	2.3	淡燈色系		
24	65		土器	(手)かわらけ	9.9	—	2.1	白褐色系		灯
24	66		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	2.1	肌色系		
24	67		土器	(手)かわらけ	(9.1)	—	2.0	肌色系		
24	68		土器	(手)かわらけ	9.1	—	1.8	淡燈色系		灯
24	69		土器	(手)かわらけ	9.8	—	2.0	肌色系		
24	70		土器	(手)かわらけ	9.4	—	2.0	肌色系		
24	71		土器	(手)かわらけ	(9.9)	—	2.0	肌色系		
24	72		土器	(手)かわらけ	9.4	—	2.0	燈色系		
24	73		土器	(手)かわらけ	9.8	—	2.1	白褐色系		灯
24	74		土器	(手)かわらけ	10.0	—	2.0	白褐色系		
24	75		土器	(手)かわらけ	9.7	—	1.7	肌色系		灯
24	76		土器	(手)かわらけ	(9.8)	—	2.1	淡燈色系		
24	77		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.5	燈色系		
24	78		土器	(手)かわらけ	9.6	—	1.5	淡燈色系		
24	79		土器	(手)かわらけ	9.1	—	1.9	肌色系		灯
24	80		土器	(手)かわらけ	(10.0)	—	1.8	淡燈色系		
24	81		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.8	燈色系		灯
24	82		土器	(手)かわらけ	(9.9)	—	1.8	白褐色系		
24	83		土器	(手)かわらけ	9.2	—	1.9	燈色系		
24	84		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	1.6	白褐色系		
24	85		土器	(手)かわらけ	9.5	—	1.7	白褐色系		
24	86		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.8	白褐色系		
24	87		土器	(手)かわらけ	9.1	—	1.9	白褐色系		灯
24	88		土器	(手)かわらけ	(9.8)	—	1.9	肌色系		
24	89		土器	(手)かわらけ	(8.9)	—	2.1	肌色系		
24	90		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.6	燈色系		
24	91		土器	(手)かわらけ	9.5	—	1.8	白褐色系		
24	92		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.5	白褐色系		
24	93		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.5	燈色系		
24	94		土器	(手)かわらけ	9.8	—	1.8	白褐色系		灯
24	95		土器	(手)かわらけ	9.2	—	1.8	白褐色系		
24	96		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	2.2	肌色系		
24	97		土器	(手)かわらけ	(8.4)	—	1.4	白褐色系		
24	98		土器	(手)かわらけ	(9.3)	—	1.8	白褐色系		
25	1	1面(2)	土器	かわらけ	(14.8)	(10.0)	3.1	淡燈色系		
25	2		土器	かわらけ	(14.0)	(9.4)	2.9	淡燈色系		
25	3		土器	かわらけ	(14.0)	(9.6)	3.3	白褐色系		
25	4		土器	かわらけ	(14.0)	(8.0)	3.2	燈色系		
25	5		土器	かわらけ	(14.7)	(9.5)	2.9	白褐色系		
25	6		土器	かわらけ	(14.0)	(9.2)	3.2	白褐色系		
25	7		土器	かわらけ	(12.8)	(8.6)	2.8	淡燈色系		
25	8		土器	かわらけ	(13.0)	(9.0)	3.1	淡燈色系		
25	9		土器	かわらけ	13.0	8.0	3.2	燈色系		灯
25	10		土器	かわらけ	(12.9)	(8.6)	3.2	淡燈色系		
25	11		土器	かわらけ	12.8	8.7	3.6	燈色系		
25	12		土器	かわらけ	8.9	5.9	2.1	淡燈色系		
25	13		土器	かわらけ	10.0	8.2	2.2	肌色系		
25	14		土器	かわらけ	(9.7)	7.2	1.9	白褐色系		
25	15		土器	かわらけ	9.5	6.5	2.1	燈色系		
25	16		土器	かわらけ	9.6	7.3	2.0	肌色系		灯
25	17		土器	かわらけ	9.4	8.8	1.6	肌色系		灯
25	18		土器	かわらけ	9.2	6.5	1.8	白褐色系		
25	19		土器	かわらけ	9.0	8.8	1.3	燈色系		
25	20		土器	かわらけ	(9.0)	8.7	1.3	燈色系		
25	21		土器	かわらけ	8.7	7.3	1.4	燈色系		
25	22		土器	かわらけ	8.6	7.2	1.1	燈色系		
25	23		土器	かわらけ	8.8	7.5	1.4	肌色系		
25	24		土器	かわらけ	9.0	7.4	1.7	肌色系		
25	25		土器	かわらけ	9.0	6.8	1.6	燈色系		
25	26		土器	かわらけ	(9.3)	6.8	1.6	燈色系		
25	27		土器	かわらけ	9.1	6.4	1.9	肌色系		
25	28		土器	かわらけ	(8.8)	6.4	1.7	白褐色系		
25	29		土器	かわらけ	(9.4)	(7.0)	1.6	燈色系		
25	30		土器	かわらけ	(9.4)	(6.2)	1.5	肌色系		灯
25	31		土器	かわらけ	(9.2)	(6.9)	1.6	肌色系		
25	32		土器	かわらけ	9.1	5.5	2.0	淡燈色系		
25	33		土器	かわらけ	(9.4)	(5.6)	1.8	肌色系		
25	34		土器	かわらけ	(9.2)	(5.7)	2.0	肌色系		
25	35		土器	かわらけ	(9.2)	(6.8)	2.0	淡燈色系		

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調(胎土)	色調(釉/器表)	備考
25	36		土器	かわらけ	(9.4)	(6.6)	2.0	白褐色系		
25	37		土器	かわらけ	(9.2)	(6.5)	2.1	肌色系		
25	38		土器	かわらけ	(9.1)	(6.2)	1.9	白褐色系		
25	39		土器	かわらけ	9.4	5.3	2.0	肌色系		
25	40		土器	かわらけ	8.6	5.6	1.9	肌色系		
25	41		土器	かわらけ	8.2	6.8	1.7	肌色系		
25	42		土器	かわらけ	(9.2)	—	1.6	淡燈色系		内折れ・穿孔
25	43		土器	かわらけ	(6.9)	—	1.1	肌色系		内折れ
26	1	1面(3)	青磁	櫛掻劃花文皿	(10.9)	(4.8)	2.2	燈色	灰色	同安窯系
26	2		青磁	櫛掻劃花文皿	(11.0)	(5.4)	1.7	灰色	灰緑色	同安窯系
26	3		青磁	櫛掻劃花文皿	(10.6)	4.4	1.8	暗灰色	灰緑色	同安窯系
26	4		青磁	櫛掻劃花文皿	—	—	—	灰色	褐緑色	同安窯系
26	5		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰色	灰緑色	同安窯系
26	6		青磁	櫛掻劃花文碗	(18.0)	—	—	灰色	褐緑色	同安窯系
26	7		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰色	灰緑色	同安窯系
26	8		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	白灰色	褐緑色	同安窯系
26	9		青磁	櫛掻劃花文碗	(16.5)	—	—	灰色	灰青色	同安窯系
26	10		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	白灰色	灰青色	同安窯系
26	11		青磁	櫛掻劃花文碗	(13.9)	—	—	白灰色	褐緑色	同安窯系
26	12		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰色	灰緑色	同安窯系
26	13		青磁	櫛掻劃花文碗	—	5.0	—	灰色	灰緑色	同安窯系
26	14		青磁	劃花文皿	9.8	4.0	3.0	灰色	灰緑色	龍泉窯系
26	15		青磁	劃花文皿	10.2	3.8	2.2	白色	淡褐緑色	龍泉窯系
26	16		青磁	劃花文皿	—	—	—	白色	灰色	龍泉窯系
26	17		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
26	18		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰緑色	龍泉窯系
26	19		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	褐緑色	龍泉窯系
26	20		青磁	劃花文碗	—	—	—	白灰色	灰緑色	龍泉窯系
26	21		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰緑色	龍泉窯系
26	22		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	暗灰緑色	龍泉窯系
26	23		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	暗灰緑色	龍泉窯系・輪花
26	24		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	暗灰緑色	龍泉窯系・輪花
26	25		青磁	劃花文碗	(15.0)	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
26	26		青磁	劃花文碗	(15.8)	—	—	暗灰色	暗灰緑色	龍泉窯系
26	27		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	灰緑色	龍泉窯系
26	28		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
26	29		青磁	劃花文碗	(15.0)	—	—	白褐色	褐緑色	龍泉窯系
26	30		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	淡青緑色	龍泉窯系
26	31		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	淡青緑色	龍泉窯系
26	32		青磁	劃花文碗	—	—	—	暗灰色	淡灰緑色	龍泉窯系
26	33		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰色	龍泉窯系
26	34		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	褐緑色	龍泉窯系
26	35		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
26	36		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	淡灰色	龍泉窯系
26	37		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	淡灰色	龍泉窯系
26	38		青磁	蓮弁文碗	—	—	—	暗灰色	灰青色	龍泉窯系・内面河漬遺範
26	39		白磁	劃花文碗	—	—	—	白褐色	白黄色	
26	40		白磁	碗	—	—	—	白色	白灰色	
26	41		白磁	碗	—	—	—	暗灰色	白灰色	
26	42		白磁	碗	—	—	—	灰色	灰色	
26	43		白磁	碗	—	(8.0)	—	白灰色	灰色	内面蛇の目剥ぎ
26	44		白磁	小碗	—	—	—	白色	白色	
26	45		白磁	口兀	—	—	—	白色	白色	
26	46		白磁	合子	(7.8)	(7.0)	2.1	白色	灰色	
26	47		青白磁	碗	—	—	—	白色	緑味水青色	
26	48		青白磁	合子	—	—	—	白色	水青色	
26	49		青白磁	合子	—	—	—	白色	水青色	
26	50		青白磁	小皿	—	—	—	白色	水青色	
26	51		青白磁	小皿	—	—	—	白色	水青色	
26	52		黄釉	盤	—	—	—	褐灰色	黄灰色	内面鉄絵
27	1	1面(4)	常滑	甕	—	—	—	淡燈色	赤茶色	内面降灰
27	2		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰茶色	灰茶色	
27	3		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	白灰色	白灰色	
27	4		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	灰色	
27	5		瀬戸・美濃系	山茶碗	—	—	—	灰色	灰色	
27	6		常滑	山茶碗	—	—	—	淡赤茶色	赤茶色	
27	7		渥美	山茶碗	—	7.5	—	暗灰色	暗灰色	高台籾殻痕
27	8		渥美	子持ち山皿	7.5	3.7	1.8	黒灰色	黒灰色	
27	9		渥美	甕	(45.8)	—	—	灰色	淡灰褐色	
27	10		渥美	鉢	—	—	—	暗灰色	暗灰色	

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調胎土)	色調釉/器表)	備考
27	11		渥美	鉢	—	—	—	暗灰色	暗灰色	
27	12		伊勢系	土鍋	—	—	—	暗灰色	灰白色	
27	13		瓦	平瓦	—	—	2.3	灰色	暗灰色	縄目叩文
27	14		瓦	平瓦	—	—	2.2	黒灰色	黒灰色	凸凹面砂粒付着
27	15		瓦	平瓦	—	—	1.7	暗灰色	暗灰色	縄目叩文
27	16		瓦	平瓦	—	—	2.2	灰褐色	灰褐色	縄目叩文
27	17		瓦	丸瓦	—	—	2.2	暗灰色	黒灰色	縄目叩文
27	18		瓦	丸瓦	—	—	1.9	暗灰色	黒灰色	縄目叩文
27	19		石製品	砥石	—	3.1	2.0	暗白褐色		
27	20		鉄製品	釘	—	—	—			
27	21		鉄製品	釘	—	—	—			
28	1	溝1	土器	(手)かわらけ	(14.2)	—	3.8	淡白褐色系		灯
28	2		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	1.9	淡燈色系		灯
28	3		土器一	(手)かわらけ	8.4	—	2.2	燈色系		
28	4		白磁	端反皿	—	—	—	白色	灰白色	
28	5		木製品	箸	21.2	0.7	0.6			
28	6		木製品	箸	22.6	0.6	0.5			
28	7	溝2	土器	(手)かわらけ	(13.5)	—	2.7	肌色系		
28	8		土器	(手)かわらけ	(11.9)	—	3.0	肌色系		
28	9		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	1.6	白褐色系		
28	10		土器	(手)かわらけ	10.0	—	1.9	肌色系		
28	11		土器	(手)かわらけ	9.2	—	1.6	肌色系		
28	12		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	1.6	淡燈色系		
28	13		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.6	白褐色系		
28	14		土器	(手)かわらけ	9.5	—	1.8	淡燈色系		
28	15		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.6	白褐色系		
28	16		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰色	淡褐緑色	同安窯系
28	17		石製品	砥石	—	5.1	4.2	黒灰色		中砥
28	18		木製品	碗	—	7.7	—			
28	19		木製品	箸	17.2	0.6	0.5			
28	20		木製品	底板	19.5	—	0.8			
28	21		木製品	円板	9.7	10.0	0.5			中央部穿孔
28	22		木製品	円板	4.1	3.9	1.0			
28	23		木製品	箆	17.6	2.6	0.5			
29	1	1b(地山)面1)	土器	(手)かわらけ	(14.4)	—	3.6	肌色系		
29	2		土器	(手)かわらけ	(14.5)	—	3.1	白褐色系		
29	3		土器	(手)かわらけ	(14.3)	—	3.1	肌色系		
29	4		土器	(手)かわらけ	16.0	—	3.1	淡燈色系		
29	5		土器	(手)かわらけ	(14.9)	—	2.5	肌色系		
29	6		土器	(手)かわらけ	(15.0)	—	2.9	肌色系		
29	7		土器	(手)かわらけ	(15.2)	—	3.0	肌色系		灯
29	8		土器	(手)かわらけ	13.9	—	2.9	肌色系		
29	9		土器	(手)かわらけ	(14.2)	—	3.2	燈色系		
29	10		土器	(手)かわらけ	(14.5)	—	3.2	肌色系		
29	11		土器	(手)かわらけ	(14.4)	—	3.0	肌色系		
29	12		土器	(手)かわらけ	(14.2)	—	3.0	淡燈色系		
29	13		土器	(手)かわらけ	13.4	—	3.0	淡燈色系		
29	14		土器	(手)かわらけ	(14.5)	—	3.1	肌色系		
29	15		土器	(手)かわらけ	(14.0)	—	3.3	肌色系		
29	16		土器	(手)かわらけ	13.7	—	3.7	肌色系		
29	17		土器	(手)かわらけ	(14.0)	—	—	燈色系		灯
29	18		土器	(手)かわらけ	(13.5)	—	2.8	肌色系		
29	19		土器	(手)かわらけ	(13.4)	—	3.1	白褐色系		
29	20		土器	(手)かわらけ	(13.0)	—	3.0	燈色系		
29	21		土器	(手)かわらけ	(10.3)	—	1.9	白褐色系		
29	22		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	1.9	肌色系		
29	23		土器	(手)かわらけ	10.0	—	1.9	淡燈色系		灯
29	24		土器	(手)かわらけ	10.1	—	2.1	肌色系		
29	25		土器	(手)かわらけ	(10.0)	—	2.0	肌色系		
29	26		土器	(手)かわらけ	9.7	—	1.8	肌色系		灯
29	27		土器	(手)かわらけ	9.4	—	1.9	肌色系		
29	28		土器	(手)かわらけ	(10.0)	—	1.7	白褐色系		
29	29		土器	(手)かわらけ	(10.1)	—	1.6	白褐色系		
29	30		土器	(手)かわらけ	(9.7)	—	1.6	白褐色系		灯
29	31		土器	(手)かわらけ	9.5	—	1.7	白褐色系		
29	32		土器	(手)かわらけ	(10.0)	—	1.6	肌色系		
29	33		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.8	肌色系		
29	34		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	2.1	淡燈色系		灯
29	35		土器	(手)かわらけ	(9.9)	—	1.7	淡燈色系		
29	36		土器	(手)かわらけ	9.3	—	1.4	白褐色系		

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調(胎土)	色調(釉/器表)	備考
29	37		土器	(手)かわらけ	10.0	—	1.1	肌色系		
29	38		土器	(手)かわらけ	10.0	—	2.1	淡燈色系		
29	39		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	2.4	白褐色系		
29	40		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	2.1	白褐色系		
29	41		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	1.9	淡燈色系		
29	42		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	1.7	白褐色系		
29	43		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	1.8	白褐色系		灯
29	44		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	2.1	淡燈色系		
29	45		土器	(手)かわらけ	(8.9)	—	2.0	肌色系		灯
29	46		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.6	淡燈色系		
29	47		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	1.7	白褐色系		
29	48		土器	(手)かわらけ	9.1	—	1.7	肌色系		
29	49		土器	(手)かわらけ	(9.1)	—	1.7	肌色系		灯
29	50		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.6	白褐色系		
29	51		土器	(手)かわらけ	9.2	—	1.8	白褐色系		灯
29	52		土器	(手)かわらけ	8.9	—	1.9	燈色系		
29	53		土器	(手)かわらけ	8.9	—	2.1	肌色系		灯
29	54		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.9	白褐色系		
29	55		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	1.7	燈色系		灯
29	56		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.4	白褐色系		
29	57		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.8	肌色系		
29	58		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.5	淡燈色系		
29	59		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	2.0	白褐色系		
29	60		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	2.2	白褐色系		
29	61		土器	(手)かわらけ	(9.6)	—	2.4	白褐色系		
29	62		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	2.3	肌色系		
29	63		土器	(手)かわらけ	(9.5)	—	2.3	白褐色系		灯
29	64		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	2.0	肌色系		
29	65		土器	(手)かわらけ	(9.0)	—	1.9	淡燈色系		
29	66		土器	(手)かわらけ	(9.4)	—	1.9	白褐色系		
29	67		土器	(手)かわらけ	(9.1)	—	1.9	白褐色系		灯
29	68		土器	(手)かわらけ	(8.7)	—	2.0	燈色系		
29	69		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	1.6	淡燈色系		
29	70		土器	(手)かわらけ	8.5	—	2.1	燈色系		
29	71		土器	(手)かわらけ	9.2	—	1.7	肌色系		
29	72		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	1.7	肌色系		
29	73		土器	(手)かわらけ	(9.2)	—	1.5	白褐色系		
29	74		土器	(手)かわらけ	8.8	—	1.7	燈色系		灯
29	75		土器	(手)かわらけ	(8.7)	—	1.7	肌色系		
29	76		土器	(手)かわらけ	(8.5)	—	1.5	淡燈色系		
29	77		土器	(手)かわらけ	(8.4)	—	1.0	白褐色系		
29	78		土器	(手)かわらけ	(8.0)	—	1.7	淡燈色系		
30	1	1b(地山)面(2)	土器	かわらけ	14.2	9.5	3.4	肌色系		
30	2		土器	かわらけ	14.2	7.6	3.2	肌色系		
30	3		土器	かわらけ	(13.7)	8.4	3.2	肌色系		
30	4		土器	かわらけ	(12.1)	(8.6)	3.0	燈色系		
30	5		土器	かわらけ	(9.6)	(7.4)	1.7	燈色系		
30	6		土器	かわらけ	9.7	7.6	1.8	燈色系		
30	7		土器	かわらけ	9.2	7.0	1.5	肌色系		
30	8		土器	かわらけ	(8.8)	(7.2)	1.3	淡燈色系		
30	9		土器	かわらけ	(8.6)	(6.2)	1.7	淡燈色系		
30	10		土器	かわらけ	(9.3)	(7.2)	1.7	淡燈色系		
30	11		土器	かわらけ	(9.0)	(7.2)	1.7	淡燈色系		
30	12		土器	かわらけ	9.3	7.6	1.6	肌色系		
30	13		土器	かわらけ	(9.2)	(7.0)	1.5	燈色系		
30	14		土器	かわらけ	(9.3)	(6.4)	1.8	肌色系		
30	15		土器	かわらけ	(9.7)	6.0	2.1	燈色系		
30	16		土器	かわらけ	(9.6)	(6.4)	2.2	白褐色系		
30	17		土器	かわらけ	(9.4)	(7.2)	2.1	肌色系		
30	18		土器	かわらけ	(9.4)	(5.2)	1.9	白褐色系		
30	19		土器	かわらけ	9.1	5.6	1.9	白褐色系		
30	20		土器	かわらけ	9.2	6.0	1.8	燈色系		
30	21		土器	かわらけ	(8.3)	5.0	1.9	淡燈色系		
30	22		土器	かわらけ	(8.0)	(5.6)	2.0	白褐色系		
30	23		土器	かわらけ	(9.5)	4.2	1.6	肌色系		
30	24		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	白灰色	灰緑色	同安窯系
30	25		青磁	櫛掻劃花文碗	—	—	—	灰色	濃灰緑色	同安窯系
30	26		青磁	櫛掻劃花文碗	—	(4.4)	—	灰色	灰緑色	同安窯系
30	27		青磁	劃花文碗	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
30	28		青磁	劃花文碗	(15.4)	—	—	灰色	褐緑色	龍泉窯系

図版	番号	遺構	製品名/産地	遺物名/器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調(胎土)	色調(釉/器表)	備考
30	29		青磁	劃花文碗	—	—	—	白褐色	緑灰色	龍泉窯系
30	30		青磁	劃花文皿	—	—	—	灰色	灰青色	龍泉窯系
30	31		白磁	碗	(17.0)	(6.7)	7.1	灰白色	灰白色	
30	32		白磁	碗	—	—	—	灰白色	灰白色	輪花
30	33		渥美	山皿	8.4	5.5	2.4	暗灰色	暗灰色	口縁部降灰
30	34		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	灰色	
30	35		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	灰色	内面降灰
30	36		常滑	甕	(27.7)	—	—	淡燈色	茶色	外面降灰
30	37		渥美	鉢	—	—	—	灰色	灰色	
30	38		渥美	鉢	—	—	—	暗灰色	暗灰色	
30	39		渥美	鉢	—	—	—	黒灰色	黒灰色	
30	40		土器質	手焙り	—	—	—	淡燈色	淡燈色	内面煤付着
30	41		土器	皿	(10.3)	4.6	3.9	肌色系	肌色系	高台縦方向削り
31	1	1b(地山)面(3)	瓦	平瓦	—	—	2.2	黒灰色	黒灰色	永福寺創建期
31	2		瓦	平瓦	—	—	2.3	黒灰色	黒灰色	永福寺創建期
31	3		瓦	平瓦	—	—	1.7	黒灰色	黒灰色	永福寺創建期
32	1	1b(地山)面(4)	瓦	鐙瓦	—	—	1.7	灰白色	灰白色	
32	2		瓦	宇瓦	—	—	3.5	灰色	灰色	
32	3		瓦	丸瓦	—	—	1.8	黒灰色	黒灰色	永福寺創建期
32	4		銅製品	銭						解読不能
32	5		鉄製品	刀子	26.5	3.0	0.7			
32	6		鉄製品	釘	—	0.7	0.7			
32	7		鉄製品	釘	—	0.3	0.4			
32	8		石製品	砥石	—	—	0.9		緑灰色	中砥
32	9		石製品	砥石	—	2.3	2.2		灰色	中砥
32	10		石製品	鍋転用製品	—	—	—			
33	1	古代河川	土師	甕	—	—	—	燈色系		外面煤付着
34	1	中世出土古代遺物	須恵	小壺	—	—	—	暗灰色	暗灰色	
34	2		土師	短頸壺	—	—	—	灰白色系	肌色	
34	3		土師	小壺	—	(5.2)	—	淡燈色系	淡燈色系	
34	4		土師	小壺	—	5.3	—	肌色系		
34	5		土師	杯	—	4.9	—	燈色系		内面煤付着
34	6		灰釉陶器	杯	—	(8.2)	—	暗灰色	白灰色	
34	7		瓦	平瓦	—	—	2.2	褐灰色	灰色	斜め格子叩文
34	8		瓦	平瓦	—	—	2.1	灰色	灰色	斜め格子叩文

第4章　まとめ

今回の調査では現地表下１m前後で地山が検出し、異なる時期の遺構がほぼ同一レベルで検出された。それらの遺構は出土遺物或いは土層観察により４時期の遺構群に分類された。以下、概略をここにまとめる。

古代遺構

古代遺構として河川遺構が検出された。流路は北東から南西方向で、軸線方向はN－66°－Eであった。この他には古代遺構は検出されていない。また、律令期以降と思われる古代遺物が数点出土しているが、いずれも小破片のため時期を特定できなかった。

1b面（13世紀初頭頃）

1b面は１面とほぼ同レベルで検出している遺構であるが、他の遺構との関連等から1面より前の遺構群と捉えられる。土地区画の役割を持つ溝３条が検出している。区画された土地からは柱穴が複数検出しており、掘立柱建物が建っていたと想定できるが、グループ化できる柱穴がなく、詳細は不明である。溝で囲まれた区画の軸線方向はＮ－22°－Ｅを示し、古代河川遺構とはまったく方向を異にし、若宮大路の軸線方向にほぼ沿っている。

１面（13世紀前半）

１面期には1b面の溝が埋め立てられ、掘立柱建物・柱穴列・井戸が、調査区南端に東西方向の土丹地業の通路が造られる。一般的な掘立柱建物の間尺が２m（６尺６寸）であるのに対し、当遺跡検出の掘立柱建物2棟の柱間は２m10㎝（７尺）を測り、武家屋敷級の建物が想定し得る。当調査区北隣の発掘調査（若宮大路周辺遺跡群・鎌倉市小町二丁目283番６他２筆地点）でも武家屋敷に付随する建物と推測し得る掘立柱建物が検出されている。また、この時期の遺構の軸線方向も若宮大路にほぼ沿っている。

1a面（13世紀前半）

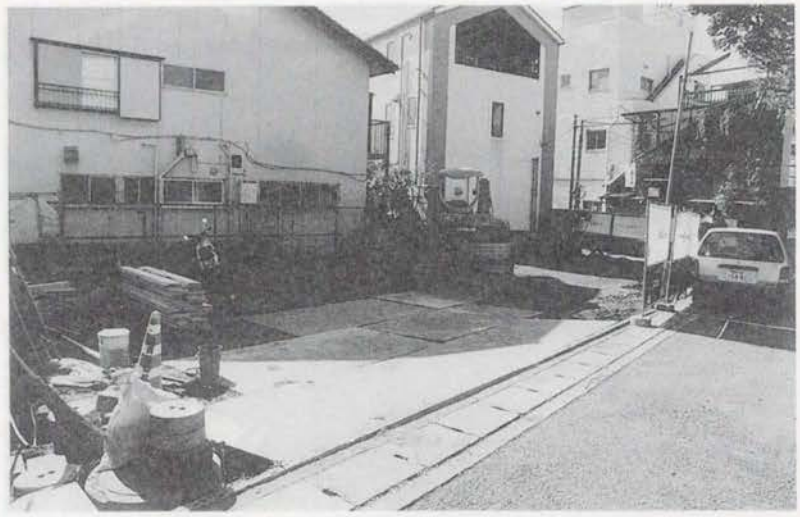
1a面は調査区中央付近に1面より上層位にごく一部検出された土丹地業面である。良好な地業が施され、柱穴も検出されているが、大部分が撹乱に遭い消失している。1a面上面層位までに出土した遺物からは１面との時期差はほとんど見られない。

上記が各時期の概略である。遺構の変遷を辿ると、古代期から鎌倉時代への遺構の軸線方向の変化は鎌倉幕府が開かれた後、13世紀初頭にこの辺りに若宮大路を基幹とした都市整備計画に基づいた開発が行われたことを明確に示す好資料が発見されたと言える。また、1a面・１面・1b面はほとんど時期差がなく、遺構も密に検出された。この地区が約50年の間に数回の建替えが行われ、頻繁に開発されている様相が顕著に現れている。さらに、武家屋敷級の掘立柱建物建物が検出されており、これらの点からも、当地が鎌倉時代13世紀前半にあって繁華で重要な地であった事が証明されたと言えよう。なお、13世紀前半以後の様相は残念ながら後世の撹乱で消失してしまっているが、立地条件からはその後も主要地域であったことは間違いなく、今後周辺の調査で明らかにされることを期待している。

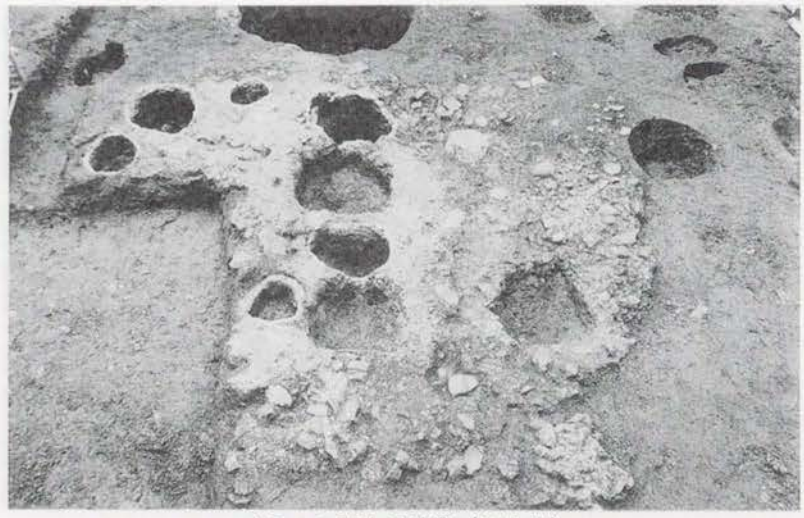
《参考文献》

『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書（鎌倉市小町２丁目283番６他２筆豊島屋店舗用地）』1998年７月　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

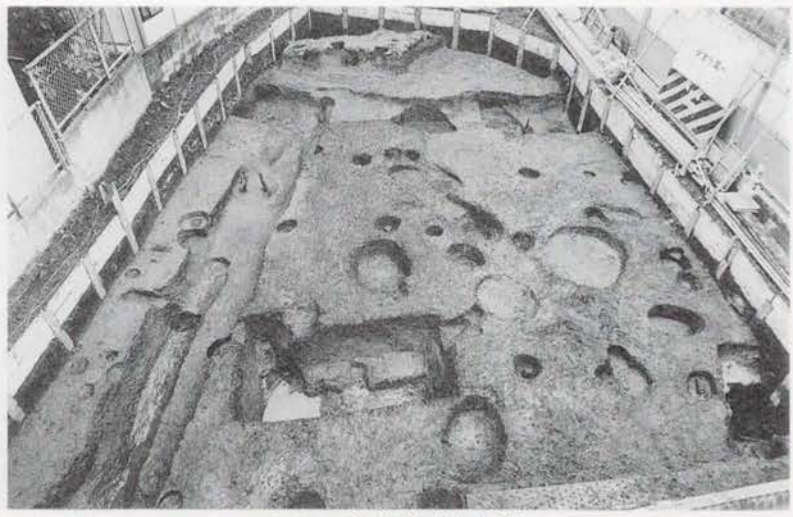
図版 1



▲A. 調査前風景



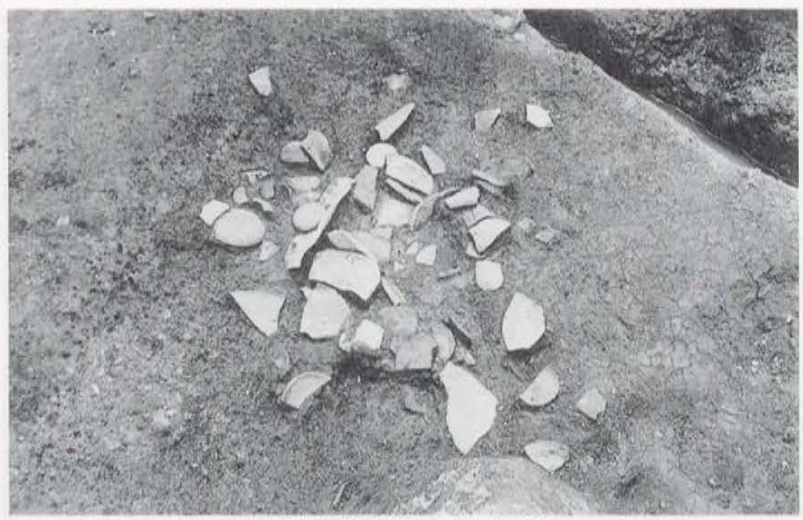
▲B. 1a面土丹地業（西より）



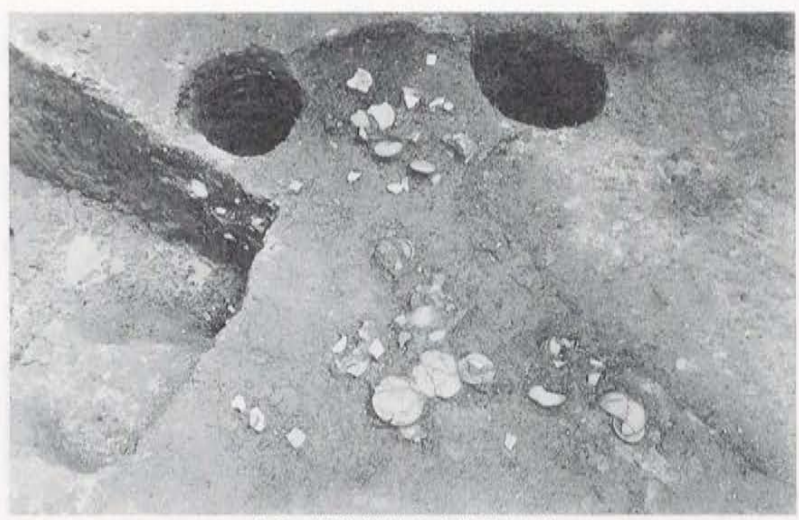
▲C. 1面全景（北より）

図版 2

▲A. 1面全景（南より）

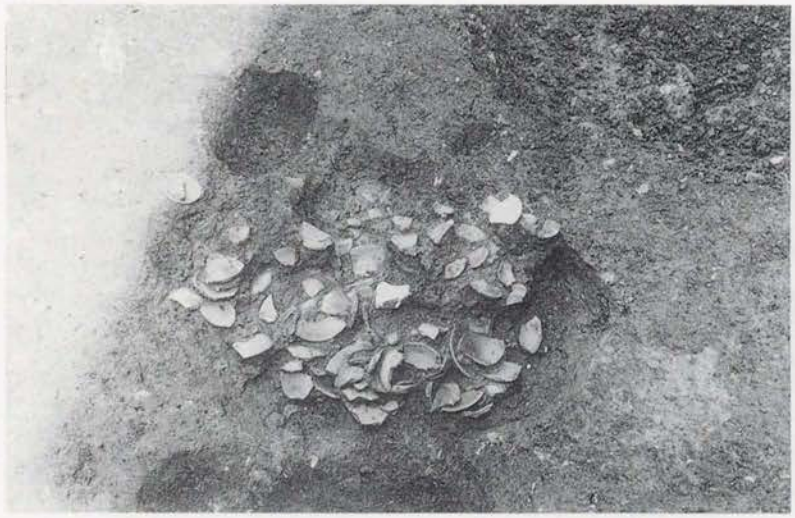


▲B. 遺物溜り1（北より）

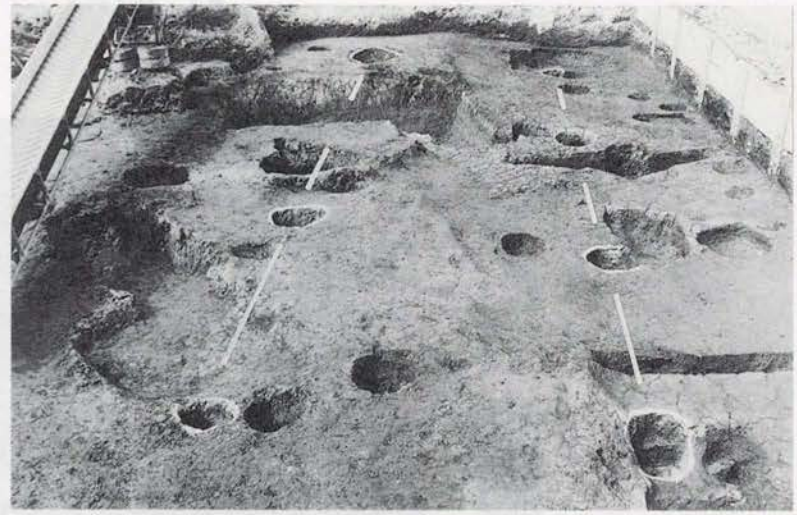


▲C. 遺物溜り2（北西より）

図版 3



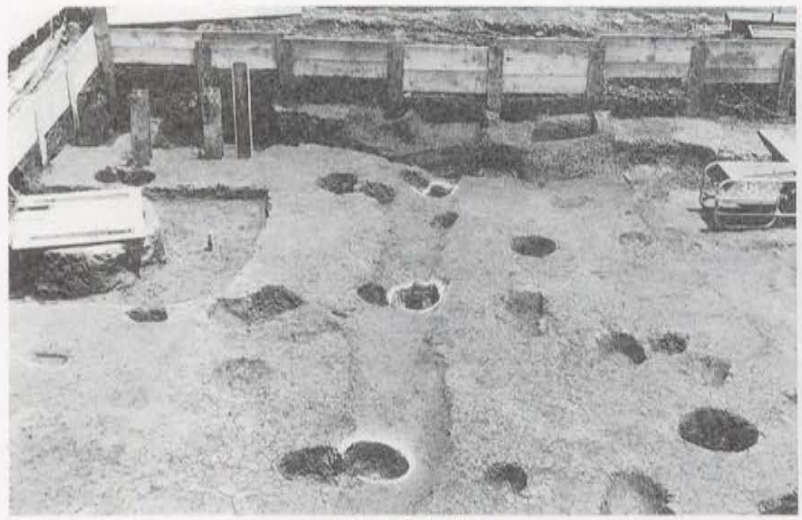
◀A. 遺物溜り3



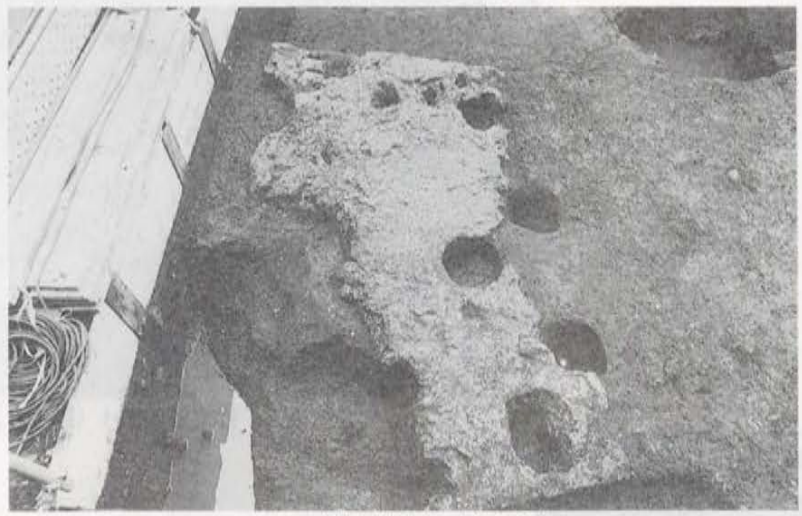
▲B. 掘立柱建物1（南より）

◀C. 同上（北より）

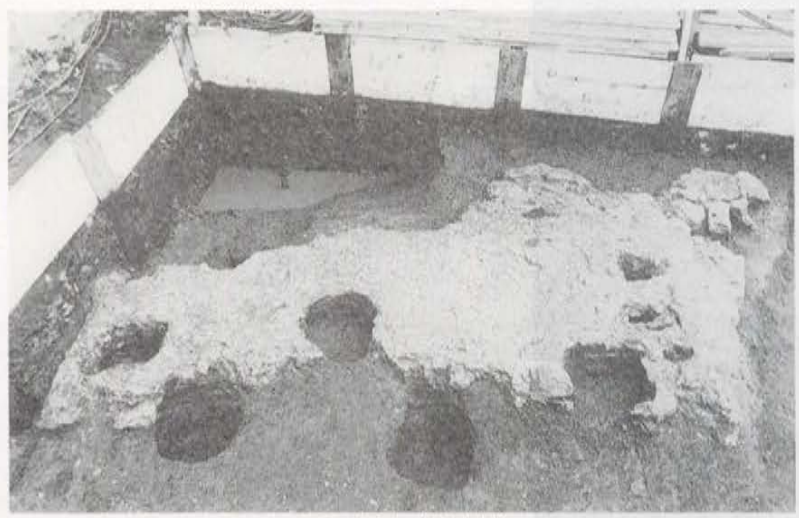
図版 4



▲A. 柱穴列 2

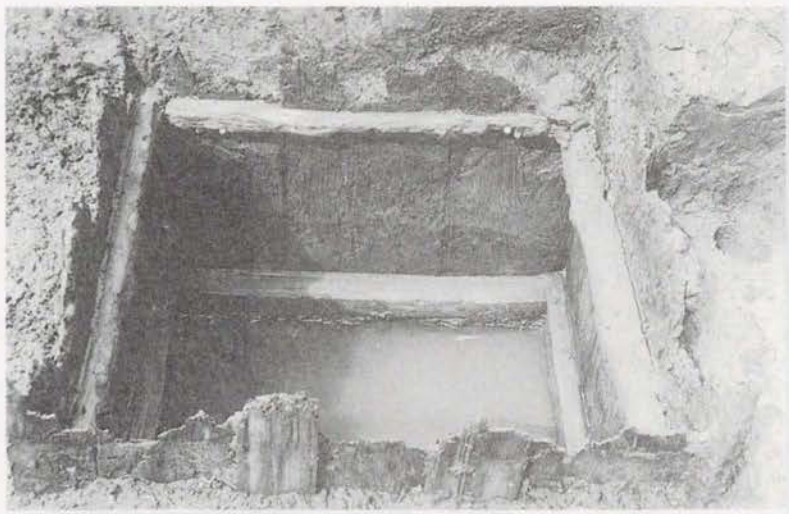


▲B. 道路状遺構（北より）



▲C. 同上（東より）

図版 5

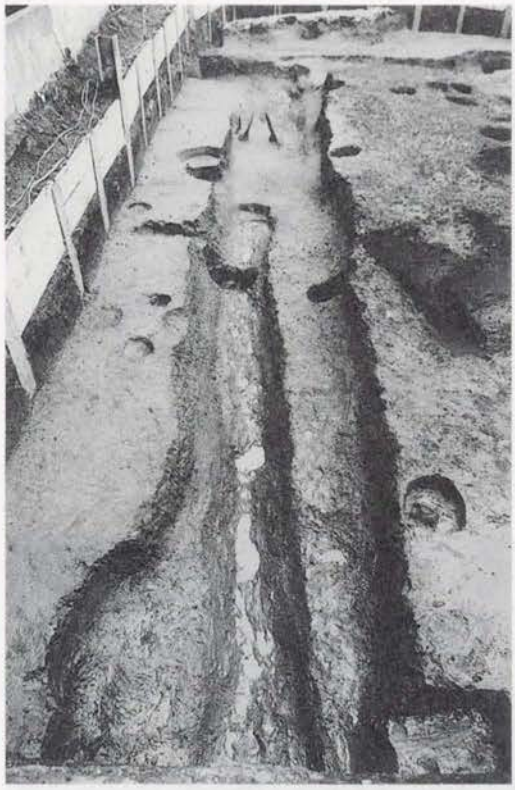


◀A. 井戸 1（南より）

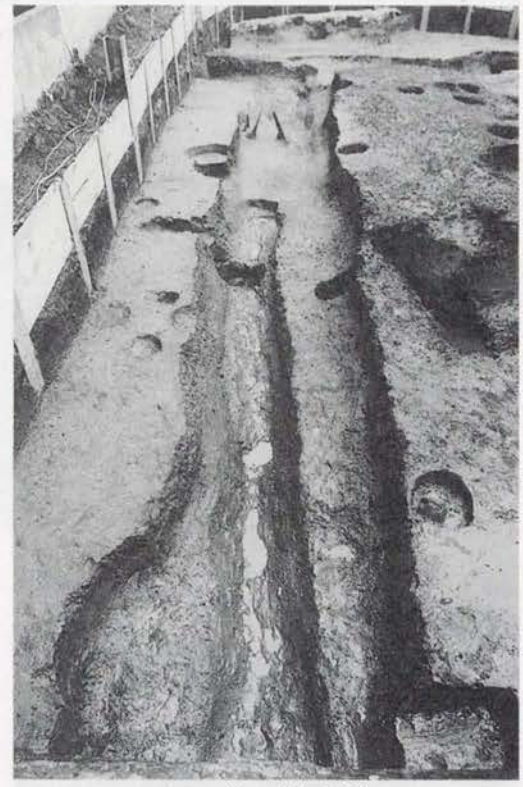
▲B. 井戸 2（東より）

◀C. 溝 1（東より）

図版 6



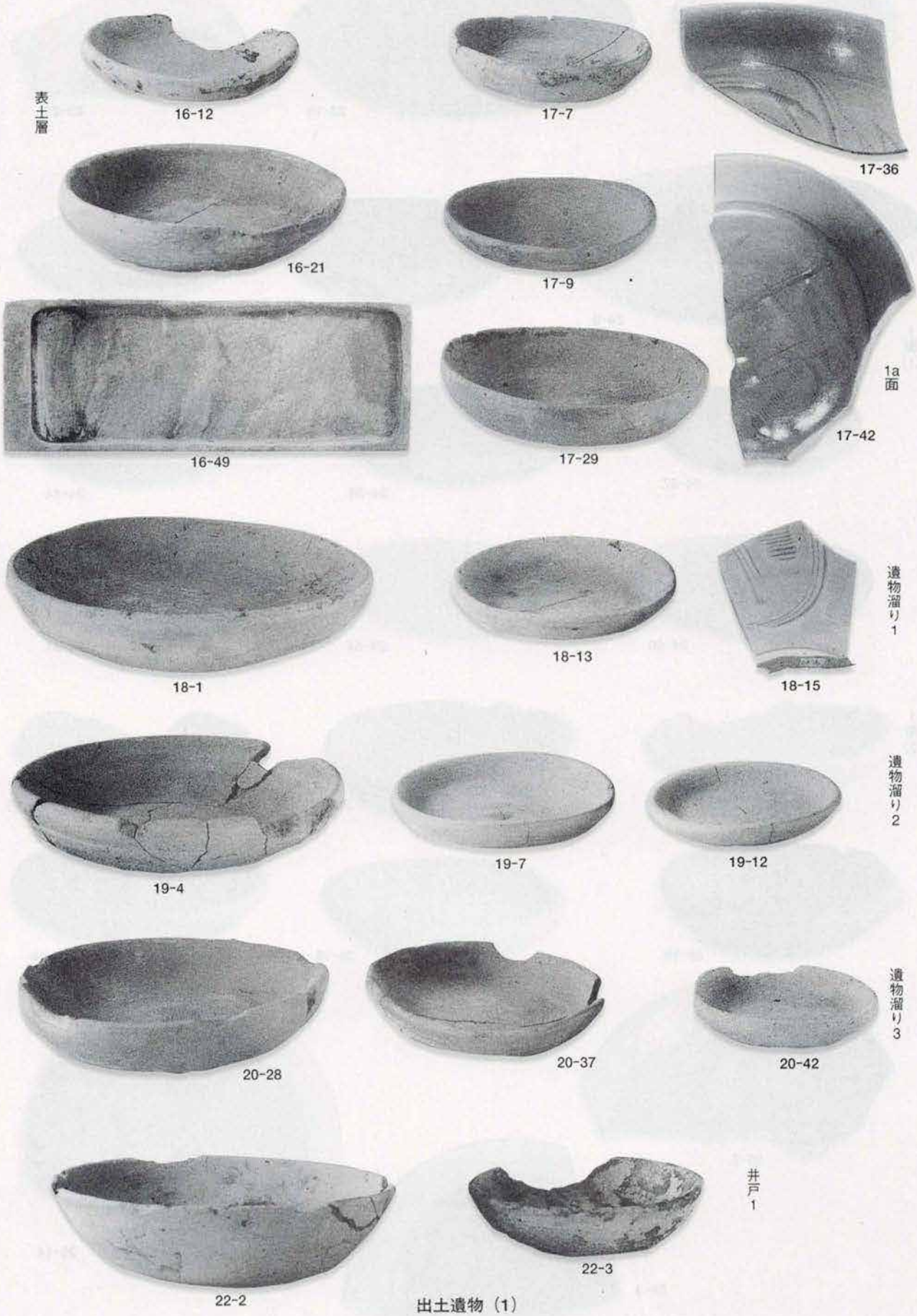
◀A. 溝2（北より）



▲B. 溝2（南より）

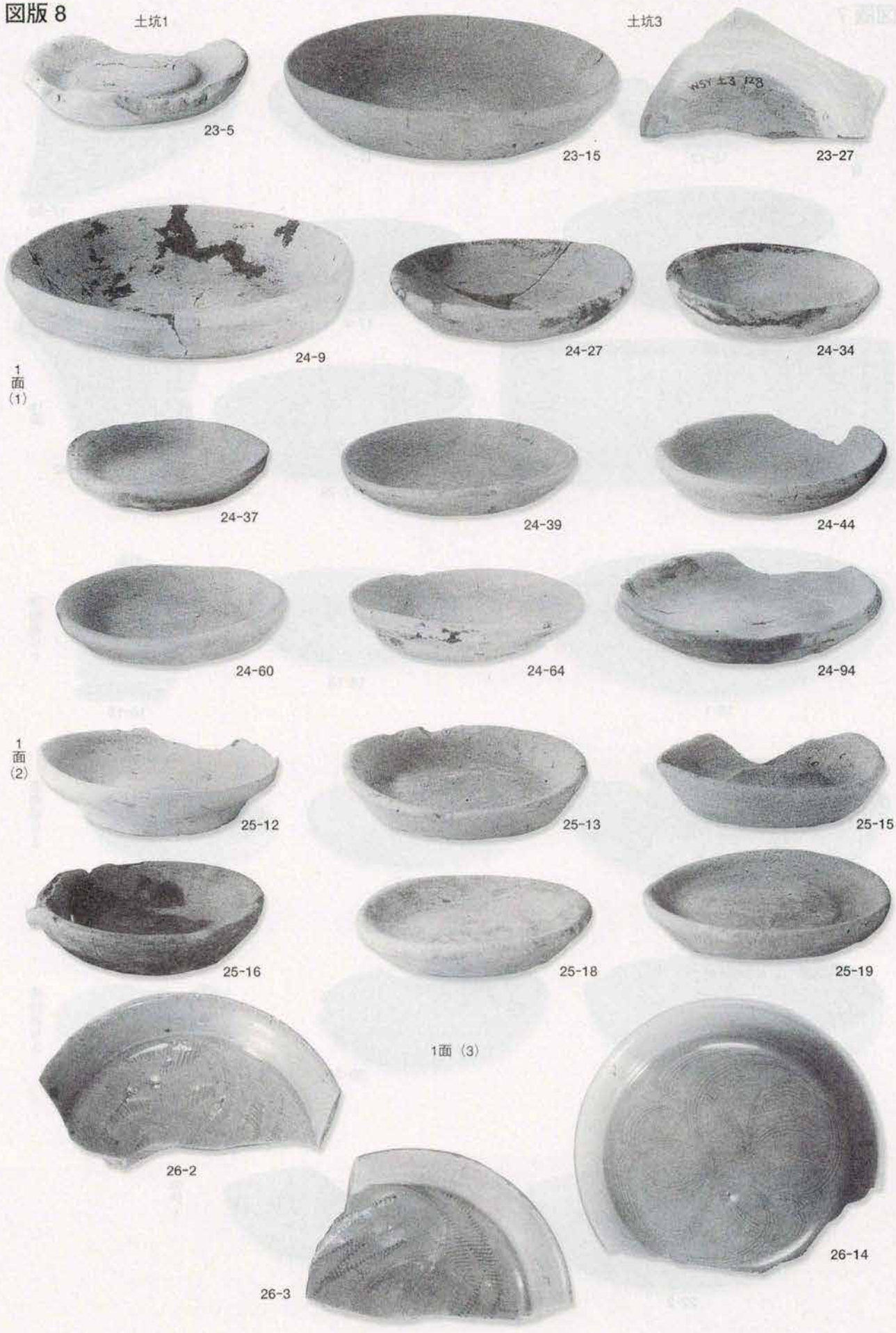
◀C. 古代河川

図版 7


表土層
16-12
17-7
17-36
16-21
17-9
16-49
17-29
1a面
17-42
18-1
18-13
18-15
遺物溜り1
19-4
19-7
19-12
遺物溜り2
20-28
20-37
20-42
遺物溜り3
22-2
22-3
井戸1

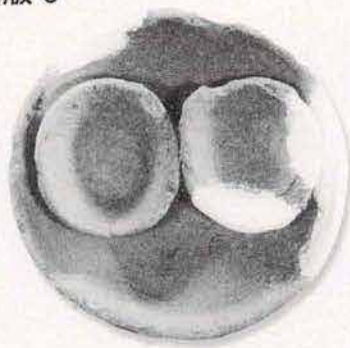
出土遺物（1）

図版 8


土坑1
土坑3
23-5
23-15
23-27
24-9
24-27
24-34
1面(1)
24-37
24-39
24-44
24-60
24-64
24-94
1面(2)
25-12
25-13
25-15
25-16
25-18
25-19
1面（3）
26-2
26-14
26-3

出土遺物（2）

図版 9



27-6

1面（4）

28-3

溝1

28-10

溝2

28-11

28-13

29-8

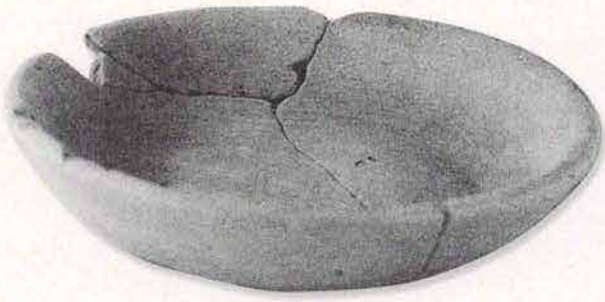
29-13

1b面（1）

29-18

29-24

29-27



30-2

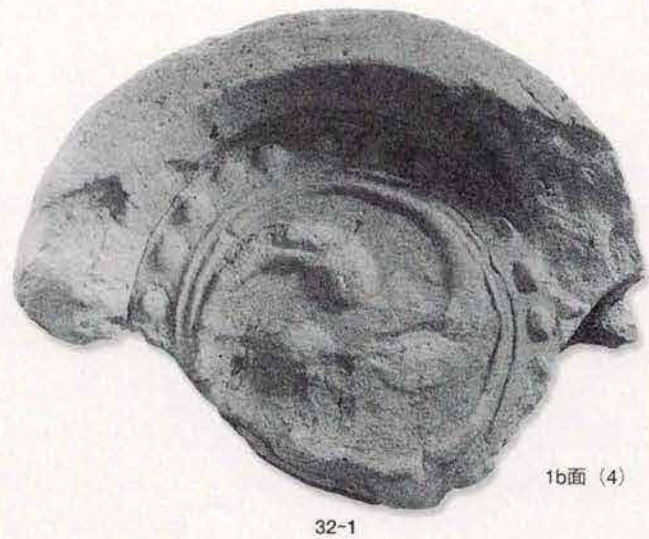
1b面（2）

30-41

30-6

30-12

30-19



32-1

1b面（4）

出土遺物（3）

能蔵寺跡（のうぞうじあと）　(No.314)

材木座二丁目294番３外地点

例　言

1. 本報は、能蔵寺跡（県遺跡台帳№314）の遺跡内の材木座二丁目294番３外地点における個人専用住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成16年７月20日～同年９月22日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
   調査担当者：原　廣志
   調　査　員：須佐直子・太田美智子・須佐仁和・早坂伸市・久保田裕美・中川建二・梅岡渓音
   調査補助員：宇都洋平・高橋拓也・山口正紀・野崎美帆・小野夏菜（鶴見大学生）
   調査作業員：養田孝善・渡辺輝彦・篠原敏夫・川崎由紀夫
   協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所・東国歴史考古学研究所
4. 本報の執筆は、第１～３章を原、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。
   挿図・写真図版の作成には、須佐（直）・久保田・山口・野崎が行い、遺物観察表を須佐（直）・山口が作成した。
5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を久保田、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物、図面類、写真類などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
   ・挿図縮尺　全測図：１／80
   　遺構図：１／40
   　遺物図：１／３
   ・遺構図　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している
   ・遺物図　－・－・－は釉薬範囲を示す。黒塗は燈明皿付着の油煙煤、漆器の朱漆文様を表現する。手捏ねかわらけ底径の計測は外底指頭痕と口縁部との境、稜部の数値を表している。
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の多くの方々からご助言とご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
   秋山哲雄・河野眞知郎・菊川　泉・五味文彦・佐藤仁彦・宗臺秀明・宗臺富貴子・田代郁夫・福田　誠・松尾宣方
   馬淵和雄

目　　次

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 59
1. 遺跡の位置 …… 59
2. 遺跡の歴史的環境 …… 59

第２章　調査の概要 …… 62
1. 調査の経緯と経過 …… 62
2. 測量軸の設定 …… 62
3. 層序 …… 64

第３章　検出遺構出土遺物 …… 68
1. 第１面の遺構・遺物 …… 68
2. 第２面の遺構・遺物 …… 76
3. 第３面の遺構・遺物 …… 81
4. 第４面の遺構・遺物 …… 84
5. 第４面下のトレンチ調査 …… 87

第４章　まとめ …… 94

挿 図 目 次

図１　調査地点と周辺遺跡 …… 60
図２　測量基準点設定図 …… 63
図３　測量軸配置図 …… 64
図４　調査区壁土層堆積図 …… 65
図５　第１・２面全測図 …… 67
図６　第１面方竪・土壙・柱穴各遺構 …… 69
図７　第１面土壙・柱穴各遺構 …… 70
図８　第１面土壙２ …… 71
図９　第１面方竪・土壙出土遺物 …… 72
図10　第１面土壙・柱穴出土遺物 …… 74
図11　第１面上出土遺物 …… 75
図12　第２面土壙・溝・井戸各遺構 …… 77
図13　第２面柱穴 …… 78
図14　第２面各遺構・第１面下～第２面上出土遺物 … 79
図15　第３・４面全測図 …… 80
図16　第３面方竪・溝・柱穴各遺構 …… 82
図17　第３面各遺構・第２面下～第３面上出土遺物 … 83
図18　第４面土壙・溝各遺構 …… 85
図19　第４面溝・第３面下～第４面上出土遺物 …… 86
図20　第４面トレンチ …… 87
図21　トレンチ出土遺物 …… 87

表 目 次

表１　遺物観察表（1） …… 89
表２　遺物観察表（2） …… 90
表３　遺物観察表（3） …… 91
表４　遺物観察表（4） …… 92
表５　遺物観察表（5） …… 93
表６　遺物観察表（6） …… 94

図 版 目 次

図版1　a. 第1面全景（南／北から）…… 96
図版2　a. 方竪1（東から）…… 97
　　b. 方竪2（西から）…… 97
　　c. 土壙1・2（東から）…… 97
　　d. 土壙1遺物出土状況（西から）…… 97
　　e. 土壙2（据甕）・完掘状況（東から）…… 97
図版3　a. 第2面全景（南／北から）…… 98
図版4　a. 井戸1（西から）…… 99
　　b. 井戸1土層堆積（南西から）…… 99
　　c. 土壙1・P1（東から）…… 99
　　d. 土壙2（東から）…… 99
　　e. P5（東から）…… 99
　　f. P9（東から）…… 99
図版5　a. 溝1a（東／西／北から）…… 100
　　溝1a土層堆積（西から）…… 100
　　溝1a緑釉盤出土状況（北西から）…… 100
　　溝1a内かわらけ出土状況（東から）…… 100
図版6　a. 第3面全景（南から）…… 101
　　b. 方竪2（南から）…… 101
　　c. 溝1b（東から）…… 101
　　d. 溝1b（西から）…… 101
　　e. 溝1b土層堆積（西から）…… 101
図版7　a. 第4面全景（南／北から）…… 102
図版8　a. 溝1c（西から）…… 103
　　b. 溝1c（東から）…… 103
　　c. 溝1c（北から）…… 103
　　d. 溝1c土層堆積（北西から）…… 103
　　e. 溝1c底遺物出土状況（東／北から）…… 103
　　f. 溝1c肩 獣骨出土状況（南から）…… 103
図版9　a. 第4面下トレンチ（北から）…… 104
　　b. 調査区北壁土層堆積 …… 104
　　c. 調査区東壁土層堆積 …… 104
　　d. 調査区東壁土層堆積 …… 104
　　e. 作業風景 …… 104
図版10　a. 第1面 建物・土壙・柱穴 …… 105
　　b. 1面上 …… 105
図版11　a. 第2面土壙・溝・井戸・柱穴・2面上 …… 106
　　b. 第3面建物・溝・柱穴・3面上 …… 106
　　c. 第4面溝・4面上 …… 106
　　d. 4面下トレンチ …… 106

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

本遺跡は、市内中心部の南東で材木座海岸近くにあたり、逗子市にも隣接した場所で五所神社参道の中程南側に位置した鎌倉市材木座二丁目294番３外に所在する。この地一帯は遺跡名の由来ともなったようにかつて能蔵寺の旧境内であったとの伝承があり、旧地番ではあるが材木座字能蔵寺としてその名を残している。

ところで鶴岡八幡宮東南の宝戒寺前から海岸へ向かう道が小町大路であるが大町大路と交叉する大町四つ角（米町辻か）あたりは魚町や米町などの地名を残しており、鎌倉時代には繁華街の中心的な場所であったような人々の往き交う賑やかな商業地域が展開していたことは明らかであろう。さらに海岸へ延びていくこの道は当地域付近で何と言われていたかは解らないが、おそらく和賀江津まで通じ、海上輸送された物資が往来していたと想像される。またこの道沿いから遺跡周辺には、日蓮宗の長勝寺・妙長寺・実相寺、浄土念仏宗の来迎寺・向福寺（時宗）、九品寺・光明寺（浄土宗）などの寺院が多く点在しているが、このことはここに暮らしていた人々を布教対象にした信仰活動の舞台、一種の宗教的な空間が作り出されていたことは明らかであろう。

今回の調査でも明らかになったように遺跡は海成砂層上に立地しており、材木座海岸の形成された砂丘の一角を占めている。鎌倉旧市街の沖積層は約１万年前から始まった縄文海進によって形成された古鎌倉湾に堆積した砂や泥からなっており、その厚さは湾中央部に当たる鎌倉駅付近で15～20mにも及んでいる。また古鎌倉湾は波による浸食を強く受けて海食波食台（岩礁海岸も含む）が形成されている。その痕跡は、市街地の東南部が大町四つ角（米町辻か）を少し南に進んだ路沿い西側の米町遺跡（田代・原1990）や、中央部が鎌倉駅西方の鎌倉市役所周辺にあたる今小路西遺跡内の２ヶ所の調査地点、西南部の長谷に位置した甘縄神社遺跡群（木村 1995）などからは、それぞれ海食波食台が検出されており（河野 1990、原 2006）、穿孔貝類・オオヘビガイなどの岩礁性貝類の分布が確認されている。その後、縄文時代晩期頃（2500年前）には海退による離水で海面が低下していき、現地形に近い状況になったと考えられている（松島 1984・1999ab・2005、上本 2000）。

現代の海外線は西の稲瀬川、中央の滑川、東の豆腐川の各河口をほぼ直線で結ぶラインが由比ヶ浜と材木座海岸となっている。ところが近世以前の海岸線は、発掘調査データや地質ボーリング調査の蓄積によって現在よりも100m以上北側に入り込んでいたと推定されている。特に最も大きく異なる点は滑利川の河口左岸あたりの氾濫を繰り返していた地域で（材木座一・三・五丁目の西側地域）、最深部は現海岸線から北へ約500mまで達していたことが想定される（松尾 1989）。

２．遺跡の歴史的環境

調査地点は、「能蔵寺」旧跡の一角に位置しており、参道突き当たりの山裾には材木座の鎮守五所神社がある。能蔵寺に関して、宗旨・沿革などよく解っていない。

五所神社は明治41年（1908）年の乱橋・材木座合併で東鎌倉村になった折、乱橋村の三島神社・八雲神社・金比羅宮と、材木座の諏訪神社・見目神社の五社を合祀したことに始まるという。神社境内には、「弘長二年」銘の倶利迦羅明王板碑が存在している。この板碑は以前、九品寺近くの材木座公会堂付近に所在していた感応寺（廃寺）にあったと伝えられている下総型板碑（市指定文化財：黒雲母片岩製）で現在は覆屋に被われて保管されている。『新編相模風土記稿』によると、感応寺は真言宗京都三

図1　調査地点と周辺遺跡

宝院末、山号は由比山宝幢院、中興は養源、本尊は不動明王像、他に神変菩薩・理源大師像あり、境内に倶利迦羅龍王の古碑あり、と記す。この古碑はいま五所神社にある「弘長二年」銘倶利迦羅明王板碑のことであろう。なお板碑の詳細や造立に係わる歴史的な位置付けなどについては、馬淵和雄氏の興味深い論考があるのでそれを参照されたい（馬淵 1995・1998）。

さらに材木座には、古くから鎌倉の代表的な古謡「天王謡」が唄い伝えられている。この唄は材木座の夏祭り、すなわち《天王祭り》の神輿御渡の際に唄われるもので、鎌倉市主催で毎年秋に開催される芸能大会においても今なお愛唱されている。この唄の成立時期は不詳であるが、歌詞の内容をみると、早朝鳥羽を出航すると西風に乗って舟足早く、遠州灘から駿河湾沖を過ぎ晩には早くも伊豆下田（現在の和歌ノ浦か）に入り、鎌倉の飯島港（和賀江）までの海上航路の様子が鮮やかに示されている。唄い伝えられた光景から推測して、その起源は中世まで遡るものであろう。以下、参考資料として板碑の銘文と、天王謡の歌詞を記しておくことにする。

◎五所神社蔵板碑の銘文（基部）

一見卒塔婆　永離三悪道
何況造立者　必生安楽国
弘長二年十一月廿日
右志者為……
父母二親往生……

◎天王謡の歌詞抜粋

伊勢の鳥羽から朝山まいて（アラーヨイ）
晩にゃ下田か（ヤレコレ）　わかの浦（オモシロヤ）
潮にもまれてあと一流し
筏のせたや　和賀の茶屋　飯島港へかかろじゃないか
……中　略……
飯島てるてる　小坪はくもる　あざの材木座に　金がふる

【引用・参考文献】

上本進二　2000　「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所
宇都洋平・原　廣志　2006　「今小路西遺跡（No.201）－御成町200番２の一部地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急 調査報告書22　平成17年度発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
川副武胤・貫　達人　1959　『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
木村美代治ほか　1995　『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書』同調査団・鎌倉市教育委員会
河野眞知郎ほか　1990　『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
田代郁夫・原　廣志　1990　「米町遺跡（No.245）－大町二丁目933番地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６　平成元年度発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
松尾宣方　1989　「中世の海岸線と浜」『よみがえる中世３－武士の都鎌倉－』石井進・大三輪龍彦編　平凡社
松島義章　1984　「鎌倉駅地下の地質について」『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会
1999　「完新世海成堆積物からみた相模湾沿岸地域の地形変動」『第四紀研究 vol.38 No.6』日本第四紀学会
2005　「貝化石が語る鎌倉市街地の縄文の海」『第15回鎌倉市遺跡調査研究発表会－講演要旨－』鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所
馬淵和雄　1995　「能蔵寺跡－材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査－」能蔵寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
なお、同上報告書の巻末には馬淵和雄「特論　浜と板碑－五所神社蔵弘長二年板碑の意味－」が所収されており、ぜひ参照してほしい。
1998　『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

第２章　調査の概要

１．調査の経緯と経過

本調査地点は鎌倉市内東南部、材木座海岸に近い逗子市よりとなる材木座四丁目にあたり、五所神社の参道脇に位置しており、発掘調査は個人専用住宅の建設に伴い実施された。平成14年11月に住宅建設に係る事前相談があり、当該の工事計画に鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、鎌倉市教育委員会で試掘調査の遺構確認を実施した。その結果、現地表下約90㎝以下には中世の遺物包含層と共に数時期の生活面の存在が明らかとなり、基礎工事で埋蔵文化財に対する損傷は避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施に際して文化財保護法に基づく届出手続きと、現地調査の開始時期や実施方法などの話し合いを経て、平成15年５月29日から調査面積45.0㎡を対象として発掘調査を行った。

現地調査は、平成15年５月29日よりまず表土を重機掘削することから開始された。調査期間中は脆い砂質土と多量の湧水に悩まされながらの調査ではあったが、鎌倉時代後半期を中心とした4時期以上の遺構面と、それに伴う遺構・遺物が多数発見された。同年７月21日までの間に各生活面の図面作成と写真撮影などの記録保存を行い無事に現地調査を終了することができた。調査経過についての詳細は、以下のように調査日誌の抜粋を記しておく。

≪日　誌　抄≫

５月28日　調査開始。調査区を設定し、重機による表土掘削。機材搬入。
　29日　事務所用の小屋設営。第１面検出に向けての荒堀り作業開始。
６月２日　市３級基準点を基に測量軸方眼杭を設定、海抜標高の原点レベルを敷地内に移動。第１面の遺構の検出作業。
　９日　方形竪穴建物・井戸・据甕土壙などを検出。
　13日　第１面の全景・個別遺構などの写真撮影と図面作成を開始。
　16日　第１面の調査終了。第２面検出に向けての荒堀り作業開始。
　20日　第２面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影と図面作成。
　21日　第３面の確認をするために調査区東・西・南壁沿いをトレンチ掘り下げ。
７月５日　第３面の調査終了。方形竪穴建物・溝などの遺構を検出。全景・個別遺構の写真撮影を図面作成。
　８日　第４面検出に向けての荒堀り作業開始。
　16日　第４面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、遺構全測図作成。
　17日　調査区中央に南北方向のトレンチ設定し、第４面下確認作業を実施。
　21日　調査区東・北壁土層堆積図作成。関係各方面に調査終了の旨を連絡、現地調査終了して機材撤収。

２．測量軸の設定

調査にあたり使用した測量軸の設定は、図３に示した国土座標の数値を用いた。まず調査地西側で五所神社社頭を南北に走る道路上に鎌倉市道路管理課が設置した市３級基準点（第Ⅸ座標系）のB035・B036・B054の３点が確認された。これを国土座標の基準として図２に示したようにB054から道路沿いの南方、五所神社の社頭で任意点のＣ点を設け、そこから敷地内の測量軸基準点にあたるＣ-１杭と

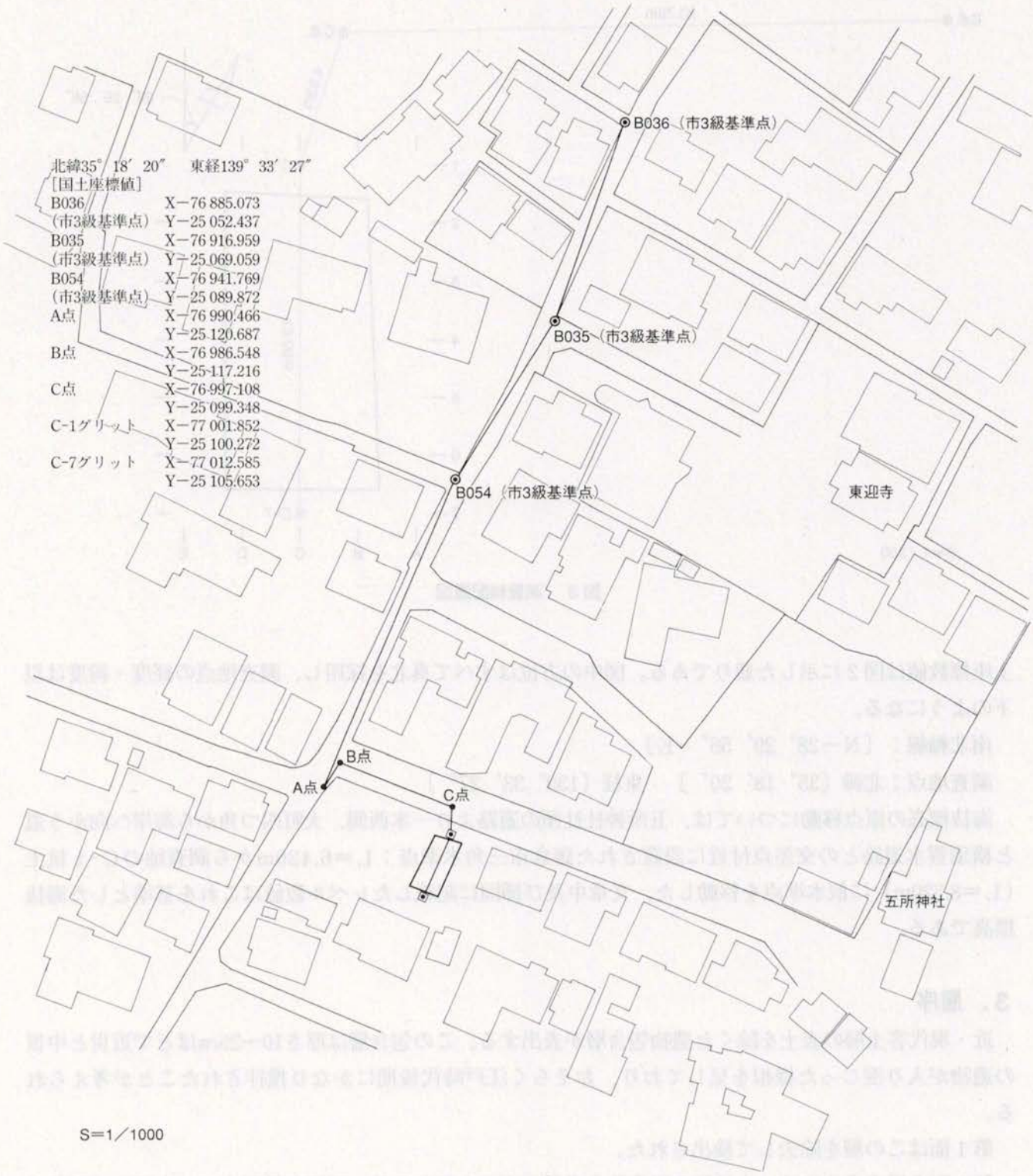


図２　測量基準点設定図

C-7 杭をそれぞれ設置した。方眼軸線は測量の便利性と予想される遺構の主軸方位を優先させるかたちで、調査区の形状に即して設置したため、国土座標計には一致していない。また調査にあたっては参道方向を便宜上の東西と認識したことをお断りしておく。

調査区外に基準点（C-1 杭）を設け、そこから東西と南北に２m間隔の軸線を配して方眼の設定を行った。東西軸線にはアルファベットを西からＡ～Ｅを、南北軸線には算用数字を北から１～７の名称を附した。なお、市３級基準点（B035・B036・B054）及び任意点のＡ～Ｃ点、C-1・C-7 杭の国

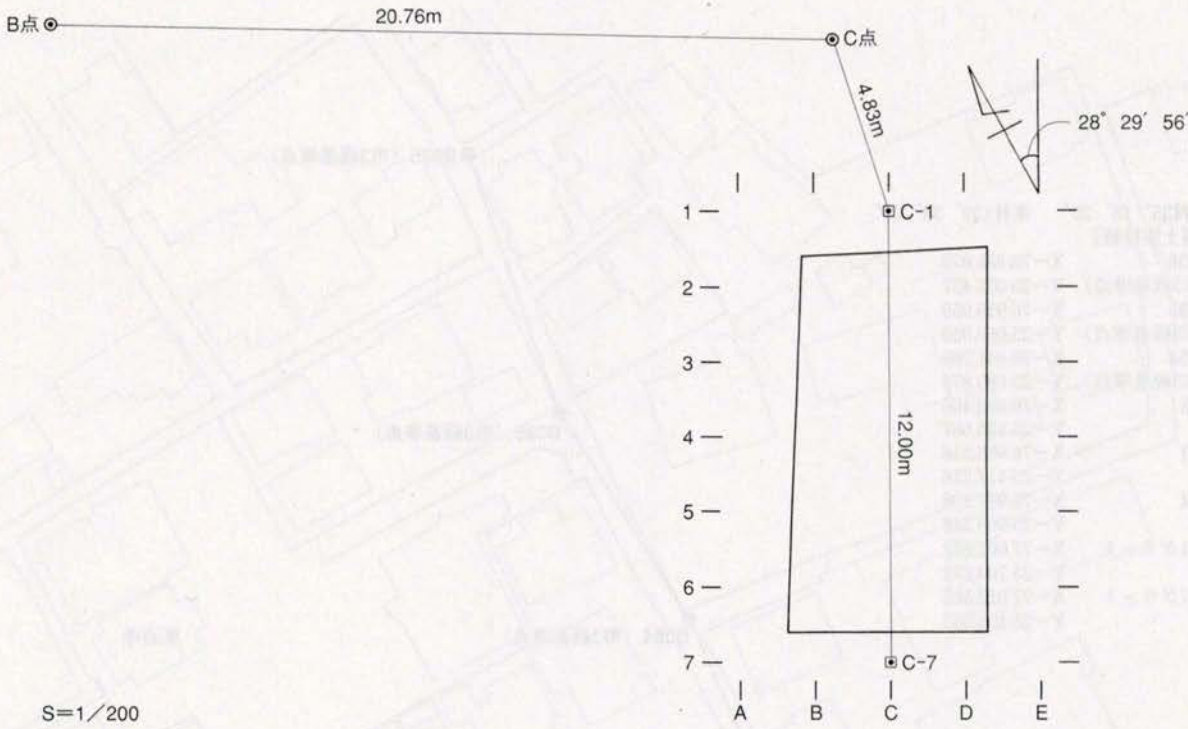


図３　測量軸配置図

土座標数値は図２に示した通りである。図中の方位はすべて真北を採用し、調査地点の経度・緯度は以下のようになる。

南北軸線：〔Ｎ－28° 29′ 56″ -Ｅ〕

調査地点：北緯〔35° 18′ 20″〕　東経〔139° 33′ 27″〕

海抜標高の原点移動については、五所神社社頭の道路より一本西側、大町四つ角から海岸へ向かう道と横須賀水道路との交差点付近に設置された鎌倉市三角水準点：Ｌ＝6.420mから調査地のＣ-１杭上（Ｌ＝8.320m）に仮水準点を移動した。文章中及び挿図に記載したレベル数値はこれを基準とした海抜標高である。

３．層序

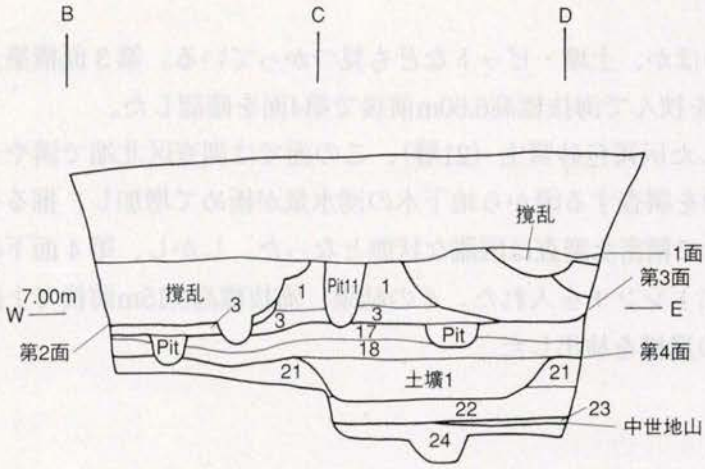
近・現代客土層の表土を除くと遺物包含層が表出する。この包含層は厚さ10～25㎝ほどで近世と中世の遺物が入り混じった様相を呈しており、おそらく江戸時代後期にかなり撹拌されたことが考えられる。

第１面はこの層を除去して検出された。

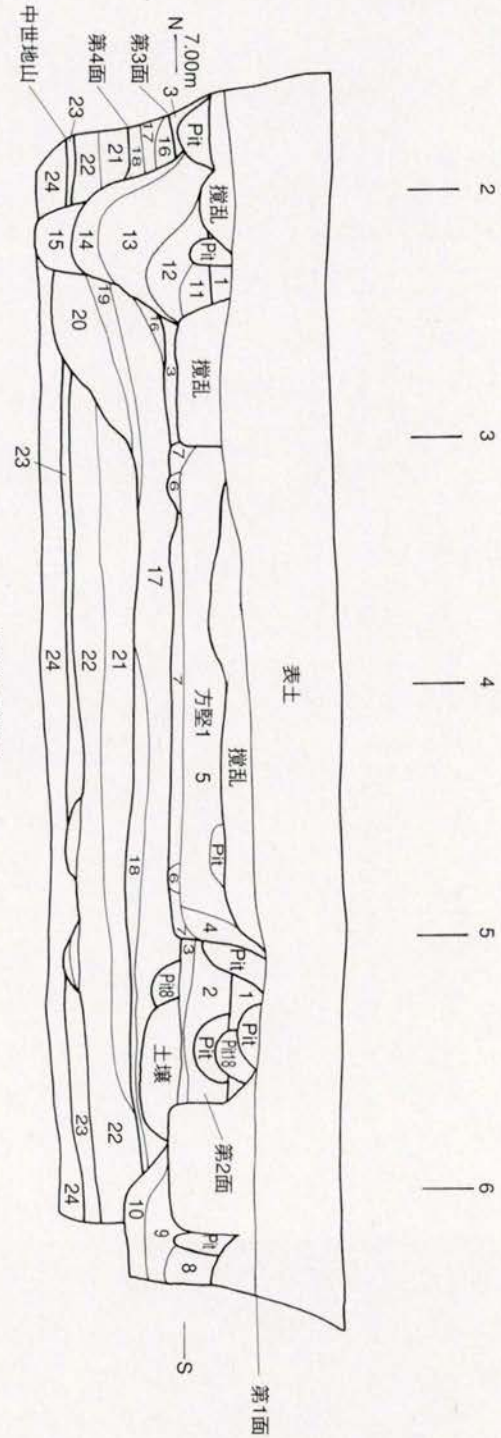
第１面を構成するのは、土丹粒や炭化物を多量に交えた締りの強い暗灰色粘質土で、上面には灰黄色土丹小塊を突き固めた版築が調査区南側を中心に薄く敷かれた状況が観察された。面上からは方形竪穴建物や土壙のほか、多数のピットが検出された。第１面の海抜標高は7.40m前後である。第２面は第１面の厚さ20～30㎝の構築土（１層）を除去すると、間層を挟まずに確認できる。

第２面は灰褐色砂質土の２層及び灰褐色弱粘質土の３層から成り、海抜標高は7.10m前後のほぼ平坦な生活面である。この面では井戸・溝のほか、土壙やピットが発見されている。

第３面の海抜標高は6.90mほどであり、大体平坦な生活面で土丹粒や炭化物を多量に混入した締りある17層の灰色粘質土により構築されている。調査区北側の面上には部分的に遺物包含層（16層）が確



▲北壁土層堆積



▲東壁土層堆積

調査区東壁・北壁土層注記

1．暗灰色粘質土	土丹粒、炭化物粒多量に含む 締まり有り、粘性有り	第1面構築土
2．灰褐色砂質土	かわらけ片、土丹粒、炭化物粒多量に含む 締まりやや無し、粘性やや有り	第2面構築土
3．暗灰褐色粘質土	かわらけ片、土丹粒、炭化物粒多量に含む 締まり有り、粘性有り	
4．暗赤灰色砂質土	土丹粒少量含む、炭化物多量に含む、焼土 締まり無し、粘性無し、方堅覆土	
5．明黄灰色砂質土	土丹粒、炭化物粒多量に含む、貝粒少量含む 締まり無し、粘性無し、方堅覆土	
6．黄灰色粘質土	土丹粒、炭化物粒少量含む 締まり無し、粘性有り、方堅根太木の痕跡か	
7．黄灰色粘質土	土丹粒、土丹片、炭化物粒多量含む、かわらけ片少量含む 締まり無し、粘性やや有り、方堅床土	
8．黄灰色砂質土	土丹粒、炭化物粒少量含む 締まりやや無し、粘性無し	
9．灰色砂質土	土丹粒、炭化物粒、貝砂粒少量含む 締まり無し、粘性無し	
10．灰褐色砂質土	炭化物粒少量に含む、貝砂層 締まり無し、粘性無し	
11．明灰褐色粘質土	かわらけ粒、土丹粒、炭化物粒多量に含む 締まり有り、粘性有り	第2面溝1覆土
12．明茶灰色粘質土	かわらけ粒、土丹粒含む 締まり有り、粘性有り	第2面溝1覆土
13．明茶褐色粘質土	土丹粒・片多量に含む 締まり非常に有り、粘性非常に有り	第2面溝1覆土
14．灰褐色粘質土	かわらけ粒・片、土丹粒、炭化物粒多量に含む 締まり有り、粘性非常に有り	第2面溝1覆土
15．明灰褐色粘質土	かわらけ粒、土丹粒少量含む 締まり有り、粘性非常に有り	第3面溝1覆土
16．明灰色粘質土	土丹片・塊含む、締まり無し、粘性やや有り	
17．灰色粘質土	土丹粒、炭化物粒を多量に含む 締まりやや有り、粘性有り	第3面構築土
18．暗灰色砂質土	土丹粒、炭化物粒、貝砂粒多量に含む 締まり無し、粘性無し	第3面構築土
19．暗褐色粘質土	土丹粒含む、締まりやや有り、粘性やや有り	第4面溝1覆土
20．褐色砂質土	砂層、締まり無し、粘性無し	第4面構築土
21．灰褐色砂質土	貝砂粒多量に含む、炭化物少量含む 締まり無し、粘性無し	第4面構築土
22．灰色砂質土	貝砂層、締まり有り、粘性無し	
23．黒灰色砂質土	粘性非常に有り	
24．黒褐色粘質土	中世地山	

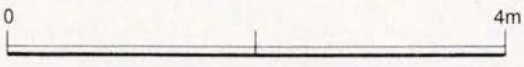
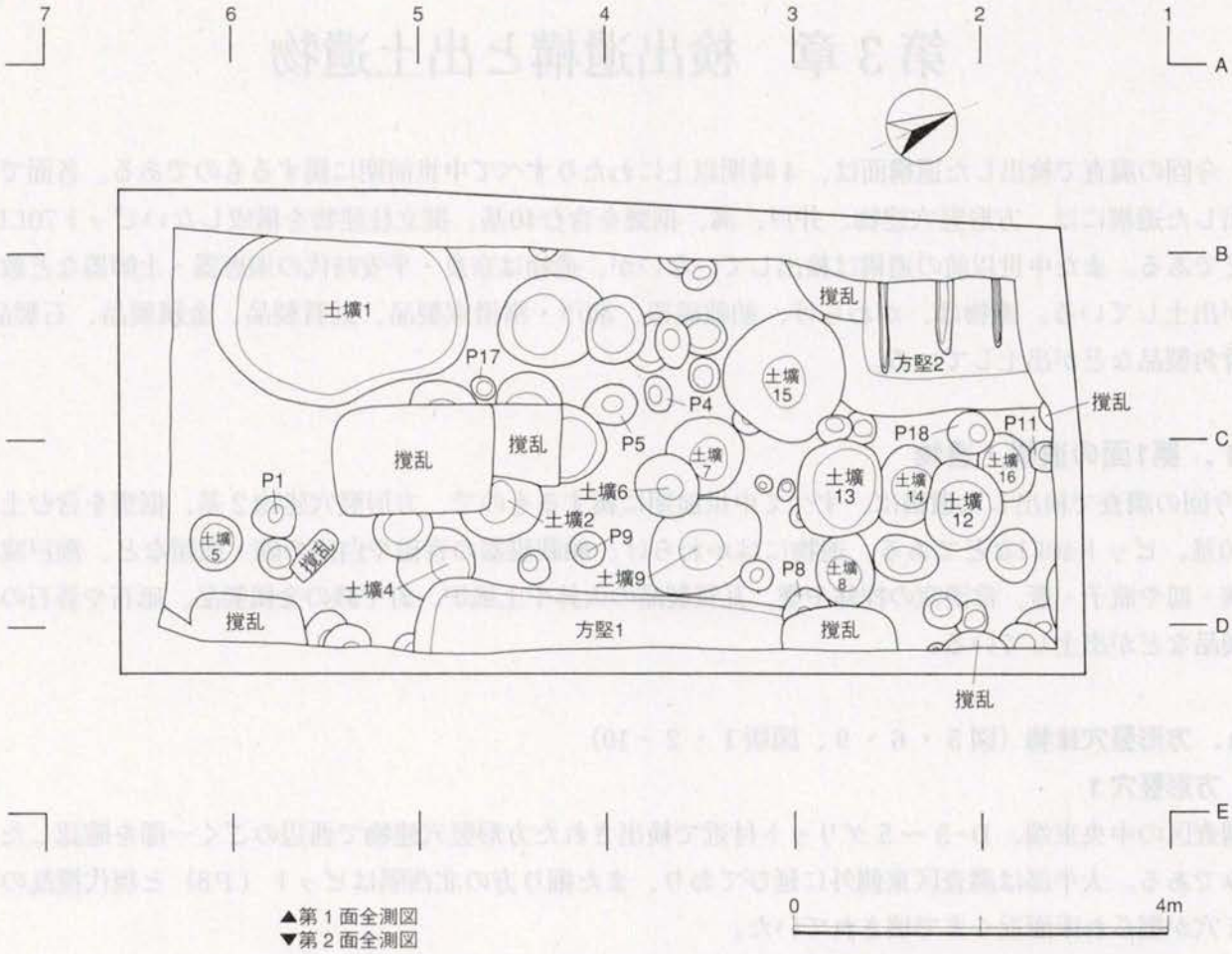


図4　調査区壁土層堆積図

認された。面上からは方形竪穴建物や溝のほか、土壙・ピットなども見つかっている。第3面構築土下で厚さ7～15cm程度の薄い間層（18層）を挟んで海抜標高6.60m前後で第4面を確認した。

第4面を構成するのは貝砂層を主体とした灰褐色砂質土（21層）、この面では調査区北端で溝や土壙などの遺構を検出したに過ぎない。この面を調査する頃から地下水の湧水量が極めて増加し、掘るそばから調査区壁や遺構の壁が崩落していくので精密な調査は困難な状態となった。しかし、第4面下の状況を確認するため、調査区Cライン沿いにトレンチを入れた。その結果、海抜標高6.15m前後で上面のほぼ平坦な中世基盤層（24層）と、若干の遺構を検出した。


7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
土壙1
P17
P4
P5
P1
土壙5
土壙4
土壙2
土壙6
土壙7
土壙9
P9
P8
土壙8
土壙13
土壙14
土壙12
土壙16
P18
P11
土壙15
方堅2
方堅1
撹乱
▲第１面全測図
▼第２面全測図
0
4m

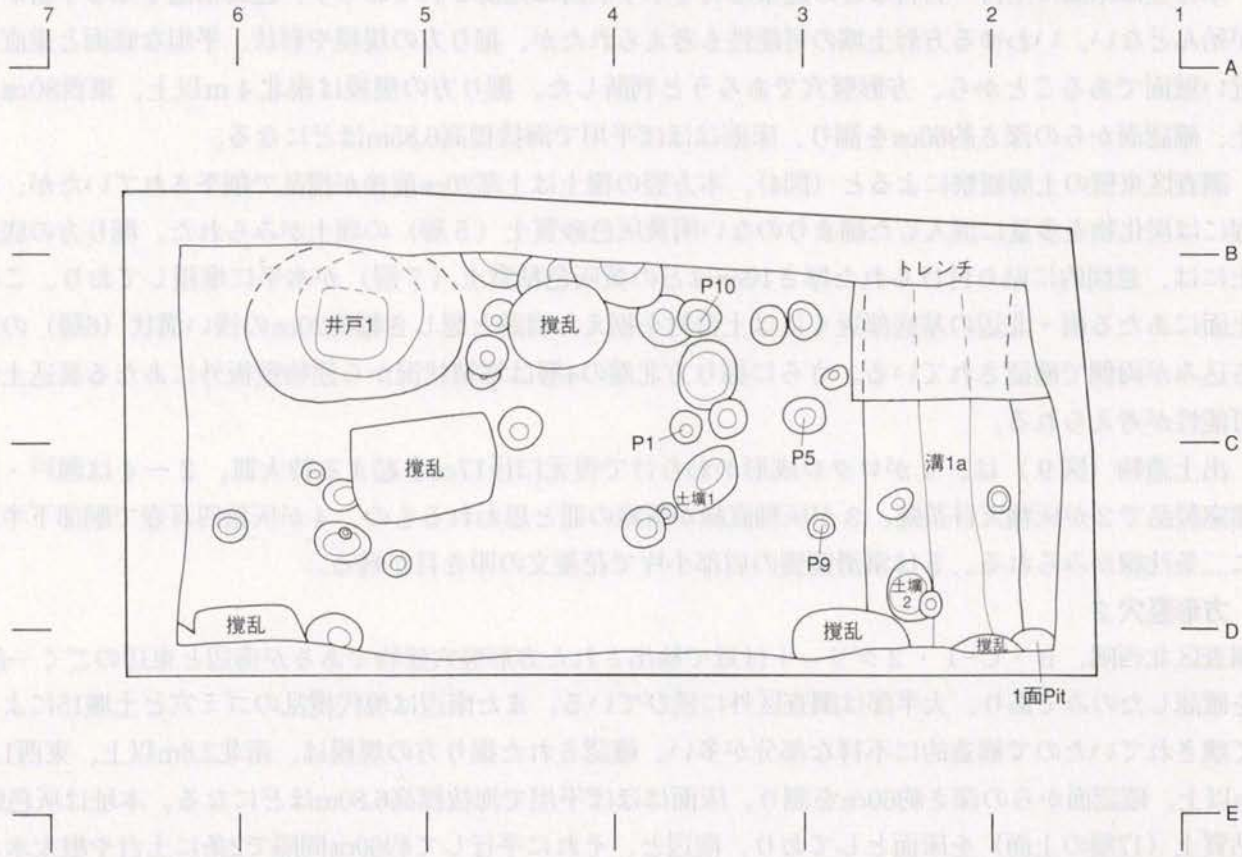

7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
井戸1
撹乱
P10
P1
P5
P9
土壙1
土壙2
溝1a
トレンチ
1面Pit

図５　第１・２面全測図

第３章　検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構面は、４時期以上にわたりすべて中世前期に属するものである。各面で検出した遺構には、方形竪穴建物、井戸、溝、据甕を含む40基、掘立柱建物を構成しないピット70口などである。また中世以前の遺構は検出していないが、遺物は奈良・平安時代の須恵器・土師器など数点が出土している。遺物は、かわらけ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品、骨角製品などが出土している。

１．第1面の遺構・遺物

今回の調査で検出した遺構は、すべて中世前期に属するもので、方形竪穴建物２基、据甕を含む土壙40基、ピット40口などである。遺物にはかわらけ、舶載磁器の青磁や白磁の碗・皿類など、瀬戸窯の碗・皿や瓶子・壺、常滑窯の捏鉢や甕、瓦質製品の火鉢や土風炉、釘や銭の金属製品、砥石や碁石の石製品などが出土している。

a．方形竪穴建物（図５・６・９、図版１・２・10）

方形竪穴１

調査区の中央東端、D-3～5グリット付近で検出された方形竪穴建物で西辺のごく一部を確認したのみである。大半部は調査区東側外に延びており、また掘り方の北西隅はピット（P8）と現代攪乱のゴミ穴が掘られ床面近くまで壊されていた。

本方竪は床面に土台・石材などの建築部材を示す痕跡は確認されておらず、建物構造を知る手掛かりが殆んどない。いわゆる方形土壙の可能性も考えられたが、掘り方の規模や形状、平坦な底面と垂直に近い壁面であることから、方形竪穴であろうと判断した。掘り方の規模は南北４m以上、東西80㎝以上、確認面からの深さ約60㎝を測り、床面はほぼ平坦で海抜標高6.85mほどになる。

調査区東壁の土層観察によると（図4）、本方竪の覆土は上部20㎝前後が攪乱で削平されていたが、中程には炭化物を多量に混入した締まりのない明黄灰色砂質土（５層）の埋土がみられた。堀り方の底面上には、意図的に貼り付けられた厚さ10㎝ほどの黄灰色粘質土（７層）が水平に堆積しており、この上面にあたる南・北辺の基底部近くには土台材を据えた痕跡と思しき幅約20㎝の浅い溝状（6層）の落ち込みが両側で確認されている。さらに掘り方北端の4層は堆積状況から建物壁板外にあたる裏込土の可能性が考えられる。

出土遺物（図９）は、１がロクロ成形かわらけで復元口径17㎝を超える特大皿、２～４は瀬戸・美濃窯製品で２が灰釉天目茶碗、３が灰釉直縁か折縁の皿と思われるもの、４が灰釉四耳壺で胴部下半片に二条沈線がみられる。５は常滑窯甕の肩部小片で花菱文の叩き目が残る。

方形竪穴２

調査区北西隅、B・C-1・２グリット付近で検出された方形竪穴建物であるが南辺と東辺のごく一部を確認したのみであり、大半部は調査区外に延びている。また南辺は現代攪乱のゴミ穴と土壙15によって壊されていたので構造的に不祥な部分が多い。確認された掘り方の規模は、南北2.8m以上、東西1.5m以上、確認面からの深さ約60㎝を測り、床面はほぼ平坦で海抜標高6.80mほどになる。本址は灰色弱粘質土（17層の上面）を床面としており、南辺と、それに平行して約60㎝間隔で2条に土台や根太木などを思わす建築部材の痕跡がやや黒いシミ状になって残っていた。南辺のそれは確認された長さ1m以

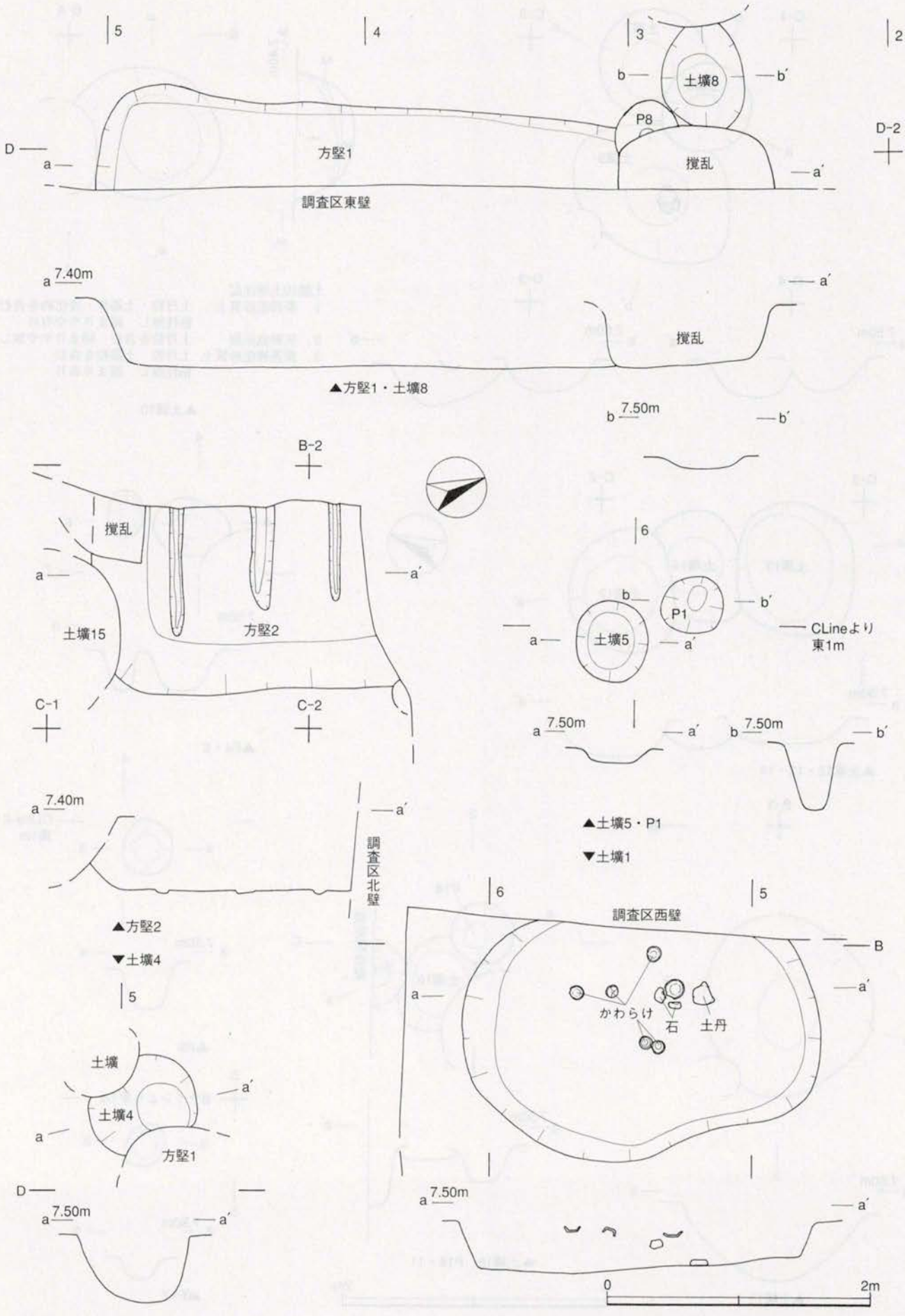


図6　第1面　方竪・土壙・柱穴各遺構

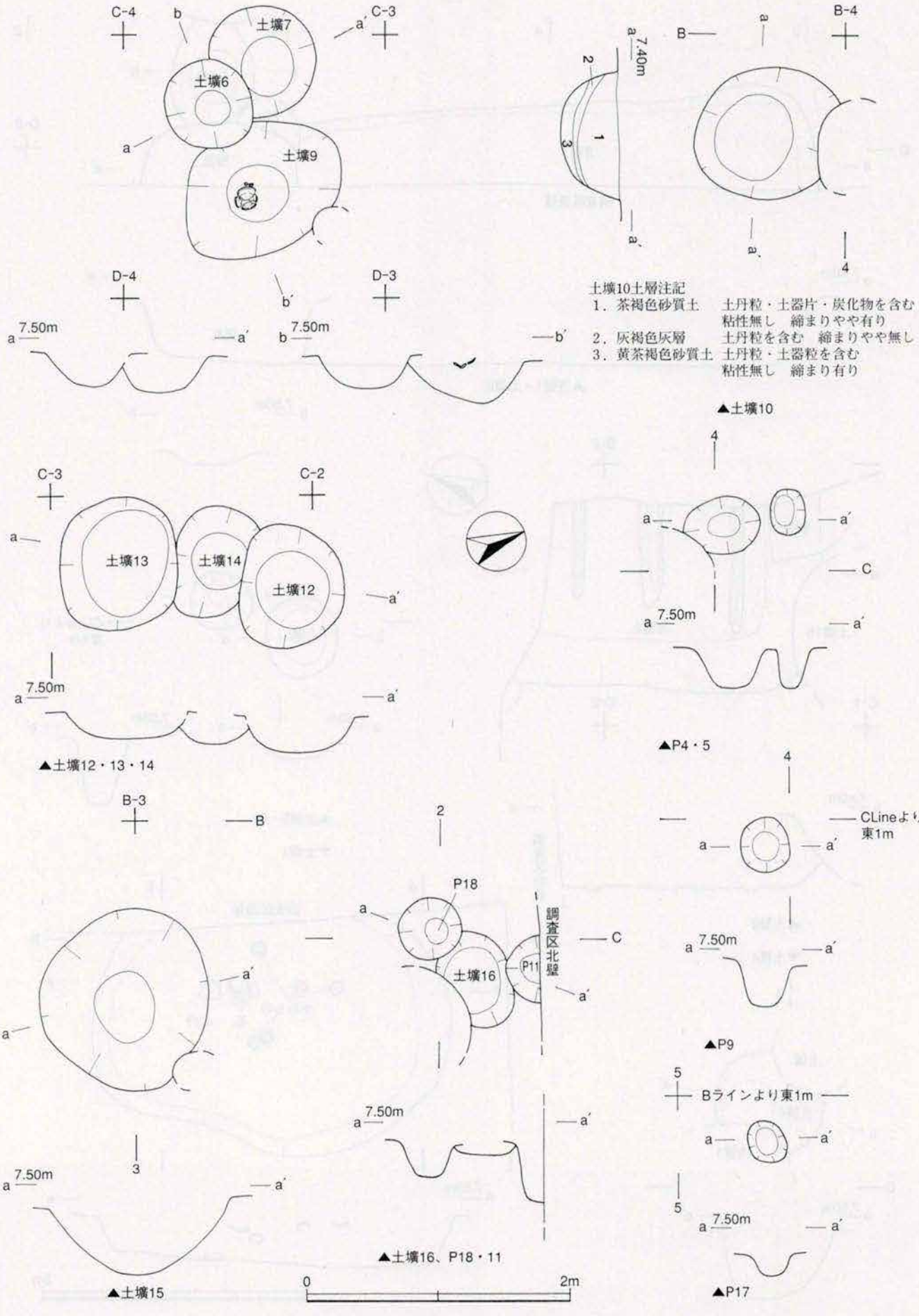


図7　第1面　土壙・柱穴各遺構

上、幅12㎝、深さ５㎝ほどの浅い溝状を呈する。北側に位置した２条も浅い溝状であるが、南辺のものよりも少し短くなる。覆土は上層が炭化物や焼土を多く含む明黄灰色砂質土、下層が炭化物・貝粒・かわらけ小片を含む黄灰色砂質土である。

出土遺物（図９）は、６がロクロ成形かわらけの小皿、７～10は瀬戸・美濃窯製品で7が鉄釉天目茶碗、８・９が灰釉平碗、10が灰釉花瓶、11が砥石で赤味のある砂岩質製である。

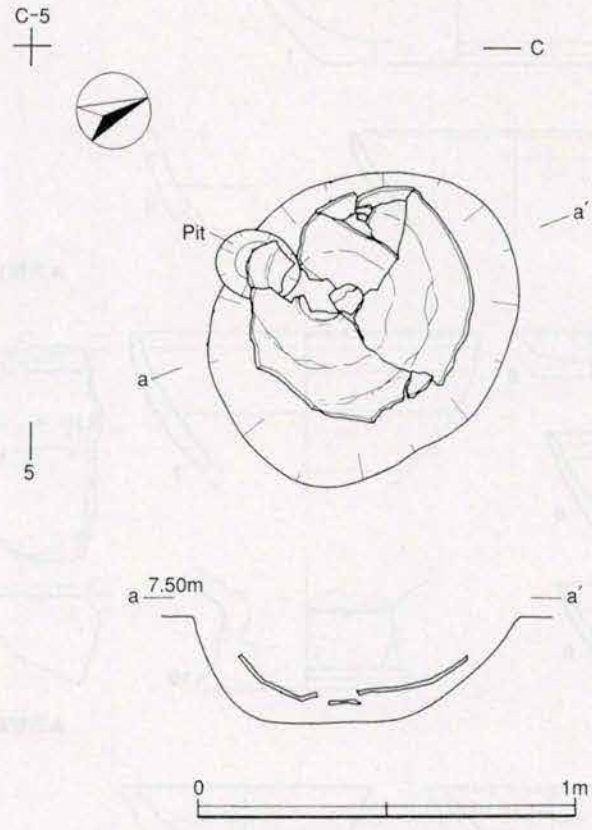


図８　第1面　土壙２

ｂ．土壙（図5～10、図版１・２・10）

土壙１

調査区南西域、A・B-4～7グリットに位置しており、西側は調査区外に拡がっている。形状は楕円形を呈し、規模は南北軸252㎝、東西軸190㎝、確認面からの深さ40㎝を測る。掘り方は断面が逆台形状を呈し、覆土は２層からなり、薄い上層は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締りのない茶褐色砂質土、下層が多量の炭化物・灰に混じってかわらけ完形品が多く出土している。

出土遺物は（図9）は、12～30がロクロ成形のかわらけで12～15が口径5.5～5.9㎝の小皿、16～26が口径9.2～10.2㎝の中皿、27～30が口径12.0～13.0㎝の大皿である。25・26・30は外底面と、一部割口にも研磨したような痕跡が認められるものである。31は白磁口兀皿、32・33が瀬戸窯製品で灰釉の天目茶碗と折縁深皿、34が常滑捏鉢Ⅱ類、35が瓦質土風呂である。

土壙２

調査区中央、C-5グリットで検出した据甕土壙である。据甕の掘り方形状は楕円形を呈し、規模は南北軸90㎝、東西軸76㎝、深さ32㎝を測り、断面は皿状を呈する。覆土は炭化物が多い暗茶褐色砂質土である。甕は常滑の大甕で上半部を欠失するが正位置に据えられた状態で検出された。内部からは、胴部破片はみられたが口縁部片は全く出土しておらず、またこの面上周辺からも関連破片は発見されていない。甕内部の観察状況から見て、水溜めなどの液体の貯蔵用容器に使用していたものと考えられる。出土遺物は（図10）、36・37がロクロ成形かわらけの小皿と大皿、38が土壙に据えられていた常滑窯大甕、39が吉備系土器である。

土壙４

土壙２の南側に近接した位置で検出された。方形竪穴建物1と土壙により堀り方の東西一部が壊されている。確認した形状は楕円形を呈し、確認規模は東西軸85㎝、南北軸65㎝以上、深さ55㎝である。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。図示可能な出土遺物はない。

土壙５

調査区南東隅に近い６ライン上の位置で検出された。形状は楕円形を呈し、規模は東西軸65㎝、南北軸55㎝、深さ15㎝で断面が浅い皿状の掘り方である。覆土は上層が炭化物の多い締まりのない暗茶褐色砂質土、下層が貝殻粒を多く混入した粗い砂が薄い堆積で認められた。

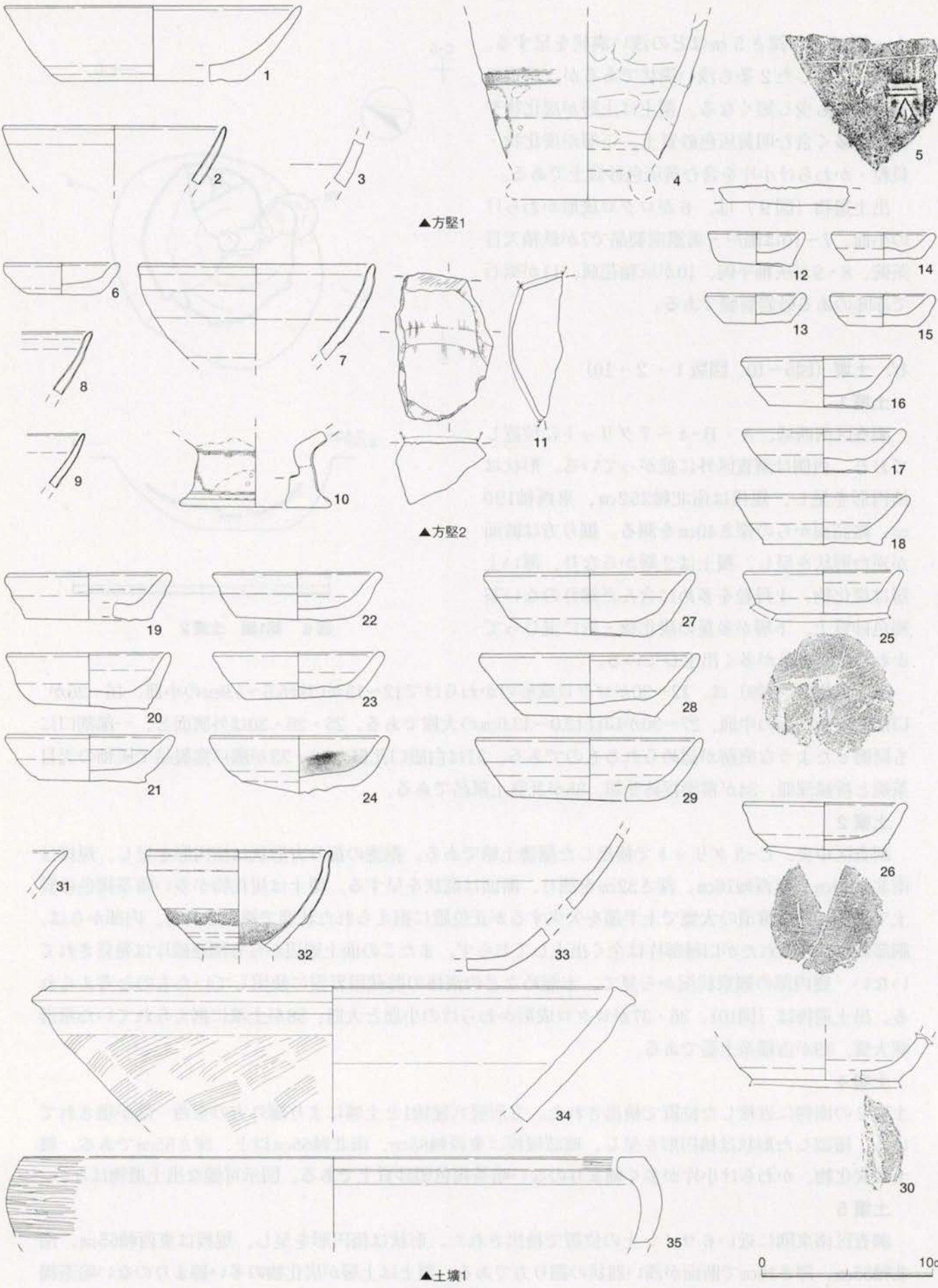


図９　第１面　方竪・土壙出土遺物

出土遺物は（図10）、40のロクロ成形かわらけ小皿である。

土壙６

調査区中央、C-4杭に近接した位置で検出された。本址は土壙７・９を壊して掘り込んでいる。平面形状はほぼ円形を呈し、径68㎝前後、深さ27㎝を測り、掘り方の断面は逆台形状を呈する。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。

出土遺物は（図10）、41・42が瀬戸窯の灰釉による縁釉小皿と碗、43が碁石で円形の偏平な自然黒石を用いている。

土壙７

土壙６よりも古い遺構であるが、土壙９との新旧関係は不明である。平面形状はほぼ円形を呈し、径68㎝前後、深さ30㎝を測り、掘り方の断面は摺鉢状を呈する。覆土は炭化物の多く締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は（図10）、44の骨製品だけである。表面は丁寧な削り加工した後に研磨したもので片面三カ所に刃物の切込みをもつ、加工途中のものか。

土壙８

土壙13より古い遺構であり、東端を現代攪乱で壊されている。形状は東西位の楕円形を呈し、規模は東西75㎝以上、南北軸63㎝、深さ15㎝程の浅い皿状を呈したものである。覆土は炭化物を含む茶褐色砂質土である。出土遺物は（図10）、45の瓦質火鉢の小片だけである。

土壙９

土壙６に掘り方西側の一部を壊されて検出した。形状は楕円形を呈し、規模は南北軸133㎝、東西軸95㎝、深さ40㎝であり、堀り方の断面は摺鉢状を呈する。覆土は上層が炭化物の多い締まりの少ない茶褐色弱砂質土、底面近くで炭化物と灰の薄い堆積が確認された。出土遺物は（図10）、46のロクロ成形のかわらけ大皿だけである。

土壙10

調査区中央西寄り、B-4杭に近接した位置で検出され、掘り方の北端は土壙によって壊されている。形状は楕円形を呈し、規模は南北軸115㎝、東西軸98㎝、深さ45㎝を測る。堀り方の断面は摺鉢状になり、覆土は厚い上層が炭化物・かわらけ片を多く含む茶褐色砂質土、下層が土丹粒・かわらけ片を混入したやや締まりのある暗茶褐色砂質土、両層に挟まれる状態で薄い灰層の堆積が認められた。出土遺物は（図10）、47の常滑窯の捏鉢Ⅰ類だけである。

土壙12

調査区北側、C-2杭に近接した位置で検出された。本址は土壙14を壊して掘り込んでいる。形状は楕円形を呈し、規模は東西軸98㎝、南北軸80㎝、深さ27㎝を測る。掘り方の断面は摺鉢状で覆土は茶褐色砂質土で炭片と灰のブロックが多量に混入する。

出土遺物は（図10）、48がロクロ成形かわらけ小皿、49が外面に菊花文スタンプと珠文を施した瓦質火鉢である。

土壙13

本址は土壙12に南隣した位置で検出され、土壙14より新しい遺構である。形状は楕円形を呈し、規模は東西軸105㎝、南北軸90㎝、深さ20㎝である。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。図示可能な出土遺物はない。

土壙14

本址は土壙12・13よりも古いものである。平面形状は楕円形を呈し、規模は東西軸85㎝、南北軸50㎝以上、深さ25㎝ほどで断面が皿状の掘り方である。覆土は炭化物の多い締まりのない茶褐色砂質土で

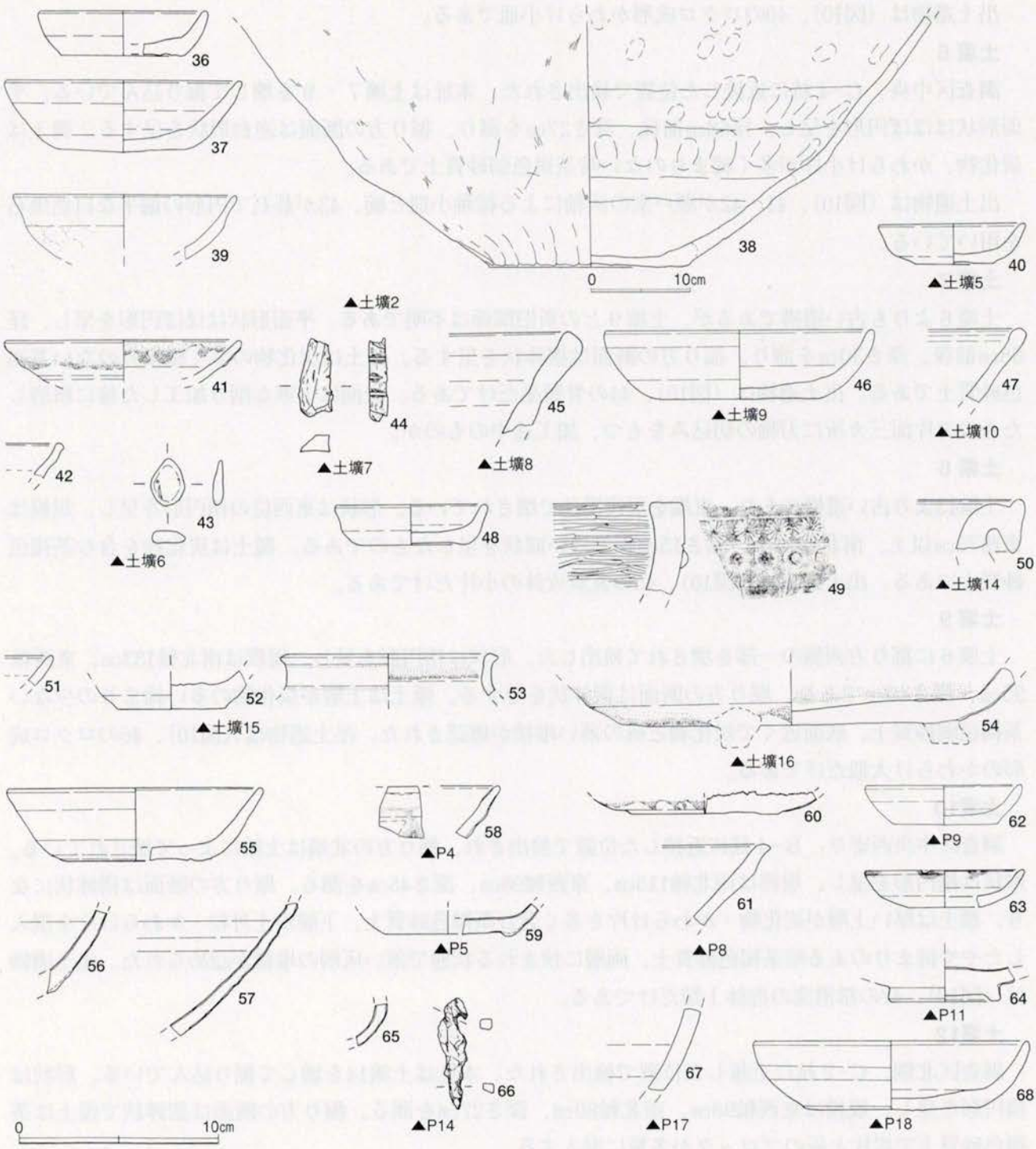


図10　第1面　土壙・ピット

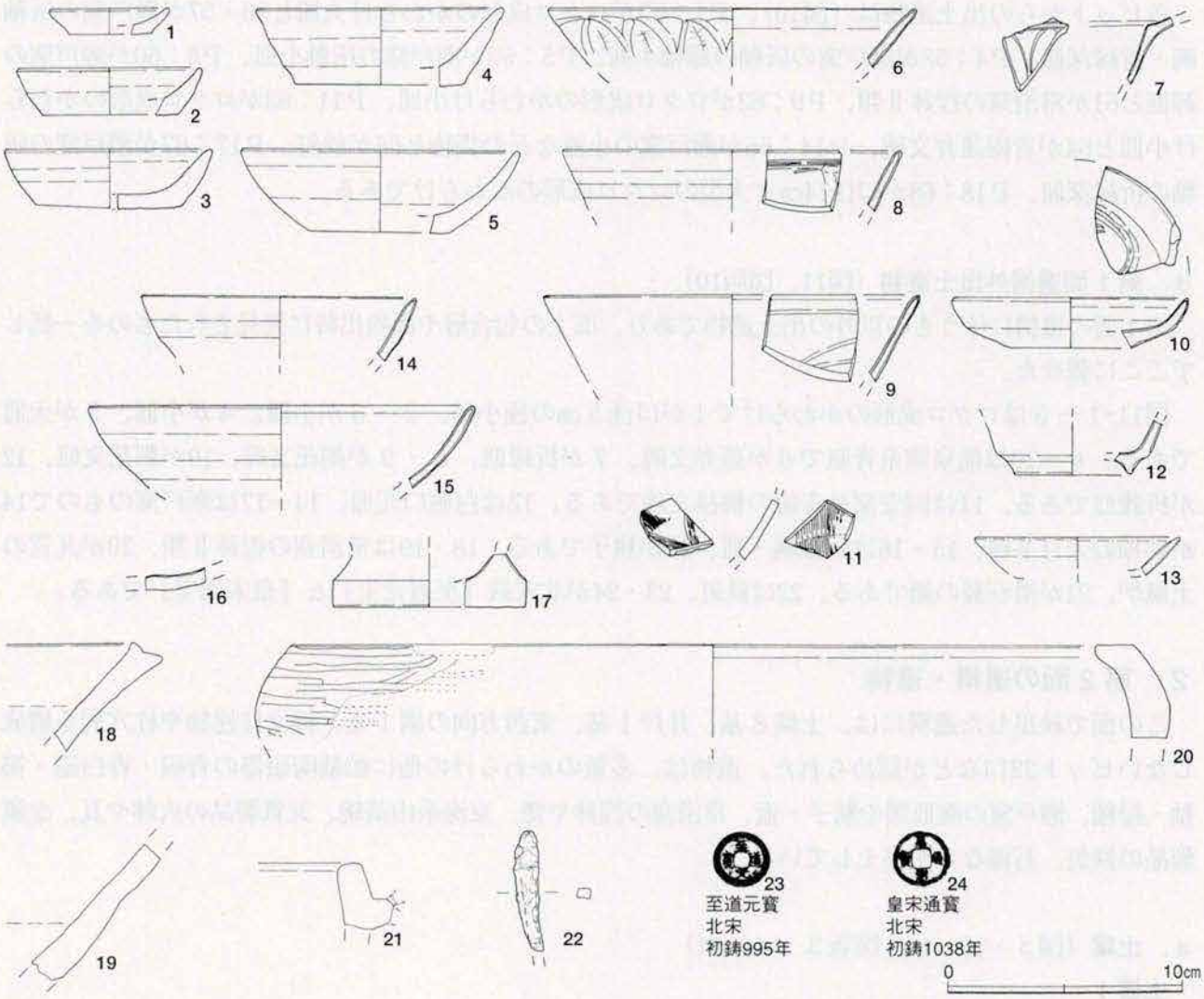


図11　第１面上出土遺物

ある。出土遺物は（図10）、50の常滑窯の甕口縁部片だけである。

土壙15

調査区北西寄り、C-3杭の位置で検出された。方形竪穴２を壊して掘り込んだ大きな土壙である。形状は楕円形を呈し、規模は東西軸140㎝、南北軸130㎝、深さ60㎝であり、断面が逆圭頭形の掘り方である。覆土の上層には頭大土丹塊が投げ込まれた様子が窺え、炭化物・灰の多く締まりのない褐色砂質土である。出土遺物は（図10）、瀬戸窯灰釉で51が縁釉小皿、52が小壺、53が香炉と思われるもの。

土壙16

調査区北端の中央寄りの位置で検出された。P18・11により堀り方の東西一部が壊されている。確認した形状は楕円形を呈し、確認規模は東西軸75cm以上、南北軸55cm以上、深さ15㎝で浅い皿状の掘り方断面である。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は（図10）、54の瀬戸窯の灰釉をハケ塗りした折縁深皿である。

ｃ．ピット（図５～７・10、図版１・10）

この面で検出されたピットは約40口であるが、これらは掘立柱建物や塀・柵などの柱穴列を構成するような配置は確認することはできなかった。掘り方は平面形状が円形または楕円形を呈し、規模は径20～45㎝、深さ20～45㎝ほどである。

各ピットからの出土遺物は（図10）、P1：55がロクロ成形のかわらけ大皿と56・57が瀬戸窯の灰釉碗・折縁深皿、P4：58が瀬戸窯の灰釉の緑釉小皿、P5：59が瀬戸窯の灰釉小皿、P8：60が瀬戸窯の卸皿と61が常滑窯の捏鉢Ⅱ類、P9：62がロクロ成形のかわらけ小皿、P11：63がロクロ成形のかわらけ小皿と64が青磁蓮弁文碗、P14：65が瀬戸窯の小壺などの袋物と66が鉄釘、P17：67が瀬戸窯の灰釉の折縁深皿、P18：68が口径14cmと大型のロクロ成形のかわらけである。

d．第1面遺構外出土遺物（図11、図版10）

第1面の遺構に伴うもの以外の出土遺物であり、面上の包含層や面検出時に発見されたものを一括してここに載せた。

図11-1～5はロクロ成形のかわらけで1が口径5cmの極小品、2・3が小皿、4が中皿、5が大皿である。6～10は龍泉窯系青磁で6が蓮弁文碗、7が折縁皿、8・9が劃花文碗、10が劃花文皿、12が折腰皿である。11は同安窯系青磁の櫛掻文碗である。13は白磁口兀皿。14～17は瀬戸窯のもので14が鉄釉の天目茶碗、15・16は灰釉碗・皿、17が瓶子である。18・19は常滑窯の捏鉢Ⅱ類、20が瓦質の土風炉、21が滑石製の鍋である。22は鉄釘、23・24が北宋銭『至道元宝』と『皇宋通宝』である。

2．第2面の遺構・遺物

この面で検出した遺構には、土壙8基、井戸1基、東西方向の溝1条、掘立柱建物や柱穴列を構成しないピット22口などが認められた。遺物は、多量のかわらけの他に舶載陶磁器の青磁・青白磁・褐釉・緑釉、瀬戸窯の碗皿類や瓶子・壺、常滑窯の捏鉢や甕、東海系山茶碗、瓦質製品の火鉢や瓦、金属製品の鉄釘、石鍋などが出土している。

a．土壙（図5・12・14、図版3・4・11）

土壙1

調査区中央、B-4杭に北接した位置で検出した。平面形状は楕円形を呈し、規模は南北軸85cm、東西軸55cm、深さ35cmを測る。掘り方の断面は擂鉢状であり、覆土は炭化物を多く含んだ暗褐色砂質土である。遺物は図14-1の鉄釘が出土しただけである。

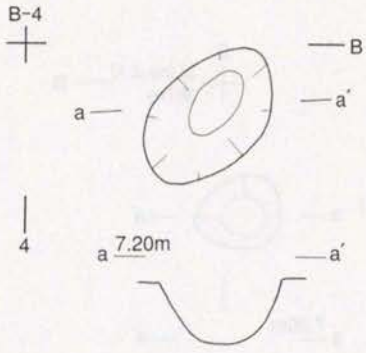
土壙2

調査区北東域、D-2杭の西隣に位置しており、溝1aを壊して掘り込んでいる。平面形状は楕円形を呈し、規模は東西軸65cm、南北軸50cm、深さ15cmで皿状の断面を有する。覆土は炭化物・貝殻粒を含む茶褐色砂質土である。土壙内からは長さ40cmほどの獣骨がみられ、その大きさからみて馬か牛の大腿骨と考えられる。

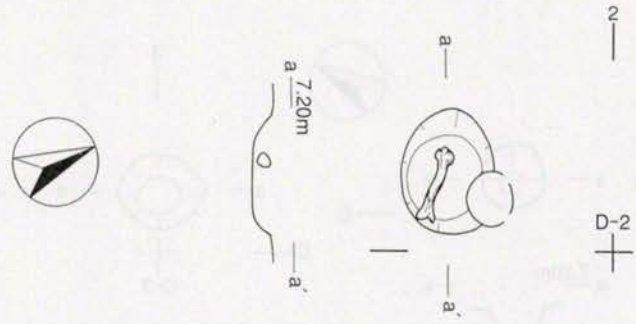
b．井戸（図5・12・14、図版3・4・11）

調査区南西域、B-5・6グリットの位置で検出され、遺構の西側は調査区外に拡がっている。上部は第1面の土壙1に壊されている。

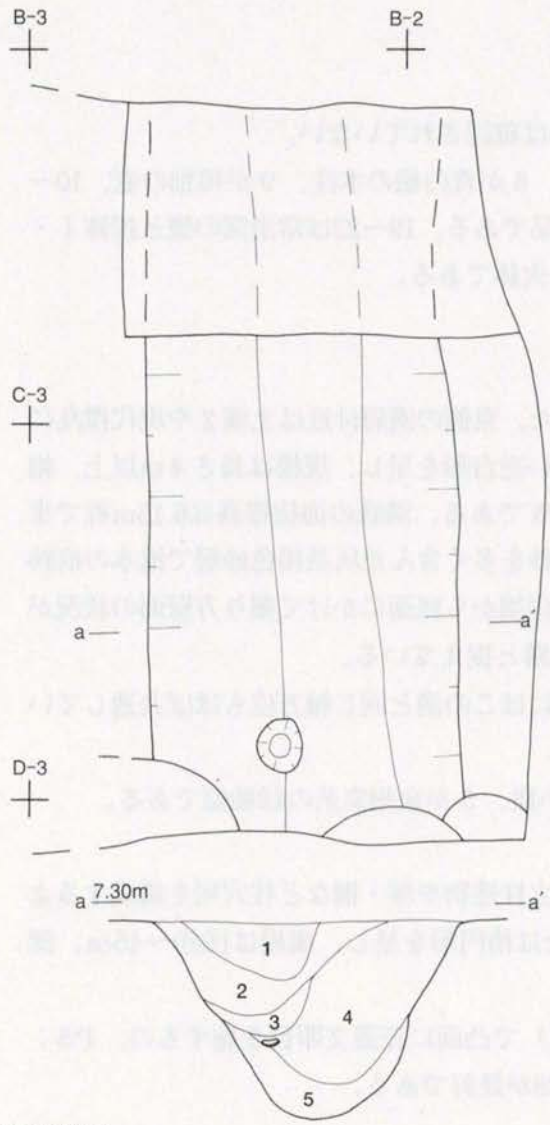
掘り方は規模が東西2.72m、南北1.65m以上、不整方形の平面形を呈すると思われる。調査区壁際で検出されて湧水による崩落の危険があると判断されたので完掘には至っていない。従って、確認できた深さは1.65mであるが、ボーリング棒の探査によると井戸底面まではさらに65cmほどの深さを推定することができ、井戸底の海抜標高は5.0m前後と考えられる。遺構の覆土は最上部に焼土（1層）、その下に炭化物ブロックの多い灰褐色砂質土（2・3層）、さらに4層の褐色砂質土を挟んで褐鉄分の多く含



▲土壙1



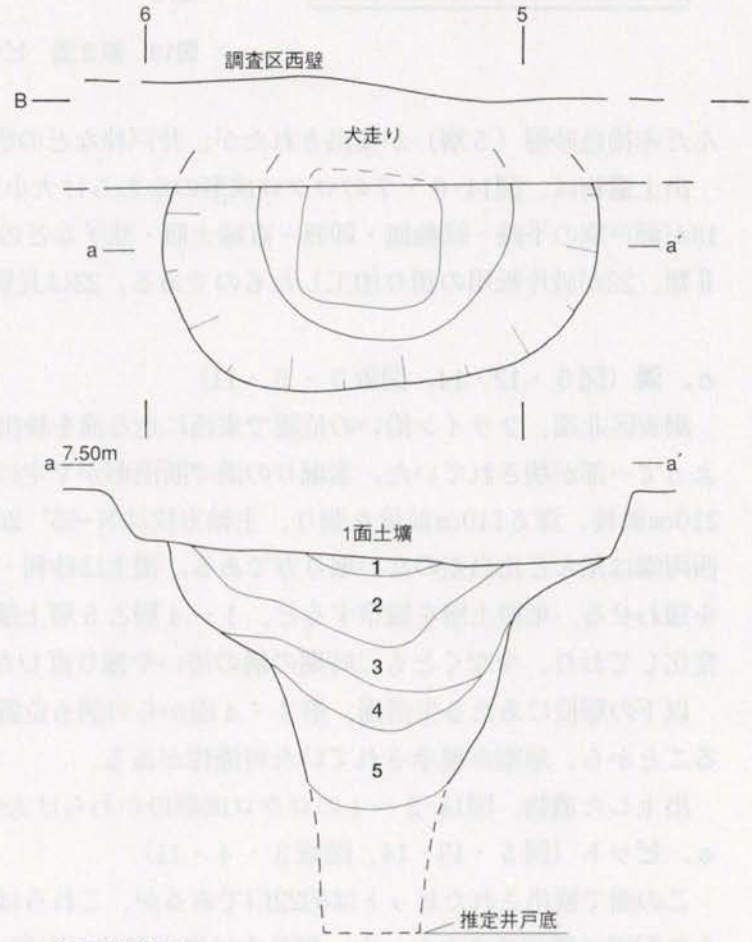
▲土壙2



溝1土層注記

1．暗灰褐色粘質土　0.1～2.5㎝土丹粒、かわらけ片、炭化物を多く含む
　　粘性有り、締まり有り
2．明橙灰色粘質土　0.1～4.0㎝土丹粒を多く含む
　　粘性有り、締まり無し
3．明灰褐色粘質土　挙大土丹を多く含む
　　粘性有り、締まり有り
4．明黄灰色粘質土　2.0㎝～挙大土丹を多く含む
　　粘性有り、締まり有り
5．灰色粘質土　土丹粒、炭化物、土器片を多く含む
　　非常に粘性有り、非常に締まり有り

▲溝1a



井戸1土層注記

1．焼土
2．明灰褐色砂質土　貝砂混じり、かわらけ片、土丹粒、炭化物多量に含む
　　締まり無し
3．灰褐色砂質土　炭化物ブロック混入、かわらけ片・粒含む
4．褐色砂質土　かわらけ片、土丹粒、炭化物少量含む
　　締まり有り、粘性やや有り
5．赤褐色砂層　かわらけ片・粒・木片含む

▲井戸1

0　2m

図12　第２面　土壙・井戸・溝各遺構

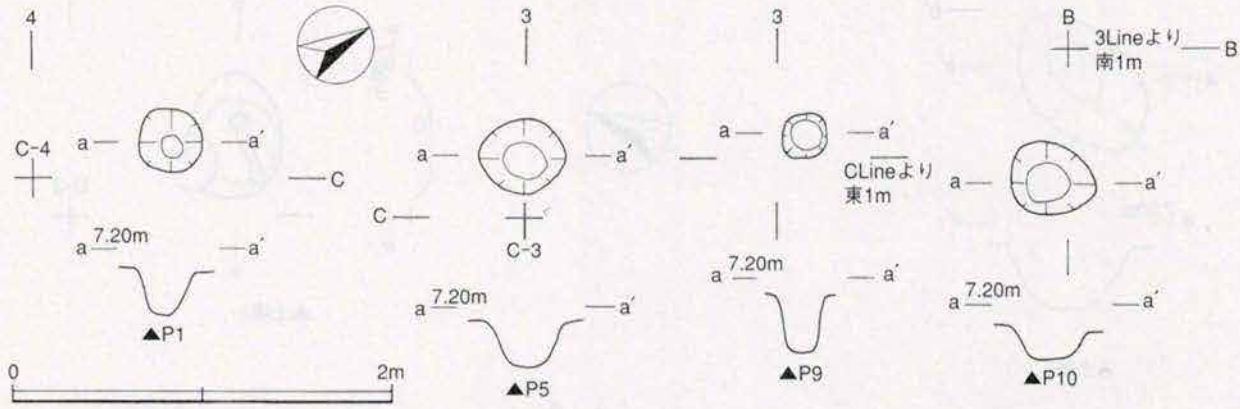


図13　第２面　ピット

んだ赤褐色砂層（５層）が検出されたが、井戸枠などの痕跡は確認されていない。

出土遺物は、図14-６・７のロクロ成形のかわらけ大小皿、８が青白磁の水注、９が褐釉の壺、10～18が瀬戸窯の平碗・緑釉皿・卸皿・直縁大皿・瓶子などの製品である。19～22は常滑窯の甕と捏鉢Ⅰ・Ⅱ類、22が破片転用の摺り加工したものである。23は瓦質の火鉢である。

c．溝（図５・12・14、図版３・５・11）

調査区北端、２ライン沿いの位置で東西に走る溝を検出した。東側の溝肩付近は土壙２や現代攪乱によって一部が壊されていた。素堀りの溝で断面形がＶ字に近い逆台形を呈し、規模は長さ４m以上、幅210㎝前後、深さ110㎝前後を測り、主軸方位はＮ-65° 20′-Ｗである。溝底の海抜標高は6.15m程で東西両端は殆んど比高差のない堀り方である。覆土は砂利・粗砂を多く含んだ灰茶褐色砂層で流水の痕跡を窺わせる。堆積土層を観察すると、１～４層と５層上部の両端から底面にかけて掘り方壁面の状況が変化しており、少なくとも二時期の溝の浚いや掘り直した痕跡と捉えている。

以下の層位にあたる生活面、第３・４面からの溝も位置的にはこの溝と同じ軸方位もほぼ共通していることから、地割が継承されていた可能性がある。

出土した遺物、図14-２～４のロクロ成形のかわらけ大中小皿、５が泉州窯系の緑釉盤である。

c．ピット（図５・13・14、図版３・４・11）

この面で検出されたピットは約22口であるが、これらは掘立柱建物や塀・柵など柱穴列を構成するような配置は確認できなかった。掘り方は平面形状が円形または楕円形を呈し、規模は径20～45㎝、深さ20～45㎝ほどである。

各ピットからの出土遺物は（図14）、Ｐ1：24が女瓦（平瓦）で凸面に花菱文叩目を施すもの。Ｐ5：25が鉄釘、Ｐ9：26が瀬戸窯の灰釉の縁釉小皿、Ｐ10：27・28が鉄釘である。

d．第1面下～第２面遺構外出土遺物（図14、図版11）

第1面構築土中から第２面上までの遺構に伴わない出土遺物を一括してここに載せた。

図14-29～33はロクロ成形のかわらけで29が口径５㎝強の極小品、30・31が小皿、32・33が大皿である。34は龍泉窯系青磁で壺や瓶などの袋物、35～37は瀬戸窯のもので35が鉄釉の天目茶碗、36は灰釉の縁釉小皿、37が卸皿である。38は常滑窯の捏鉢Ⅱ類、39が滑石製の羽釜形鍋である。

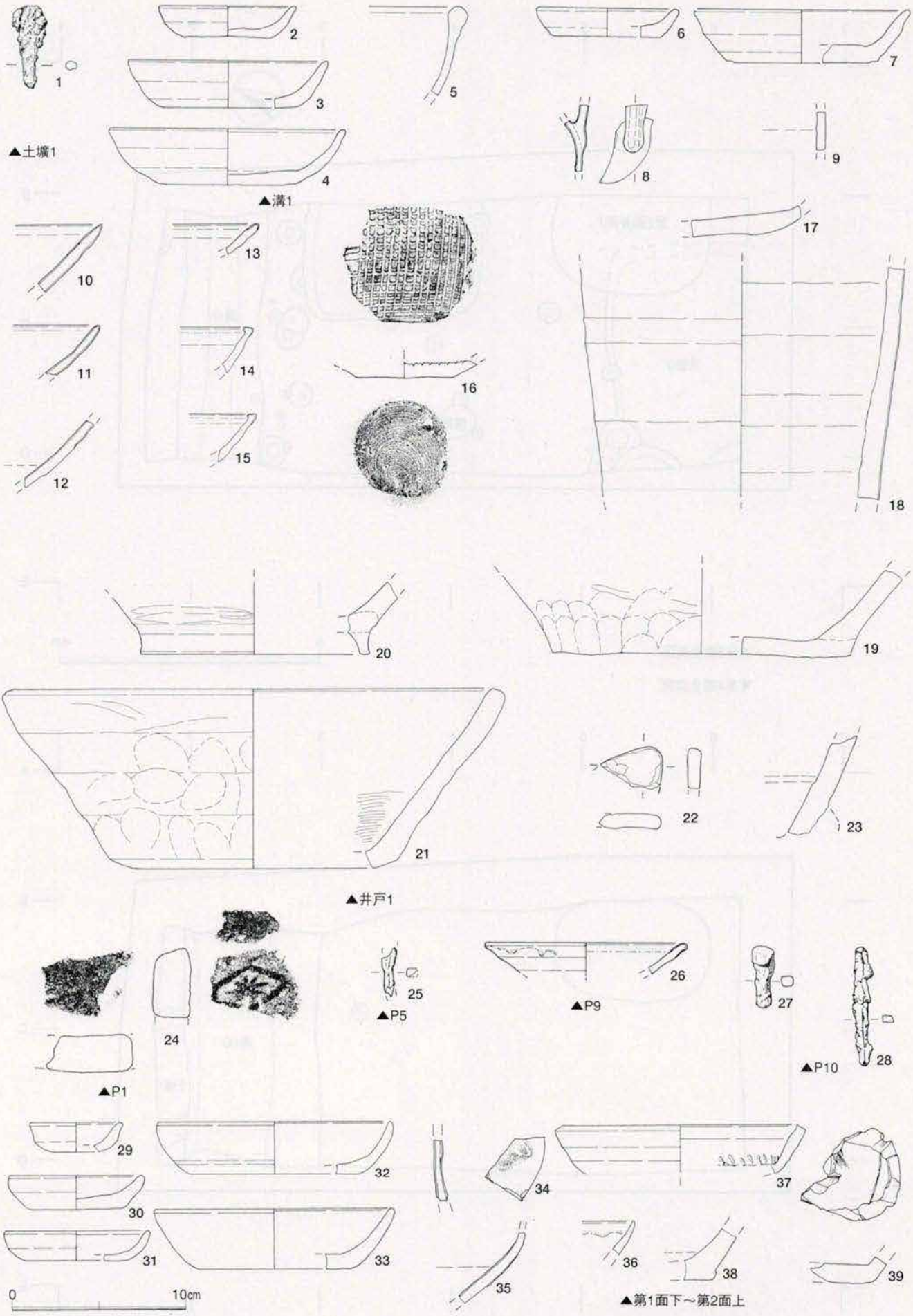
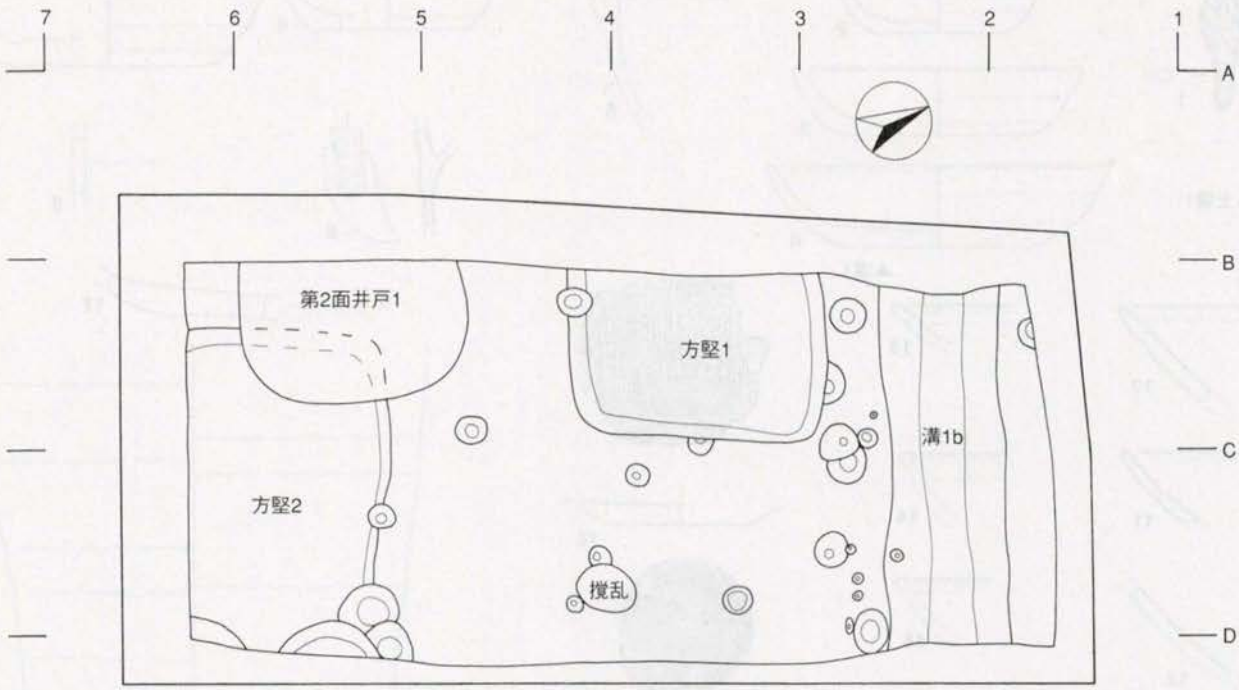


図14　第２面各遺構・第１面下～第２面上出土遺物



▲第3面全測図

▼第4面全測図

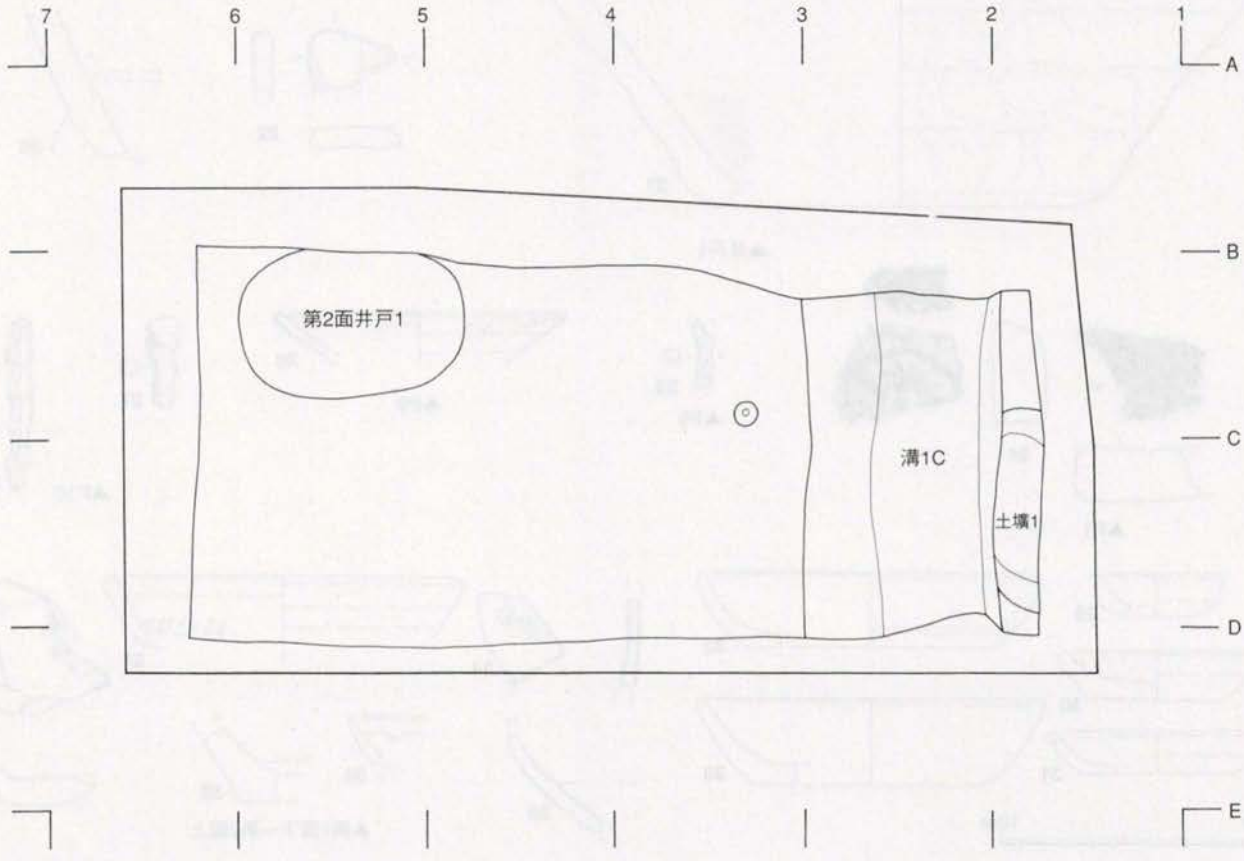


図15　第３・４面全測図

3．第３面の遺構・遺物

この面で検出した遺構は、方形竪穴建物２基、土壙１基、溝１条、ピット27口などである。遺物にはかわらけ、舶載磁器の青磁・白磁・青白磁の碗や合子、瀬戸窯の碗・壺、常滑窯の捏鉢や甕、東海系の山茶碗、土器類の火鉢や吉備系土器、砥石の石製品などの中世前期の遺物に伴って中世以前の土師器が出土している。

a．方形竪穴建物（図15・16・17、図版６・11）

方形竪穴１

調査区中央西端、B-2～5グリット付近で検出された方形竪穴建物である。大半部は西側の調査区外に延びているため、詳細は明らかではない。

本方形竪穴の床面には土台・根太木などの建築構造を推定させる部材は遺存しておらず、また腐蝕や抜取り等のシミ状の痕跡も確認されていない。いわゆる方形土壙の可能性もあるが、掘り方の形状や壁面の様子、第１面でも検出されていることから方形竪穴であろうと判断した。掘り方の規模は南北2.7m、東西1.7m以上、深さ約25㎝を測り、床面はほぼ平坦で海抜標高6.65m前後である。確認面からの深さが浅い掘り方なので後世に削平を受けているのかも知れない。

覆土は上層が炭化物やかわらけ小片を多量に混入した褐色砂質土、下層が炭化物を多量に含む暗褐色砂質土である。

図示可能な出土遺物は、図17-１の瀬戸窯の灰釉四耳壺だけである。

方形竪穴２

調査区南端付近で検出された方形竪穴建物と考えられるものである。南辺と東辺は調査区外に拡がっており、また西辺は第２面井戸により攪乱され、東壁側は土壙とピットにより壊されているので構造的には不詳な部分が多い。確認した堀り方の規模は、東西3.3m以上、南北2.15m、確認面からの深さ約20㎝を測り、床面はほぼ平坦で海抜標高6.70mほどになる。本址も土台や根太木などを思わす建築部材の痕跡は残っていない。覆土は上層が締まりのない黄褐色砂質土、下層が炭化物と黒褐色粘質土ブロックを含む茶褐色砂質土である。

出土遺物は、図17-２が龍泉窯系青磁の櫛掻・劃花文碗、３・４が山茶碗の南部系と東濃系のものである。

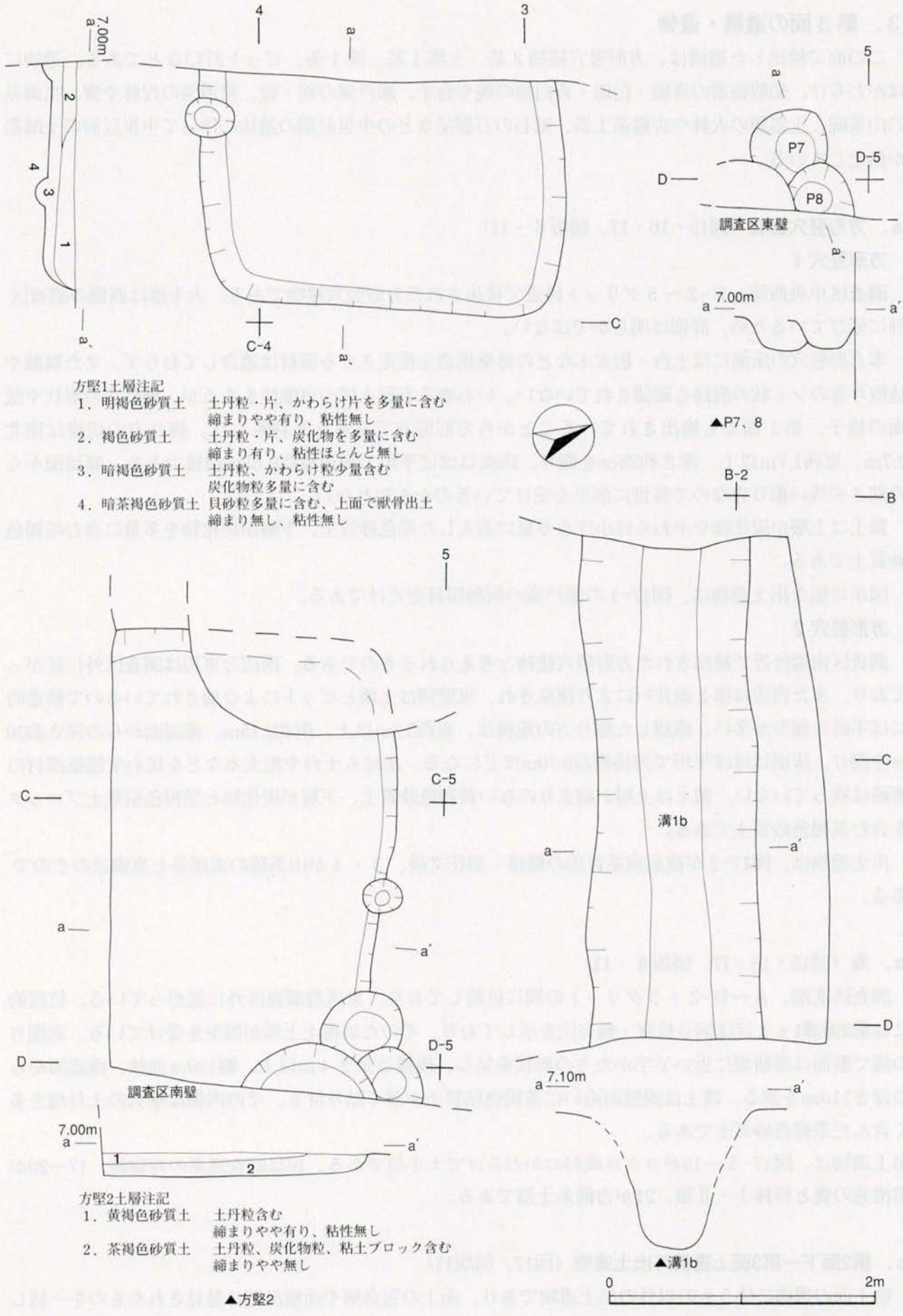
b．溝（図15・16・17、図版６・11）

調査区北端、A～D-２・３グリットの間に位置しており、東西端調査区外に拡がっている。位置的には第2面溝1ａとほぼ同じ位置・軸方位を示しており、そのため覆土上部が削平を受けている。素堀りの溝で断面は薬研堀に近いＶ字かたちの形状を呈し、規模は長さ４m以上、幅130㎝前後、確認面からの深さ110㎝を測る。覆土は両壁面沿いに茶褐色粘質土が薄く貼り付き、その内側は拳大の土丹塊を多く含んだ茶褐色砂質土である。

出土遺物は、図17-５～15がロクロ成形のかわらけで大小皿である。16は同安窯系の青磁碗、17～20が常滑窯の甕と捏鉢Ⅰ・Ⅱ類、21が吉備系土器である。

c．第2面下～第3面上遺構外出土遺物（図17、図版11）

第１面の遺構に伴うもの以外の出土遺物であり、面上の包含層や面検出時に発見されたものを一括してここに載せた。



方竪1土層注記

1．明褐色砂質土　土丹粒・片、かわらけ片を多量に含む
締まりやや有り、粘性無し

2．褐色砂質土　土丹粒・片、炭化物を多量に含む
締まり有り、粘性ほとんど無し

3．暗褐色砂質土　土丹粒、かわらけ粒少量含む
炭化物粒多量に含む

4．暗茶褐色砂質土　貝砂粒多量に含む、上面で獣骨出土
締まり無し、粘性無し

方竪2土層注記

1．黄褐色砂質土　土丹粒含む
締まりやや有り、粘性無し

2．茶褐色砂質土　土丹粒、炭化物粒、粘土ブロック含む
締まりやや無し

図16　第3面　方竪・溝・ピット各遺構

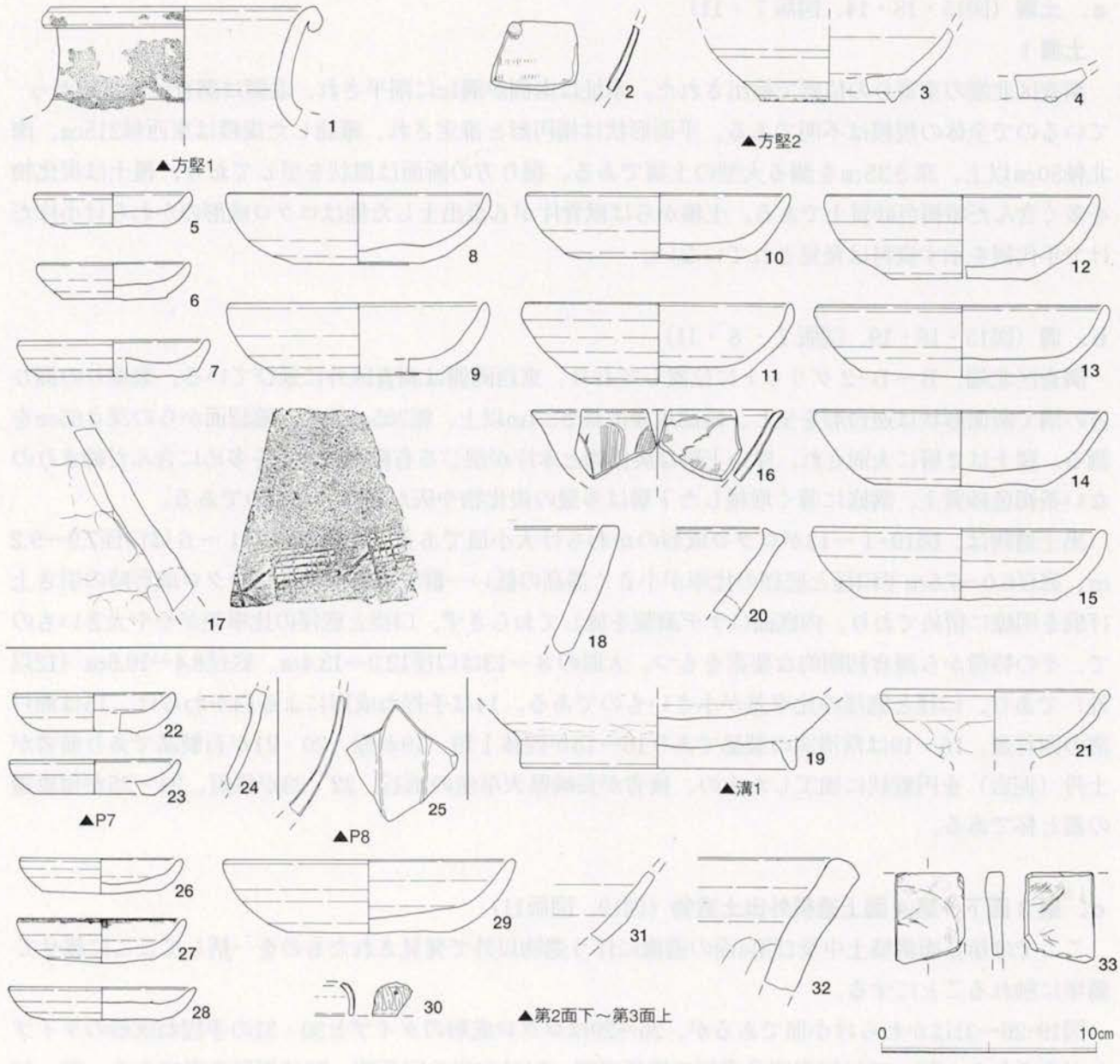


図17　第３面各遺構・第２面下～第３面上出土遺物

図17-26～29はロクロ成形によるかわらけである。小皿には26・27の口径７㎝代と28の口径８㎝以上の２種がみられ、29の大皿は口径13㎝強の内碗した内湾した体部で器壁の厚手のものである。30は青白磁合子蓋で外面に細い蓮弁文を配する。31は瀬戸平碗の体部と思われる小片、32は土器質火鉢である。33は京都鳴滝産の仕上砥である。

４．第４面の遺構・遺物

この面で検出した遺構には、土壙１基、東西方向の溝１条、ピット１口などが認められた。遺構面は海抜標高6.60m前後である。遺物には、かわらけの他に舶載陶磁器の青磁・褐釉、瀬戸窯の壺、常滑・渥美窯の捏鉢や壺・甕、伊勢系土鍋や土錘、鉄釘、石製品などが出土しており、さらに少量の須恵器や土師器なども混入していた。

a．土壙（図15・18・14、図版7・11）

土壙1

調査区北端の東寄りの位置で検出された。本址は南側が溝1cに削平され、北側は調査区外に拡がっているので全体の規模は不明である。平面形状は楕円形と推定され、確認した規模は東西軸215cm、南北軸50cm以上、深さ35cmを測る大型の土壙である。掘り方の断面は皿状を呈しており、覆土は炭化物を多く含んだ暗褐色砂質土である。土壙からは獣骨片が6点出土した他はロクロ成形のかわらけ小片だけで年代観を示す資料は発見されていない。

b．溝（図15・18・19、図版7・8・11）

調査区北端、B～D-2グリットに位置しており、東西両側は調査区外に延びている。素堀りの掘り方の溝で断面形状は逆台形を呈し、確認規模は長さ3.7m以上、幅205cm前後、確認面からの深さ65cmを測る。覆土は2層に大別され、厚い上層は炭化物と木片が混じる有機物腐蝕土を多めに含んだ締まりのない茶褐色砂質土、溝底に薄く堆積した下層は多量の炭化物や灰が混じったものである。

出土遺物は、図19-1～13がロクロ成形のかわらけ大小皿である。小皿の中で1～6は口径7.9～9.2cm、底径6.0～7.5cmで口径と底径の比率が小さく器高の低い一群であるが、7はロクロ成形時の引き上げ痕を明瞭に留めており、内底面にナデ調整を施しておらさず、口径と底径の比率差がやや大きいもので、その特徴から鎌倉初期的な要素をもつ。大皿の8～13は口径12.0～13.4cm、底径8.4～10.6cm（12以外）であり、口径と底径の比率差が小さいものである。14は手捏ね成形による白かわらけ、15は瀬戸窯の四耳壺、16～19は常滑窯の製品であり16～18が捏鉢Ⅰ類、19が壺、20・21が石製品であり前者が土丹（泥岩）を円盤状に加工したもの、後者が長崎県天草産の砥石、22・23が鉄釘、24・25が須恵器の蓋と杯である。

c．第3面下～第4面上遺構外出土遺物（図19、図版11）

ここでは第3面構築土中及び第4面の遺構に伴う遺物以外で発見されたものを一括してここに載せて簡単に触れることにする。

図19-26～31はかわらけ小皿であるが、26～29はロクロ成形のタイプと30・31の手捏ね成形のタイプとがみられた。32・33は同安窯系青磁の櫛掻文碗、34は白磁の口兀碗、35は褐釉の壺である。36～40は常滑窯の壺・甕・捏鉢、41が渥美窯の捏鉢、42が南部系の山茶碗である。43は伊勢系土鍋、44がかわらけ質の土錘、45が須恵器の蓋、46が土師器の壺である。

5．第4面下のトレンチ調査

調査区壁面は土留養生が実施されていないので重機の表土掘削後、ある程度の勾配をつけながら掘り下げ、さらに壁際に犬走り状の段差をつけて安全対策を考慮しながらの調査であった。しかし、掘り下げて行くと、生活面を構成する土層は砂層土で湧水量が豊富なため崩落の危険性を感じたので、第4面以下は面的な調査は困難と判断して、トレンチによる調査方法を採用した。

トレンチは、調査区中央のCライン沿い東側の位置で長さ8.8m、幅1.3mを設定した（図20）。図4の土層堆積にみられるように第4面構築土の灰褐色砂質土（21層）が15～30cm程の厚みがあり、その下には厚さ15～35cmの貝殻粒を多く含む灰色砂質土（22層）が認められ、さらに22層と中世地山上面との間に挟まれる状態で薄い黒灰色砂質土（23層）が水平に堆積していた。第4面上から中世地山の黒褐色粘質土（24層）までは約50cmの深さで海抜標高6.05m程であり、トレンチ底面は海抜標高5.85m前後

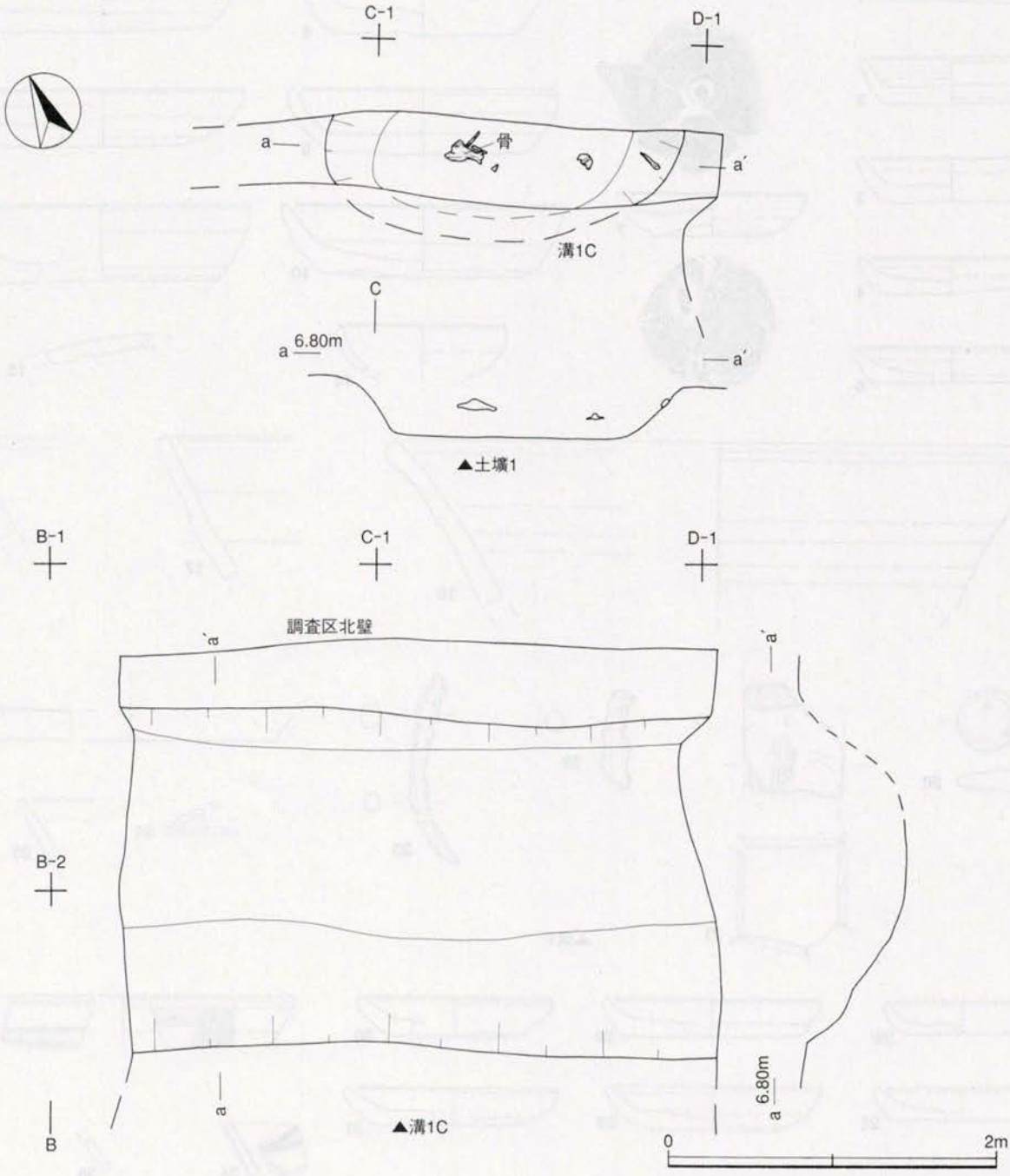


図18　第４面　土壙・溝

の深さまで掘り下げて確認を行った。中世地山面上の遺構には、土壙3基とピット１口が検出されたが遺構の覆土中からは図示可能な遺物は出土していない。

トレンチ内から出土した遺物は、図21-１～３がロクロ成形と手捏ね成形のかわらけ小皿である。４は同安窯系青磁の櫛掻文碗、５が渥美窯の捏鉢、６が尾張系の山茶碗である。７・８は鉄釘、９が骨の割口部の周囲を刃物で削り加工したもので未製品か、10～13は須恵器の杯、14が土師器の台付甕であろうか。

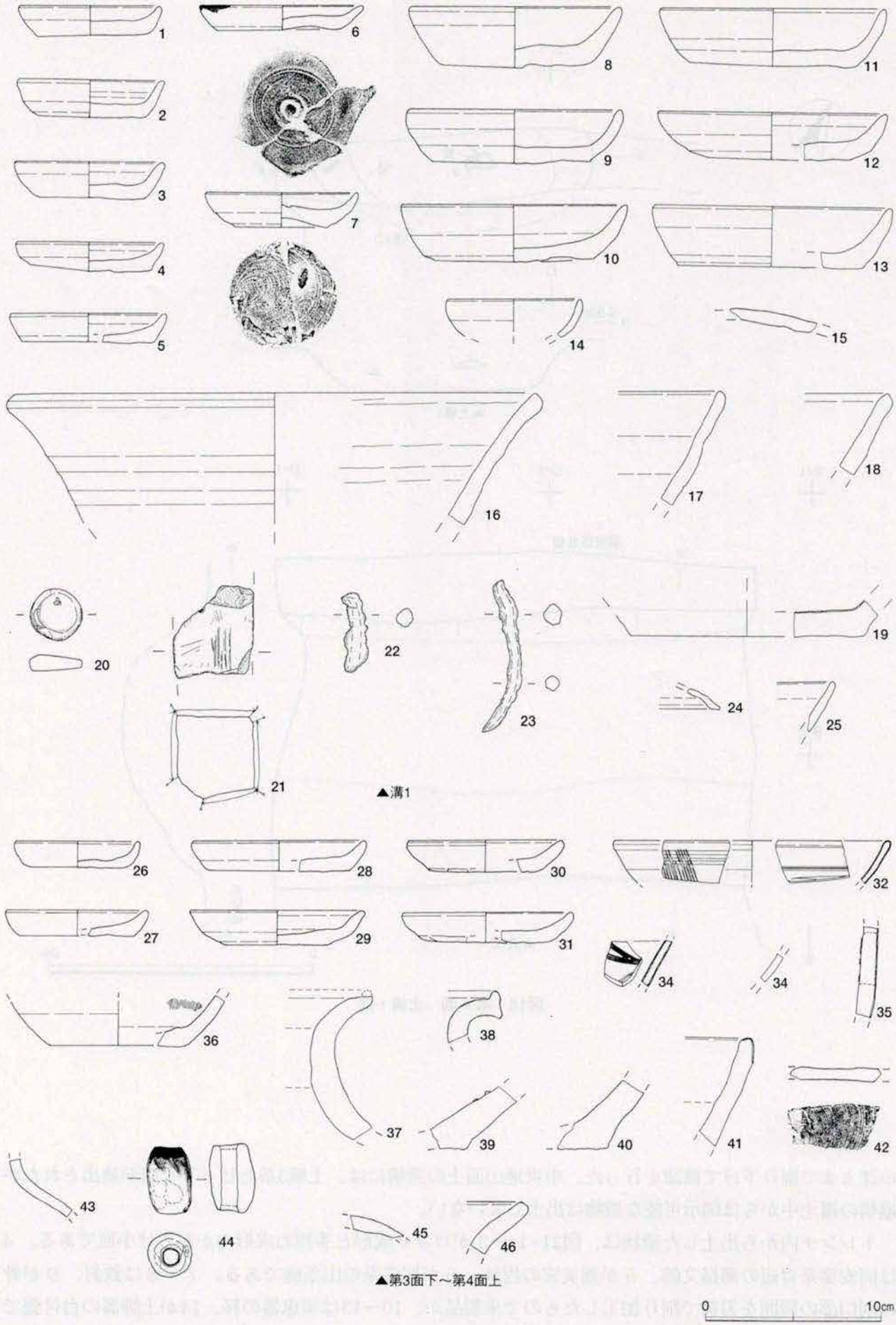


図19　第４面各遺構・第３面下～第４面上出土遺物

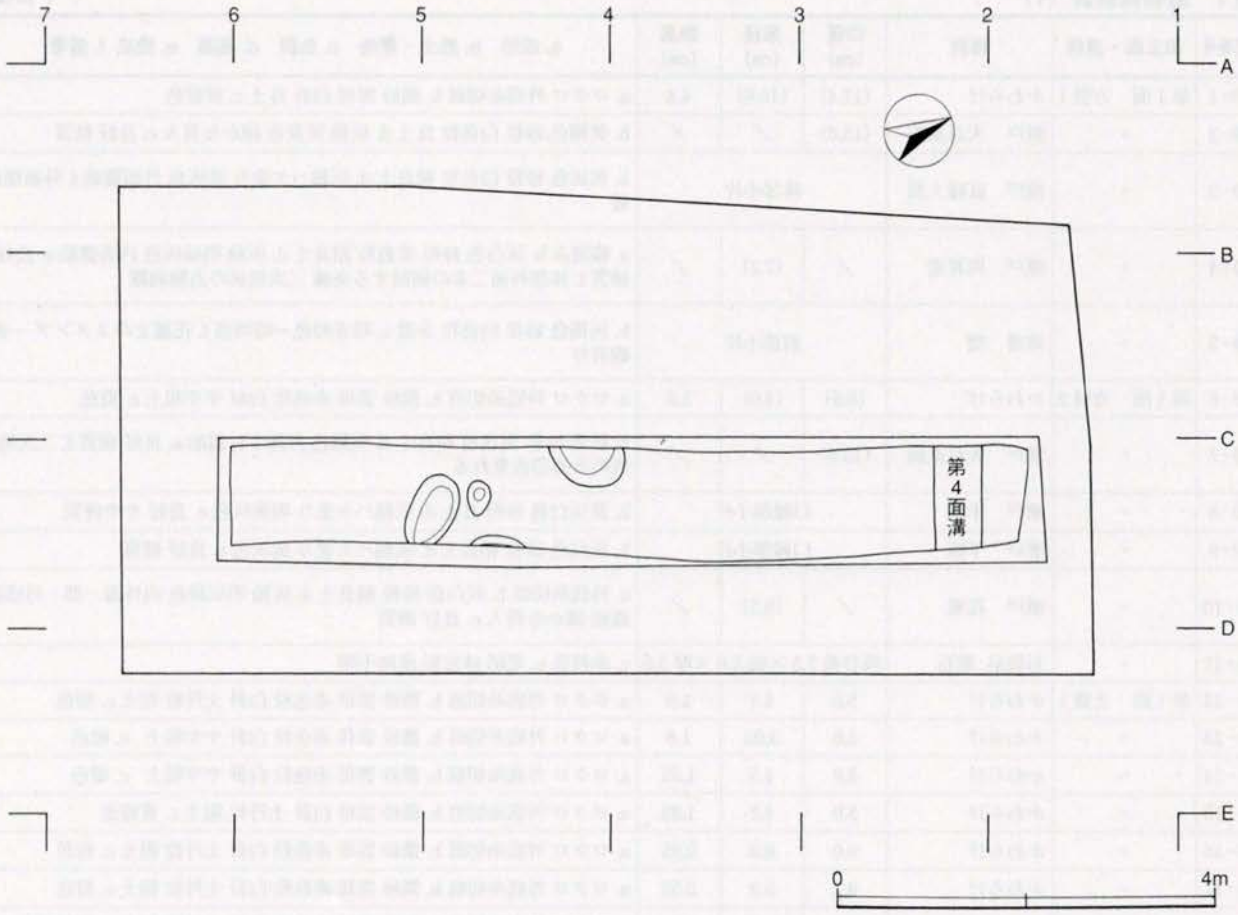


図20　第４面下トレンチ

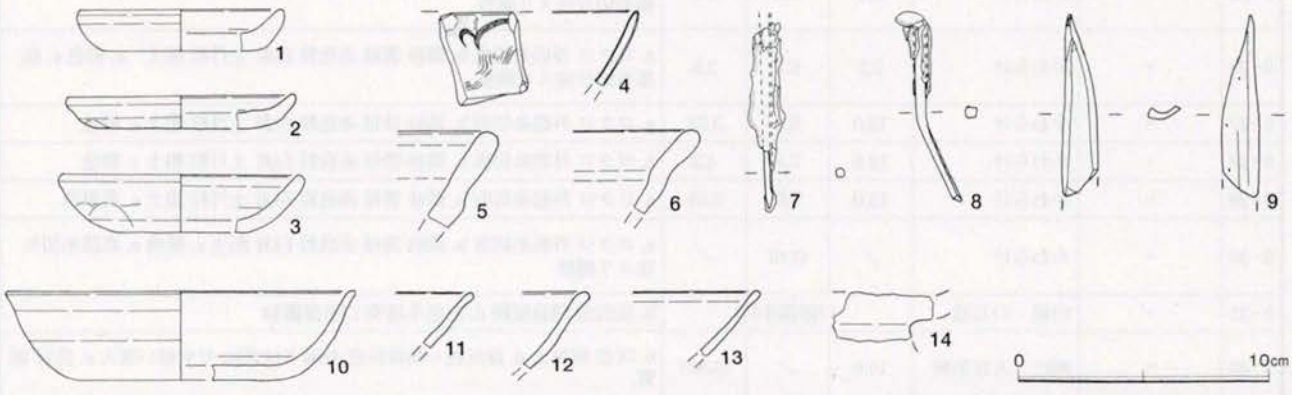


図21　トレンチ出土遺物

表1　遺物観察表（1）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
9-1	第1面　方竪1	かわらけ	(17.4)	(10.6)	4.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
9-2	〃	瀬戸　天目茶碗	(13.0)	／	／	b. 黄褐色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰釉 灰黄色 細かな貫入 e. 良好 軟質
9-3	〃	瀬戸　直縁大皿	体部小片			b. 黄灰色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 黄灰色 外面露胎 f. 外面煤付着
9-4	〃	瀬戸　四耳壺	／	(7.2)	／	a. 輪積み b. 灰白色 砂粒 黒色粒 精良土 d. 灰釉 明緑灰色 内面露胎 e. 良好 硬質 f. 体部外面二本の周回する条線 二次焼成の為釉剥離
9-5	〃	常滑　甕	肩部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 暗赤褐色～暗褐色 f. 花菱文のスタンプ 一条線有り
9-6	第1面　方竪2	かわらけ	(6.6)	(4.0)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
9-7	〃	瀬戸　天目茶碗	(13.6)	／	／	b. 灰色 砂粒 黒色粒 精良土 d. 灰黒色 外面下位露胎 e. 良好 硬質 f. 二次焼成のため器表荒れる
9-8	〃	瀬戸　平碗	口縁部小片			b. 黄灰白色 砂粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 明黄灰色 e. 良好 やや硬質
9-9	〃	瀬戸　平碗	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 黄灰色 e. 良好 硬質
9-10	〃	瀬戸　花瓶	／	(8.5)	／	a. 外底糸切痕 b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 灰釉 明灰緑色 内外面一部・外底面露胎 細かな貫入 e. 良好 硬質
9-11	〃	石製品 砥石	残存長 7.5 ×幅 5.6 ×厚 3.6			c. 赤褐色 e. 荒砥 砂岩製 産地不明
9-12	第1面　土壙1	かわらけ	5.5	4.4	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-13	〃	かわらけ	5.6	3.95	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 橙色
9-14	〃	かわらけ	5.8	4.5	1.55	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 橙色
9-15	〃	かわらけ	5.9	4.2	1.85	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
9-16	〃	かわらけ	9.0	6.0	2.95	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-17	〃	かわらけ	9.2	5.9	2.55	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-18	〃	かわらけ	9.9	6.95	2.95	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄橙色
9-19	〃	かわらけ	9.6	7.6	2.75	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
9-20	〃	かわらけ	9.4	6.55	3.15	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-21	〃	かわらけ	9.6	6.2	2.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-22	〃	かわらけ	9.6	6.6	2.85	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-23	〃	かわらけ	9.6	6.55	2.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
9-24	〃	かわらけ	10.2	6.6	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 灯明皿として使用か
9-25	〃	かわらけ	9.0	6.6	2.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 底部糸切り後スリ調整
9-26	〃	かわらけ	9.2	6.7	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土　c. 橙色 e. 底部糸切り後スリ調整
9-27	〃	かわらけ	12.0	6.8	3.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-28	〃	かわらけ	12.6	7.8	4.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
9-29	〃	かわらけ	13.0	9.0	3.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
9-30	〃	かわらけ	／	(8.6)	／	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色 e. 底部糸切り後スリ調整
9-31	〃	白磁　口兀皿	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 白色半透明 口唇部露胎
9-32	〃	瀬戸　天目茶碗	10.6	／	(5.95)	b. 灰色 精良土 d. 緑灰色～暗緑灰色 外面下位露胎 やや粗い貫入 e. 良好 硬質
9-33	〃	瀬戸　折縁深皿	体部～底部片			b. 灰色 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 e. 良好 硬質
9-34	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	(33.0)	／	／	b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 少量 c. 暗赤褐色 f. 内面使用による磨滅痕 外面斜位ヘラナデ
9-35	〃	瓦質 土風炉	(36.4)	／	／	b. 黄橙色 黒色粒 小石粒 良土 c. 黄橙色 f. 口縁部～外面にかけ細く磨き痕が残る

表2　遺物観察表（2）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
10-36	第1面　土壙2	かわらけ	8.2	6.2	2.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 明黄橙色
10-37	〃	かわらけ	11.9	6.4	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 赤色粒 粗土 c. 黄橙色
10-38	〃	常滑　甕	／	20.0	／	b. 暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 褐色～橙色
10-39	〃	吉備系土器	11.0	／	／	b. 乳白色 砂粒 黒色粒 小石粒 やや粗土 c. 乳白色～橙色 e. 良好
10-40	第1面　土壙5	かわらけ	(7.4)	(3.9)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色
10-41	第1面　土壙6	瀬戸　緑釉小皿	11.8	／	／	b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 灰釉 明緑灰色 口縁部下～外面露胎　e. 良好 硬質
10-42	〃	瀬戸　碗	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 緑灰色 e. 良好 硬質
10-43	〃	石製品　碁石	縦2.3×横1.6×厚0.5			c. 黒色
10-44	第1面　土壙7	骨製品	残存長4.1×幅1.5			f. 表面研磨 片側に均等な3ヵ所の切り込み有り
10-45	第1面　土壙8	瓦質　火鉢	口縁部小片			b. 灰黒色 黒色粒 白色粒 精良土 c. 灰色～黒灰色 e. 良好　f. 二次焼成のため一部剥離
10-46	第1面　土壙9	かわらけ	(12.4)	(8.3)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
10-47	第1面　土壙10	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部片			b. 暗灰色 砂粒 白色粒 少量 c. 灰色
10-48	第1面　土壙12	かわらけ	7.4	5.5	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c. 黄橙色 f. 灯明皿として使用か
10-49	〃	瓦質　火鉢	口縁部小片			b. 赤褐色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 良土 c. 黒褐色 f. 外面に菊花文スタンプ 珠文
10-50	第1面　土壙14	常滑　甕	縁帯幅2.8			b. 暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 暗赤褐色
10-51	第1面　土壙15	瀬戸　緑釉小皿	口縁部小片			b. 黄灰白色 砂粒 良土 d. 灰釉 緑灰色 口縁部下～外面露胎 e. 良好 軟質
10-52	〃	瀬戸　小壺	／	5.4	／	a. 外底糸切痕 b. 明黄橙色 砂粒 黒色粒 白色粒 精良土　d. 灰釉 黄味灰白色 内底面施釉 細かな貫入 e. 良好 硬質
10-53	〃	瀬戸　香炉	(10.0)	／	／	b. 灰白色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉 灰緑色 口縁部～外面施釉 e. 良好 硬質
10-54	第1面　土壙16	瀬戸　折縁深皿	／	(14.2)	／	a. 外底ヘラ削り痕 b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 緑灰色 細かな貫入 e. 良好 硬質 f. 内底部重ね焼きの跡有り
10-55	第1面　P1	かわらけ	12.8	6.4	4.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色
10-56	〃	瀬戸　碗	体部小片			b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 灰釉 緑灰色 ハケ塗り 細かな貫入 e. 良好 硬質
10-57	〃	瀬戸　折縁深皿	体部片			b. 明黄灰色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 e. 良好 硬質
10-58	第1面　P4	瀬戸　緑釉小皿	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉 灰緑色 e. 良好 硬質　f. 二次焼成を受ける
10-59	第1面　P5	瀬戸　小皿	／	(3.2)	／	a. 外底糸切痕 b. 黄灰白色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 e. 良好 硬質
10-60	第1面　P8	瀬戸　卸皿	／	(3.6)	／	a. 外底糸切痕 b. 灰白色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 緑灰白色 外底部露胎 e. 良好 硬質
10-61	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 外面赤褐色 内面降灰部灰緑色
10-62	第1面　P9	かわらけ	(7.8)	(5.3)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
10-63	第1面　P11	かわらけ	(7.8)	(3.7)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 精良土 c. 黄橙色　f. 灯明皿
10-64	〃	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	高台径（5.4）			a. 削り出し高台 b. 灰白色 精良堅緻 d. 明緑灰色半透明 高台内露胎 f. 外面蓮弁文
10-65	第1面　P14	瀬戸　袋物 （小壺か）	体部小片			b. 黄灰色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 黄灰色 e. 良好 やや軟質
10-66	〃	鉄製品　釘	残存長5.6×幅1.4×厚0.5			
10-67	第1面　P17	瀬戸　折縁深皿	体部小片			b. 黄灰白色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰釉 黄灰白色 ハケ塗り 外面露胎 e. 良好 軟質 f. 二次焼成の為白濁
10-68	第1面　P18	かわらけ	14.0	8.1	2.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 精良土 c. 橙色
11-1	第1面上	極小かわらけ	5.0	3.5	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色
11-2	〃	かわらけ	7.7	5.8	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 明黄褐色
11-3	〃	かわらけ	8.8	6.3	2.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色

表３　遺物観察表（3）

（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
11-4	第１面上	かわらけ	10.4	7.3	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 橙色
11-5	〃	かわらけ	11.8	6.0	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色
11-6	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	(15.6)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 f. 外面蓮弁文
11-7	〃	龍泉窯系青磁折縁皿	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 細かな貫入 f. 内面蓮弁文
11-8	〃	龍泉窯系 青磁劃花文碗	(14.4)	／	／	b. 灰黄色 精良堅緻 d. 黄味緑灰色半透明 内外面薄い施釉 細かな貫入 f. 外面劃花文
11-9	〃	龍泉窯系 青磁劃花文碗	(16.0)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 f. 外面劃花文 内面輪花状区画
11-10	〃	龍泉窯系 青磁劃花文皿	(10.0)	(5.2)	2.2	b. 灰色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 内外面 f. 内面劃花文
11-11	〃	同安窯系 青磁櫛掻文碗	体部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄味灰緑色透明 外面下位露胎 f. 内面櫛掻劃花文 外面櫛掻文
11-12	〃	青磁　折腰皿	／	(5.0)	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 高台内施釉 畳付露胎 粗い貫入
11-13	〃	白磁　口兀皿	(8.8)	／	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 明緑灰色半透明 口唇部露胎
11-14	〃	瀬戸　天目茶碗	(11.2)	／	／	b. 灰白色 砂粒 良土 d. 黒褐色 e. 良好 やや軟質
11-15	〃	瀬戸　碗	(16.4)	／	／	b. 灰黄色 砂粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 黄味灰緑色 細かな貫入 e. 良好 やや軟質
11-16	〃	瀬戸　碗	底部小片			b. 灰色 砂粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 外面露胎 e. 良好 硬質
11-17	〃	瀬戸　瓶子	／	(8.2)	／	a. 外底糸切痕 b. 灰白色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 明灰緑色 外底部露胎 細かな貫入 e. 良好 硬質
11-18	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 暗赤褐色
11-19	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	胴部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 赤褐色
11-20	〃	瓦質 土風炉	(36.0)	／	／	b. 灰白色 砂粒 白色粒 やや粗土 c. 灰黒色 f. 口縁部～外面にかけヘラ磨き
11-21	〃	滑石製　鍋	口縁部小片			c. 灰褐色 f. 一部煤付着
11-22	〃	鉄製品　釘	残存長 5.2 ×幅 1.0 ×厚 0.5			
11-23	〃	銅製品　銭	／	／	／	f. 至道元宝 北宋 初鋳 995 年
11-24	〃	銅製品　銭	／	／	／	f. 皇宋通宝 北宋 初鋳 1038 年
14-1	第２面　土壙１	鉄製品　釘	残存長 4.7 ×幅 0.8			
14-2	第２面　溝１	かわらけ	7.8	4.8	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色 f. 灯明皿
14-3	〃	かわらけ	(11.4)	(7.8)	2.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
14-4	〃	かわらけ	(13.4)	(7.8)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色
14-5	〃	緑釉　盤	口縁部小片			b. 明灰褐色 砂粒 白色粒 やや粗土 d. 明灰緑色 e. 良好 硬質 f. 二次焼成を受ける　泉州窯系
14-6	第２面　井戸１	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色
14-7	〃	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
14-8	〃	青白磁　水注	胴部小片			b. 白色 精良堅緻 d. 青白色透明 内面薄い施釉
14-9	〃	褐釉 壺	胴部小片			b. 暗灰色 砂粒 白色粒 精良土 d. 暗灰褐色 内面露胎 e. 良好 硬質
14-10	〃	瀬戸　平碗	口縁部小片			b. 黄灰色 砂粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 細かな貫入　e. 良好 硬質
14-11	〃	瀬戸　平碗	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 細かな貫入 e. 良好 硬質
14-12	〃	瀬戸　平碗	胴部小片			b. 黄灰色 砂粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 外面下位露胎 細かな貫入 e. 良好 硬質
14-13	〃	瀬戸　緑釉皿	口縁部小片			b. 黄灰色 砂粒 良土 d. 灰釉 灰緑色 口縁部施釉 e. 良好 硬質
14-14	〃	瀬戸　卸皿	口縁部小片			b. 褐灰色 砂粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 口縁部施釉 内外面露胎 e. 良好 硬質 f. 内外面煤付着
14-15	〃	瀬戸　卸皿	口縁部小片			b. 黄灰褐色 砂粒 精良土 d. 灰釉ハケ塗り 灰緑色 口縁部施釉 内外面露胎 e. 良好 硬質

表4　遺物観察表（4）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
14-16	第2面　井戸1	瀬戸　卸皿	／	5.5	／	a. 外底糸切痕 b. 黄灰色 砂粒 精良土 e. 良好 硬質 f. 内外面煤付着
14-17	〃	瀬戸　直縁大皿	底部小片			a. 外底糸切痕 b. 黄灰色 砂粒 良土 d. 灰釉ハケ塗り 黄灰色 e. 良好 硬質
14-18	〃	瀬戸 袋物（瓶子か）	胴部径（18.4）			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 良土 d. 黒褐色不透明 外面施釉 ハケ塗り釉ダレ e. 良好 硬質
14-19	〃	常滑　甕	／	(17.2)	／	b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 内面降灰部灰緑色 外面赤褐色
14-20	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	／	(13.2)	／	a. 貼付高台 b. 灰色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 灰色 f. 内面磨滅
14-21	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	(27.4)	(16.6)	10.4	b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 暗赤褐色 f. 口縁部剥離内面磨滅
14-22	〃	常滑　甕　転用品	残存長 2.3 ×幅 3.5 ×厚 0.7			b. 灰色 砂粒 少量 c. 灰色 f. 甕破片を2方向擦り加工
14-23	〃	瓦質　火鉢	胴部小片			b. 灰白色 砂粒 白色粒 良土 c. 黒褐色 e. 良好 f. 外面ヘラ磨き 脚部分剥離
14-24	第2面　P1	女瓦（平瓦）	残存長 5.0 残存幅 3.9 厚 2.1			a. 凹面縦位ナデ 凸面離れ砂 花菱文の叩き目 b. 灰色 砂粒 白色粒 良土 c. 灰色 e. やや甘い 軟質
14-25	第2面　P5	鉄製品　釘	残存長 2.9 ×幅 0.8 ×厚 0.4			
14-26	第2面　P9	瀬戸　緑釉小皿	(11.6)	／	／	b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 灰釉 灰緑色 口縁部施釉 細かな貫入 e. 良好 硬質
14-27	第2面　P10	鉄製品　釘	残存長 6.9 ×幅 1.2 ×厚 0.6			
14-28	〃	鉄製品　釘	残存長 3.1 ×幅 1.2 ×厚 0.9			
14-29	第1面下～ 第2面上	極小かわらけ	(5.2)	(3.8)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
14-30	〃	かわらけ	(7.5)	(5.8)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
14-31	〃	かわらけ	(8.2)	(5.9)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
14-32	〃	かわらけ	(13.3)	(9.8)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
14-33	〃	かわらけ	(13.6)	(8.9)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
14-34	〃	龍泉窯系 青磁袋物	体部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 内外面厚手に施釉 粗い貫入 f. 貼付け文様 二次焼成を受け文様不鮮明 牡丹文か
14-35	〃	瀬戸　天目茶碗	体部小片			b. 灰白色 砂粒 良土 d. 黒色～暗褐色 外面下位露胎
14-36	〃	瀬戸　緑釉小皿	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 良土 d. 灰釉 明灰緑色 e. 良好 やや軟質
14-37	〃	瀬戸　卸皿	(13.6)	／	／	b. 灰白色 砂粒 褐色砂粒 良土 d. 灰釉 灰緑色 e. 良好 硬質
14-38	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	底部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 赤褐色 f. 内面磨滅
14-39	〃	滑石製　鍋	残存長 5.6 ×幅 5.4 ×厚 1.6			c. 灰色 f. 外面煤付着
17-1	第3面　方竪1	瀬戸　四耳壺	(12.4)	／	／	b. 明灰白色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰釉 灰緑色～黄灰緑色 e. 良好 硬質
17-2	第3面　方竪2	青磁　櫛掻文碗	体部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄味緑灰色透明 内外面薄い施釉 f. 内面櫛掻文
17-3	〃	南部系山茶碗	高台径（6.3）			a. ロクロ 外底糸切痕 籾殻痕 貼付高台 b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗土 c. 灰白色 e. 良好 やや硬質 f. 尾張型か
17-4	〃	北部系山茶碗	底部小片			a. ロクロ 外底糸切痕 籾殻痕 貼付高台 b. 灰色 砂粒 黒色粒 精良土 c. 黄灰色 e. 良好 硬質 f. 東濃型
17-5	第3面　溝1	かわらけ	7.1	4.8	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
17-6	〃	かわらけ	(6.9)	(4.9)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 黄橙色
17-7	〃	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 橙色
17-8	〃	かわらけ	(12.3)	(6.3)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 橙色
17-9	〃	かわらけ	(11.9)	(7.8)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 橙色
17-10	〃	かわらけ	12.1	7.7	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
17-11	〃	かわらけ	(12.3)	(6.3)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土　c. 橙色
17-12	〃	かわらけ	(12.5)	(6.3)	3.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
17-13	〃	かわらけ	(13.4)	(9.4)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
17-14	〃	かわらけ	(13.4)	(7.9)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
17-15	〃	かわらけ	(13.4)	(9.0)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
17-16	〃	同安窯系 青磁蓮弁文碗	(11.8)	／	／	b. 黄灰色 精良堅緻 d. 黄味灰緑色透明 細かな貫入 f. 内面劃花文・櫛掻文 外面櫛掻蓮弁文

表5　遺物観察表（5）

（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
17-17	第3面　溝1	常滑　甕	肩部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 褐色 降灰部灰黄色 f. 格子目の叩き目痕有り
17-18	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 暗褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 暗褐色 降灰部黄灰色
17-19	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	高台径（12.7）			a. 貼付高台 b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色
17-20	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 褐色 降灰部灰緑色
17-21	〃	吉備系土器	（10.2）	／	／	b. 乳白色 砂粒 白色粒 良土 c. 明黄褐色～白灰色 e. 良好
17-22	第3面　P7	かわらけ	（7.6）	（4.6）	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
17-23	〃	かわらけ	（8.0）	（5.6）	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
17-24	第3面　P8	土師器	体部小片			b. 灰黄色 砂粒 白色粒 良土 c. 橙色
17-25	〃	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	体部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 暗灰緑色不透明 内外面厚手の施釉 粗い貫入 f. 外面蓮弁文
17-26	第2面下～ 第3面上	かわらけ	7.3	5.6	1.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c. 黄橙色
17-27	〃	かわらけ	（7.6）	（4.8）	2.05	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c. 黄橙色 f. 灯明皿として使用か
17-28	〃	かわらけ	（8.6）	（5.4）	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c. 黄橙色
17-29	〃	かわらけ	（13.2）	（7.6）	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c. 黄橙色
17-30	〃	青白磁　合子蓋	体部小片			b. 白色 精良堅緻 d. 明青灰色半透明 内外面薄い施釉 口唇部露胎 f. 外面蓮弁文
17-31	〃	瀬戸　平碗	体部小片			b. 灰白色 砂粒 白色粒 精良土 d. 灰釉 黄灰緑色 e. 良好 硬質
17-32	〃	土器質　火鉢	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 良土 c. 黒灰色 e. 良好
17-33	〃	石製品　砥石	残存長 4.0 ×幅 3.2 ×厚 0.8			c. 明黄褐色 f. 仕上砥 泥岩製 鳴滝産か
19-1	第4面　溝1	かわらけ	7.9	6.3	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
19-2	〃	かわらけ	8.3	6.2	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 黄橙色
19-3	〃	かわらけ	8.4	6.0	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
19-4	〃	かわらけ	8.3	6.9	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
19-5	〃	かわらけ	（8.8）	（7.5）	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
19-6	〃	かわらけ	9.2	7.1	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色 f. 灯明皿
19-7	〃	かわらけ	（8.6）	（5.2）	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色
19-8	〃	かわらけ	（12.0）	（8.4）	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 やや粗土 c. 黄橙色
19-9	〃	かわらけ	12.0	9.0	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
19-10	〃	かわらけ	12.6	9.2	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
19-11	〃	かわらけ	12.7	9.7	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色
19-12	〃	かわらけ	（13.0）	（8.0）	2.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
19-13	〃	かわらけ	（13.4）	（10.6）	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
19-14	〃	白かわらけ	（7.4）	／	／	b. 微砂 雲母 小石粒 良土 c. 明赤灰色
19-15	〃	瀬戸　四耳壺	肩部小片			b. 灰白色 砂粒 精良土 d. 明灰黄色 内面露胎 e. 良好 硬質
19-16	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	（29.6）	／	／	b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色
19-17	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 褐色粒 小石粒 多量 c. 灰褐色
19-16	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	（29.6）	／	／	b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色
19-17	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 褐色粒 小石粒 多量 c. 灰褐色
19-18	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰褐色～白灰色
19-19	〃	常滑　壺	／	13.4	／	a. 外底部砂目痕 b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c 暗褐色 . 降灰部緑灰色
19-20	〃	石製　円盤	直径 3.0 ×厚 0.4			f. 土丹を丸く擦り加工
19-21	〃	石製品　砥石	残存長 5.0 ×幅 4.4 ×厚 4.6			c. 赤褐色～黒褐色 f. 中砥 凝灰岩質 天草産
19-22	〃	鉄製品　釘	残存長 4.6 ×幅 1.3 ×厚 1.0			
19-23	〃	鉄製品　釘	残存長 8.7 ×幅 1.0 ×厚 1.2			
19-24	〃	須恵器　蓋	蓋部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 精良土 c. 暗灰褐色 e. 良好

表6　遺物観察表（6）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
19-25	第4面　溝1	須恵器　杯	口縁部小片			b. 暗灰色 砂粒 白色粒 良土 c. 暗灰褐色～黄橙色 e. 良好
19-26	第3面下～第4面上	かわらけ	(7.4)	(5.7)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 小石粒 粗土 c. 橙色
19-27	〃	かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 小石粒 粗土　c. 橙色
19-28	〃	かわらけ	(10.0)	(6.0)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
19-29	〃	かわらけ	(5.0)	(2.8)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土　c. 橙色
19-30	〃	かわらけ	(9.0)	(6.4)	1.8	a. 手捏ね 外面指頭痕 b. 微砂 雲母 小石粒 良土 c. 灰白色
19-31	〃	かわらけ	(9.6)	(7.8)	1.7	a. 手捏ね 外面指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
19-32	〃	同安窯系青磁櫛掻文碗	(8.0)	／	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰青色半透明 内外面薄手の施釉 f. 内面劃花文 外面櫛掻文
19-33	〃	同安窯系青磁櫛掻文碗	体部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 暗灰緑色半透明 f. 内面櫛掻文
19-34	〃	白磁　口兀碗	体部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄灰白色半透明 f. 外面下位露胎
19-35	〃	褐釉 壺	体部小片			b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 やや粗土 d. 褐色不透明 e. 良好 硬質 f. 内面施釉後ヘラナデにより帯状に無釉部有り
19-36	〃	常滑　壺	／	(7.6)	／	a. 外底糸切痕 b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや少量 c. 明赤灰色
19-37	〃	常滑　甕	縁帯幅（0.7）			b. 橙色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 暗赤褐色 降灰部灰緑色
19-38	〃	常滑　甕	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 暗赤褐色
19-39	〃	常滑　甕	底部小片			b. 灰色 砂粒 褐色粒 小石粒 やや少量 c. 褐色 降灰部明緑灰色
19-40	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	底部小片			b. 明黄褐色 砂粒 黒色粒 白色粒 褐色粒 小石粒 多量 c. 褐色 f. 内面磨滅
19-41	〃	渥美　捏鉢	口縁部小片			b. 灰黄色 砂粒 白色粒 精良土 d. 暗茶褐色 内面露胎 e. 良好 硬質 f. 口縁部釉が荒れている
19-42	〃	南部系山茶碗	底部小片			a. 外底糸切痕 b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗土 c. 灰色 e. 良好 硬質 f. 内面一部磨滅
19-43	〃	伊勢系土鍋	肩部小片			b. 灰色 砂粒 小石粒 良土 c. 褐色 e. 良好 やや硬質
19-44	〃	土製品　土錘	長3.9×胴部径2.5×孔径0.9			
19-45	〃	須恵器　蓋	蓋部小片			b. 褐色 砂粒 白色粒 褐色粒 粗土 c. 灰褐色 e. 良好
19-46	〃	土師器　壺	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好
21-1	トレンチ	かわらけ	(8.0)	(6.3)	1.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土　c. 黄橙色
21-2	〃	かわらけ	(9.0)	(7.5)	1.3	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土　c. 明黄褐色
21-3	〃	かわらけ	(9.4)	(5.1)	2.3	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 精良土　c. 黄橙色
21-4	〃	同安窯系青磁櫛掻文碗	口縁部小片			b. 暗灰色 精良堅緻 d. 暗緑灰色半透明 f. 内面櫛掻劃花文
21-5	〃	渥美　捏鉢	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 良土 d. 灰色～黒灰色 ハケ塗り f. 良好 硬質
21-6	〃	南部系山茶碗	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗土 c. 灰白色 e. 良好 硬質 f. 内面自然釉多量に付着 尾張型
21-7	〃	鉄製品　釘	残存長7.5×幅0.3×厚0.3			
21-8	〃	鉄製品　釘	残存長7.8×幅0.4×厚0.4			
21-9	〃	骨製品	残存長7.2×幅1.3×厚0.3			a. 凹面：縁に刃物で削った加工痕 中央部縦に伸びる溝有り 凸面：中央部縦に伸びる筋有り f. 先端を尖らせている、楔形か
21-10	〃	須恵器　杯	(13.8)	(8.2)	3.55	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 褐色 砂粒 白色粒 精良土 c. 黒灰色 e. 良好
21-11	〃	須恵器　杯	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 精良土 c. 灰色 e. 良好
21-12	〃	須恵器　杯	口縁部小片			b. 暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 良土 c. 暗灰色 e. 良好
21-13	〃	須恵器　杯	口縁部小片			b. 赤褐色 砂粒 白色粒 小石粒 良土 c. 赤褐色 e. やや甘い
21-14	〃	土師器	脚部小片			b. 赤褐色 砂粒 良土 c. 赤褐色 e. やや甘い f. 一部朱塗りされている

第4章　まとめ

本遺跡は市内東南部隅の材木座海岸に近い場所に位置し、西側には宝戒寺門前から始まり若宮・宇都宮幕府跡の東辺を通る小町大路が海岸方面へ向かい米町辻（大町四つ角あたり）を過ぎて最終的には和賀江津へと通ずる道が南北に走る。中世当時、この道はおそらく海上輸送で和賀江港に陸揚げされた多量の物資を運搬する人々の往来で賑わった商業地域と考えられ、また遺跡周辺は実相寺や妙長寺（日蓮宗）、来迎寺や向福寺（時宗）、九品寺や光明寺（浄土宗）など現存する寺院の他、廃寺も多く存在した地域でもあった。このことは、現在も地元に唄い伝えられ中世に遡りうる古謡『天王謡』に知る当時の町衆活動の一端と、その人々を布教対象にした信仰活動の場であったことは想像に難くない。

調査地点は、本遺跡の南端に位置した五所神社参道の中程南側の一画にあたり、調査地点からは中世前期の少なくとも4時期の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。さらに遺構は検出されていないが、地業層客土や遺構覆土に混じって奈良～平安時代の土師器や須恵器の破片が出土しており、砂丘上に形成された古代集落の存在も想起される。ここでは各生活面から検出された遺構の配置や出土した遺物の年代観から３期に大別し、以下に各期の変遷と年代の概略を述べてまとめに変えたい。

◎第Ⅱ期－第４面及び中世基盤層上：調査区北端で検出した東西溝の他は浅い土壙やピットだけで遺構の密度が低く、生活の痕跡が希薄な様子が窺える。搬入品からみた年代は、遅くとも13世紀第1四半期頃には営為がはじまり、13世紀前半を主体とした様相が指摘できる。なお、調査区東壁断面の土層堆積（図４）で認められるように、この東西溝の状況は次代第　期－第３・２面へと継承されて掘り直しが行なわれ、区画溝としての機能は続いている。

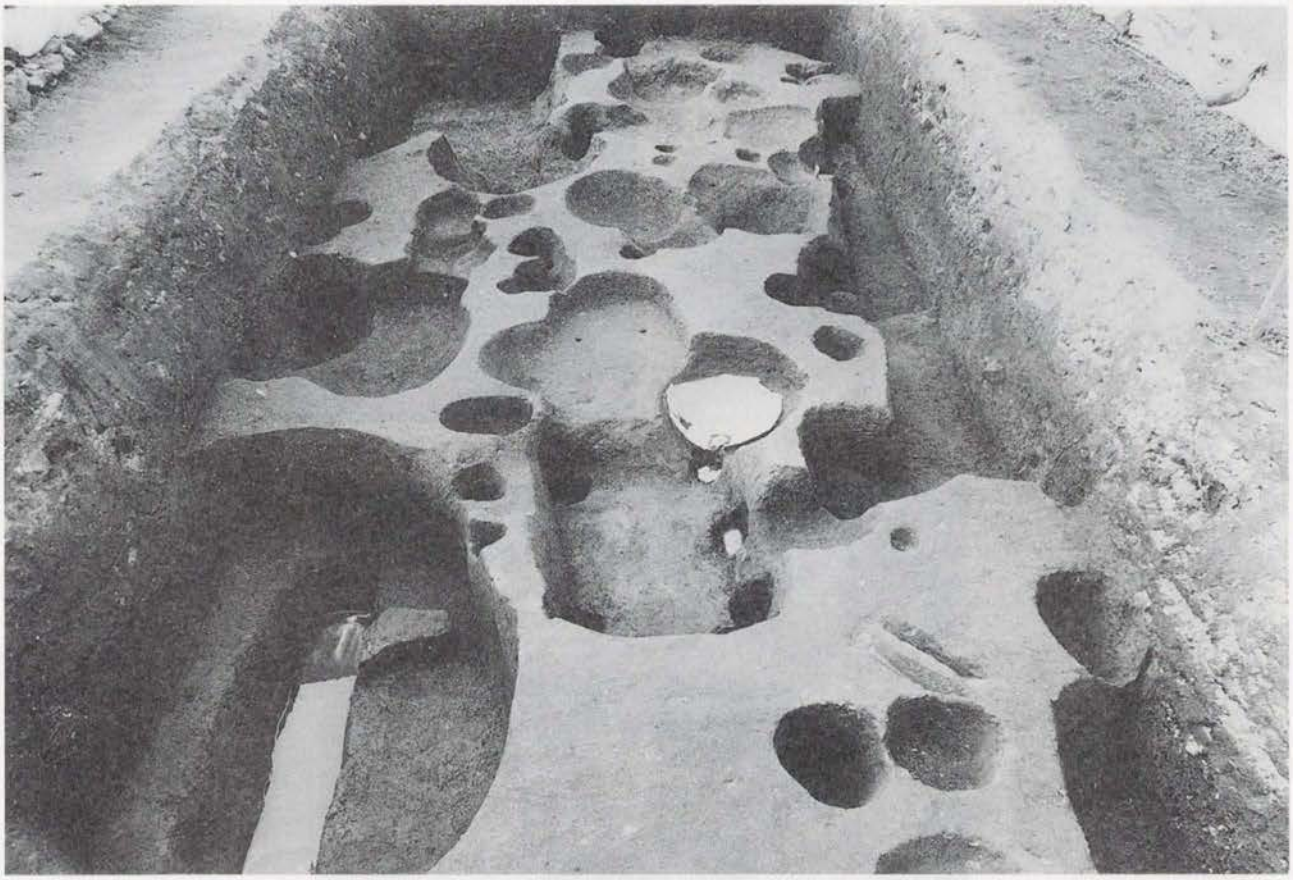
◎第Ⅲ期－第２・３面：区画溝の南側域には、溝と同じ軸方位をもつ方形竪穴建物や井戸、土壙など前代より密集度の高い遺構により構成されている。搬入遺物からみた年代は、同安窯系・竜泉窯系青磁碗（図17-２・16）など13世紀前葉の要素をもつ資料もあるが、概ね13世紀後葉から14世紀前葉を中心として14世紀中頃までとみて大過ないと思われる。

◎第　期－第1面：遺構としては、前代に継承されて方形竪穴建物は認められるが、境界の溝が消滅し、連続して掘り返されたゴミ穴的な土壙が遺構の主体を占めている。面上の搬入品の年代は13世紀前半にはじまり、15世紀におよぶ。表土直下の土層でありおそらく近世以降大きく攪乱や削平を受けたために年代的混乱がもたらされたのではないかと思われる。しかし、遺構に伴う出土遺物の年代は14世紀中葉から15世紀にかけての資料とするのが妥当であろう。

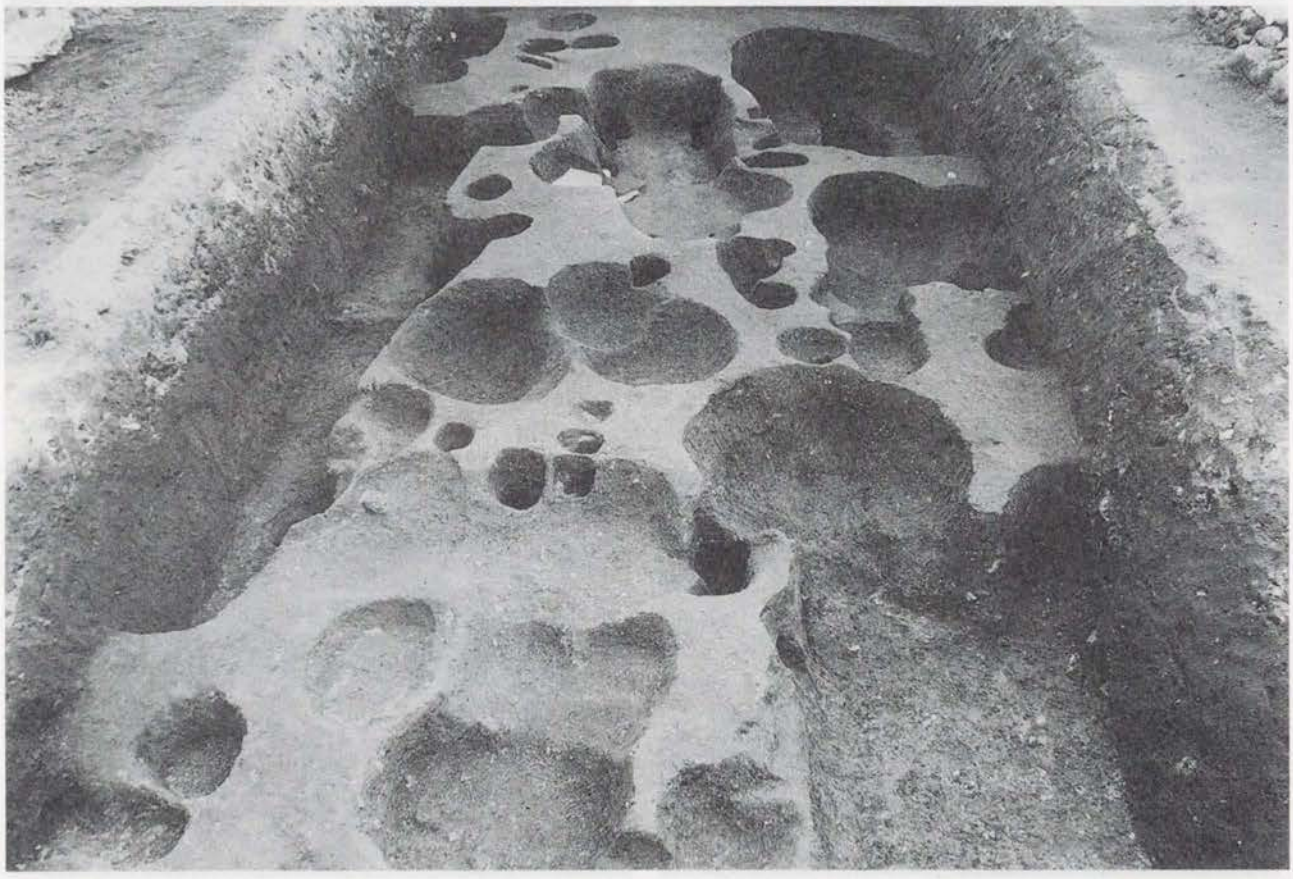
【参考文献】

宗臺　秀明　1992　「中世、14世紀かわらけの変遷」『考古論　神奈川』第1集
宗臺富貴子　1996　「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について－古瀬戸前期から後期までの出土様相－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』
田代　郁夫　1997　「15世紀のかわらけ」『かながわの中世　－土器様相を中心として－』神奈川考古学会
服部　実喜　1997　「16世紀のかわらけ」『かながわの中世　－土器様相を中心として－』神奈川考古学会
馬淵　和雄　1997　「中世食器の地域性 鎌倉」『国立歴史民族博物館研究報告』71集

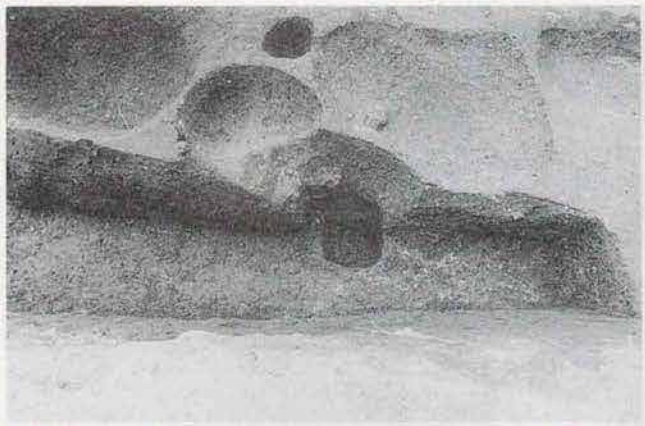
図版 1



▲
a. 第 1 面全景 （南から）
▼ （北から）

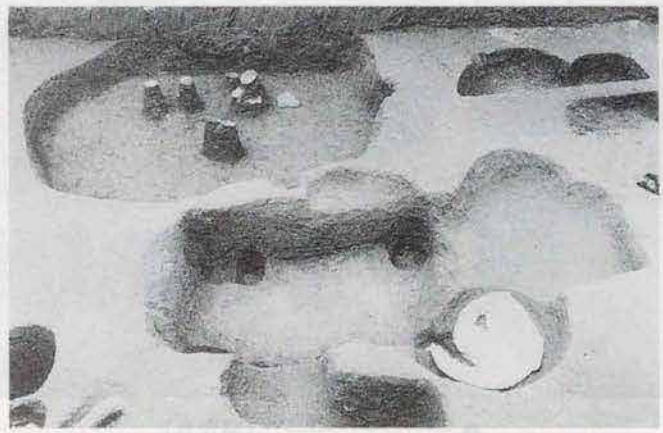


図版 2

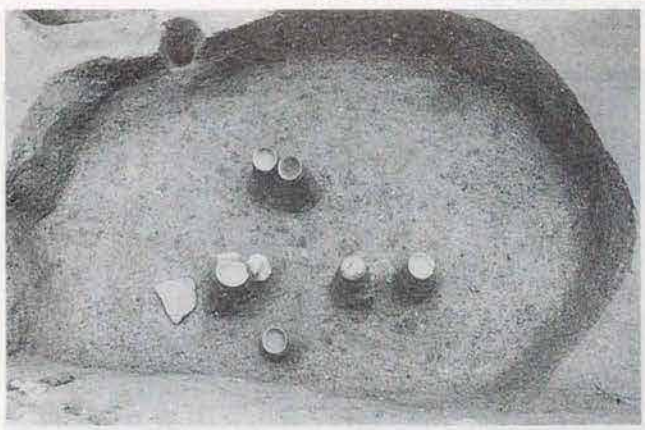


▲a. 方堅 1（東から）

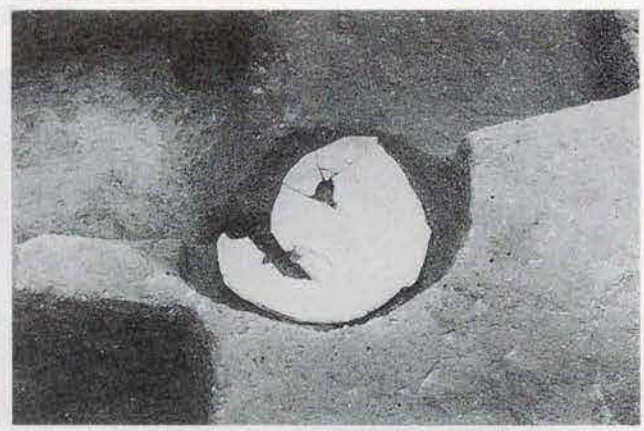
▲b. 方堅 2（西から）



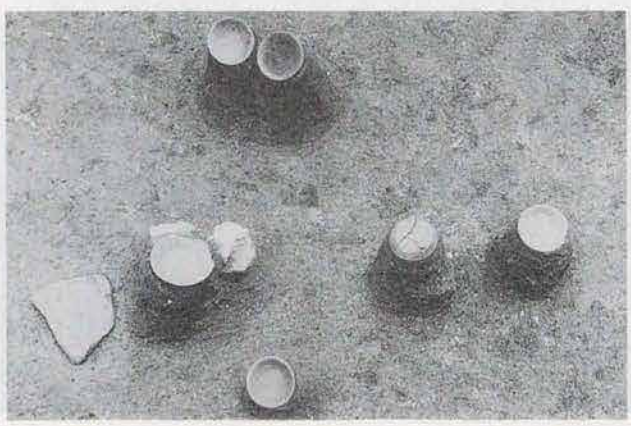
▲c. 土壙 1 ・ 2（東から）

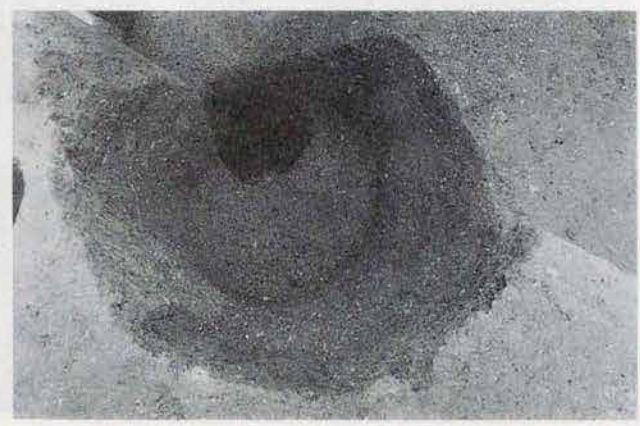


▲ 土壙 1
d.
▼ 同上遺物出土状況（西から）

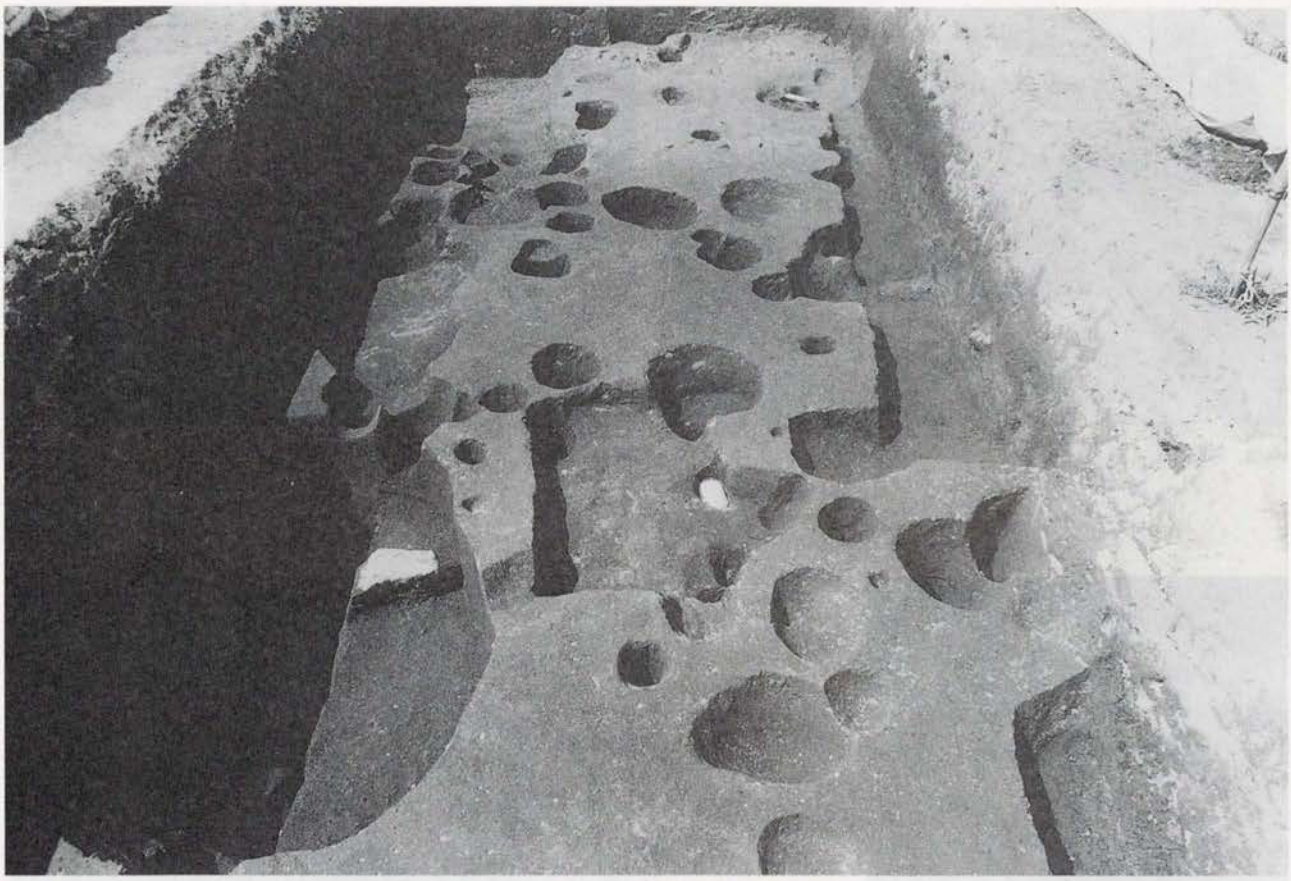


▲ 土壙 2（据甕）
e.
▼ 同上完掘状況（西から）



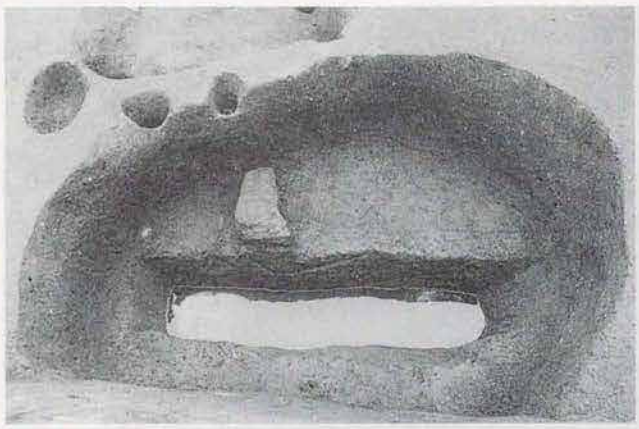


図版 3



▲
▼ a. 第 2 面全景 （南から）
（北から）

図版 4



▲ a. 井戸 1（西から）

▲ b. 井戸 1 土層堆積（南西から）

▲ c. 土壙 1・P1（東から）

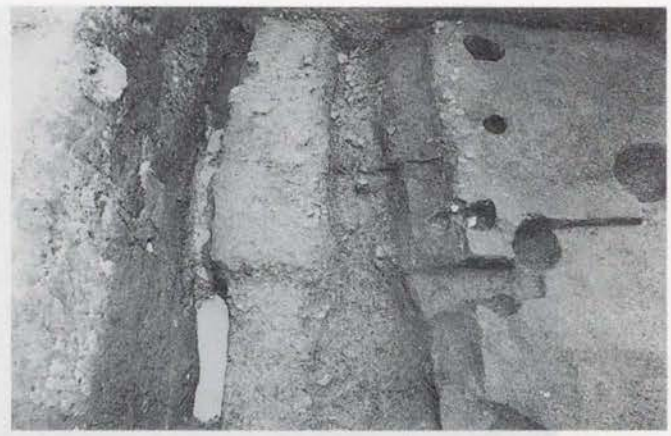
▲ d. 土壙 2（東から）

▲ e. P5（東から）

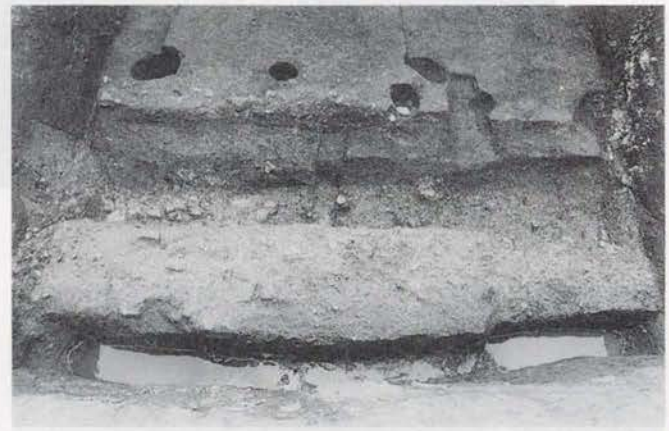
▲ f. P9（東から）

図版 5

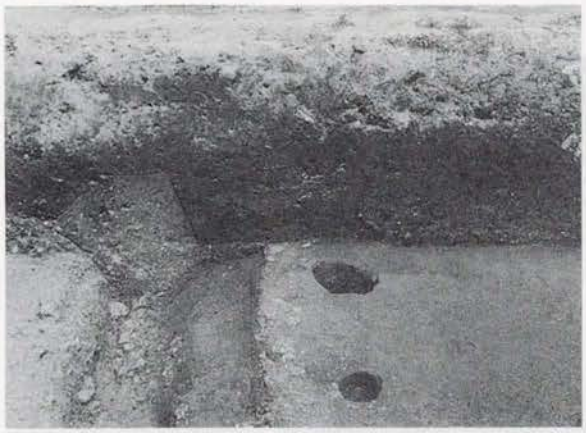
（東から）



（西から）

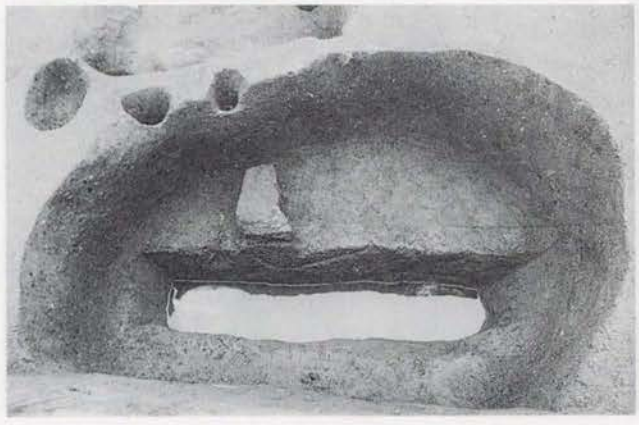


（北から）



◀ 溝1a土層堆積（西から）

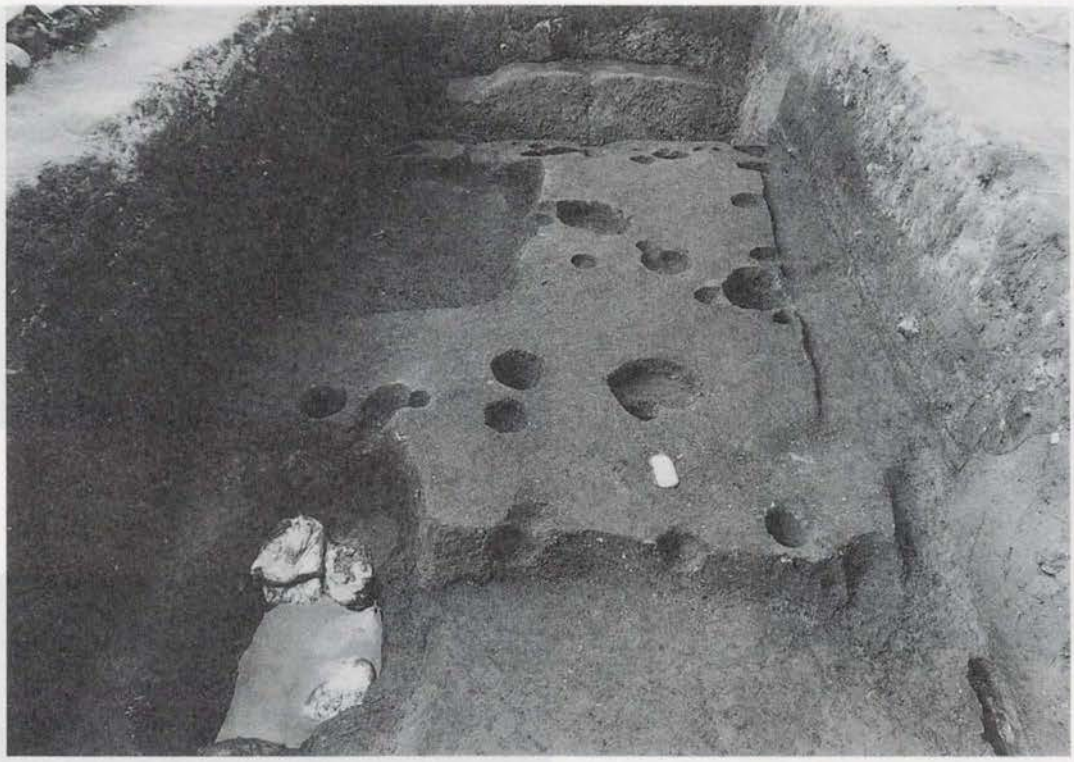
▼ 溝1a肩 緑釉盤出土状況（北西から）



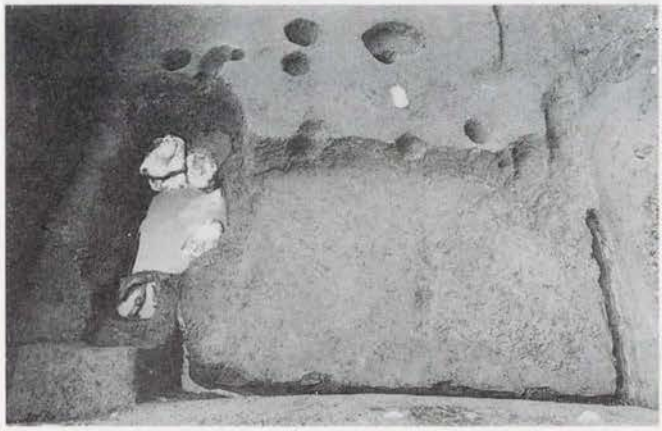
▼ 溝1a内 かわらけ出土状況（東から）

▲ a. 溝1a

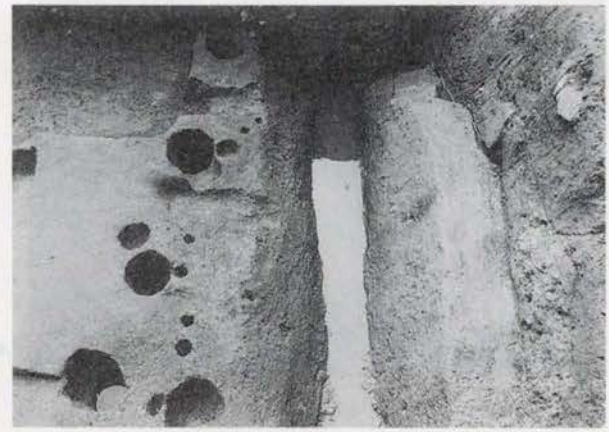
図版 6



▲ a. 第 3 面全景（南から）



▲ b. 方堅 2（南から）

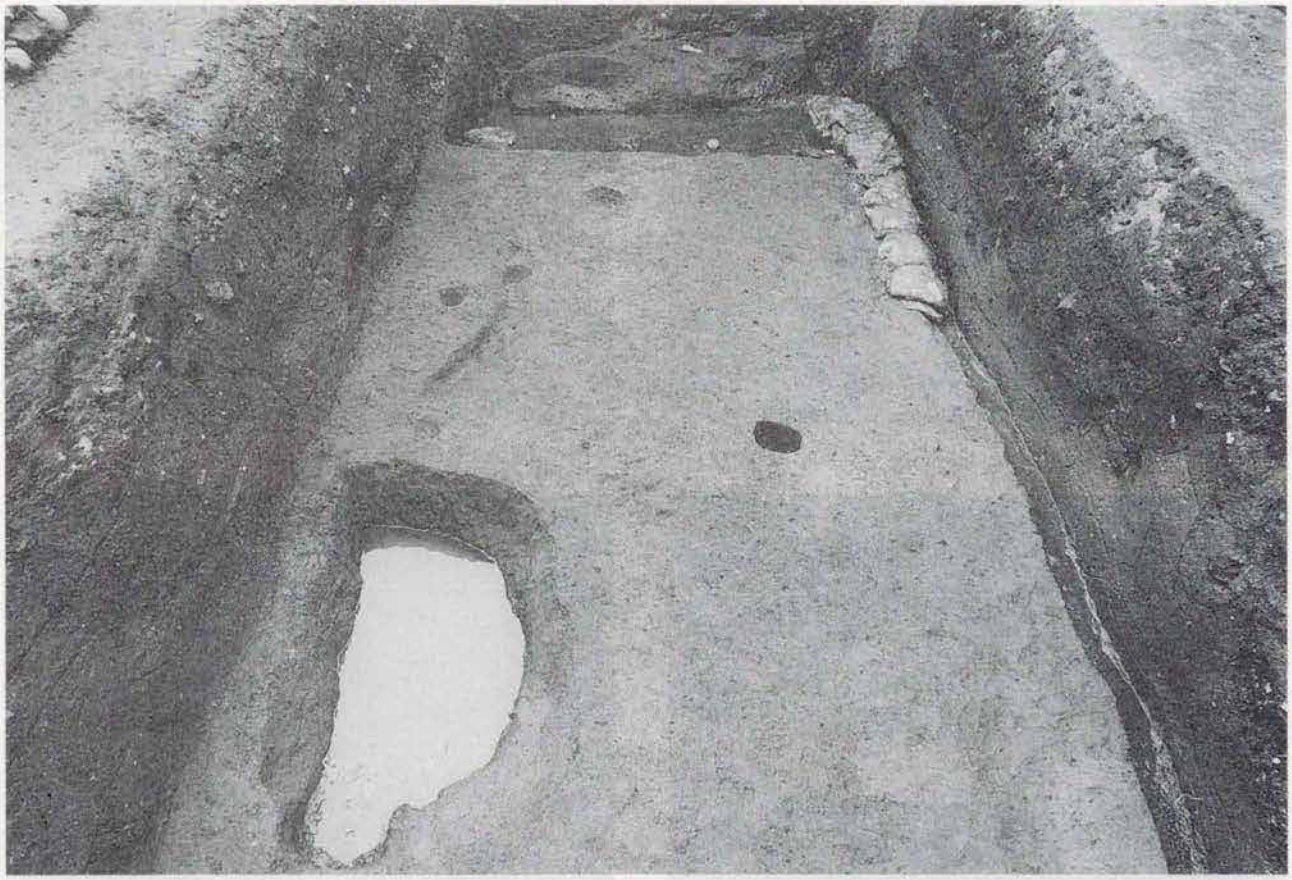


▲ c. 溝1b（東から）

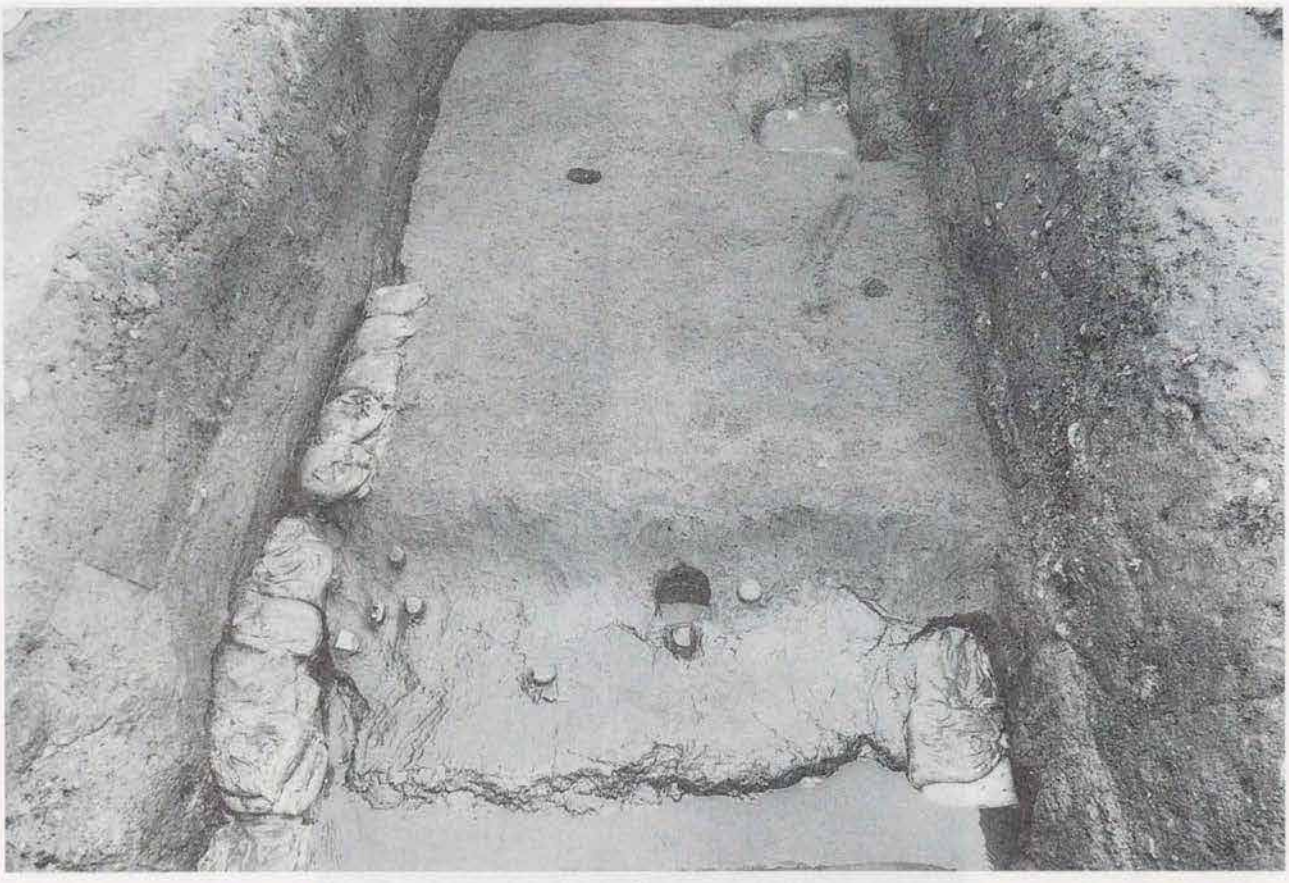
▲ d. 溝1b（西から）

▲ e. 溝1b土層堆積（西から）

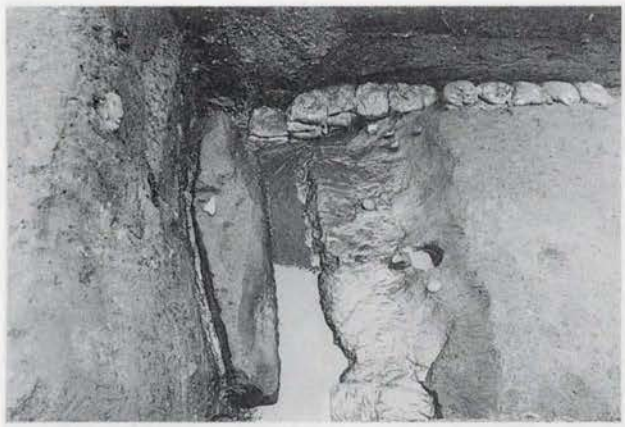
図版 7



▲
▼ a. 第 4 面全景 （南から）
（北から）

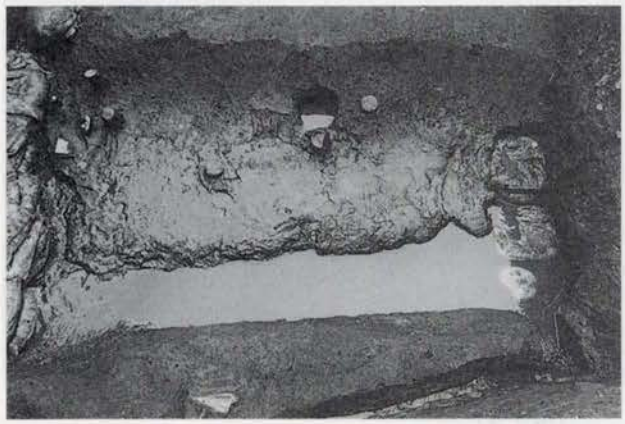


図版 8



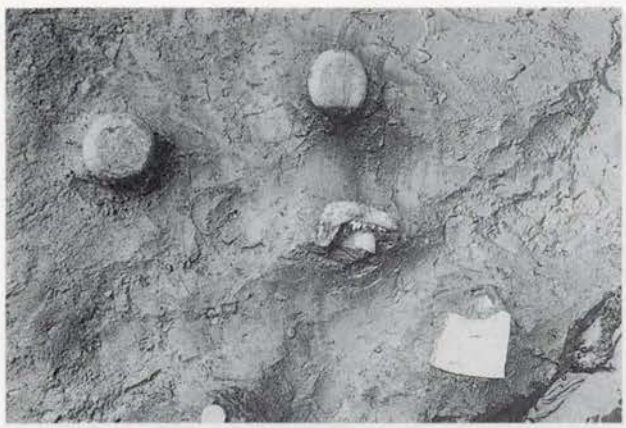
▲ a. 溝1c（西から）

▲ b. 溝1c（東から）

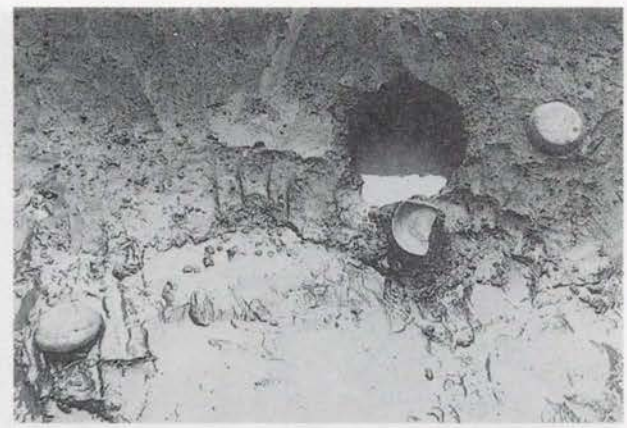


▲ c. 溝1c（北から）

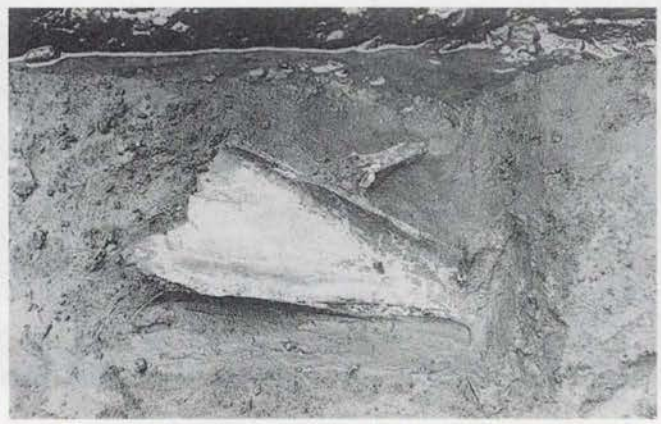
▲ d. 溝1c土層堆積（北西から）



（東から）

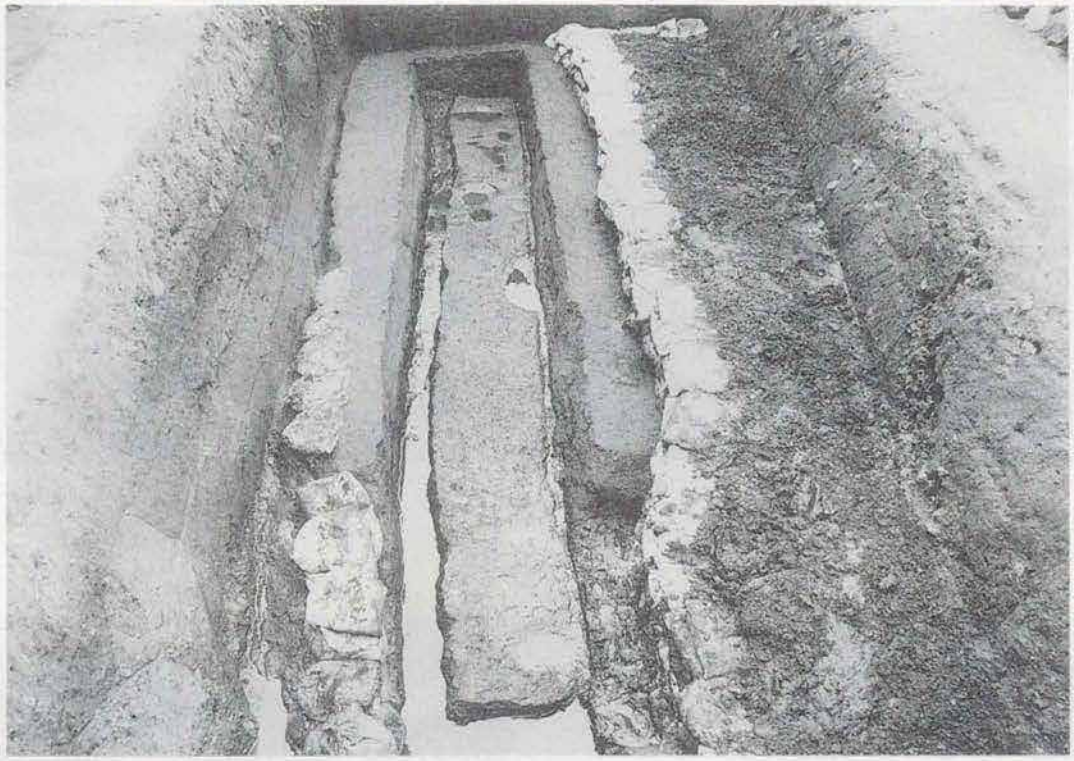


▲ e. 溝1c底遺物出土状況　（北から）



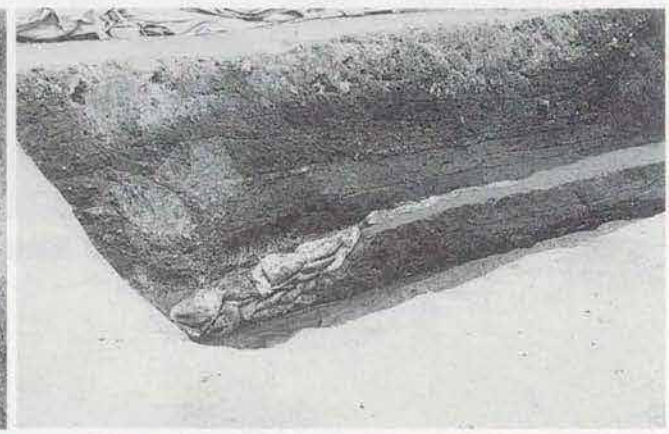
▲ f. 溝1c肩
獣骨出土状況
（南から）

図版 9

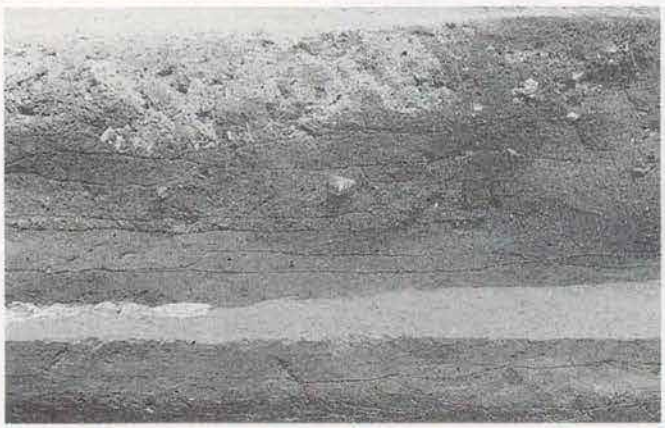


▲ a. 第 4 面下トレンチ（北から）

▲ b. 調査区北壁 土層堆積



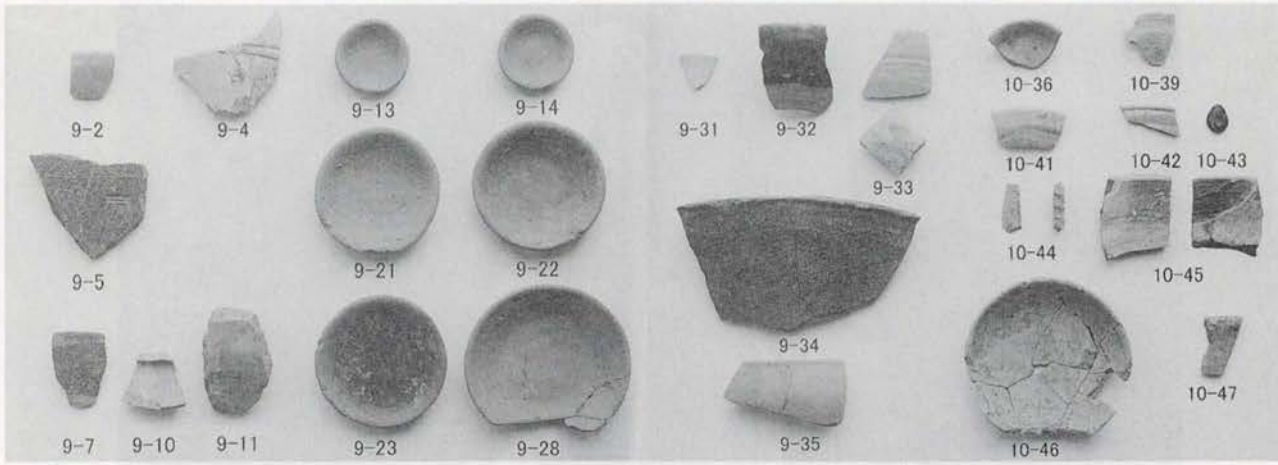
▲ c. 調査区東壁 土層堆積

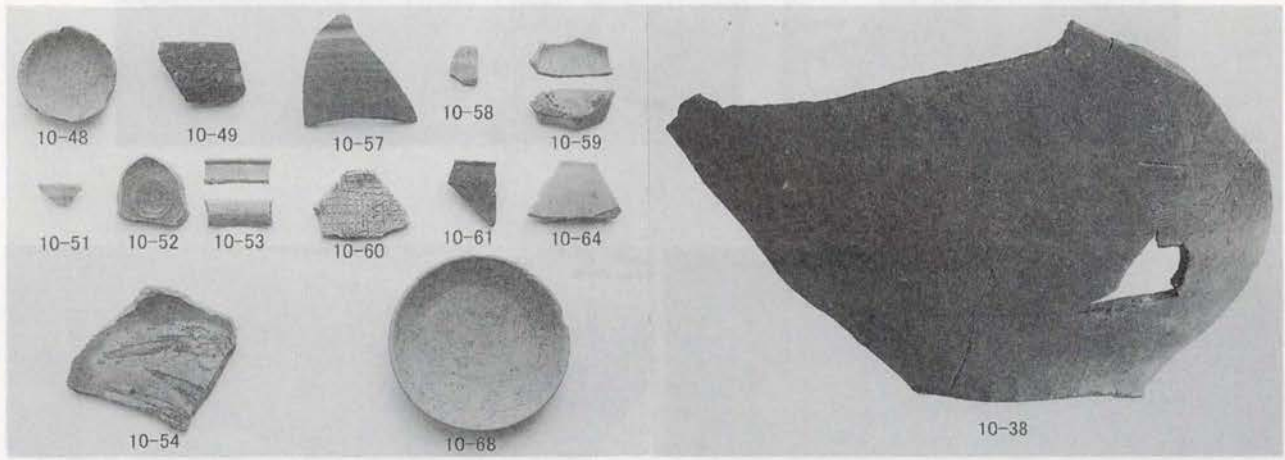


▲ d. 調査区東壁 土層堆積

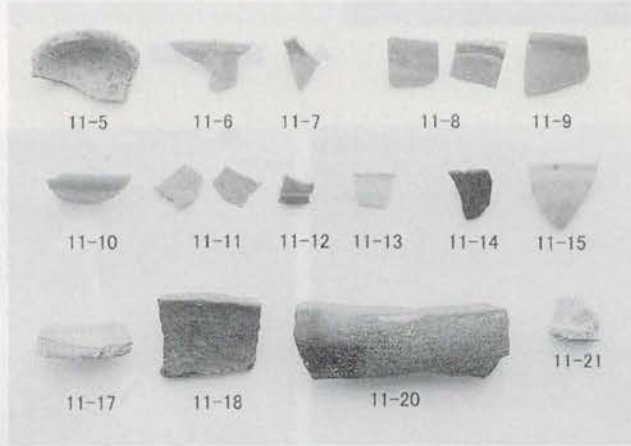
▲ e. 作業風景

図版10



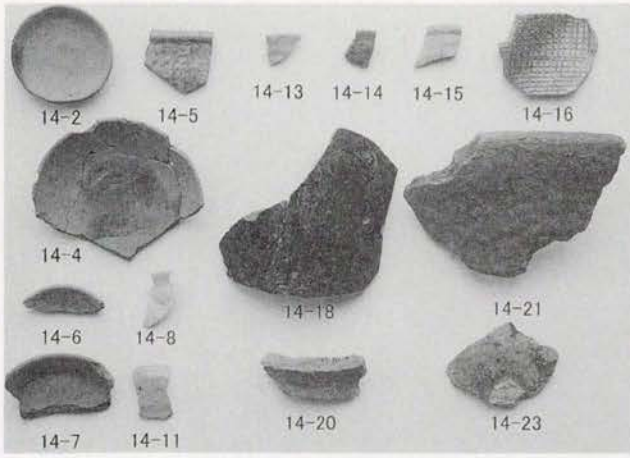


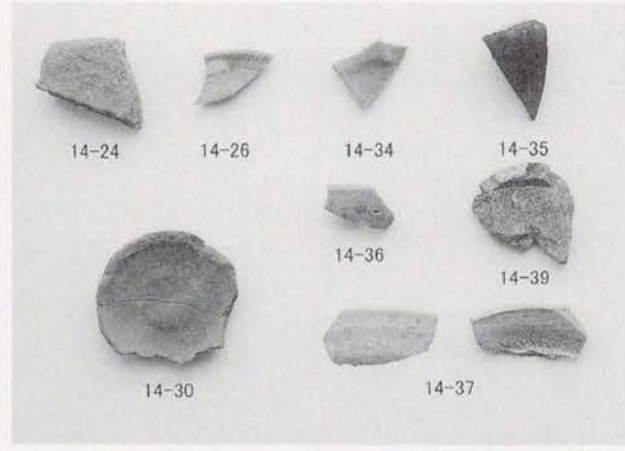
▲a. 第1面建物・土壙・柱穴



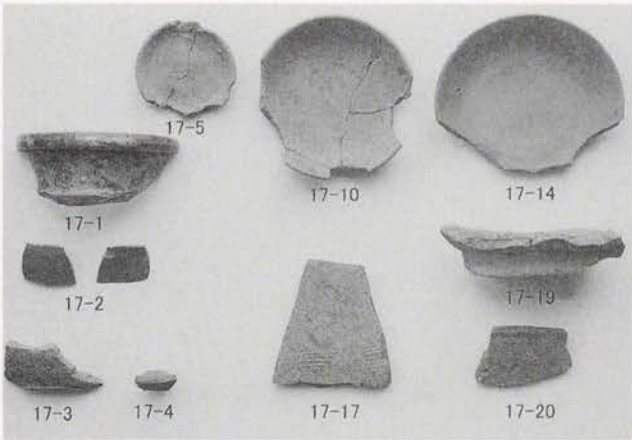
▲b. 1面上

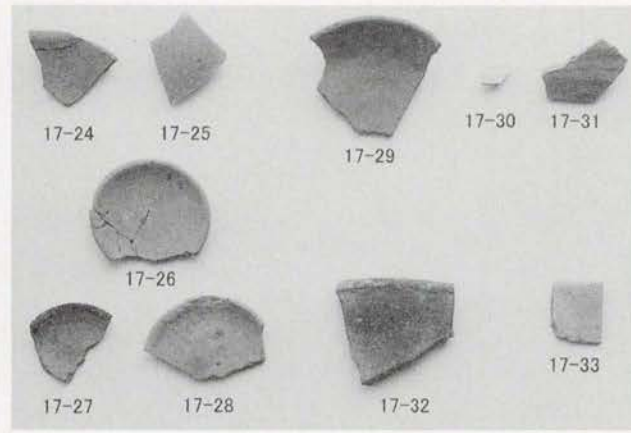
図版11



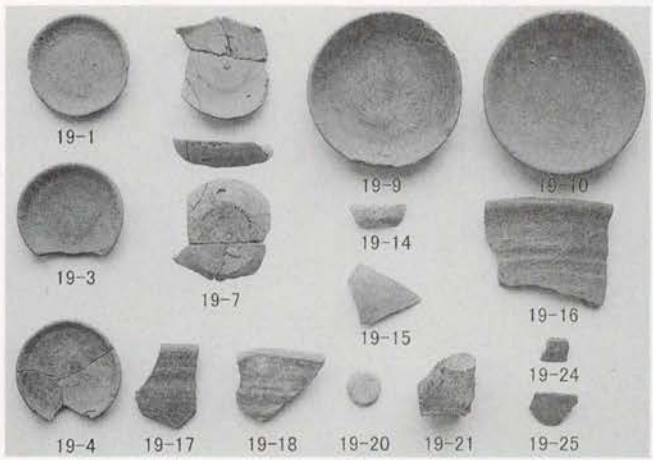


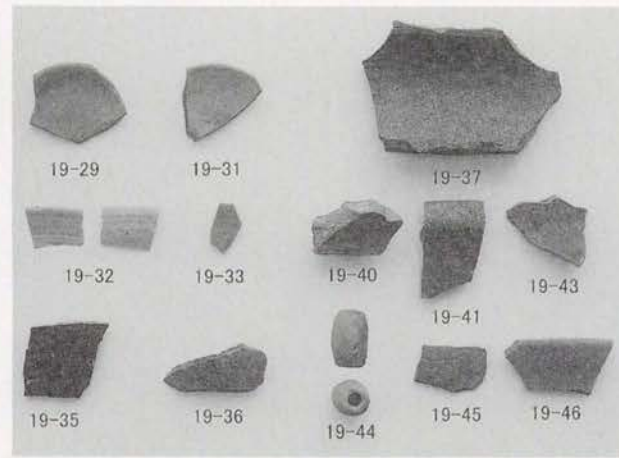
▲a. 第2面　土壙・溝・井戸・柱穴・2面上



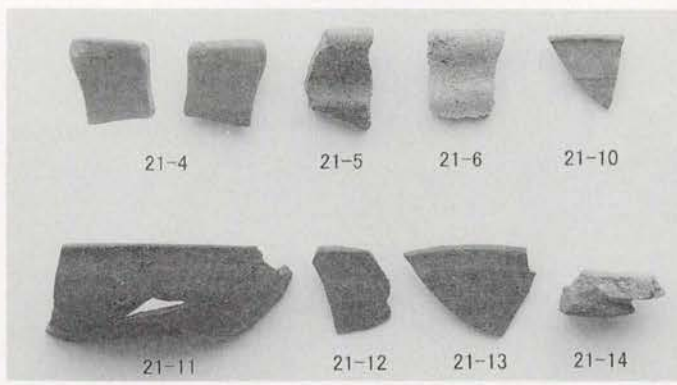


▲b. 第3面 建物・溝・柱穴・3面上





▲c. 第4面 溝・4面上



◀d. 4面下トレンチ

甘縄神社遺跡群（あまなわじんじゃいせきぐん）　(No.177)

長谷一丁目227番25地点

例　言

1. 本報は鎌倉市長谷一丁目227番25における個人専用住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調 査 期 間：平成15年６月17日～同年７月10日
   調 査 面 積：36.20㎡
3. 本地点の略称はAH1227とした（「甘縄神社遺跡群」内長谷一丁目227番地点の略）
4. 調査体制
   担　当　者：馬淵和雄
   調　査　員：鍛治屋勝二・松原康子
   調査補助員：沖元道・吉田智哉
   作　業　員：奥山利平・藤枝正義・川島仁司・天野隆男（以上(社)鎌倉市シルバー人材センター）
5. 本報作成分担
   遺構図整理：鍛治屋
   遺物実測・同墨入れ：松原
   遺物観察表：松原
   遺物集計表：松原
   遺物写真撮影：鈴木
   原 稿 執 筆：馬淵・鍛治屋・松原
   編集・総括：馬淵

目　　次

第１章　調査地点概観…… 110
　1．位置と地勢…… 110
　2．歴史的背景…… 113
第２章　調査の概要…… 118
　1．調査に至る経緯…… 118
　2．調査方法…… 118
第３章　調査の成果…… 119
　第１節　層序…… 119
　第２節　各説…… 119
　1．１面…… 119
　2．2a面…… 124
　3．2b面…… 124
　4．３面…… 127
　5．３面下制限深度まで…… 129
　6．遺構外採集遺物…… 130
第４章　常滑集中出土について―まとめにかえて…… 136

挿　図　目　次

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡…… 111
図２　座標図…… 118
図３　土層断面と遺構変遷図…… 120
図４　１面遺構全図…… 121
図５　１面上出土遺物…… 122
図６　p.3・同出土遺物…… 122
図７　2a・2b面遺構全図…… 123
図８　落ち込み2出土遺物…… 124
図９　３面遺構全図,落ち込み３出土遺物（1）…… 125
図10　落ち込み３出土遺物（2）…… 126
図11　落ち込み３出土遺物（3）…… 127
図12　落ち込み４・同出土遺物（1）…… 128
図13　落ち込み4出土遺物（2）…… 129
図14　調査最終確認状況（制限深度面）…… 130
図15　３面下制限深度までの出土遺物…… 131
図16　遺構外採集遺物…… 131

表　目　次

表１　出土遺物観察表（1）…… 132
表２　出土遺物観察表（2）…… 133
表３　出土遺物観察表（3）…… 134
表４　出土遺物数量表…… 135
表５　出土遺物接合表…… 136

図　版　目　次

図版１　遺構（1）…… 138
図版２　遺構（2）…… 139
図版３　遺構（3）…… 140
図版４　出土遺物（1）…… 141
図版５　出土遺物（2）…… 142

第１章　調査地点概観

１．位置と地勢

長谷は大仏と大仏坂周辺、およびその東側の山沿いに位置し、北は常盤谷戸と笛田、東は笹目の谷戸、南は由比ヶ浜と坂ノ下の海岸地帯、西は極楽寺の谷戸に接する。「長谷」の地名は中世の文献には見えないが、明治時代初期編纂の「相模国鎌倉郡村誌」（『神奈川県皇国地誌』）によれば、（長谷村は）往古由比郷の内にあり、また深沢の郷内に属していたという。あるいは「由比ノ庄」小坂の郷内に属していたこともあった、とある。「由比ノ庄」という荘園の存否については不確実ながら、徳川家康による慶長十二年（1607）の長谷寺再興の棟札には「相州小坂ノ郡」とみえる。現在北鎌倉山ノ内に「小坂」の小字が残るが、距離的に隔たっており、関連はわからない。同誌によれば、江戸時代初めに甘縄と深沢の一部を併せて長谷村としたという。このとき、この地西端の山腹にある長谷寺にちなんだ名称をつけたものであろう。同誌には長谷寺創建の際に地名をつけたかのようにも書かれており、江戸時代のはじめに一村を成したという記述との間に齟齬がみられる。長谷のほぼ中央に位置するのが甘縄神明社で、調査地点は神明社から100m余り東の山裾にある。現在の地番は長谷一丁目227番25。

甘縄神明社は、長谷大仏・長谷観音とともに鎌倉市内西部のこの地に独特の宗教空間を形成する。「甘縄」とは神明社一帯の通称である。この地名は、鎌倉時代にはほぼ若宮大路二ノ鳥居並びの無量寺ケ谷から長谷観音前交差点付近にいたる、鎌倉旧市街地西南部の広範な地域を指していたが、先述のように西半部が近世初めに長谷という名称になり、さらに近代には北（東）半部が、そこに設けられた天皇家の別邸にちなんで「御成町」へと変わった。その上昭和後期の鎌倉市役所による行政区画の改変があって、伝統あるこの地名は公的には地上から消滅した。今では長谷一丁目のこの神社周辺に遺称としてのみ存在する「甘縄」は、かつての郷域の西端部分に過ぎない。行政上での名称の消えた今、「甘縄」の範囲は厳密さを失いつつあるが、調査地点はそのうちに含まれるとみてよい。

「深沢」も現在の行政区分としてはもはや存在しない。しかし、これもかつては常盤・梶原・笛田・山崎・津などを含む広い郷名であり、『吾妻鏡』からは長谷大仏の辺までも「深沢里」のうちであったことが知られる（嘉禎四年３月23日・同年５月18日・建長四年８月17日条）。後述するように、甘縄神明社は源頼朝入部の時点ですでに存在していた。古代以来の神明社の多くは神戸や御厨に勧請されることが多いことから高柳光寿は、甘縄神明社の辺りまでも大庭御厨の内だったのではないか、といっている（高柳1959）。それが正しいとすれば、平安時代から鎌倉時代にいたるどこかの時点で、大庭御厨の東の一部が深沢という郷名に変わったと考えなければならない。

調査地点の南側には「長谷小路」が東西に通じている。長谷小路は、西の長谷観音前の交差点から直線的に東進し、笹目付近から北に緩やかに曲がったのち、六地蔵交差点を過ぎると南に向きを変えて下馬四ツ角交差点にいたる。しかし六地蔵から先がどう呼ばれていたかは確定していない。観音前交差点から長谷小路を約300m東に進むと、左手（北）に幅・奥行きとも200m前後の谷戸がある。この谷戸は、かつてそこに存在した寺の名にちなみ、長楽寺ヶ谷という。調査地点はこの谷の開口部左側の山裾に位置する。現在の鎌倉海岸汀線からは500mほど離れている。地表面の標高は10m弱で、近・現代の造成土を除くと、7.5～８mが中世期の数値となる。長谷小路からは100mほど北に位置する。小路道路面との比高は現況で約1.5mである。

長楽寺ヶ谷の標高は、開口部で10m前後、谷尻で26～27mと相当な比高差があり、途中３つないし４つの段状部が観察できる。谷は南向きで日当りがよく、上段部（現在鎌倉文学館のある場所）は鎌倉の

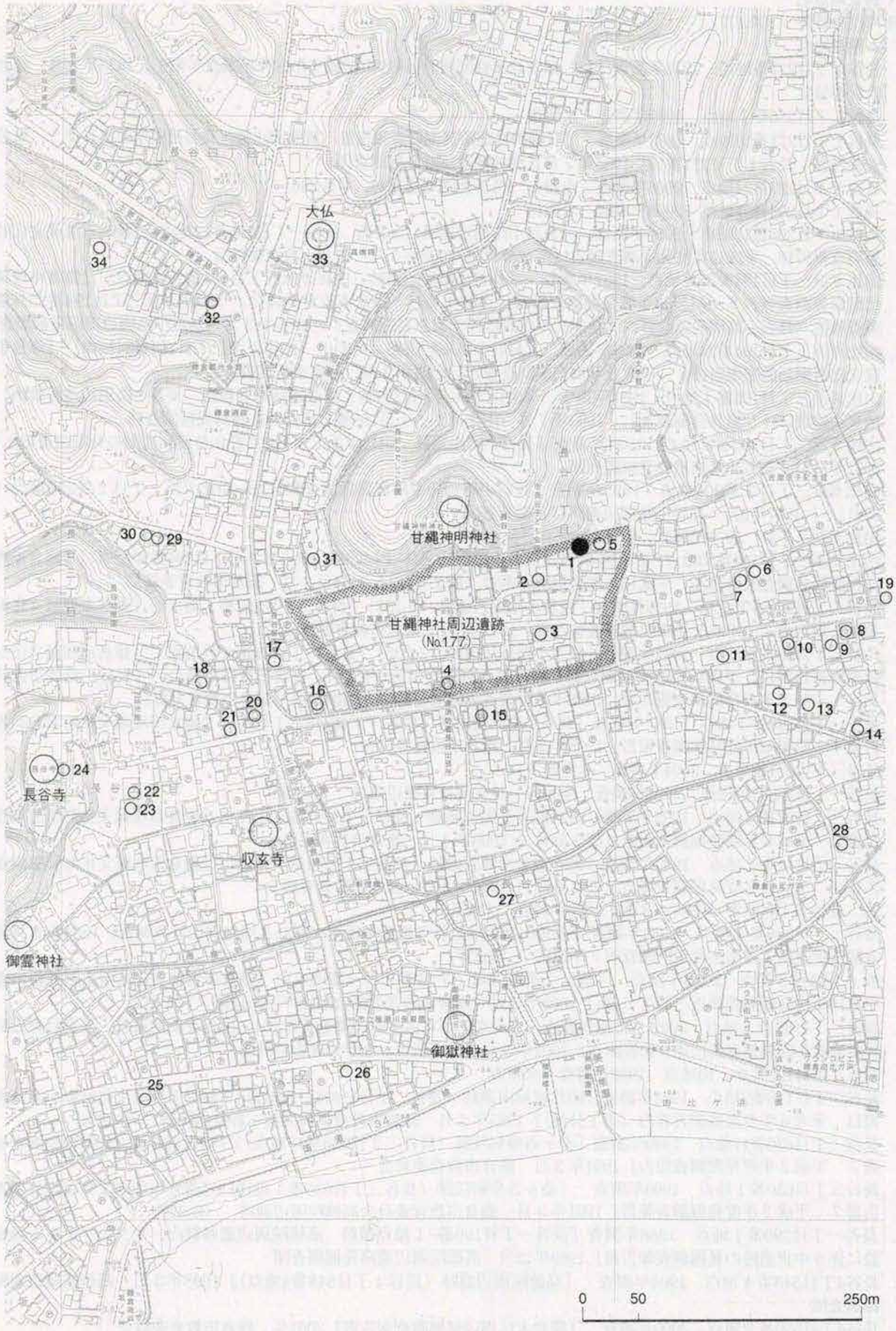


図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図１調査地点名

甘縄神社遺跡群　(№177)

1．本調査地点
2．長谷１丁目227番地点　1978年調査「43．伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983年３月　鎌倉市教育委員会
3．長谷１丁目236番Ⅰ地点　1991年調査　未報告
4．長谷１丁目271番10地点　1992年調査　『甘縄神社遺跡発掘群査報告書　鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う　緊急調査報告書　長谷１丁目271番10』1995年７月甘縄神社遺跡群発掘調査団
5．長谷１丁目227番24地点　2006年調査　未報告　長谷小路周辺遺跡　(№236)
6．長谷１丁目204番外地点　2000年調査　未報告
7．長谷１丁目205番12地点　2000年調査　「長谷小路周辺遺跡（№236）長谷一丁目205番12地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告18　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』2002年３月　鎌倉市教育委員会
8．由比ガ浜三丁目194番25外地点　1987年調査　「長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目194番25外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告５　昭和63年度発掘調査報告』1989年３月　鎌倉市教育委員会／『由比ガ浜三丁目194番25外遺跡調査報告　長谷小路周辺遺跡群内、秋山ビル建設に伴う緊急発掘調査』　1990年３月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団
9．由比ガ浜三丁目194番24地点　1989年調査　「長谷小路周辺遺跡（№236）（由比ガ浜三丁目194番24地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会
10．由比ガ浜三丁目199番Ⅰ地点　1987年調査　『由比ガ浜三丁目199番Ⅰ地点遺跡調査報告　長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査』　1990年７月　由比ガ浜三丁目199番Ⅰ地点所在遺跡発掘調査団
11．由比ガ浜三丁目202番２地点　1984年調査『長谷小路南遺跡　由比ガ浜三丁目202番２外所在遺跡の発掘調査報告書』1992年２月　長谷小路南遺跡発掘調査団
12．由比ガ浜三丁目２番200地点　1995年調査『長谷小路周辺遺跡群発掘調査報告書―由比ガ浜三丁目２番200地点（№236）―』1997年9月　長谷小路周辺遺跡群発掘調査団
13．由比ガ浜三丁目　1978年調査　未報告
14．由比ガ浜三丁目194番50地点　2002年調査「長谷小路周辺遺跡（№236）（由比ガ浜三丁目194番50地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第２分冊）』2004年３月　鎌倉市教育委員会
15．長谷二丁目252番Ⅰ地点　1989年調査「長谷小路周辺遺跡（№236）（長谷二丁目252番Ⅰ地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告書』1991年3月　鎌倉市教育委員会
16．長谷一丁目33番３地点　1997年調査「長谷小路周辺遺跡（№236）（長谷一丁目33番３外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　平成10年度発掘調査報告書（第２分冊）』1999年３月　鎌倉市教育委員会／『長谷小路周辺遺跡13　長谷１-33-３地点発掘調査報告書』1998年８月長谷小路周辺遺跡発掘調査団／鎌倉市教育委員会
17．長谷一丁目248番１地点　1987年調査「長谷小路周辺遺跡（長谷一丁目248番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４　昭和62年度発掘調査報告』1998年３月　鎌倉市教育委員会
18．長谷三丁目641番地点　2004年調査　未報告
19．長谷一丁目265番19地点　2005年調査　未報告　長谷観音堂周辺遺跡　(№296)
20．長谷三丁目97番４地点　1993年調査「長谷観音堂周辺遺跡（長谷三丁目97番４地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第２分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会
21．長谷三丁目41番イ地点　1992年調査「長谷観音堂周辺遺跡（長谷三丁目41番イ地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10　平成５年度発掘調査報告（第２分冊）』1994年３月　鎌倉市教育委員会
22．23．長谷三丁目81番（１次・２次）1995年調査　未報告
24．長谷三丁目658番１地点　1984年調査『海光山慈照院長谷寺観音堂新築に関わる埋蔵文化財の調査』1985年３月長谷寺観音堂改築工事出土文化財調査坂ノ下遺跡　(№217)
25．坂ノ下53番３地点　2003年調査　「坂ノ下遺跡（坂ノ下53番３の一部地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告（第２分冊）』2005年３月　鎌倉市教育委員会由比ガ浜南遺跡　(№315)
26．長谷二丁目85番１地点　2002～2003年調査　『かながわ考古学財団調査報告164　由比ガ浜南遺跡　都市計画道路長谷常盤線街路整備事業に伴う発掘調査』2004年３月　財団法人かながわ考古学財団
27．長谷二丁目122番９、10地点　1989年調査　未報告
28．長谷二丁目118番2地点　1994年調査「由比ガ浜南遺跡（長谷二丁目118番2外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会桑ヶ谷療病院跡　(№294)
29．長谷三丁目630番17地点　1990年調査「桑ヶ谷療病院跡（長谷三丁目630番17地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会
30．長谷三丁目630番１地点　1990年調査　「桑ヶ谷療病院跡（長谷三丁目630番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会高徳院周辺遺跡　(№327)
31．長谷一丁目290番１地点　1988年調査『長谷一丁目190番-１地点遺跡　高徳院周辺遺跡群内、グランフォルム鎌倉建設に伴う中世遺跡の発掘調査報告書』1989年12月　高徳院周辺遺跡発掘調査団
32．長谷4丁目548番４地点　1994年調査　『高徳院周辺遺跡（長谷４丁目548番4地点）』1995年３月　高徳院周辺遺跡発掘調査団
33．長谷4丁目550番２地点　2000年調査　『鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』2001年　鎌倉市教育委員会
34．長谷4丁目541番地点　1992年調査　未報告

海を見渡せる勝地である。背後の山は谷の名称と共通し、長楽寺山という。長楽寺山の西、甘縄神明社の裏山を御輿ヶ岳というとすれば、両者は連なったひとつの山塊ということになる。「御輿（見越）岳」は鎌倉西南部にあった可能性の高い山だが、『万葉集』以来の歌枕であった「見越崎」の所在とともに、それがどこを指すかはいまだ確定的ではない。鎌倉西部の景観を構成するこれらの地名については、改めて考慮される必要があろう。

また、この一帯に関連する地名として、古来「美奈瀬川」（『万葉集』巻14　東歌）がある。見越崎とともに万葉の著名な歌枕であるこの川は、現在ほとんどが暗渠になっているが、長楽寺谷に源を発し、現在の稲瀬川のすぐ東で海に注ぐ。稲瀬川は大仏の左右の谷から流下してきた川で、東にやや蛇行しながら海に流れ込む。この川もまたその多くの部分が暗渠になっている。両者はもともと河口を共有する一つの川であり、後者は前者の転訛であろうという。河口近くでは現状の両者の間、約50mほどが川幅であった可能性がある（上本2000第200図など）。

2．歴史的背景

律令時代以前

旧鎌倉地区では、古くから人の往来が確認できる。

鶴岡八幡宮から大倉にかけての一帯で縄文時代前期から後期にいたる遺物が採集されており（赤星1959）、また雪ノ下一丁目にある「北条小町邸」と名づけられている場所からは、縄文晩期の河跡湖もしくは河川跡も発見されている（馬淵ほか2002）。弥生時代中期後半以降には、大倉から杉本にかけての滑川河岸段丘上や（馬淵1999など）、台・鎌倉山の丘陵地帯に大規模な集落が展開するが、調査地点付近ではこのころまでの遺構は確認されていない。

古墳時代に入ると、大倉の平地部や、調査地点にほど近い海岸砂丘地帯で集落が確認されるようになる。本地点東約600mの海岸砂丘上には、現在の「和田塚」一帯に群集墳（「下向原古墳群」）が営まれたが、明治以降の開発・開墾で湮滅した。付近から扇カ谷にかけては埴輪片が採集されることも珍しくない（河野ほか1990など）。明治20年（1887）、このうちの「采女塚」と呼ばれる古墳（円墳であろう）から、人物埴輪３体のほか、馬埴輪・円筒埴輪が発見された。『古事記』や『日本書紀』には、倭建命の子足鏡別王が「鎌倉之別」などの祖、とある。大和朝廷と深いつながりのある「別」が鎌倉にいたとされることは、４世紀代の２基の前方後円墳が、のちの律令期でいえば鎌倉郡と御浦郡の境に当る場所に造営されていること（「長柄・桜山古墳群」）と併せ、もっと注目されてよい。

調査地点西南160mに位置する甘縄神明社前の地点４の調査では、弥生時代後期以降土器が出土し始め、古式土師器や、古墳時代後期のいわゆる「比企型」坏、房総系とみられる土器、また甕などがみられる（菊川1995）。遺構は検出されていないものの、その器種構成と種類の豊富さは至近の場所に集落の存在していることを予想させるに十分である。

律令時代

この時代の鎌倉はかなり繁栄していたようで、市内には濃密に遺跡が分布し、遺物の散布はほぼ全域で認められるようになる。調査地点一帯で人跡が確認されるのも、やはりこの時代からである。令制の鎌倉郡は天平七年（735）の『相摸国封戸租交易帳』に相摸（模）国八郡の一つとしてあらわれる。郡内には郷として五つの名があり、現在の旧鎌倉市街地は「鎌倉郷」のほぼ全域と「荏草郷」西半に相当すると考えられる。『交易帳』にはまた、「高田王」（天武天皇の孫か）の食封30戸（田135町109歩）が鎌倉郷に存在していたとみえる。郷それぞれの詳細な疆域は不明だが、調査地点付近はおおむね鎌倉郷の西端に位置するのであろう。

甘縄神明社は、正徳二年（1712）成立の社伝『相州鎌倉郡神輿山甘縄寺神明宮縁起略』によれば、和銅三年（710）僧行基の草創で、染屋太郎時忠が山上に神明宮を、麓に神輿山円徳寺を建立したのを始めとするという。しかし神明社の全国的な発生状況からみて、実際には頼朝入部の少し前、平安時代末期以降とするのが妥当であろう。

地点4では8世紀半ばに比定される東海系須恵器坏・高台付坏、同後半のいわゆる「相模型」・「南武蔵型」の坏、平安時代前半8世紀末～9世紀初頭とされる「甲斐型」坏などがかなりの量出土している（菊川1995）。今小路西遺跡（御成小学校内）では、鎌倉郡衙である可能性の高い大型掘立柱建物群が発見された。調査地点近辺でも東400mに位置する「長谷小路周辺遺跡」（由比ガ浜三丁目1175番2ほか地点）から石帯部材の銙尾が出土しており（馬淵1994）、律令の官吏の居住域に示唆を与える。

律令時代の鎌倉を語るに不可欠なのが、東海道である。大化元年（645）に五畿七道制が施行されて以来、宝亀二年（771）に改編されるまで、東海道が鎌倉を通っていた。この時期の東海道駅路は、鎌倉から葉山に抜け、三浦半島の脊梁を横断して現在の横須賀市公郷町にあった宗元（源）寺（廃寺、現曹源寺）付近を通過、馳水海（現横須賀市走水）から浦賀水道を上総に渡って、終着駅の常陸国府（茨城県石岡市）にいたった。しかしその詳細な道筋は明らかではない。

鎌倉への進入についても、おおむね二通りが想定される。まずは木下正史の説で、藤沢から深沢（現笛田付近）を抜け、大仏坂を越えて長谷に入り（詳細経路不明）、現在の長谷小路を経て六地蔵交差点にいたる、というもの（木下ほか1997）。この経路では、深沢・笛田辺で、古代官道にしばしばみられるように、近代に敷設された水道路(すいどうみち)（ここでは横須賀水道）に重なることとなる。もう一つは筆者の考える経路で、海沿いに来て稲村ガ崎を超え（詳細経路不明）、坂ノ下から由比ガ浜海岸を経て稲瀬川河口辺から市域に向かって北上、現六地蔵交差点にいたる、というものである。この場合の根拠は、海岸から六地蔵に向かう道がほぼ直線をなし、しかも先述の通り、その脇の「長谷小路周辺遺跡」（由比ガ浜三丁目1175番2ほか地点）から石帯部材の銙尾が出土している点にある。官道は当然その時々の相模国府の位置に左右されるであろうから、両案の差はそこに由来するのかもしれない。なお、両案とも六地蔵交差点からは鎌倉郡衙に向かう北への道路が派生するはずである。また、ともに本線は六地蔵交差点から東に折れて名越方面に向かうことになるが、名越山麓に到達するのか、途中から小坪方面に折れるのかは断案がない。いずれにせよ東海道駅路が調査地点から至近の位置を通過していることは確実で、それが地点4などにおける当該期遺物の豊富な出土の背景にあるのは間違いない。六地蔵から東に向かうとする根拠は次のとおりである。ほぼ方画を企図した中世の都市区画内にあって、この道は六地蔵から下馬四ツ角交差点までそれを無視するかのように斜行し、しかも少なくとも10世紀前半には存在することが判明している（この道脇を調査した際、古道の側溝が出ている。原廣志氏教示）。おそらく古来幹線として機能してきたために、鎌倉時代になっても改変することが困難だったのではないか。

8世紀中葉成立の『万葉集』には、鎌倉を詠ったものや、鎌倉に関連したものが4首ある。うち2首が調査地点にほど近い場所を詠む。

鎌倉の見越の崎の石崩の君が悔ゆべき心は持たじ（巻14　東歌　相聞）

ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満なむか（同）

この「見越の崎」は万葉仮名では「美胡之能佐吉」であり、「美胡之」に「見越」と「御輿」のいずれを充てるかは、後世の判断による。「見越の崎」については、稲村ガ崎か甘縄神明社背後の山とされる「見越岳（御輿ヶ岳）」、あるいは両者を結ぶ山塊全体を指す、などといわれ、確実ではない。この点は後述する。「石崩」は「いわくえ」と読む。「美奈の瀬川」は、現在ほとんどが暗渠になってはい

るが、長谷を南北に流れる小河川にその名をとどめる。源流の一つを調査地点背後の長楽寺谷にもち、稲瀬川の東50m～100mを流れる。先述のように両者はもともと河口を共有する同一水系の川であった。

王朝国家時代

11世紀中葉、源頼義は勅定により相模守として鎌倉に下向、上野介平直方の女をめとった。そして嫡子八幡太郎義家を甘縄の地に生み、岳父直方から所領の鎌倉を委譲される。これにより鎌倉は源氏のものとなった。甘縄神明社の社伝によれば頼義は神明社に祈り、康平六年（1063）に社を修復、永保元年（1081）には義家がさらに修復を加えた。源氏が神明社に関わり深いことがわかるが、この経緯が材木座の元鶴岡八幡宮とよく似ていることは注意を要する。頼義が嫡子義家を生んだという「甘縄」が、広いこの地域のどこであったかはわからない。

この時代忘れてならないのは、大庭御厨の存在であろう。古来神明社の多くは神戸や御厨に勧請されていることから、先述のとおり、高柳光寿は甘縄神明社の場所も大庭御厨の内ではなかったか、といっている（高柳1959）。甘縄神明社南西の至近距離にある坂ノ下御霊神社が大庭御厨開発領主である平景正（鎌倉権五郎景政）の廟社とされ、また現在の梶原にも彼を祀る御霊神社があること、景政嫡流の梶原景時の屋敷が現梶原にあったとされていること、などの点からみてもそれは首肯できよう。

鎌倉時代

『吾妻鏡』には調査地点近辺の消息がしばしば登場する。そのひとつである稲瀬川の記事から、鎌倉時代のこの付近の動静をみてみよう。

稲瀬川は鎌倉時代初期から一貫して鎌倉の西側境界として登場する。最も有名なこの川の記事は、『吾妻鏡』治承四年十月十一日条であろう。北条政子が伊豆阿岐戸郷から鎌倉に入る際、日次が宜しくないということで稲瀬川川辺の民家に止宿した、という。ほかにもたとえば『源平盛衰記』治承四年（1180）８月の「小坪坂合戦」のくだりに、「畠山次郎ハ五百騎ニテ、由井ノ浜、稲瀬川ノ耳ニ陣ヲ取テ、赤旗天ニ耀ケリ」（「大沼遇三浦附小坪坂合戦事」『神奈川県史　資料編』１-826）とある。『吾妻鏡』には、鎌倉に出入りする人々を頼朝が送迎する記事がいくつかみえる。降って承久三年（1221）には、承久の変で鎌倉を進発しようとした北条泰時が、いったん藤沢左衛門尉清近の稲瀬川宅に止宿している（五月二十一日条）。さらに降って鎌倉後期、鎌倉に到着した京都泉涌寺六世長老願行房憲静は、稲瀬川のほとりで念仏会をおこない、これがのちの大町安養院の前身をなしたという（『本朝高僧伝』『律苑僧宝伝』）。

これらの記事から、鎌倉に西から入ろうとしたときまず行き当たるのが、稲瀬川であったことがわかる。遅くとも鎌倉時代のごく初期には、西方との往還路がここに通じている。それこそがおそらく律令時代東海道の後世の姿だと考えられるが、経路についてはいくつか説があり、別稿の課題としたい。

甘縄神明社は『吾妻鏡』にしばしば登場する。調査地点奥の谷の名称ともなった長楽寺について触れておきたい。『新編鎌倉志』に長楽寺谷について、「此谷ニ昔シ寺有、長楽寺ト号ス、法然ノ弟子隆寛住セシトナリ」とある。安貞元年（1227）７月法然弟子の隆寛は、奥州に流される途中、鎌倉での帰依者森入道西阿（毛利季光）の秘計により８月１日相州飯山に移され（『法然上人行状画図』）、12月13日に没した。これによると隆寛の鎌倉滞在はきわめて短く、長楽寺の開創や教義の弘通が可能であったとは思えない。おそらく智慶・願行・蓮念ら弟子たちの活動に与ったところが大きかったのであろう。なかでも智慶は、天台から浄土に帰依し、洛東長楽寺で学んだのち鎌倉長楽寺を開いた、と伝えられる（『浄土伝灯総系譜』）。『吾妻鏡』文応元年（1260）四月二十九日条には、「鎌倉中焼亡、自長楽寺前、至亀谷人屋」とある。この長楽寺とは現在の長楽寺ヶ谷のものであろう。『新編相模国風土記稿』に、（大町の）祇園山長楽寺安養院は昔笹目谷辺にあったといい、そこは今も長楽寺谷の名を残していると

いう。先述のように、泉涌寺六世憲静は稲瀬川のほとりで念仏会をおこない、それが安養院の前身となったという伝えがある（『律苑僧宝伝』）。念仏会の場所が長楽寺であるとすれば、場所の錯誤があることになる。長楽寺の廃絶時期は不明である。

近在の鎌倉時代遺跡としては、はやくに1977・1978年に調査された地点2があり、鎌倉時代後期を中心とした板組みや溝、柱穴列が発見されたほか、いずれも完形近くに復元される鎌倉時代前期の渥美甕や中国産褐釉双耳壺などが出土した。神明社入口、長谷小路に面した地点4では3枚の生活面が検出され、鎌倉時代前期から掘立柱建物を中心に4時期の遺構変遷が確認されている。

鎌倉時代のこの一帯は「鎌倉中」の周縁部といってよい場所であり、長谷小路を隔てた南の海岸砂丘地帯は、職能民の活動拠点であると同時に町にとっての葬地でもあった。長谷小路沿いにも職人たちが多く住んでいたと推測され、本地点はその北辺にあたるといえる。西の大仏坂は奈良坂・清水坂などと同様下層民の集住した場として知られ、坂（旧道）に面した地点31では荼毘址も発見されている。

鎌倉時代以後

甘縄神明社一帯の消息は減り、大仏の見聞記が中心になる。この辺の地名が長谷に変わるのは、「相模国鎌倉郡村誌」（『皇国地誌』）によれば、冒頭に書いたように江戸時代初めであり、甘縄と深沢の一部を併せて長谷村とした。このとき、長谷寺にちなんだ名称をつけたようである。

「御輿ヶ岳」と「見越崎」

本地点裏山の「御輿ヶ岳」と、先に揚げた万葉集東歌のなかの歌枕「見越の崎」との関係について、最後に簡単に言及しておきたい。万葉集から3世紀以上経った長治二・三年（1105・1106）頃成立した「堀河百首」（『堀河院百首和歌』）には、左京大夫藤原顕仲の次の歌がある。

かまくらやみこしがたけに雪きえてみなのせ川に水まさるなり

（『新編国歌大観』第四巻「堀河百首」1382番）

藤原顕仲は右大臣藤原顕房の子で、散位従四位下。旅に親しみ、収められたその百首のなかには東路の歌枕を詠んだものがいくつかある。鎌倉も実際に訪れたはずである。しかし掲出歌についていえば、御輿岳の雪解けと水無瀬川の増水という二つの事態を単純に関連付けただけで、ほとんど技巧というものを見出せない。ここにあるのは万葉の歌枕を用いたありきたりの様式性であり、作歌の伝統的な観念の産物といわざるを得ない。実際のところ、目にも明らかな川の増水をもたらすような雪が、鎌倉に降ることがあるのかどうか。とはいえ、ともかくも二つの現象間の因果関係が詠われているところから、両者の位置が近いとの認識があったのは確かであろう。「みなのせ川」が仮に現在の稲瀬川であるとしても、神明社の近くを流れていることに変わりはない。とすれば、ここにいう「みこしがたけ」とは、やはり神明社裏山付近を指すとみなければならない。では、万葉の「見越の崎」とはどこだろうか。「みこしがたけ」のこととみてよいのだろうか。

藤原顕仲から1世紀半あまりのちの鎌倉時代後期、和歌を能くした幕府6代将軍、親王宗尊は私歌集『瓊玉和歌集』で、

都にははや吹きぬらしかまくらのみこしか崎の秋のはつ風

と詠った。宗尊は文永三年（1266）まで鎌倉にいた。このとき万葉の歌枕は現実の地名としてあるようにみえる。しかし、ほぼ同時代の文永六年（1269）、万葉学者の僧仙覚はその『万葉集註釈』で、

ミコシノサキトハ、イマノコシコエヲイイケルトナム申ス。ムカシモ、イシノヨハクテ、クヅレケルニヤ

として、腰越に比定している。このとき「ミコシノサキ」は、過去の地名として伝聞体で書かれていることに注意したい。仙覚は主として鎌倉に住んで万葉集を研究した。著名な万葉の歌枕であるミコシノ

サキの名が同時代に生きていれば、当代きっての万葉学者であった仙覚が知らぬはずはない。鎌倉時代後期にはこの地名は、もはや里人の口承の中にしか痕跡をとどめていなかったのである。とすれば、宗尊の歌にみえる「みこしか崎」も実在の地名ではなく、顕仲と同じく万葉の歌枕を観念的に用いたものである可能性が高い。

はるか律令時代の地名であった「ミコシノ崎」は、郡郷制の変貌とともに次第に失われ、鎌倉時代にはもはや所在不明となっていたのであろう。代わって遅くとも12世紀初めの藤原顕仲の時代には、現甘縄神明社の裏山が御輿ヶ岳と呼ばれるようになっていたのではないか。すでにこの時代には、御輿ヶ岳と見越崎の区別はよくついていなかったものと推測される。なお仙覚の時代にも、腰越の岬が岩の崩れやすい場所と一般に看做されていたらしいことに留意しておきたい。

現在主流となっている、見越崎を稲村ガ崎とする説は、ほぼ江戸時代以来のものである。17世紀後半の歌学者北村季吟は、「御輿ヶ崎」（文字の混同があることに注意）は稲村ヶ崎のこと、といっている（『万葉拾穂抄』）。さらに、ほぼ同時代の僧契沖は、元禄三年（1690）完成の『万葉代匠記』で、

相模国風土記云、鎌倉郡見越崎、毎有速浪崩石。国人名号伊曽布利。謂振石也。イハクエハ悔ベキト云ハムタメナリ

として、「今の稲村ヶ崎なりといふ」とした。しかし、『相模国風土記』が契沖の生きた江戸時代前期に存在していたとは考えにくい。したがってここにいう『相模国風土記』とは、誰かの記した「逸文」に違いない。だが、現在それを見ることはできず、かえって契沖のこの文章自体が「逸文」とされている（『風土記』平凡社東洋文庫版・『風土記』岩波書店古典文学大系旧版等）。契沖は何を見たのだろうか。「伊曽布利」とは「磯触（振）」で、磯辺に打ち寄せる波のことである（『広辞苑』）。「石崩」は一般的な語ではないとみえ、どの辞典類にも先の『万葉集』の掲出歌のほかに用例がない。この言葉を使った理由として、「悔ベキト云ハムタメナリ」と契沖が指摘するのは、その通りであろう。「見越崎」はやはり海に突き出た場所とみて間違いはない。それにしても「今の稲村ヶ崎なりといふ」のは、契沖の見たらしい風土記の中にあるのだろうか。それとも彼の推論なのだろうか。後者とすれば根拠が不足しているといわねばならない。ただ、季吟と契沖の説がその後に強い影響を及ぼしたことは確かである。のち、大野重増は「稲村崎、霊山崎を云ふにや」という（『鎌倉根元記』）。また、吉田東伍も『大日本地名辞書』において「稲村ガ崎の古名なるべし」としている。ところがその一方、万葉学者の沢瀉久孝は「腰越の南の小動崎」といっている（『万葉集注釈』）。これは仙覚の一文から推論したものだろうか。結局、万葉の「見越崎」がどこのことか、不明のままである。しかしほぼ確実なことは、これは甘縄神明社背後の「御輿ヶ岳」とは違う、という点であろう。

注

上本進二　2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『神奈川県逗子市池子桟敷戸遺跡』　（仮称）医療保険センター建設用地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所
河野真知郎ほか1990　『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
菊川英政1995　地点４報告書
木下正史ほか1997　『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会
高柳光寿1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
馬淵和雄1994　「長谷小路周辺遺跡　由比ヶ浜三丁目1175番２外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10
馬淵和雄1999　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番５地点発掘調査報告書』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄2002　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18

（馬淵）

第２章　調査の概要

１．調査に至る経緯

個人専用住宅と地下室の建設にかかる発掘調査である。鋼管杭打ちをともなう基礎工事であったため確認調査を実施したところ、中世泥岩地形層が確認されるとともに遺物の出土があったため、発掘調査を実施した。

２．調査方法

調査地点は甘縄神明神社の東方約100m、神輿岳の麓にあり、現状は雛壇状の宅地となっている。宅地と南側道路との比高差は約2.1m（造成面高約9.8m、道路高約7.7m）、地表下約1.5mにおよぶ近・現代の盛土部分を重機で取り除いた後、調査を開始した。海抜高でいえば、確認調査時に検出した中世１面上面約8.3mから深度制限高である約７mまでを調査の対象とした。

測量は調査区に沿った任意の方眼軸を用いた測量後、４級基準点（D153・D154）を元に調査地点の座標を求めた。調査終了後、本報告書作成段階において、任意の方眼区画から座標区画X－76 389.000～76 400.000、Y－26 528.000～26 538.000内に遺構図を移しかえて掲載した。

調査は平成15年６月11日から同年７月10日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり。

６月11日（水）近・現代盛土部分を重機により掘削（16日完了）。機材搬入。

18日（水）確認調査時の中世第1面より調査開始。目立った遺構が検出されず包含層と認識する。

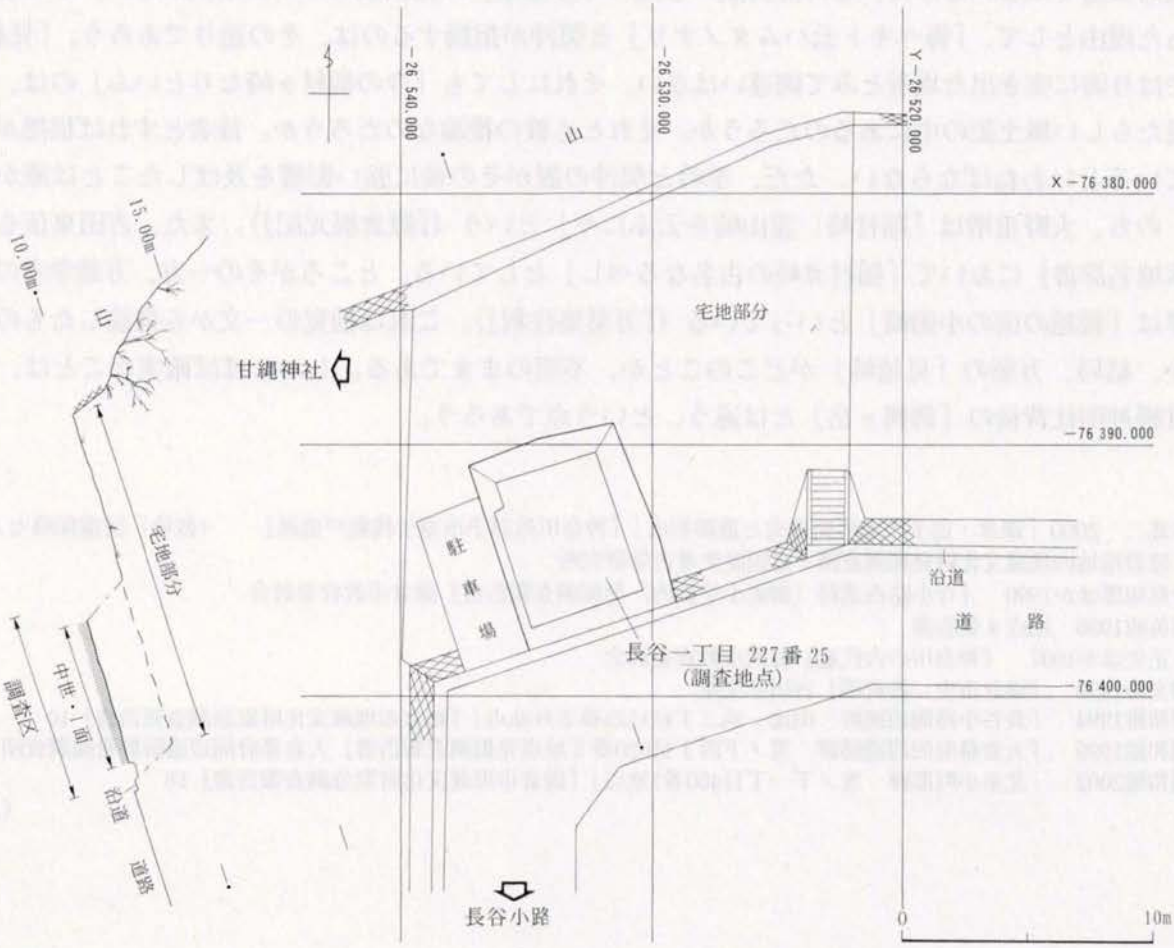


図２　座標図

6月19日（木）確認調査時の2面泥岩地形層まで掘り進める。この地形面を調査の1面とする。全景・個別撮影・実測をおこなう。

26日（木）座標位置測量。

27日（金）2面全景写真撮影・平面実測。3面に相当する常滑集中出土（落ち込み4）を検出。

7月2日（水）常滑集中土（落ち込み4）を上下層に分けて実測・遺物上げをおこなう。3面を検出。

3日（木）深度制限により調査区の東側は調査終了となる。

4日（金）3面全景写真撮影・平面実測。

5日（土）常滑集中出土（落ち込み3の一部）実測・遺物上げ完了。

8日（火）北・東壁写真撮影・実測。

9日（水）調査区西側を深度制限高まで掘り下げ。全景撮影・実測。土層下部追加。調査終了。

10日（木）機材等の撤収完了

（鍛治屋）

第3章　調査の成果

第1節　層序

本調査区は北が山、南が生活道に隣接した雛壇状の宅地の一部である。図Cの土層図にみるとおり表土の海抜高は約9.8mだが土層』1～3（厚さ約1.5m）は近・現代の造成土となっている。中世包含層とされる』4は約8.3mで検出された。』4～9にかけての粘質土は、中世の遺物を含んでいるものの、目立った遺構が検出できず、生活面とは考えにくい。確認調査時で第2面とした泥岩地形は表面が粗く、良好な整地面とは認めがたいが、若干の遺構と土師器が集中して検出されたため、調査においてはこれを1面とした。海抜高8.0～7.7mで北の山側から南へ緩やかに下っている。なお調査区南に接する現況道路の海抜高は7.7m、ここで比高差は0となる。

2面は小石大～50㎝前後の大ぶりな泥岩がつまった落ち込みがみつかった。調査区北西部分で炭化物や焼土を含んだ明褐色粘質土が狭い範囲ながら確認できたため、これを2面構成土とした。落ち込みは調査区の大半を占めており、造成か崩落によるものなのかは明らかにできなかったが、少なくとも2時期にわたり形成されていることが確認できたため、便宜上2a・2b面に類別した。検出高は約7.8m。

3面は1面と同質の泥岩地行土を北西部で検出した。検出高は約7.7mとなる。3面の落ち込みは2面とは異なり調査区中で東に向かって落ちている。また落ち込み内には常滑片を中心とした多量の遺物が含まれていた（落ち込み4）。

なお3面下は深度制限により海抜約7.1mまでの調査となった。生活面らしき整地層は認められず、図3で示したとおり、北側山腹から崩落してきた自然堆積層上面であろう。深掘り部分にかぎり、海抜約6.8mあたりから基盤層とみられる黒色粘質土を検出した。

（鍛治屋）

第2節　各説

1．1面（図4～6）

検出高：約7.7～8.0m　**構成土**：破砕泥岩地行　小石大～半人頭大泥岩詰まる　**検出遺構**：小穴5口

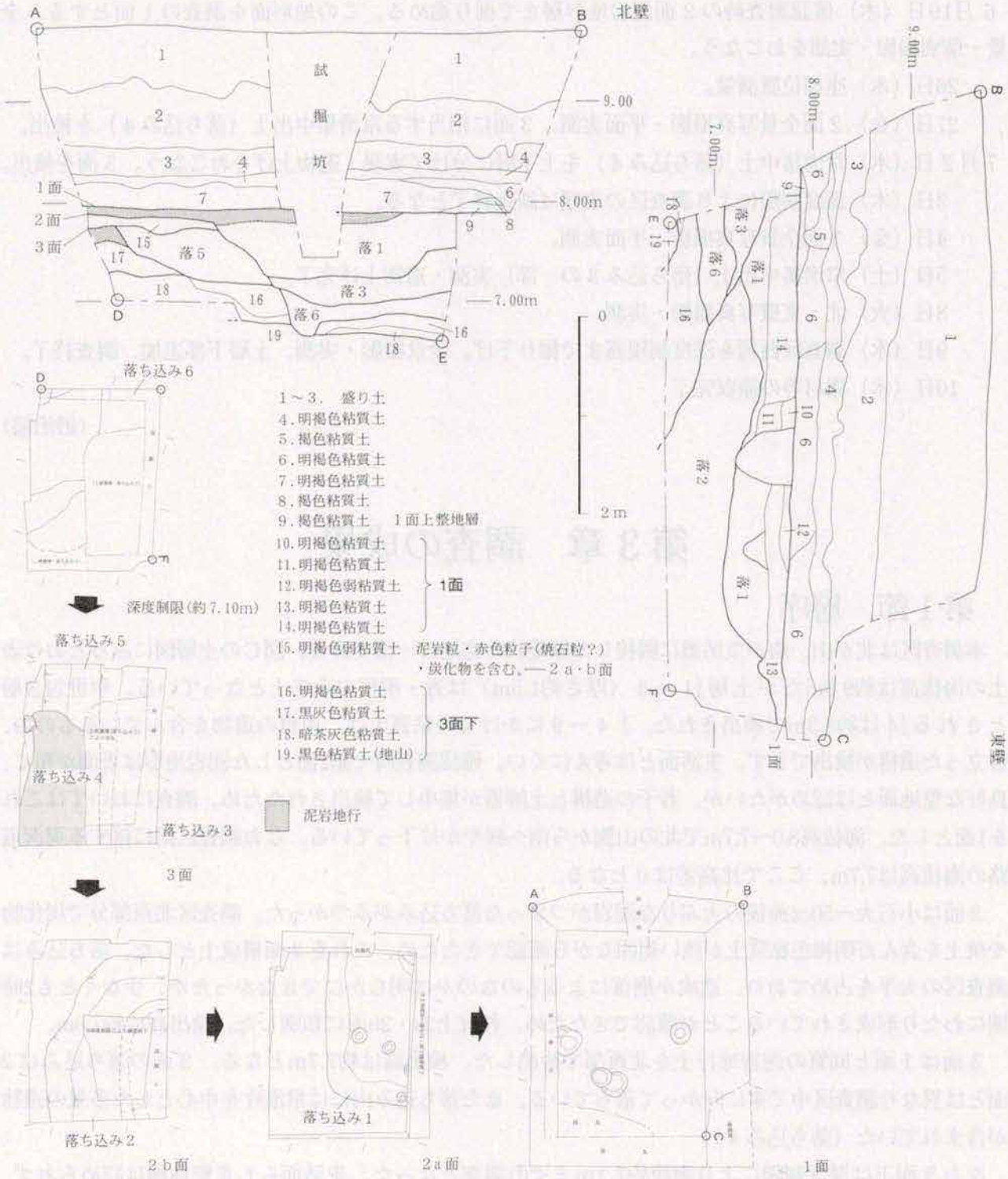


図3 土層断面と遺構変遷図

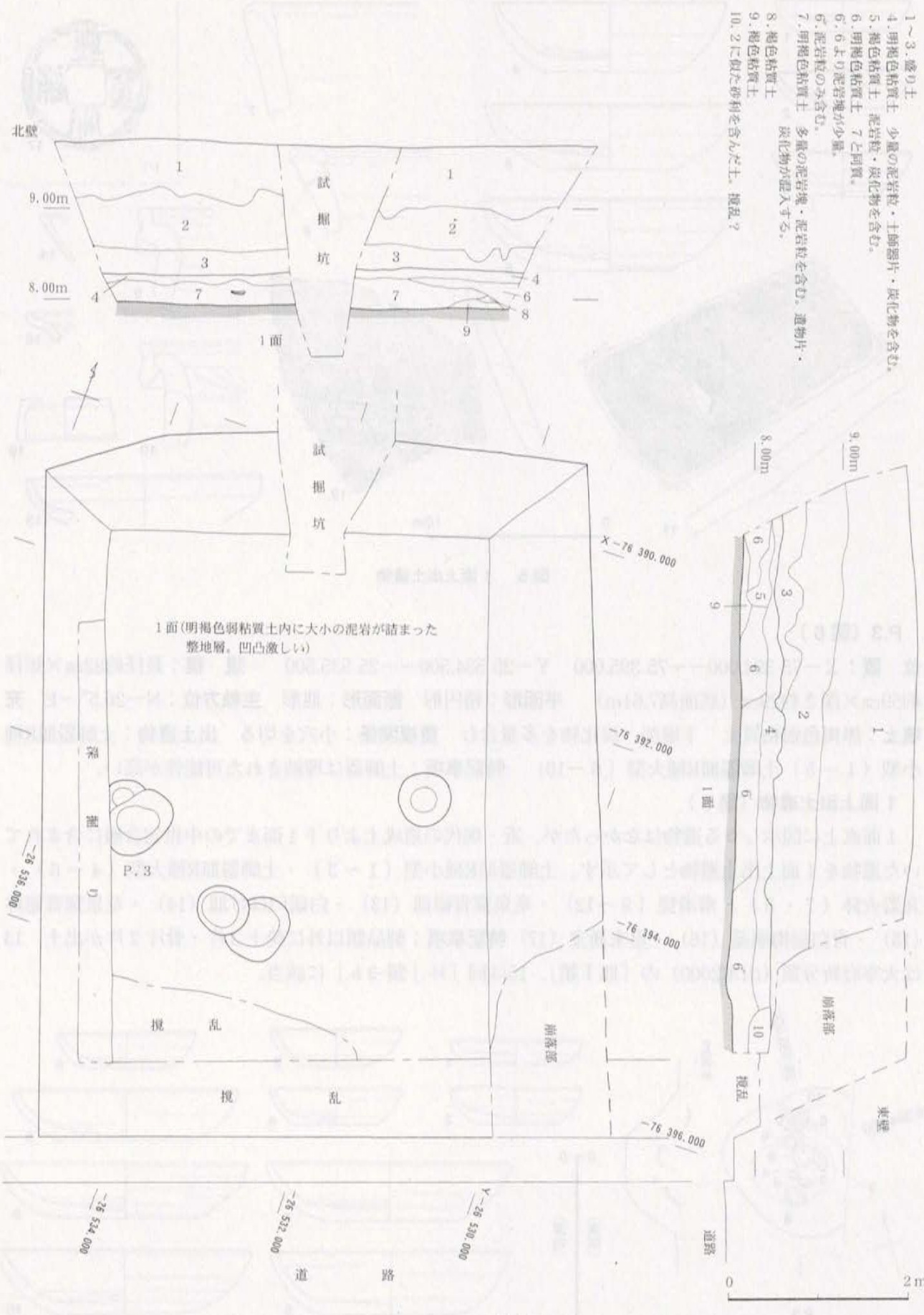

1～3．盛り土
4．明褐色粘質土　少量の泥岩粒・土師器片・炭化物を含む。
5．褐色粘質土　泥岩粒・炭化物を含む。
6．明褐色粘質土　7と同質。
6'．6より泥岩塊が少量。
6"．泥岩粒のみ含む。
7．明褐色粘質土　多量の泥岩塊・泥岩粒を含む。遺物片・炭化物が混入する。
8．褐色粘質土
9．褐色粘質土
10．2に似た砂利を含んだ土。撹乱？
北壁
9.00m
8.00m
試掘坑
1面
1面(明褐色弱粘質土内に大小の泥岩が詰まった整地層。凹凸激しい)
X−76 390.000
−76 392.000
−76 394.000
−76 396.000
Y−36 536.000
Y−36 534.000
Y−36 532.000
Y−36 530.000
P.3
落ち込み
撹乱
崩落部
道路
東壁
0
2m

図４　１面遺構全図

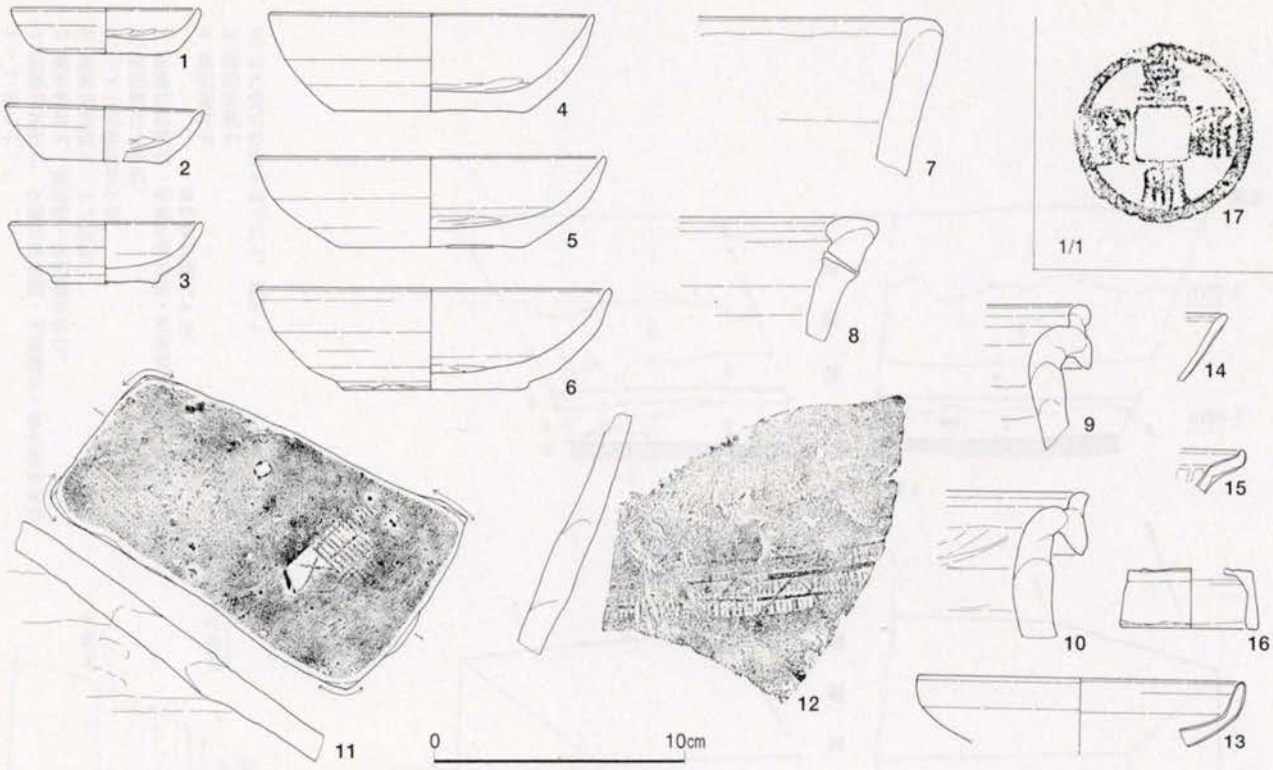


図５　１面上出土遺物

P.3（図６）

位　置：X－75 394.000～－75 395.000　Y－25 534.500～－25 535.500　**規　模**：長径約82㎝×短径約59㎝×深さ約29㎝（底面高7.61m）　**平面形**：楕円形　**断面形**：皿形　**主軸方位**：N－26.5°－E　**充填土**：黒褐色弱粘質土　下層部、炭化物を多量含む　**重複関係**：小穴を切る　**出土遺物**：土師器皿R種小型（１～５）土師器皿R種大型（６～10）　**特記事項**：土師器は埋納された可能性が高い。

１面上出土遺物（図５）

１面直上に図示しうる遺物はなかったが、近・現代の造成土より下１面までの中世包含層に含まれていた遺物を１面上出土遺物として示す。土師器皿R種小型（１～３）・土師器皿R種大型（４～６）・瓦器火鉢（７・８）・常滑甕（９～12）・竜泉窯青磁皿（13）・白磁口はげ皿（14）・竜泉窯青磁鉢（15）・青白磁梅瓶蓋（16）・皇宋通宝（17）**特記事項**：製品類以外に焼土３片・骨片２片が出土　13は大宰府新分類（山本2000）の「皿Ⅰ類」、15は同「坏」類-3ｂ」に該当。

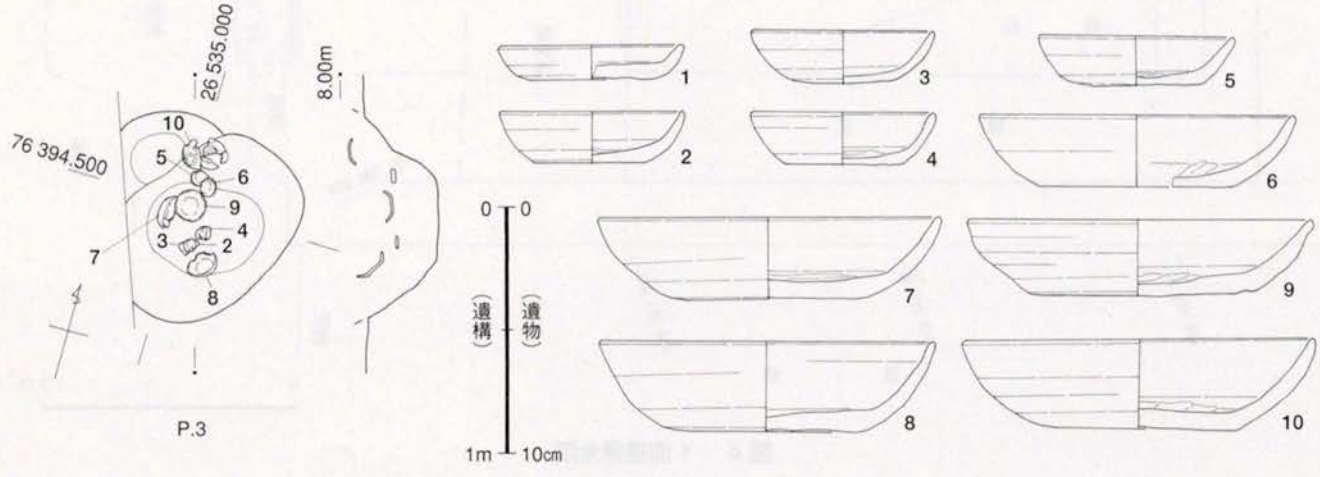


図６　p.3・同出土遺物

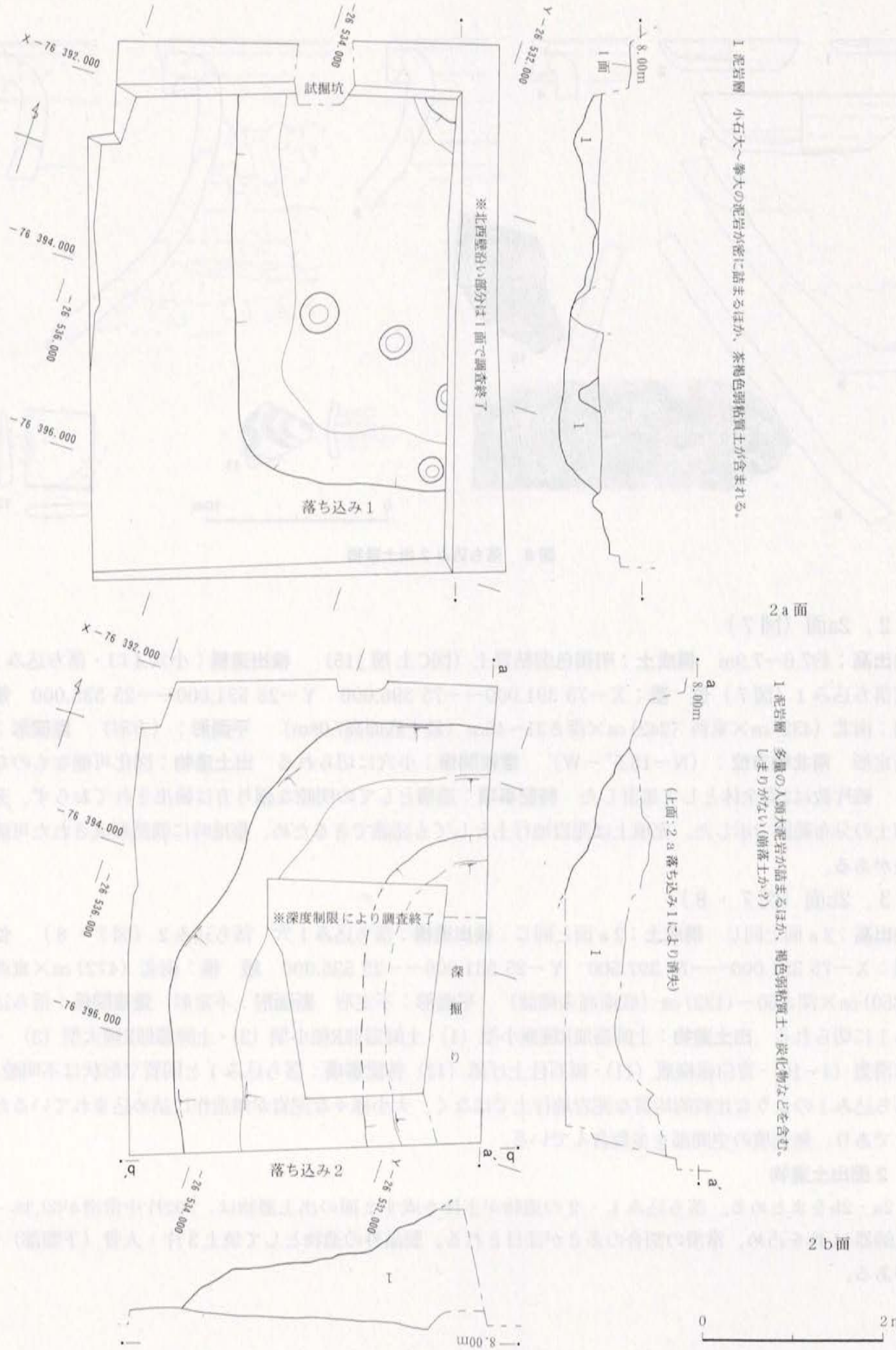


図7　2a・2b面遺構全図

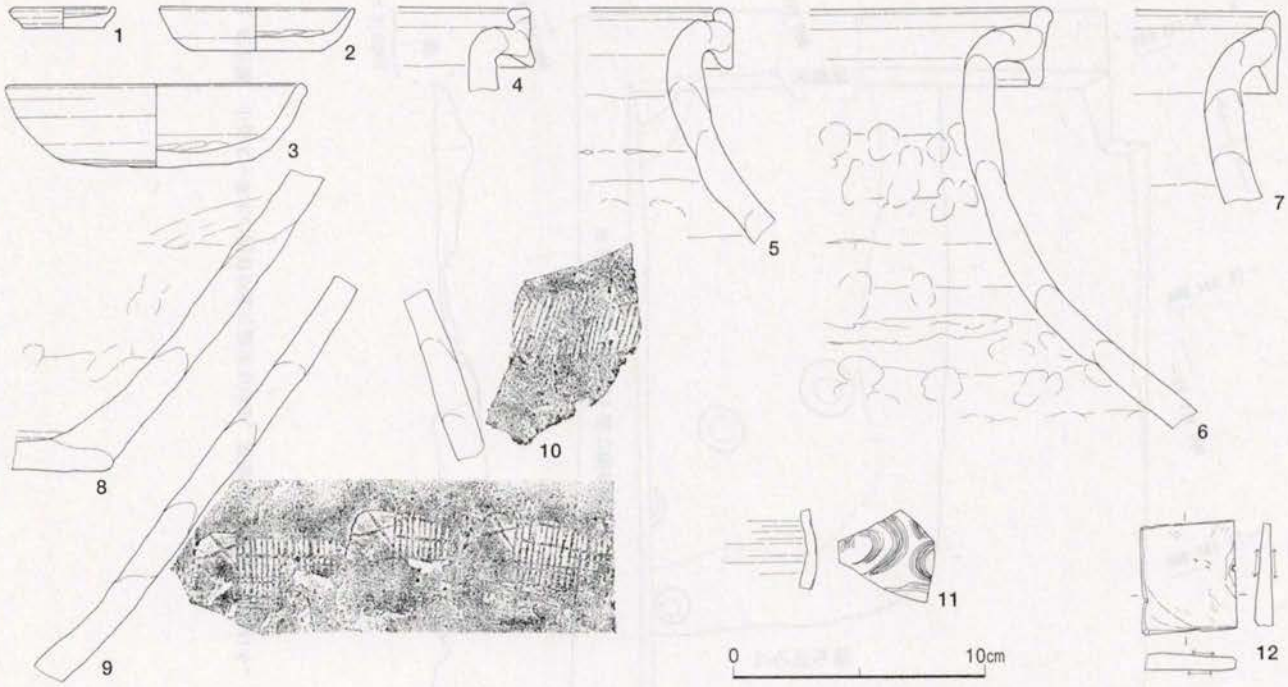


図８　落ち込み２出土遺物

２．2a面（図７）

検出高：約7.6～7.9m　**構成土**：明褐色弱粘質土（図C土層』15）　**検出遺構**：小穴４口・落ち込み１穴落ち込み１（図７）**位　置**：X－75 391.000～－75 396.000　Y－25 531.000～－25 535.000　**規模**：南北（432）㎝×東西（242）㎝×深さ31～46㎝（最下底面高7.08m）　**平面形**：（方形）　**断面形**：不定形　**南北軸方位**：（N－18.5°－W）　**重複関係**：小穴に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし　破片数は2面全体として集計した　**特記事項**：遺構としての明瞭な掘り方は検出されておらず、充填土の分布範囲で示した。充填土は泥岩地行土としても認識できるため、整地時に偶然形成された可能性がある。

３．2b面（図７・８）

検出高：２ａ面と同じ　**構成土**：２ａ面と同じ　**検出遺構**：落ち込み１穴　落ち込み２（図７・８）　**位置**：X－75 391.000～－75 397.500　Y－25 531.000～－25 535.000　**規　模**：南北（472）㎝×東西（350）㎝×深さ50～（132）㎝（底面高未確認）　**平面形**：不定形　**断面形**：不定形　**重複関係**：落ち込み１に切られる　**出土遺物**：土師器皿R種極小型（1）・土師器皿R種小型（2）・土師器皿R種大型（3）・常滑甕（4～10）・青白磁梅瓶（11）・砥石仕上げ砥（12）**特記事項**：落ち込み１と同質で形状は不明瞭。落ち込み１のような比較的均質な泥岩地行土ではなく、大小様々な泥岩が無造作に詰め込まれているだけであり、無充填の空間部を多数含んでいる。

２面出土遺物

2a・2bをまとめる。落ち込み１・２の遺物が主体を成す２面の出土遺物は、392片中常滑が52.3%・土師器44.4%を占め、常滑の割合の多さが注目される。製品外の遺物として焼土３片・人骨（下顎部）１がある。

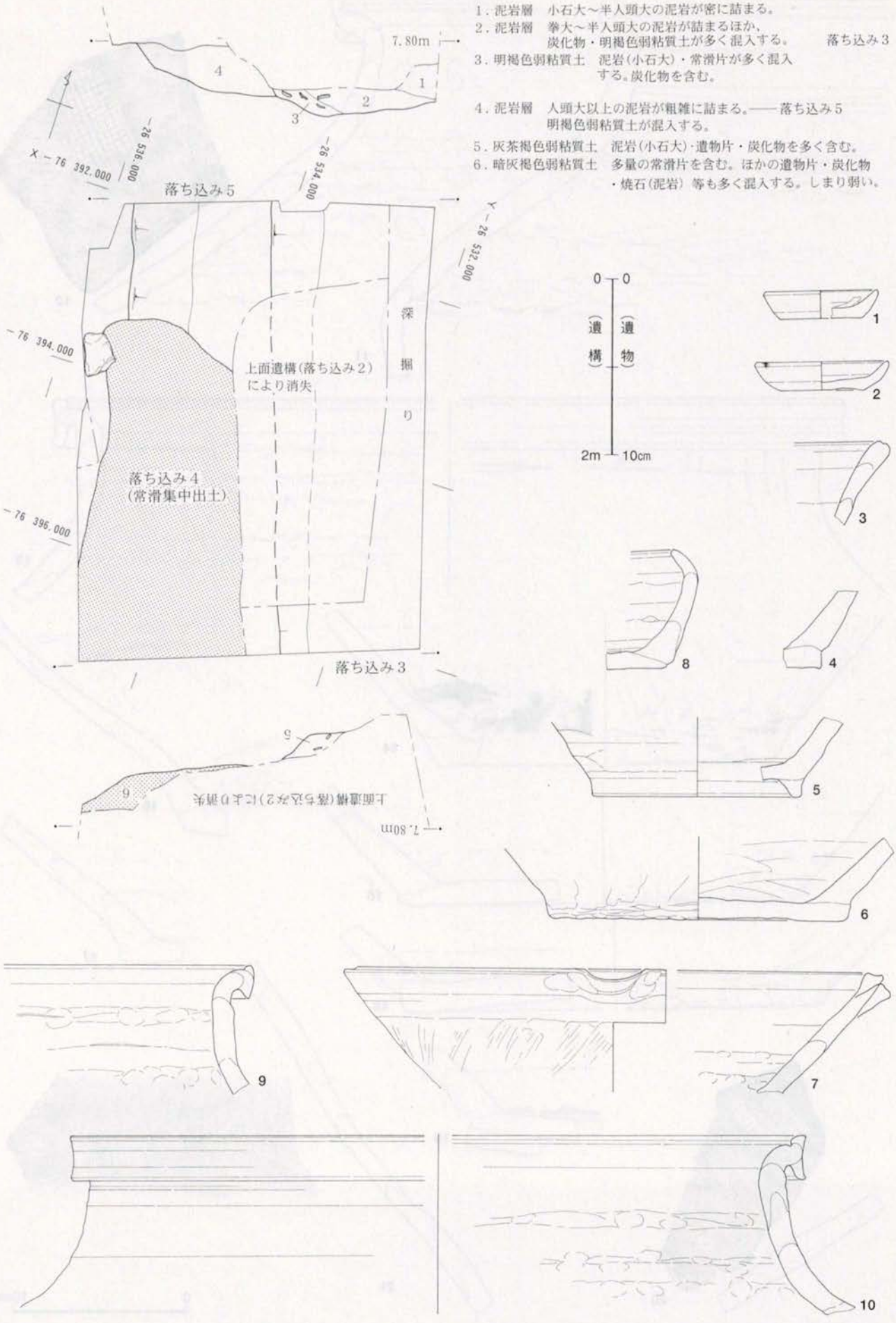


図9　3面遺構全図，落ち込み3出土遺物（1）

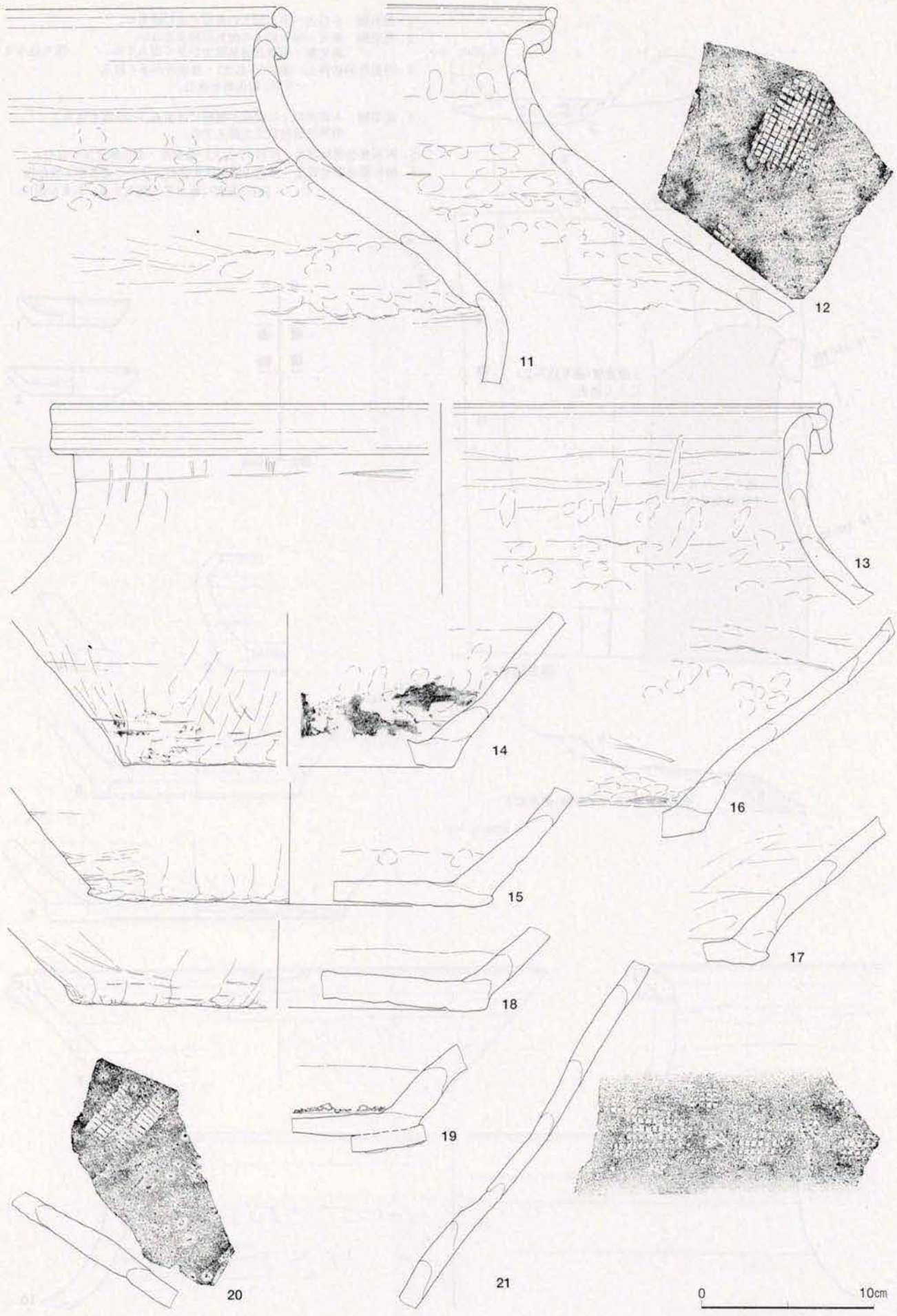


図10　落ち込み３出土遺物（2）

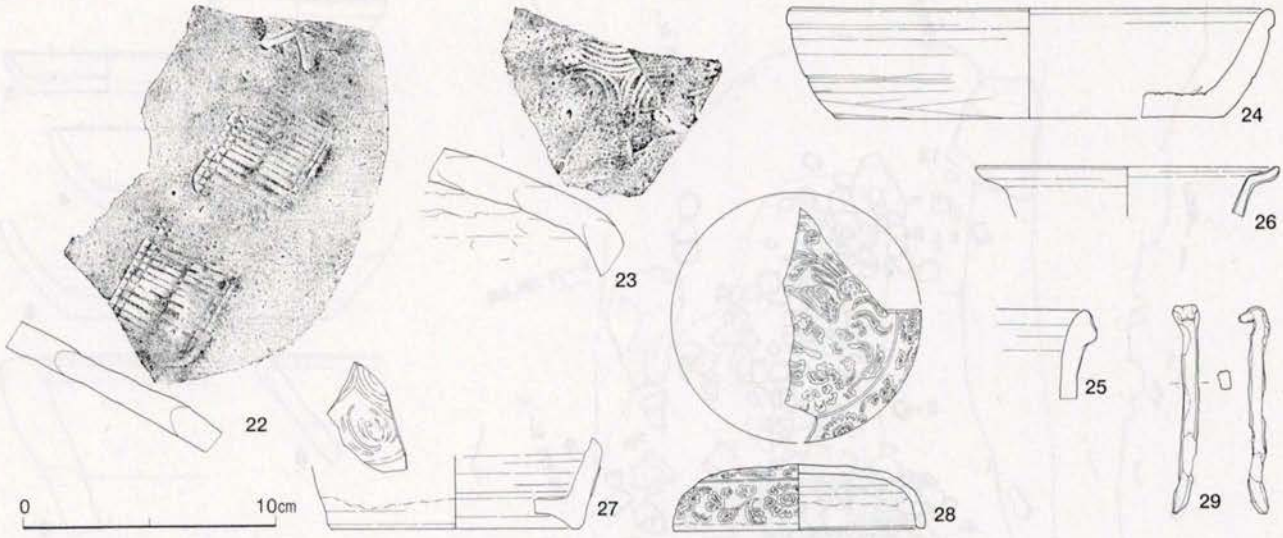


図11　落ち込み３出土遺物（3）

４．３面（図９～13）

検出高：約7.6～7.8m　**構成土**：破砕泥岩地行　**検出遺構**：落ち込み３穴

落ち込み３（図９～11）

位　置：X－75 391.000～－75 397.000　Y－25 531.000～－25 534.500　**規　模**：南北（522）㎝×東西（186）㎝×深さ約50㎝（底面高約6.95m）　**南北軸方位**：N－19.5°－W　**重複関係**：上層部分は2b面落ち込み２により消失。落ち込み５を切る　**出土遺物**：土師器ⅢR種小型（１・２）・常滑こね鉢（３～７）・常滑壺（８）・常滑甕（９～23）・瀬戸おろしⅢ（24）・白磁四耳壺（25）・竜泉窯青磁折れ縁鉢（26）・青白磁梅瓶（27）・青白磁合子蓋（28）・鉄釘（29）　**特記事項**：落ち込み２により大部分が消失してしまったが、東へ落ち込む人為的な掘り方は明確に検出できた。西側落ち込み肩部に集中して検出した遺物片は落ち込み４とつながるかもしれないが、現況では確認できなかった。

落ち込み４（図12・13）

位　置：X－75 393.000～－75 397.500　Y－25 532.500～－25 536.000　**規　模**：南北（388）㎝×東西（186）㎝×深さ約42㎝（底面高約7.1m）　**平面形**：不定形　**重複関係**：落ち込み５を切る。東側は２面落ち込み２により消失　出土遺物：土師器ⅢR種小型（１～３）・土師器ⅢR種大型（４・５）・瓦質火鉢（6・7）・常滑こね鉢（８）・常滑甕（９～23）・磨耗陶器片（24）・瀬戸おろしⅢ（25）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（26）・青白磁梅瓶（27～29）・青白磁用途不明品（30）・政和通宝（32）・滑石鍋（33）　**特記事項**：東へ落ち込む遺構内から常滑片を中心とした多量の遺物が検出された。本調査区内で出土した遺物の大部分がここに集中する。また焼石や花崗岩、炭化物などが多く含まれていることも、ほかの遺構とは明らかに異質であり、廃棄場的な性格をもちあわせていると推察できる。26は大宰府新分類（山本2000）の「東口碗Ⅱ－ｂ」に該当。

落ち込み５（図９）

位　置：X－75 391.500～－75 394.000　Y－25 533.500～－25 536.000　**規　模**：南北（194）㎝×東西（162）㎝×深さ約56㎝（底面高約7.2m）　**南北軸方位**：N－19.5°－W　**重複関係**：落ち込み３・４に切られる　**出土遺物**：図示しうる遺物はなし　**特記事項**：人頭大以上の大形泥岩が多くつまった地行土。３面構成土と同質であることから、３面構築時に落ち込み内に充填されたと推測できる。落ち込み３・４との相関関係は不明だが、形状からみて、同位置上に継続的に形成された施設と考えるべきであろう。

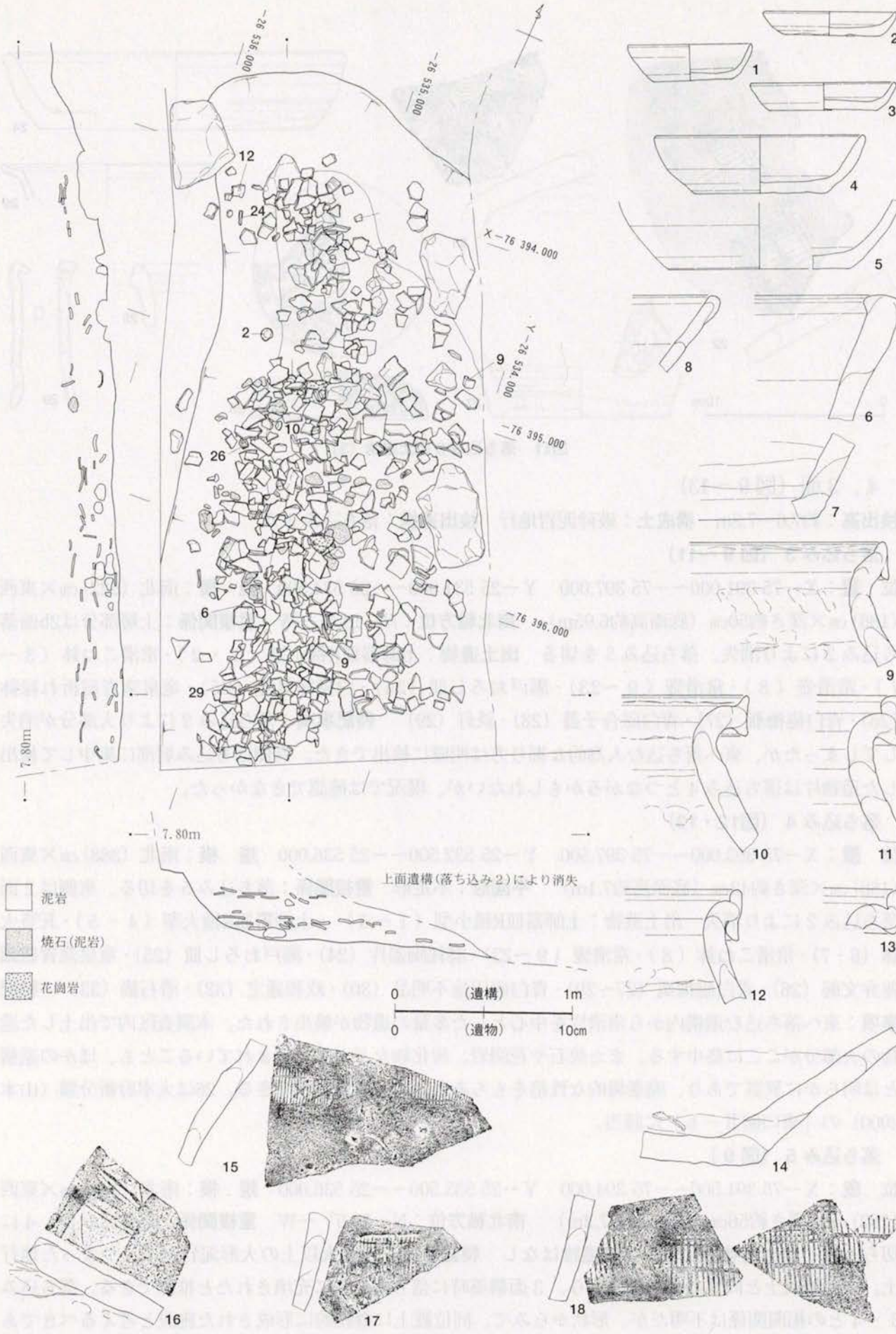


図12　落ち込み4・同出土遺物（1）

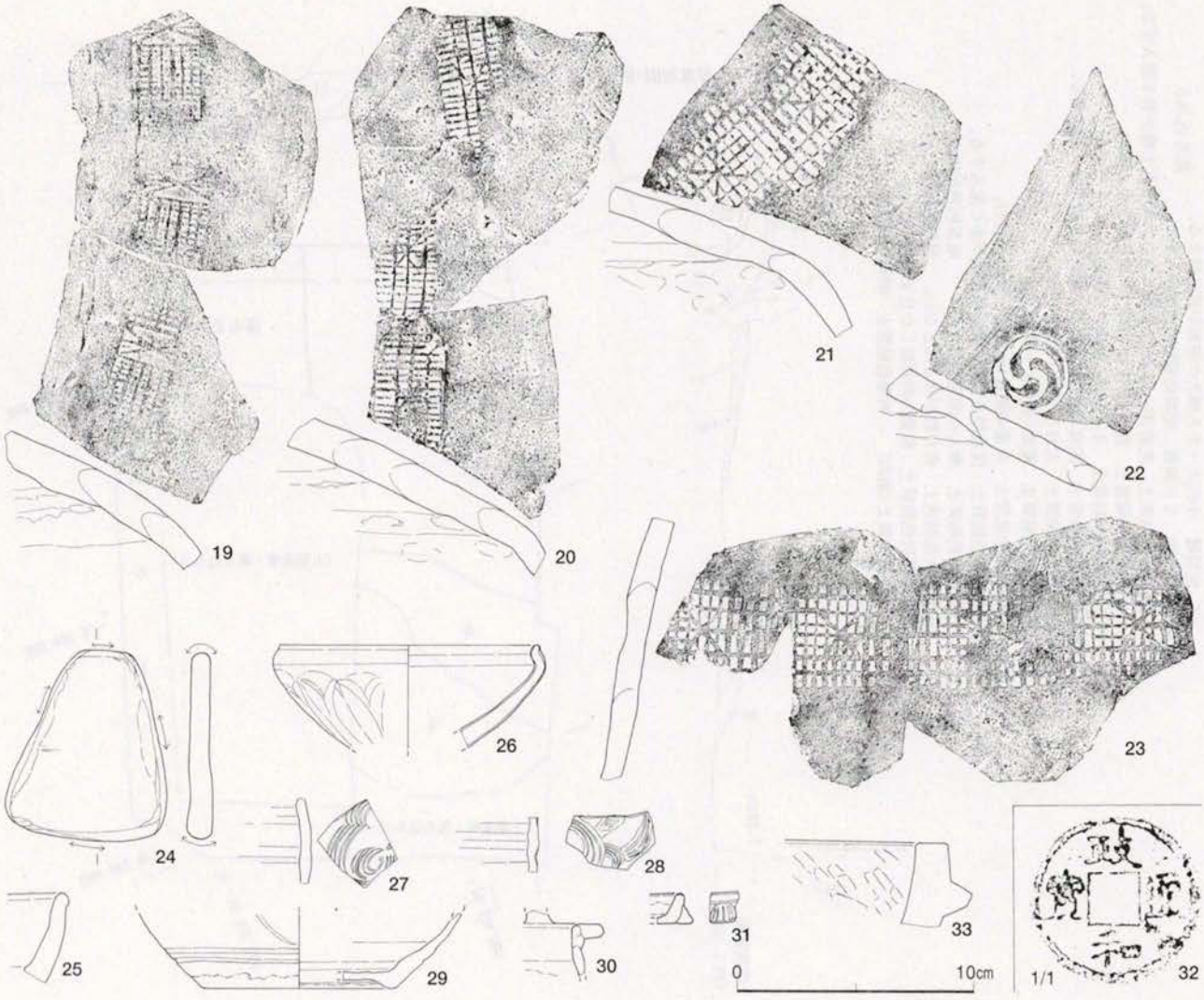


図13　落ち込み４出土遺物（2）

３面出土遺物

遺物片1059中常滑86.4%で、２面よりさらに比率が高い。土師器皿8.9%、磁器3%が続く。泉州窯黄釉の破片が１片含まれるが、３面下で出土した破片と同一個体の可能性がある。このこともまたこの集中出土が、継続的、もしくは少なくともきわめて短期間におこなわれたことを示していよう。あるいはいちどきに形成された可能性も消去できない。製品以外には焼けた骨1片・複数の花崗岩・安山岩が含まれる。

５．３面下制限深度まで（図14・15）

出土遺物：土師器皿R種小型（１～４）・土師器皿T種大型（５）・常滑甕（６～12）・瀬戸洗（13）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（14）・竜泉窯青磁折腰鉢（15）・白磁小壺（16）・青白磁梅瓶（17～18）・青白磁用途不明品（19）・政和通宝（20）・砥石仕上げ砥（21）　**特記事項**：（19）の青白磁不明品は図13－(31)と同一個体とみられる。(5) は本調査地点で出土した唯一のT種土師器皿である。製品以外では焼けた骨１片ほか安山岩複数。

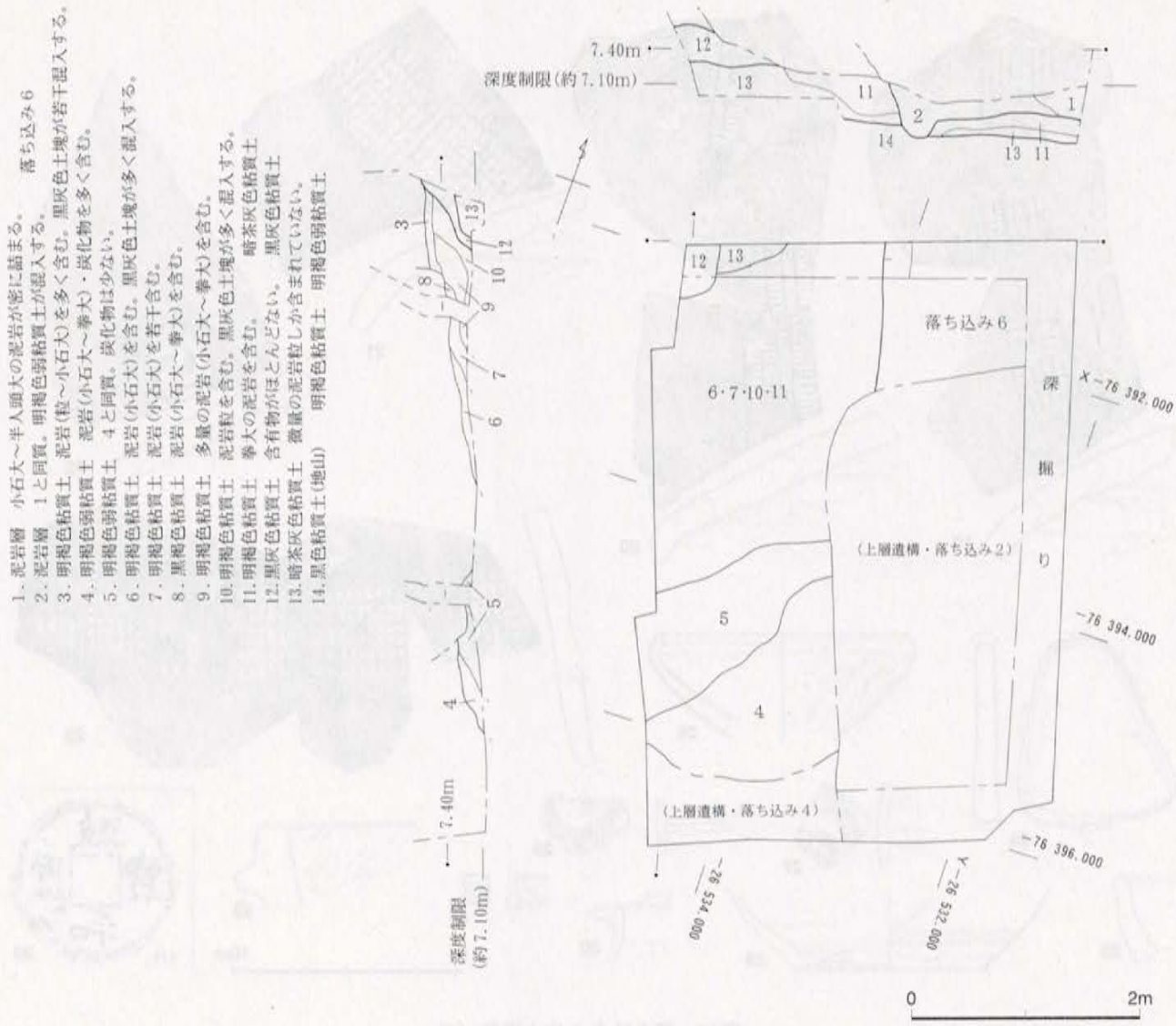


図14　調査最終確認状況（制限深度面）

6．遺構外採集遺物（図16）

試掘坑・撹乱坑その他表採遺物を遺構外遺物としてまとめた。このほか中世以前の遺物として、須恵器1・土師1の小片が出土しているが図示するにはいたらなかった。土師器皿R種大型（1）・常滑甕（2）・白磁四耳壺（3）・青白磁梅瓶（4）

（鍛冶屋－遺構／松原－遺物／馬淵－補綴）

注

山本信夫2000　『大宰府条坊跡XV　—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

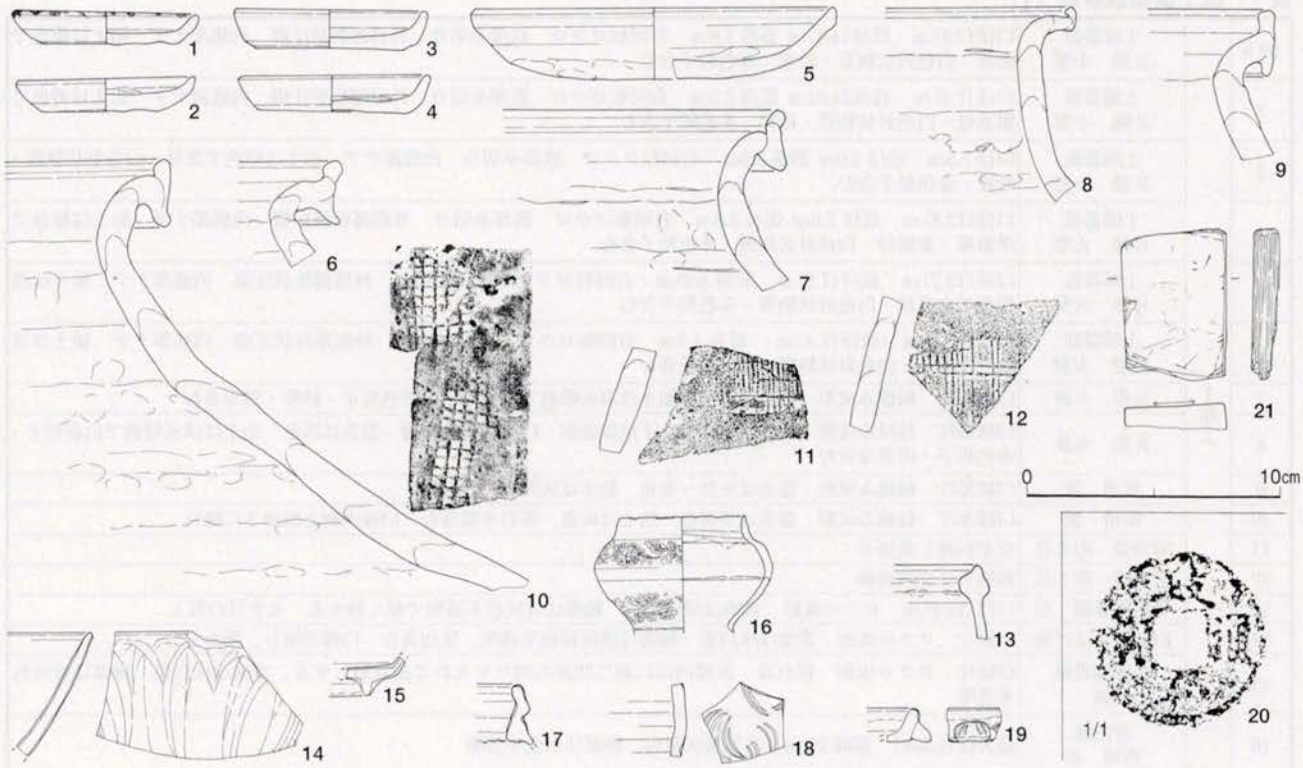


図15　3面下制限深度までの出土遺物

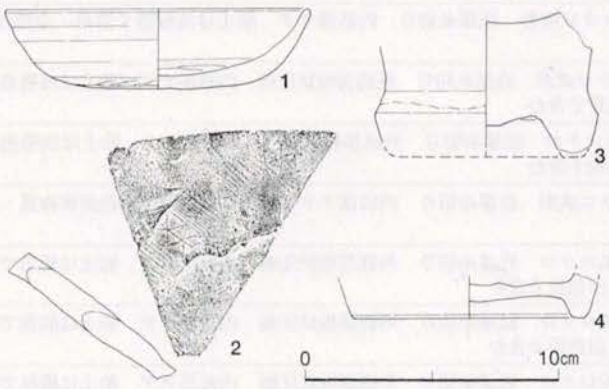


図16　遺構外採集遺物

表1　出土遺物観察表（1）

図5	1面上	土師器皿 R種　小型	口径(7.4)cm　底径(4.4)cm 器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
2		土師器皿 R種　小型	口径(7.8)cm　底径(4.6)cm 器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
3		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.0cm 器高2.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
4		土師器皿 R種　大型	口径(12.8)cm　底径7.6cm 器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で黒雲母・金雲母・白色針状物質・赤色粒子含む
5		土師器皿 R種　大型	口径(13.7)cm　底径(7.2)cm　器高3.65cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色で金雲母・白色針状物質・赤色粒子含む
6		土師器皿 R種　大型	口径(13.8)cm　底径(7.4)cm　器高4.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子含む
7		瓦器　火鉢	口縁部片　輪積み成形　器表は灰色　胎土は淡灰橙色で白色粒子・赤色粒子・砂粒・雲母含む
8		瓦器　火鉢	口縁部片　輪積み成形　外側は横撫で、下位指頭痕　口縁下に孔貫通　器表は灰色　胎土は淡灰橙色で白色粒子・赤色粒子・黒雲母含む
9		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は灰色～茶色　胎土は灰褐色
10		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は茶褐色　胎土は灰色、長石少量含む　口縁内側と頸部下に降灰
11		常滑甕　叩き目	交差斜線と長格子
12		常滑甕　叩き目	長格子に交差斜線
13		竜泉窯青磁　皿	口径(12.9)cm　ロクロ成形　素地は淡橙灰色　釉薬は青灰色不透明で厚く掛かる　大き目の貫入
14		白磁　口はげ皿	口縁片　ロクロ成形　素地は灰白色　釉薬は淡灰緑色半透明、気泡含む　口縁面取り、釉ぬぐう
15		竜泉窯青磁 鉢	口縁片　ロクロ成形　折れ縁　体部内面に縦に凹面の削りを入れて花弁形とする　素地は灰白色　釉薬は青灰色不透明
16		青白磁 梅瓶　蓋	最大径(5.5cm)　器高2.3cm　素地淡灰橙色　釉薬は水色不透明
17		皇宋通寶	初鋳1038年　北宋　篆書
図6 1	P.3	土師器皿 R種小型	口径(7.1)cm　底径(4.9)cm 器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・白色粒子含む
2		土師器皿 R種小型	口径(7.2)cm　底径4.8cm 器高2.0cm　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・黒雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
3		土師器皿 R種小型	口径(7.1)cm　底径(4.3)cm 器高2.2cm　ロクロ成形　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・金雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
4		土師器皿 R種小型	口径(7.2)cm　底径4.5cm　器高2.1cm　ロクロ成形　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・金雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
5		土師器皿 R種小型	口径7.7cm　底径5.0cm 器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・金雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
6		土師器皿 R種大型	口径(4.0)cm　底径(3.3)cm 器高0.8cm　ロクロ成形　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・白色粒子含む
7		土師器皿 R種大型	口径13.4cm　底径7.8cm 器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で黒雲母・金雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子含む
8		土師器皿 R種大型	口径13.2cm　底径8.2cm 器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色で黒雲母・金雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子含む
9		土師器皿 R種大型	口径13.5cm　底径8.8cm 器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で黒雲母・金雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子含む
10		土師器皿 R種大型	口径13.8cm　底径7.9cm 器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色で雲母・金雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子含む
図8 1	落ち込み2	土師器皿 R種極小型	口径(7.1)cm　底径4.5cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で雲母・白色粒・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・黒色粒子含む
2		土師器皿 R種小型	口径(7.6)cm　底径5.0cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子・砂粒少量含む
3		土師器皿 R種大型	口径(11.6)cm　底径(7.8)cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子含む
4		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は赤褐色　胎土は暗灰色、長石・橙褐色粒を含む
5		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は茶褐色　胎土は灰色、長石・石英・橙色粒を含む　口縁部内側に降灰
6		常滑　甕	口縁～肩部　輪積み成形　器表は暗灰色　胎土は暗灰色、長石を含む　口縁部内側・肩部に降灰
7		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗灰色～茶褐色　胎土は灰色、長石少量含む
8		常滑　甕	底部片　輪積み成形　器表は灰褐色　胎土は灰褐色、橙色粒・長石を多く含む
9		常滑甕　叩き目	交差斜線と長格子
10		常滑甕　叩き目	斜線
11		青白磁　梅瓶	胴部片　素地は灰白色　釉薬は水色、半透明　唐草文
12		砥石　仕上げ砥	残存長(4.3)cm　残存幅(3.8)cm　厚0.7cm　黄褐色　砥面は2面　鳴滝

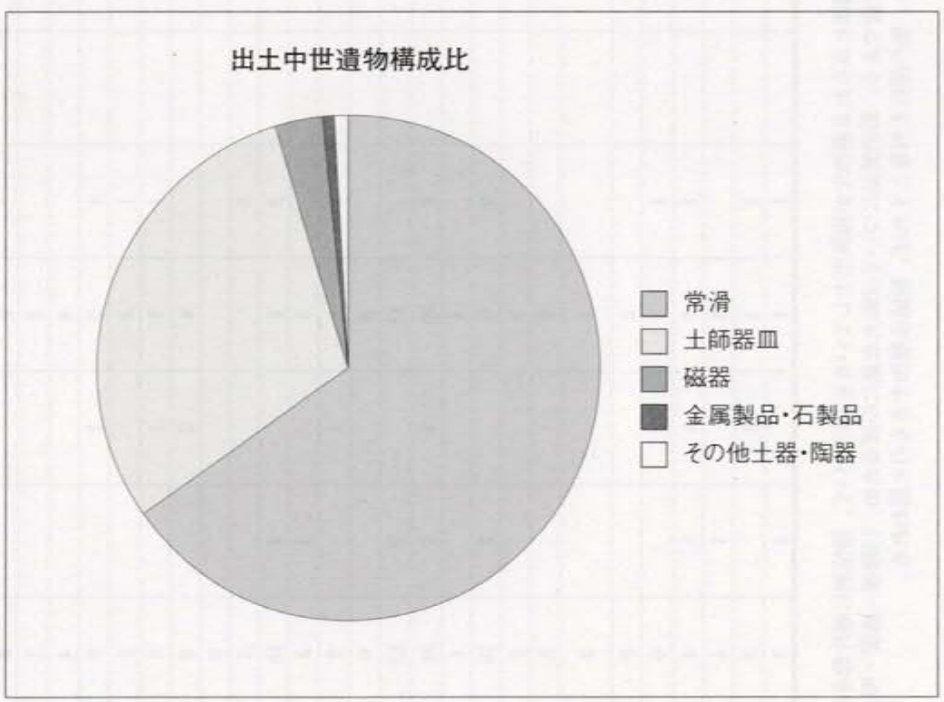
表2　出土遺物観察表（2）

図9 1		土師器皿 R種小型	口径(6.3)cm　底径(4.7)cm　器高1.6cm　ロクロ成形　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・黒雲母・赤色粒子含む
2		土師器皿 R種小型	口径(7.45)cm　底径(4.8)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　口縁部に油煤少量付着　胎土は赤橙色で雲母・黒雲母・白色針状物質・赤色粒子・礫・多量の砂粒含む
3		常滑こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　胎土は灰色で長石・黒色粒・気泡含む
4		常滑こね鉢Ⅱ類	底部片　輪積みロクロ成形　内底面使用痕　胎土は灰色で長石・黒色粒含む
5		常滑こね鉢Ⅰ類	底径(11.8)cm　輪積みロクロ成形　貼り付け高台　外側下位削り　内底面使用痕　胎土は灰褐色で長石含む
6		常滑こね鉢Ⅰ類	底径(16.3)cm　輪積みロクロ成形　内底面磨耗　胎土は灰褐色で大粒長石含む
7		常滑こね鉢Ⅱ類	口径(30.7)cm　輪積みロクロ成形　口縁部と内側に降灰　胎土は灰褐色で長石含む
8		常滑　無頸壺	器高6.7cm　輪積み成形　外側下位指頭痕、上方横ナデ　内底と肩部に降灰　器表は赤褐色　胎土は暗灰色で長石含む
9		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗灰褐色　胎土は灰色　長石・礫含む　口縁内側・肩部に降灰
10		常滑　甕	口径(42.0)cm　輪積みロクロ成形　器表は暗灰褐色　胎土は灰褐色　長石・礫含む　口縁部・頸部の一部に降灰
11		常滑　甕	口縁～肩部　輪積みロクロ成形　器表は明茶褐色　胎土は灰色　、長石・黒色粒・礫含む　口縁～肩部に厚く降灰
12		常滑　甕	口縁～肩部　輪積みロクロ成形　口縁内側・肩部に降灰　叩き目(格子文)　器表は暗灰色　胎土は灰茶褐色、長石・礫含む
13		常滑　甕	口径(45.0)cm　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色　胎土は暗灰色、長石含む　口縁部～肩部に降灰
14	落ち込み3	常滑　甕	底径(19.0)cm　輪積みロクロ成形　器表は橙褐色～灰橙色　胎土は橙褐色で長石を含み、外底面には大粒の石英粒・礫を多量に含む　内底面および外側下位に漆状黒色物質付着
15		常滑　甕	底径23.4cm　輪積みロクロ成形　内底面に降る灰　器表は橙褐色　胎土は灰色で長石含む
16		常滑　甕	底部片　輪積みロクロ成形　器表は橙褐色　胎土は淡灰橙色、長石・石英含む　内底面に降灰
17		常滑　甕	底部片　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色　胎土は灰色、長石・石英・礫含む　内底面に降灰　外底面に石英粒多く含む
18		常滑　甕	底径(24.0)cm　輪積みロクロ成形　器表は淡灰橙色　胎土は灰色～灰橙色で長石・礫を含む　内底面に降灰
19		常滑　甕	底部片　輪積みロクロ成形　器表は明茶褐色　胎土は淡灰色、長石少量含む　内底面に厚く降灰　外底面に他の常滑片が付着
20		常滑甕　叩き目	長格子
21		常滑甕　叩き目	格子
22		常滑甕　叩き目	格子と長格子
23		常滑甕　叩き目	連弧文
24		瀬戸　おろし皿	口径(19.0)cm　底径(15.3)cm　器高4.3cm　ロクロ成形　口縁は玉縁状をなす　外側面ヘラ削り　灰釉ハケ塗り　胎土は淡灰褐色で堅緻
25		白磁　四耳壺	口縁片　ロクロ成形　素地は淡灰色、黒色微粒子含み堅緻　釉薬は青灰色半透明、貫入あり
26		竜泉窯　青磁　折れ縁鉢	口径(12.0)cm　ロクロ成形　折れ縁　無文　素地は灰白色、精良　釉薬は青灰色不透明で厚く掛かる
27		青白磁　梅瓶	底径(9.7)cm　素地は灰白色堅緻　釉薬は水色、半透明で外面には厚く内側には極薄く掛かる　唐草文
28		青白磁　合子蓋	口径(9.9)cm　底径(6.0)cm　器高2.6cm　素地は灰白色　釉薬は水色、半透明　型押しで上面に鳳凰と草花文、側面に草花文
29		鉄釘	長8.3cm　幅0.4cm　厚さ0.75cm
図12 1		土師器皿 R種小型	口径7.0cm　底径4.5cm器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で雲母・金雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子含む
2		土師器皿 R種小型	口径7.4cm　底径5.5cm器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・砂含む
3		土師器皿 R種小型	口径8.1cm　底径6.1cm器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子・雲母・砂含む
4		土師器皿 R種大型	口径(12.4)cm　底径(7.6)cm器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・雲母・黒雲母・砂・礫含む
5	落ち込み4	土師器皿 R種極大型	底径(10.3)cmロクロ成形　底部糸切り　胎土は橙色で赤色粒子・雲母・金雲母・砂含む
6		瓦質　火鉢	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰橙色で赤色粒子・白色粒子・金雲母含む　外側下位に指頭痕
7		瓦質　火鉢	底部片　輪積み成形　胎土は灰橙色で赤色粒子・白色粒子・金雲母含む　内側下位に指頭痕　6と同一個体の可能性あり
8		常滑こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　胎土は灰色で長石・礫・気泡含む
9		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は灰褐色～茶褐色　胎土は灰色　口縁内側と肩部に降灰
10		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗灰色　胎土は灰色、長石含む
11		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗茶褐色　胎土は灰褐色、長石含む　頸部外側に降灰
12		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は紫灰色　胎土は灰色～灰褐色、長石含む
13		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は明茶褐色　胎土は灰色、長石含む
14		常滑　甕	底部片　輪積みロクロ成形　器表は赤茶褐色　胎土は灰色、長石少量含む　内底面に降灰

表3　出土遺物観察表（3）

図13 15		常滑甕　叩き目	長格子に交差斜線
16		常滑甕　叩き目	矩形内に縦線と3本の交差線
17		常滑甕　叩き目	長格子
18		常滑甕　叩き目	格子と長格子
19		常滑甕　叩き目	格子と3本交差線
20		常滑甕　叩き目	長格子に交差斜線
21		常滑甕　叩き目	格子に交差斜線
22		常滑甕　叩き目	巴文
23		常滑甕　叩き目	格子に交差斜線
24	落ち込み4	磨耗陶片	長8.1cm　幅6.3cm　厚さ1.1cm　常滑甕または捏ね鉢の破片を転用　4辺に使用痕
25		瀬戸　おろし皿	口縁部片　ロクロ成形　口縁は玉縁状をなす　外側面ヘラ削り　灰緑色灰釉薄くハケ塗り　胎土は淡灰色で堅緻
26		竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口径(11.0)cm　ロクロ成形　外面に鎬連弁文　体部上位で内側に屈曲し口縁がややすぼまる束口碗 素地は灰白色釉薬は青灰色で不透明
27		青白磁　梅瓶	胴部片　素地は灰白色　釉薬は水色、半透明　唐草文
28		青白磁　梅瓶	胴部片　素地は灰白色　釉薬は水色、透明で細かい貫入が入る　唐草文
29		青白磁　梅瓶	底径(8.2)cm　底部から胴部に開き気味に立ち上がる　唐草文および下位に沈線2本　削りだし高台　素地は灰白色　釉薬は水色、透明で細かい貫入が入る　畳付き付近は露胎
30		青白磁　用途不明品	口縁部片　口縁を水平に外側に折り返し沿う絵に装飾部がつく　素地は淡灰橙色　釉薬は被熱により灰白色を呈しざらつく　器形は六角形と推定される　香炉か
31		青白磁　用途不明品	器高1.3cm　素地は灰白色　釉薬は水色半透明　内底部露胎　外側下位に縦沈線、鉄釉を施した装飾貼り付け
32		政和通寶	初鋳1111年　北宋　楷書
33		滑石　鍋	口縁部片　内側斜め方向の擦痕　外側鑿状工具痕　薄く煤付着
図15 1		土師器皿 R種小型	口径7.1cm　底径5.5cm　器高1.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　口縁部油煤付着 胎土は橙色で雲母・金雲母・赤色粒子・砂粒・礫含む
2		土師器皿 R種小型	口径(7.0)cm　底径5.0cm　器高1.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で赤色粒・白色粒・礫・多量の砂粒含む
3		土師器皿 R種小型	口径(7.5)cm　底径(6.0)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で赤色粒・雲母・金雲母・白色針状物質含む
4		土師器皿 R種小型	口径7.4cm　底径5.9cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は赤橙色で赤色粒・雲母・白色針状物質・礫含む
5		土師器皿 T種大型	口径(14.2)cm　底径(5.8)cm　器高2.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　胎土は淡橙色で赤色粒・白色粒・雲母・黒雲母・白色針状物質含む
6		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗灰色　胎土は灰色、長石・礫含む
7		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色　胎土は灰褐色、長石・礫含む　口縁内側・頸部に降灰
8		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗灰色～灰褐色　胎土は暗灰色、長石・白い大粒の粒子含む
9		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗灰色　胎土は暗灰色、長石含む
10	3面下規制深度まで	常滑　甕	口縁部～肩部　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色　胎土は灰褐色、長石・石英含む　肩部に厚く降灰　叩き目(格子)
11		常滑　叩き目	長格子に斜線
12		常滑　叩き目	不規則な長格子
13		瀬戸　洗	口縁部片　ロクロ成形　灰釉ハケ塗り　胎土は淡灰色で白色粒子・黒色粒子含む
14		竜泉窯青磁 蓮弁文碗	口縁～胴部片　ロクロ成形　素地は灰白色　釉薬は灰緑色半透明
15		竜泉窯青磁 折腰鉢	底部片　ロクロ成形　素地は灰白色　釉薬は青緑色半透明、貫入あり　畳付きのみ露胎
16		白磁　小壺	口径(5.0)cm　素地は灰白色　釉薬は淡青灰色透明　胴部外側に型押しによる草花文
17		青白磁　梅瓶	口縁部片　素地は灰白色　釉薬は水色半透明　貫入あり
18		青白磁　梅瓶	胴部片　素地は灰白色　釉薬は水色半透明　貫入あり　唐草文
19		青白磁　用途不明品	器高Ⅰ・35cm　素地は灰白色　釉薬は水色半透明　内底部露胎　外側下位に縦沈線、鉄釉を施した装飾貼り付け 図13－31と同一製品
20		政和通寶	初鋳1111年　北宋　楷書
21		砥石仕上砥	残存長(6.0)cm　幅4.2cm　厚1.0cm　鳴滝　淡橙色　砥面1
図16 1		土師器皿 R種大型	口径(12.0)cm　底径(6.7)cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は肌色で黒雲母・白色粒子・赤色粒子含む
2	遺構外	常滑　叩き目	矩形内に縦線と5本の交差線
3		白磁　四耳壺	底部片　削り出し高台、中央部で厚さ4.1cm　高台部露胎　素地は淡灰橙色で白色粒含む　釉薬は淡灰青色、半透明、細かい貫入
4		青白磁梅瓶	底径(9.1)cm素地は淡橙灰色～明灰色釉薬は水色不透明畳付き～底面露胎

	土師器皿			土器	火鉢	常滑		瀬戸	舶載品				鉄製品	銭	滑石	砥石	計
	大型	小型	その他			甕	こね鉢他		青磁竜泉窯	褐釉	青白磁	白磁					
1面上	161	37	2	1	2	66	0	1	2	0	2	3	0	1	0	0	279
1面	23	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31
2面	150	23	1	0	1	195	10	0	1	0	7	0	2	0	1	1	392
3面	63	30	1	0	8	891	24	3	4	1	20	8	5	1	0	0	1059
3面下規制深度まで	82	28	1	2	0	161	1	1	4	1	7	3	1	1	0	1	294
その他	59	6	0	0	1	116	0	0	2	0	1	3	1	0	0	0	189
計	675			3	12	1464		5	13	2	37	17	10	3	1	2	2244
構成比（%）	30.08			0.13	0.53	65.24		0.22	0.58	0.09	1.65	0.76	0.45	0.13	0.04	0.09	99.99



常滑	1464
土師器皿	675
磁器	69
金属製品・石製品	16
その他土器・陶器	20
計	2244

表4　出土遺物数量表

表5　出土遺物接合表

器　種		1面上	1面	2面	3面	3面下	その他	計	接合破片数
常滑甕　口縁部	図15-9				1	1		2	
常滑甕　口縁部	図12-9				5			5	4
常滑甕　口縁部	図12-12				3	2		5	2
常滑甕　口縁部	図I-10			2	4			6	5
常滑甕　口縁部	図9-11			3	1			4	3
常滑甕　口縁部	図10-13			1	4		1	6	5
常滑甕　口縁部	図9-9				3			3	2
常滑甕　口縁部	図8-6			2				2	2
常滑甕　口縁部	図10-12			1	7			8	2
常滑甕　口縁部	図15-10				2	5		7	7
常滑甕　底部	図10-15				9	1		10	10
常滑甕　底部	図10-14				2	1		3	3
常滑甕　底部	図12-14				2			2	
常滑甕　底部	図10-17				2			2	
常滑甕　底部	図10-18				4			4	4
常滑　こね鉢	図9-7			1	3	1		5	3
常滑　こね鉢	図9-6			1	1			2	
常滑甕　叩き目	図12-15			1	3	1		5	2
常滑甕　叩き目	図12-18				4	2		6	2
常滑甕　叩き目	図5-11	2						2	
常滑甕　叩き目	図8-9			3				3	
常滑甕　叩き目	図12-18			2	6		2	10	4
常滑甕　叩き目	図13-21				5		3	8	
常滑甕　叩き目	図10-21			1		1		2	
常滑甕　叩き目	図13-20				6			6	2
常滑甕　叩き目	図13-19				11		2	13	2
常滑甕　叩き目	図11-22	1		2	25	2	1	31	17
常滑甕　叩き目	図13-22				4			4	
常滑甕　叩き目	図11-23			2	6		2	10	7
瓦質　火鉢	図12-6				2			2	2
瀬戸　おろし皿	図11-24				2	1		3	3
青白磁　不明品	図13-31 図15-119				1			2	
青白磁　合子蓋	図11-28				2			2	2
青白磁　梅瓶	図11-27			1	3	2		6	
青白磁　梅瓶	図8-11			1	1	1	1	4	
青白磁　梅瓶	図13-27				3		1	4	
青白磁　梅瓶	図15-18			1	1	1		3	
青白磁　梅瓶	図13-28			1	1		1	3	

表の見方　実測図提示遺物のうち、他にも同一個体とみられる遺物片が複数出土しているものについて、層位別に破片数を示した。右端の欄は同一個体破片のなかで実際に接合した破片数である。常滑製品については膨大な量にのぼるため、口縁部・底部・叩き目が残る胴部など、特徴を捉えやすい部位のみを対象とした。他の部位も対象とすれば、数値は増加するものと思われる。

第4章　常滑集中出土について－まとめにかえて

同一個体片の層位別出土からみた集中出土の形成

本地点では常滑甕の集中出土が見つかった。出土遺物の特徴のひとつは、同一個体と思われる破片および実際に接合できた破片数の割合が高いことである。常滑甕についてはその破片数が多いため、判断の手掛りが得やすい口縁部・底部・叩き目が残る胴部の破片を抜き出して、接合関係および同一個体であるかどうかの検討をおこなった。青白磁梅瓶は文様のある胴部片を対象とし、土師器皿は除外した。

3面を中心に2面・3面下にまたがって分布する同一個体片は多数に上る。この状況は、2面から3面下にかけて検出された6つの落ち込みにある程度まとまって廃棄された部分を含むこと、またそれら

の遺構の形成時期にあまり大きな差がなかった可能性を示唆していよう（表５）。そうだとすれば、編年上の前後関係はあっても、古くから存在する方の使用期間延伸による同時性が生じたことになる。

年代と叩き目文様について

甕の口縁部は22個体、うち17が６型式、４が中野晴久編年（中野2005）の５型式に属する。したがって、大きくみてこの集中出土の年代を、ほぼ13世紀中葉から後半とすることができよう。

叩き目の意匠文様について簡単にみておきたい。文様は全部で22種類、口縁部の個体数と同じであることは注意を要する。うち格子文８種・格子文と斜線文の組み合わせ９種・交差斜線文３種・連弧文１種・巴文１種。「中世知多古窯址群の押印文」（中野1992）によれば、連弧文がやや古いタイプで生産地での第２段階（12世紀後半期）まで、逆に巴文のような定型化した意匠は第７段階（13世紀後半から14世紀前半）に入ってからで、格子文・斜線文は第１から第４段階にかけて広くもちいられている。

集中出土とその背景

一見して明らかなように常滑甕の他を圧する量が、本遺構の出土遺物の特色をなす（ただし個体数を反映しているわけではない、為念）。また、年代は本地点よりやや先行するとはいえ、地点２で完形近くに復元される渥美甕や褐釉壷などが出土している。これらの状況は、調査地点近隣に大型貯蔵容器を備えた空間ないし施設が存在したことを示している。寺院、あるいは大量の液体を必要とする職能民の存在が考慮されるところである。寺院とすれば、位置的にみてやはり長楽寺との関連を考慮しなければなるまい。また職能民に関係するとすれば、現長谷小路（鎌倉時代の呼称は不明）沿いのいわゆる「道々の輩」を想定してもよいであろう。

さて、本来存在したであろう木製品が残らなかった可能性を考慮に入れても、なお食膳具の比率が低いことは確かである。貿易陶磁中における青白磁梅瓶片の割合もまた、それが酒など液体の容器として用いられた可能性を考えると、貯蔵具の数的優位を補強する。さらに、製品以外の出土遺物においても、貝殻等食物残滓が皆無であったことも注目される。すなわち、ここでは貯蔵具が選択的に廃棄されている状況が看て取れるのである。とすれば当然、建長四年（1252）の沽酒禁止令が想起されよう。鎌倉幕府はこの年９月30日、鎌倉中と諸国市で酒の売買を禁じることを決めた。酒壷の数は37,274個。翌月16日、鎌倉中の民家にあった酒壷を、１屋に１壷のみ残してすべて破却せしめた（『吾妻鏡』同日条）。本地点の貯蔵容器集中出土をただちにこの法令の作用とすることは、年代の問題が克服できていない以上、もちろん無理がある。しかし、『吾妻鏡』の記事が本当であるとすれば、これだけの数が廃棄されたなら、必やどこかにその痕跡がとどまっているはずである。かつて発掘資料でそれと認定された集中出土はないが、今後の検討課題としたい。

注

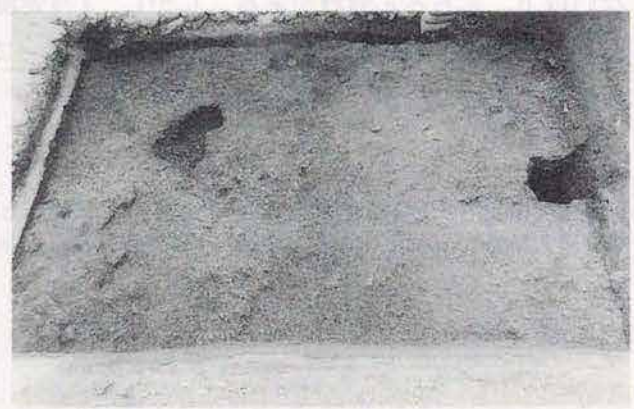
中野晴久1992　「中世知多古窯址群の押印文」『知多半島の歴史と現在』4　日本福祉大学知多半島総合研究所
中野晴久2005　「常滑・渥美」『全国シンポジウム資料　中世窯業の諸相』

（松原・馬淵―補綴）

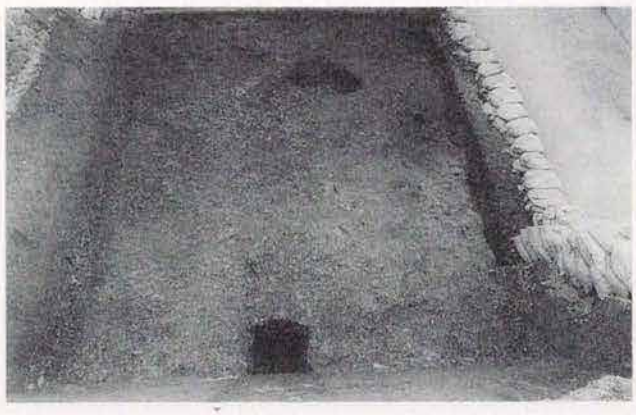
図版1

1. 調査地点付近鳥瞰（中央矢印部）

◀ 2. 調査地点近景

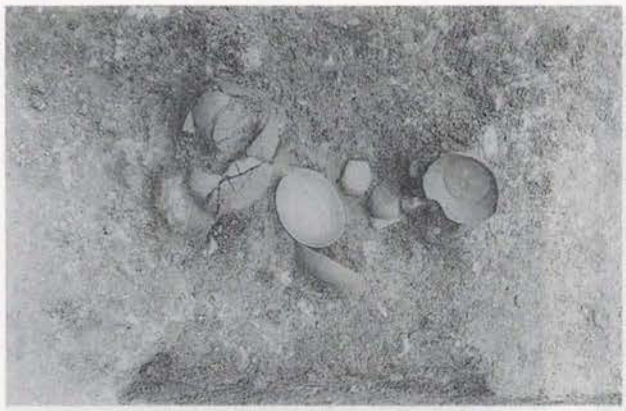


▲ 3. 1面全景東から



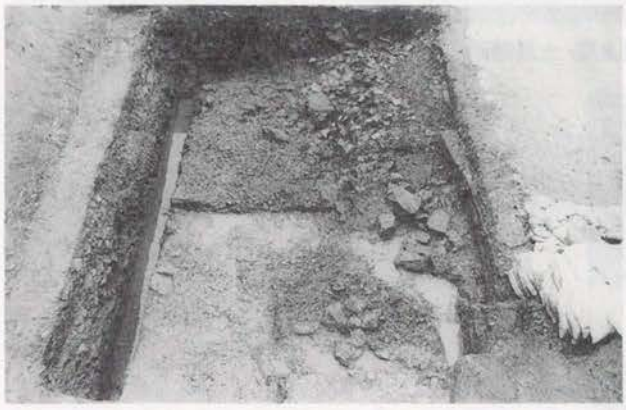
◀ 4. 1面全景北から

図版 2



1. 1面P.3 土師器出土状況 西から

2. 2面全景 東から



3. 2面下全景 北から

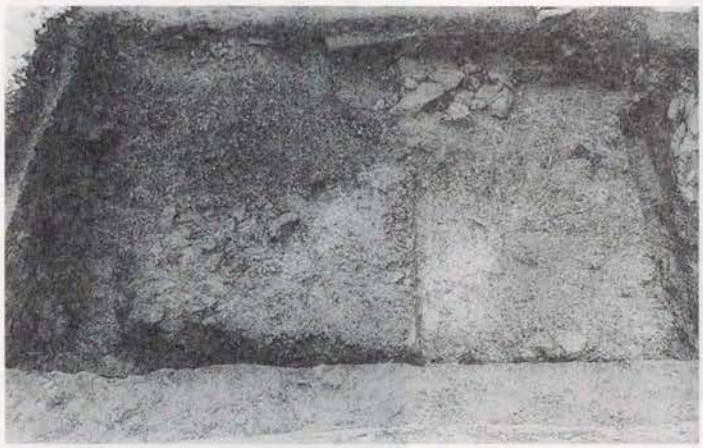
4. 2面下集中出土 東から

5. 集中出土（下層）南から

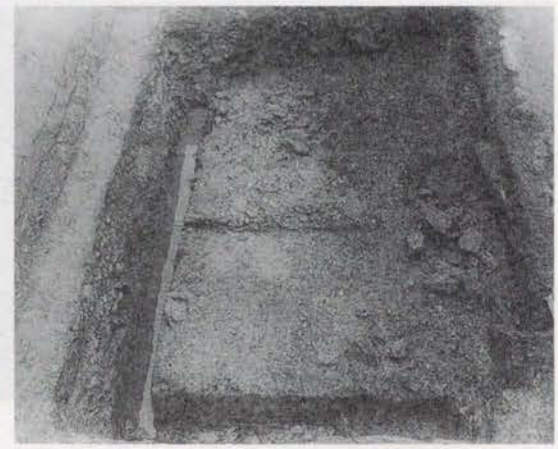
6. 集中出土（下層）北から

7. 集中出土（最下層）北から

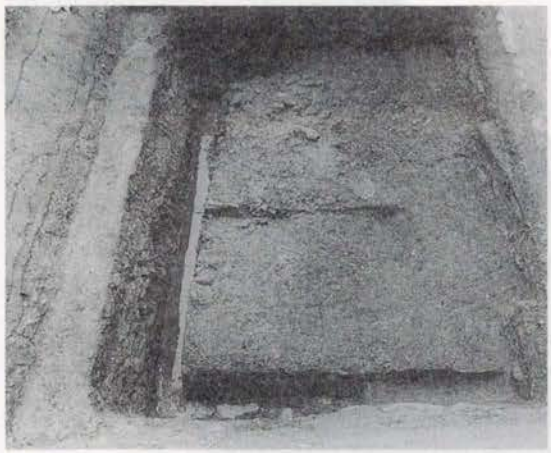
図版 3



1. 3面全景 東から

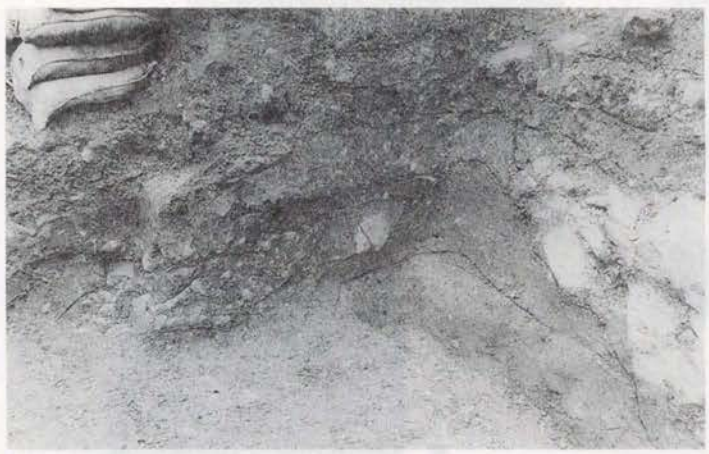


2. 3面全景 北から



3. 最終状況全景 北から

4. 南壁上層 土層断面

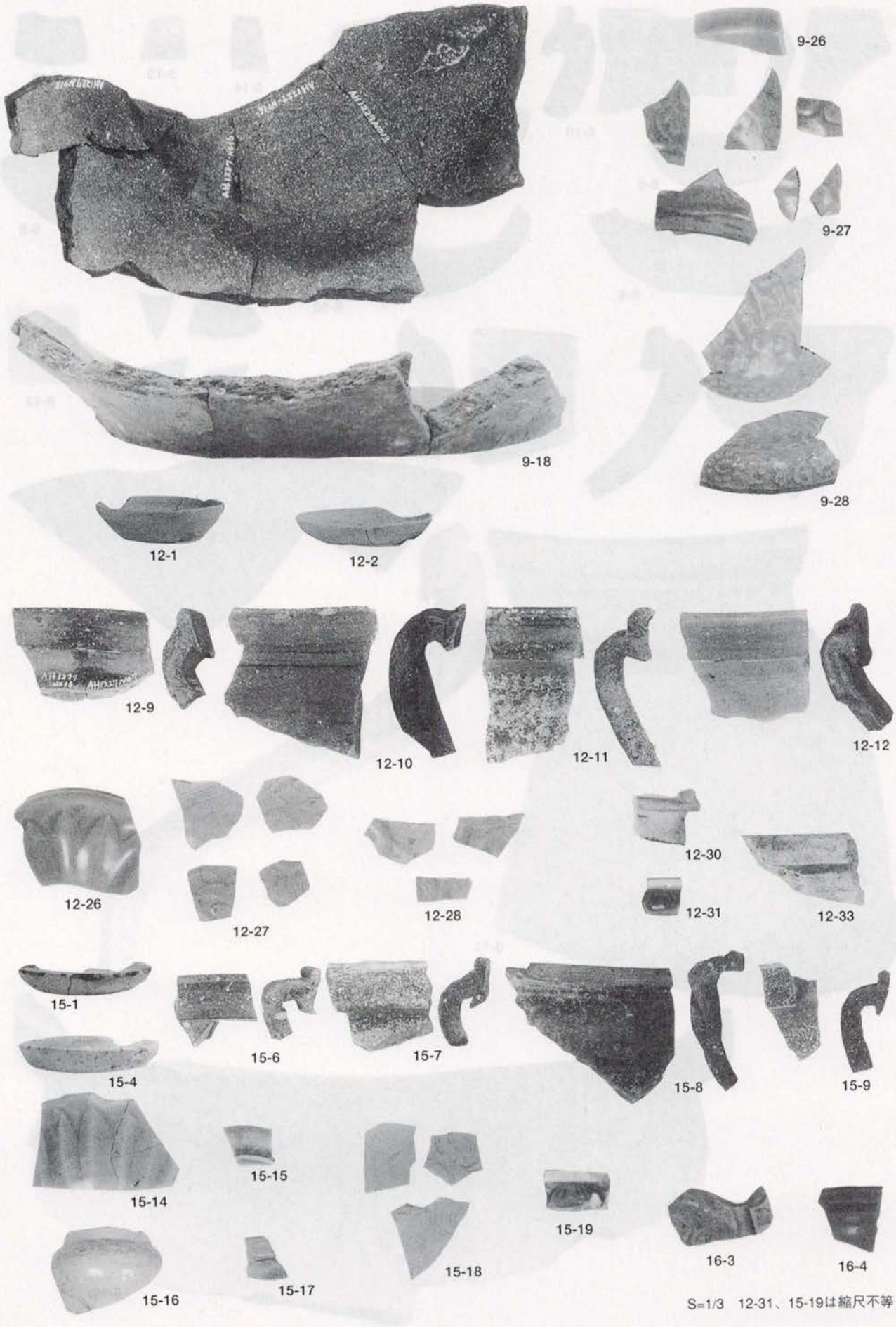


▲ 5. 北西角土層断面

▼ 6. 東壁・北壁土層断面

図版 4

図版 5



S=1/3　12-31、15-19は縮尺不等

円覚寺旧境内遺跡　(No.434)

山ノ内字瑞鹿山393番３地点

例　言

1. 本報は、円覚寺旧境内遺跡（No.434）内に所在する鎌倉市山ノ内字瑞鹿山393番３地点における個人専用住宅建設に先立ち行なわれた埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、鎌倉市教育委員会が36㎡を調査対象面積として、平成15年６月23日～同年７月24日にかけて実施した。
3. 現地での調査体制は、以下の通りである。
   担　当　者：田代郁夫
   調　査　員：松山敬一郎
   調査補助員：岩崎卓治
   調査作業員：柴崎英輔、大戸迫猛、牛嶋道夫、浅香文保（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
   協 力 機 関：社団法人鎌倉市シルバー人材センター、株式会社斎藤建設
4. 遺構図面合成・トレース、遺物実測・トレース、出土遺物写真撮影、版下作成および報告文作成は、以下の人員で行った（現地での遺構写真撮影は田代と松山が行った）。
   主　　任：宗基秀明
   調　査　員：小泉衣理、宗基富貴子
   本報告の執筆は、遺構関係を宗基秀明が、遺物関係を小泉衣理が行い、宗基が編集した。
   なお、以下に掲載する調査成果の挿図と記述は、現地調査担当者に代わって、報告者が現地調査時に観察した結果に基づいている。また、現地で実測した図面に認められた事実関係の混乱は、報告者が訂正した。
5. 本文中に掲げた挿図は基本的に、遺構を１/60、出土遺物を１/３で示した。これ以外の縮尺も含めて、各挿図には縮尺率を示した。
6. 本文中に掲げた挿図、写真を含む埋蔵文化財発掘に関わる出土品等の全ての資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境…… 146

第２章　調査の経緯…… 148

第３章　発見された遺構と遺物…… 149
　第１節　堆積土層と発見された生活面 …… 149
　第２節　第３面…… 150
　第３節　第２面…… 151
　第４節　第１面…… 160

第４章　まとめ…… 165

挿 図 目 次

図１　円覚寺境内絵図…… 146
図２　調査地点と周辺の遺跡と寺院…… 147
図３　調査区位置図 …… 148
図４　第３面全測図と土層図 …… 149
図５　溝８出土遺物 …… 151
図６　第３面下出土遺物 …… 152
図７　第2a～第2c面全測図…… 153
図８　第２面遺構内出土遺物 …… 154
図９　第２面下出土遺物（1）…… 157
図10　第２面下出土遺物（2）…… 158
図11　第２面下出土遺物（3）…… 159
図12　第１面全測図 …… 160
図13　第１面ピット３、第１面下出土遺物 …… 161
図14　第１面上出土遺物（1）…… 162
図15　第１面上出土遺物（2）、表採遺物…… 163

表 目 次

表１　遺物観察表（1）～（4）…… 166～169

写 真 図 版 目 次

図版１　調査区全景（西から）、Ⅱ区全景（西から）、Ⅰ区全景（東から）、建物１（東から）、溝５（南東から）、
　　溝3とかわらけ（東から）、水滴出土状況、太鼓型樽の木栓出土状況…… 170
図版２　出土遺物
　　かわらけ、漆塗りかわらけ、火鉢、山茶碗、片口鉢…… 171
図版３　出土遺物
　　常滑甕・壺、瀬戸、国産陶磁器、舶載陶磁器、軒平瓦…… 172
図版４　出土遺物
　　瓦…… 173
図版５　出土遺物
　　漆製品、木製品、砥石、金属製品 …… 174

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡名にある円覚寺は、北条時宗が無学祖元を開山として弘安五（1282）年に創建した瑞鹿山円覚興聖禅寺と称する。円覚寺旧境内遺跡は、鎌倉の旧市内から小袋坂を北へ越えた円覚寺とその周辺を指し、その範囲は貞治二（1363）年の『円覚寺文書目録』中の「一帖　寺山并門前新御寄進絵図」（図1、以下『境内絵図』と略す）に上杉重能の花押と朱線で示された鎌倉時代後期から南北朝期の円覚寺境内をよりどころとする。鎌倉末期頃に作成されたこの絵図には、円覚寺門前に設けられた下馬門の北側に鎌倉から武蔵へと向かう山ノ内道に面して“新寄進”と記入された地がある。“新寄進”の土地は、通路によって２つに画された矩形で、その内には何も書き込まれていない。多くの民家が描き込まれている円覚寺下馬門の西方から北西の門前とは対照的である。新に寺領に加わった“新寄進”地に建物が何も描かれていないのは、絵図の性格上“新寄進”の位置と広さを示すにとどまり、“新寄進”地内の具体像を把握していなかったのかもしれない。または、この地が耕作地であった可能性もあろうか。

他方、貞享二年（1585）以前の作成とされている『山之内円覚寺門前町図』では、『境内絵図』の“新寄進”地に数多くの居住者名が書き加えられている。この時期までには山之内道に沿った“新寄進”地が敷地分割された家並となっていたことは確かである。

今回調査を行った地点は、『境内絵図』に記載された“新寄進”地の一画に当たる。なかでも東慶寺参道の正面に描かれた北側区画の一部と考えられる。

調査地点の周囲では、これまでに多くの発掘が行なわれているが、つぎの3地点での発掘調査が遺跡地内の歴史的変遷を良く示している。挿図２中の２番地点（円覚寺旧境内遺跡、山ノ内瑞鹿山509番1）では、13世紀後半から末までの火災面が４枚発見され、多くの遺物が火災面に挟まれた３つの層から出土した。出土遺物の年代観にもとづいて、発見された火災面は円覚寺年譜に記載された弘安四（1281）年、弘安五（1282）年、弘安十（1287）年、正応三（1290）年とされた。ただし、円覚寺の火災は、この後も正和五（1316）年、文保二（1318）年、応安六（1373）年と続いている。年代比定根拠資料の一つであった最上層火災面上から出土した常滑の甕の使用年限を想定すれば、最後の火災層が正和五年まで下る可能性も残されている。それでも、円覚寺起工の弘安元（1278）年以前の調査地周辺が水田面の広がる地域であったことを確認した点は重要である。

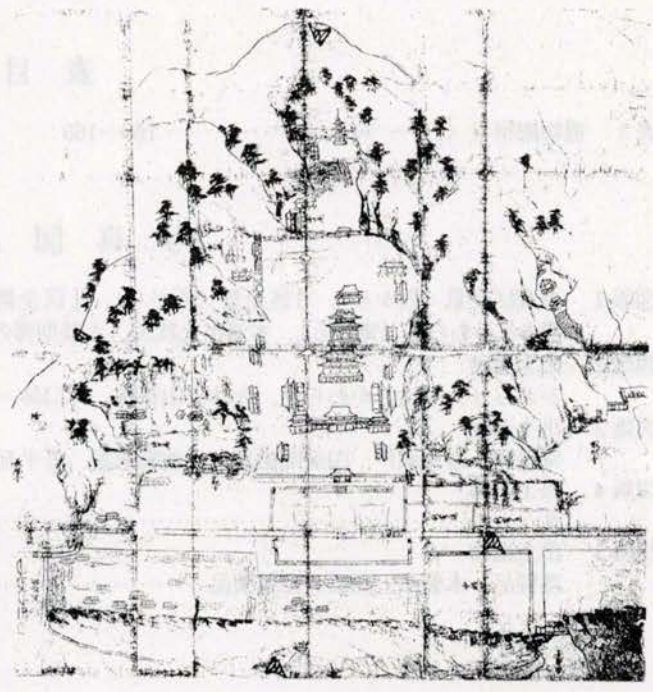


図１　円覚寺境内絵図

挿図２中の１番は、現在の馬道と県道との間に築かれた石組みと土塁による高まりで。2001年11月より2002年３月にかけて、土塁に縦長の穴を幾本も開けて、土塁の構築年代と下馬門との関連を探った。その結果は公刊されていないが、調査途上に実見したかぎり、土塁の構築は中世まで遡らず、近世後期以前の土層は平坦であったと見うけられた。また、調査されたかぎりでの土層中に下馬門を想定させる遺構もなかったようだ。『山之内円覚寺門前町図』の山ノ内

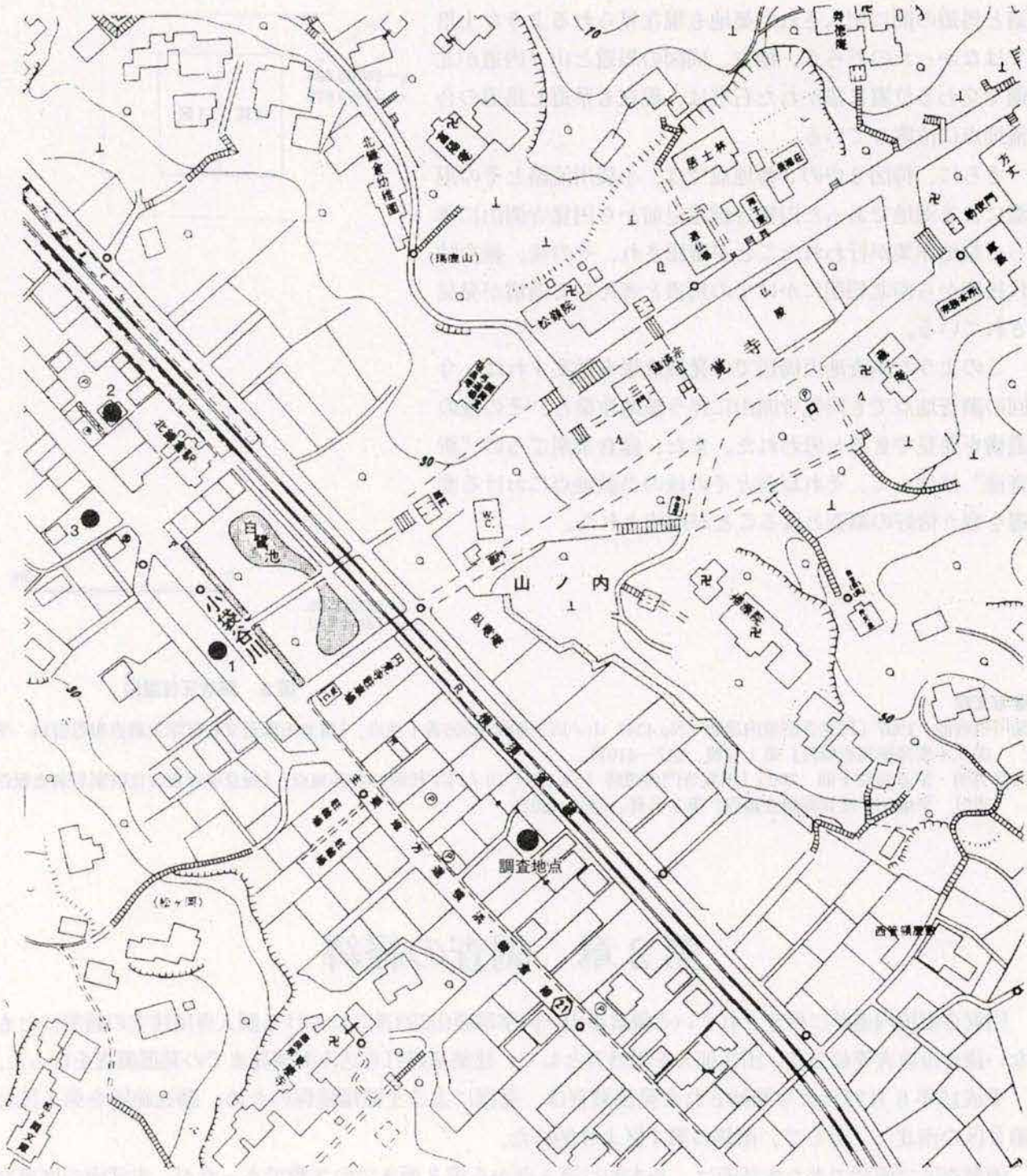


図２　調査地点と周辺の遺跡と寺院

道と馬道の間に記入された築地も現在見られるような土塁ではなかったのだろう。他方、同図の馬道と山ノ内道が北側で交わる位置に描かれた石塔は、現在も県道と馬道の合流地点に位置している。

さらに、挿図２中の３番地点では、小袋川流路とその氾濫による湿地であった円覚寺創建以前から円覚寺開山に伴って整地作業が行われたことが確認され、その後、鎌倉時代後期から南北朝期にかけての馬道と考えらる遺構が発見されている。

このような調査地点周辺での発掘成果を勘案すれば、今回の調査地点でも円覚寺開山に伴う整地作業と、その後の遺構を発見できると思われた。また、鎌倉末期ごろの“新寄進”に伴って、それ以前とその後の当該地点における変遷を窺う恰好の調査となることが期待された。

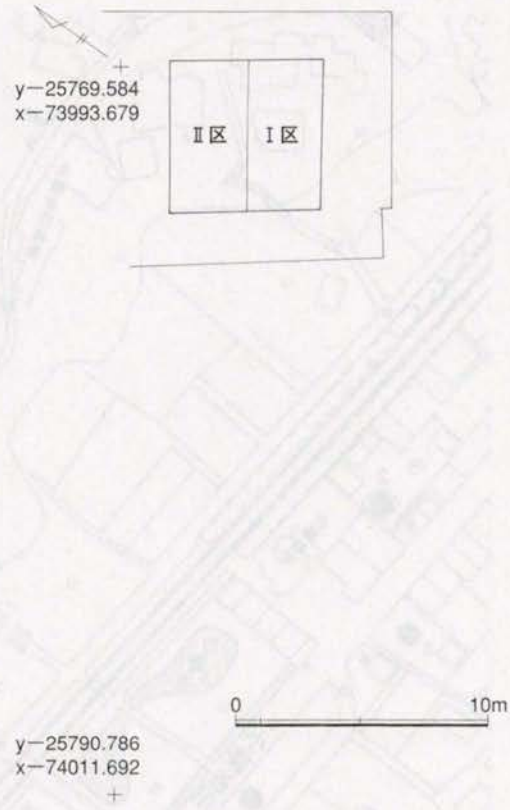


図３　調査区位置図

参考文献

菊川英政他　1997「円覚寺旧境内遺跡（No.434）山ノ内字瑞鹿山509番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告』第１分冊、317～410頁。

宗基秀明・宗基富貴子他　2005「円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字松岡1344番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告』第２分冊、343～420頁。

第２章　調査の経緯

円覚寺旧境内遺跡に指定されている鎌倉市山ノ内字瑞鹿山393番３における個人専用住宅の新築にともない鎌倉市教育委員会は、田代郁夫を担当者として、建築基礎打ち込み海抜高までの発掘調査を行った。

平成15年６月23日より開始された発掘調査は、発掘による土置場確保のため、調査範囲を第Ⅰ区と第Ⅱ区の南北に二分して、南側の第Ⅰ区より始めた。

両調査区で確認できた生活面は、基本的に第１面から第３面までの３枚であったが、生活面の度重なる部分的更新がなされていて、第２面を2a面から2c面に細分した。また、第３面より下方は、湧水の激しい軟弱な粘質土が厚く堆積しているため、より下方の調査を断念した。下方は、河川または池状の滞水遺構覆土と考えられる。

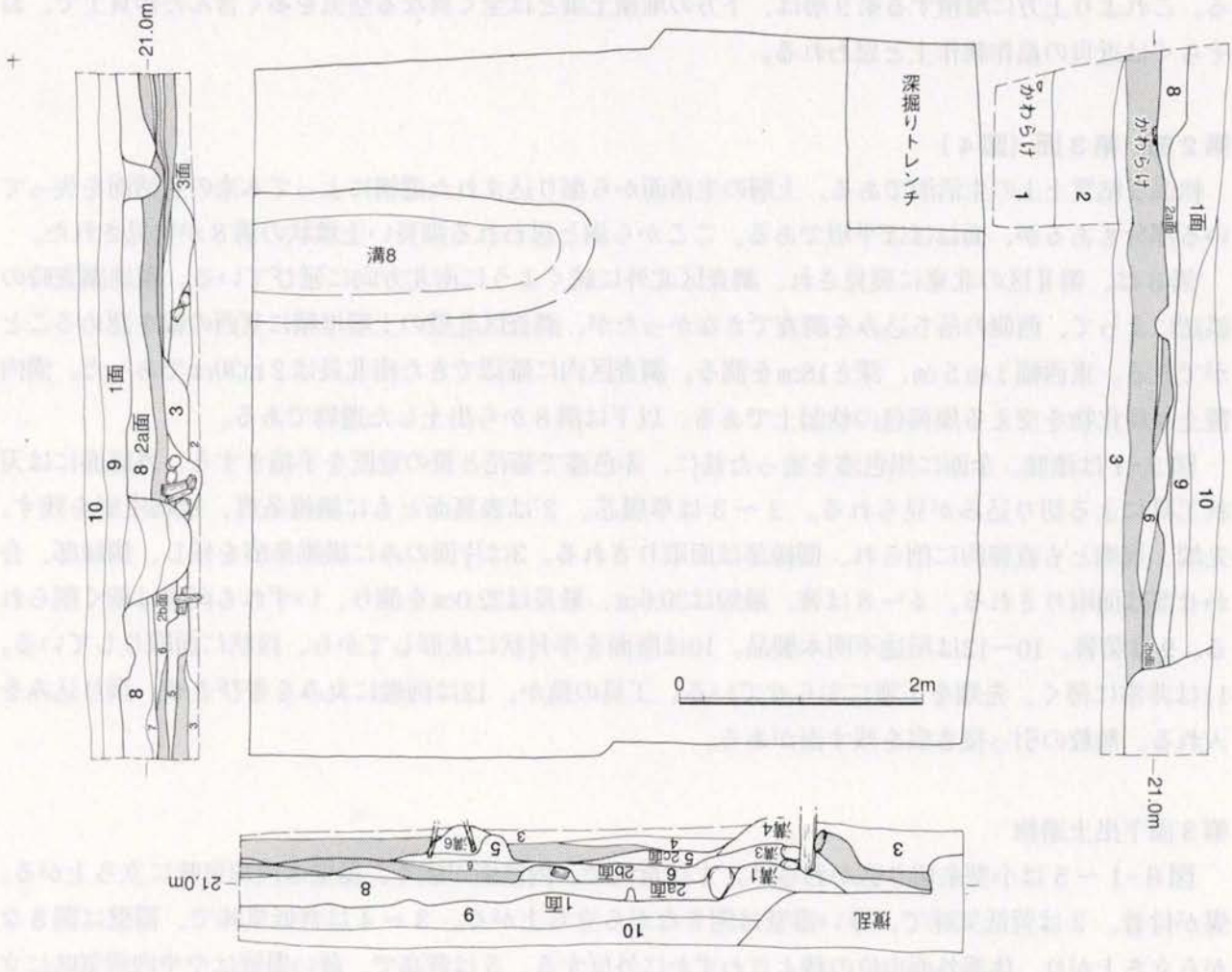
調査に先立って、測量基準点を調査地点敷地内に移動させて、発見される遺構や調査範囲を国土座標上に位置づけながら随時記録した（図３）。調査地点に設けた基準点は、第Ⅱ区の北東に打ち込んだ杭の上に設けた。設置した基準点の国土座標値を以下に示す。X＝-73993.679　Y＝-25769.584。また、調査地の西方に南北に施設された県道際にも座標点を確保した。その座標は、X＝-74011.692　Y＝-25790.786である。

第３章　発見された遺構と遺物

発見された遺構と遺物を下層より順次ここに報告する。その前に第３面全測図に付した調査区壁面に観察できた遺跡内堆積土層を説明しておく。

第１節　堆積土層と発見された生活面（図４）

調査区内のⅠ区南東の深掘りトレンチで最も深くまで掘り下げた。それでも表土から下方に２ｍでしかないが、下層に軟弱な粘質土が厚く堆積していた。最下層土は、青灰色の粘質土で、還元した粘土に大量の水分を含む。掘り下げ時にも湧水が激しく、滞水層と思われる。第２層も水分を多量に含んだ黒色粘質土であるが、炭化物や木器を多く交える。さらに、第３層も水分と木器を多く含む青灰色の還元



土層注記

破砕泥岩版築地業層

1．青灰色粘質土
2．黒色粘質土、炭化物と木器片を多く混入する。
3．青灰色粘質土、木器片を多く混入する。
4．暗灰色砂質土
5．暗灰色砂質版築土
6．灰褐色粘質土
7．炭化物
8．明褐色土
9．明褐色砂質耕作土
10．現代盛土表土

図４　第３面全測図と土層図

粘質土で、第１層から第３層までの粘質土は、近隣を流下する小袋川の氾濫原、ないしは池や水田などの湿地に堆積した土壌と思われる。

こうした下層粘質土上に調査地点で確認した最古の生活面を想定した。水分を多く含んだ軟弱な粘質土上面を生活面とすることは、不自然と思われるだろうが、ここより掘り込まれた遺構が存在する。

第３層の上方に、生活面であることを判然と示す泥岩版築土が地業される。これが第２面となる。地業層は、火災の後かたづけと思われる炭層や粘質土層を間に挟みながら、都合３枚を確認した。しかしながら、調査区全体を覆う地業は第３層上面に行われたものだけで、上方の２枚は部分的な地業であり、生活面の部分的改修と考えられる。よって、第２面は下層より第2c面、第2b面、第2a面としてとらえた。第２面からは多くの遺構、とくに礎板を設置した柱穴と溝が発見されて、湿地の埋め立てに伴って、調査区一帯が活発な人的活動領域に変化したことを示している。

第2a面上に堆積する泥岩小塊を交える明灰色土の第８層によって、第１面が構成されている。第８層は、従前までの泥岩による版築地業ではないものの、しっかりとした平坦な生活面が作り出されている。これより上方に堆積する第９層は、下方の堆積土壌とは全く異なる空気を多く含んだ砂質土で、おそらくは近世の畠作耕作土と思われる。

第２節　第３面（図４）

軟弱な粘質土上の生活面である。上層の生活面から掘り込まれた遺構によって本来の生活面を失っている部分もあるが、面はほぼ平坦である。ここから溝と思われる細長い土壙状の溝８が発見された。

溝８は、第Ⅱ区の北東に発見され、調査区北外に続くように南北方向に延びている。現地調査時の誤認によって、西側の落ち込みを調査できなかったが、調査区北壁の土層堆積に東西の幅を認めることができる。東西幅１ｍ５㎝、深さ18㎝を測る。調査区内に確認できた南北長は２m30㎝であった。溝内覆土は炭化物を交える黒褐色の軟弱土である。以下は溝８から出土した遺物である。

図５-１は漆皿。全面に黒色漆を塗った後に、赤色漆で菊花と笹の意匠を手描きする。外底面には刃状工具による切り込みが見られる。２～３は草履芯。２は表裏面ともに繊維条痕、植物圧痕を残す。先端、後端とも直線的に削られ、側縁部は面取りされる。3は片面のみに繊維条痕を残し、側縁部、合わせ部は面取りされる。４～８は箸。最短は20.6㎝、最長は22.0㎝を測り、いずれも両端は細く削られる。９は菜箸。10～12は用途不明木製品。10は断面を半月状に成形してから、段状に面取りしている。11は非常に薄く、先端を丁寧に尖らせている。工具の篦か。12は両端に丸みを帯びさせ、削り込みを入れる。無数の引っ掻き痕を残す面がある。

第３面下出土遺物

図６-１～５は小型糸切り底かわらけ。１は背低で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がる。煤が付着。２は背低気味で、厚い器壁は開きながら立ち上がる。３～４は背低気味で、器壁は開きながら立ち上がり、体部外面中位の稜よりわずかに外反する。５は背高で、薄い器壁はやや内弯気味に立ち上がり、口唇を尖らせながらわずかに外反する。側面観碗型を呈する。６～９は中型糸切り底かわらけ。６は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。煤が付着。７は背高で、器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。８～９は背高で、薄い器壁は内弯しながら立ち上がる薄手丸深型である。８は煤が付着。10～14は大型糸切り底かわらけ。10は背低で、内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がり、口唇を尖らせながらわずかに外反する。11は背高気味で、器壁は直線的に開きながら立ち上がる。12～14は背低気味で、薄い器壁は内弯しながら立ち上がる。14は

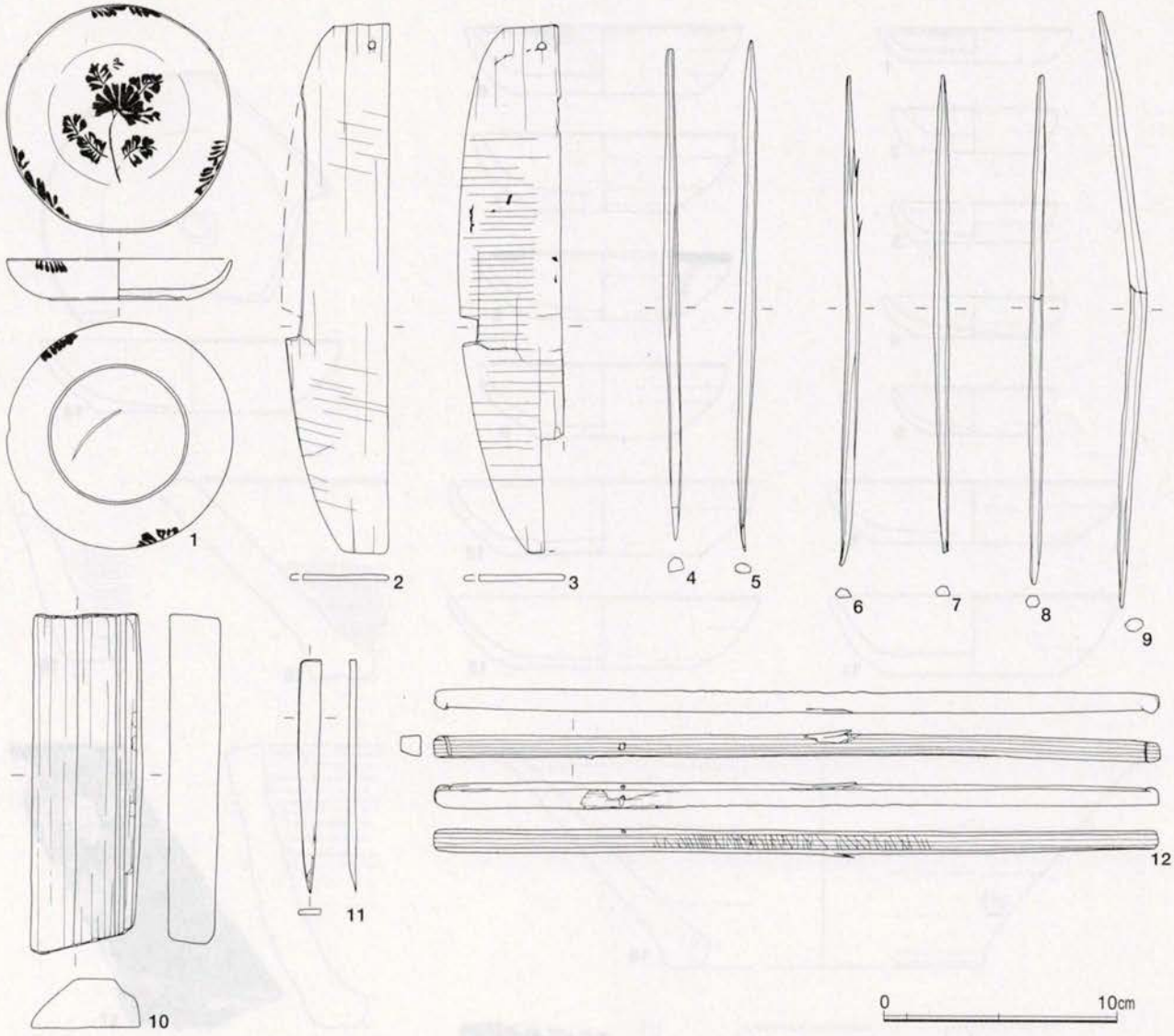


図５　溝８出土遺物

穿孔かわらけで、孔は焼成後に穿けられている。15は浅鉢型火鉢。内外面ともに表面が剥離し、外底面は砂底。16～17は瓦質輪花型火鉢。16の内面は横方向のナデ、外面は磨きが施され、外底面は砂底。破損断面に付着する煤から破損後に被熱したと思われる。17は体部内外面ともに磨きが施される。器表は黒色処理され、亀甲花菱の組合せスタンプ文が捺される。

18は東海産片口鉢Ⅰ類。体部内面中位より内底面にかけて使用による摩滅痕が残り、高台は剥離している。19～20は常滑片口鉢Ⅱ類。共に遺存部の使用摩滅痕は不明である。14世紀前半の製品。21は常滑窯甕のスタンプ文拓影。

第３節　第２面（図7）

泥岩版築地業層で造られた生活面である。部分的な版築地業層２枚が積み増しされてa～cの生活相に分割できる第２面は、基本的に東西方向の溝に分割された２つの空間で構成される。

第2c面

本期は、第２面の最古期にあたり、地業層が厚く広範に広がっている。調査区を南北に分離する東西

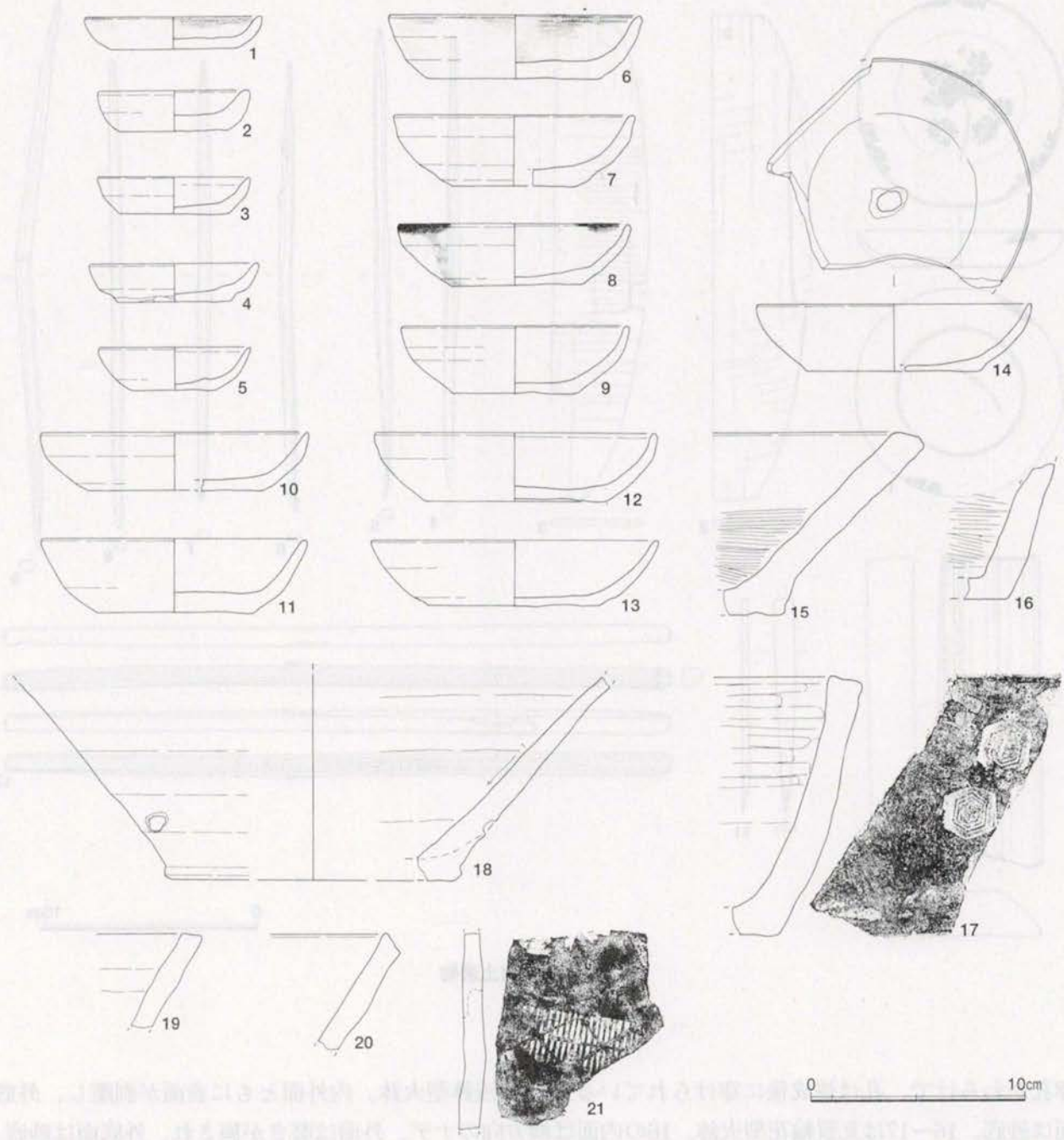


図6　第3面下出土遺物

溝を挟んで、その南側の地業層は厚さ20㎝にもおよぶ。発見された遺構は、東西溝2条と礎板を設置した柱穴である。

溝4

調査区の南よりに、東西に掘り込まれる。後続の遺構掘り込みに壊されて、北側の落ち込み肩を図示できないが、土層壁にその存在を確認できる。上幅120㎝の溝は、調査区外へと延伸する。掘り上げ調査の進行にしたがって湧水が激しくなって、30㎝の深さまで調査したが、溝の底面を確認できなかった。推定の下幅は60㎝前後だろうか。以下の遺物が溝4から出土した。

図8-1～4は小型糸切り底かわらけ。1は背低気味で、厚味のある器壁は内弯気味に立ち上がる。2～3は背低気味で、内底面が広く、器壁は体部中位から下位の強い稜より外反する。3は煤が付着す

る。4は背低気味で、底部は厚く、薄い器壁は開きながら立ち上がり、口唇部付近よりわずかに外反する。5は大型糸切り底。背低気味で、器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近よりわずかに外反する。

6は鳴滝産仕上砥。左右側面に生産地加工痕を残し、表裏2面を砥面として使用している。

7は円形用途不明木製品。板材を円形に整えた円板状を呈し、曲物の蓋板もしくは底板の可能性も考えられる。

溝6

調査区の北寄りに、東西方向に位置する。現地調査で溝の落ち込みを確認していないが、調査区西壁にその落ち込みと溝幅に沿って打ち込まれた杭を確認できる。杭列は東へ4m30cmの長さにわたって20から40cm間隔に発見された。一部の杭には側板が寄せかけられる。

2条の溝の間の地業層は、溝6の南側から溝4へ向けて次第に薄くなり、溝4北側では全く見られない。土層観察から、この2条の溝の新旧関係を窺うことはできないが、地業層の堆積状況からは溝4が古くそして継続時期も長く、溝6が後付けで掘り込まれたと想定できよう。しかし、新旧作り替えの意味は不明である。

柱穴

溝4の北側から調査区の北半分に数多くが発見される。いずれの柱穴も底面は3面および下方の軟弱土にある。そのため柱穴底面には、柱の沈下を防止する礎板が最低2枚は重ねられる。

当該期の柱穴は図7中に2cと副えている。柱並びなどからの建物復元はできなかった。

他方、溝4より南方の厚い地業面上には、なんら遺構を発見できなかった。この部分は通路もしくは道路であった可能性が高い。そうであれば、溝4および溝6は道路側溝となる。

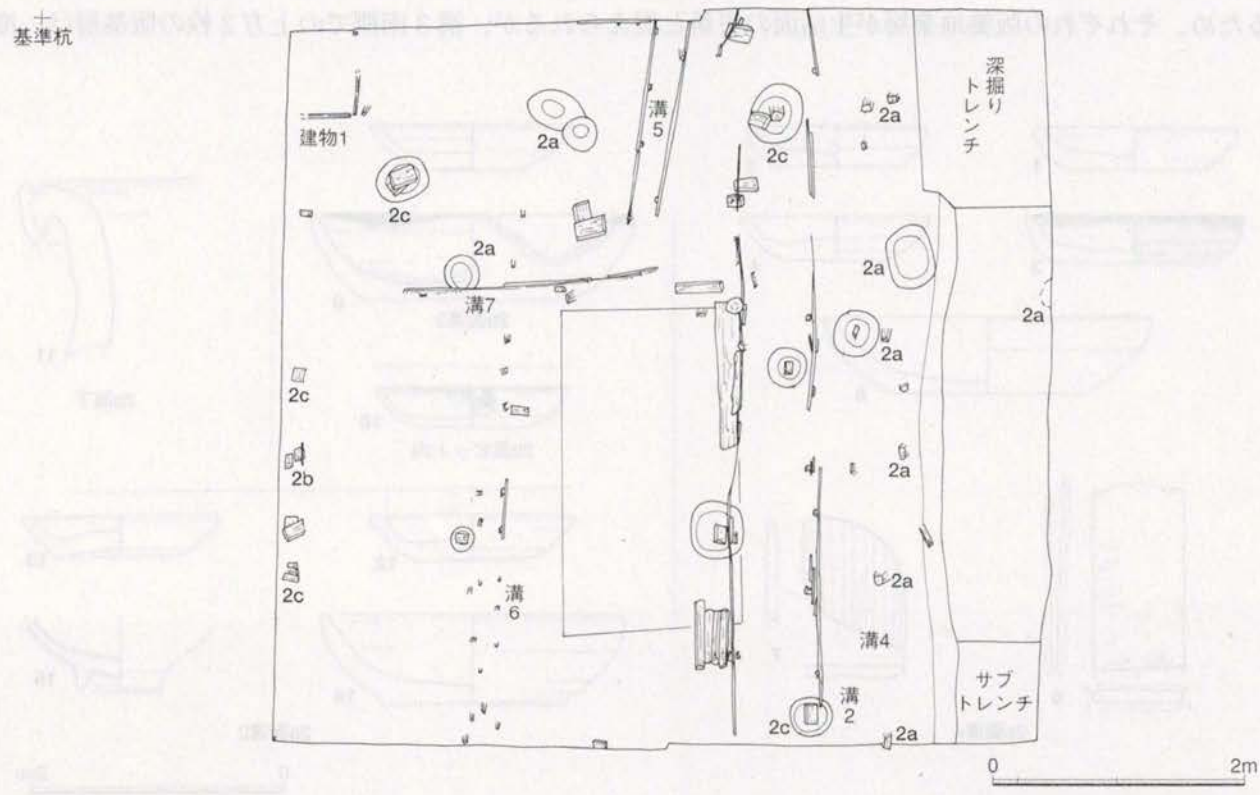


図7　第2a～第2c面全測図

2b面

本期も調査区南よりに位置する東西溝によって、調査地内の空間が二分される。2c面上に薄く部分的に堆積する炭層を挟みながら、泥岩版築または砂質土の版築で地業された生活面である。おそらく火災あとかたづけ後の生活更新面である。

発見された遺構は、東西溝１条と柱穴である。

溝３

先行期の溝４を掘り換えた東西方向に延びる溝である。溝の両側に杭で押さえられた側板が横長に設置される。遺存する側板は幅17㎝、長さ56㎝のものに長さ195㎝の例と様々である。溝幅は、当初120㎝近かったが、後に58㎝にまで南側を狭められる。深さは20㎝を測る。次の遺物が出土した。

図８-８は背低気味の小型糸切り底かわらけ。底部は厚く、薄い器壁は開きながら立ち上がり、体部中位の強い稜より外反する。９は背高気味の大型糸切り底かわらけで、器壁は内弯しながら立ち上がる。口唇部の一部には打ち欠き痕と煤が付着する。

柱穴

本期に帰属すると確定できたのは、調査区北壁の土層に確認した１口のみである。礎板と板材を発見したが、柱やその痕跡は見いだせなかった。柱穴の中から１点だけ遺物が出土した。

図８-10は背低気味の小型糸切り底かわらけ。非常に薄い器壁は内弯しながら立ち上がり、口唇部よりやや外反する。煤が付着する。

また、11は2b面下出土遺物。常滑甕の口縁部片で、13世紀後半の製品。

東西溝の南側には、遺構をなんら発見できなかった。この付近の炭層上の泥岩版築は部分的で、単純に考えれば東から西へと面が傾斜していたことになる。しかし傾斜面途中に行われた2c面の泥岩版築を本期のものとすれば、平坦面であったと想定できる。溝３の北側では各版築面からの掘り込み遺構があるため、それぞれの版築地業層が生活面の更新と捉えられるが、溝３南側での上方２枚の版築層は一度

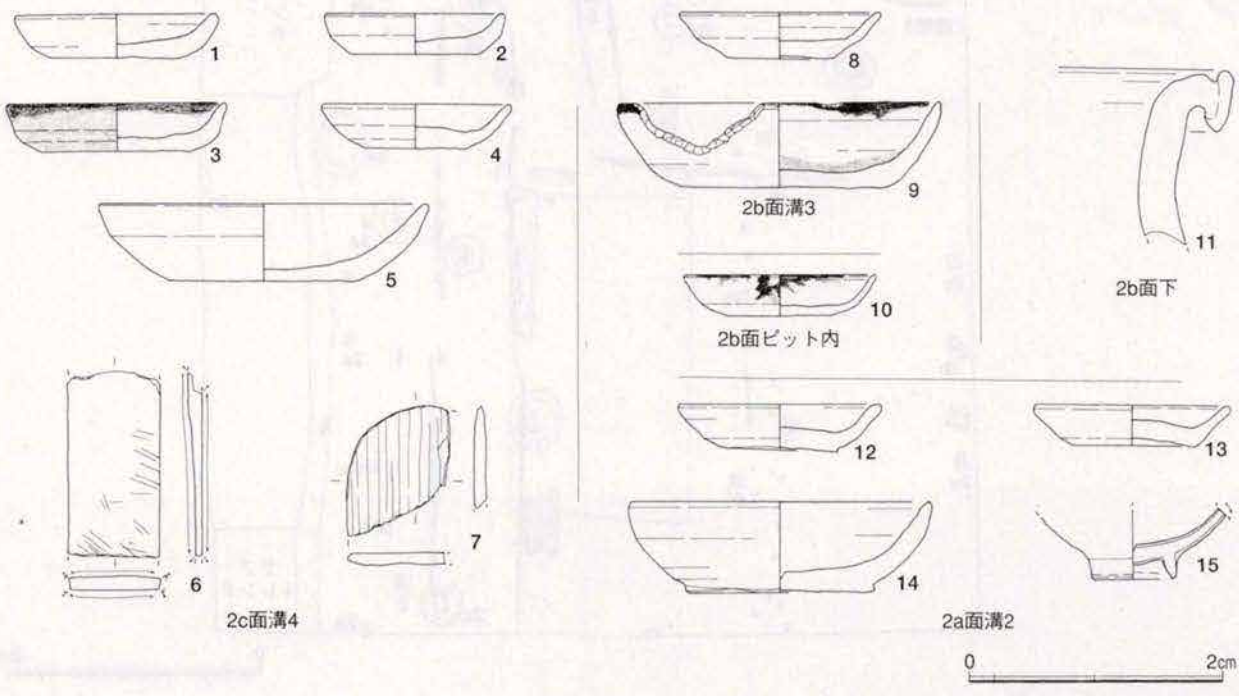


図８　第２面遺構内出土遺物

になされた地業でありながら、北側の2b面から2a面の２生活面を通じて使われた可能性が高い。

2a面

2b面上に再び堆積する炭層を覆う厚い泥岩版築地業層上面を生活面とする。調査区の北部では、ほぼ全面にわたって10～15㎝の厚さで地業されて、2b面の不安定な部分的地業による生活面を更新している。

発見された遺構は、東西溝２条と南北溝１条、簡便な建物１棟、それに柱穴底面に設置されていたであろう礎板とピット数口である。

溝２

溝３を作り直した東西溝である。一部を第１面の溝１に大方が壊される。幅70㎝、深さ20㎝を測る。南側を護岸する角杭列は、図７中に写植で示している。溝の南側には、土層壁にピットらしき落ち込みを一つ確認できるが、その他の遺構は発見されていない。

東西溝の南側は、やはり2c面以来の通路、もしくは道路であったろう。次の遺物が出土した。

図８-12～13は小型糸切り底かわらけ。背低気味で、底部は厚く、器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。14は大型糸切り底かわらけ。背高で、やや厚味のある器壁は内弯しながら立ち上がり、口唇部を尖らせる。

15は龍泉窯系青磁碗。内面の使用によるキズはわずかに見られ、破損断面には著しい研磨痕が残る。

溝５

調査区東端の中央に側板を杭で押さえながら東西方向に延びる。溝幅は25㎝を測り、確認できた長さは調査区東壁から西方へ160㎝であった。後述の溝７が本溝の確認限界付近にあるため、溝５と溝７は連結するかもしれない。また、本溝に接するように調査区東壁際に、やはり杭で板を押さえた木組みが発見されている。溝５との関係は不明である。

溝７

南北方向に205㎝にわたって杭で板材を押さえた木組みとして発見された。発見された木組みは１列のみであるため、溝とは断定できない。簡便な建物かもしれない。

建物1

調査区北東隅に発見された。板材と杭列がＬ字状に発見されたために建物としたが、確証は全くない。

柱穴・ピット

礎板を内包する柱穴とピットが５口発見された。

第２面下出土遺物

図９-１は極小糸切り底かわらけ。内底面が広く、器壁は内弯しながら立ち上がる。２～17は小型糸切り底かわらけ。２は背低で、器壁は開きながら立ち上がる。３～７は背低で、内底面が広く、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部中位付近の稜よりわずかに外反する。４は擦り痕、６～７は煤が付着。８～13は背低か背低気味で、器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。11は煤が付着。14～16は背低気味で、底部は厚く、薄い器壁は開きながら立ち上がり、口唇部付近よりわずかに外反する。17は背高気味で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部上位付近より外反する。18～22は大型糸切り底かわらけ。18～19は背高気味で、器壁は内弯しながら立ち上がる。18の口唇部には打ち欠き痕が残る。20～21は背高気味で、薄い器壁は内弯しながら立ち上がる。側面観碗型を呈する。20は煤が付着。22は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、口縁部付近で大きく外反する。23は瓦器質胎土のロクロ成形の白かわらけ。全体的に二次焼成の為、黒く変色している。外底面をヘラ削り後、指頭によるナデ調整を施している。24は浅鉢型火鉢。内面と外面口縁下は指頭による横位のナデ調整が施される。体部は指頭痕と刷毛目痕、底部は横位のヘラナデによる調整が顕著に残る。

25と26は東海産片口鉢Ⅰ類。25は内面中位より下方にかけて使用による摩滅痕が残る。26は口縁部片のため、使用による摩滅痕は不明である。共に13世紀中頃の製品。27～32は常滑窯製品。27は壺もしくは甕。28～30は甕。27～30は13世紀後半～14世紀前半の製品。31～32は甕のスタンプ文拓影。

図10-33～42は龍泉窯系青磁諸製品。33～35は鎬蓮弁文椀。内外面ともに使用によるキズが残る。36～38は折腰鉢。38の高台畳付の断面は尖り気味で、全面施釉後にその畳付周辺のみ釉を掻き取る。露胎部分と施釉された境の部分は赤色に発色する。いずれも内外面ともに使用によるキズはない。39～42は蓮弁文鉢。41～42は内面にヘラ状工具による蓮弁が施される。いずれも内外面ともに使用によるキズはない。43～47は白磁口兀皿。45～47は内外面ともに使用によるキズが見られる。48は青白磁水注か小壺。

49は銅製水滴。50は銅製蓋。49と50は対になると思われる。51は銅銭。北宋の「元祐通寶」で、初鋳1086年の篆書。

52は伊予産中砥。４面とも砥面として使用し、小口には生産地加工痕が残る。

53～54は漆皿。全面に黒色漆を施した後に、53は竹の意匠、54は植物文が主の情景文を内面に手描きする。55は太鼓型樽の栓。各面ごとに六角形に削られ、部分的に剥げている箇所もあるが、全体的に黒色漆が施される。56は草履芯。前後端部ともに山型に削り込まれている。表裏面は磨耗が激しく、わずかに繊維痕が見られる。

図10-57～図11-63は平瓦。57の凹面はナデ調整が施される。凸面には多量の砂粒がみられ、砂粒は叩きによって打ち込まれている。58は凹面に指頭ナデ調整、凸面に砂目と指頭ナデ調整が施される。破損断面に斜め方向の研磨痕が残る。59は凹面に布目痕を残し、上下端部付近に丁寧な指頭ナデ調整。凸面は縦方向の指頭ナデ調整が施される。60は凹面に砂目と指頭ナデ調整、凸面に砂目と斜格子目叩き痕が残る。61は凹面に縦方向の幅広な指頭ナデ調整、凸面に斜格子目叩き痕が残る。62は凹面に砂目と指頭ナデ調整、凸面に斜格子目叩き痕と指頭ナデ調整が施される。63は凹面に砂目と指頭ナデ調整、凸面に斜格子目と花文の叩き痕が残る。64は軒丸瓦。凹面に布目痕と指頭ナデ調整、凸面に縄叩き目痕と指頭ナデ調整が施される。

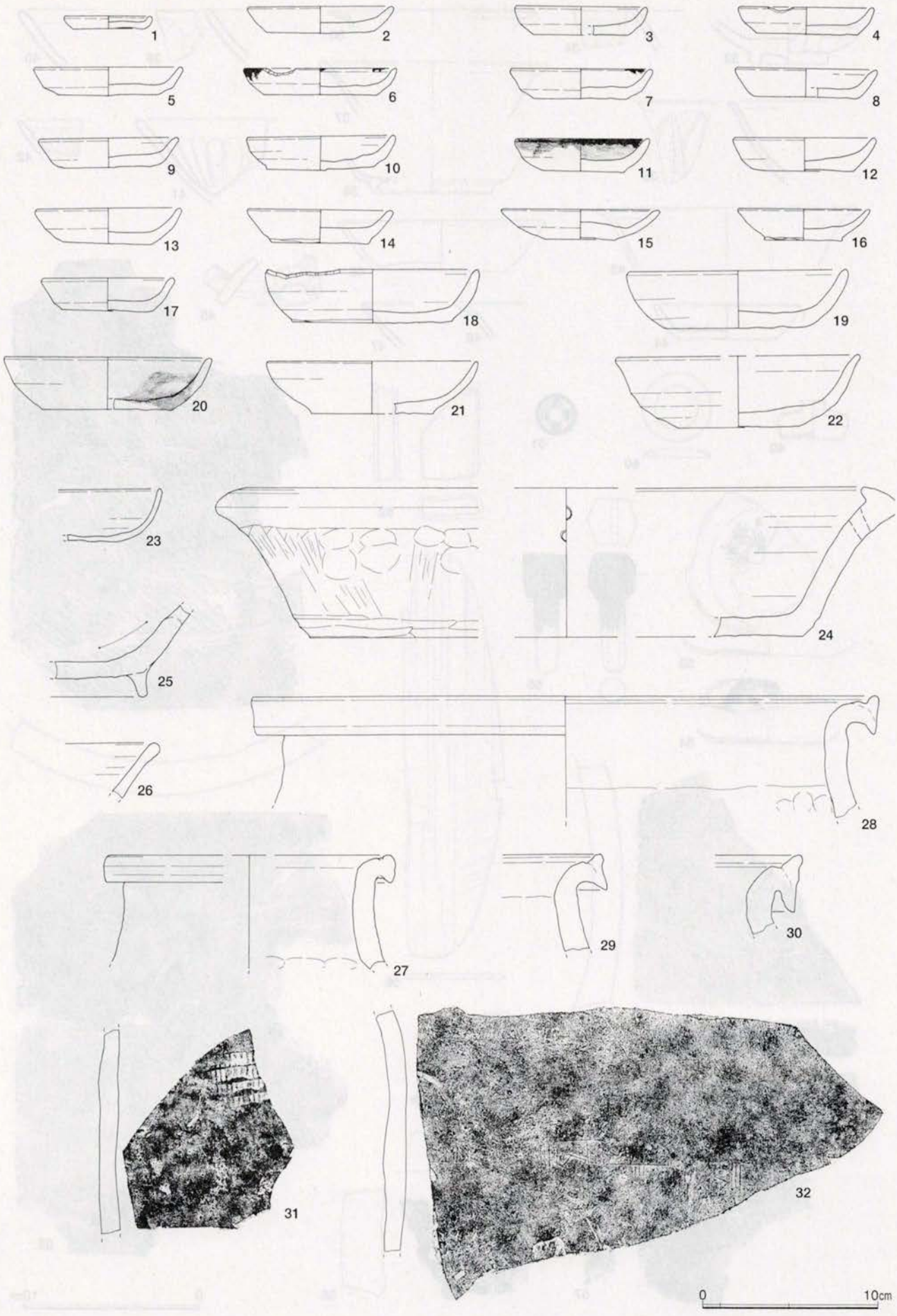


図９　第２面下出土遺物（1）

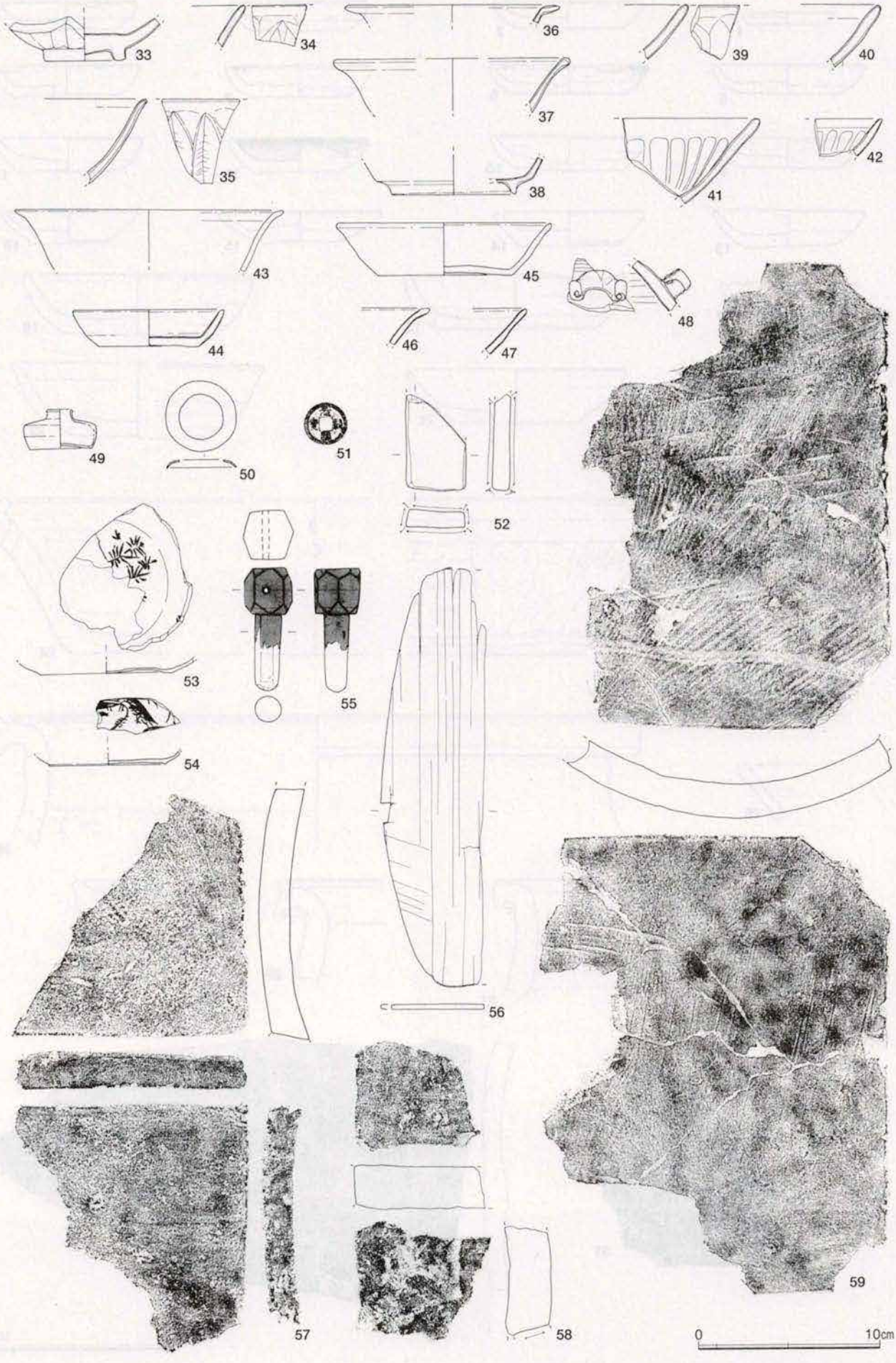


図10　第２面下出土遺物（2）

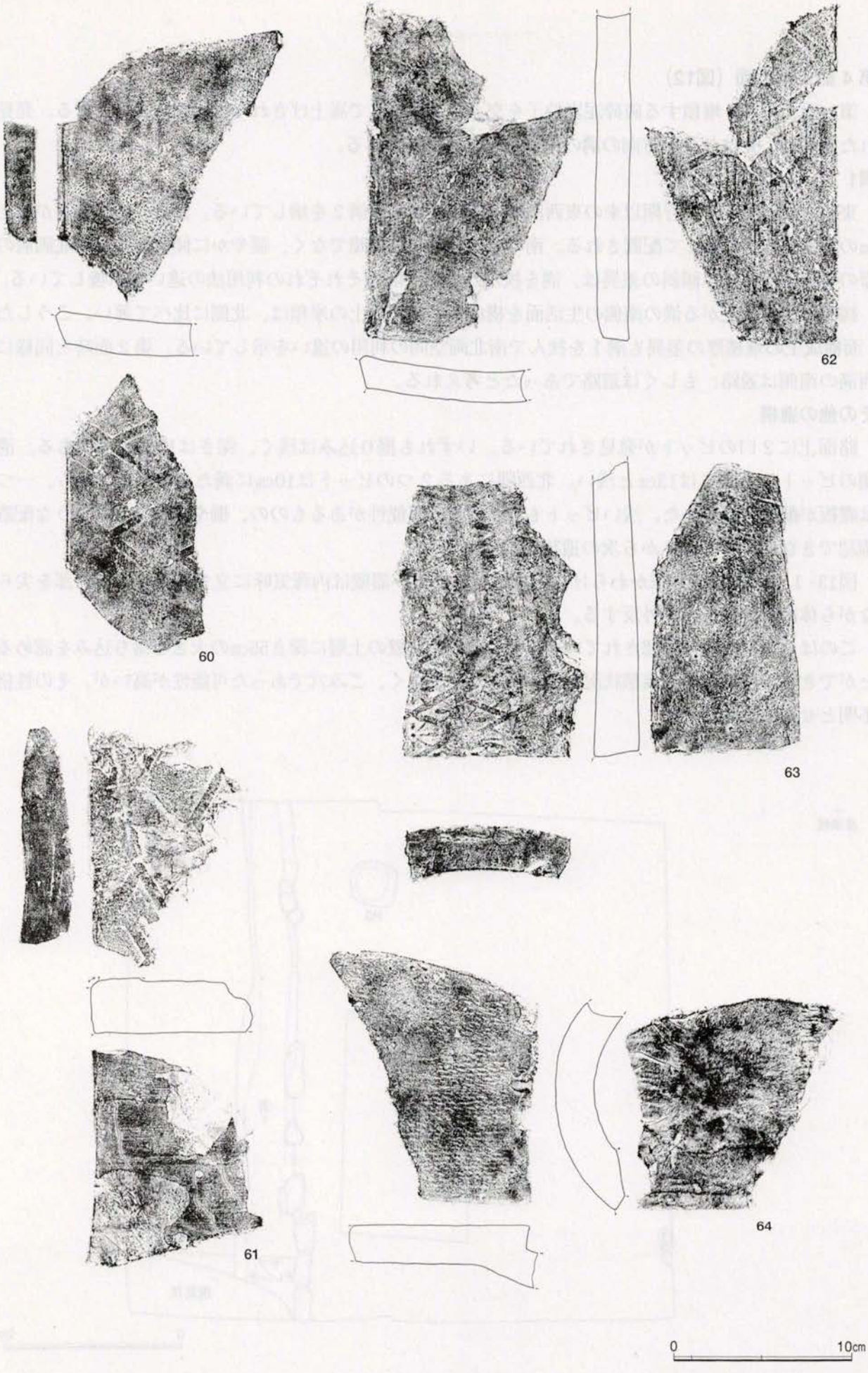


図11　第２面下出土遺物（3）

第４節　第１面（図12）

第2a面上に厚く堆積する破砕泥岩粒子を交える明灰色土で嵩上げされた上面を生活面とする。発見された遺構は、やはり東西方向の溝の他にピットと柱穴である。

溝1

東西方向の溝で、先行期以来の東西溝の位置を踏襲して溝２を壊している。泥岩の矩形切石が深さ20㎝の北側肩に護岸として配置される。南の落ち込み肩は明瞭でなく、緩やかに傾斜する。南北両肩の護岸の有無と落ち込み傾斜の差異は、溝を挟んだ南北空間のそれぞれの利用法の違いを示唆している。

緩やかに立ち上がる溝の南側の生活面を構成する明褐色土の堆積は、北側に比べて薄い。こうした第１面構成土の堆積厚の差異も溝１を挟んで南北両空間の利用の違いを示している。第２面時と同様に東西溝の南側は通路、もしくは道路であったと考えれる。

その他の遺構

路面上に２口のピットが発見されている。いずれも掘り込みは浅く、深さは10㎝ほどである。溝北側のピット３も深さは13㎝と浅い。北西隅にある２つのピットは10㎝に満たない深さながら、一つには礎板が配置されていた。浅いピットも柱穴になる可能性があるものの、柵や建物になるような配置は確認できない。ピット３から次の遺物が出土した。

図13-１は大型糸切り底かわらけ。背高気味で、薄い器壁は内弯気味に立ち上がり、口唇部を尖らせながら体部上位付近より外反する。

このほか、調査時に確認されていないが、調査区北壁の土層に深さ55㎝の大きな落ち込みを認めることができる。内部の覆土堆積状況から、柱穴などでなく、ごみ穴であった可能性が高いが、その性格は不明とせざるを得ない。

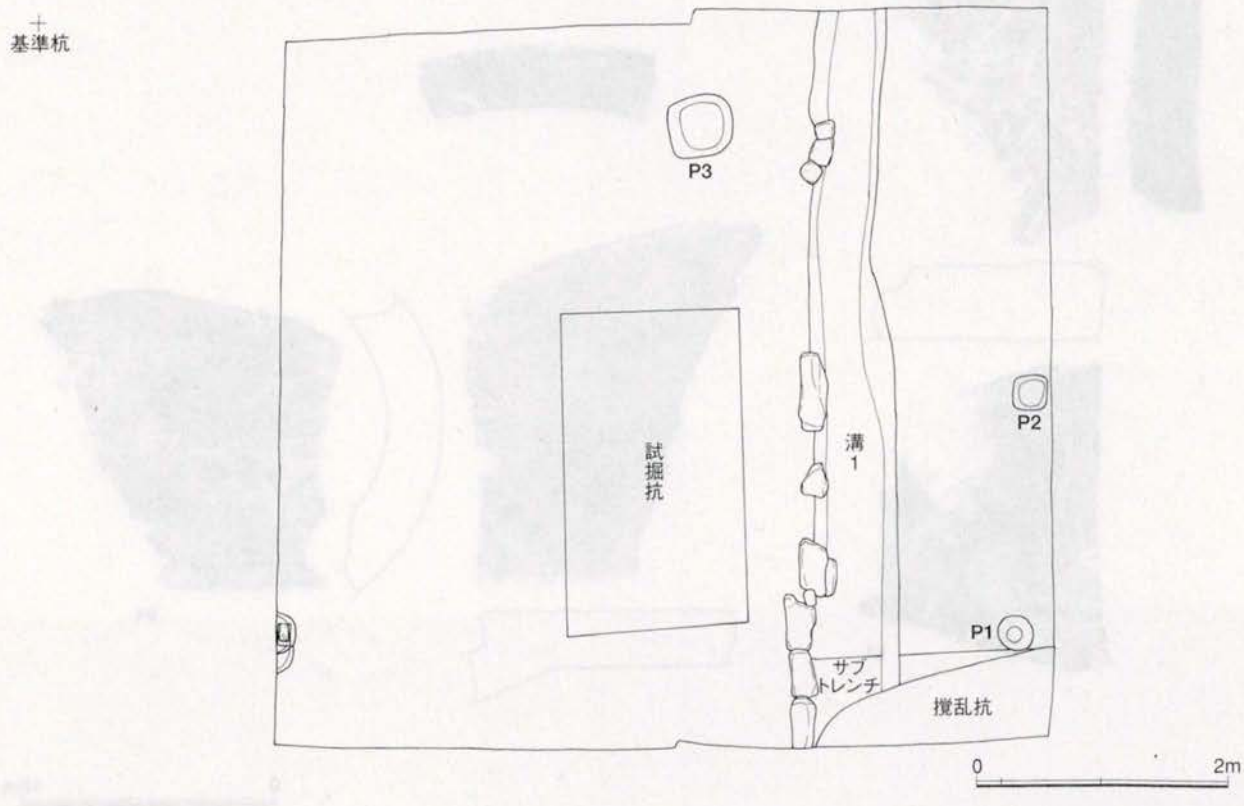


図12　第１面全測図

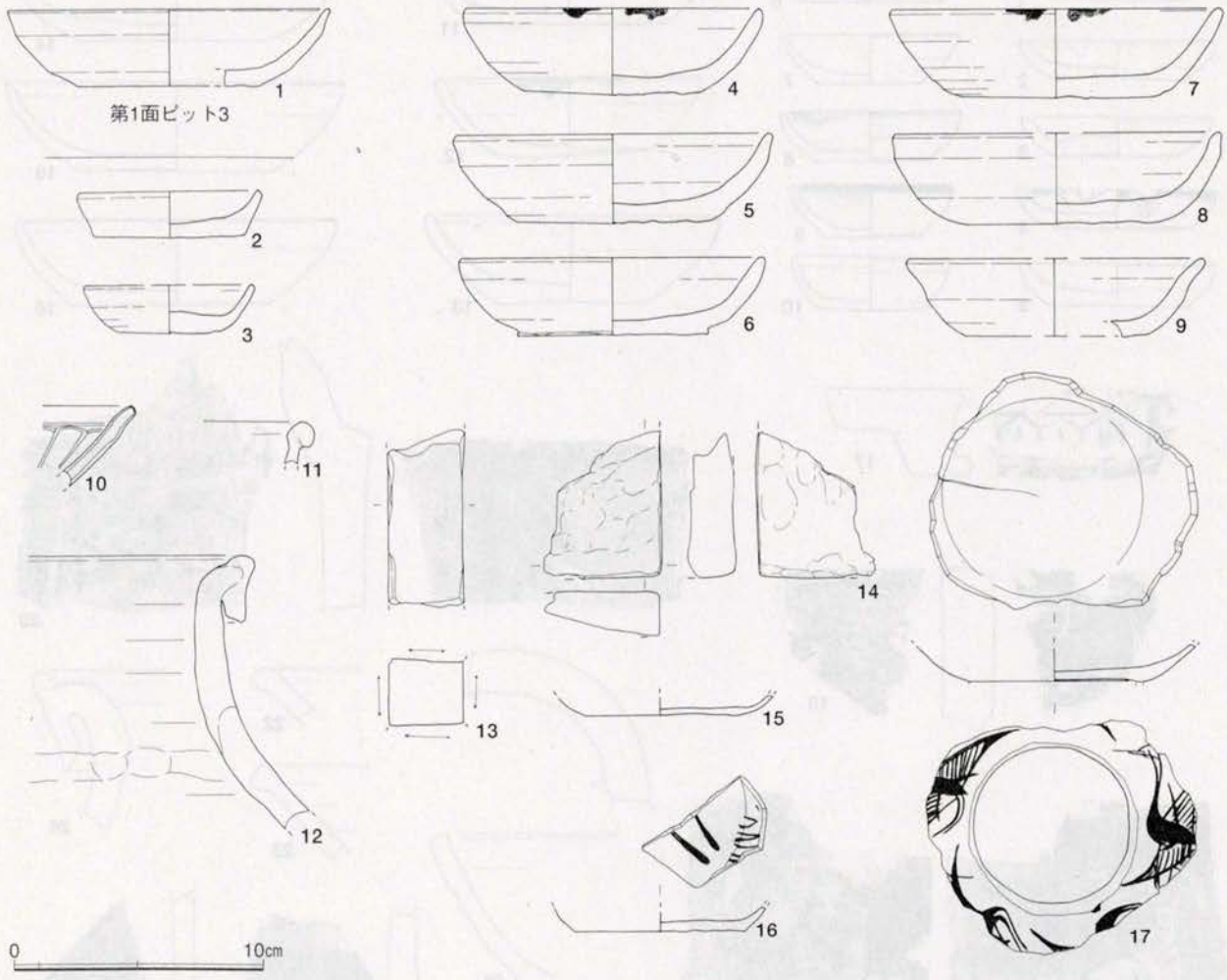


図13　第１面下出土遺物

第１面下出土遺物

図13-2 ～３は小型糸切り底かわらけ。２は底径口径比の差が小さく、器壁は直線的に立ち上がる。３は背高気味で、薄い器壁は開きながら立ち上がる。４～９は大型糸切り底かわらけ。４～６は背高気味で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部上位付近よりやや外反する。４は煤が付着する。７から８は背高気味で、内底面が広く、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部上位付近よりやや外反する。９は背低気味で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部中位付近の強い稜より外側に大きく外反する。

10は龍泉窯系青磁蓮弁文皿。内面にヘラ状工具による蓮弁文が施される。内外面ともに使用によるキズがわずかに残る。11は泉州窯系の緑釉盤の口縁部片。

12は常滑甕で、13世紀後半～14世紀前半の製品。

13は伊予産中砥。４面とも砥面として使用している。14は全体的に摩滅が激しい。赤間硯の一部かと思われる。

15～17は漆皿。15は全面に黒色漆を施され、無文である。16は全面に黒色漆を施された後に、内面に赤色漆で笹と帯の組合せ意匠が手描きされる。17は碗全面に黒色漆を施された後に、内面のみに赤色漆が施される。外面には赤色漆で鶴の意匠が手描きされる。高台は欠損している。

第１面上出土遺物（図14～15）

図14-１～10は小型糸切り底かわらけ。１～４は背低で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がり、体部上位付近よりやや外反する。４は煤が付着する。５～６は背低で、器壁は開きながら立ち上

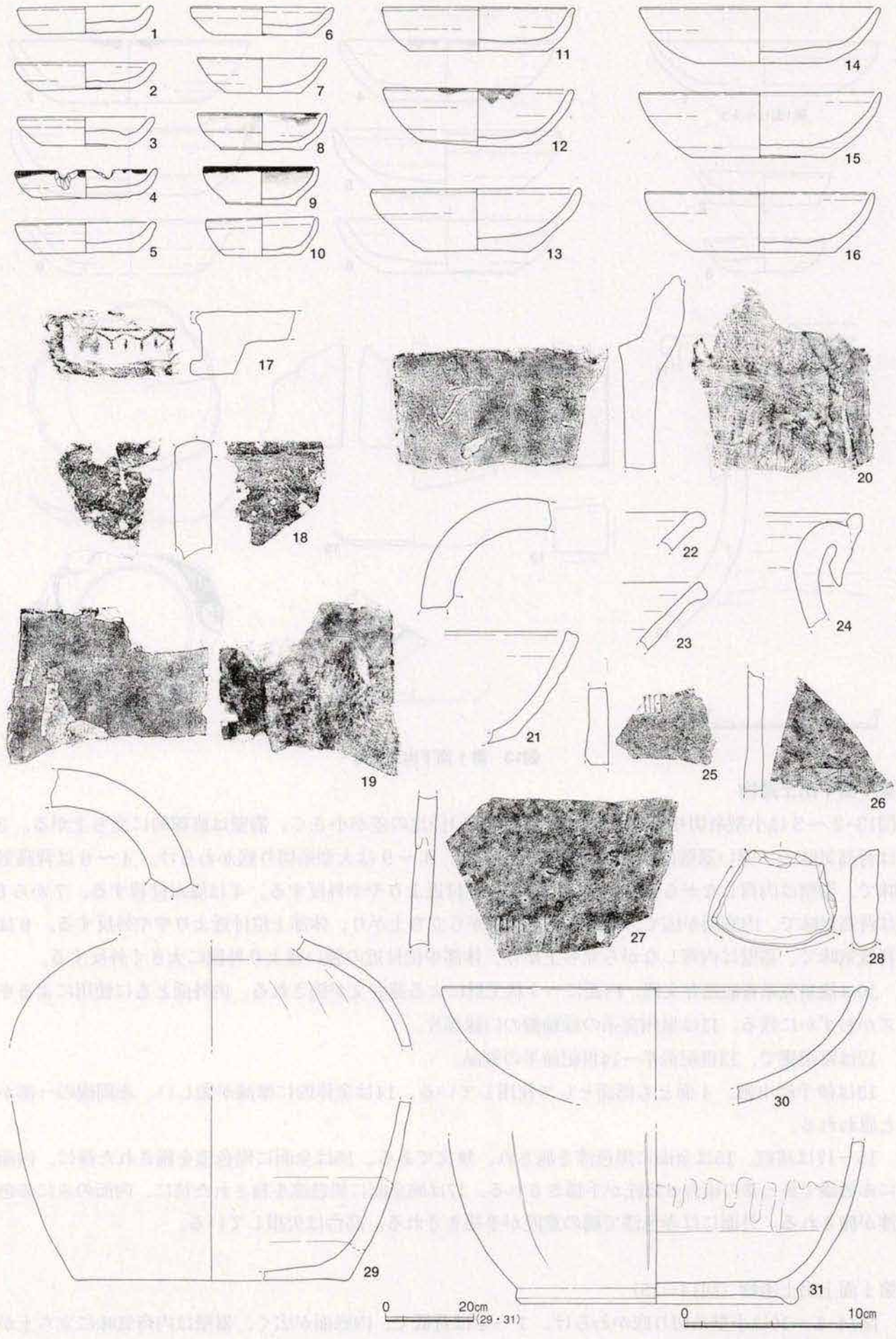
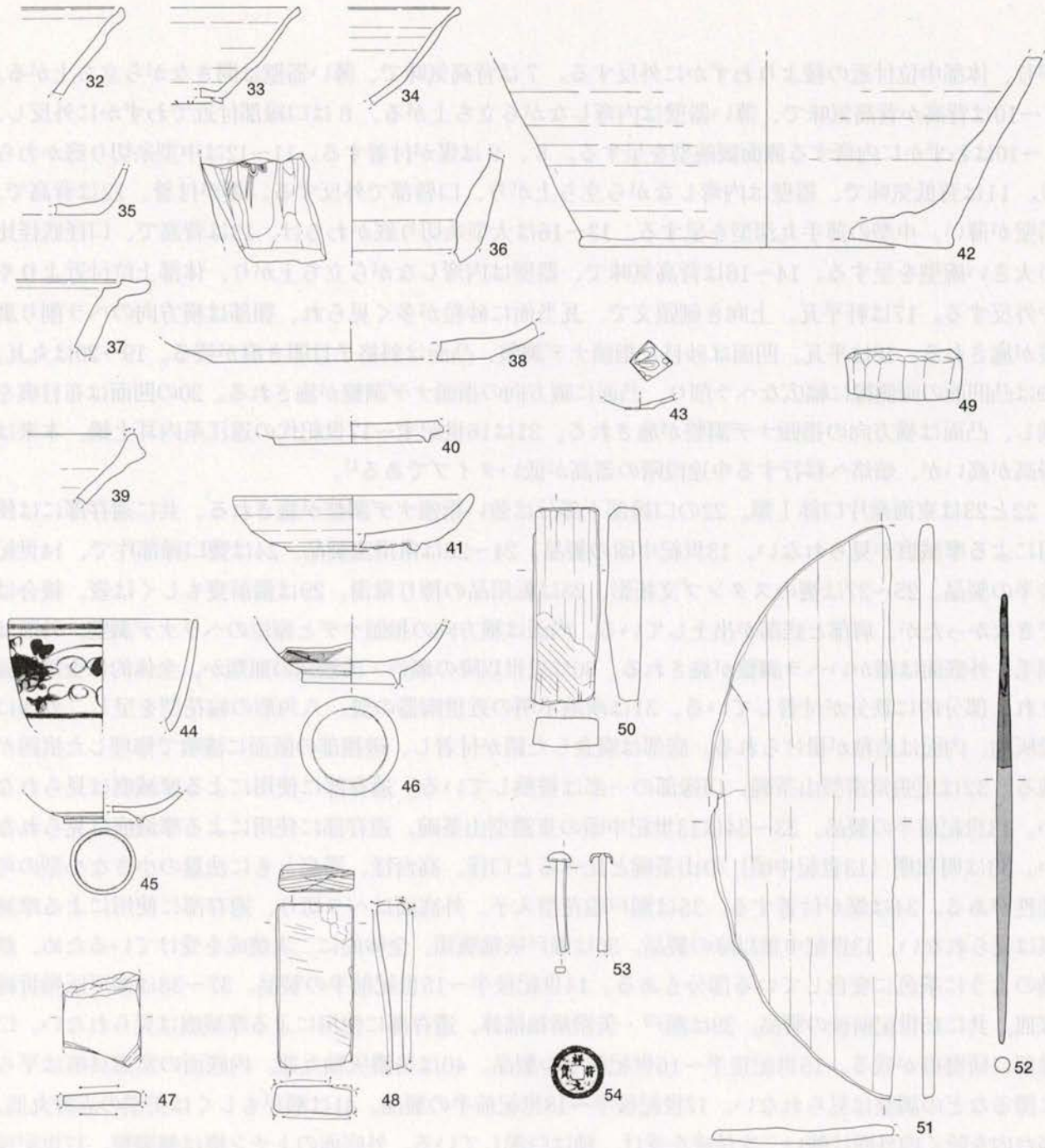


図14　第1面上出土遺物（1）



第1面上

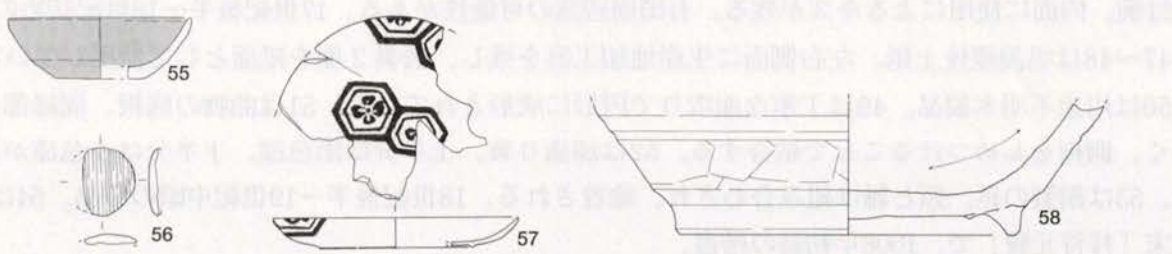


表　採

0　10cm

図15　第１面上出土遺物（2）、表採遺物

がり、体部中位付近の稜よりわずかに外反する。7は背高気味で、薄い器壁は開きながら立ち上がる。8～10は背高か背高気味で、薄い器壁は内弯しながら立ち上がる。8は口縁部付近でわずかに外反し、9～10はわずかに内弯する側面観碗型を呈する。8、9は煤が付着する。11～12は中型糸切り底かわらけ。11は背低気味で、器壁は内弯しながら立ち上がり、口唇部で外反する。煤が付着。12は背高で、器壁が薄い、中型の薄手丸深型を呈する。13～16は大型糸切り底かわらけ。13は背高で、口径底径比が大きい碗型を呈する。14～16は背高気味で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部上位付近よりやや外反する。17は軒平瓦。上向き剣頭文で、瓦当面に砂粒が多く見られ、顎部は横方向のヘラ削り調整が施される。18は平瓦。凹面は砂目と指頭ナデ調整、凸面は斜格子目叩き痕が残る。19～20は丸瓦。19は凸凹面の両側縁に幅広なヘラ削り、凸面に縦方向の指頭ナデ調整が施される。20の凹面は布目痕を残し、凸面は横方向の指頭ナデ調整が施される。21は16世紀末～17世紀代の遠江系内耳土鍋。本来は器高が高いが、焙烙へ移行する中途段階の器高が低いタイプである[1)]。

22と23は東海産片口鉢Ⅰ類。22の口縁部下部分は強い指頭ナデ調整が施される。共に遺存部には使用による摩滅痕が見られない。13世紀中頃の製品。24～28は常滑窯製品。24は甕口縁部片で、14世紀後半の製品。25～27は甕のスタンプ文拓影。28は転用品の擦り常滑。29は備前甕もしくは壺。接合はできなかったが、肩部と底部が出土している。内面は横方向の指頭ナデと縦位のヘラナデ調整。外面は刷毛、外底面は細かいヘラ調整が施される。30は近世以降の瀬戸・美濃窯の皿類か。全体的に金箔が施され、部分的に鉄分が付着している。31は産地不明の近世陶器の甕。八角形の輪花型を呈し、外面に松灰釉、内面は飴釉が掛けられる。底部は腐食した錆が付着し、破損部の断面に漆喰で修理した痕跡が残る。32は尾張常滑型山茶碗。口縁部の一部は被熱している。遺存部に使用による摩滅痕は見られない。13世紀前半の製品。33～34は13世紀中頃の東濃型山茶碗。遺存部に使用による摩滅痕は見られない。33は明和期（13世紀中頃）の山茶碗と比べると口径、高台径、器高ともに法量の小さな小型の可能性がある。34は煤が付着する。35は瀬戸輪花型入子。外底面はヘラ切り、遺存部に使用による摩滅痕は見られない。13世紀中葉以降の製品。36は瀬戸灰釉瓶類。全体的に二次焼成を受けているため、鉄釉のように茶色に変色している部分もある。14世紀後半～15世紀前半の製品。37～38は瀬戸灰釉折縁深皿。共に15世紀前後の製品。39は瀬戸・美濃錆釉擂鉢。遺存部に使用による摩滅痕は見られない。口縁部に研磨痕が残る。15世紀後半～16世紀前半の製品。40は美濃灰釉丸皿。内底面の窯道具痕は平らに擦るなどの調整は見られない。17世紀後半～18世紀前半の製品。41は瀬戸もしくは美濃の志野丸皿。高台内を除く内外面は強い二次焼成を受け、釉は白濁している。外底面のトチン痕は無調整。17世紀後半の製品。

42は褐釉甕か壺。43は青白磁印花文小皿。内外面ともに使用によるキズが見られない。

44は肥前染付筒型碗。外面の染付は牡丹唐草文が手描きされる。17世紀前半の製品。45～46は肥前染付碗。内面に使用によるキズが残る。有田周辺窯の可能性がある。17世紀後半～18世紀初めの製品。

47～48は鳴滝産仕上砥。左右側面に生産地加工痕を残し、表裏2面を砥面として使用している。49～50は用途不明木製品。49は丁寧な面取りで円形に成形されている。51は曲物の底板。周縁部に孔はなく、側板をしめつけることで結合する。52は漆塗り箸。上半分は黒色漆、下半分は赤色漆が施される。53は銅製の鋲。頭と軸は組み合わされ、鑞着される。18世紀後半～19世紀中頃の製品。54は銅銭。北宋「祥符元寶」で、1008年初鋳の楷書。

図15-55～58は表面採集遺物。55は黒漆塗りかわらけ。背高で、薄い器壁は開きながら立ちあがる、薄手丸深型に近いタイプ。

56は用途不明円形木製品。57は漆皿。全面に黒色漆を施した後に、亀甲に花の組合せの意匠を内面

に手描きしている。

58は東海産片口鉢Ⅰ類。内面は使用による摩滅痕が著しい。

【註】

1　金子健一氏（瀬戸埋蔵文化財センター）、松井一明氏（袋井市教育委員会）の御教示による。

【参考文献】

大橋康二他　2000年『九州陶磁の編年　－九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会。
河野眞知郎　1993年「中世鎌倉火鉢考　－東国との関連において」『考古論叢　神奈河』第2集、54～79頁、神奈川考古学会。
中野　晴久　1992年「中世知多古窯址群の押印文　－ミクロ流通史のための予備的研究」『知多半島の歴史と現在』4、54～86頁、日本福祉大学知多半島総合研究所。
1994年「赤羽・中野　－生産地における編年について」『中世常滑焼きをおって』シンポジウム資料集、7～22頁、日本福祉大学知多半島総合研究所。
藤沢　良祐　1994年「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、111～134頁、三重県埋蔵文化財センター。
1997年「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯、43～84頁、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター。
山本　信夫　2000年「大宰府府条坊跡　－磁器分類編」『太宰府市の文化財』第49集、1～86頁、太宰府市教育委員会。

第4章　まとめ

軟弱地盤上に設けられた第3面からは、南北方向の溝と思われる遺構が発見されたのみで、調査区内の土地利用の性格は判然としない。第2面以降になると土地利用が確定して、東西溝を境に南側の通路もしくは道路と北側の柱穴を中心とした建物などが建てられる居住空間となった。この土地利用状況は、第1面まで継続した。これら3枚の生活面の年代的な差は、出土遺物からほとんど確認できなかった。一つには、現地調査での遺構確認錯誤に起因する。遺物が本来の層位から上下した結果、遺物の帰属が不確かであった。

年代的差異をほとんど見いだせない3枚の生活面から出土した遺物は、概して円覚寺創建を前後する時期に帰属する。かわらけは糸きり底のみである。概ね背低か背低気味の内底面が広い古手のタイプが多くみられる一方で、背高の薄い器壁を内弯しながら立ち上がる側面観碗型を呈する大型と小型かわらけ、薄手丸深型を呈する中型かわらけも出土することから、13世紀後葉～14世紀前半に比定できる。その他の常滑窯製品や舶載品にも13世紀中頃～14世紀前半の生産地年代が与えられる。こうした年代は、円覚寺旧境内遺跡（山ノ内瑞鹿山509番1）調査成果で示された弘安十（1257）年もしくは正応三（1290）年火災後とする『境内絵図』作製年とほぼ重なる。各生活面の詳細な下限年代比定が困難であったものの、今回調査を行った地点が『境内絵図』に示されている「門前新御寄進」の地域であることが妥当ならば、耕作地から寄進後に門前の町屋地域に変化していく姿を調査結果の第2面に想定できないだろうか。

また第1面上～表採にかけての出土遺物は、近世以降のものが混入するとともに、黒漆塗りかわらけや金箔塗りの瀬戸・美濃窯の皿など珍しい遺物も出土している。これらは本調査地点が円覚寺旧境内遺跡という特殊な土地柄であるためであろうか。

表1　遺物観察表（1）

挿図番号		出土地	種別	口径	底径	器高	備考
5	1	第3面　溝8	漆皿	9.6	6.0	1.7	
5	2	第3面　溝8	草履芯	全長21.8　幅4.5　厚0.25			
5	3	第3面　溝8	草履芯	全長21.7　幅4.5　厚0.3			
5	4	第3面　溝8	箸	全長21.1　幅0.7　厚0.6			
5	5	第3面　溝8	箸	全長22.0　幅0.65　厚0.5			
5	6	第3面　溝8	箸	全長21.0　幅0.6　厚0.4			
5	7	第3面　溝8	箸	全長20.6　幅0.6　厚0.45			
5	8	第3面　溝8	箸	全長22.0　幅0.6　厚0.5			
5	9	第3面　溝8	菜箸	全長26.0　幅0.8　厚1.0			
5	10	第3面　溝8	用途不明木製品	全長14.7　幅4.7　厚2.1			
5	11	第3面　溝8	用途不明木製品	全長10.0　幅1.0　厚0.3			
5	12	第3面　溝8	用途不明木製品	全長31.4　幅0.9　厚0.8			
6	1	第3面下	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.5	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む暗茶色弱粉質土　煤付着
6	2	第3面下	かわらけ	(7.0)	(5.2)	1.9	雲母片、黒色微砂を多めに含むザラついた暗肌色弱粉質土
6	3	第3面下	かわらけ	(7.1)	(5.2)	1.7	雲母片、黒色微砂、白色微砂を含む橙色弱粉質土
6	4	第3面下	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.8	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む暗肌色弱粉質土
6	5	第3面下	かわらけ	7.0	3.9	2.0	黒色微砂、白色微砂、雲母片、白針を含む橙色弱粉質土
6	6	第3面下	かわらけ	11.8	8.0	3.1	雲母片、白針、黒色微砂を含む暗肌色弱粉質土　煤付着
6	7	第3面下	かわらけ	(11.2)	(5.8)	3.3	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む淡橙色弱粉質土
6	8	第3面下	かわらけ	10.8	6.1	2.9	雲母片、黒色微砂を含む淡茶色弱粉質土　煤付着
6	9	第3面下	かわらけ	(10.6)	(5.8)	3.2	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む橙色弱粉質土
6	10	第3面下	かわらけ				黒色微砂、白色微砂、雲母片、白針を含む肌色弱粉質土
6	11	第3面下	かわらけ				雲母片、白針、黒色微砂を含む暗肌色弱粉質土
6	12	第3面下	かわらけ	13.2	8.2	3.2	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む淡橙色弱粉質土
6	13	第3面下	かわらけ	(13.4)	(8.2)	3.1	雲母片、黒色微砂、白色微砂を含む淡橙色弱粉質土
6	14	第3面下	穿孔かわらけ	(11.9)	(8.2)	3.2	雲母片、黒色微砂、白色微砂を含む肌色弱粉質土
6	15	第3面下	浅鉢型火鉢				胎土は暗灰褐色土
6	16	第3面下	瓦質輪花型火鉢				胎土は白色微砂を多く含む淡紅色瓦質土
6	17	第3面下	瓦質輪花型火鉢				胎土は灰白色瓦質土
6	18	第3面下	片口鉢Ⅰ類				胎土は白色小～細石を含む暗灰色土
6	19	第3面下	常滑片口鉢Ⅱ類				胎土は白色微～小石を含む暗橙色土
6	20	第3面下	常滑片口鉢Ⅱ類				胎土は白色微～小石を含む暗茶褐色土
6	21	第3面下	常滑甕				胎土は白色微砂を含む灰色土
8	1	第2c面　溝4	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.7	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む淡橙色弱粉質土
8	2	第2c面　溝4	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.6	雲母片、白針、黒色微砂を含む肌色弱粉質土
8	3	第2c面　溝4	かわらけ	(8.7)	(6.0)	1.9	雲母片、白針、黒色微砂を含む暗肌色弱粉質土　煤付着
8	4	第2c面　溝4	かわらけ	7.4	4.0	1.8	雲母片、白針、黒色微砂を含む淡肌色弱粉質土
8	5	第2c面　溝4	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.1	雲母片、白針、黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土　焼成不良
8	6	第2c面　溝4	鳴滝仕上砥	遺存長7.5　幅3.65　厚0.6			黄灰色細粒凝灰岩製
8	7	第2c面　溝4	円形木製品	遺存長4.3　遺存幅4.0　厚0.5			
8	8	第2b面　溝3	かわらけ				雲母片、白針を含む暗肌～赤褐色弱粉質土
8	9	第2b面　溝3	かわらけ	12.7	8.8	3.4	雲母片、白針、黒色微砂を含む茶色弱粉質土　煤付着
8	10	第2b面　柱穴内	かわらけ				雲母片、黒色微砂を含む肌～赤褐色弱粉質土　煤付着
8	11	第2b面下	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を多めに含む淡橙～灰色土
8	12	第2a面　溝2	かわらけ	7.8	4.4	1.8	黒色微砂、白色微砂、雲母片、白針を少量含む淡茶色弱粉質土
8	13	第2a面　溝2	かわらけ				雲母片、黒色微砂、白色微砂を含む淡肌色弱粉質土
8	14	第2a面　溝2	かわらけ	(11.8)	(7.5)	3.6	黒色微砂、白針、雲母片を含む淡橙色弱粉質土
8	15	第2a面　溝2	青磁碗		(3.4)		素地は明灰色弱粘質緻密土　釉は暗めの青緑色を呈する
9	1	第2面下	極小かわらけ	5.1	4.1	1.8	黒色微砂を含む橙色弱粉質土
9	2	第2面下	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.5	雲母片、白色微砂、黒色微砂、白針を含む淡橙色弱粉質土
9	3	第2面下	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.65	黒色微砂、白色微砂、白針を含む赤褐色弱粉質土
9	4	第2面下	かわらけ	7.6	5.9	1.6	黒色微砂、雲母片、白針を含む淡橙色弱粉質土　鉄分付着

表2　遺物観察表（2）

挿図番号		出土地	種別	口径	底径	器高	備考
9	5	第2面下	かわらけ	(8.3)	(5.7)	1.6	黒色微砂、雲母片、白針を含む暗肌色粉質土
9	6	第2面下	かわらけ	(8.8)	6.4	1.5	雲母片、白針、黒色微砂を含む肌色弱粉質土　煤付着
9	7	第2面下	かわらけ	(8.0)	(5.5)	1.7	雲母片、白針、黒色微砂を含む淡肌色弱粉質土　煤付着
9	8	第2面下	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.6	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む淡橙色弱粉質土
9	9	第2面下	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.65	黒色微砂、雲母片を多く含む暗肌色弱粉質土
9	10	第2面下	かわらけ	8.3	6.15	1.95	黒色微砂、白色微砂、白針を含む淡茶色弱粉質土
9	11	第2面下	かわらけ	7.6	4.6	1.9	雲母片、黒色微砂を含む淡茶色弱粉質土　煤付着
9	12	第2面下	かわらけ	7.9	5.85	1.9	黒色微砂、白色微砂、白針を含む橙色粉質土
9	13	第2面下	かわらけ	8.2	5.0	2.1	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む橙色弱粉質土
9	14	第2面下	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.9	雲母片、黒色微砂、白色微砂を含む肌色弱粉質土
9	15	第2面下	かわらけ	(9.1)	(4.1)	1.7	雲母片、白針、黒色微砂を含む赤褐色粉質土
9	16	第2面下	かわらけ	(7.6)	(4.5)	1.8	雲母片、黒色微砂、白色微砂を含む淡肌色弱粉質土
9	17	第2面下	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.35	黒色微砂、白色微砂、雲母片、白針をわずかに含む暗肌色粉質土
9	18	第2面下	かわらけ	(12.1)	(9.2)	3.05	黒色微砂、白色微砂、白針、雲母片を多めに含むザラつく暗橙色粉質土
9	19	第2面下	かわらけ	12.4	8.25	3.3	黒色微砂、白色微砂、白針、雲母片を多めに含むザラつく肌色粉質土
9	20	第2面下	かわらけ	(13.8)	(7.4)	3.0	雲母片、黒色微砂、白針を含む淡橙色弱粉質土　煤付着
9	21	第2面下	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.0	雲母片、黒色微砂を含む肌色弱粉質～粉質土　鉄分付着
9	22	第2面下	かわらけ	(13.9)	7.0	4.1	黒色微砂、白色微砂、雲母片、白針をわずかに含む淡茶色弱粉質土
9	23	第2面下	白かわらけ				胎土は軟質な灰黒～黒色粉質精良土
9	24	第2面下	浅鉢型火鉢	(34.5)	(27.4)	8.6	胎土は灰色瓦質土
9	25	第2面下	片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微～小石を多く含む粗い灰色土
9	26	第2面下	片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微～小石を少量含む暗灰色緻密土
9	27	第2面下	常滑壺 or 甕	(16.0)			胎土は粗めの灰～暗灰色土
9	28	第2面下	常滑甕	(36.0)			胎土は白色微～小石を含む黄味灰色土
9	29	第2面下	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を含む黄味灰色土
9	30	第2面下	常滑甕				胎土は白色微～小石を含む灰黒色土
9	31	第2面下	常滑甕				胎土は白色微～小石を含む灰黒色土
9	32	第2面下	常滑甕				胎土は白色微～小石を含む灰色土
10	33	第2面下	青磁鎬蓮弁文碗		5.1		素地は淡灰色弱粘質緻密土　釉は淡青緑色を呈する
10	34	第2面下	青磁鎬蓮弁文碗				素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は不透明な灰緑色を呈する
10	35	第2面下	青磁鎬蓮弁文碗				素地は黒色微砂を多めに含む灰白色弱粘質緻密土 釉は暗青緑色を呈する
10	36	第2面下	青磁折腰鉢	(12.0)			素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は淡青緑色を呈する
10	37	第2面下	青磁折腰鉢	(13.0)			素地は灰白色強粘質緻密土　釉は不透明な暗青緑色を呈する
10	38	第2面下	青磁折腰鉢		(6.8)		素地は白色粘質緻密土　釉は不透明な灰緑色を呈する
10	39	第2面下	青磁蓮弁文鉢				素地は灰色弱粘質緻密土　釉は暗青緑色を呈する
10	40	第2面下	青磁鉢				素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は暗青緑色を呈する
10	41	第2面下	青磁蓮弁文鉢				素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は灰緑色を呈する
10	42	第2面下	青磁蓮弁文鉢				素地は茶味灰色弱粘質緻密土　釉はオリーブ色を呈する
10	43	第2面下	白磁口兀碗	(15.0)			素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は青味乳白色を呈する
10	44	第2面下	白磁口兀皿	(7.4)	(5.6)	2.0	素地は砂粒子を含む灰白色弱粘質緻密土　釉は乳白濁色を呈する
10	45	第2面下	白磁口兀皿	(12.0)	(7.4)	2.9	素地は砂粒子を含む灰白色弱粘質緻密土　釉は乳白濁色を呈する
10	46	第2面下	白磁口兀皿				素地は黄味白色弱粘質緻密土　釉は乳白濁色を呈する
10	47	第2面下	白磁口兀皿				素地は砂粒子を含む黄味灰白色弱粘質緻密土　釉は乳白色を呈する

表3　遺物観察表（3）

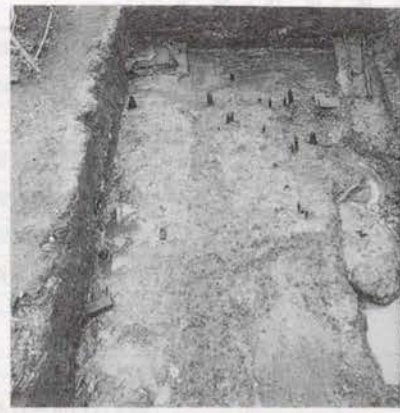
挿図番号		出土地	種別	口径	底径	器高	備考
10	48	第2面下	青白磁水注or小壺				素地は砂粒子を含む灰白色弱粘質緻密土　釉は淡水色を呈する
10	49	第2面下	銅製水滴	1.2	3.4	2.2	
10	50	第2面下	銅製品	径4.0～2.5			
10	51	第2面下	銭				「元祐通寶」
10	52	第2面下	伊予中砥	遺存長5.2　幅3.3　厚1.0			黄～黄灰色を呈する凝灰岩製
10	53	第2面下	漆皿		(7.4)		
10	54	第2面下	漆皿		(6.6)		
10	55	第2面下	太鼓型樽の栓	全長7.9　径1.5			
10	56	第2面下	草履芯	全長23.3　幅5.8　厚0.3			
10	57	第2面下	平瓦				胎土は灰色瓦質土
10	58	第2面下	平瓦				胎土は軟質な灰色緻密土
10	59	第2面下	平瓦				胎土は灰色瓦質土
11	60	第2面下	平瓦				胎土は混入物を多く含む灰白色瓦質土
11	61	第2面下	平瓦				胎土は雲母微片を多く含む灰色瓦質土
11	62	第2面下	平瓦				胎土は混入物少なめの灰色瓦質土
11	63	第2面下	平瓦				胎土は灰色瓦質土
11	64	第2面下	軒丸瓦				胎土は明灰色瓦質土
13	1	第1面　ピット3	かわらけ	(13.1)	(7.4)	3.1	黒色微砂、雲母片、白針、白色微砂を含む淡橙色弱粉質土
13	2	第1面下	かわらけ	7.2	6.3	1.9	黒色微砂、白色微砂、雲母片を含む暗橙色弱砂質土
13	3	第1面下	かわらけ	(6.6)	4.2	1.95	黒色微砂、白色微砂、白針を少量含む淡茶色粉質土
13	4	第1面下	かわらけ	(11.9)	(7.2)	3.5	黒色微砂、白色微砂、白針を含む橙色弱粉質土
13	5	第1面下	かわらけ	(12.6)	7.8	3.35	白色微砂、白針を多く含むザラつく淡橙色弱粉質土
13	6	第1面下	かわらけ	12.2	7.8	3.1	黒色微砂、白色微砂、雲母片、白針を含む肌色弱粉質土
13	7	第1面下	かわらけ	(13.2)	7.8	3.6	黒色微砂、雲母片、白針を含む暗橙色弱粉質土
13	8	第1面下	かわらけ	(13.0)	7.4	3.65	黒色微砂、白色微砂、白針を多く含む暗橙色粉質土
13	9	第1面下	かわらけ	(11.8)	(7.4)	(3.1)	黒色微砂、白色微砂、白針を含む淡茶色粉質土
13	10	第1面下	青磁蓮弁文皿				素地は明灰色強粘質緻密土　釉は青緑色を呈する
13	11	第1面下	緑釉or二彩盤				胎土は淡橙色弱粘質土　釉は緑色を呈する
13	12	第1面下	常滑甕				胎土は白色微～小石を多く含む暗灰色土
13	13	第1面下	伊予中砥	遺存長7.1　幅3.0　厚2.7			紅味白色凝灰岩製
13	14	第1面下	赤間硯？	遺存長5.8　遺存幅4.8　厚1.9			
13	15	第I面下	漆皿		6.0		
13	16	第1面下	漆皿		(7.0)		
13	17	第1面下	漆椀		(7.2)		
14	1	第1面上	かわらけ	(7.5)	5.1	1.5	黒色微砂を多く含む橙色弱粉質土
14	2	第1面上	かわらけ	7.7	5.4	1.5	雲母片、白針、白色微砂を含む橙色弱粉質土
14	3	第1面上	かわらけ	7.5	4.9	1.6	雲母片、白色微砂、黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土
14	4	第1面上	かわらけ	(7.9)	4.95	1.55	黒色微砂、白色微砂、雲母片を含む暗橙色弱粉質土
14	5	第1面上	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	雲母片、白針、黒色微砂を含む肌色弱粉質土
14	6	第1面上	かわらけ	8.0	5.6	1.6	雲母片、白色微砂、黒色微砂を含む肌色弱粉質土
14	7	第1面上	かわらけ	7.2	4.4	2.0	雲母片、白色微砂、黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土
14	8	第1面上	かわらけ	(7.4)	4.6	2.0	黒色微砂、雲母片、白色微砂を含む橙色弱粉質土　煤付着
14	9	第1面上	かわらけ	6.4	4.0	2.1	黒色微砂、雲母片を含む橙色弱粉質土　煤付着
14	10	第1面上	かわらけ	6.25	4.3	2.2	雲母片、白針、黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土
14	11	第1面上	かわらけ	(10.8)	7.8	2.5	雲母片、黒色微砂、白針を含む粗めの淡肌色弱粉質土
14	12	第1面上	かわらけ	10.6	6.2	3.2	混入物をわずかに含む暗橙色粉質精良土
14	13	第1面上	かわらけ	(11.8)	(6.0)	3.5	雲母片、白針、黒色微砂、白色微砂を含む橙色弱粉質土

表4　遺物観察表（4）

挿図番号		出土地	種別	口径	底径	器高	備考
14	14	第1面上	かわらけ	(13.5)	7.0	2.2	雲母片、白色微砂、黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土
14	15	第1面上	かわらけ	(13.7)	(7.8)	3.6	雲母片、白色微砂、黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土
14	16	第1面上	かわらけ	12.9	7.9	3.4	白針、白色微砂、黒色微砂を含む橙色弱粉質土
14	17	第1面上	軒丸瓦				胎土は灰白色軟質瓦質土
14	18	第1面上	平瓦				胎土は灰白色軟質瓦質土
14	19	第1面上	丸瓦				胎土は明灰色瓦質土
14	20	第1面上	丸瓦				胎土は明灰色瓦質土
14	21	第1面上	内耳鍋				胎土は白色微粒～小石、黒色微砂、雲母片を含む暗橙色弱粉質土
14	22	第1面上	片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微石～小石を含む粗い灰色土
14	23	第1面上	片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微石を多めに含む暗青灰色土
14	24	第1面上	常滑甕				胎土は白色微砂～細石を含む黒灰色土
14	25	第1面上	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を含む明茶褐色土
14	26	第1面上	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を含む黒灰色土
14	27	第1面上	常滑甕				胎土は白色微石を多めに含む粗めの暗灰色土
14	28	第1面上	すり常滑	長5.5	幅7.1	厚1.5	胎土は白色微粒～小石を多めに含む粗い暗橙色土
14	29	第1面上	備前甕 or 壺				胎土は白色微粒～微石を含む淡茶色土　器表は淡茶褐色を呈する
14	30	第1面上	瀬戸美濃？皿類	(23.7)			胎土は淡黄～肌色緻密土　内外面ともに金箔
14	31	第1面上	産地不明陶器甕		32.2		胎土は淡肌色弱粉質土　釉はこげ茶～暗紫色を呈する
15	32	第1面上	常滑山茶碗				胎土は白色微粒を多めに含む粗い灰色土
15	33	第1面上	東濃型山茶碗				胎土は明灰色粘質緻密土
15	34	第1面上	東濃型山茶碗				胎土は灰白色弱粘質緻密土
15	35	第1面上	瀬戸輪花型入子				胎土は黄味明灰色弱粘質緻密土
15	36	第1面上	瀬戸灰釉瓶類				胎土は淡黄灰色弱粘質緻密土　釉は濃緑～暗茶色を呈する
15	37	第1面上	瀬戸灰釉折縁深皿				胎土は灰白～灰色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色を呈する
15	38	第1面上	瀬戸灰釉折縁深皿		(13.4)		胎土は黄灰色弱粘質緻密土　釉は淡黄灰色を呈する
15	39	第1面上	瀬戸か美濃錆釉擂鉢				胎土は淡橙色粉質緻密土　釉は紫味暗茶色を呈する
15	40	第1面上	美濃灰釉丸皿		7.4		胎土は黄味灰色弱粘質緻密土　釉は暗灰緑色を呈する
15	41	第1面上	瀬戸美濃志野釉丸皿	(11.3)	(6.3)	2.65	胎土は白色微～小石を含む粗い黄灰色土　釉は乳白色
15	42	第1面上	褐釉甕 or 壺		(17.9)		胎土は白色微粒～小石を含む灰黄～灰色粘質土　釉は暗茶色を呈する
15	43	第1面上	青白磁印花文小皿		1.4		素地は茶色弱粘質緻密土　釉は淡水色を呈する
15	44	第1面上	肥前染付碗	(9.0)			素地は淡灰白色弱粘質緻密土　染付は藍色を呈する
15	45	第1面上	肥前染付碗		(3.8)		素地は白色弱粘質緻密土　染付は藍色を呈する
15	46	第1面上	肥前染付碗		4.7		素地は白色弱粘質緻密土　染付は淡藍色を呈する
15	47	第1面上	鳴滝仕上砥	遺存長4.5	幅3.7	厚0.7	灰黄色細粒凝灰岩製
15	48	第1面上	鳴滝仕上砥	全長7.9	幅3.8	厚1.4	淡黄灰色細粒凝灰岩製
15	49	第1面上	用途不明木製品	径5.6	高2.4		
15	50	第1面上	用途不明木製品	遺存長9.5	幅3.2	厚1.6	
15	51	第1面上	曲物底板	径27.5	厚0.7		
15	52	第1面上	漆塗り箸	全長21.6	径0.75		
15	53	第1面上	銅製鋲	遺存長4.8			
15	54	第1面上	銭				「祥符元寶」
15	55	表採	漆塗りかわらけ	(7.3)	(3.6)	2.4	黒色微砂を含む橙色弱粉質土　内外面ともに黒色漆が塗られる
15	56	表採	円形木製品	全長2.8	遺存厚0.35		
15	57	表採	漆皿	(9.8)	(6.0)	1.2	雲母片、白針、黒色微砂を含む肌色弱粉質土
15	58	表採	片口鉢Ⅰ類		(13.8)		胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い灰色土

図版 1

調査区全景（西から）



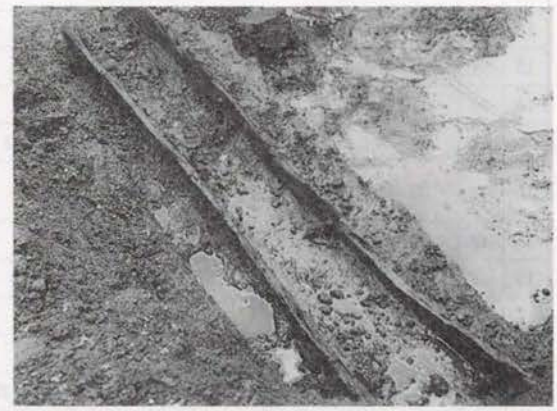
Ⅱ区

Ⅰ区

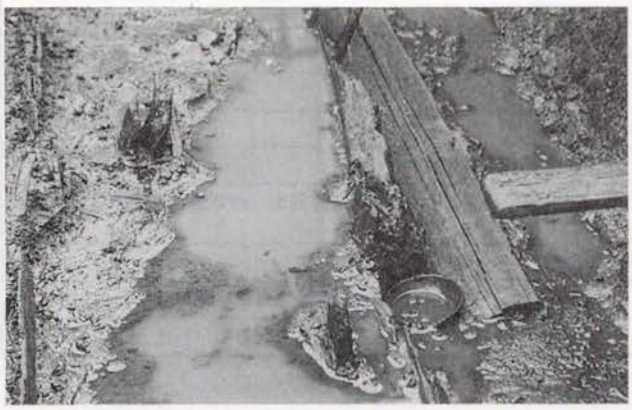
Ⅱ区全景（西から）

Ⅰ区全景（東から）

建物 1（東から）



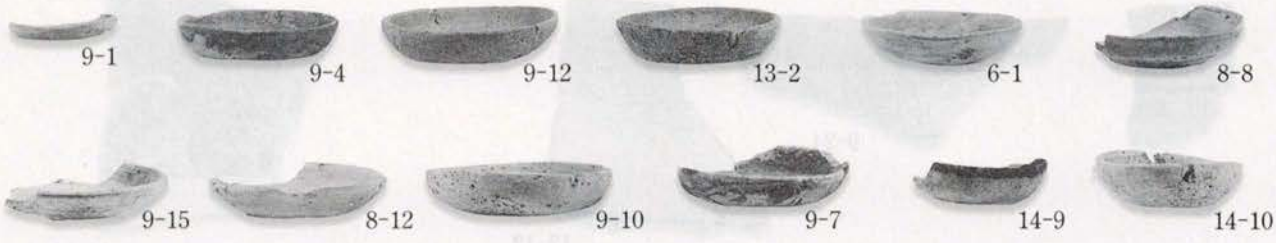
溝 5（南東から）



溝 3とかわらけ（東から）

水滴出土状況

太鼓型樽の木栓出土状況

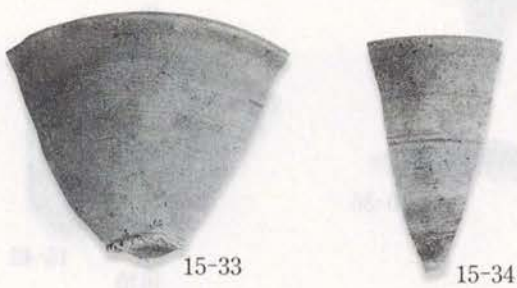

9-1
9-4
9-12
13-2
6-1
8-8
9-15
8-12
9-10
9-7
14-9
14-10

9-11
6-5
14-7
かわらけ

6-8
9-3
9-19
6-11

漆塗りかわらけ
15-55

9-24
火鉢


15-33
15-34

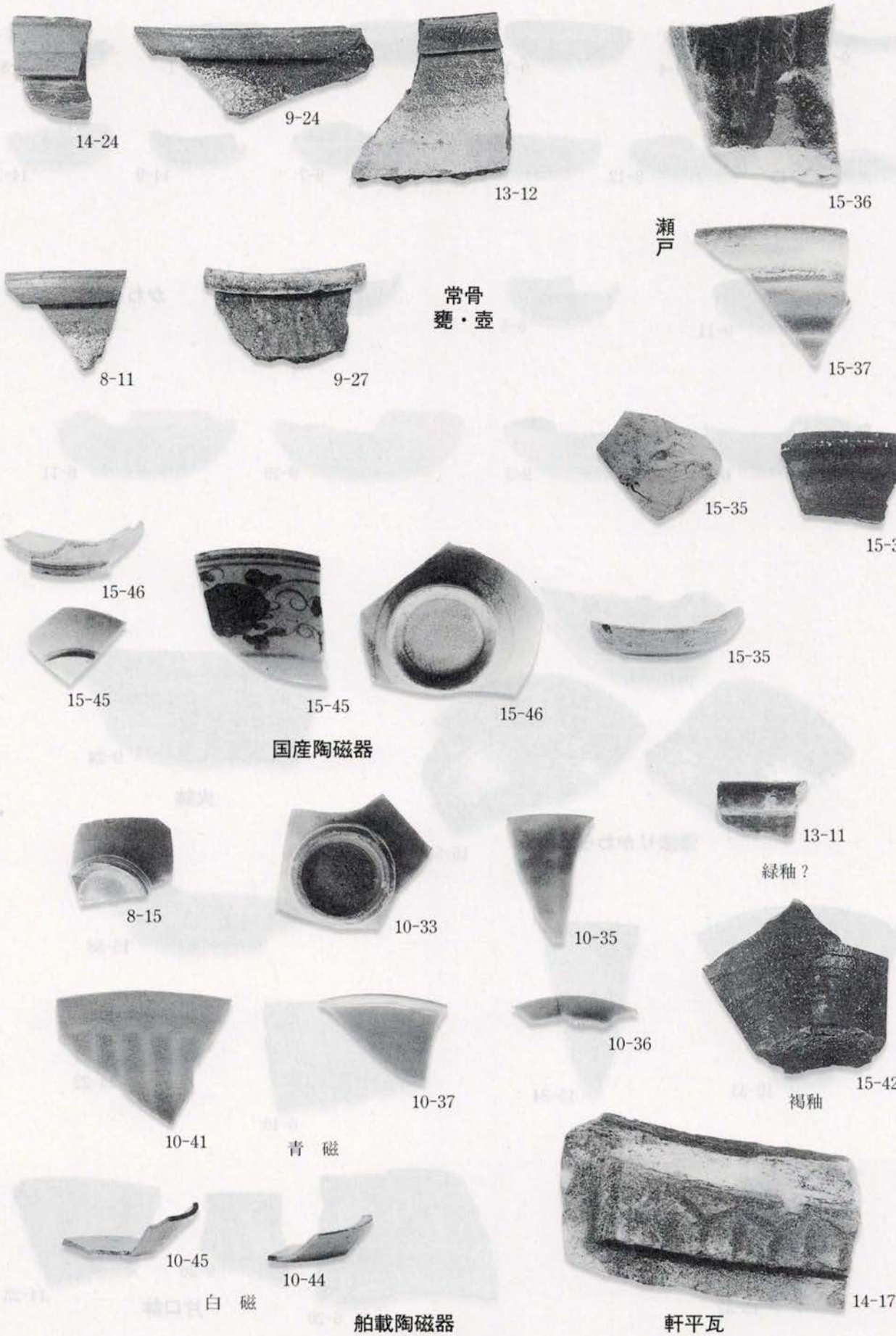
15-58

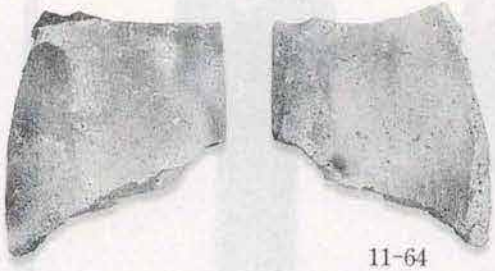
6-19
14-22

山茶碗
15-32

6-20
9-26
片口鉢
14-23

図版 3


14-24
9-24
13-12
15-36
瀬戸
常骨
甕・壺
8-11
9-27
15-37
15-35
15-39
15-46
15-45
15-45
15-46
15-35
国産陶磁器
13-11
緑釉？
8-15
10-33
10-35
10-36
15-42
褐釉
10-41
青　磁
10-37
10-45
10-44
白　磁
舶載陶磁器
14-17
軒平瓦

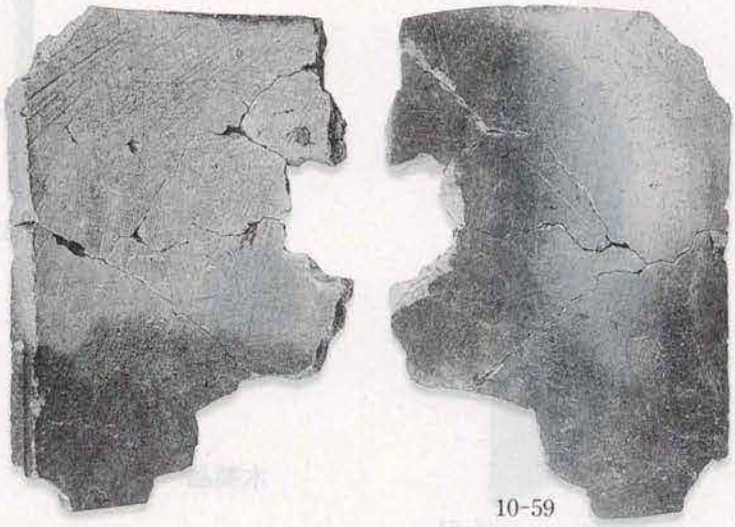


11-64

14-20

14-19

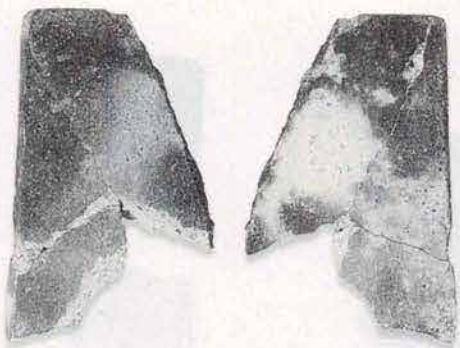
丸瓦



10-59

10-58

14-18



11-62

10-57

11-60

11-61

平瓦

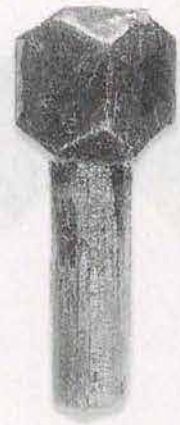
瓦

図版 5

5-1

13-17

漆製品



10-55

15-52

5-2

5-4～9

5-11

15-51

15-49

木製品

15-48

8-6

15-13

10-52

15-47

砥　石

10-50

10-49

15-54

10-51

金属製品

浄妙寺旧境内遺跡　(No.408)

浄明寺三丁目３番２地点

例　言

1. 本書は鎌倉市浄明寺三丁目３番２地点に所在する、個人専用住宅の新築に先だち行われた浄妙寺旧境内遺跡（県遺跡台帳№408）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成15年７月１日から同年８月８日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は、第１章を古田土俊一が、第２章・第３章・第４章を福田 誠が担当し各文末に執筆者名を記した。編集は福田が行った。
4. 使用した写真のうち全景・個別遺構写真は福田・鈴木絵美が、遺物撮影は古田土・鈴木が行った。
5. 発掘調査・整理作業の体制は以下の通りである。

   発掘調査
   主任調査員　福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
   調　査　員　石元道子　神山晶子 鈴木絵美
   調査補助員　古田土俊一　鈴木弘太　長友純子（鶴見大学大学院）　久保田裕美　川村篤史　松澤弘三　野崎美帆
   　　山口正紀（鶴見大学）
   作　業　員　（社）鎌倉市シルバー人材センター
   　　荻野 勲　倉澤六郎　沼上三代治
6. 整理作業
   主任調査員　福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
   調　査　員　石元道子　菊川　泉　古田土俊一　鈴木絵美
7. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　次

本文目次

第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 178
第２章　調査の経過と層序 …… 181
第３章　検出した遺構 …… 183
　第１節　Ⅰ面の遺構 …… 183
　第２節　Ⅱ面の遺構 …… 183
　第３節　Ⅲ面の遺構 …… 184
　第４節　Ⅳ面・Ⅴ面・Ⅵ面の遺構 …… 184
第４章　出土した遺物 …… 189
　第１節　出土した瓦以外の遺物 …… 189
　第２節　出土した瓦 …… 189
第５章　まとめ …… 219

図版目次

図１　調査地点位置図 …… 178
図２　調査地点と周辺遺跡 …… 180
図３　調査区設定図 …… 181
図４　土層断面図 …… 182
図５　Ⅰ面遺構全測図 …… 185
図６　Ⅱ面遺構全測図 …… 186
図７　Ⅲ面遺構全測図 …… 187
図８　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ面遺構全測図 …… 188
図９　瓦以外の遺物１ …… 191
図10　瓦以外の遺物２ …… 192
図11　瓦以外の遺物３ …… 193
図12　鐙瓦（軒丸瓦） …… 194
図13　宇瓦（軒平瓦） …… 195
図14　宇瓦（軒平瓦） …… 196
図15　宇瓦（軒平瓦） …… 197
図16　男瓦（丸瓦）A・C類 …… 198
図17　男瓦（丸瓦）A・C類 …… 199
図18　男瓦（丸瓦）B類 …… 200
図19　男瓦（丸瓦）B類 …… 201
図20　男瓦（丸瓦）D類 …… 202
図21　男瓦（丸瓦）D類 …… 203
図22　女瓦（平瓦）A類 …… 204
図23　女瓦（平瓦）A類 …… 205
図24　女瓦（平瓦）C類 …… 206
図25　女瓦（平瓦）C類 …… 207
図26　女瓦（平瓦）D-１類 …… 208
図27　女瓦（平瓦）D-１類 …… 209
図28　女瓦（平瓦）D-２類 …… 210
図29　女瓦（平瓦）D-２類 …… 211
図30　女瓦（平瓦）E類 …… 212
図31　女瓦（平瓦）E類 …… 213
図32　鬼瓦 …… 214

表１　瓦以外の遺物法量表

表２　出土瓦観察表

図版目次

図版１　１面・２面全景と瓦出土状況 …… 220
図版２　３面全景・西壁土層断面 …… 221
図版３　最終トレンチ …… 222
図版４　石積み部と遺跡近景 …… 223
図版５　瓦以外の遺物 …… 224
図版６　瓦以外の遺物 …… 225
図版７　瓦以外の遺物 …… 226
図版８　鐙瓦（軒丸瓦）巴文 …… 227
図版９　宇瓦（軒平瓦）剣頭文 …… 228
図版10　宇瓦剣頭文・唐草文 …… 229
図版11　宇瓦（軒平瓦）唐草文・
　男瓦（丸瓦）A・C類 …… 230
図版12　男瓦（丸瓦）B・D類 …… 231
図版13　男瓦（丸瓦）D類 …… 232
図版14　女瓦（平瓦）A類 …… 233
図版15　女瓦（平瓦）C類 …… 234
図版16　女瓦（平瓦）D-１類 …… 235
図版17　女瓦（平瓦）D-２類 …… 236
図版18　女瓦（平瓦）E類 …… 237
図版19　鬼瓦 …… 238

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は浄明寺三丁目３番２地点に所在する。現在の浄妙寺境内域の南西に位置し、鎌倉市教育委員会によって「浄妙寺旧境内遺跡（神奈川県遺跡台帳№408）」と名付けられた区画に含まれる。この一帯は滑川の中流域の右岸にあり、北側を胡桃山などの山地、南側を滑川で挟まれた平地で、川沿いをかつての六浦路である県道金沢鎌倉線が併走する。調査地点の周辺には浄妙寺のほか杉本寺、報国寺が現存し、足利尊氏の居跡と伝える足利公方屋敷跡、足利直義創建の大休寺跡、足利高義創建の延福寺跡なども史料上にその名を確認することができる。

遺跡名ともなる浄妙寺は稲荷山浄明寺と号する臨済宗建長寺派、鎌倉五山第五位の寺院である。最盛期の寺史や伽藍規模などは未詳な点が多いが、「稲荷山浄妙禅寺略記」（浄妙寺所蔵）によると、文治4年足利上総介義兼が現寺地に極楽寺を建立し、鶴岡八幡宮の供僧職や造東大寺大勧進職などをつとめた退耕行勇を開山第一世に招いたことに始まる。創建時は密教系寺院であったが、蘭渓道隆の法嗣月峯了然が正嘉元年（1257）に住持以後、禅宗寺院となり寺名も浄名（妙）と改められたという（鎌倉市史社寺編）。

南北朝期から室町期にかけての臨済禅の興隆にともない９か院の塔頭が存在した（新編相模）。延文三年（1358）に京都東福寺や鎌倉浄智寺とともに五山第五位とされ、至徳三年七月十日（1386）最終

図１　調査地点位置図

的にこの位次が決定された（扶桑五山記、円覚寺文書／県史資３上-5011）。しかし室町後期から戦国期に入り保護者足利氏の没落により寺基の荒廃を招く。文明・長享年間（1469～1488）の作とされる『北国紀行』にもその様子が記されている。現在は宝暦六年（1756）に再建された仏殿と総門・宝蔵庫・庫裏のみの伽藍が残される。

杉本寺は行基の開山と伝えられる天台宗寺院で大蔵山観音院と号する。鎌倉期には大倉観音堂・椙本観音堂と呼ばれていたことが知られる（吾妻鏡建暦二年九月十八日条）。文治五年十一月廿三日夜，観音堂から失火した際、別当浄台房が煙火中に入り本尊を救出した（吾妻鏡）。縁起では、この時本尊の十一面観音３体が炎を避けて大杉のもとで輝いていたため現寺号を命名したとする（県史資８下）。

建久二年九月に源頼朝が堂宇の荒廃をあわれみ、修理のため准布200反を喜捨。同三年五月南御堂で修せられた後白河法皇の四十九日の百僧供養に当寺僧１人が招かれ、白布１反、袋米１を賜った（吾妻鏡建久二年九月十八日条）（註１）。同四年九月頼朝は大姫の大病が小康を得たので奉謝のため参詣し、翌年二月にも訪れている（吾妻鏡）。南北朝期の延元二年十二月、北畠顕家が鎌倉を攻めた際、斯波家長は当寺観音堂で自害したといわれる（鎌倉大日記，太平記／古典大系）。なお背後の丘陵には杉本城という中世城郭が存在するが、同月廿五日裏山の杉本城が落城している（鶴岡社務記録）（註２）。その後の寺歴は未詳だが、『鎌倉志』に「中比衰微して、妻帯山伏なりしを、近年の住持僧これを改めて、今は清僧也」とある。また当寺の額が建長寺159世の子純得公筆ということから、一時建長寺僧によって管理されたとの説もある（鎌倉市史社寺編）。

次に近隣の調査事例をいくつか見ていきたい。②地点は後世の著しい撹乱により明確な遺構は確認されていないが、僅少の中世遺構に混じって弥生時代中期後半から後期前半にかけての宮ノ台期や久ヶ原期の土器が出土している（大河内1996）。⑥地点では掘削深度の規制で充分な調査はなされていないが、調査区南側で中世前半期に遡る遺物包含層を検出している（宗臺2002）。⑦地点では13世紀前半～15世紀前半の両側に側溝を伴う道路状遺構が検出されている（田代・原1991）。⑧地点では旧境内東側の塔頭域があった場所と推定され、14世紀～15世紀にかけての掘立柱建物・井戸・土壙・溝などの遺構が確認されている（大三輪・原・福田1985）。⑨地点では13世紀前葉～15世紀前葉にかけての変遷が窺える。多くの遺構、道路、側溝、井戸などが検出している（原1994）。⑩地点では「六浦路」の側溝と思われる溝や武家屋敷に関連すると考えられる遺構・遺物を検出している（大三輪1986）。⑰地点では中世の大型の掘立柱建物や薬研掘溝、井戸、道路などが検出されている（馬渕2002）。21地点では13世紀後半～14世紀前半の変遷が窺える。南北方向の溝や建物の一部、遺物溜りや粘土を採掘したと思われる土壙などが検出している（原2005）。22地点では13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物・塀・溝などの遺構が確認された（宗臺・松山1999）。

（註１）この「吾妻鏡」建久二年九月十八日条には「是れ大蔵は行事（基カ）草創の伽藍なり」とあり、鎌倉初期には行基開創の伝承が成立していたことが窺われる（角川日本地名大辞典）。

（註２）「鶴岡社務記録」延元二年十二月廿五日条に「杉本城落了」、また「常楽記」同年十二月廿二（廿五か）日条に「斯波家長奥州已下、於杉下城数輩被打」と見える（大日本史料６-４）。

① 浄明寺三丁目３番２『本調査地点』
② 浄明寺三丁目６番３外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12-２』「浄明寺三丁目６番３外地点」1994
③ 浄明寺字宅間562番33『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』「浄明寺字宅間562番33地点」1992
④ 浄明寺三丁目16番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18-２』「浄明寺三丁目16番１地点」2002
⑤ 浄明寺一丁目699番外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11-２』「浄明寺一丁目699番外地点」1995
⑥ 浄明寺字向小路78番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983
⑦ 浄明寺字向小路90番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』「浄妙寺旧境内」1991
⑧ 浄明寺字稲荷小路129番２『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書１』「浄妙寺旧境内遺跡」1985
⑨ 浄明寺三丁目143番２『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10-１』「浄明寺三丁目143番２地点」1994
⑩ 浄明寺字稲荷小路129番２『神奈川県埋蔵文化財調査報告28』1986
⑪ 浄明寺字琢馬533番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983
⑫ 報国寺境内『報国寺境内やぐら発掘調査報告書』1988
⑬ 浄明寺520番『宅間ヶ谷やぐら群』「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」1991
⑭ 二階堂字杉本903番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983
⑮ 杉本寺境内『中世石窟遺構の調査Ⅲ』「杉本寺やぐら群」「平成９年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」1999
⑯ 杉本寺周辺『杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書』1998
⑰ 二階堂字杉本912番１『杉本寺周辺遺跡』「二階堂字杉本912番１ほか発掘調査報告」2002
⑱ 二階堂・浄明寺地区内『中世石窟遺構の調査』「杉本寺周辺遺跡内やぐら」「平成６年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」1996
⑲ 二階堂字荏柄880・874番『向荏柄遺跡発掘調査報告書』「二階堂字荏柄880・874番」1985
⑳ 二階堂851番『杉本城内やぐら』「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」1991
㉑ 浄明寺三丁目126番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報21-２』「浄明寺三丁目126番地点」2005
㉒ 浄明寺三丁目115番２『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15』「浄明寺三丁目115番2地点」1999
㉓ 浄明寺二丁目474番12 2007年度報告予定
㉔ 浄明寺二丁目474番11外 2007年度報告予定
㉕～㉗ 本報告

図２　調査地点と周辺遺跡

第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成15年７月１日から表土掘削を開始し同年８月８日まで行われた。調査面積約45㎡。グリッドは、住宅の建築範囲にほぼ平行して基準の南北軸を設けた。遺跡の位置は北緯35°19′08″、東経139°34′17″である。鎌倉市４級基準点（第Ⅸ座標系）のJ070（X=-75,523.157　Y=-23,782.404）とJ071（X=-75,516.939　Y=-23,816.454）を用いた。グリットの基準としたのは、南原点（X=-75、533.898 Y=-23、814.307）と北原点（X=-75、533.126 Y=-23、812.387）を結んだ軸線で、真北から10°6′20″東に振れる。調査中に使用したレベルは、浄明寺二丁目1先に設置されている鎌倉市一級水準点BM35（海抜12.7773m）を移動して設置した南原点（15.375m）と北原点（15.418m）を使用した。

調査区は、まず、現地表（海抜15.35m）から約30㎝表土を人力で掘削した。地表面はほぼ平坦で、したがって検出した第Ⅰ面もほぼ平坦な面（海抜15.10m）となった。

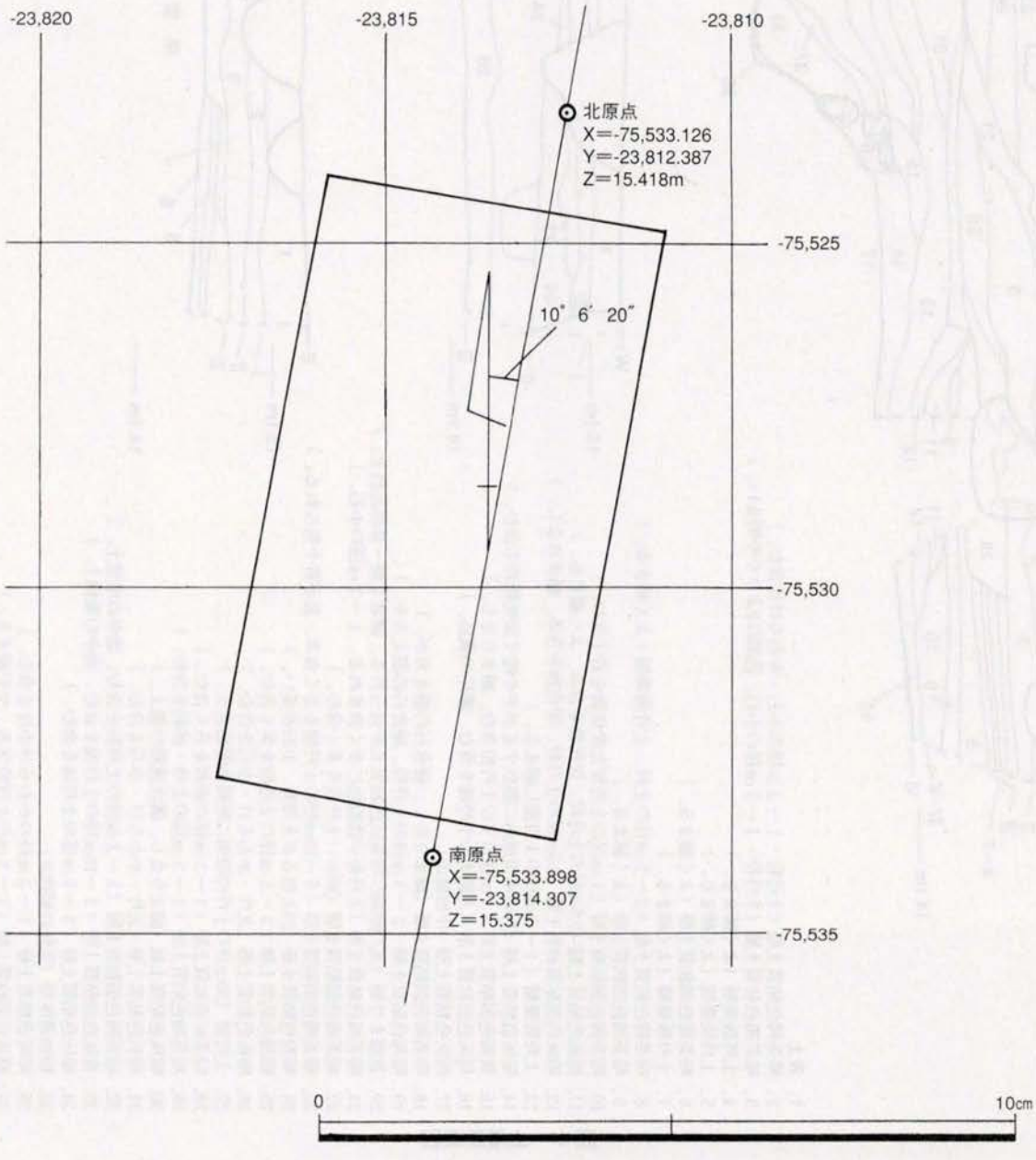
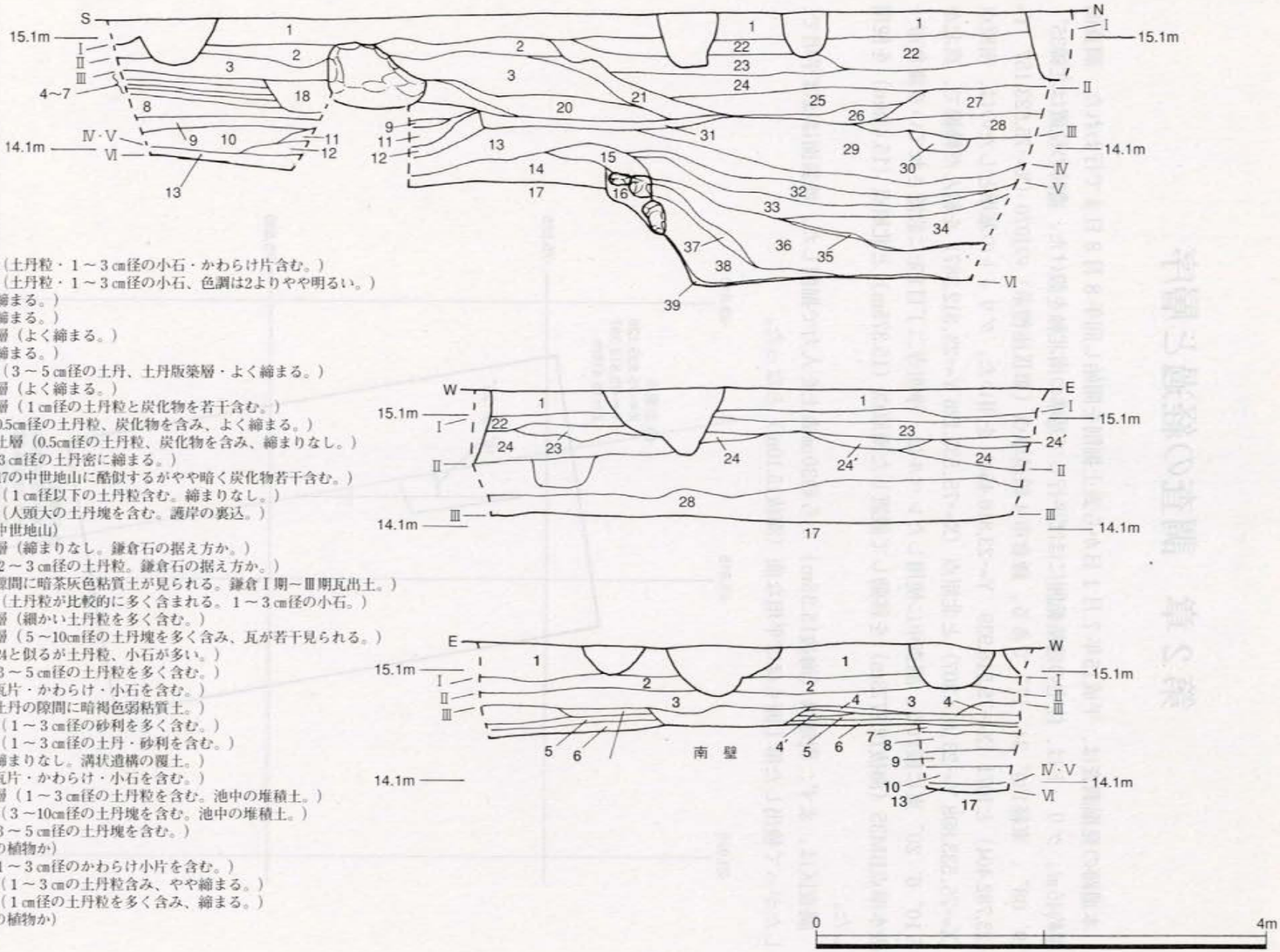


図３　調査区設定図



1．表土
2．暗茶褐色粘質土層（土丹粒・1～3㎝径の小石・かわらけ片含む。）
3．暗茶褐色粘質土層（土丹粒・1～3㎝径の小石、色調は2よりやや明るい。）
4．土丹版築層（よく締まる。）
5．土丹版築層（よく締まる。）
6．暗茶褐色弱粘質土層（よく締まる。）
7．土丹版築層（よく締まる。）
8．暗茶褐色粘質土層（3～5㎝径の土丹、土丹版築層・よく締まる。）
9．暗茶褐色弱粘質土層（よく締まる。）
10．暗茶褐色弱粘質土層（1㎝径の土丹粒と炭化物を若干含む。）
11．暗灰色粘質土層（0.5㎝径の土丹粒、炭化物を含み、よく締まる。）
12．暗灰色弱粘質砂質土層（0.5㎝径の土丹粒、炭化物を含み、締まりなし。）
13．土丹版築層（1～3㎝径の土丹密に締まる。）
14．暗灰色粘質土層（17の中世地山に酷似するがやや暗く炭化物若干含む。）
15．黄褐色弱粘質土層（1㎝径以下の土丹粒含む。締まりなし。）
16．暗灰色弱粘質土層（人頭大の土丹塊を含む。護岸の裏込。）
17．暗灰色粘質土層（中世地山）
18．暗茶褐色弱粘質土層（締まりなし。鎌倉石の据え方か。）
19．暗褐色粘質土層（2～3㎝径の土丹粒。鎌倉石の据え方か。）
20．瓦溜まり層（瓦の隙間に暗茶灰色粘質土が見られる。鎌倉Ⅰ期～Ⅲ期瓦出土。）
21．暗茶褐色粘質土層（土丹粒が比較的に多く含まれる。1～3㎝径の小石。）
22．暗茶褐色弱粘質土層（細かい土丹粒を多く含む。）
23．暗茶褐色弱粘質土層（5～10㎝径の土丹塊を多く含み、瓦が若干見られる。）
24．暗褐色粘質土層（24と似るが土丹粒、小石が多い。）
25．暗褐色粘質土層（3～5㎝径の土丹粒を多く含む。）
26．暗灰色粘質土層（瓦片・かわらけ・小石を含む。）
27．土丹層（30㎝径の土丹の隙間に暗褐色弱粘質土。）
28．暗茶灰色粘質土層（1～3㎝径の砂利を多く含む。）
29．暗茶褐色粘質土層（1～3㎝径の土丹・砂利を含む。）
30．暗灰色粘質土層（締まりなし。溝状遺構の覆土。）
31．暗灰色粘質土層（瓦片・かわらけ・小石を含む。）
32．暗灰褐色弱粘質土層（1～3㎝径の土丹粒を含む。池中の堆積土。）
33．青灰色弱粘質土層（3～10㎝径の土丹塊を含む。池中の堆積土。）
34．暗灰色粘質土層（3～5㎝径の土丹塊を含む。）
35．植物遺体層（草様の植物か）
36．暗灰色粘質土層（1～3㎝径のかわらけ小片を含む。）
37．暗灰色弱砂質土層（1～3㎝の土丹粒含み、やや締まる。）
38．暗灰色弱砂質土層（1㎝径の土丹粒を多く含み、締まる。）
39．植物遺体層（草様の植物か）

図4　土層断面図

調査区の北端では、表土から地山面まで約240㎝の深さになることを確認した。その後、壁面を利用して土層の堆積状況を観察した。結果、中世地山とおぼしき暗灰色粘質土層までの間に、この遺構面も含めて６期にわたるの地業面を確認した。この結果を踏まえて、Ⅰ面～Ⅵ面（中世地山面）までの調査を行う方針を定めた。

Ⅰ面は地業が弱く遺構の密度が比較的低い。鎌倉石は頭頂部が僅かに顔を覗かせているだけである。

Ⅱ面は南北約8.6mの調査区の南から約４m地点から北に向かい全体が落ち込む。北端では地表から65㎝（海抜14.70m）となりⅠ面と比較して湧水が多い。この落ち込みはⅠ面構築時に埋められたものと考えられる。出土した遺物から、この地業面の年代は概ね15世紀の中葉と考えられる。

Ⅲ面はⅡ面の下約20㎝で検出した。Ⅲ面構成土は比較的薄いが土丹地業層で覆われていた。南北約8.6mの調査区の南端から北に約3m地点から北に向かい全体が落ち込む。落ち際に庭石とみられる径１m程の鎌倉石が２個据えられていた。落ち込む斜面上には30㎝の厚みで瓦が敷き詰められていた。

Ⅳ面・Ⅴ面はⅢ面の下およそ70㎝で検出している。南北約8.6mの調査区の南端から北に約５m地点で土丹を用いた護岸を境に北に向かい掘り込まれている。

Ⅵ面はⅣ面・Ⅴ面の約10㎝下で検出されている。暗灰色粘質土層の中世地山を削りだしている。

８月８日に器材等の搬出も含め、全ての調査を無事に終了した。検出した遺構の詳細は次章に譲る。

第３章　検出した遺構

第１節　Ⅰ面の遺構

Ⅰ面は、現地表から調査区の南端で30㎝程度の深度で検出した。北端でも地業面は、地表から30㎝程の深度で検出した。この面は、暗茶褐色粘質土層、１～３㎝径の土丹粒や小石を含む土層で構成されるが、締まりが比較的悪く、ところどころ後世の攪乱を受けているのが目立った。生活面であると明確に断言できるものではなく、むしろ包含層の一部ととらえるべきものであろう。

遺構もはっきりとしたものは認められなかった。わずかに、数ヶ所の柱穴があるのみである。

第２節　Ⅱ面の遺構

遺構の密度は低いが、北側が落ち込み庭石風の鎌倉石と不揃いながら東西方向に４穴並ぶ柱穴列・土壙２穴を検出した。

落ち込み（池）

Ⅰ面の約20㎝下でⅡ面を検出した。この面を構成しているのは、しまりのやや悪い暗茶褐色粘質土層の地業面である。Ⅰ面と異なり東に向かって緩く傾斜している。調査区の南端で海抜14.65m、北端では海抜14.20mで高低差は約45㎝である。

鎌倉石

庭石として置かれていたものか。Ⅰ面では頭頂部しか確認できなかったが、Ⅱ面では２つ置かれていることが明らかになった。形は不定形であり、表面の風化が著しいが石本体は深く据えられているようである。石の周囲はⅡ面構成土（第３層）で覆われていることから据え方は確認されていない。

柱穴

鎌倉石の脇から東に向かい4穴（P1～P4）検出したものである。深さは20～30㎝。間隔はP1-120㎝-P2、P2-110㎝-P3、P3-90㎝-P4と不揃いである。簡単な柵列の様なものか。

土壙１

直径154㎝、深さ2.4mの素堀の井戸状の土壙である。検出当初は鎌倉石の抜き痕と考えられていたも

のである。意図的に埋め込まれたような締まった粘土層を掘り下げると、下層のⅢ・Ⅳ・Ⅴ面を貫き、地山のⅥ面も掘り込んでいた。最下層から瓦片、かわらけ片が出土した。

土壙２

調査地のほぼ中程で検出した遺構である。直径70㎝、深さ20㎝程の土壙である。締まりのない灰色粘質土が覆土である。庭石の抜き痕の可能性がある。

第３節　Ⅲ面の遺構

Ⅱ面を構成している砂質土を20㎝ほど掘り下げると、土丹粒や炭化物粒を多く含むやや粘性のある茶褐色土の面となる。Ⅰ面及びⅡ面と比較して明瞭な構築面であり、整然とした遺構も検出された。以下にその個々を述べる。

上層池状遺構１

南端の標高は14.7m、庭石の鎌倉石を境に徐々に落ち込み、北端では14.2m程になる。状況から考えて、鎌倉石より北側の落ち込みは池になるものと考えられる。堆積している土丹粒、小砂利混じりの暗茶褐色粘質土層は池中の堆積土と思われる。さらに暗茶褐色粘質土層の下に厚さにして約20㎝の瓦溜まりが見られる。鎌倉石の脇から落ち込みに沿って約2.3mの幅で堆積している。これは、瓦の破片を用いた池底の補修だと考えられる。

鎌倉石

Ⅰ面で頭を覗かせ、Ⅱ面で姿を現した鎌倉石は、Ⅲ面では高さ35㎝まで露出した。周囲では石を据えるための掘方が確認されたことから、この面で鎌倉石は据えられたと考えられる。掘方を掘り下げた結果、鎌倉石の厚みは約60㎝程あることが確認された。

鎌倉石の表面は浸食が著しく、詳細に観察すると１～５㎜大の小石粒が集まり凝固したものであることが分かる。これは、いわゆる鎌倉石と呼ばれる岩石の中でも、上総層群浦郷層に属する未固結凝灰質砂岩であり、表面に貝の開けたホールが観察されることから海辺（葉山一色海岸か）から運ばれたと考えられる。用途はおそらく池の水際に並べられた庭石と思われる。

溝状遺構

落ち込み（池）内北角で長さ4.5m、幅約60㎝、深さ約10～20㎝の溝状遺構を検出した。

土壙３

溝状遺構を切る形の土壙３を検出した。規模は直径約85㎝、深さ約45㎝である。

第４節　Ⅳ面・Ⅴ面・Ⅵ面の遺構

Ⅲ面構成土～Ⅴ面直上までの土層（第４層～第12層）、Ⅳ面では遺構は確認されず、よく締まった粘質土層で構成されている。短期間に人為的に盛られたⅤ面・Ⅵ面を埋め込んだ土層であると考える。Ⅴ面ではⅥ面を埋め込んだ際の浅い落ち込みが確認されている。下層池状遺構２の柔らかい土層のために沈み込んだものと思われる。

下層池状遺構２

Ⅵ面では地山を掘り込み、土丹を積み上げた池状遺構が確認された。調査区の南端（海抜14.1m）から北に約４m地点（海抜13.9m）で大きく地山を掘り込んでいた。底面までの高低差は約100cm（海抜12.9m）である。掘り込みは東西方向に直線的に延びるものと思われ、掘り込んだ地山の斜面に人頭大の土丹塊を乱石積みにしているもので池の護岸と考えられるものである。遺構内の堆積土は葦様の植物遺体を含む土層（35層・39層）が観察されることから、自然堆積で徐々に埋没していったと推察される。

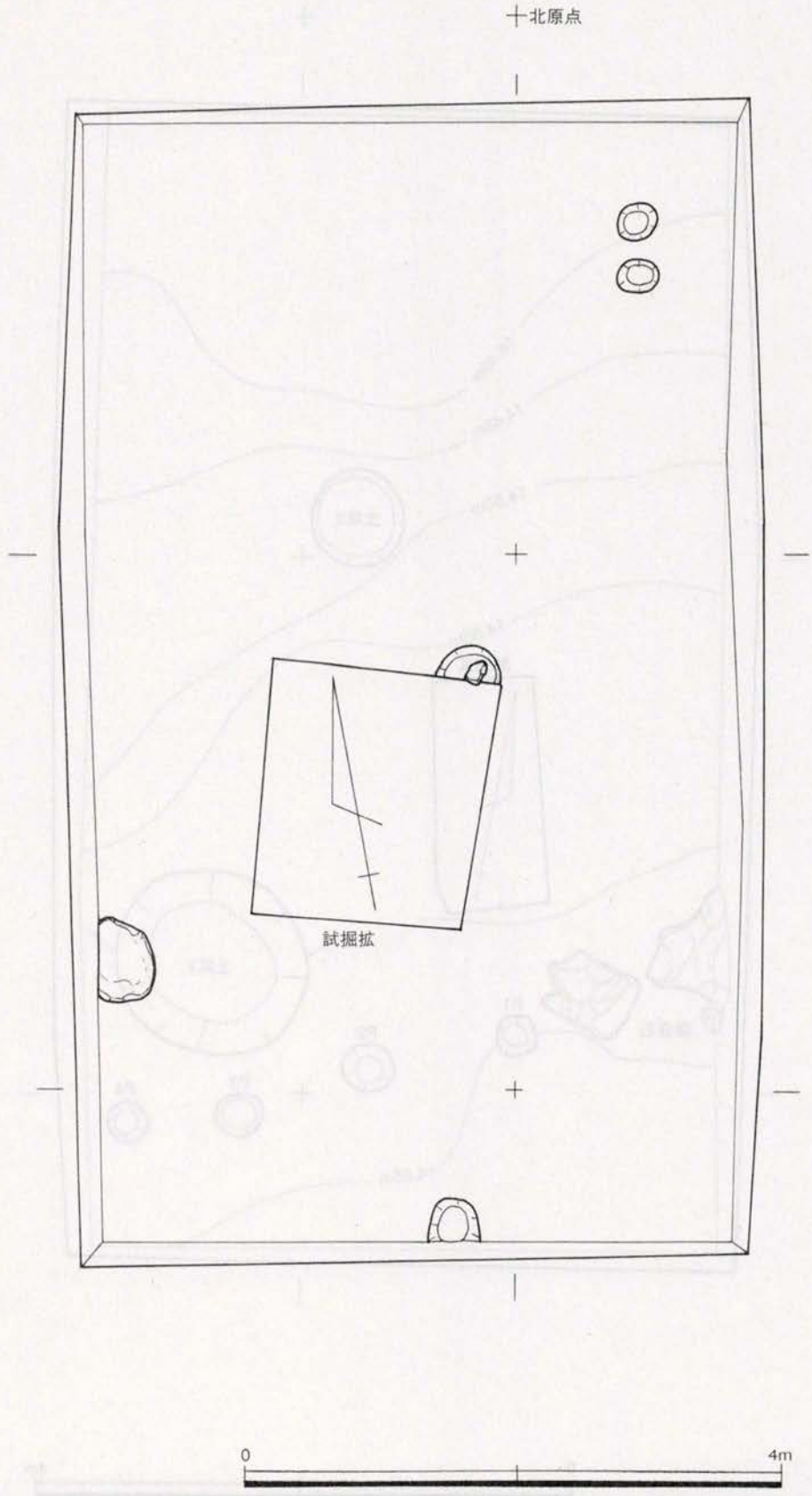


図５　Ⅰ面遺構全測図

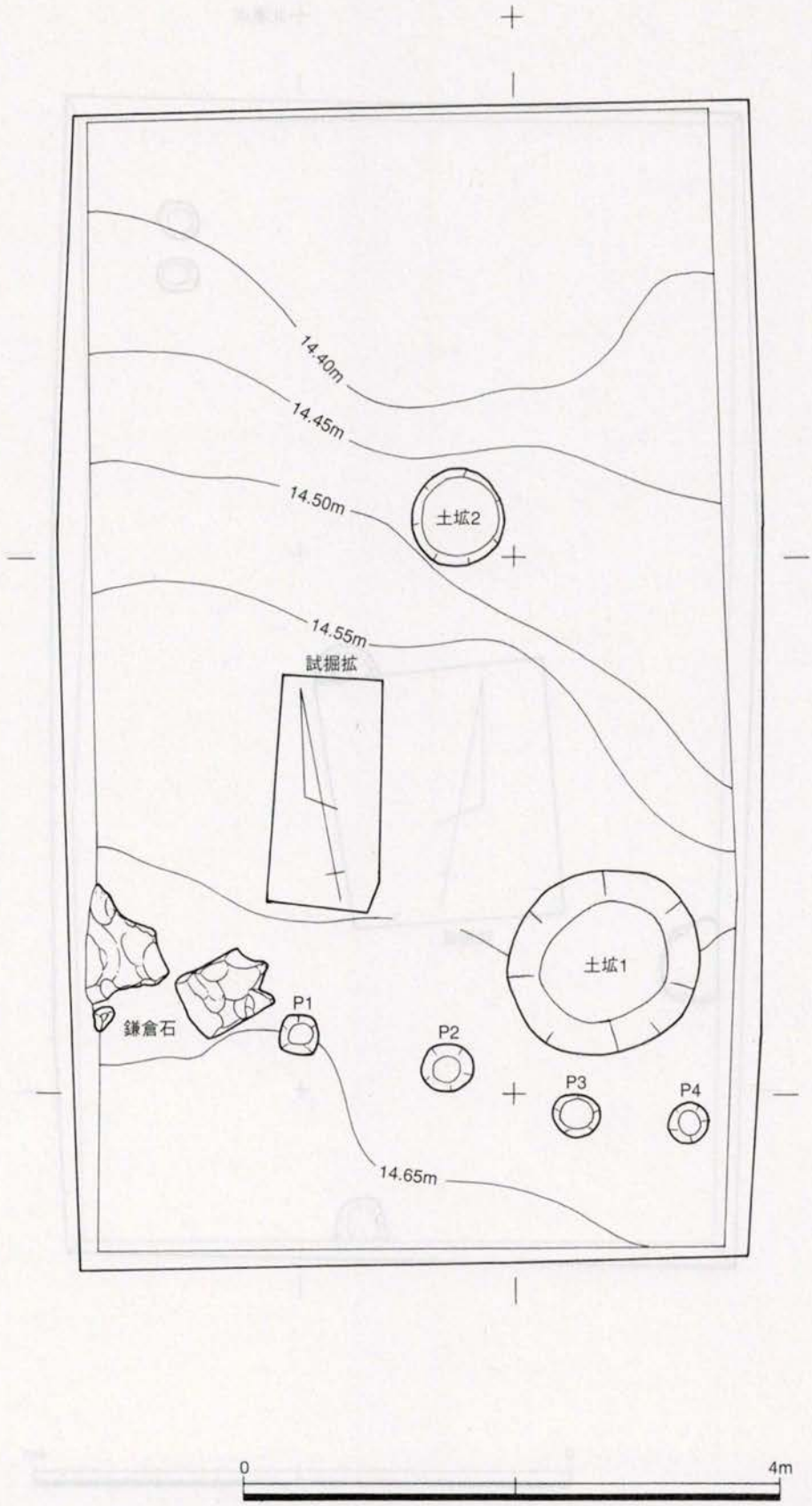


図6　Ⅱ面遺構全測図

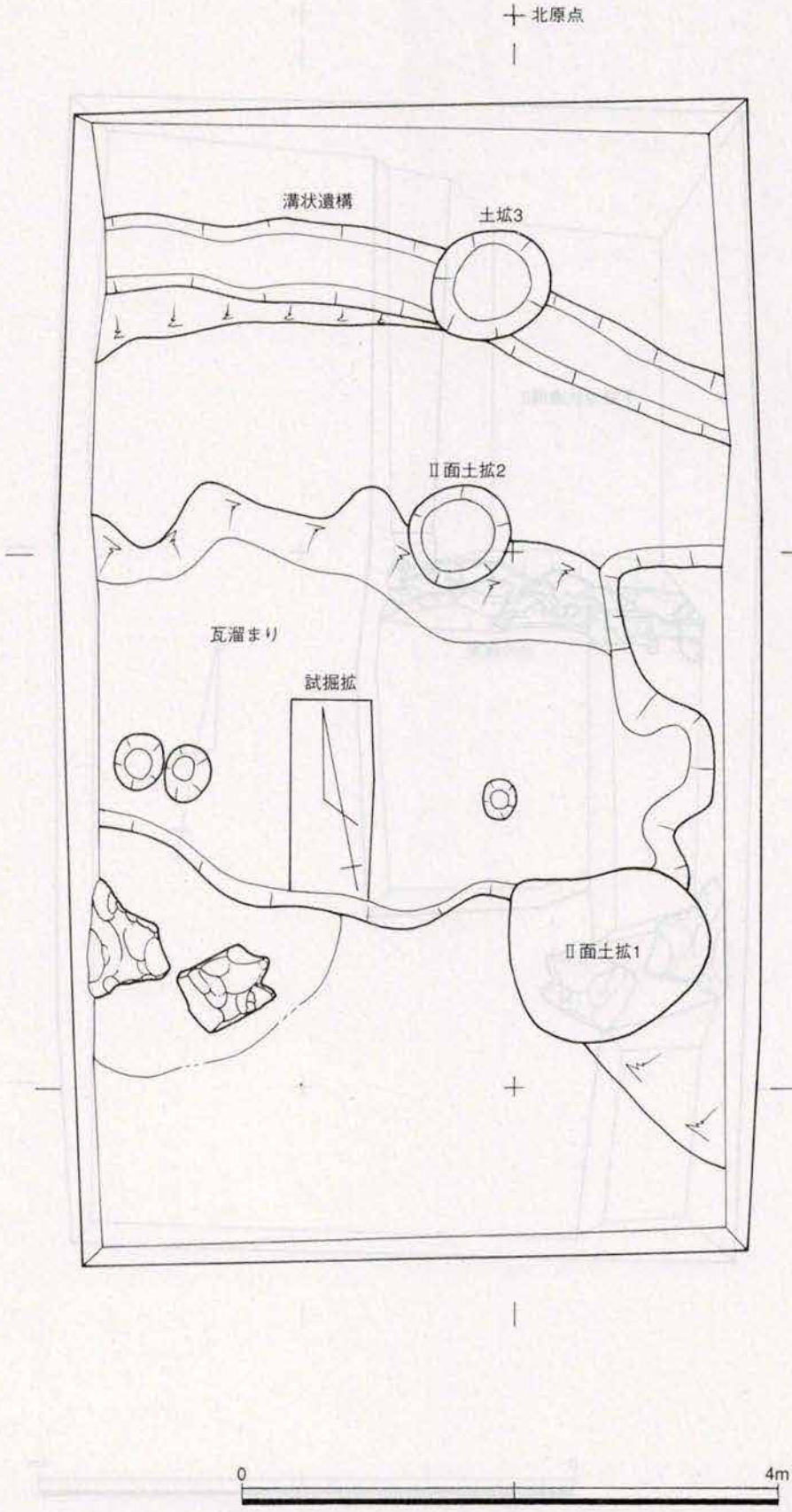


図7　Ⅲ面遺構全測図

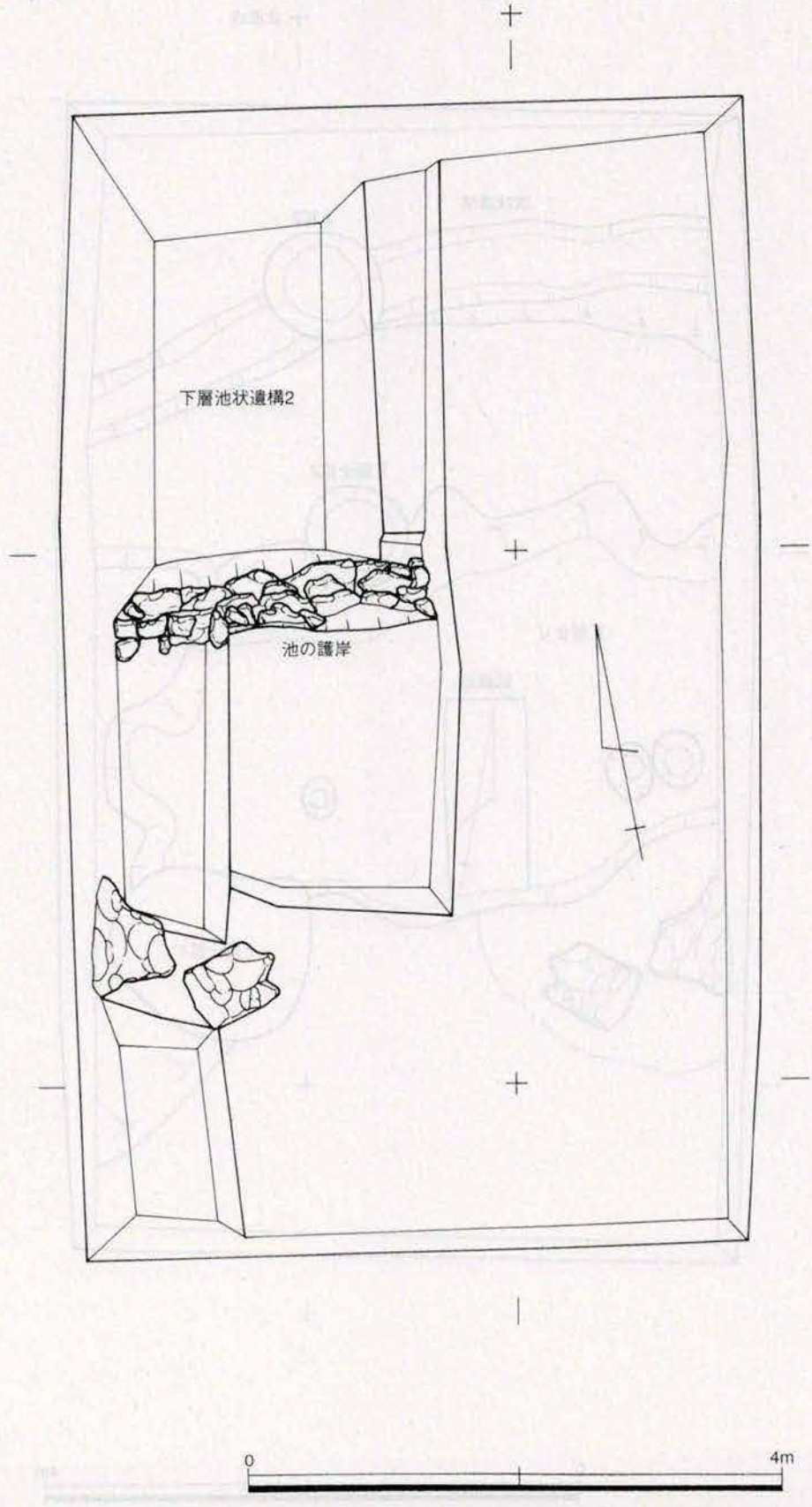


図8　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ面遺構全測図

第４章　出土した遺物

第１節　瓦以外の遺物　（図９～図11）

・試掘、Ⅰ面まで、Ⅰ面柱穴、Ⅱ面まで、Ⅱ面土壙１出土の遺物（図９）

Ⅱ面まででで出土している青白磁水注・劃花文白磁皿・青磁劃花文碗は13世紀前半代、瀬戸折縁皿は14世紀代だが、かわらけを概観するならば、おおむね15世紀代の範疇に収まるものと考えられる。Ⅱ面土壙１出土のかわらけは15世紀中を中心とし、Ⅰ面及びⅡ面のかわらけは15世紀後半（Ⅲ面よりやや新しいか）を中心とした時期のものと推察される。

・Ⅱ面土壙１、Ⅲ面まで、Ⅲ面遺構、Ⅳ面出土の遺物（図10）

Ⅱ面土壙１出土の漆器皿は内外全面ともに黒漆塗りである。輪高台の断面は三角形を呈する。

Ⅲ面遺構、Ⅲ面まででで出土している遺物を概観すると、薄手だが器高の低い轆轤成形の一群や手捏ね成形だが丸底や指頭痕が不明瞭な製品が見られ、瀬戸平碗が出土していることからも13世紀後半の範疇に収まると考えられる。23のみ15世紀代まで下ってしまうが、Ⅲ面まで出土ということでおそらく紛れ込んだものと考えたい。一点だけ弥生後期の二重口縁の壺が出土している。

Ⅳ面出土のかわらけはすべてが手捏ね成形の製品で、13世紀中頃と考えたいところである。

Ⅳ面、池中出土の遺物（図11）

池中からは木製品の箆・草履芯・箸、漆器皿が出土している。漆器皿は内外全面ともに黒漆塗りで、内面には赤漆で松食い鶴が手描きで描かれている。高台は平高台で底面には漆が塗られていない。13世紀中頃のものと推察される。

第２節　出土した瓦（図12～32、出土瓦観察表）

ほとんどがⅢ面まで（池中）で出土したものである。Ⅲ面の時期に池底を瓦で張り増し補修した時のものである。すべて破片で完形品や長さ、幅などの法量全体が分かるものはほとんどない。試掘で出土した瓦片はⅢ面まで（池中）と同じ地点・層位である。

瓦の大きさを分けると大型と小型の２種が有り、概ね大型は永福寺Ⅱ期の13世紀中頃、小型は永福寺Ⅲ期の13世紀後半～14世紀と考えられる。数点、永福寺Ⅰ期の製品が見受けられる。

鐙（軒丸）瓦（図12）

ほとんどが破片で、図版に載せた12点の内、瓦当径の分かるものは2点（図12-１・２）である。いずれも右回りの三巴文中央に△スタンプを押印されている一群（図12-１～６）で、鎌倉系の胎土を有しⅢ期に属するもの。硬質の砂粒の少ない胎土を有する一群（図12-７～12）の内、2点（図12-７・８）は破片ではあるが他の鐙瓦より大きな製品である。新しくともⅡ期ないしはⅠ期である。残りの4点（図12-９～12）は、小型の製品と思われるが胎土は精良で硬質でありⅡ期のものと思われる。63点出土。

宇（軒）瓦（図13～15）

剣頭文宇（軒）瓦

16点出土した剣頭文宇瓦の文様はすべて陽刻で、この内７種が下向き（図13-１～８、図14-１～４・6）、残りの２種（図14-５・７・８）が上向き剣頭文で９種類の笵が確認されている。中心に寺銘と三巴文が入る（図13-１～３）製品の瓦当はいずれも顎貼付けである。瓦当貼付けの技法は６点（図14-２～７）確認されている。これ以外の剣頭文宇（軒）瓦は小片のため詳細は不明である。29点出土。

唐草文宇（軒）瓦

唐草文は８点が均正唐草文、残りの１点が偏向唐草文である。図14-９は瓦当面が唯一残り、上下顎幅が分かる試料である。胎土は鎌倉系といわれる女瓦Eと同じ胎土である。同文の図15-１～６も同じ胎土である。文様は界線で囲まれ、中心の花弁から左右均等に退化した唐草が広がる。いずれの宇瓦も左端に同じ笵傷を持つ同笵瓦である。鎌倉Ⅲ期。図15-１は瓦当面に丸形の竹管文が捺されている。図15-７はきめ細かな良質な胎土で焼き締まっている。瓦当面には界線と珠文が巡る。内側に細い線だがはっきりとした唐草が凸線で表されている。鎌倉Ⅱ期。図15-８は永福寺Ⅰ期（YN01）と同笵の宇瓦である。鎌倉Ⅰ期図15-９は偏向唐草文である。瓦当面には界線と珠文が巡る。内側に細かく図案化された唐草が配されている。鎌倉Ⅱ期。破片数40点。

男瓦（図16～21）

男瓦A. 色は灰白色～淡灰色。胎土はきめ細かく砂っぽい。マーブル状に縞が入るものもある。永福寺Ⅰ期と同等。破片数809点。

男瓦B. 色は灰色～暗灰色。胎土は白色粒が多く、砂が少ないものと砂が多く粗いものがある。永福寺Ⅱ期相当か。破片数1159点。

男瓦C. 色は茶灰色～灰色。砂粒が多く粗くガサついている。韮山願成就院・鶴岡八幡宮の胎土に似る。永福寺Ⅱ期。破片数１点。

男瓦D. 表面の色は燻べ焼き風で黒色。断面は淡灰色～灰色。粗い素地に白色物が帯状に入る。砂の多いものと少ないものがある。永福寺Ⅲ期相当か。破片数621点。

女瓦（図22～31）

女瓦A. 色は灰色。胎土は砂粒が少なくきめ細かい。軟質と硬質がある。凸面縄目叩き、離れ砂あり。凹面狭端部ケズリ。永福寺Ⅰ期。破片数1493点。

女瓦C. 胎土は淡灰色～灰色。斜格子叩き中に上・キなどの記号あり。水殿瓦窯産系。永福寺Ⅱ期。破片数365点。

女瓦D1. 胎土は灰色～淡灰色。精良で砂粒が少ない。断面にマーブル状に縞が入るものあり。花菱の叩き目。永福寺Ⅱ期か。

女瓦D2. 胎土は灰色。白色粒、砂が多い。凸面離れ砂、斜格子。焼き締まっている。永福寺Ⅱ期か。

女瓦D3. 凹凸両面に布目痕。凸面に網目、凹面に木口状工具痕、胎土は灰色で砂が多く荒い。D1～D3破片数3208点。

女瓦E. 胎土は表面燻べ焼き風で黒色。断面淡灰色～灰色～暗灰色。凹凸面に細かな黒色粒の離れ砂が付く。素地に白色物が帯状に入る。砂の多い少ないがある。鎌倉系。永福寺Ⅲ期。破片数1552点。

鬼瓦（図32）

全体の形が分かるものはない。いずれも破片で焼けているものもある。永福寺Ⅰ期で使われたきめ細かな良質な胎土のもの（図32-１・２）、ねっとりした胎土に細かな白色粒が入るもの（図32-３・４）、同じく白色粒が入るが、砂が多くザックリとした胎土のもの（図32-５～８）が出土している。永福寺Ⅰ期の鬼瓦は厚みもあり水殿瓦窯周辺で生産されたものと見られる。その他の鬼瓦は規格は大きく変わらないことから鎌倉中期に相当するものと考えられる。８点出土。

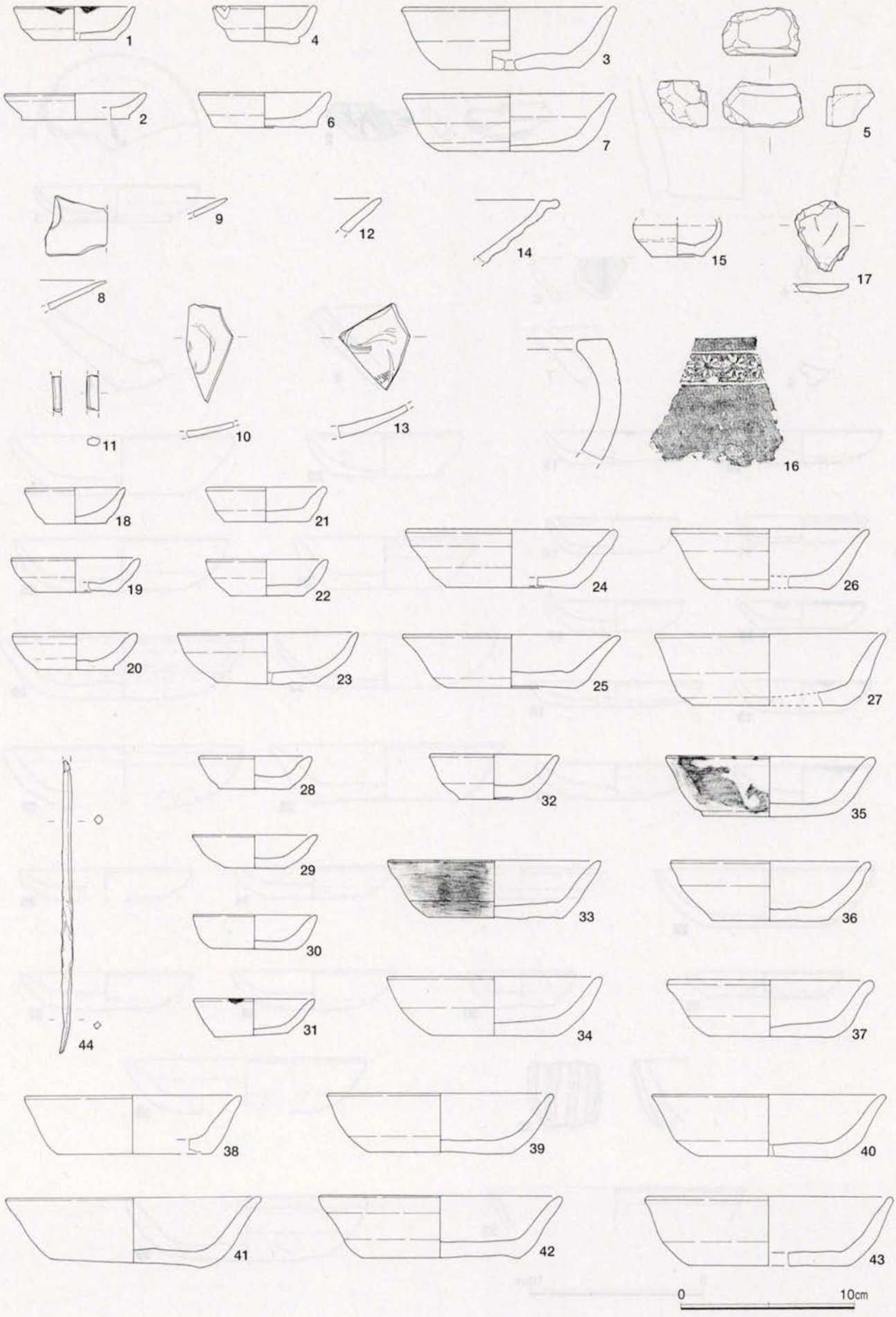

1
4
3
2
6
7
5
9
12
14
15
17
8
11
10
13
16
18
21
19
22
24
26
20
23
25
27
28
32
35
29
33
36
30
34
37
44
31
38
39
40
41
42
43
0
10cm

図９　瓦以外の遺物１

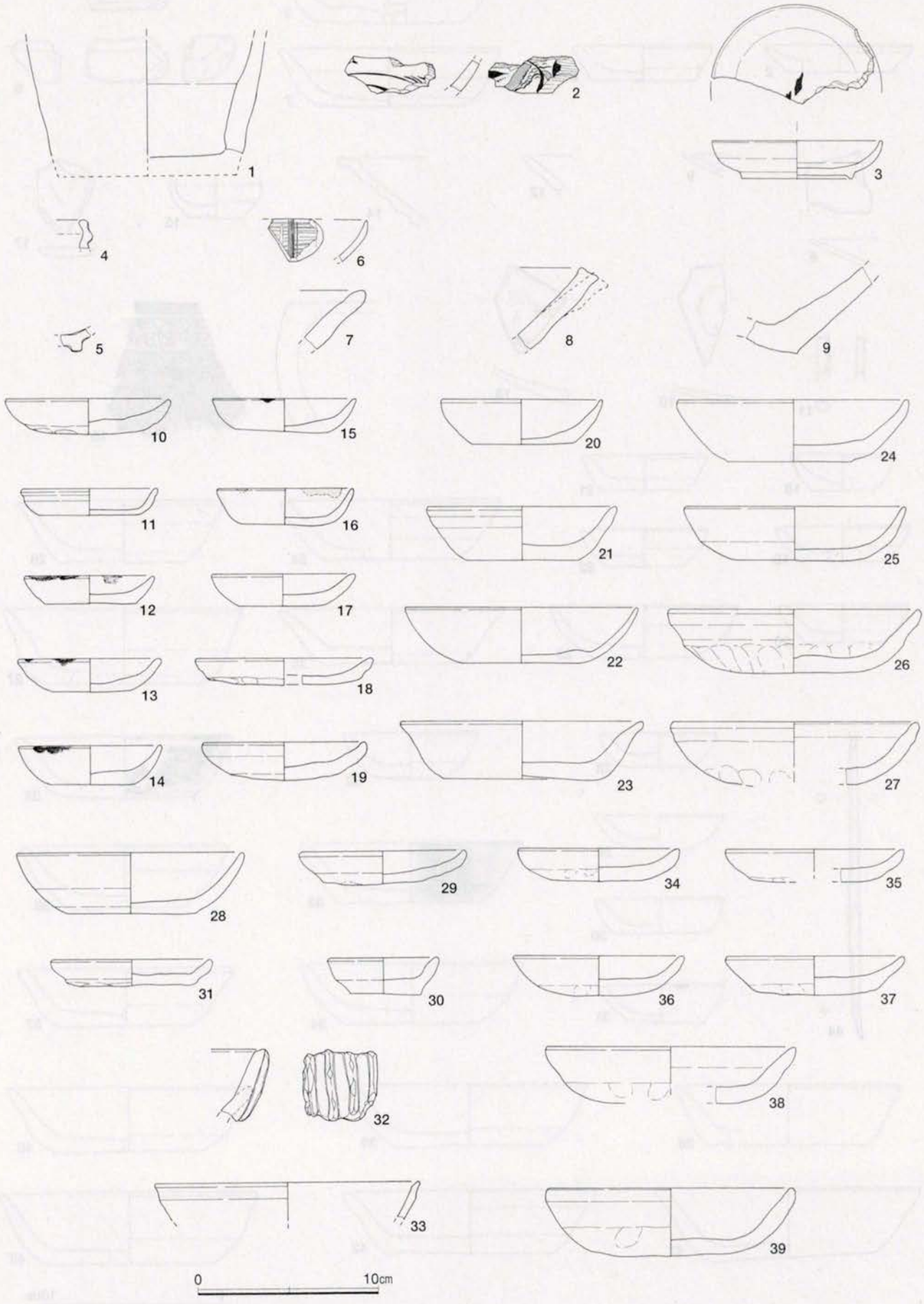

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
10cm

図10　瓦以外の遺物２

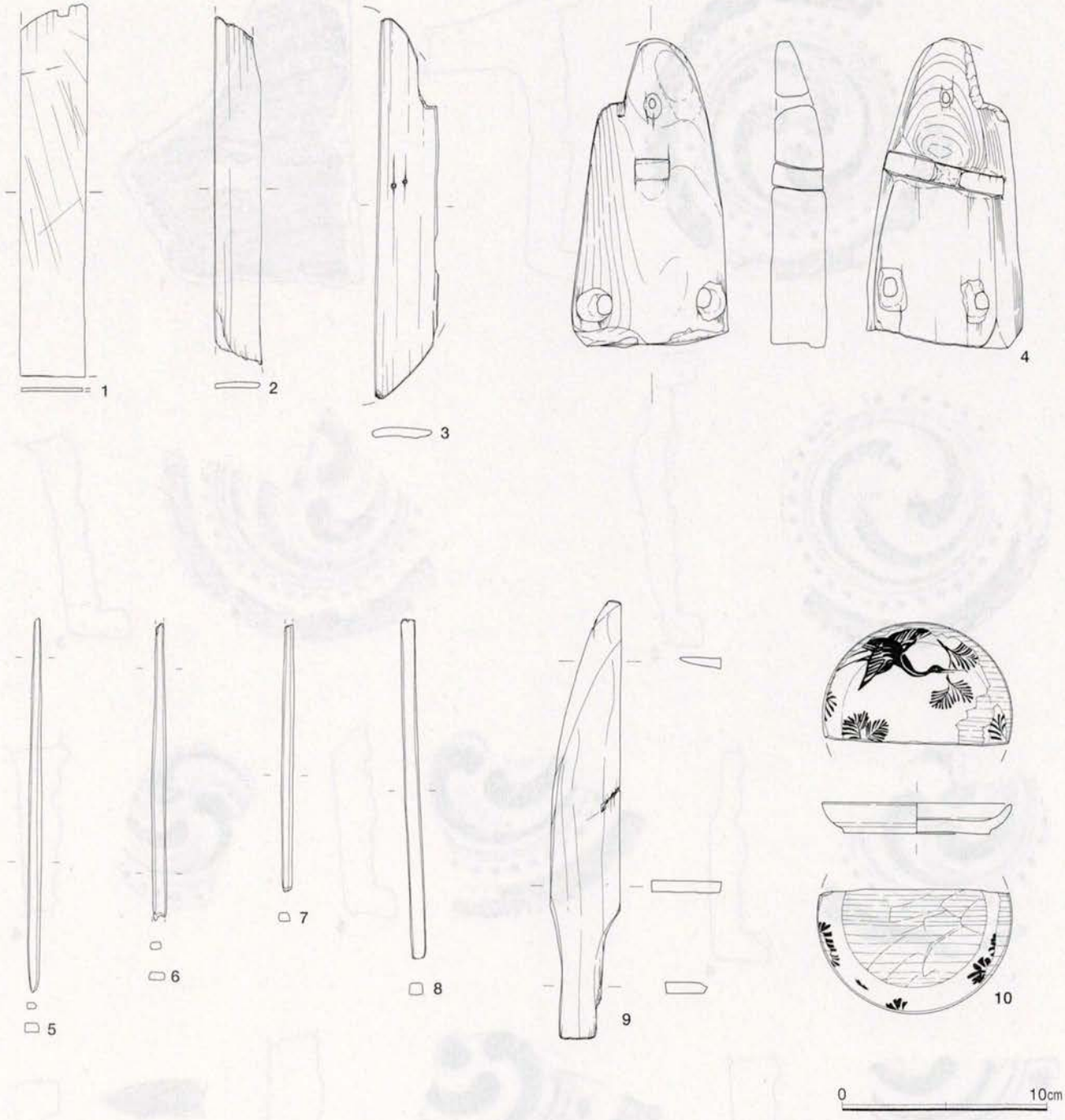


図11　瓦以外の遺物３

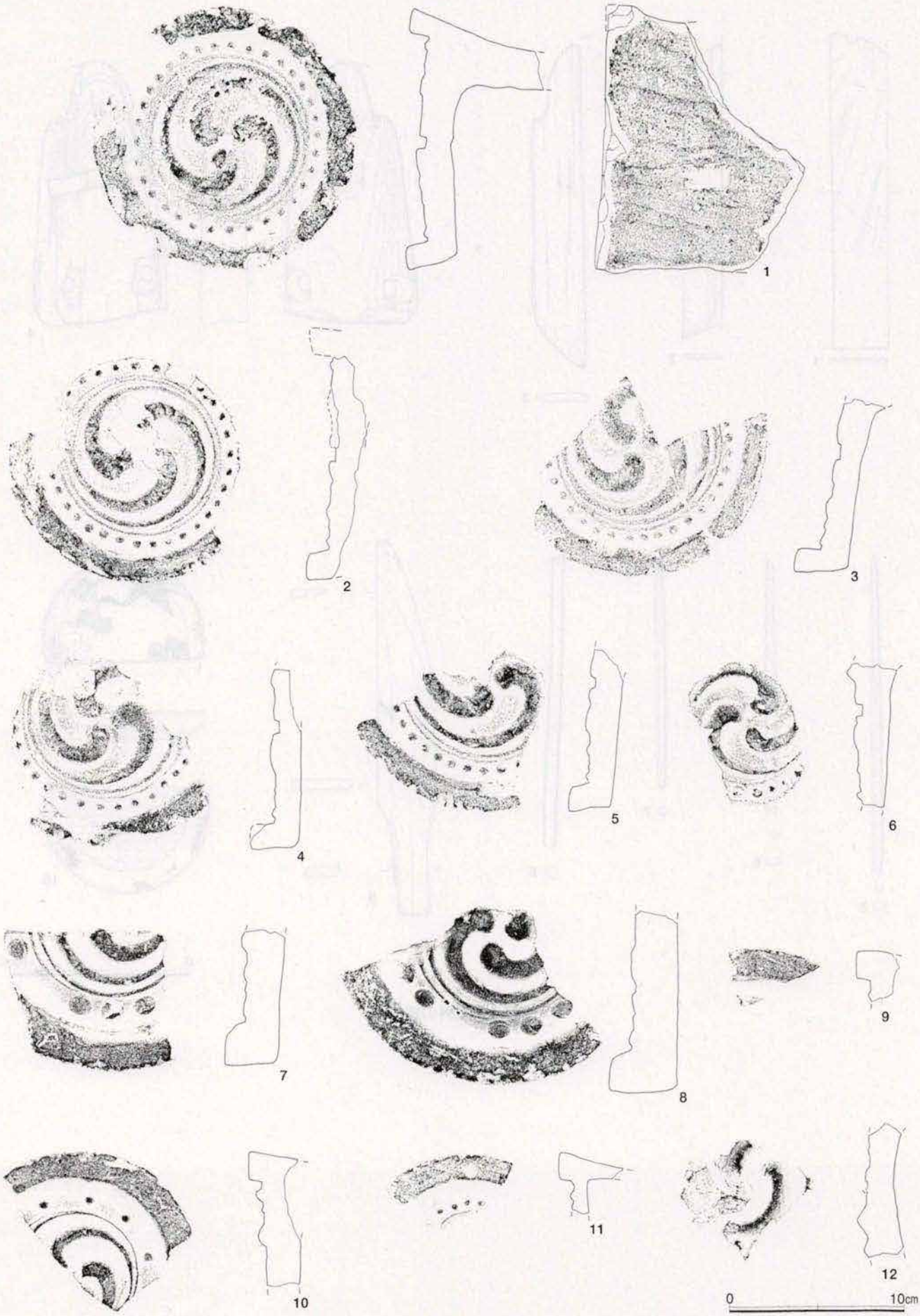


図12　鐙瓦（軒丸瓦）

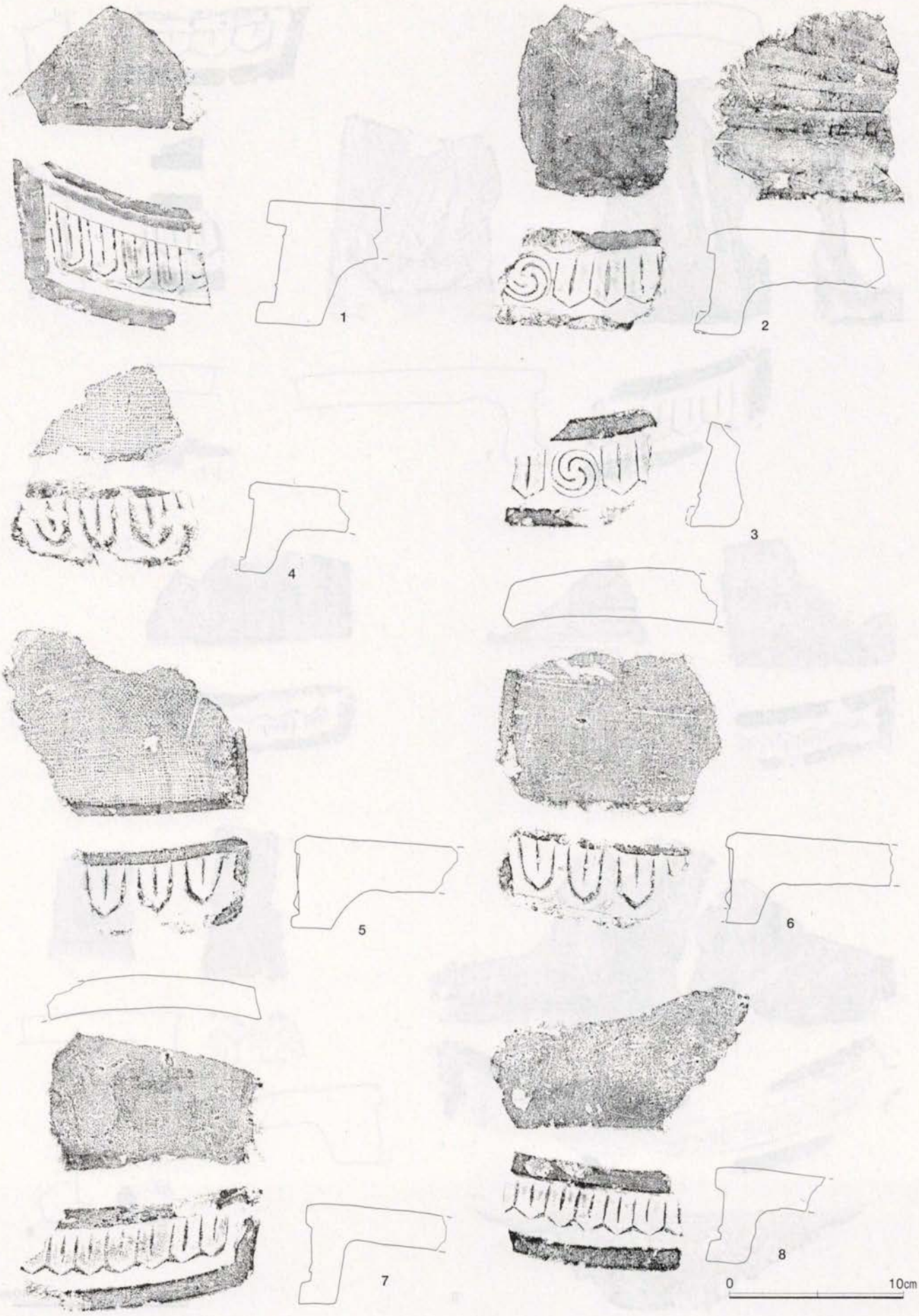


図13　宇瓦（軒平瓦）

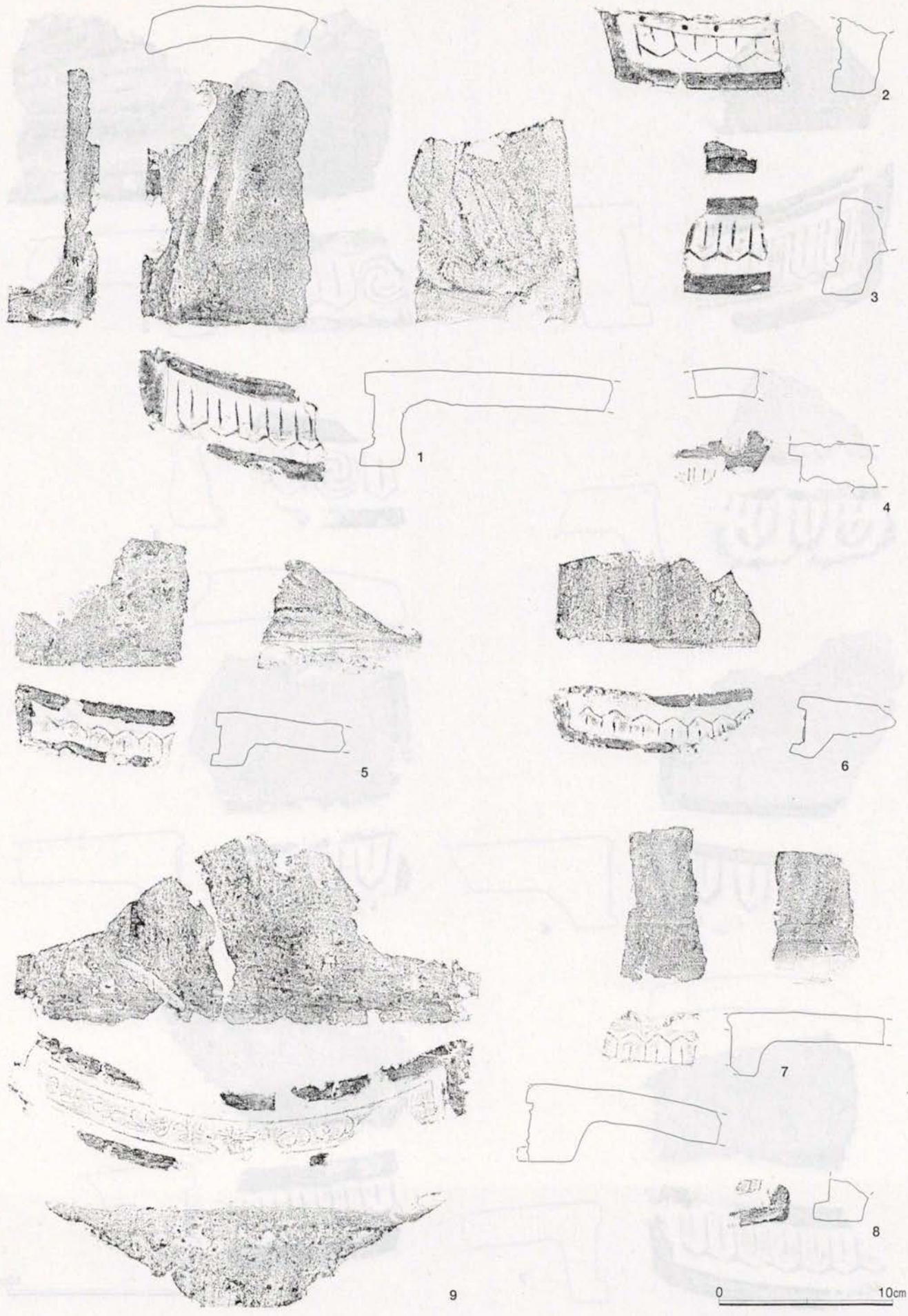


図14　宇瓦（軒平瓦）

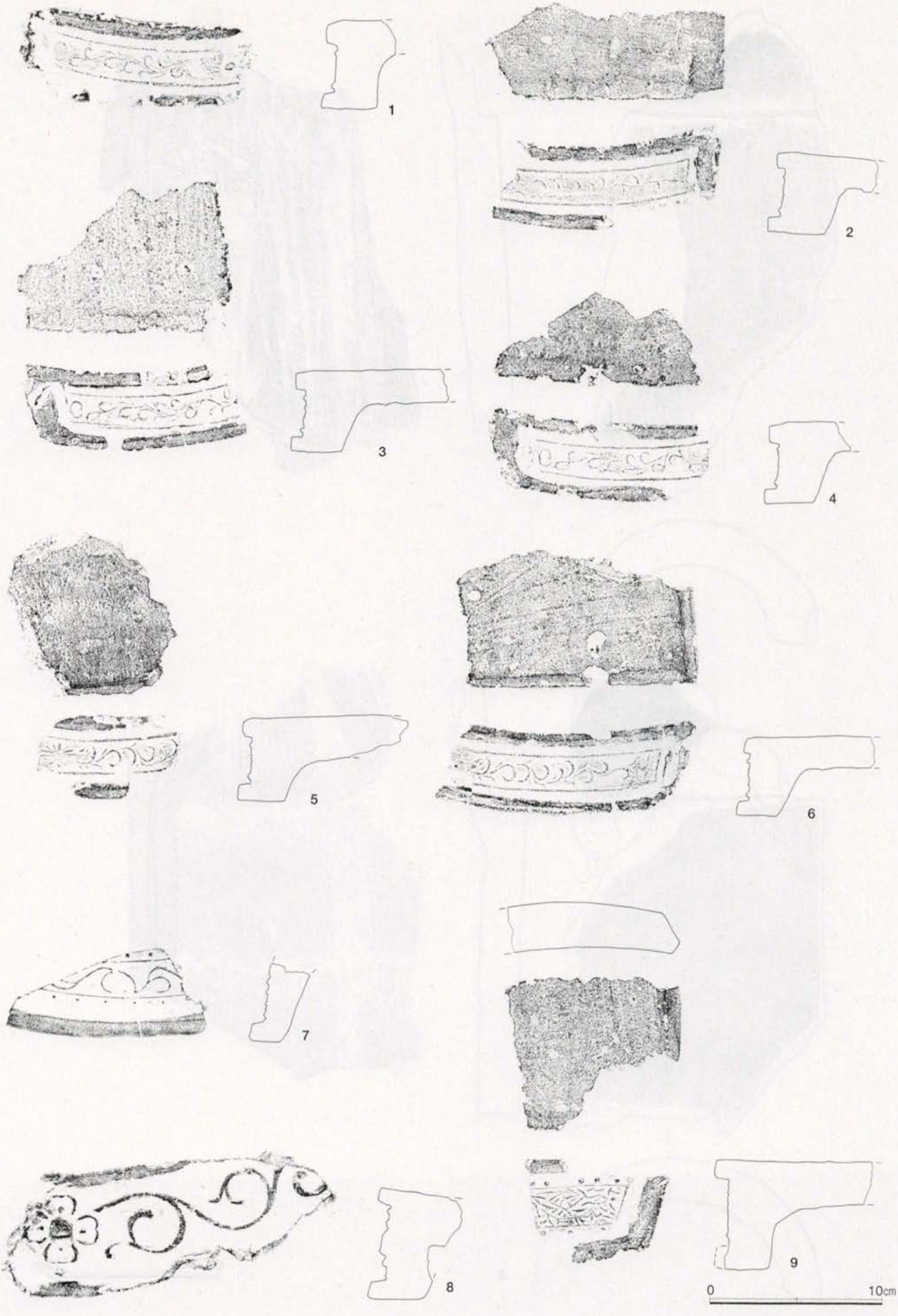


図15　宇瓦（軒平瓦）

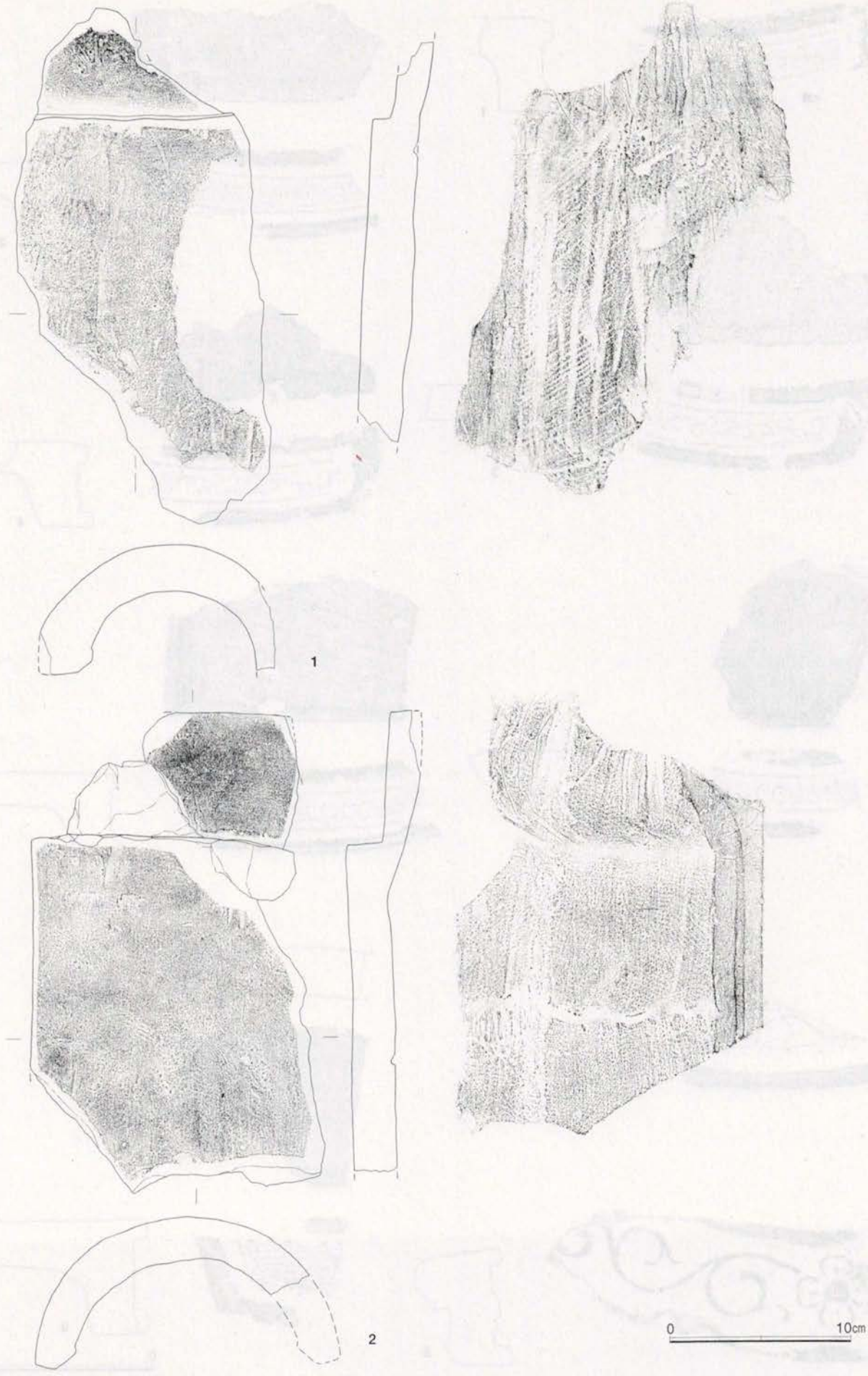


図16　男瓦（丸瓦）A・C類

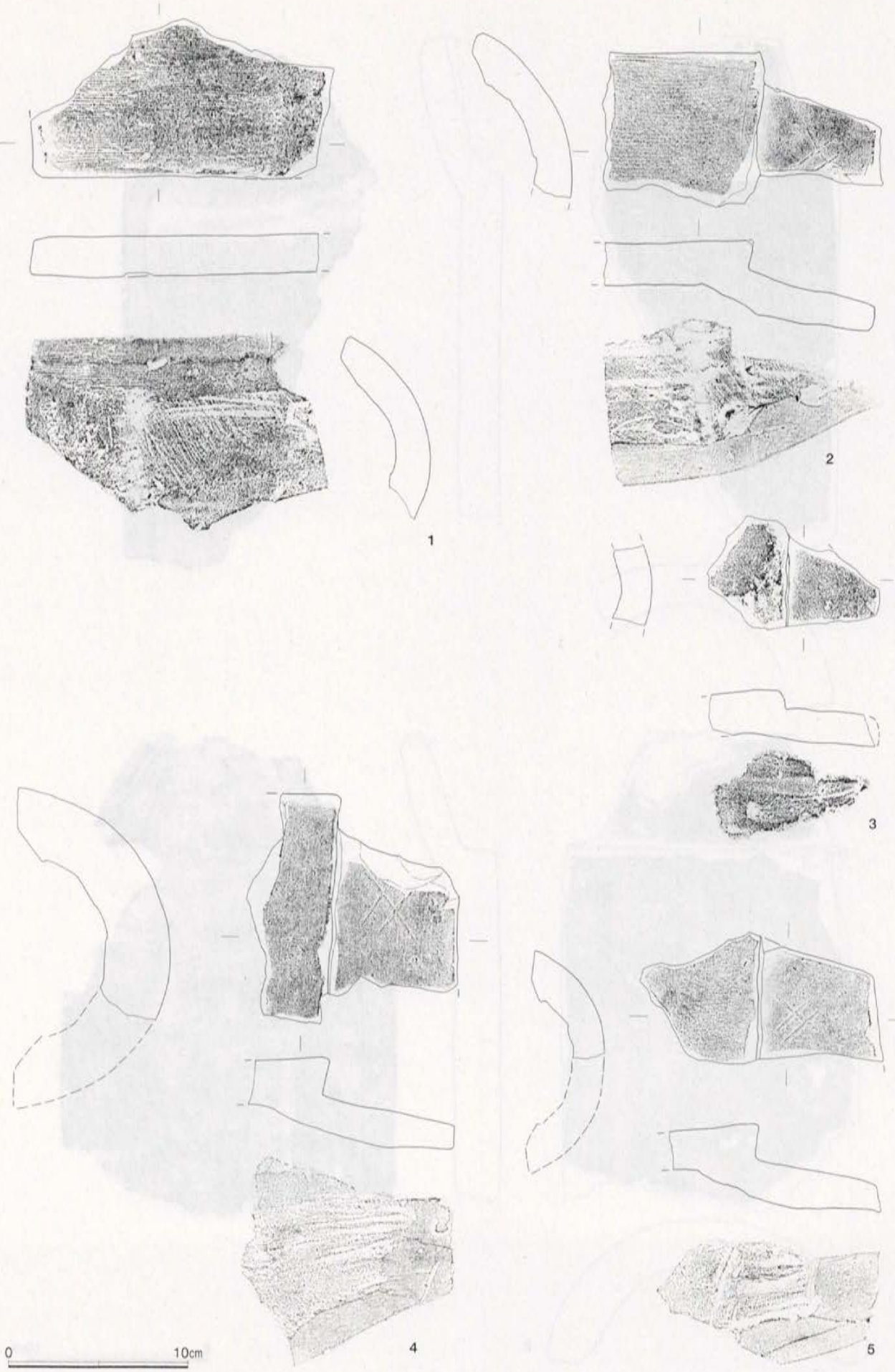


図17　男瓦（丸瓦）A・C類

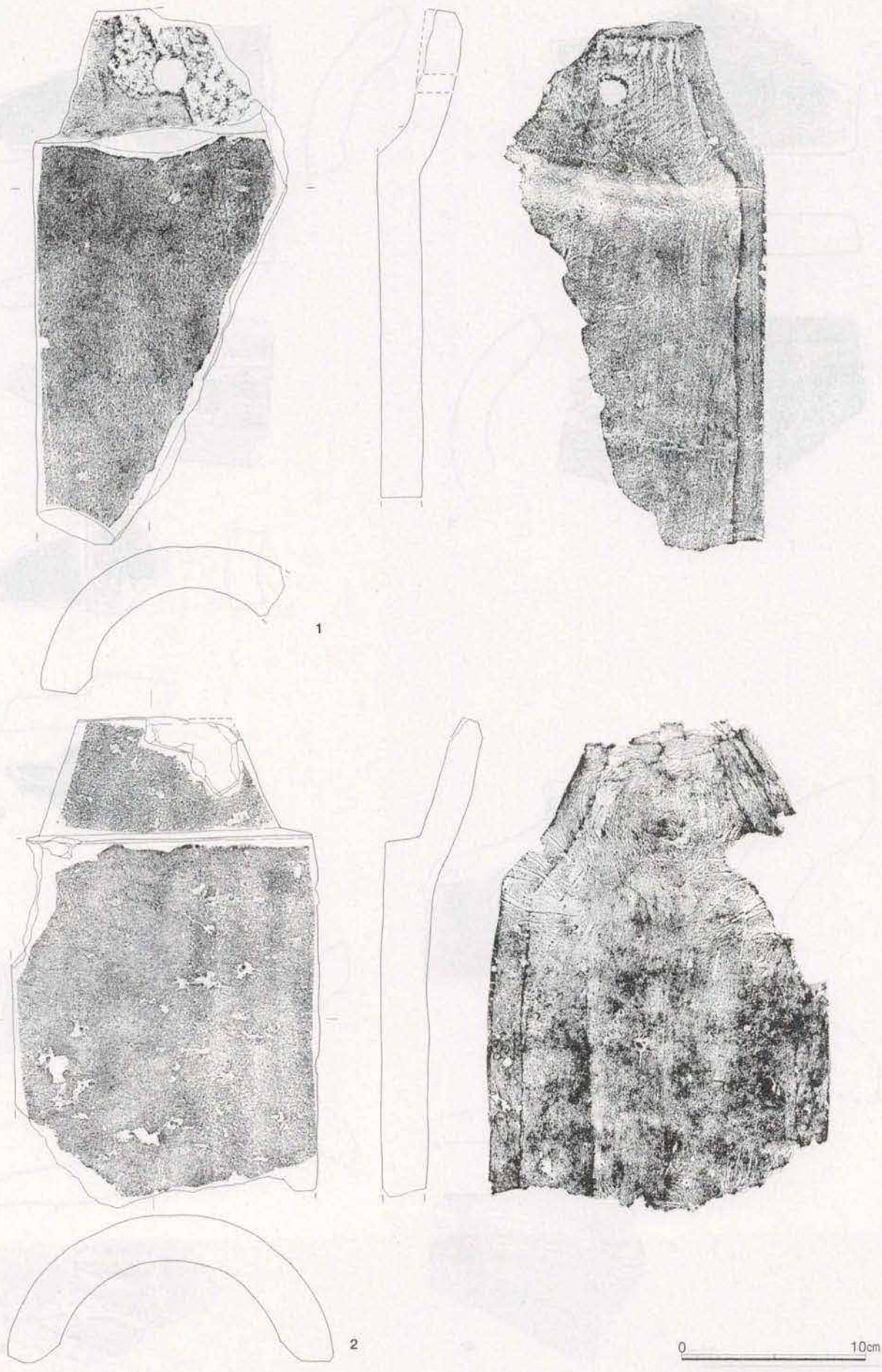


図18　男瓦（丸瓦）B類

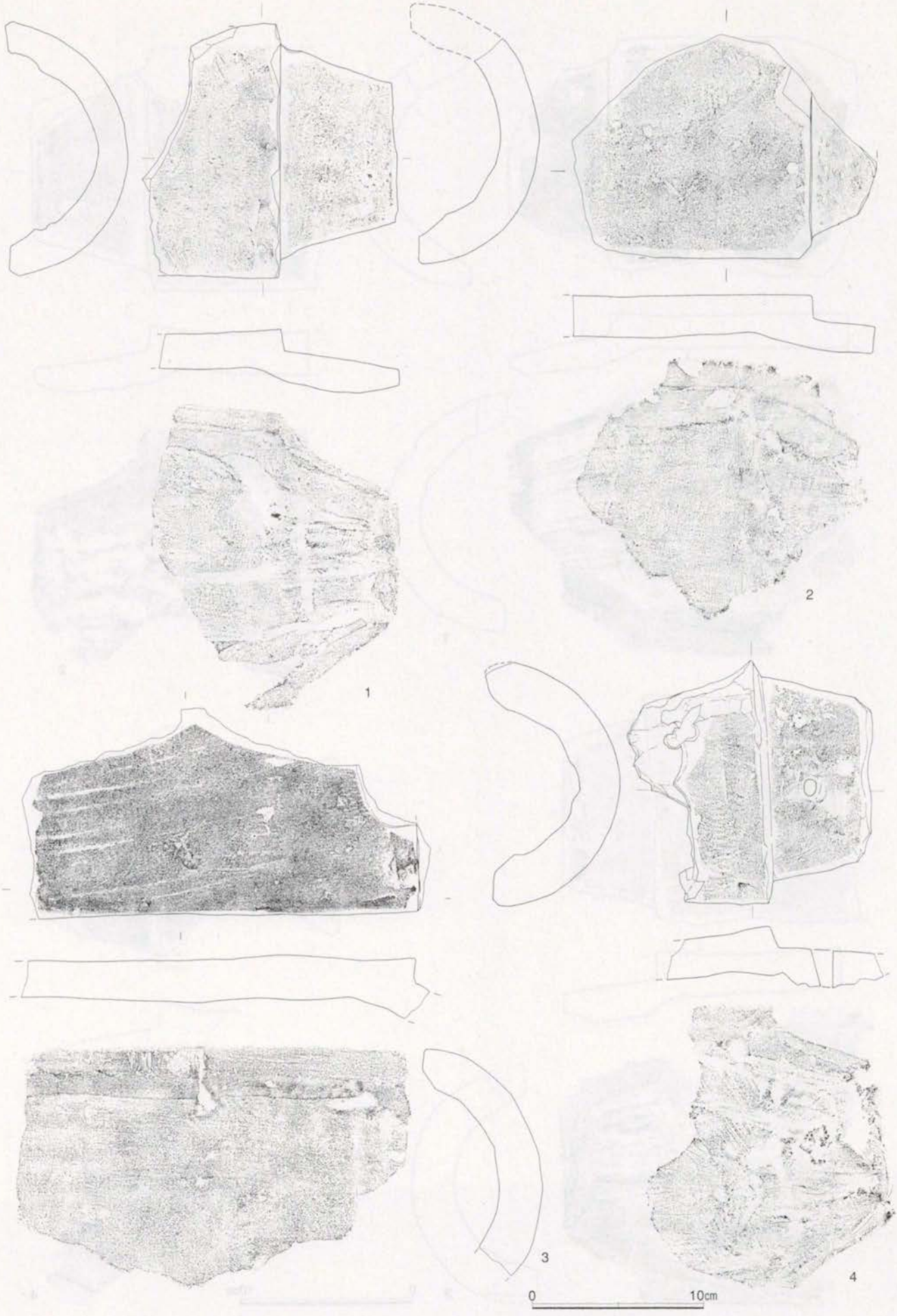


図19　男瓦（丸瓦）B類

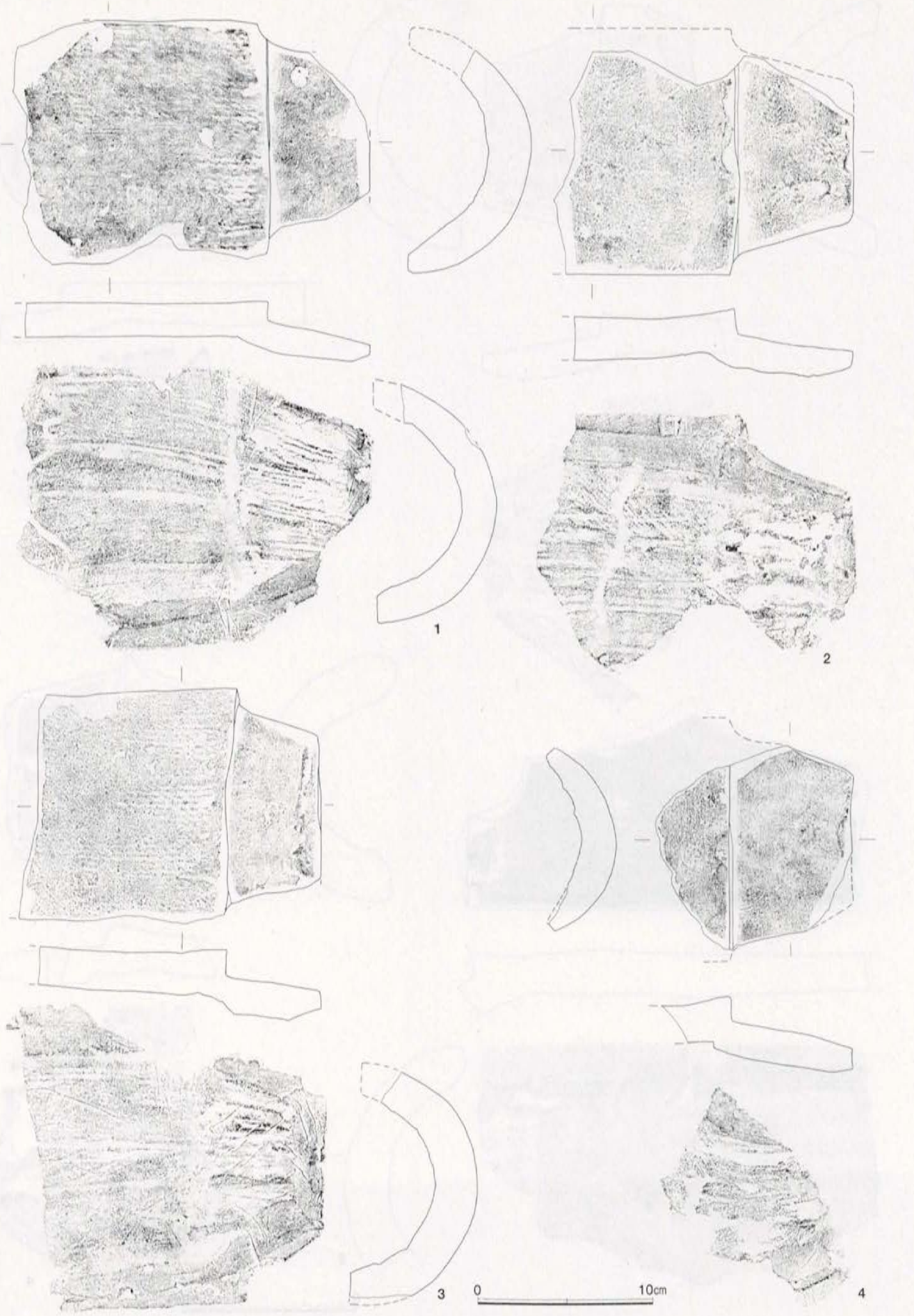


図20　男瓦（丸瓦）D類

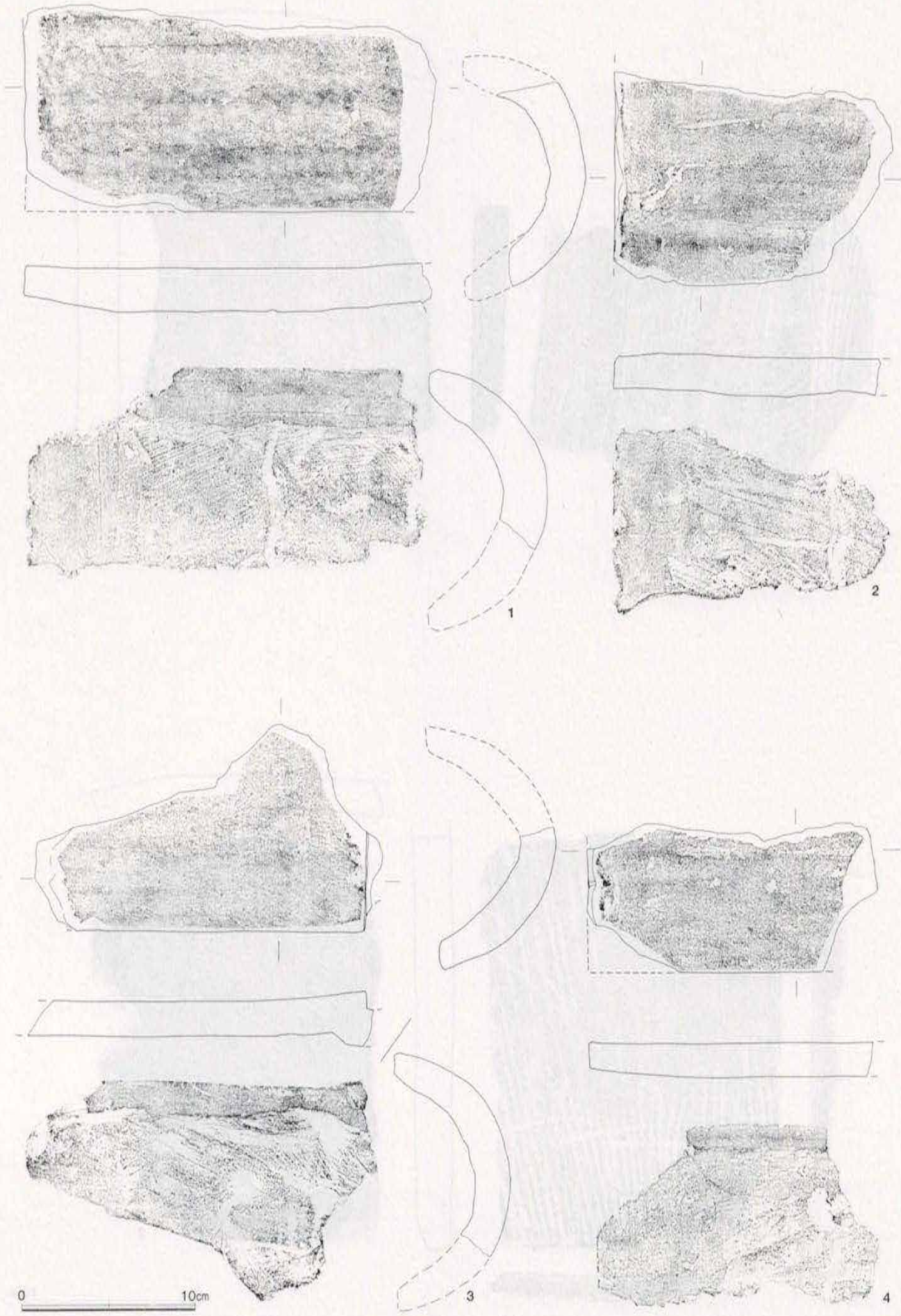


図21　男瓦（丸瓦）D類

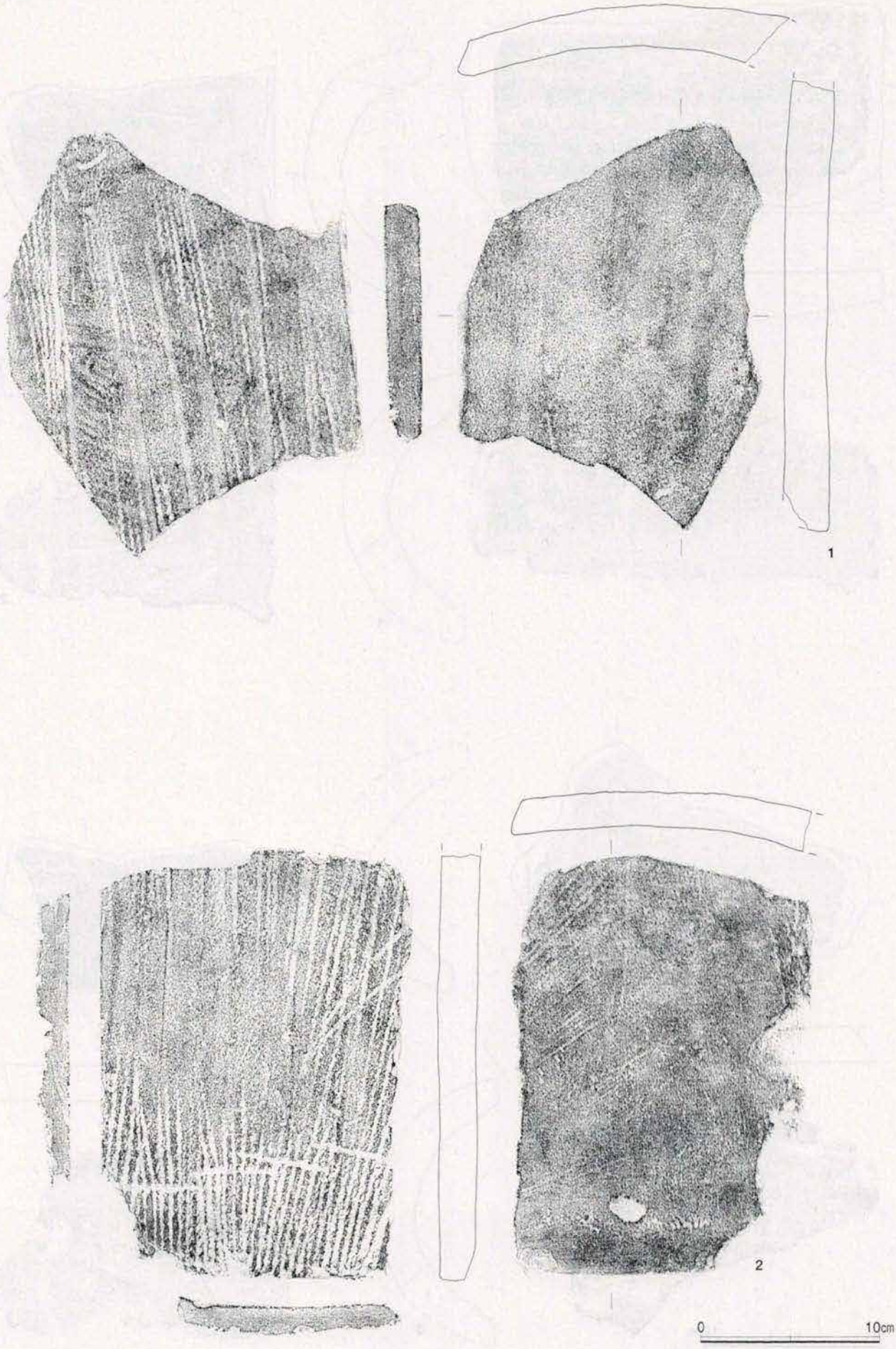


図22　女瓦（平瓦）A類

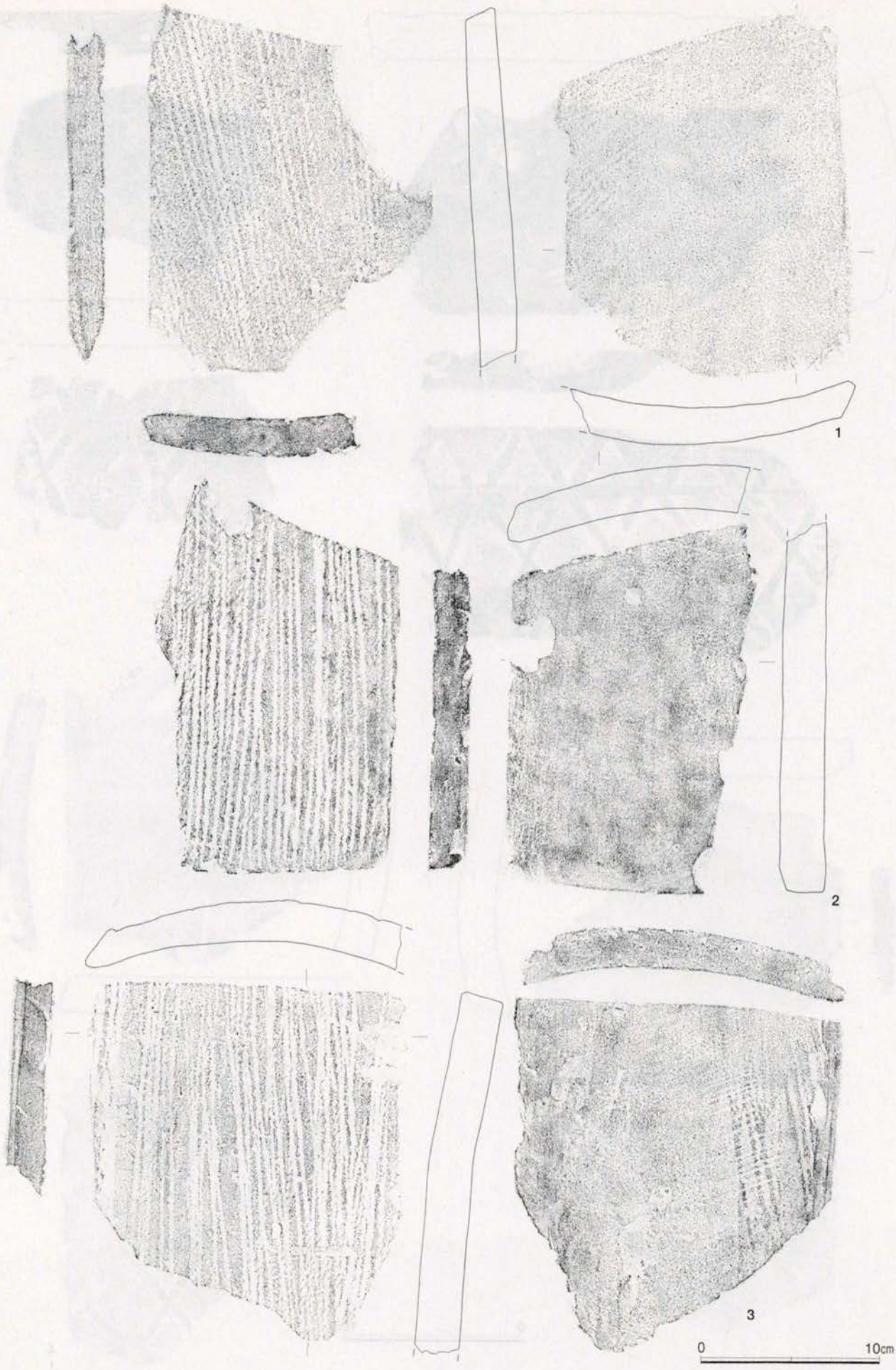


図23　女瓦（平瓦）A類

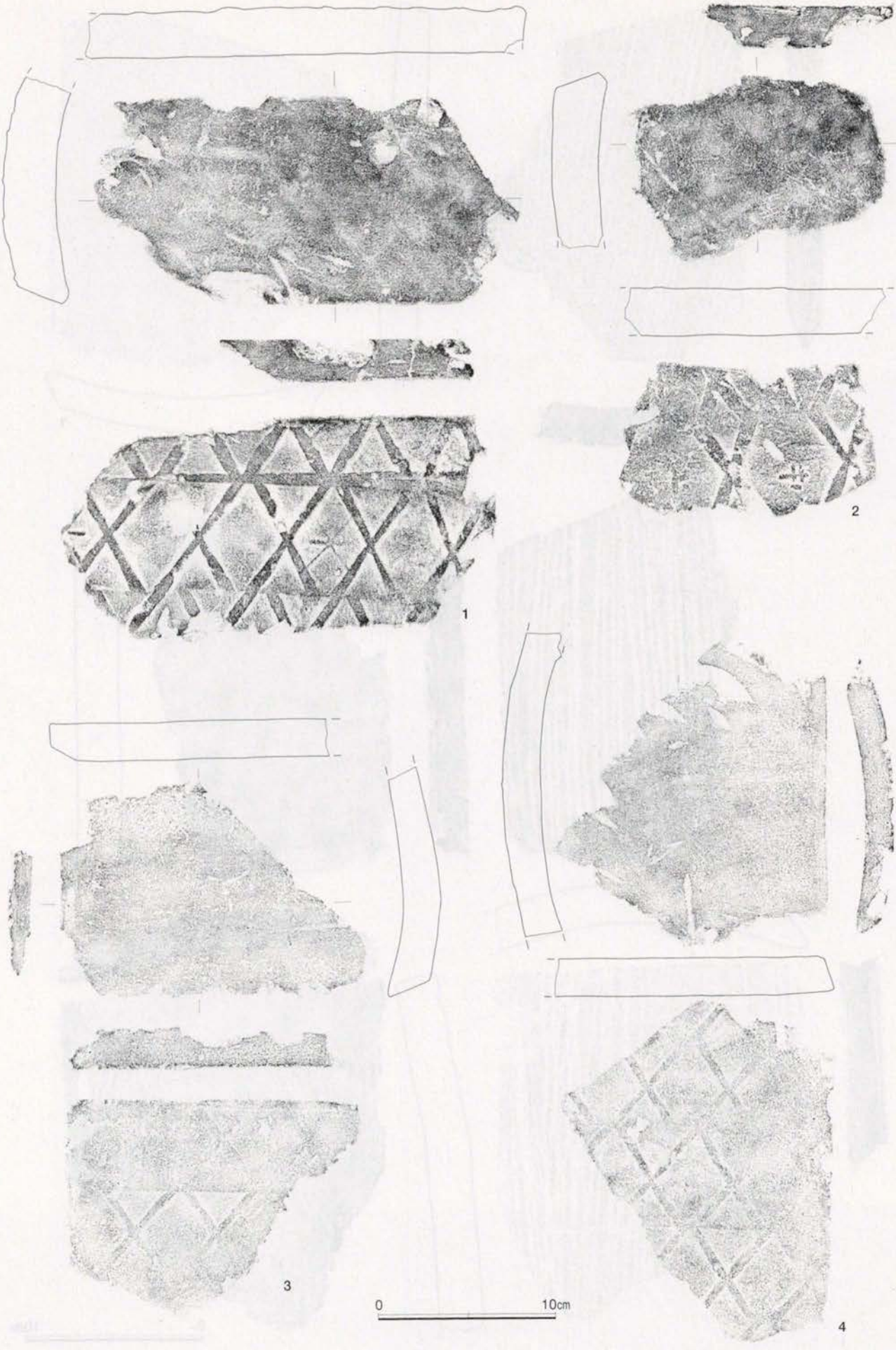


図24　女瓦（平瓦）C類

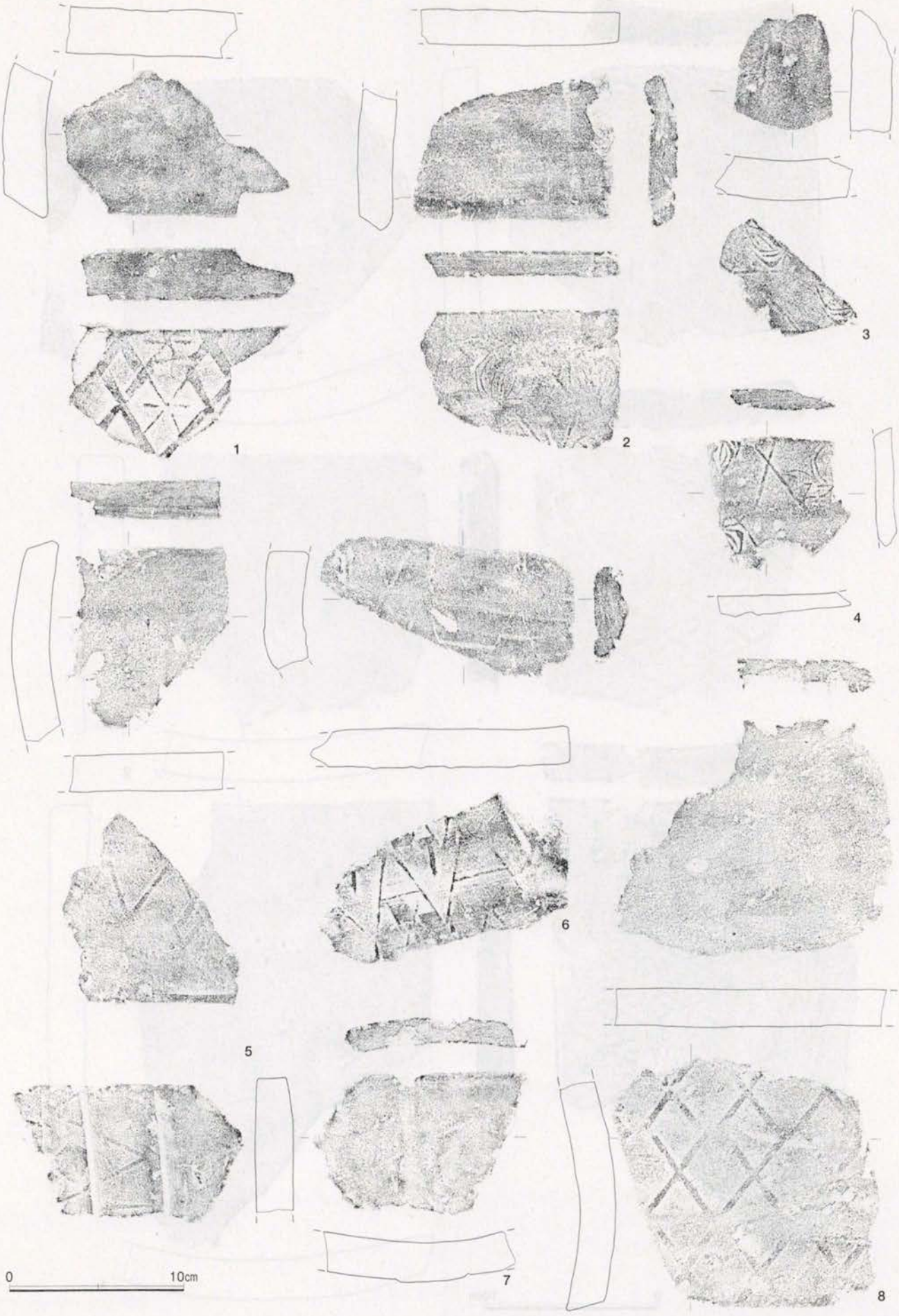


図25　女瓦（平瓦）C類

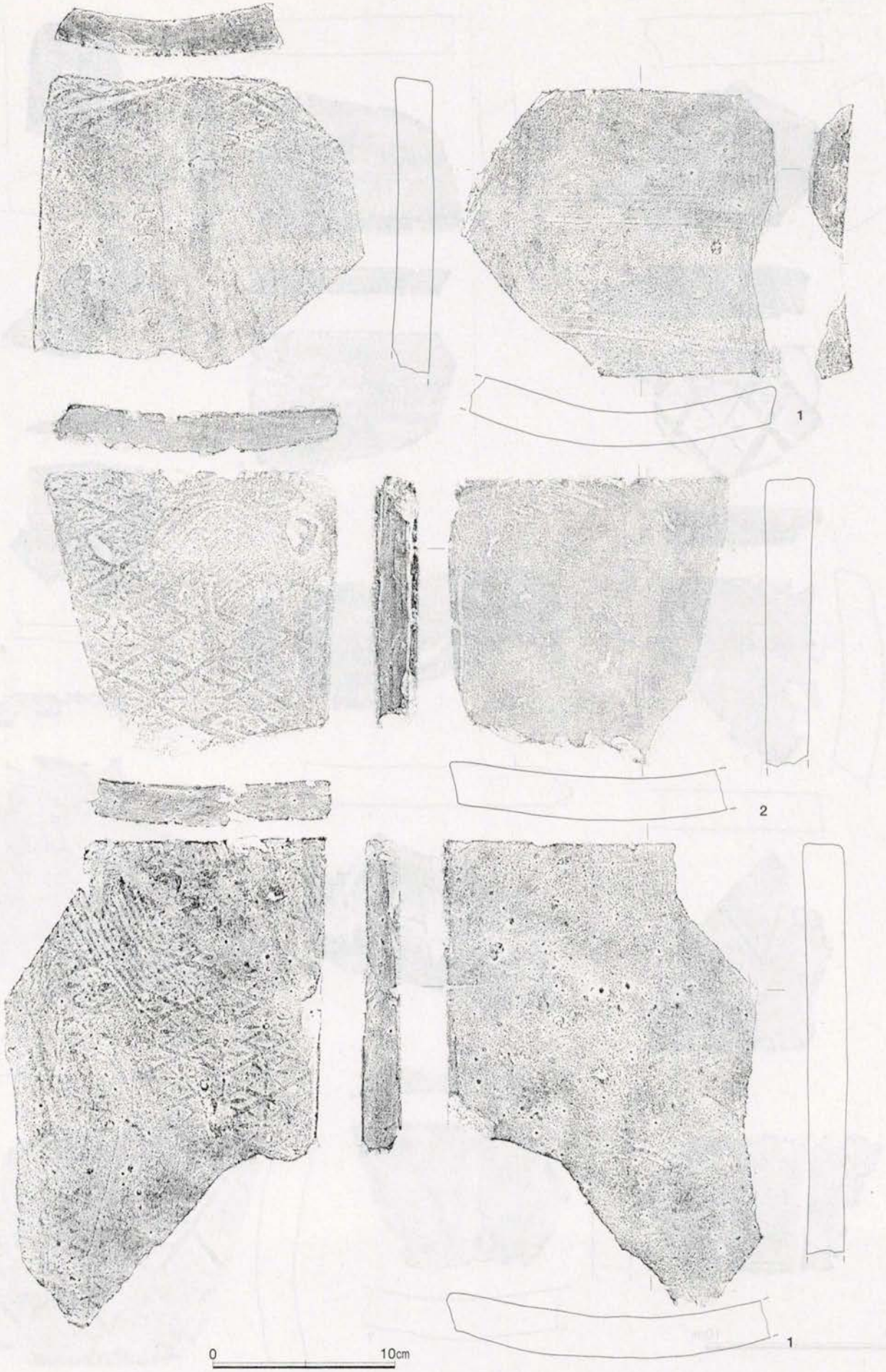


図26　女瓦（平瓦）D-1類

図27　女瓦（平瓦）D-1類

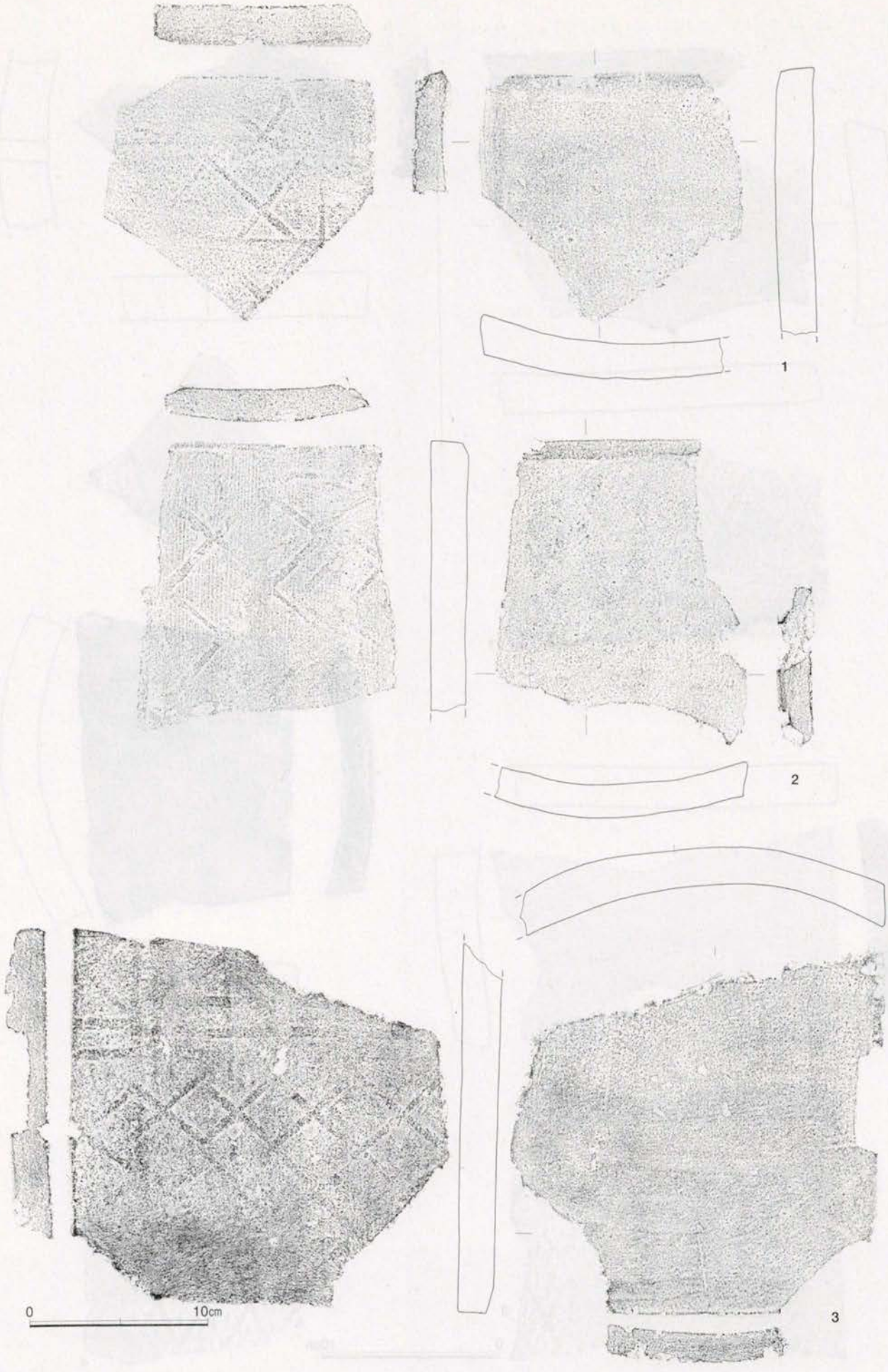


図28　女瓦（平瓦）D-2類

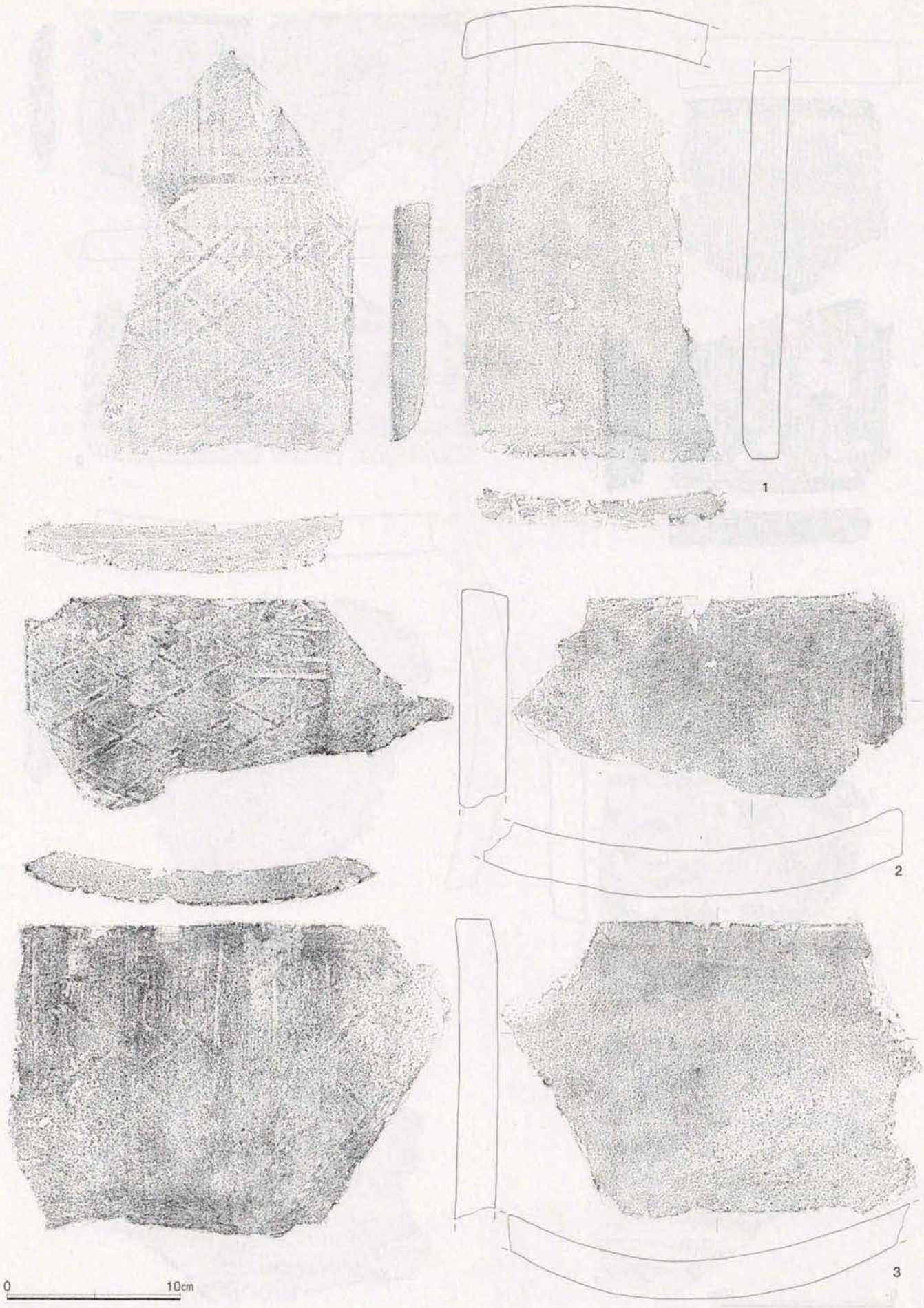


図29　女瓦（平瓦）D-2類

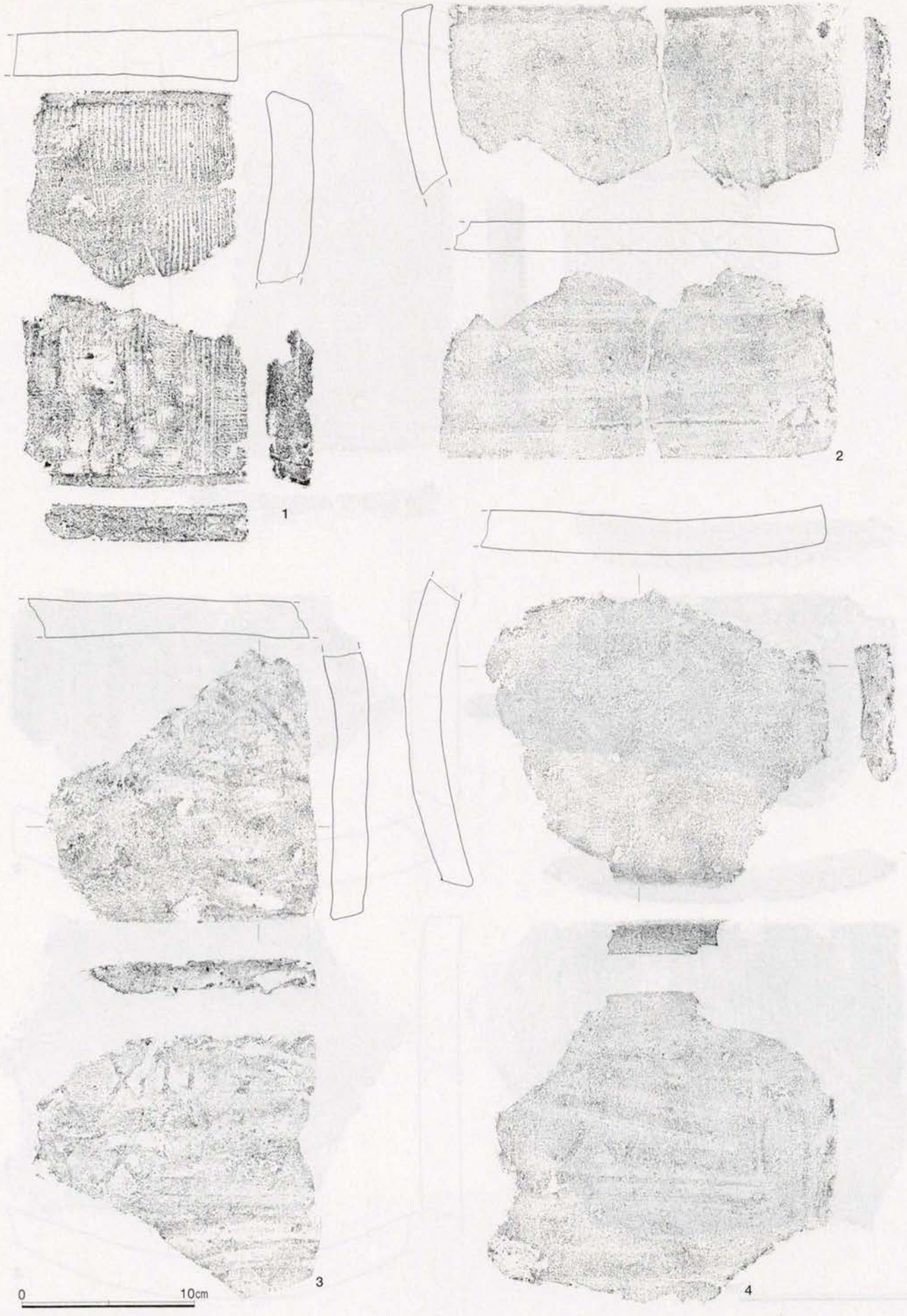


図30　女瓦（平瓦）E類

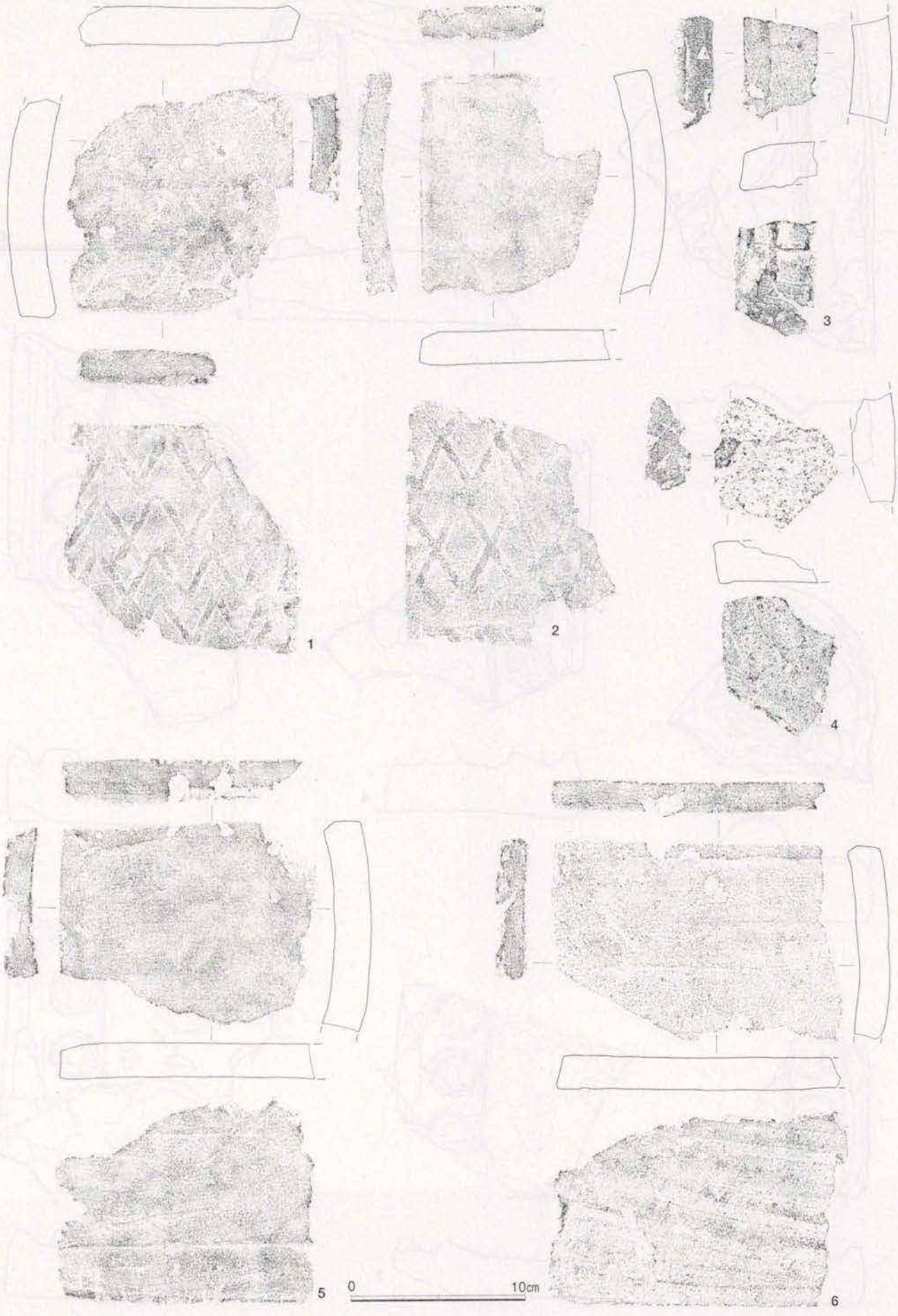


図31　女瓦（平瓦）E類

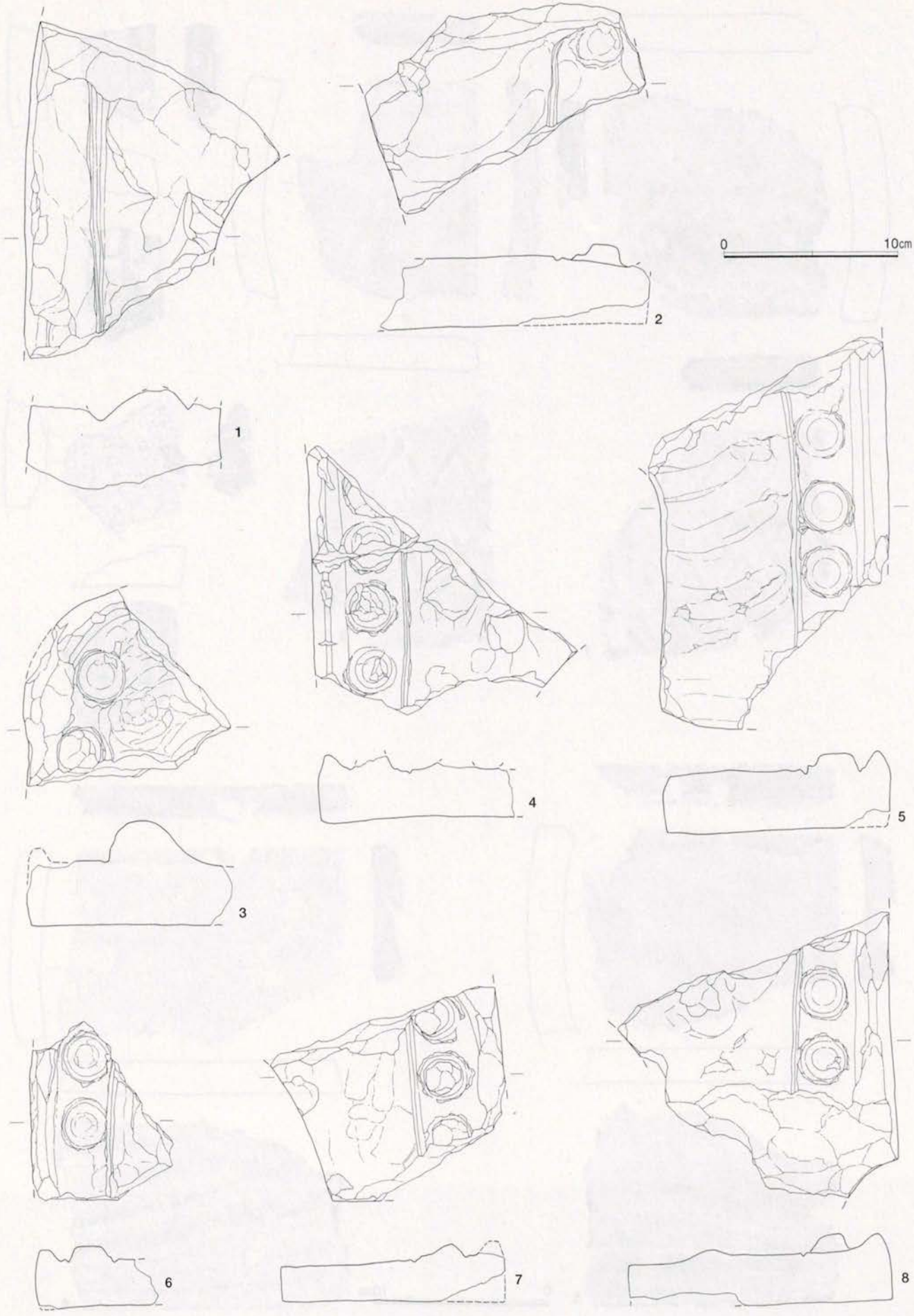


図32　鬼瓦

図9　瓦以外の遺物1

（　）は復元寸法、単位:cm

【試掘】

No.	種別・機種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.9	幟幢成形・煤付着
2	かわらけ	8.0	6.0	1.5	幟幢成形

【1面まで】

3	かわらけ	(12.1)	(8.2)	3.7	幟幢成形
4	かわらけ	5.8	3.9	2.1	幟幢成形
5	土製品（鋳型）				

【1面】P-1

6	かわらけ	7.4	6.0	2.0	幟幢成形

【1面】P-3

7	かわらけ	11.9	8.2	3.2	幟幢成形

【2面まで】

8	白磁・劃花文皿口縁部片				
9	白磁・皿口縁部片				No. 10と同一個体か
10	白磁・皿口縁部片				No. 9と同一個体か
11	青白磁・水注？	厚さ0.7。取手か、二次焼成によるとみられる気泡等有り			
12	青磁・碗口縁部片				
13	青磁・劃花文碗体部片				残存部はすべて施釉
14	瀬戸・折縁皿口縁部片	形態やや特殊　ハケヌリ・ツケガケ併用か			
15	瀬戸・合子		(3.0)	残2.0	図面一点破線より上施釉　外面のみ（ツケガケ）
16	瓦質・火鉢	口縁部片			口縁部に花文スタンプあり
17	石製品・砥石	残4.1	残3.1	厚0.6	仕上砥　1面使用木口1面残る
18	かわらけ	(7.6)	(5.6)	2.1	幟幢成形・煤付着
19	かわらけ	(7.3)	(4.8)	2.0	幟幢成形
20	かわらけ	(7.0)	(4.4)	2.1	幟幢成形
21	かわらけ	(7.0)	(4.8)	2.0	幟幢成形
22	かわらけ	(6.9)	(4.2)	2.1	幟幢成形
23	かわらけ	(10.4)	(6.0)	3.0	幟幢成形
24	かわらけ	(12.2)	(7.5)	3.4	幟幢成形
25	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.1	幟幢成形
26	かわらけ	(11.3)	(6.8)	3.5	幟幢成形
27	かわらけ	(13.2)	(9.0)	4.2	幟幢成形

【2面】土壙1

28	かわらけ	6.3	4.1	1.9	幟幢成形
29	かわらけ	7.2	3.3	1.9	幟幢成形
30	かわらけ	6.8	4.5	2.0	幟幢成形
31	かわらけ	6.7	4.2	2.1	幟幢成形・煤付着
32	かわらけ	(7.2)	4.2	2.1	幟幢成形
33	かわらけ	(12.2)	7.8	3.4	幟幢成形・煤付着
34	かわらけ	(12.2)	(7.0)	3.4	幟幢成形
35	かわらけ	(11.9)	6.9	3.5	幟幢成形・煤付着
36	かわらけ	(11.4)	6.8	3.5	幟幢成形
37	かわらけ	(11.4)	7.5	3.2	幟幢成形
38	かわらけ	(12.4)	(9.0)	3.4	幟幢成形
39	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.5	幟幢成形
40	かわらけ	(13.4)	(8.2)	3.6	幟幢成形
41	かわらけ	14.6	9.2	3.9	幟幢成形
42	かわらけ	(13.1)	(9.0)	3.6	幟幢成形
43	かわらけ	(14.2)	(9.4)	4.0	幟幢成形

図10　瓦以外の遺物2

（　）は復元寸法、単位:cm

【2面】土壙1

No.	種別・機種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	瀬戸・梅瓶		(9.6)		
2	漆製品・椀	体部片			黒地朱文様
3	漆製品・皿	(9.7)	(6.1)	2.1	黒地朱文様

【3面まで】

4	青白磁・梅瓶？	口縁部片			
5	青磁・皿？				
6	瓦器質・碗				平面輪花
7	常滑・片口鉢				Ⅱ類
8	常滑・片口鉢				Ⅱ類
9	常滑・甕				
10	かわらけ	(8.8)		1.9	手捏ね成形
11	かわらけ	7.3	5.5	1.5	幟幢成形
12	かわらけ	7.0	5.1	1.8	幟幢成形
13	かわらけ	7.6	4.4	1.9	幟幢成形
14	かわらけ	7.6	4.8	2.2	幟幢成形
15	かわらけ	7.5	5.1	1.8	幟幢成形
16	かわらけ	(7.4)	(4.6)	2.0	幟幢成形
17	かわらけ	7.3	4.3	1.9	幟幢成形
18	かわらけ	(9.6)		(1.5)	手捏ね成形
19	かわらけ	(9.0)		2.1	手捏ね成形
20	かわらけ	8.7	5.6	2.5	幟幢成形
21	かわらけ	10.4	6.3	3.0	幟幢成形
22	かわらけ	(12.0)	(6.9)	2.9	幟幢成形
23	かわらけ	(13.6)	(6.4)	3.2	幟幢成形
24	かわらけ	12.5	7.1	3.5	幟幢成形
25	かわらけ	(12.2)	(6.4)	3.0	幟幢成形
26	かわらけ	14.0		3.6	手捏ね成形
27	かわらけ	()			手捏ね成形
28	かわらけ	()			幟幢成形
29	かわらけ	()	()		幟幢成形

【3面】土壙1

30	かわらけ	6.2	4.0	2.0	幟幢成形

【3面】溝状遺構

31	かわらけ	(9.0)	(7.3)	1.5	手捏ね成形
32	弥生後期・壺				複合口縁
33	瀬戸・平碗	(14.6)			13c末～14c前

【4面】面上

34	かわらけ	(8.8)		1.8	手捏ね成形
35	かわらけ	(9.8)			手捏ね成形
36	かわらけ	9.4		2.2	手捏ね成形
37	かわらけ	(9.8)		2.2	手捏ね成形
38	かわらけ	(13.8)			手捏ね成形
39	かわらけ	13.4		3.8	手捏ね成形

図11　瓦以外の遺物3

（　）は復元寸法、単位:cm

【4面】面上

No.	種別・機種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・折敷	長18.1	幅3.2	厚0.2	

【4面】池中

2	木製品・筬状	長16.8	幅2.2	厚0.3	
3	木製品・草履芯	長18.5	幅3.1	厚0.5	
4	木製品・下駄	長15.0	幅7.2	厚2.6	
5	木製品・箸	長18.4	幅0.6	厚0.4	
6	木製品・箸	長14.4	幅0.7	厚0.4	
7	木製品・箸	長13.1	幅0.6	厚0.4	
8	木製品・棒状	長16.6	幅0.7	厚0.6	
9	木製品・形代	長21.5	幅3.4	厚0.5	刀形
10	漆製品・皿	9.2	7.2	1.5	黒地朱文様・松喰鶴 手描き

浄妙寺旧境内遺跡出土瓦観察表

鐙瓦（巴文）

単位は㎜。胎土分類は下の対照表を参照。（ ）は残存値。

図版番号	瓦当径	内区		外区						男瓦部		色調	焼成	胎土	備考	実測図番号	出土地点
		文様(回転)	径	外区広	圏線	内縁		外縁		径	厚						
						幅	文様	幅	高								
図12-1	148	三巴・右	97	25	1	13	珠文33	12	10	140	19	淡桃～灰白色	軟質	男D	中心△スタンプ	鐙16	3面まで（池）
2	146	三巴・右	93	25	1	10	珠文	15	10			灰黒色	軟質	男D	〃	鐙6	3面まで（池）
3		三巴・右		19	1	10	珠文	19	10			灰黒色	軟質	男D	〃	鐙8	3面まで（池）
4		三巴・右		24	1	9	珠文	16	10			灰黒色	軟質	男D	〃	鐙7	3面まで（池）
5		三巴・右		27	1	9	珠文	18	10			灰褐色	軟質	男D	〃	鐙37	試掘
6		三巴・左			1		珠文					灰黒色	良好	男D	〃	鐙15	3面まで（池）
7		三巴・左		40	1	17	珠文	23	14			淡橙～灰黒色	良好	男A		鐙30	試掘
8		三巴・左		40	1	15	珠文	25	13			灰色	良好	男A		鐙3	3面まで（池）
9								23	8			灰白色	良好	男A硬質		鐙5	3面まで（池）
10		三巴・右		25		12	珠文	23	7			灰黒色	軟質	男A		鐙33	試掘
11				25		12	珠文	33	8			灰黒色	良好	砂少、白色粒多		鐙26	3面まで（池）
12		右					珠文					灰白色	良好	男A硬質		鐙32	試掘

宇瓦（剣頭文・唐草文）

図版番号	瓦当部									女瓦部厚	顎部		焼成	色調	胎土	備考	出土地点
	上弦幅	下弦幅	幅	内区文様	上外区		下外区		脇区								
				内区幅	幅	文様	幅	文様	幅	文様		顎面幅	製作技法					
図13-1			72	剣頭・下・寺銘・44	20		19		25		28	33	顎	良好	灰色	女A		3面まで（池）
2			58	剣頭・下・三巴・32	12						28	31	顎	良好	灰色	女D4		3面まで（池）
3			61	剣頭・下・三巴・34	12		12				24	29	顎	軟質	淡橙～灰色	女D4		3面まで（池）
4			52	剣頭・下・39	8				9		25	24		軟質	灰色	女D5		3面まで（池）
5			52	剣頭・下・36	9		8		9		26	33		良好	灰白色	女D5		3面まで（池）
6			52	剣頭・下・38	8		8		9		26	30		軟質	灰色	女D5		3面まで（池）
7			58	剣頭・下・28	11		11		11		19	22		軟質	灰黒色	女D2		3面まで（池）
8			57	剣頭・下・28	14		13				24	23		軟質	灰黒色	女D2		試掘
図14-1			57	剣頭・下・30	13		11		14		20	21		良好	黒褐色	女D2		3面まで（池）
2				剣頭・下		界線・珠文	11		9			26	瓦当	良好	灰黒色	女D2		3面まで（池）
3			54	剣頭・下・28	11		11				28	20	瓦当	良好	灰褐色	女D2		3面まで（池）
4				剣頭・下					20		24	26	瓦当	良好	茶灰色	女C		3面まで（池）
5			34	剣頭・上・19	8		6		9		16	17	瓦当	良好	灰黒色	女E		3面まで（池）
6			34	剣頭・下・21	6		5		8		19	16	瓦当	良好	灰黒色	女E		3面まで（池）
7			36	剣頭・上・19	9		7				16	20	瓦当	良好	灰黒色	女E		3面まで（池）
8				剣頭・上			9		11					良好	灰黒色	女E		2面まで
9	258	265	45	均等唐草・25	17		14		20		37			良好	灰色	女E		試掘
図15-1			46	均等唐草・27	16		8		22		22	30		良好	灰～淡桃色	女E	中央○印	3面まで（池）
2			47	均等唐草・26	15		15		19		19	33		良好	灰色	女E		2面瓦溜り下層
3			44	均等唐草・26	14		12		23		18	34		良好	灰色	女E		2面まで
4			45	均等唐草・25	15		15		22		19	32		良好	灰黒色	女E		3面まで（池）
5			47	均等唐草・26	15		15				24	31		良好	灰色	女E		3面まで（池）
6			46	均等唐草・27	13		14		17		19	30		良好	灰黒色	女E		3面まで（池）
7				唐草19		界線・珠文	19	界線・珠文						良好	灰色	女A		3面まで（池）
8			55	唐草	16		11					30		良好	灰～茶灰色	女C		試掘
9			63	偏行唐草・25	20	界線・珠文	20	界線・珠文	22		27	36		良好	黒色	女D2	范傷有り	2面土壙1

男瓦

図版番号	種類	胎土	全長	幅・径	厚さ	玉縁長	凸部			凹部			側縁	端縁	色調	焼成	備考	出土地点
							叩き	離れ砂	調整	布目	離れ砂	調整						
図16-1	男瓦	A	(237)	(136)	25		縄目	有	ナデ	有	有	叩き・ナデ	ケズリ		灰色	良好		3面まで（池）
2		A	(266)	(170)	25	70		有	ナデ	有	有		ケズリ	ケズリ	明灰色	良好	掛け継痕	3面まで（池）
図17-1		C	(160)	(158)	21		縄目	有	木口状工具		有	糸切り痕	ケズリ	ケズリ	灰茶色	良好		3面まで？
2		A	(152)	(180)	24		縄目	有	ナデ	有	有	糸切り痕	ケズリ		灰白色	良好	キ印有	3面まで（池）
3		A	(95)	(61)	19			有		有	有				淡橙色	良好		3面まで（池）
4		A	(119)	(126)	37				ナデ	有	有	ナデ	ケズリ		灰白色	良好	キ印有	3面まで（池）
5		A	(130)				縄目	有	ナデ	有	有	糸切り痕	ケズリ	ケズリ	明灰色	良好	キ印有	3面まで（池）
図18-1		B	(197)	(140)	23		縄目	無	縦ナデ	有	無		ケズリ	ケズリ	灰白色	良好		3面まで（池）
2		B	(268)	178	26		縄目	無		有	無		ケズリ	ケズリ	灰～赤灰色	良好	二次焼成受ける	3面まで（池）
図19-1		B	(148)	147	21	68	縄目	有・細かい		有	無		ケズリ	ケズリ	灰白色	良好		3面まで（池）
2		B	(176)	(146)	23	37		有	縦ナデ	有	有		ケズリ・ナデ	ケズリ	灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
3		B	(234)	(172)	22		縄目	有	ナデ	有	有		ケズリ		淡橙色	良好		3面まで（池）
4		B	(144)	(140)	25	62	縄目	有		有	有		ケズリ	ケズリ	灰色	良好		3面まで（池）
図20-1		D	(198)	(140)	20	58	縄目	無	横ナデ	有	無		ケズリ		灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
2		D	(172)	(140)	25	66		無	横ナデ	有	有		ケズリ・ナデ		灰白色	良好		3面まで（池）
3		D	(171)	(140)	24	55	縄目	無	縦ナデ	有	有		ケズリ		灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
4		D	(112)		22	68		無	横ナデ	有					灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
図21-1		D	(236)	145	25		無	無	縦ナデ	有	有		ケズリ・ナデ	ケズリ	赤灰色	良好		3面まで（池）
2		D	(160)	(135)	20		縄目	有	縦ナデ	有	有			ケズリ	赤灰色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
3		D	(200)	(136)	20			無	縦ナデ	有	有		ケズリ・ナデ		灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
4		D	(165)		20			無	縦ナデ	有	無		ケズリ・ナデ	ケズリ	灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）

女瓦

図22-1	女瓦	A	(221)	(181)	25		縄目	有	ナデ		有	ナデ	ケズリ		明灰色	良好		3面まで（池）
2		A	(232)	(162)	20		縄目	有	ナデ	有	有	ナデ・糸切り痕		ケズリ	灰白色	良好		3面まで（池）
図23-1		A	(192)	(160)	20		縄目	有	ナデ	無	有	ナデ			淡橙色	良好		3面まで（池）
2		A	(212)	(133)	24		縄目	有		無	有	ナデ	ケズリ	ケズリ	灰～橙白色	良好		3面まで（池）
3		A	(199)	(172)	24		縄目	有	ナデ		有	ナデ・糸切り痕	ケズリ		灰黒色	良好		3面まで（池）
図24-1		C	(65)	(90)	20		斜格子	有		無	有	横ナデ			灰白色	良好	二次焼成受ける。	3面まで（池）
2		C	(155)	(124)	26		斜格子間に文字？	有	ナデ	無	有	縦ナデ			灰～灰黒色	良好		3面まで（池）
3		C	(176)	(134)	22		斜格子	有		無	有	横ナデ	ケズリ・ナデ	狭ケズリ	灰白色	良好	二次焼成受ける。	3面まで（池）
4		C	(158)	(180)	21		斜格子	有	無	無	有	縦ナデ		狭ケズリ	赤灰色	良好	二次焼成受ける。	3面まで（池）
図25-1		C	(120)	(83)	25		斜格子・花菱文	有			有	ナデ			灰黒色	良好		3面まで（池）
2		C	(113)	(84)	21		斜格子・宝相華文	有	ナデ		有	ナデ	ケズリ		淡橙色	軟質		3面まで（池）
3		C	(67)	(67)	22		斜格子・宝相華文	有			有	ナデ			淡黄橙色	軟質		3面まで（池）
4		C	(70)	(58)			斜格子・宝相華文	有	ナデ						灰白～淡橙色	軟質		3面まで（池）
5		C	(189)	(106)	22		斜格子	有	斜めナデ	無	有	縦ナデ	ケズリ・ナデ		灰白色	良好	燻べ焼き風	3面まで（池）
6		C	(139)	(67)	21		斜格子・宝相華文	有	ナデ		有	ナデ			淡橙～橙色	軟質		3面まで（池）
7		C	(78)	(111)	22		斜格子	有		無	有	縦ナデ		狭ケズリ	灰白色	良好	二次焼成受ける。	試掘
8		C	(160)	(145)	21		斜格子	有	無	無	有	縦ナデ	ケズリ・ナデ		灰白色		燻べ焼き風	3面まで（池）
図26-1		D1	(158)	(158)	19		斜格子・花菱	有	ナデ		有	糸切り痕	ケズリ		灰色	良好		3面まで（池）
2		D1	(155)	(147)	24		斜格子・花菱	有	ナデ	有	有		ケズリ		灰白色	良好		3面まで（池）
3		D1	(224)	(170)	22		斜格子・花菱	有	ナデ		有		ケズリ		灰色	良好		3面まで（池）
図27-1		D1	(179)	(111)	22		斜格子・花菱	有	ナデ	有	有	ナデ	ケズリ		灰白色	良好		3面まで（池）
2		D1	(137)	(88)	25		斜格子・花菱	有	ナデ	有	有	縦ナデ			黄白～灰白色	良好		3面まで（池）
3		D1	(181)	(112)	22		斜格子・花菱	有	ナデ		有	ナデ	ケズリ		灰白色	良好		3面まで（池）
4		D1	(119)	(160)	22		斜格子・花菱	有	縦ナデ	有	有				灰色	良好		3面まで（池）

図28-1		D2	(134)	(145)	22		斜格子	有	ナデ		有	ナデ		ケズリ	灰黒～赤褐色	良好	二次焼成受ける	3面まで（池）
2		D2	(153)	(142)	21		斜格子	有	ナデ		有	ナデ		ケズリ	灰～茶灰色	良好		3面まで（池）
3		D2	(190)	(202)	23		斜格子	有	ナデ		有	ナデ		ケズリ	茶灰色	良好		3面まで（池）
図29-1		D2	(225)	(135)	21		斜格子	有	ナデ		有	ナデ		ケズリ	灰色	良好		3面まで（池）
2		D2	(124)	(245)	26		斜格子	有			有	ナデ		ケズリ	灰黒色	良好		3面まで（池）
3		D2	(190)	(202)	23		斜格子	有	ナデ		有	ナデ		ケズリ	茶灰色	良好		3面まで（池）
図30-1		D3	(126)	(110)	26		縄目	有	横ナデ	有	有		ケズリ		灰色	良好		3面まで（池）
2		E	(225)	(106)	17		斜格子	有	ナデ		有	ナデ			淡橙色	良好		試掘
3		E	(152)	(157)	20		斜格子	有	ナデ		有	ナデ			灰白色	良好		3面まで（池）
4		E	(197)	(170)	21		斜格子	有	ナデ		有・多	ナデ			明灰色	良好		3面まで（池）
図31-1		E	(125)	(125)	22		斜格子	有			有		ケズリ	ケズリ	赤灰色	良好	二次焼成受ける	3面まで（池）
2		E	(112)	(126)	21		斜格子	有	ナデ		有	ナデ	ケズリ	ケズリ	灰黒～淡橙色	良好	二次焼成受ける	3面まで（池）
3		E	(61)	(40)	22		斜格子	有			有・多	ナデ		ケズリ	淡赤褐色	良好	二次焼成受ける	2面まで南側
4		E	(155)	(62)	24			有			有・多	ナデ			明灰色	良好	広端部にメ印	2面まで南側
5		E	(145)	(121)	20			有	ナデ	消	有・多	ナデ	ケズリ	ケズリ	淡橙色	良好		3面まで（池）
6		E	(162)	(108)	19		斜格子	有	ナデ		有	縦ナデ	ケズリ		赤灰色	良好	二次焼成受ける	3面まで（池）

鬼瓦

図版番号	種類	胎土	全長	幅	厚さ	表面			裏面	色調	焼成	備考	出土地点
						珠文帯の構成	整形	珠文帯径					
図32-1	鬼瓦	男A	(193)	(146)	(34)					灰白～灰色	良好		3面まで
2		男A	(99)	(158)	40		面との間に陰刻線で区別	30	切り出し痕	灰黒色	良好	右上部	3面まで
3		男B	(107)	(118)	37	珠文帯の外側に突帯		28	切り出し痕	灰黒、芯は灰白色	良好		試掘
4		男B	(148)	(134)	30	〃	〃	30	ナデ	灰黒～赤橙色	良好		試掘
5		男B	(138)	(189)	36	〃	〃	32	ナデ	灰黒色、芯は灰白色	良好		試掘
6		男B	(73)	(104)	27	〃	〃	27	ナデ	灰白～灰色	良好		試掘
7		男C	(119)	(95)	25	〃	〃	33	ナデ	灰黒～灰白	良好		3面まで
8		男C	(152)	(102)	31	〃	〃	30	ナデ	灰黒～灰白色	良好		3面まで

瓦分類対照表

男瓦

男瓦A … 端部は丁寧な箆ケズリ。胎土は灰白色～明灰色。きめ細かく砂っぽい。マーブル状に縞の入るものもある。
男瓦B … 灰色～明灰色。胎土に白色粒多い。砂が多く、粗いものと少ないものに分かれる。
男瓦C … 玉縁部の段差が小さい。胎土は茶灰色～灰色で、粗く、砂が多い。
男瓦D … 鎌倉系。表面は燻べ焼き風で灰黒色～灰色を呈するものが多い。砂が多いものと少ないものがある。

女瓦

女瓦A … 凸面縄目叩き。胎土は灰色、砂粒が少なく、きめ細やか。軟質、硬質がある。
女瓦C … 凸面斜格子叩き。胎土は明灰色～灰色。砂っぽく、きめ細やか。
女瓦D1… 凸面斜格子、花菱文叩き。胎土は灰白～明灰色で精良。砂粒をほとんど含まない。
女瓦D2… 凸面斜格子叩きで各種有り。胎土は灰色で、白色粒、砂が多い。よく焼き締まる。
女瓦D3… 凹凸両面に布目痕。　凸面に縄目。凹面に木口状工具で横方向にナデ。胎土は灰色で、砂が多く、粗い。
女瓦E … 鎌倉系。凹凸両面に細かい黒色の離れ砂が顕著。胎土は灰色～灰黒色で、粗く、白色の軟質の礫が帯状に混じる。

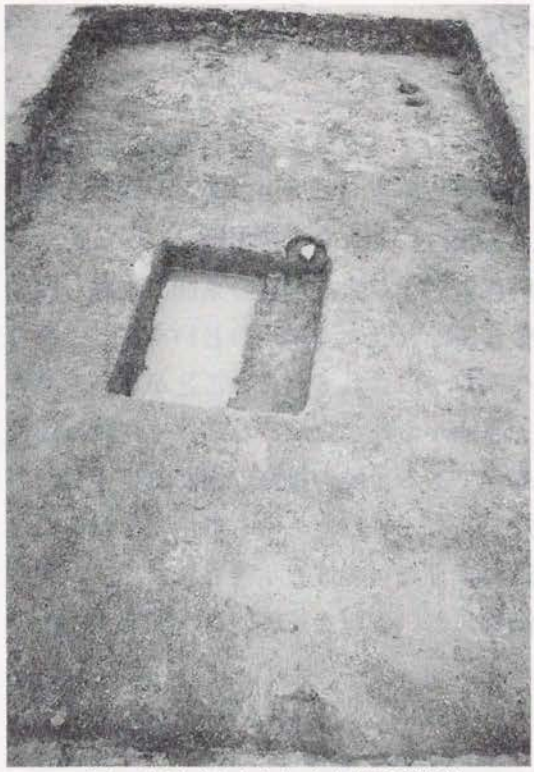
第5章　まとめ

調査地点は浄妙寺旧境内に位置し、西側に鎌倉時代以前より存在している杉本寺が、背後の丘陵には中世城郭の杉本城が存在している。東側には浄妙寺がある。南側を東西方向に滑川が流れ、同じく滑川の河岸段丘に沿って六浦道が通っている。今回の調査の大きな成果は、これまで検出例のなかった浄妙寺地区で初めて池跡を確認したことである。この地域は鎌倉時代前期より大倉幕府の東側に位置し開けていたと考えられる。また南北朝・室町時代にかけて公方屋敷が置かれ、六浦道沿いということもあり栄えていたと考えられる。しかしその実態は調査の件数に比べ明らかにされていないことが多い。調査で確認した池の南岸と思われる遺構は、平坦地の北側に大きく水面があり、更にこれに伴う建物（屋敷もしくは寺）が北側の山沿いに存在していたことを伺わせるものである。池の補修に使われ出土した多くの瓦はこれを期待させるものである。しかしその多くが細片であり、焼けたものも多く見られることから想定される建物に使用されたものか、あるいは他から運ばれてきた可能性も示唆されよう。いずれにしても一部ではあるが池跡の発見は、今後この周辺地区の調査において更なる広がりを期待するものである。

参考文献

②浄明寺三丁目６番３外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12-２』1994
③浄明寺字宅間562番33『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』「浄明寺字宅間562番33地点」1992
④浄明寺三丁目16番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18-２』「浄明寺三丁目16番１地点」2002
⑤浄明寺一丁目699番外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11-２』「浄明寺一丁目699番外地点」1995
⑰二階堂字杉本912番１『杉本寺周辺遺跡』「二階堂字杉本912番１ほか発掘調査報告」2002

図版 1



1 面　全景（南から）中央部は試掘拡

2 面　全景（南から）

2面　瓦検出状況

pit1～4（右から）土壙（北から）

1 面、2 面全景と瓦出土状況

2面　南東から

3面　溝状遺構（矢印方向から）

3面　全景（南から）

調査区西壁土層断面

3面全景・西壁土層断面

図版 3

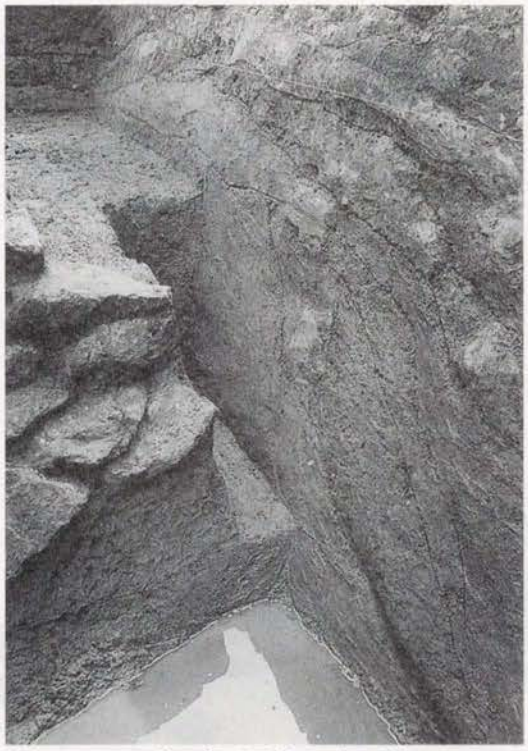
最終トレンチ（南から）

最終トレンチ（北から）

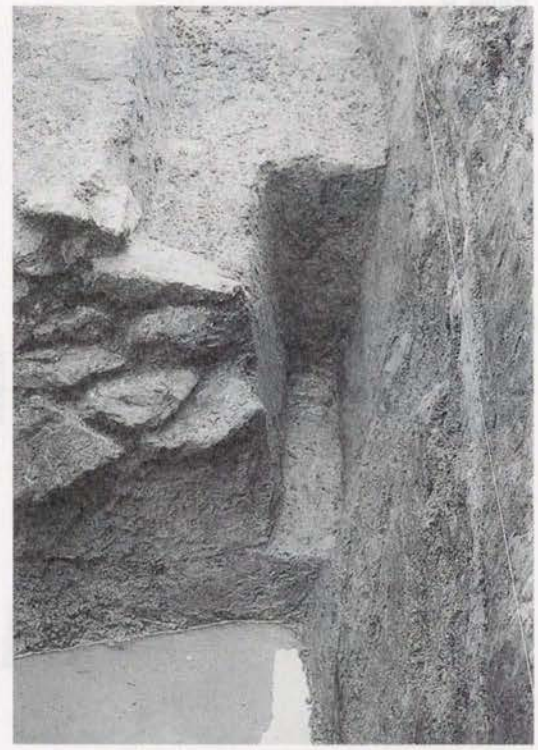
最終トレンチ内石積み検出状況

調査区 西壁土層断面（最終トレンチ後）

最終トレンチ



石積み部土層断面（西壁）



石積み部 サブトレンチ調査状況

杉本寺から調査地点の南辺、宅間ヶ谷を臨む

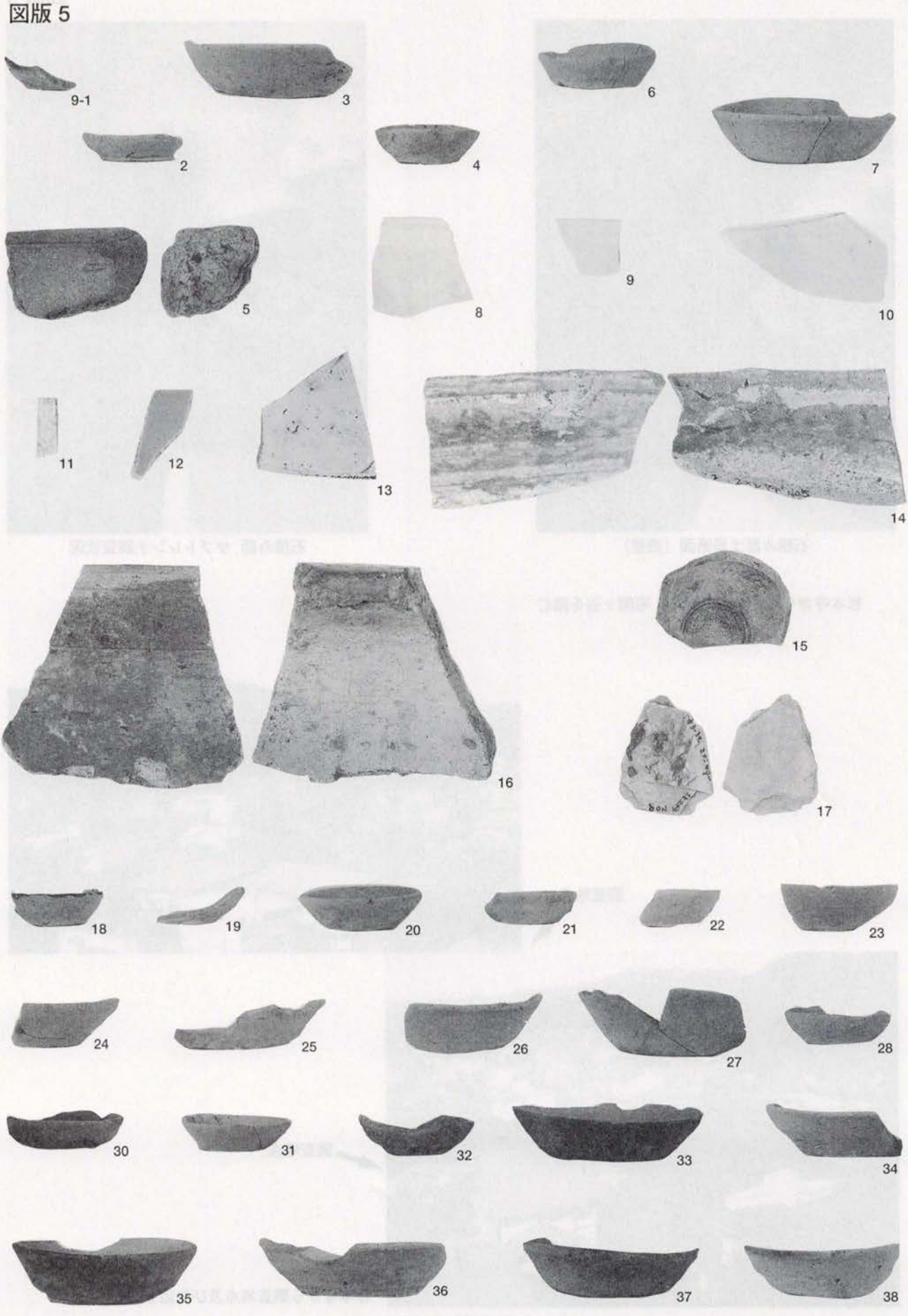
調査地点

調査地点

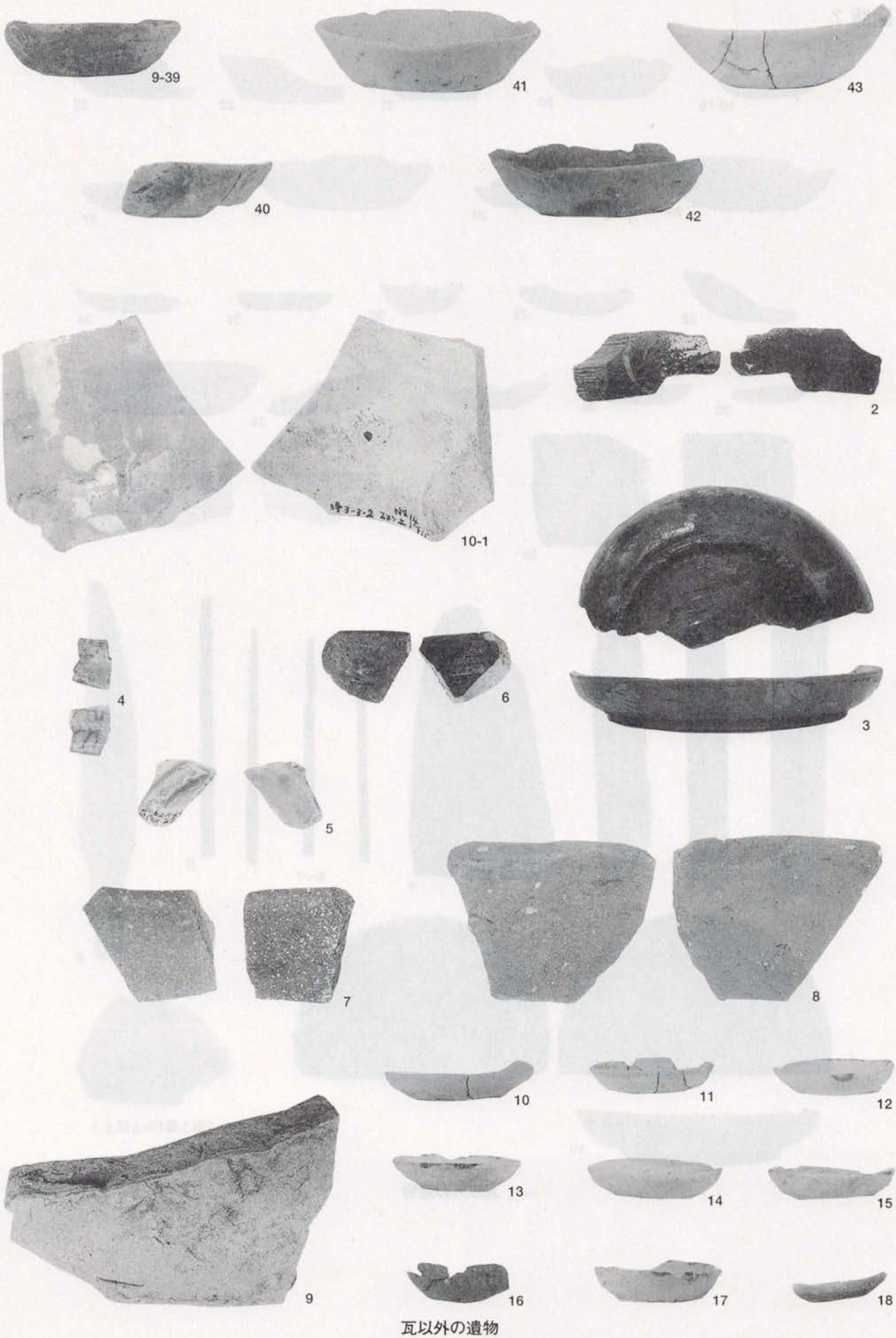
杉本寺から調査地点及び北辺を臨む

石積み部と遺跡近景

図版 5

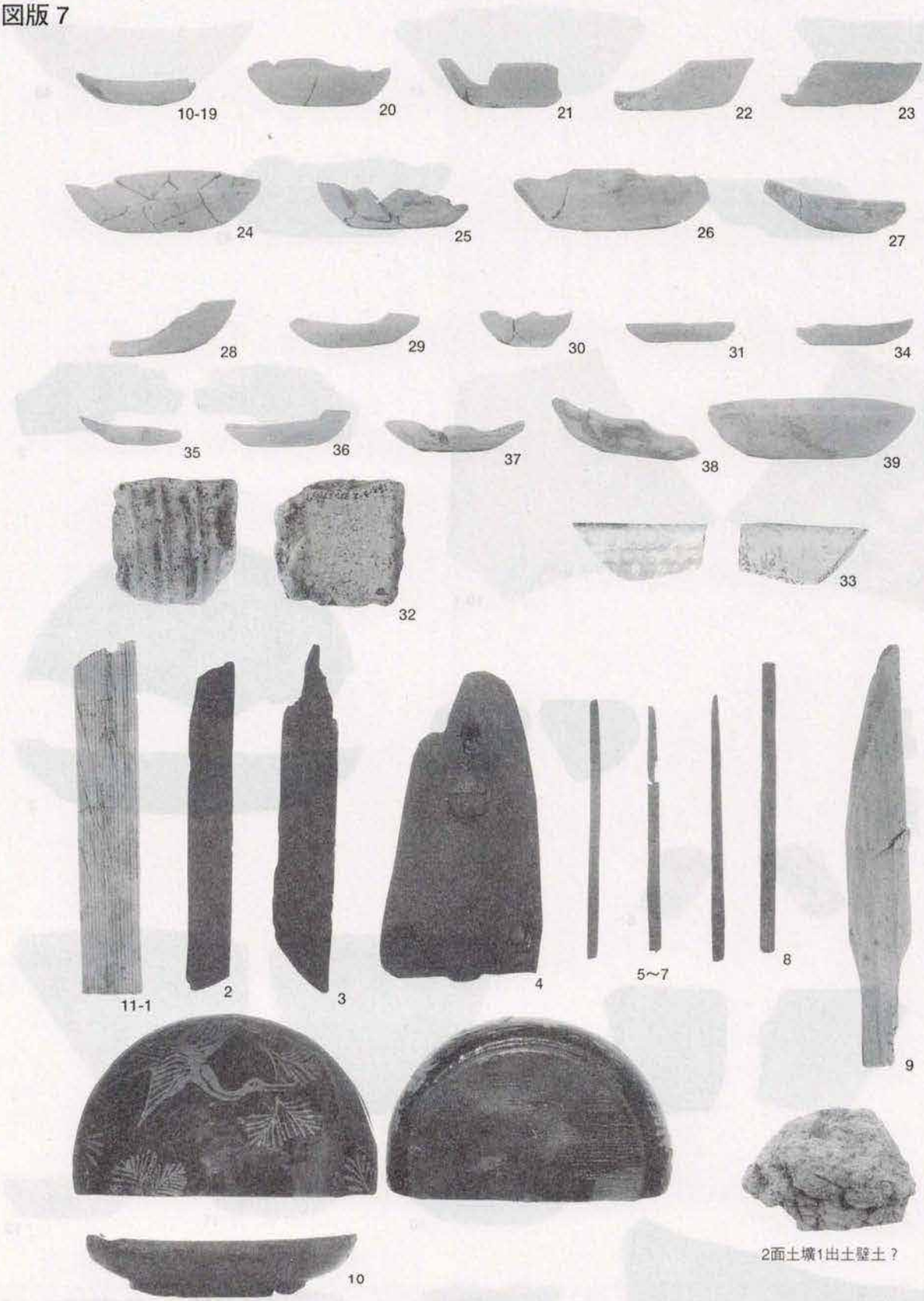

9-1
3
2
4
6
7
5
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
30
31
32
33
34
35
36
37
38

瓦以外の遺物

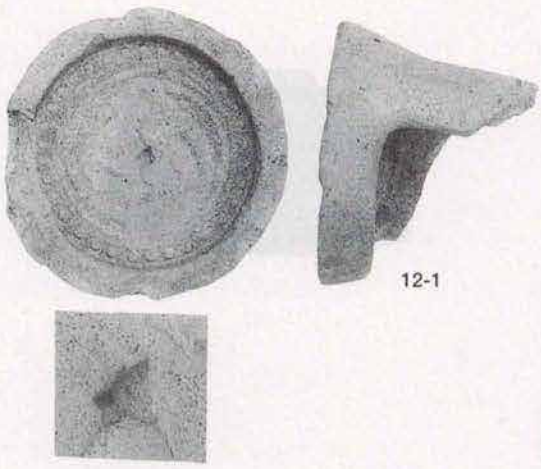


瓦以外の遺物

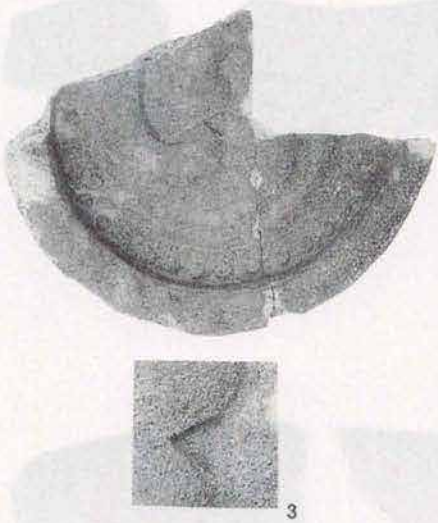
図版 7


10-19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
34
35
36
37
38
39
32
33
11-1
2
3
4
5～7
8
9
10
2面土壙1出土壁土？

瓦以外の遺物


12-1

2


3

4

5

6

7

8

9

10

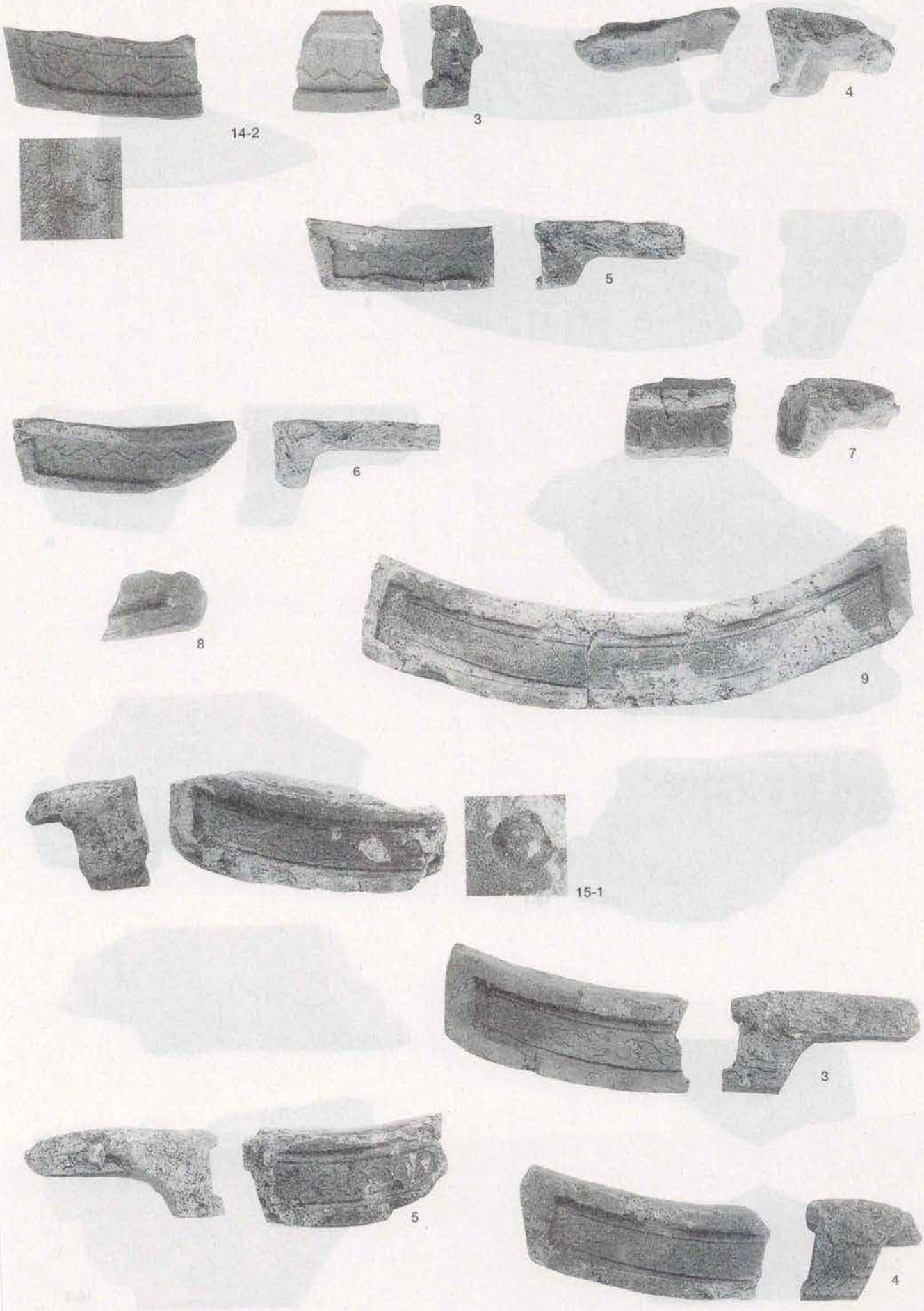
11

12

鐙瓦（軒丸瓦）巴文

図版 9

宇瓦（軒平瓦）剣頭文



宇瓦（軒平瓦）剣頭分・唐草文

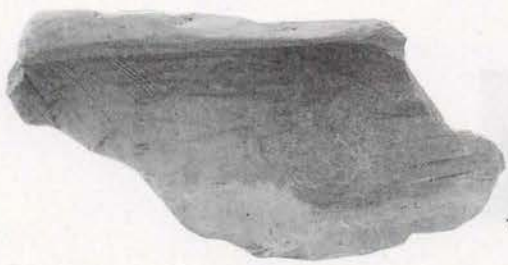
図版11

15-6

7

8

9



16-1

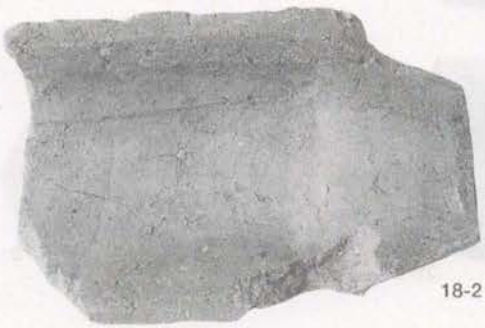
16-2

宇瓦（軒平瓦）唐草文・男瓦（丸瓦）A・C類

17-2

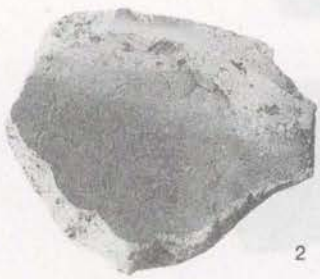
4

5



18-2

19-1



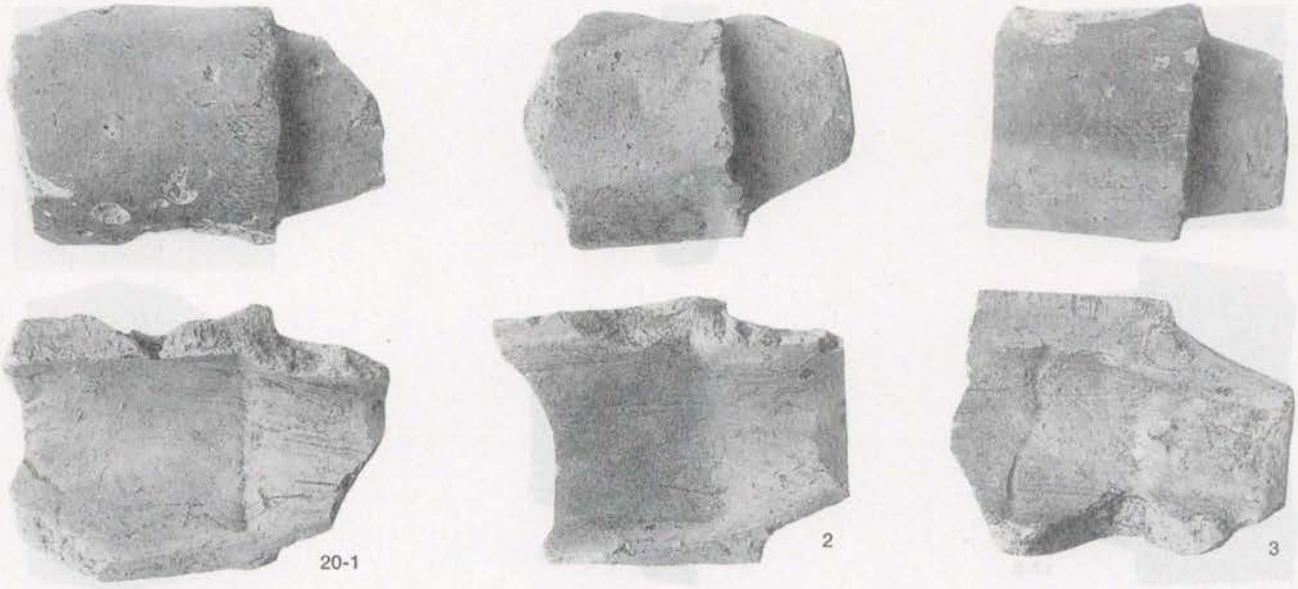
2

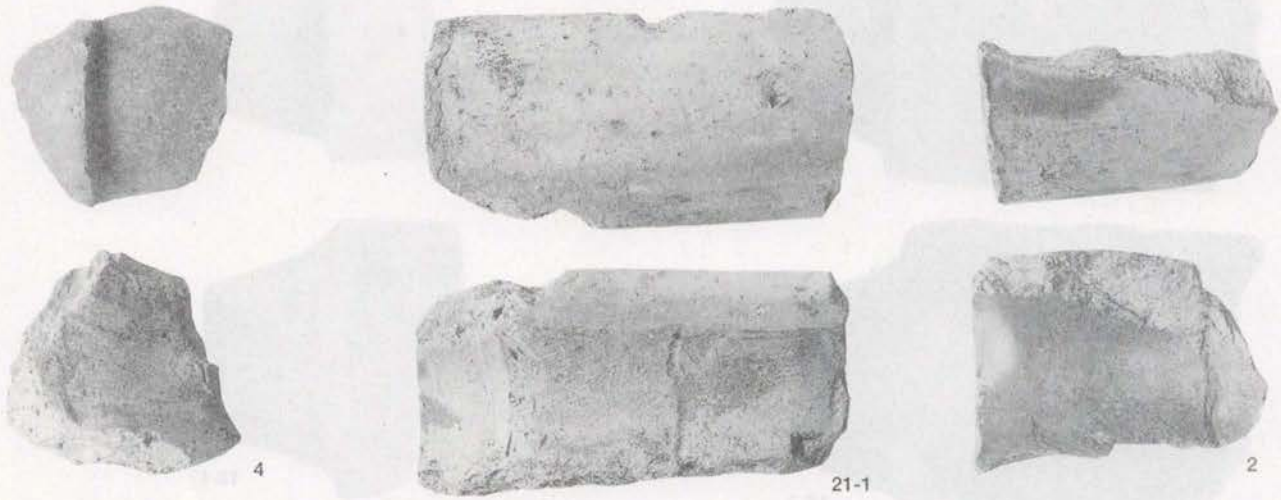
3

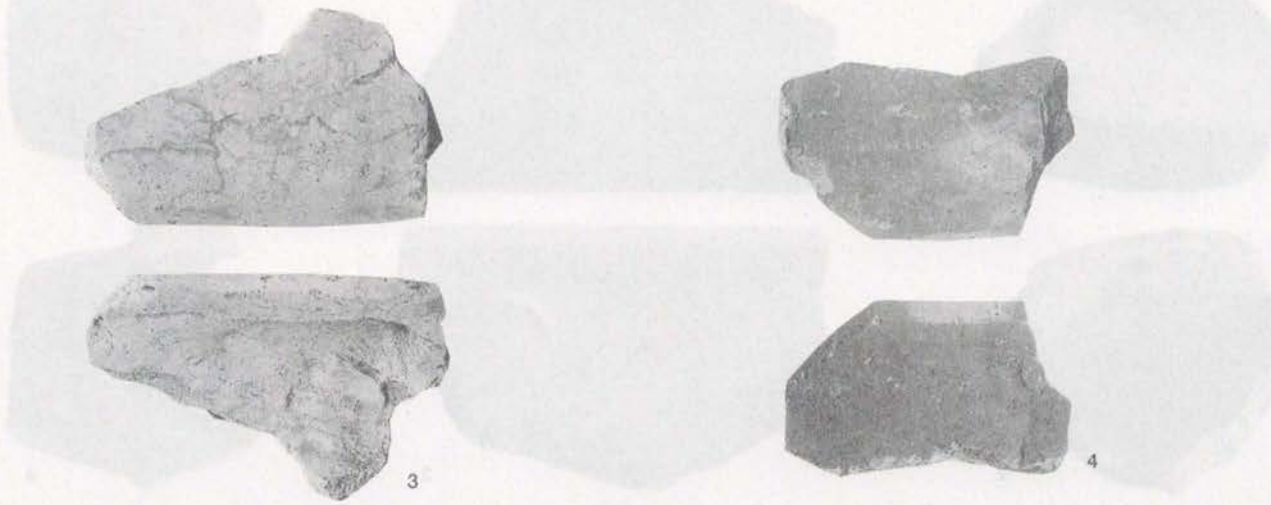
4

男瓦（丸瓦）B・D類

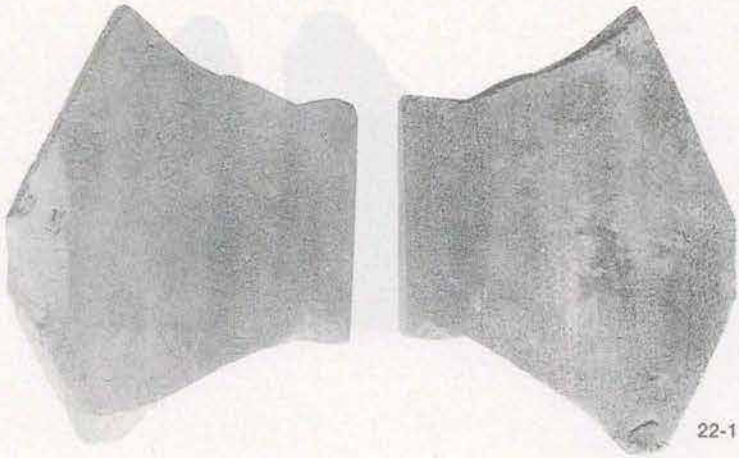
図版13



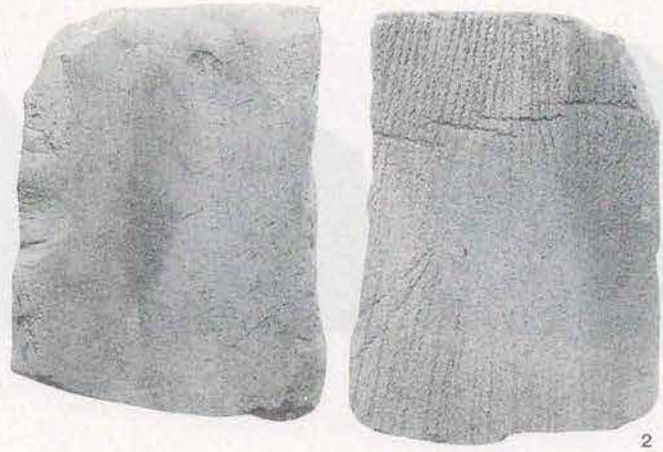




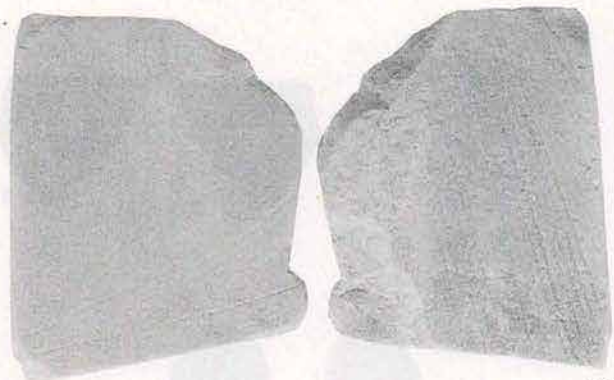
男瓦（丸瓦）D類



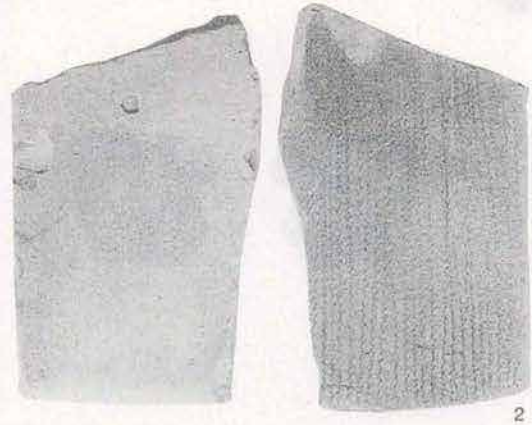
22-1



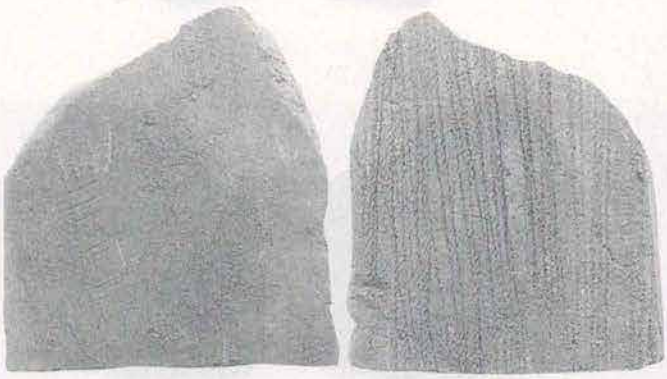
2



23-1



2

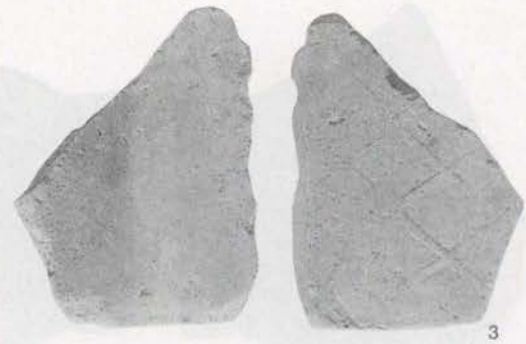


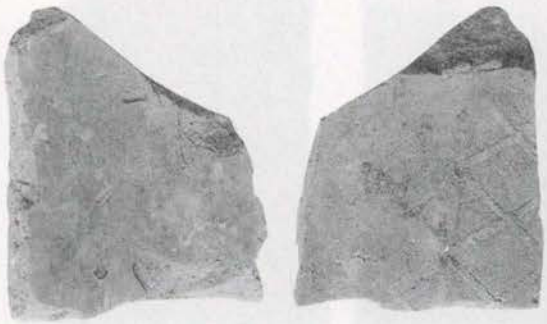
3

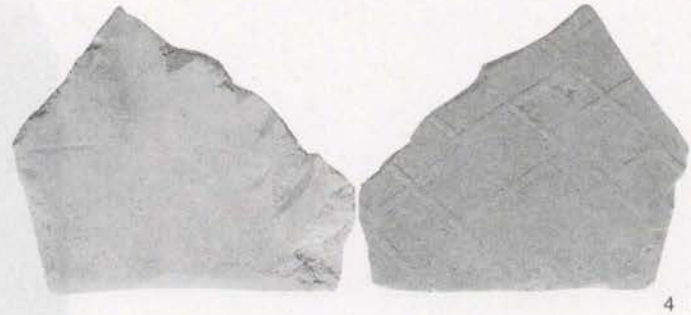
女瓦（平瓦）A類

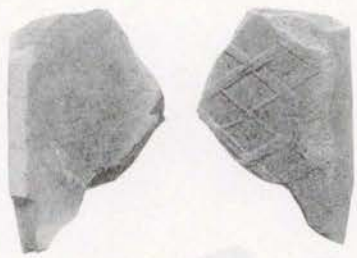
図版15

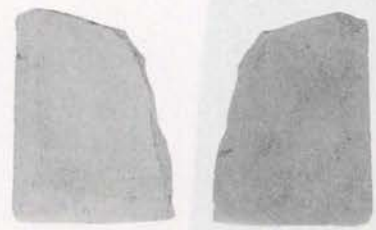
24-1


3

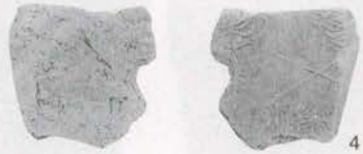



4




2

3

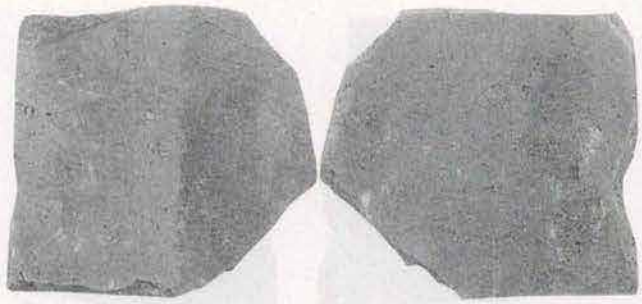

4

6

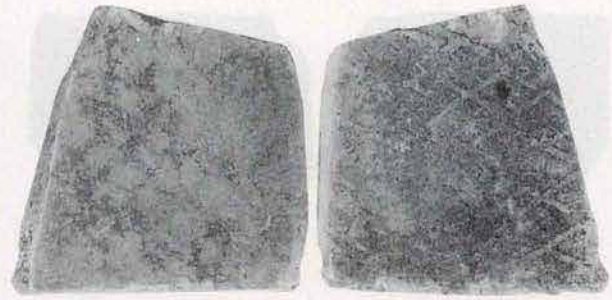
5

8

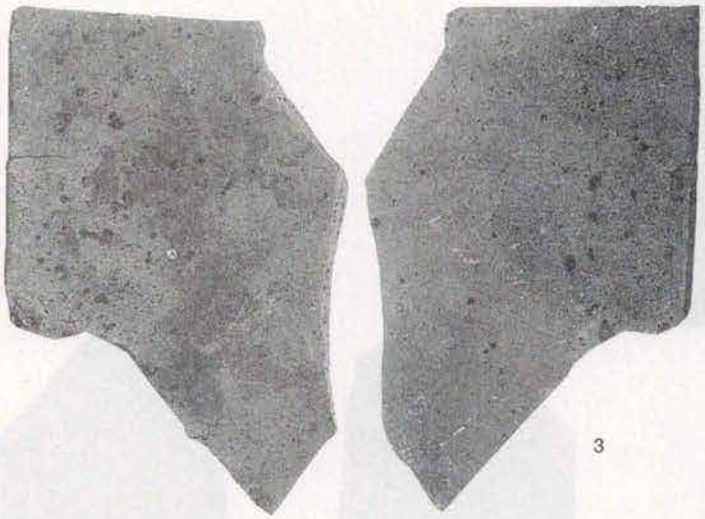
女瓦（平瓦）C類



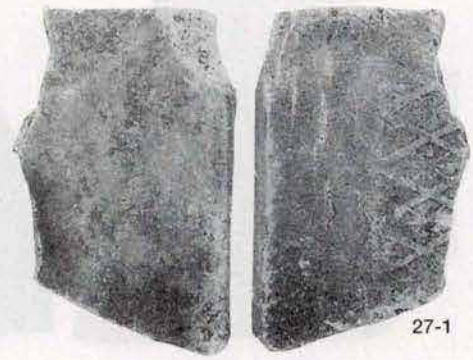
26-1



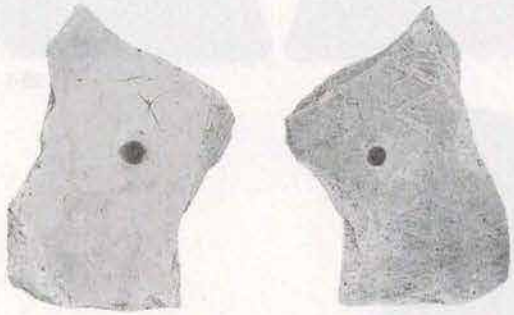
2



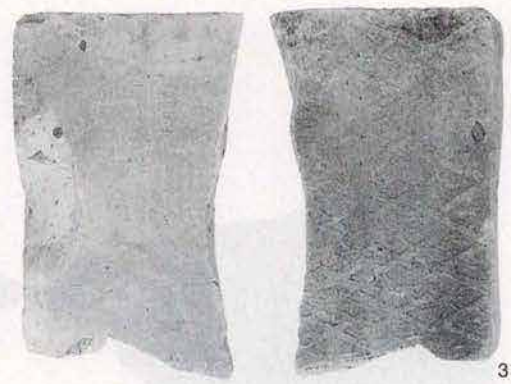
3



27-1



2

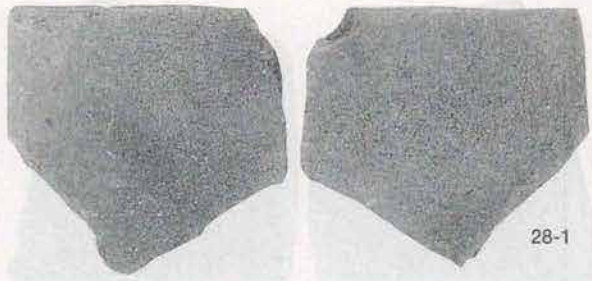


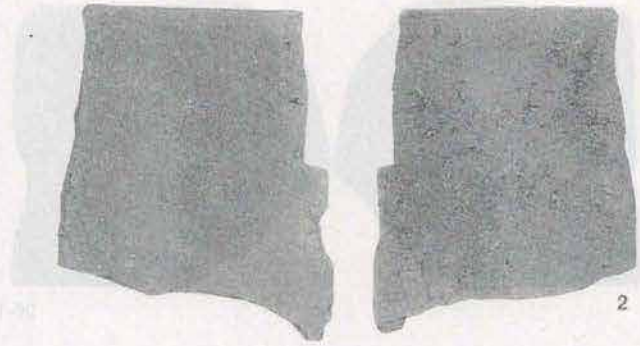
3

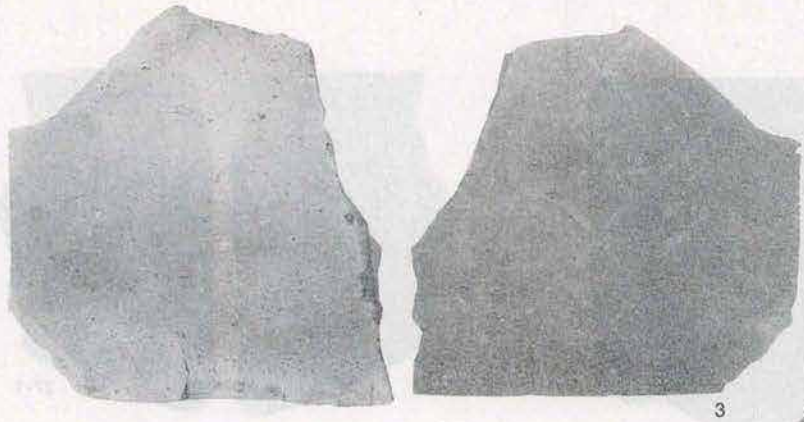
4

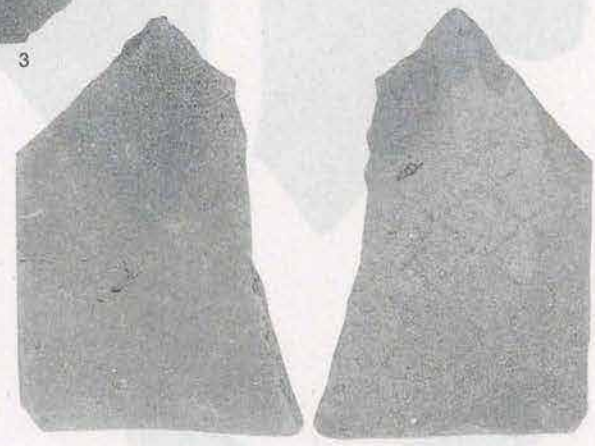
女瓦（平瓦）D-1類

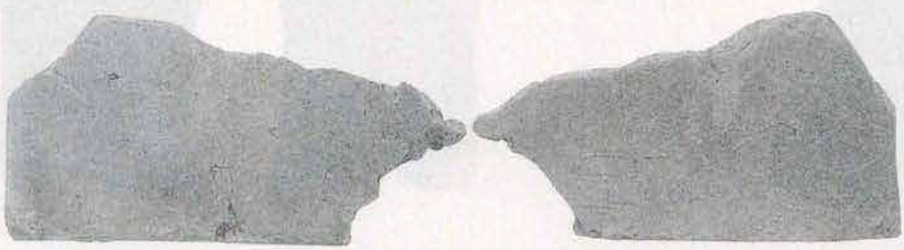
図版17

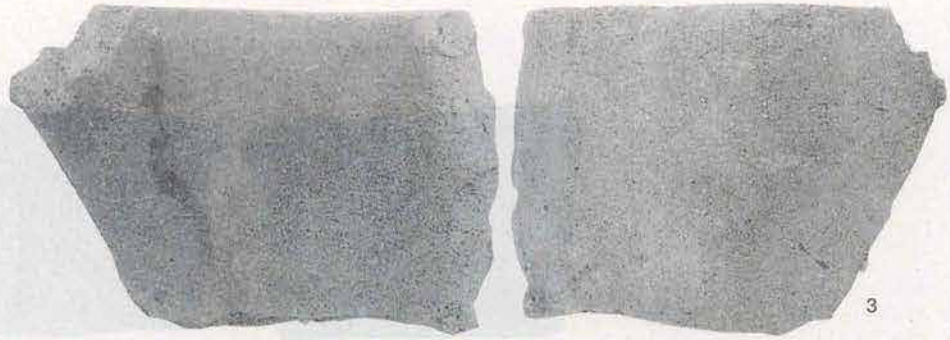

28-1


2

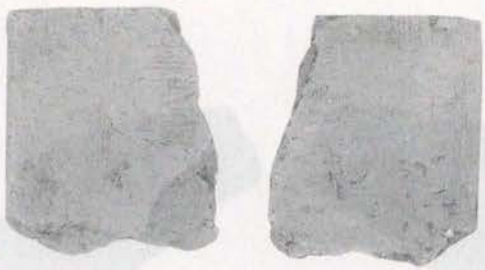

3


29-1

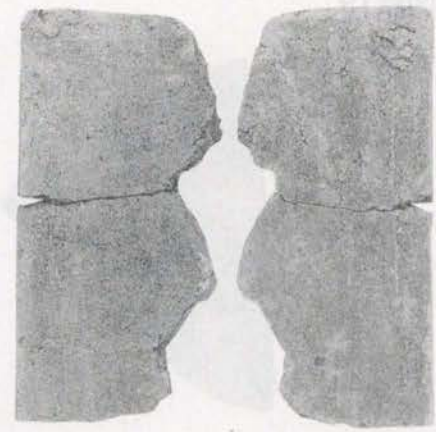

2


3

女瓦（平瓦）D-2類



30-1



2

3

4

31-3

4

1

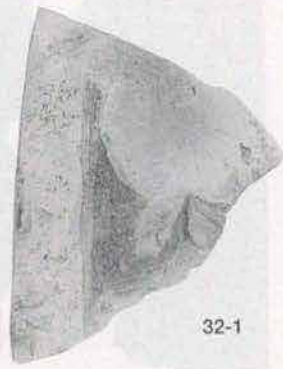
2

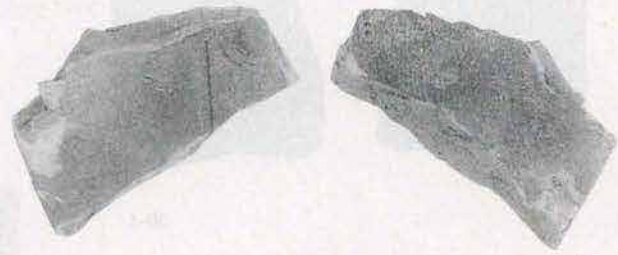
5

6

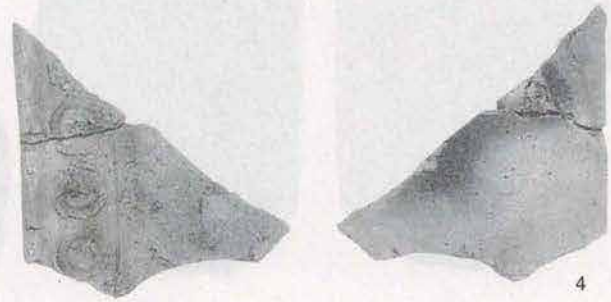
女瓦（平瓦）E類

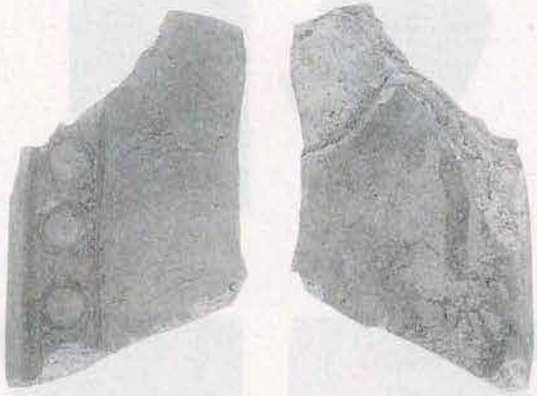
図版19


32-1


2

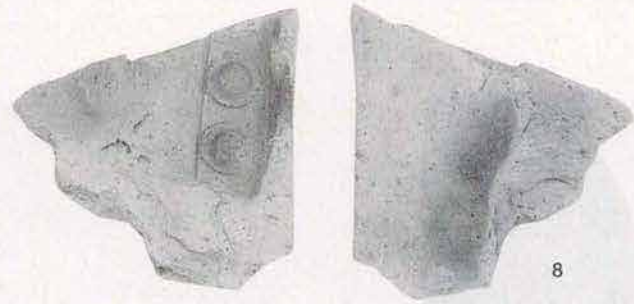
3


4


5

6

7


8

鬼瓦

報国寺遺跡（ほうこくじいせき）　(No.306)

浄明寺二丁目474番11外地点

例　言

1. 本報は、報国寺遺跡（県遺跡台帳No.306）の遺跡内に所在する鎌倉市浄明寺二丁目474番11外地点における個人専用住宅（杭基礎構造）建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成15年６月21日から同年７月25日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
   調査担当者：原　廣志
   調　査　員：須佐直子・須佐仁和・早坂伸市・中川建二・栂岡渓音
   調査補助員：銘苅春也、野崎美帆・山口正紀（鶴見大学生）、橋本和之・原　考史（国士舘大学生）
   協力機関名：鎌倉考古学研究所・東国歴史考古学研究所
4. 本報の執筆は、第1～3章まで山口が執筆、原が監修し、第4章については調査員協議のもと山口が稿を草した。
   挿図・写真図版の作成には、須佐（直）・野崎・山口が行い、遺物観察表を山口が作成した。
5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を原・須佐（仁）、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物、図面類、写真類などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
   ・挿図縮尺　全測図：１／50
   　遺構図：１／40
   　遺物図：１／３
   ・遺 構 図　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している。
   ・遺 物 図　－・－・－は釉薬範囲を示す。黒塗は燈明皿付着の油煙煤、漆器の朱漆文様を表現する。手捏ねかわらけ底径の法量は外底指頭痕と口縁部との境、稜部の数値を表している。
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の多くの方々からご助言とご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
   秋山哲雄・大三輪龍彦・加納克己・河野眞知郎・菊川　泉・菊川英政・五味文彦・佐藤仁彦・宗臺秀明・宗臺富貴子・田代郁夫・浜野浩美・福田　誠・松尾宣方・馬淵和雄

目　次

本文目次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……244
1. 遺跡の位置……244
2. 歴史的環境……244

第２章　調査の概要……247
1. 調査の経緯と経過……247
2. 測量軸の設定……247
3. 層序と生活面……249

第３章　検出遺構と出土遺物……252
1. 第１面の遺構・遺物……252
2. 第２面の遺構・遺物……255
3. 第３面の遺構・遺物……257
4. 第４面の遺構・遺物……263
5. 第５面の遺構・遺物……268

第４章　まとめ……278

挿図目次

図１　調査地点と周辺遺跡……243
図２　報国寺境内絵図……245
図３　測量基準点設定図・グリット配置図……248
図４　調査区西壁土層堆積図……249
図５　第１・２面全測図……251
図６　第１面土壙・溝各遺構……253
図７　第１面各遺構・第1面上出土遺物……254
図８　第２面土壙・溝各遺構……255
図９　第２面各遺構・
　第１面下～第２面上出土遺物……256
図10　第３・４面全測図……258
図11　第３面建物１……259
図12　第３面溝１……260
図13　第３面建物1出土遺物……261
図14　第３面各遺構・
　第２面下～第３面上出土遺物……262
図15　第４面土壙・柱穴各遺構……264
図16　第４面土壙・柱穴出土遺物……265
図17　第３面下～第4面上出土遺物……266
図18　第５面全測図……268
図19　第５面土壙・柱穴各遺構……269
図20　第５面各遺構・
　第４面下～第５面上出土遺物……270

表目次

表１　遺物観察表（1）……272
表２　遺物観察表（2）……273
表３　遺物観察表（3）……274
表４　遺物観察表（4）……275
表５　遺物観察表（5）……276
表６　遺物観察表（6）……277

図 版 目 次

図版１　ａ．第１面全景（東から）　ｂ．土壙１（南から）　ｃ．土壙２（西から）　ｄ．溝１（西から）……279
図版２　ａ．第２面全景（東から）　ｂ．溝１（西から）　ｃ．溝１　かわらけ出土状況（北から）
ｄ．２面上　青磁天目茶碗出土状況（東から）……280
図版３　ａ．第３面全景（東から）　ｂ．建物1検出状況（東から）……281
図版４　ａ．第３面　建物１柱穴列（西から）　ｂ．建物１　柱穴㋑（南から）
ｃ．建物1　柱穴㋺㋩（南から）　ｄ．建物１　柱穴②（南から）
ｅ．建物1　柱穴④（南から）　ｆ．建物内　瀬戸入子出土状況（東から）……282
図版５　ａ．第３面　溝１（東／南から）　ｂ．溝１　石積み状況（南から）……283
図版６　ａ．第４面全景（東から）　ｂ．建物１北辺石積み状況（東／南から）……284
図版７　ａ．第５面全景（東から）　ｂ．網代板壁検出状況（北から）　ｃ．調査区西壁土層堆積……285
図版８　ａ．第１面各遺構・１面上　ｂ．第２面各遺構・第１面下～第２面上
ｃ．２面上出土　青磁天目茶碗……286
図版９　ａ．第３面建物１　ｂ．第３面各遺構第２面下～第３面上……287
図版10　ａ．第４面土壙・柱穴　ｂ．第３面下～第４面上
ｃ．第５面各遺構・第４面下～第５面上……288

1A. 本調査地点
1B. 報国寺遺跡（浄妙寺二丁目474番2地点）
2．報国寺境内（浄妙寺字宅間533番地点）
3．報国寺境内やぐら
4．宅間ヶ谷やぐら群（浄妙寺520番地点）
5．報国寺遺跡内やぐら（浄妙寺字宅間520番1外地点）
6．報国寺遺跡（浄妙寺二丁目520番1地点）
7．宅間谷西第2やぐら群Ⅱ（浄妙寺二丁目519番1地点）
8．宅間谷西第2やぐら群（浄妙寺二丁目519番1地点）
9．未報告
10．未報告
11．浄妙寺旧境内遺跡（浄妙寺三丁目115番2地点）
12．浄妙寺稲取小路遺跡

図１　調査地点と周辺遺跡

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

本調査地点は鎌倉市の東部、鎌倉市浄明寺二丁目474番11外に所在する（図１-1A）。浄明寺郵便局付近から南に入り込む谷戸は宅間ヶ谷と呼ばれ、JR横須賀線鎌倉駅から東方約1.8㎞のところ、現在谷戸の入り口付近にある報国寺に近接した位置にある。宅間ヶ谷は滑川の中流域から南に細長く入り込んでおり、周囲を90～100m程の高い丘陵が囲む。南側には逗子市との境をなす丘陵があり、北側は谷を北流する宅間川が滑川に合流し、対岸には浄明寺や杉本城のある大倉山丘陵がある。

２．歴史的環境

宅間ヶ谷は浄明寺二丁目に在り、詫間・琢磨・沢間ともいい、もと鎌倉郡浄明寺村の小字の呼称である。元暦元年（1184）正月、源頼朝の命で京都から下向した絵師宅間為久は聖観音像を描き、翌年には勝長寿院の壁画を制作するなど、鎌倉幕府と深いつながりをもった。このため為久は子の為行と共に鎌倉宅磨派の祖とみなされ、派の一系が南北朝から室町時代にかけて活躍した。報国寺はかつて宅間法眼作の迦葉像がまつられていたことから宅間寺とも呼ばれていた。現在では竹庭が整備され「竹の寺」として有名である。

報国寺は鎌倉市浄明寺宅間ヶ谷に在り、山号を功臣山といい、正式には報国寺建忠禅寺、臨済宗建長寺派に属する。通説では開基は足利家時、開山は天岸慧広で仏乗禅師と謚されている。足利家時は尊氏の祖父にあたり、報国寺殿と呼ばれていた。当寺は建武元（1334）年の開創と伝えるが、『足利系図』には「母修理大夫重房女、文保元年六月二十五日切腹、三十五歳、号報国寺殿、法名義恩、贈従三位」とあり、家時は文保元（1317）年に没したという記録もある上（註１）、家時の開基説は成り立たない。さらに寺蔵の『報国寺記』に上杉重兼が開いたと旨記している点から、『鎌倉市史』では開基は上杉重兼であると推測されている。天岸慧広は以前より足利家時の帰依を受けており、すでに家時の開いた一寺が在ったものを上杉重兼がさらに拡張再建したものかとも思われる。準開山は虎渓元義。開山の塔所休耕庵や万休庵などの塔頭があったものの、今は廃絶され、現在の仏殿・庫裡などは新しいものである。

また、当寺には、開基足利家時の他に足利義久の墓がある。義久は鎌倉公方持氏の嫡男であり、永享十一（1439）年、京都の幕府勢との戦いに破れ、持氏は永安寺で、義久は当寺において自尽している。また、『関東兵乱記』によると「永享十一年二月持氏御自害、若君義久十歳にならせ給ひけるを奉討べき由聞えければ、報国寺に御座せしが人々馳せ参りて此由申しければ仏前に焼香なされ念仏十返唱えさせ給ひ、御守刀引抜き左の脇に突立て引廻しうつっぷきに伏し給う」（註２）とあり、鎌倉公方として四代九十年にわたり、鎌倉を中心として勢威を揮った関東の足利氏終焉の地でもある。

報国寺の境内は現在では谷の開口部付近にあるが、『新編相模国風土記稿』（註３）によれば当寺の境域について幕末頃は広大なものであったらしく、「東西凡そ四・五町、南北十七・八町許りにして坤方の絹張山も境内に属せり」とあり、堂塔伽藍も整備され、その偉容を誇っていたようである。また、寛永十（1633）年、沢庵禅師が当寺を訪れた頃は『鎌倉遊覧記』にあるように、「爰（ここ）浄妙寺を出でてむかうの山に報国寺と云ふあり、総門に漸入佳境といふ四字を題す。是より踏み入れば岩のめぐりたる影に、佛殿方丈あり、さばかりのあとなり」とその当時の感慨を述べている（註４）。寛政三

※『鎌倉の古絵図Ⅰ』「鎌倉国宝館図録 第十五集」より転載
古絵図は寛政３年（1791）に作成

図２　報国寺境内絵図

(1791) 年の報国寺境内絵図には、報国寺の伽藍配置と境内が示されている（図２）（註５）。絵図には滑川に架かる橋（華の橋）を渡れば、すぐに表門に達し境内に入ることができる。『鎌倉市史社寺編』では境内には開山の休耕庵や万休庵の二庵しか伝えるところがないとされているが、ここでは法泉軒・東禅院・浄蓮庵・慈照院・慈眼院の五庵が描かれている。さらに境内奥から山越に入る道は、逗子市久木の岩殿寺に通じている巡礼道が描かれる（現在は宅造で切断されてしまっている）。つまり宅間ヶ谷全体がかつて報国寺境内であったことが窺える。

次に調査地点周辺の調査についても若干触れておきたい。図１で示した通り、谷戸内の調査はあまり行われておらず、最初に調査されたのは地点２の報国寺座禅堂建設に伴う発掘調査で本堂北東側の旧庫裡跡であった。調査成果では鎌倉時代末から昭和初期と５期に至る、凝灰岩切石による石垣列が検出され、石垣構築による境内造作方法がとられていたことが判明した（註６）。谷戸内の調査は現在までやぐら調査が行われ、地点３～８において調査された。地点1Bは今年度報告分で本調査地点調査終了後に調査した地点である。また滑川を挟んだ北側には稲荷山浄明寺があり、県遺跡台帳（No.408）に指定されている浄妙寺旧境内遺跡がある。地点12では13～15世紀にかけての掘立柱建物・溝・塀などが検出され（註７）、地点13では六浦道の側溝と思われる溝や、掘立柱建物や井戸などで構成された武家屋敷跡と思われる遺構・遺物が検出された。

註
(1)『鎌倉市史社寺編』より引用した。
(2) 塙保己一編　1957「関東兵乱記」『続群書類従』第20輯上
(3) 相武史料刊行会編　1930『新編相模国風土記稿』
(4) 日本図書センター　2001「鎌倉遊覧記」『沢庵和尚全集』第３巻
(5) 三浦勝男　1992「鎌倉の古絵図Ⅰ」『鎌倉国宝館図録　第十五集』　鎌倉市教育委員会
(6) 松尾宣方　1983「報国寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 昭和46年度～52年度』　鎌倉市教育委員会
(7) 松山敬一朗　1999「浄妙寺旧境内遺跡（No.408）－浄明寺三丁目115番2地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　平成10年度発掘調査報告（第２分冊）』　鎌倉市教育委員会

【引用参考文献】

貫　達人ほか　1959『鎌倉市史社寺編』吉川弘文館.
鈴木庸一郎　2002「平成13年度鎌倉市急傾斜地崩壊対策工事（浄明寺宅間Ｂ地区）に伴う発掘調査」『宅間谷西第２やぐら群Ⅱ』かながわ調査報告137（財）かながわ考古学財団.
宍戸信悟ほか　2001「平成12年度鎌倉市急傾斜地崩壊対策工事（浄明寺宅間Ｂ地区）に伴う発掘調査」『宅間谷西第２やぐら群』かながわ調査報告114（財）かながわ考古学財団.
宗臺秀明ほか　1999「報国寺遺跡」『東国歴史考古学研究所報告第22集　中世石窟遺構の調査」』東国歴史考古学研究所.
田代郁夫　1988『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書－昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査－』報国寺境内やぐら発掘調査団・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団.
田代郁夫ほか　1994「報国寺境内遺跡内やぐら発掘調査報告書」『東国歴史考古学研究所報告第1集』東国歴史考古学研究所.
継　実　1991『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう発掘調査報告書－杉本城跡内やぐら・宅間ヶ谷やぐら群－』杉本城跡内やぐら発掘調査団・宅間ヶ谷やぐら群発掘調査団.
三浦勝男　2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版.

第２章　調査の概要

１．調査の経緯と経過

本調査地点は、報国寺遺跡（県遺跡台帳No.306）の東側一角に位置しており、県道金沢鎌倉線から滑川に架かる華の橋を渡り、南へ800m程入った東側に位置した鎌倉市浄明寺二丁目474番11外に所在している。今回の現地調査に先立ち、個人専用住宅の建設工事についての事前相談があり、基礎工事にともない表層地盤の改良を含んで実施する計画があったため、工事の実施により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれが予想された。このため確認調査を実施したところ現地表下70㎝以下に中世遺物包含層及び中世遺構面が存在することが明らかになった。これにより当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、事業者との協議を経て文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との調査実施による工程・方法調整の協議及び発掘調査の準備が整った後、平成15年６月23日から１ヵ月の予定で調査面積30.00㎡を対象として発掘調査を開始した。

現地調査では平成15年６月21日に機材を搬入し、同月23日に重機により表土を掘削したのち、人力により掘り下げて調査を実施した。調査期間中は多量の湧き水に悩まされたが調査を進めた。その結果、鎌倉時代中期から後期を中心とした5時期の生活面とそれに伴う遺構・遺物が発見された。同年７月23日までの間に記録保存を行い、現地調査を無事終了した。その間の調査経過については、以下に調査日誌の抜粋を記すことにする。

【日　誌　抄】

６月21日　機材搬入してテント設営。調査区を設定。
　23日　重機による表土掘削。第１面の調査開始。
　27日　鎌倉市４級基準点を基にして敷地内に測量用基準点を設定。海抜標高を鎌倉市三級水準点から移動。
　30日　第１面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第１面全測図作成。
７月４日　第２面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第２面全測図作成。
　16日　第３面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第３面全測図作成。
　18日　第４面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第４面全測図作成。
　23日　第５面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第５面全測図作成。
　25日　現地調査終了。関係各方面に発掘調査を終了した旨を連絡し、機材撤収。

２．測量軸の設定

調査にあたり使用した測量軸の設定は、図３（上）に示した国土座標の数値を用いた。まず調査地点西側と報国寺境内東側に挟まれ、南北に走る道路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点のH075・H076の２点を確認することができた。これら両基準点の国土座標から敷地外の路地上に任意のA点を設け、そこから敷地内の測量軸基準点にあたるB－５杭とB－６杭をそれぞれ設置した。図３のように国土座標の数値を求めて東西軸と南北軸をそれぞれ２m方眼により軸線を配し、東西軸線には西から算用数字２～６、南北軸線にはアルファベットA～Cをそれぞれ付してグリット設定を行った。方眼軸線は測量の便利性と予想される遺構の主軸方位を優先させるかたちで、調査区の形状に即して設置したため、国土座標計には一致していない。なお、鎌倉市４級基準点（第Ⅸ座標系）のH075・H076、

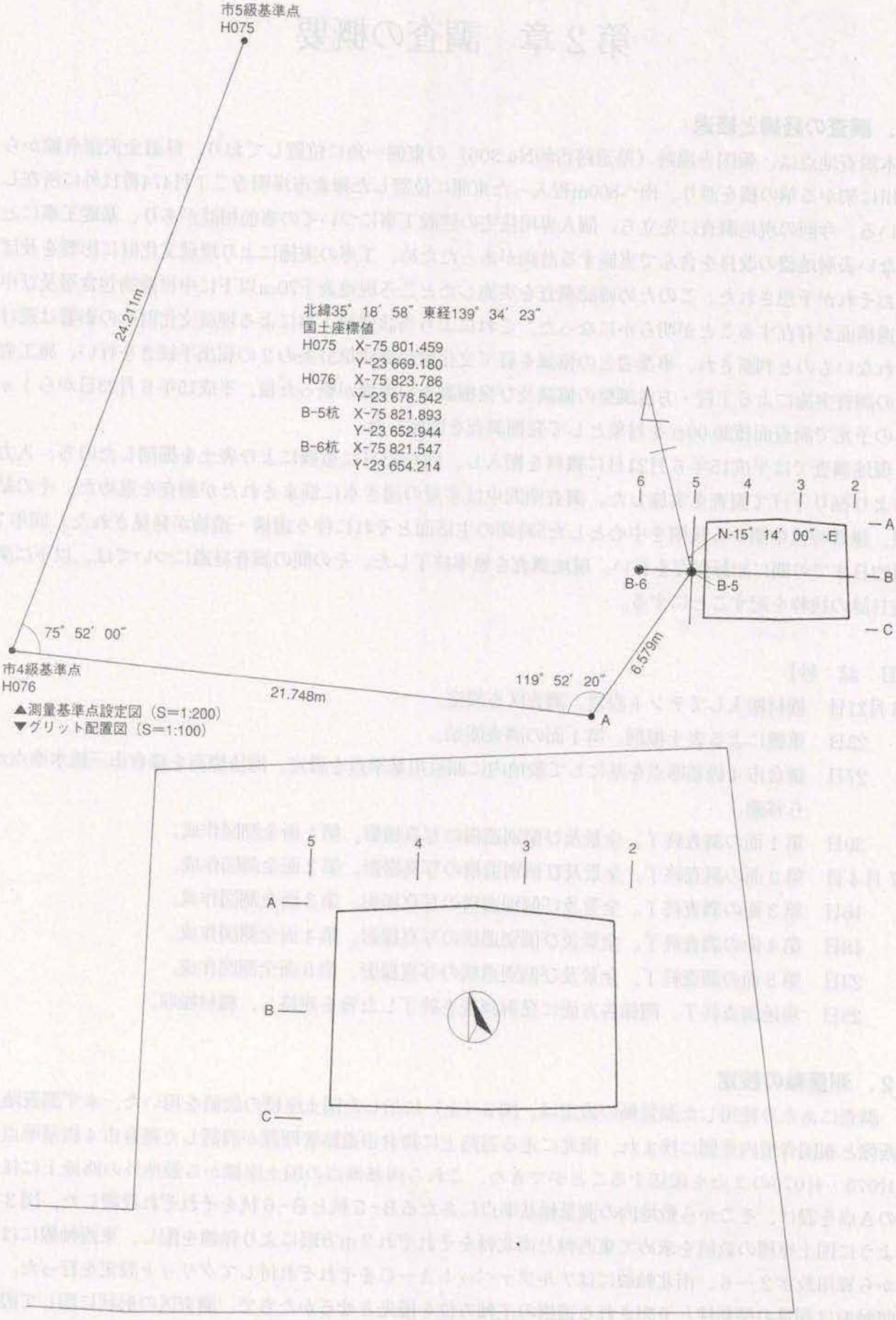


図3　測量基準点設定図・グリット配置図

B-5・B-6杭の国土座標数値は図3に示した通りである。図中の方位はすべて真北を採用し、調査地点の経
度・緯度は以下のようになる。

南北軸線：〔N－15° 14′ 00″－E〕

調査地点：北緯〔35° 18′ 58″〕　東経〔139° 34′ 23″〕

海抜標高の原点移動については、谷戸入り口の華の橋を渡ると県道金沢鎌倉線と交差し、そこから東側歩道に位置する花壇の植え込み中に設けられた鎌倉市三級水準点（BM326）の標高を調査地内のB-6杭上に仮水準点として移動した。文章中及び挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準とした海抜標高である。

鎌倉市三級水準点〔海抜標高15.437m〕　B-6杭〔海抜標高21.277m〕

3．層序と生活面

調査地点は現地表の海抜標高が21.30m前後に位置した平坦な宅地である。調査で確認された堆積土層は概ね11層に区分されたがその中で少なくとも5時期の生活面が検出された。堆積土層の状況は図4の調査区西壁土層図に示したとおりである。

表土は厚さ45～50㎝程度でそれを除去すると、明茶褐色砂質土の土丹粒・凝灰岩質粒を多く含んだ厚さ25㎝前後の中世遺物包含層（2層）が確認された。中世遺物包含層を取り除くと明茶褐色砂質土の大・小土丹塊と凝灰岩質粒を多く含む、非常に締まりの強い地業層（3層）である第1面を検出した。海抜標高は20.60m前後を計る。第1面構築土を除去したあと間層を挟まずに海抜標高20.40m前後のところで中・小土丹塊と凝灰岩質粒を多く含んだ明茶褐色砂質土（4層）の第2面とする生活面が検出された。第1・2面ともに検出した遺構は溝・土壙などである。

第2面を構築していた厚さ15～20㎝前後の4層を掘り下げたところ、海抜標高20.20～20.30mを計り、北西域は南西域に比べやや高めの整地を施している第3面が検出された。地業層は大・小土丹塊と凝灰岩質粒を多く含んだ非常に締まりのある茶褐色砂質土（5層）である。5層からは溝と柱穴列が検出できたが、溝底に柱穴列を確認し、調査区側溝の断面を観察して落ち込みを確認したところ、建物跡と判

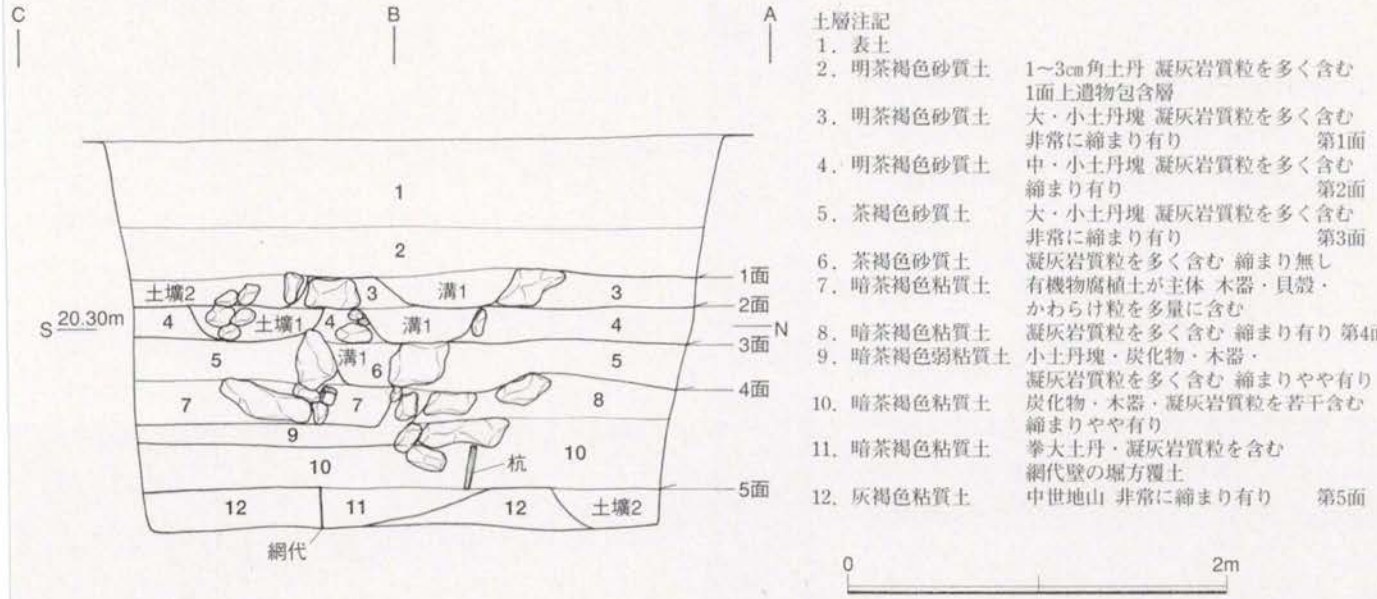


図4　調査区西壁土層堆積図

断した。そこで溝の南側25㎝程掘り下げたところ暗茶褐色粘質土ではあるが有機物腐植土を主体とする木器・貝殻・かわらけ粒を多量に含んだ7層が確認された。7層は建物の覆土である。この生活面から検出できた遺構は上層と下層に区別でき、上層遺構では溝が確認され、下層遺構では建物1が検出された。さらに北側の厚さ20～25㎝の5層を掘り進めたところ、間層を挟まず、北側に凝灰岩質粒を多く含み締まりのある暗茶褐色粘質土を基盤とした8層が表出した。9層は第4面上の包含層で小土丹塊・炭化物・木器・凝灰岩質粒を多く含んだやや締まりのある暗茶褐色弱粘質土である。第4面の海抜標高は北側が20.00m前後、土壙や柱穴が検出された南側は海抜標高19.60～19.80mを計る。

10層は厚さ20～40㎝程あり第5面上の包含層で炭化物・木器・凝灰岩質粒を若干含んだ暗茶褐色粘質土であり、やや締まっている。その下から検出されたのが第5面（12層）であり、灰褐色粘質土を基盤とした海抜標高19.40mを計るほぼ平坦な中世地山である。11層は網代板壁の掘り方の覆土であり、拳大土丹・凝灰岩質粒を含んだ暗茶褐色粘質土である。第5面の遺構は網代より北側を建物内とし、それを始め土壙・柱穴などを検出した。

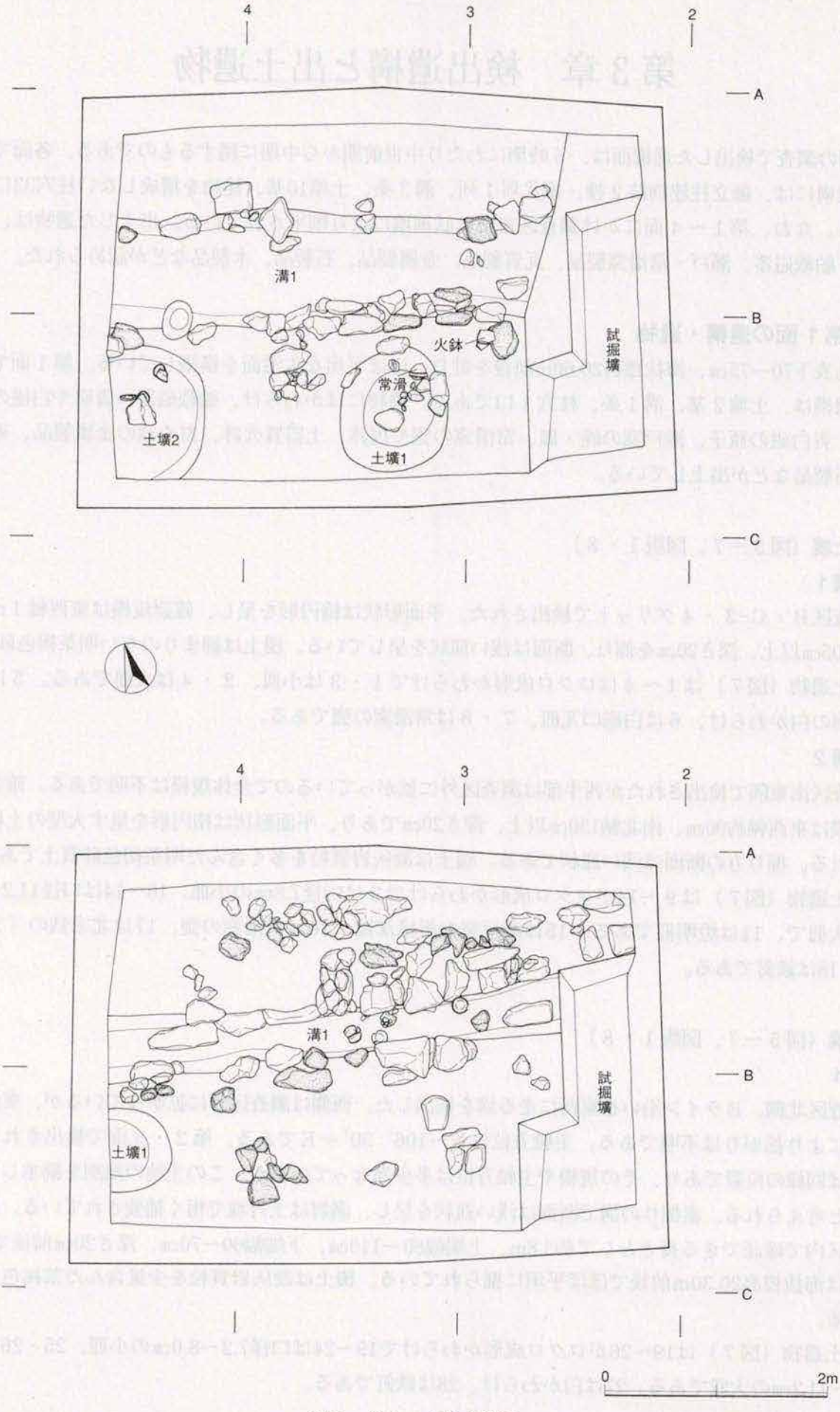


図5　第1・2面 全測図

第３章　検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構面は、５時期にわたり中世前期から中期に属するものである。各面で検出した遺構には、掘立柱建物跡２棟、網代塀１列、溝３条、土壙10基、建物を構成しない柱穴33口などである。なお、第１～４面にかけ調査区東端は試掘壙により削平されている。出土した遺物は、かわらけ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品、木製品などが認められた。

１．第１面の遺構・遺物

現地表下70～75㎝、海抜標高20.60m前後を計り、ほぼ平坦な生活面を構築している。第１面で検出した遺構は、土壙２基、溝１条、柱穴１口である。遺物にはかわらけ、舶載磁器の青磁や白磁の碗・皿類、青白磁の瓶子、瀬戸窯の碗・皿、常滑窯の甕や捏鉢、土器質火鉢、釘や銭の金属製品、砥石などの石製品などが出土している。

ａ．土壙（図５～７、図版１・８）

土壙１

調査区Ｂ・Ｃ-３・４グリットで検出された。平面形状は楕円形を呈し、確認規模は東西軸１m、南北軸105㎝以上、深さ20㎝を測り、断面は浅い皿状を呈している。覆土は締まりのない明茶褐色砂質土。

出土遺物（図７）は１～４はロクロ成形かわらけで１・３は小皿、２・４は大皿である。５はロクロ成形の白かわらけ、６は白磁口兀皿、７・８は常滑窯の甕である。

土壙２

調査区南東隅で検出されたが西半部は調査区外に拡がっているので全体規模は不明である。確認できた規模は東西軸約90㎝、南北軸130㎝以上、深さ20㎝であり、平面形状は楕円形を呈す大型の土壙と推測される。掘り方の断面は浅い皿状である。覆土は凝灰岩質粒を多く含んだ明茶褐色砂質土である。

出土遺物（図７）は９～14がロクロ成形かわらけで９は口径7.8㎝の小皿、10～14は口径11.2～13.6㎝の大皿で、11は燈明皿である。15は瀬戸窯の折縁深皿、16は常滑窯の甕、17は北宋銭の「元祐通宝」、18は鉄釘である。

ｂ．溝（図５～７、図版１・８）

溝１

調査区北側、Ｂライン沿いを東西に走る溝を検出した。西側は調査区外に拡がっているが、東側は試掘壙により拡がりは不明である。主軸方位はＮ－106°30′－Ｅである。第２・３面で検出された溝とはほぼ同様の位置であり、その規模や主軸方位は多少異なっているが、この土地の地割を継承し造成されたと考えられる。素掘りの溝で断面は浅い皿状を呈し、溝肩は土丹塊で粗く補強されている。規模は調査区内で確認できる長さとして約3.8m、上端幅80～110㎝、下端幅60～70㎝、深さ20㎝前後である。溝底は海抜標高20.30m前後でほぼ平坦に掘られている。覆土は凝灰岩質粒を少量含んだ茶褐色砂質土である。

出土遺物（図７）は19～26がロクロ成形かわらけで19～24は口径7.2～8.0㎝の小皿、25・26は口径10.8～11.2㎝の大皿である。27は白かわらけ、28は鉄釘である。

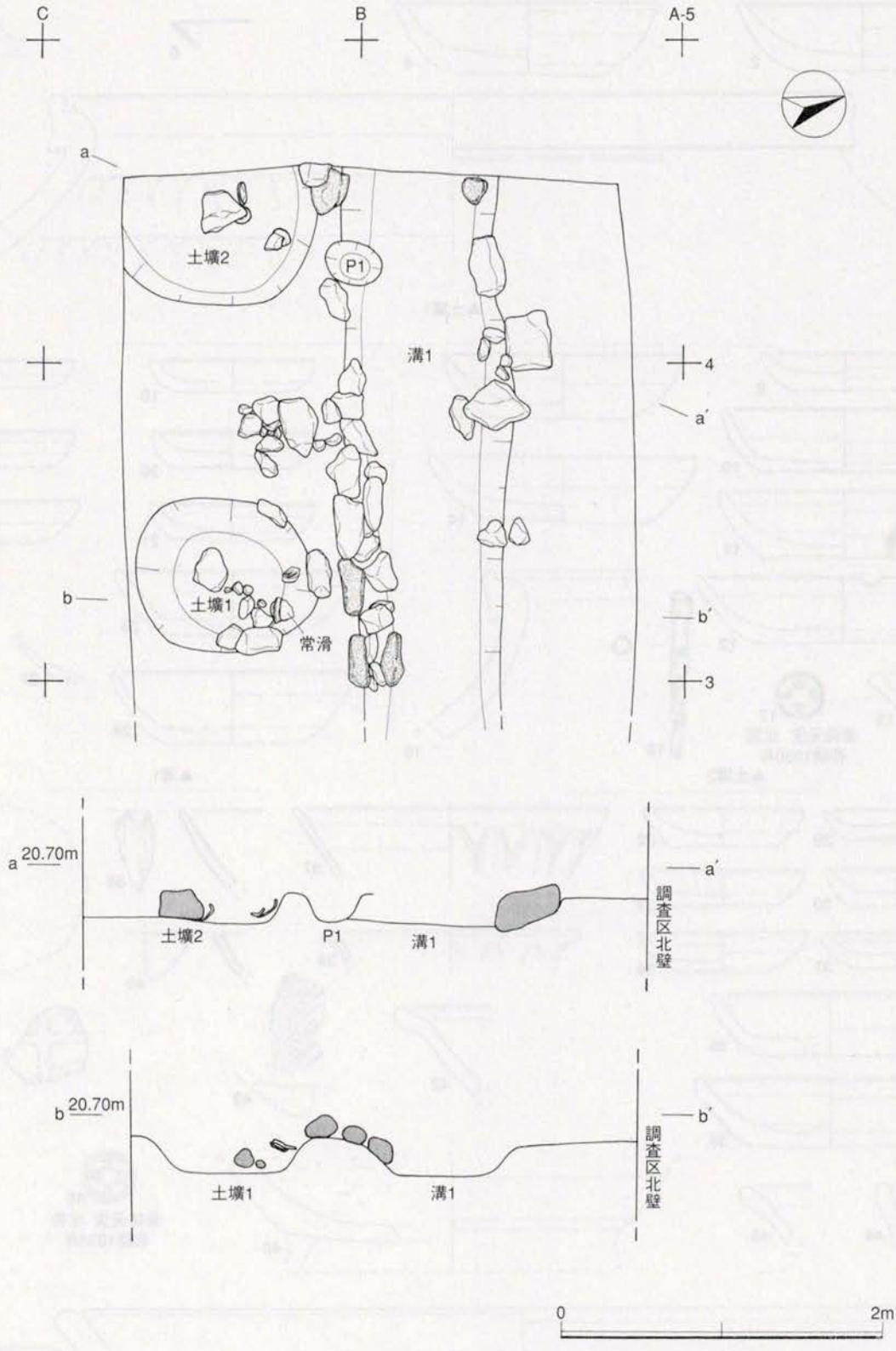


図６　第１面 土壙・溝各遺構

c．柱穴（図５・６、図版１）

この面から検出できた柱穴は１口であり、B-4 グリット付近において溝１を切るかたちで確認された。平面形状は楕円形、掘り方の断面は逆台形状を呈し、規模は東西軸30㎝、南北軸35㎝、深さ18㎝である。覆土は明茶褐色砂質土で凝灰岩質粒を少量含む。図示可能な遺物は認められなかった。

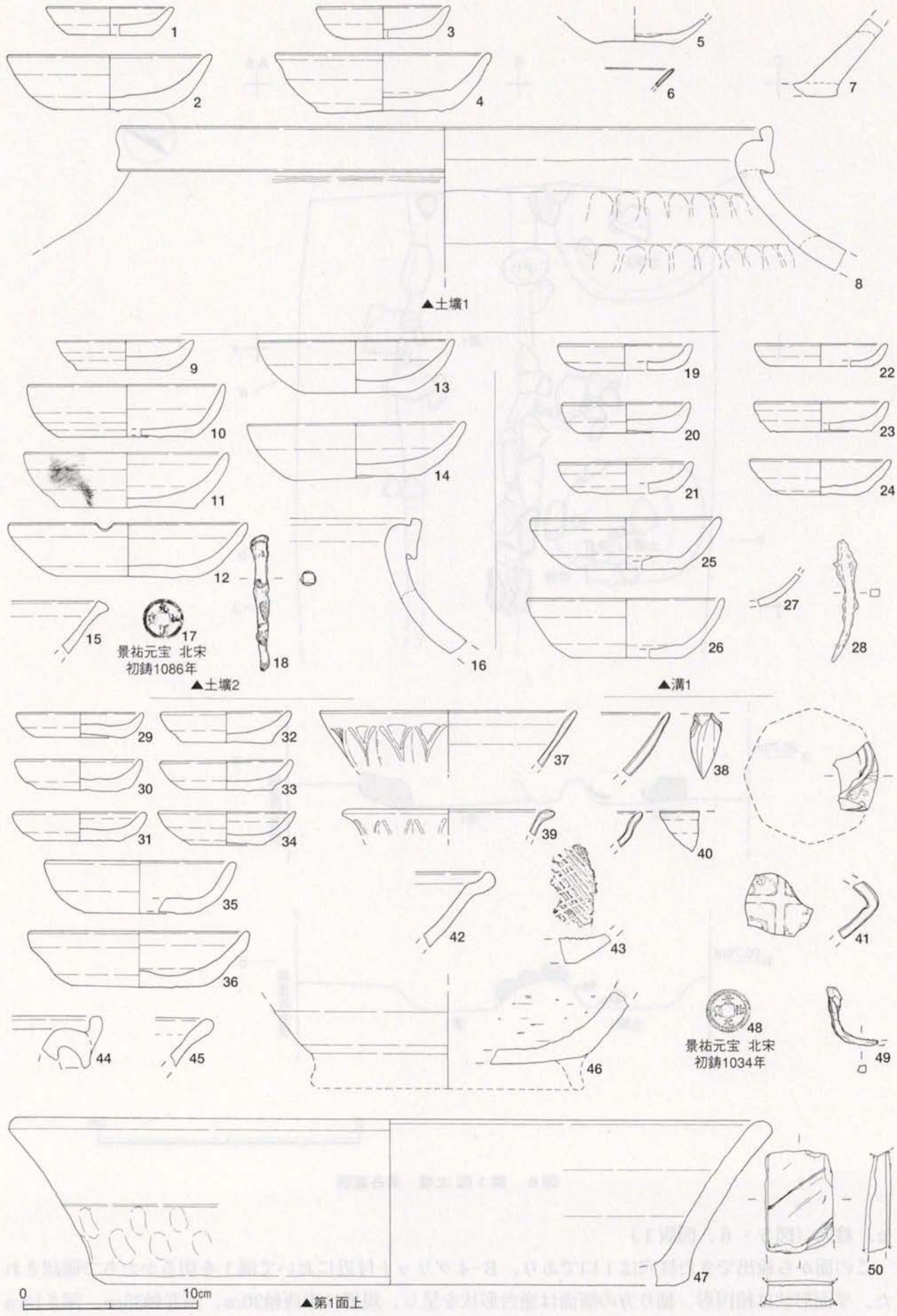


図7　第1面 各遺構・第1面 上出土遺物

d．第１面遺構外出土遺物（図７、図版８）

第１面の遺構に伴う以外の出土遺物であり、包含層や確認面検出時に出土した遺物を一括してここに掲載した。図７-29～36はロクロ成形かわらけである。29～34は小皿、35・36は大皿である。37～40は青磁であり、37・38は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗、39は鎬蓮弁文鉢、40は天目茶碗、41は印花文を施した青白磁の花瓶である。42・43は瀬戸窯の折縁深皿と卸皿、44～46は常滑窯の甕・捏鉢Ⅰ類、47は土器質火鉢、48は北宋銭の「景祐元宝」、49は鉄釘、50は粘板岩製の仕上砥である。

２．第２面の遺構・遺物

現地表下90㎝、海抜標高20.40mを計る、ほぼ平坦な生活面である。第２面で検出された遺構は溝１条、土壙１基である。遺物はかわらけ、舶載磁器の青磁の碗・皿・鉢、瀬戸窯の皿・入子、常滑窯の甕、土器質火鉢、女瓦、銭・釘などの金属製品や硯といった石製品が出土している。

a．土壙（図５・８・９、図版２・８）

土壙1

調査区南西隅で検出されたが、西半部は調査区外に拡がっており規模は不明である。平面形状は楕円形を呈しているとみられ、掘り方の断面はすり鉢状である。規模は東西軸55㎝、南北軸80㎝、深さ35㎝前後を確認した。覆土は明茶褐色砂質土で拳大の土丹を含む。

出土遺物（図９）は１がロクロ成形のかわらけ、２・３が龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗と鉢、４は瀬戸窯の小皿、５は粘板岩製の硯、６・７は北宋銭の「景徳元宝」・「淳寧元宝」、８は鉄釘である。

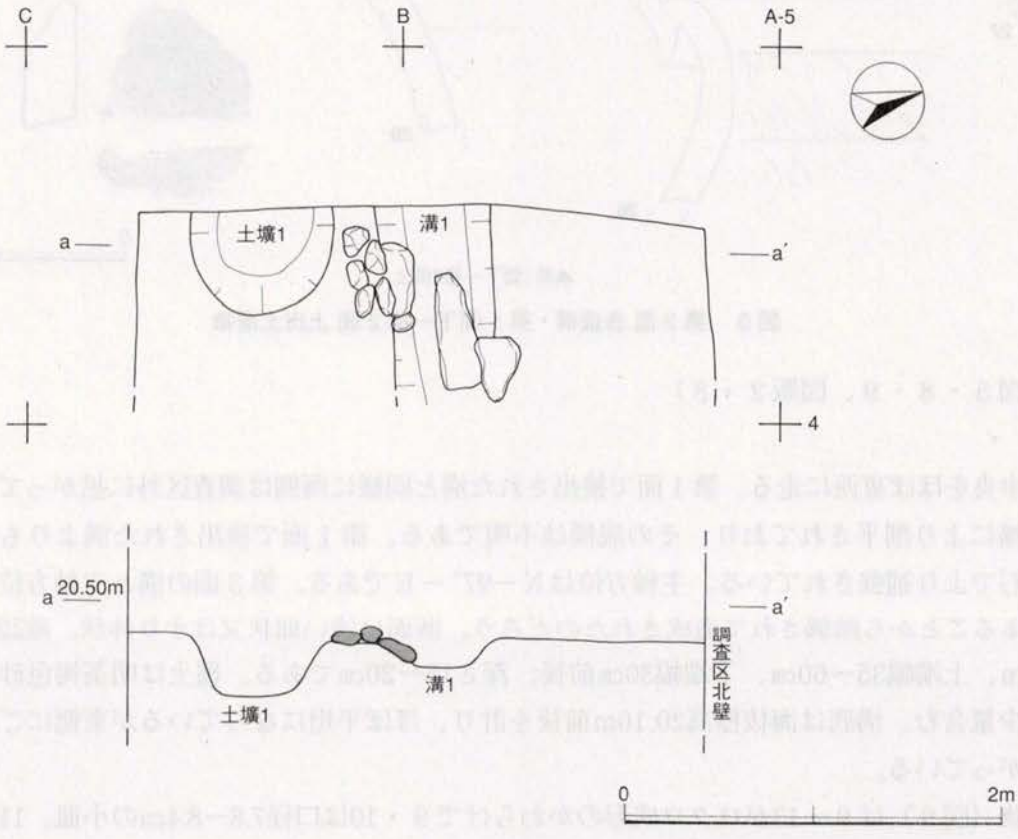


図８　第２面 土壙・溝各遺構

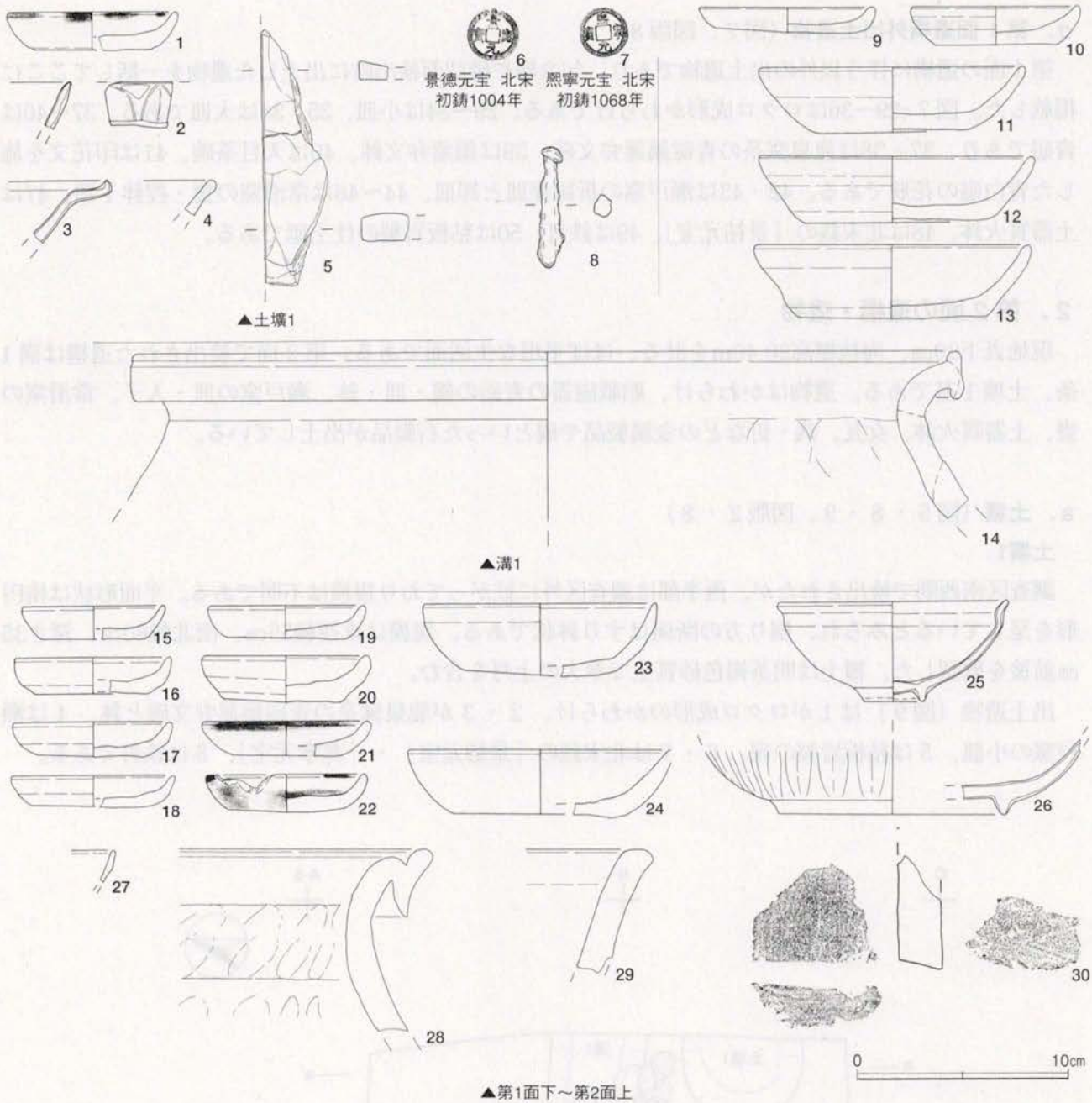


図９　第２面 各遺構・第１面下～第２面 上出土遺物

b．溝（図５・８・９、図版２・８）

溝１

調査区中央をほぼ東西に走る。第１面で検出された溝と同様に西側は調査区外に拡がっているが、東側は試掘壙により削平されており、その規模は不明である。第１面で検出された溝よりも溝肩を土丹塊・鎌倉石でより補強されている。主軸方位はＮ－97°－Ｅである。第３面の溝と主軸方位・位置もほぼ同様であることから踏襲されて造成されたのだろう。断面は浅い皿状又はすり鉢状。確認できた規模は長さ４ｍ、上端幅35～60㎝、下端幅30㎝前後、深さ15～20㎝である。覆土は明茶褐色砂質土で凝灰岩質粒を少量含む。溝底は海抜標高20.10m前後を計り、ほぼ平坦になっているが東側にごく僅かではあるが下がっている。

出土遺物（図９）は９～13がロクロ成形のかわらけで９・10は口径7.8～8.4㎝の小皿、11～13は口径12.4～12.8㎝の大皿である。14は常滑窯の甕である。

d．第１面下～第２面上遺構外出土遺物（図９、図版８）

第１面構築土中及び第2面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。図９-15～24はロクロ成形かわらけで、15～22は口径6.6～7.6cmの小皿、21・22は燈明皿、23は口径10.7の中皿、24は口径12.3cmの大皿である。25・26は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗と折縁皿、27は瀬戸窯の入子、28は常滑窯の甕、29は土器質火鉢、30は女瓦である。

３．第３面の遺構・遺物

第３面で検出された遺構は、溝と建物を確認した。溝と南域の柱穴列を検出後、溝の底面において遺構が確認された。西壁堆積土層を観察したところ溝北辺より落ち込みが確認できたので、一旦記録保存を行い、溝より南域の地業層を取り除いた。したがって、第３面の北域は道路状遺構の可能性もあると思われ、一段下がったところに掘立柱建物を構成する柱穴があったが溝によって削平されていることが明らかになった。ここでは上層遺構として溝１条、下層遺構では掘立柱建物などを構成する柱穴９口、またそれを成さない柱穴３口を検出した。上層遺構面の海抜標高は20.10～20.20m、下層遺構面は19.74～19.89mを計る。上層遺構の遺物はかわらけ、舶載磁器の青磁碗、褐釉の壺、常滑窯の甕、南部系山茶碗、土器質火鉢が出土している。下層遺構ではかわらけ、青磁碗、白磁の小壺、青白磁の合子蓋、瀬戸窯の入子、常滑窯の甕・捏鉢、滑石製の温石、鎌・銭・釘などの金属製品、石製品の砥石や箸や菜箸・用途不明の木製品が出土している。

a．建物（図10・11・13、図版３・４・９）

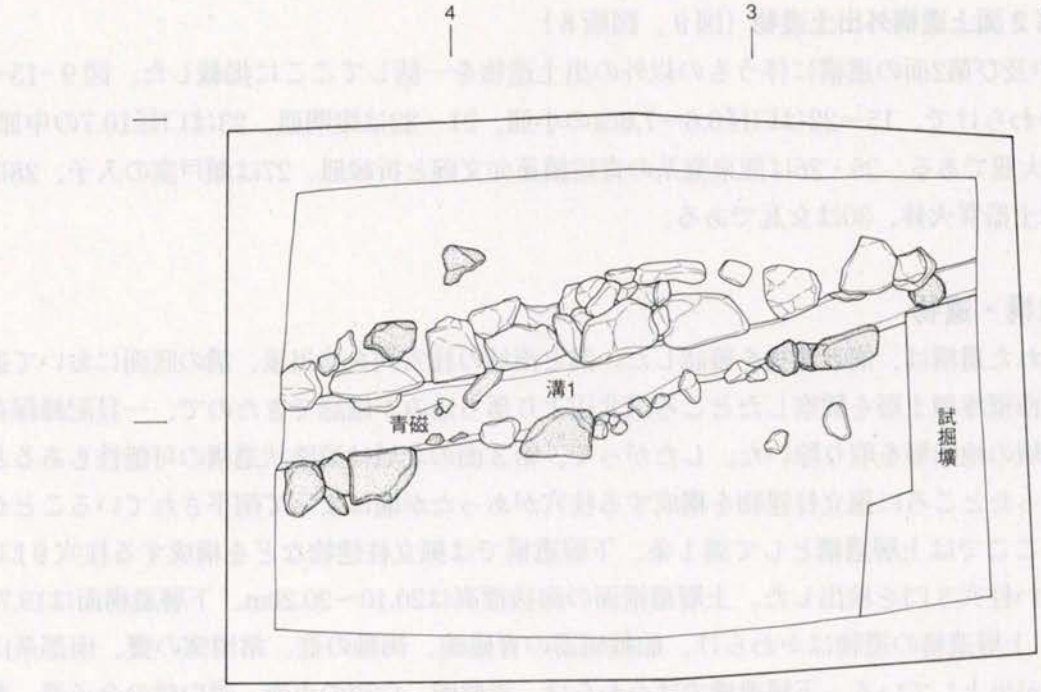
建物１

調査区Ａ・Ｂ-２～４グリットで東西に並ぶ柱穴、建物１-イ・ロ・ハを検出した。前述したように溝を検出後、溝底部に東西に並ぶ柱穴列を確認したので溝により掘削されていた。従って溝よりも建物は古い時期にある。建物1は柱穴の底面に礎板を据えた掘立柱建物であるが、建物の規模は不明である。ここでは最初に検出した柱穴列を柱穴列1、溝によって削平されていた列を柱穴列２とする。柱穴列１は東西１間の柱穴２口とそれに伴う柱穴であろうと思われる３口が検出した。柱間寸法の芯々距離は建物１-イ～ロが200cm、1-ロ～ハが80cmを測る。建物1-イ・ハには礎板のほかに柱が残っており、１-イには柱根の両脇に10cm大の土丹で補強されている。柱穴列1の主軸方位はＮ－94°50′－Ｅである。また、１-ハ西辺より調査区南西隅付近まで厚さ２cm程の板材が並んでいた。

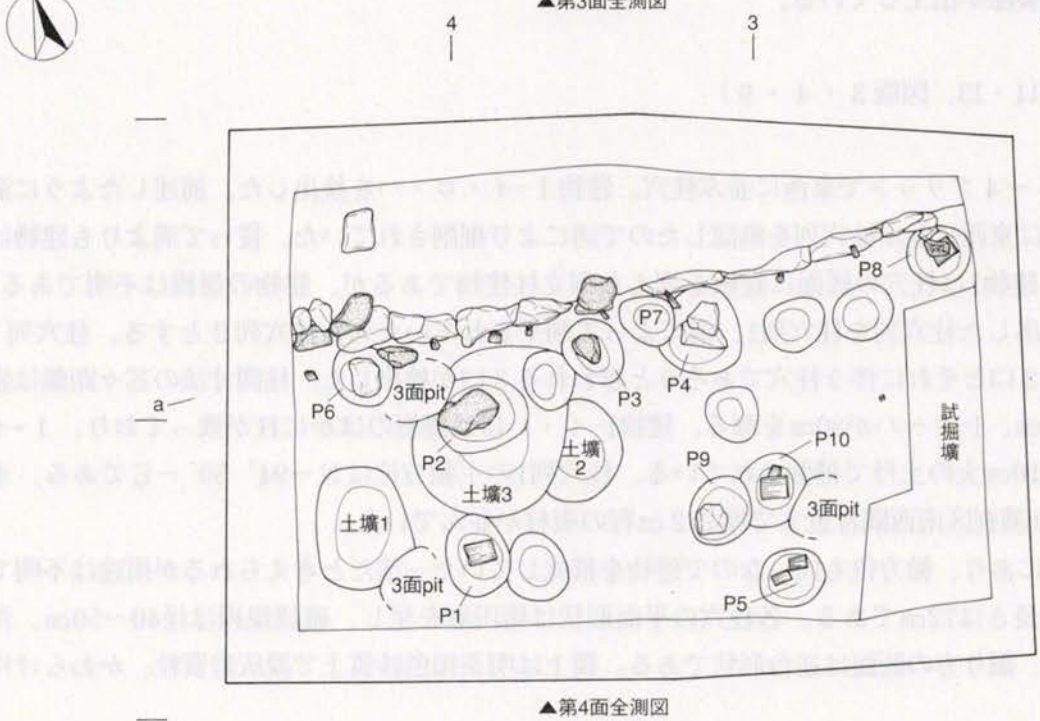
柱穴列１の延長にあり、軸方位も同一なので建物を構成していた一部だと考えられるが用途は不明である。確認できた長さは72cmである。各柱穴の平面形状は楕円形を呈し、確認規模は径40～50cm、深さ30cm前後を測り、掘り方の断面は逆台形状である。覆土は明茶褐色砂質土で凝灰岩質粒、かわらけ片を含む。

柱穴列２は東西に並ぶ柱穴６口、軸方位はＮ－90°30′－Ｅである。柱穴列1とは多少主軸方位がずれている。柱間寸法の芯々距離は西からは70cm、80cm、110cm、60cm、130cmを測り、建物を構成する配置には適しているとは思えない。板壁等は確認できなかったが建物内への補強のための意味をもつ柱穴列ではないかと推測できる。各柱穴の平面形状は確認できなかったが円形及び楕円形を呈していると推測される。１-２・４・６には厚さ２～４cmの礎板が遺存していた。確認規模は径20～60cm、深さ30～40cmを測り、掘り方の断面は深鉢状である。覆土は凝灰岩質粒を少量含んだ暗茶褐色弱粘質土である。

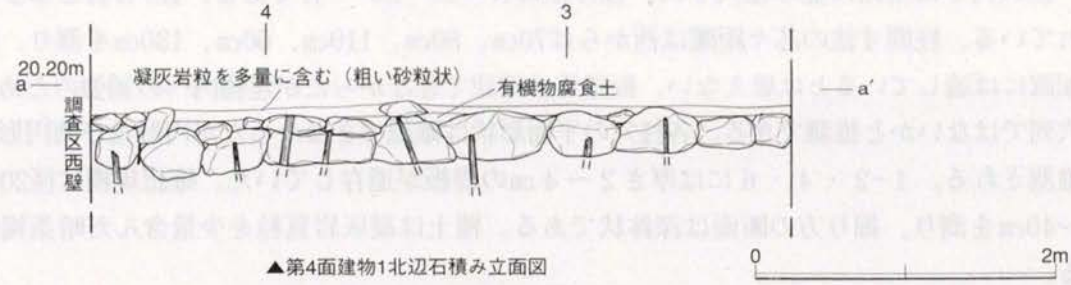
出土遺物（図13・14）は、１が手捏ね成形の白かわらけで、建物１-イから出土。建物１-ロからは



▲第3面全測図



▲第4面全測図



▲第4面建物1北辺石積み立面図

図10　第３・４面 全測図

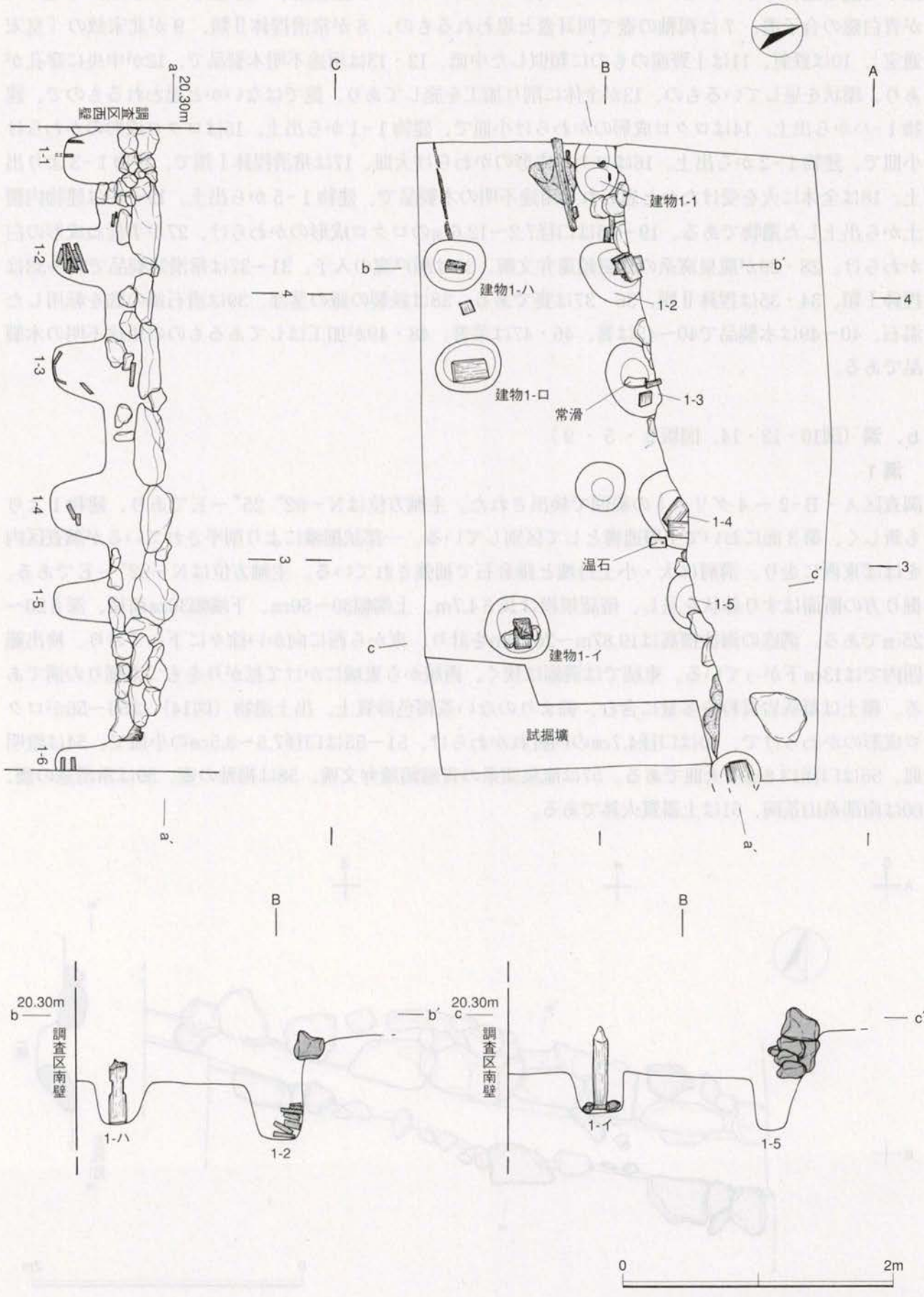

a 20.30m
調査区南壁
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
1-6
a´
C
B
A
b
b´
4
3
c
c´
建物1-1
建物1-ハ
1-2
建物1-ロ
常滑
1-3
1-4
温石
1-5
建物1-イ
試掘壙
B
B
20.30m
b
b´
調査区南壁
1-ハ
1-2
20.30m
c
c´
調査区南壁
1-イ
1-5
0
2m

図11　第3面 建物1

図示可能な遺物はない。２～３はロクロ成形のかわらけ、４が龍泉窯系の青磁碗、5が白磁の小壺、６が青白磁の合子蓋、７は褐釉の壺で四耳壺と思われるもの、８が常滑捏鉢Ⅱ類、９が北宋銭の「皇宋通宝」、10は鉄釘、11は上野産のものに類似した中砥、12・13は用途不明木製品で、12が中央に穿孔があり、環状を呈しているもの、13が全体に削り加工を施してあり、篦ではないかと思われるもので、建物１-ハから出土。14はロクロ成形のかわらけ小皿で、建物１-１から出土。15はロクロ成形のかわらけ小皿で、建物１-２から出土。16はロクロ成形のかわらけ大皿、17は常滑捏鉢Ⅰ類で、建物１-３より出土。18は全体に火を受けたかと思われる用途不明の木製品で、建物１-５から出土。19～49は建物内覆土から出土した遺物である。19～26は口径7.2～12.6㎝のロクロ成形のかわらけ、27が手捏ね成形の白かわらけ。28・29が龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗、30は瀬戸窯の入子、31～37は常滑窯製品で31～33は捏鉢Ⅰ類、34・35は捏鉢Ⅱ類、36・37は甕である。38は鉄製の鎌の茎部、39は滑石鍋の底を転用した温石、40～49は木製品で40～45は箸、46・47は菜箸、48・49が加工はしてあるものの用途不明の木製品である。

b．溝（図10・12・14、図版３・５・９）

溝１

調査区Ａ・Ｂ-２～４グリットの範囲で検出された。主軸方位はＮ－92° 25′－Ｅであり、建物１よりも新しく、第３面において上層遺構として区別している。一部試掘壙により削平されているが調査区内をほぼ東西に走り、溝肩は大・小土丹塊と鎌倉石で補強されている。主軸方位はＮ－92°－Ｅである。掘り方の断面はすり鉢状を呈し、確認規模は長さ4.7m、上端幅30～50㎝、下端幅30㎝前後、深さ20～25㎝である。溝底の海抜標高は19.87m～20.00mを計り、東から西に向かい徐々に下っており、検出範囲内では13㎝下がっている。東域では溝幅は狭く、西域から東域にかけて拡がりをもつ素掘りの溝である。覆土は凝灰岩質粒を多量に含む、締まりのない茶褐色砂質土。出土遺物（図14）は50～56がロクロ成形のかわらけで、50は口径4.7㎝の内折れかわらけ、51～55は口径7.5～8.5㎝の小皿で、54は燈明皿、56は口径13.8㎝の大皿である。57は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗、58は褐釉の壺、59は常滑窯の甕、60は南部系山茶碗、61は土器質火鉢である。

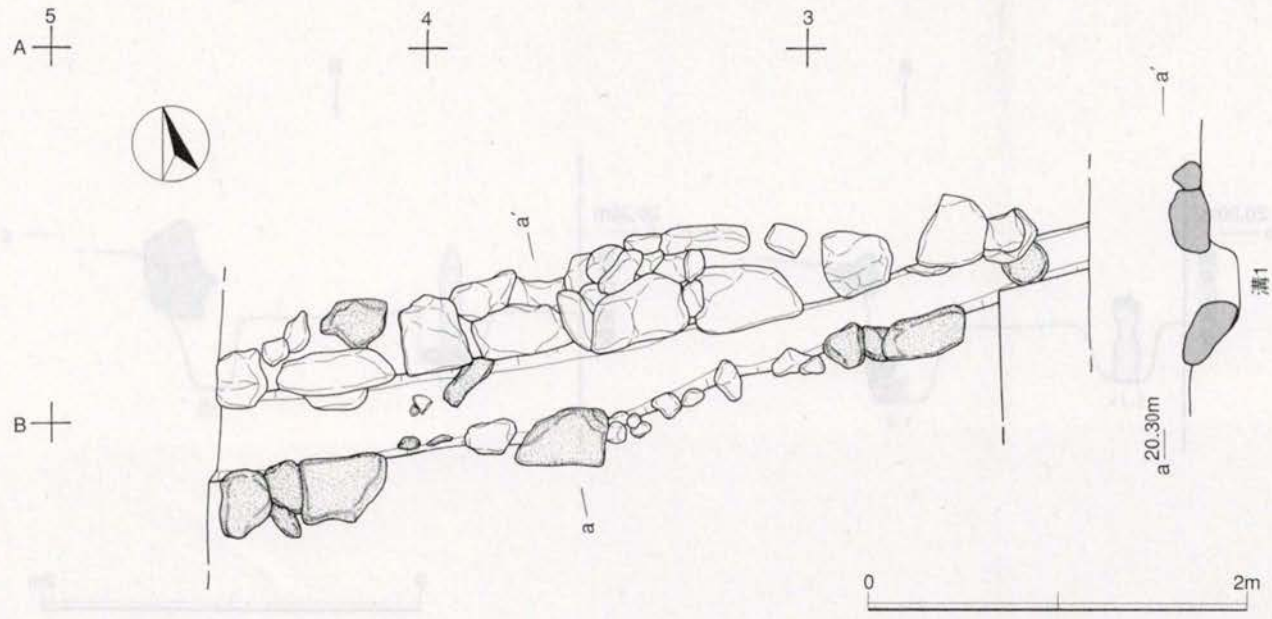


図12　第３面溝１

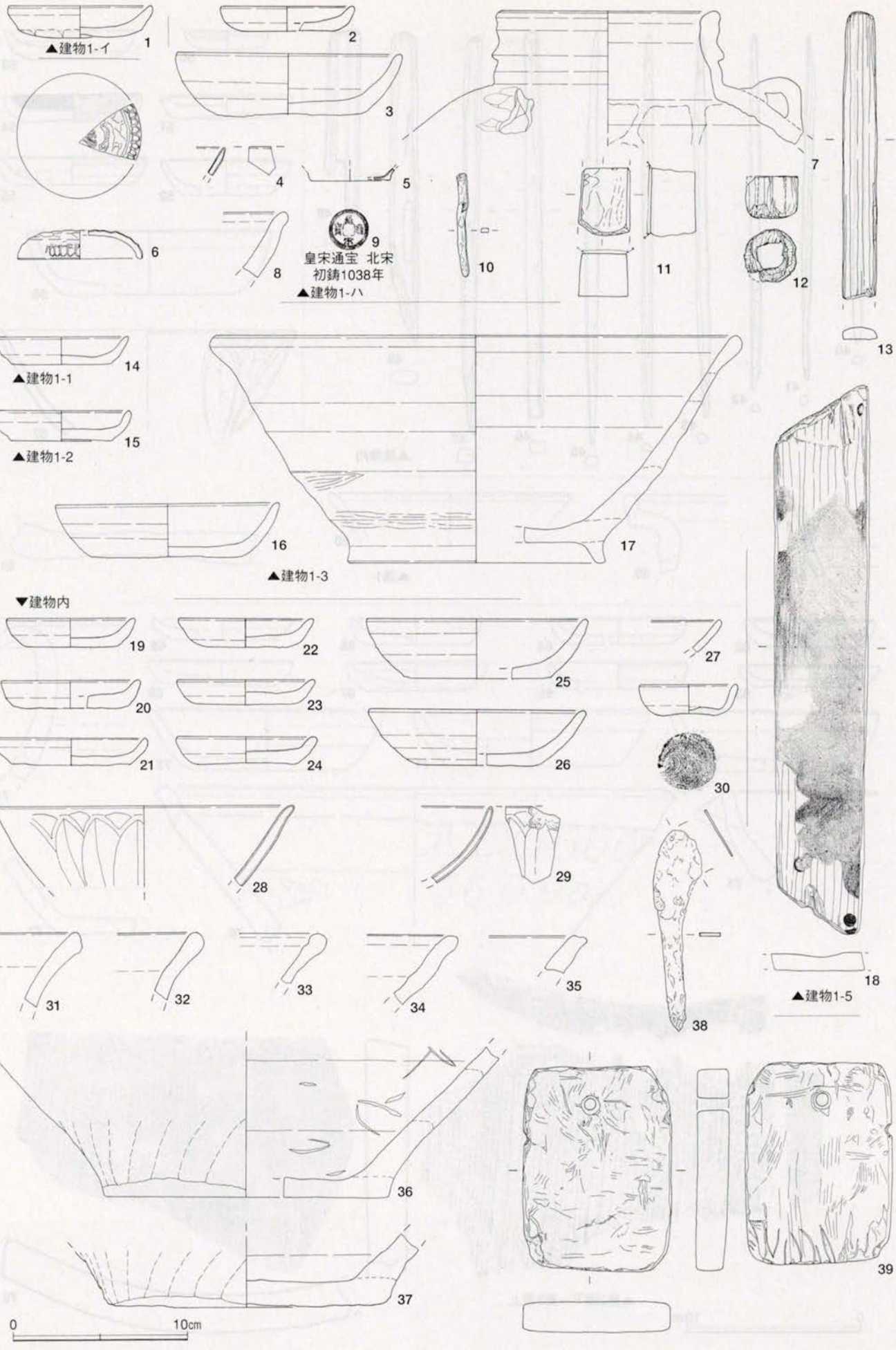


図13　第３面 建物1出土遺物

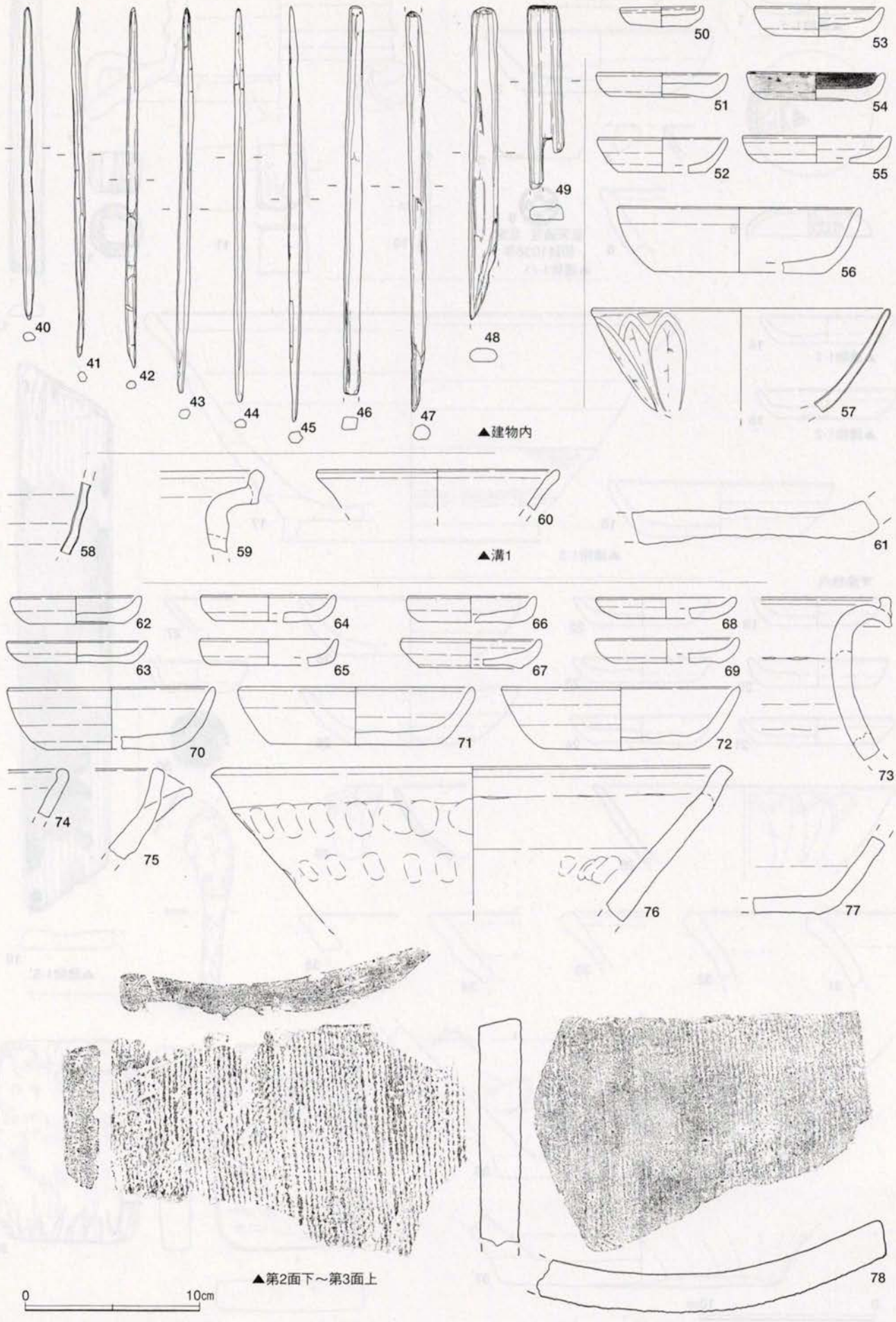


図14　第３面 各遺構・第２面下～第３面上出土遺物

c．柱穴（図11・14、図版３・５）

この面から検出できたピットは２口であり、B-３グリット杭付近、一方は調査区Bライン西側で建物１-１に削平されるかたちで確認された。両ピットの平面形状は円形、掘り方の断面は逆台形状を呈し、規模は東西軸30㎝、南北軸35㎝、深さ18㎝前後である。覆土は暗茶褐色粘質土である。図示可能な遺物は認められなかった。

d．第２面下～第３面上遺構外出土遺物（図14、図版９）

第２面構築土中及び第３面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。図14-62～72はロクロ成形かわらけで、62～69は口径7.2～8.0㎝の小皿、70～72は口径11.8～13.6㎝の大皿である。73～76は常滑窯製品であり、73が甕、74が捏鉢Ⅰ類、75・76が捏鉢Ⅱ類である。77は土器質火鉢、78は女瓦である。

４．第４面の遺構・遺物

海抜標高19.60～19.80mを計る。この面で検出した遺構は土壙３基、建物と思われる配置を示す柱穴５口、掘立柱建物などを構成しない柱穴15口である。遺物はかわらけ、龍泉窯系青磁の碗・皿、常滑窯の甕・捏鉢、土器質火鉢、常滑窯製品を転用した砥石、銭や鉄製品の刀子、漆器の皿や箸や筥といった木製品が出土している。

a．建物（図10・15・16、図版６・10）

建物１

調査区A・B-２～４グリットから検出された。建物とする北辺には40～60㎝大の土丹を積んで区画されていた。そこから南側が約40㎝掘り込まれて遺構群が検出されたことにより建物と認識した。さらに第３面建物１より建物内の拡がりが認められる。建物を構成するような確実な柱穴配置は定かではあったが、軸方位・柱間寸法などの関係から東西に並ぶ柱穴列を２列確認した。

建物の北辺に石（土丹）積み列を確認した。10～70㎝大の土丹で30～70㎝の土丹塊を使用し、構成されている。軸方位はN－94°30′－Eである。検出範囲内では長さ440㎝を測り、調査区西側に拡がりが確認できる。さらに、石積み列に沿って不等間隔で掘り方のない杭が打たれ補強されている。調査区内での杭の間隔は西側から80㎝、30㎝、28㎝、60㎝、40㎝、75㎝、52㎝であり、調査区西壁にも見られる。この各杭は比較的大きい土丹の前面に打たれている。板壁を据え、杭で補強する例が鎌倉市内でも確認されているが、ここでは板壁を使用しない造り方の可能性が考えられる。

B-２～３グリットの範囲で東西一間（P1・10）を検出した。軸方位はN－92°－Eとなり、柱間寸法は210㎝である。P1の平面形状は楕円形を呈し、確認規模は東西軸40㎝、南北軸54㎝、深さ24㎝、掘り方は逆台形状である。底面には礎板が据えてある。P10は第３面の遺構とP9により削平されているため、規模は不明であるが、およそ径50㎝程、平面形状は楕円形を呈していると考えられ、深さ約30㎝である。ピット覆土中に礎板が２枚検出された。

一方の柱穴列（P6・７・８）は建物北辺石（土丹）積みに沿って検出された。軸方位はN－92°30′－E、各柱穴の柱間寸法は西から196㎝、198㎝である。先述した柱穴列とは軸方位が若干異なり、また、南北における配置にも適さないので同じ建物を構成する柱穴列とは考えられない。だがここでは建物内にあり、建物に関連する遺構とした。P6・８は石積みにより正確な規模は不明である。P6の

平面形状は隅丸方形を呈し、確認できた規模は径40㎝前後、深さは35㎝、断面は逆台形状。P8の平面形状は円形を呈し、径40㎝、深さは55㎝、断面は逆台形状である。P6には20㎝大の偏平な土丹が、P8には底面に厚さ5㎝程の礎板が据えられており、その上には腐蝕した高さ70㎝程の角柱が遺存している。P7の掘り方の平面形状は隅丸方形、断面逆台形状である。確認規模は東西軸34㎝、南北軸40㎝、深さ54㎝である。覆土は凝灰岩質粒・小土丹塊を多く含んだ暗茶褐色弱粘質土である。このピットに残存する礎板等は検出できなかった。

各柱穴列は東西１～２間と検出したが、調査区内では東西に延びるような配置は認められなかった。しかし、調査区内で限った結果なので拡がりをもつ可能性は推測できる。また、石積み列北側は有機物腐植土と凝灰岩粒を多量に含んだ粗砂粒状の土で地業されている。この石積み列より南側部分は一段下がって建物が区画され、北側部分はほぼ平坦に整地されている。こういった構造は市内遺跡にも例があり、北側部分は道路と推測することができる。

出土遺物（図16）は、19はロクロ成形のかわらけ大皿、20は常滑捏鉢Ⅰ類、21は北宋銭の「元豊通宝」である。P1から出土。

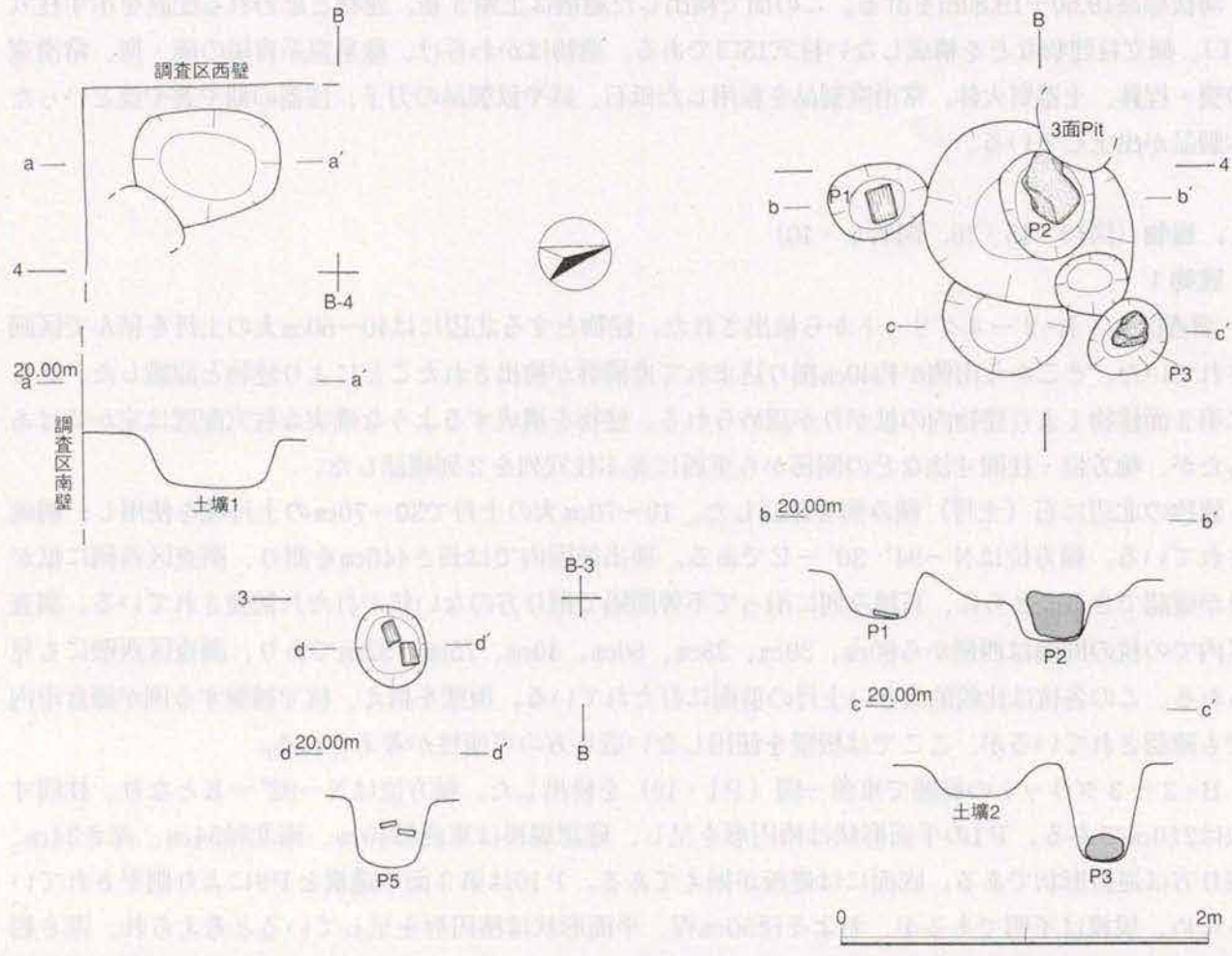


図15　第４面 土壙・柱穴各遺構

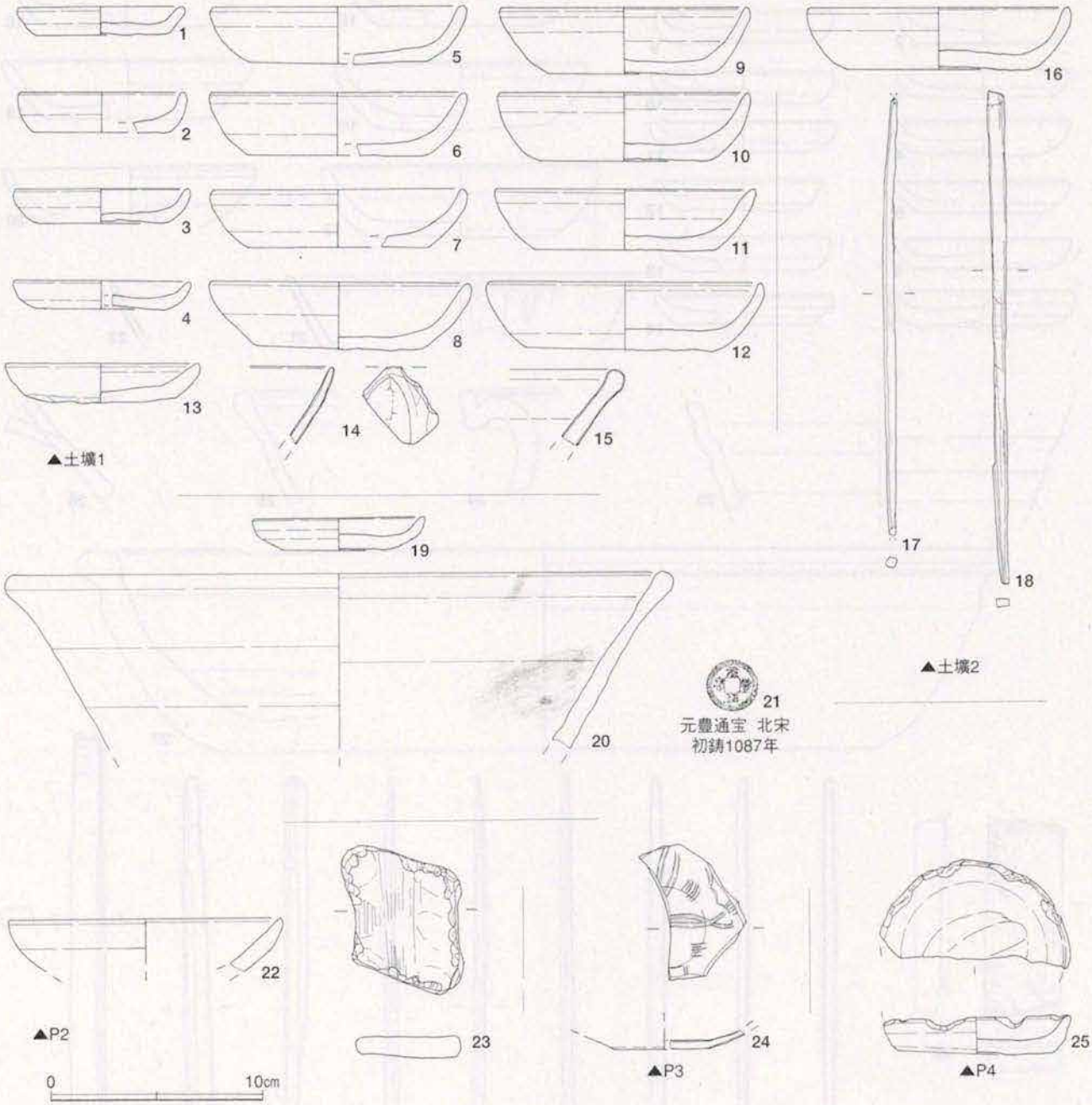


図16　第４面 土壙・柱穴出土遺物

b．土壙（図10・15・16、図版６・10）

土壙１

調査区Ｂ-４グリット、南東隅で検出したが、第３面遺構により削平されている。他の遺構に比べ、多量の遺物が廃棄されているのでゴミ穴として使用したのであろう。平面形状は方形を呈していると思われ、確認規模は東西軸60㎝、南北軸80㎝、深さ30㎝で掘り方の断面は逆台形状である。覆土は中・小土丹塊とかわらけ片を含んだ暗茶褐色弱粘質土である。

出土遺物（図16）は、１～12がロクロ成形のかわらけで、１～４が口径7.8～8.2㎝の小皿、５～12が口径11.6～12.8㎝の大皿、13が手捏ね成形のかわらけで口径9.1㎝である。14は龍泉窯系の鎬蓮弁文碗、15は常滑捏鉢Ⅰ類。

土壙２

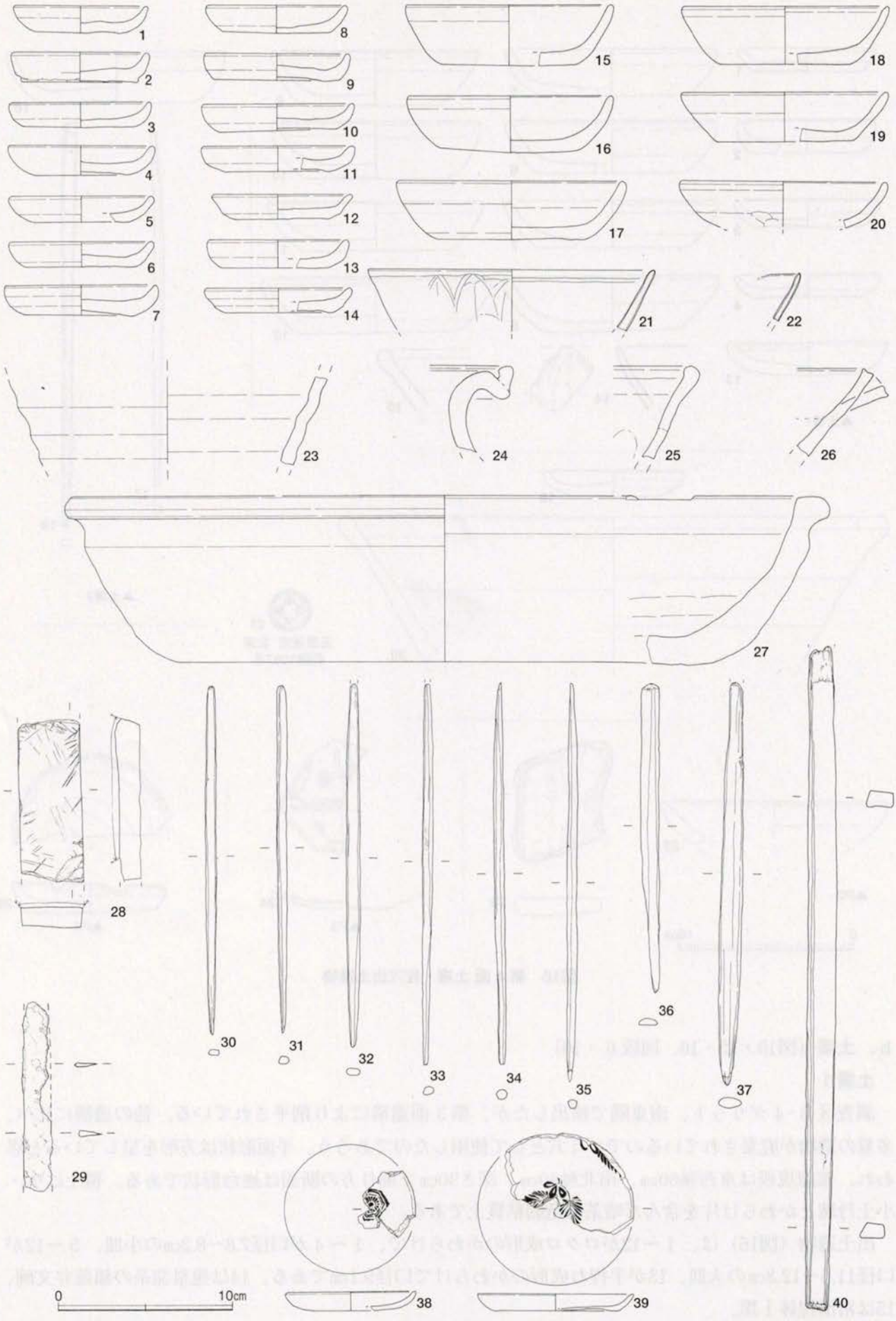


図17　第３面下～第４面上出土遺物

調査区B-2グリットで検出された。本遺構は大型の土壙に切られていて規模は不明である。平面形状は円形を呈していると思われ、確認できた規模は、東西軸60cm以上、南北軸60cm、深さ15cmで掘り方の断面は浅い皿状である。覆土は暗茶褐色粘質土である。

出土遺物（図16）は、16がロクロ成形のかわらけ、17・18は木製品で、17は箸、18は篦である。

土壙3

調査区B-4グリット杭付近で検出された。大型の土壙だが、第3面遺構や当面検出の遺構に削平される形で検出され、土壙2を切っている。従って土壙2よりも新しい時期に位置づけられる。掘り方の平面形状は不整円形を呈すると思われ、断面は浅い皿状である。規模は東西軸106cm、南北軸110cm、深さ10～15cmである。覆土は締まりのない暗茶褐色弱粘質土である。図示可能な遺物は認められなかった。

c．柱穴（図10・15・16、図版6・10）

この面で検出した各柱穴は、前述した掘立柱建物を構成するような柱穴以外はそういった配置を認めることができなかった。P2では当遺構と同様の大きさをもつ鎌倉石が柱受けの根石として残存しており、P9にも20cm大の土丹が残存していた。P3には偏平な鎌倉石が底面に据えられていた。P4は10～20cm大の土丹2個が積み重なっており、P5では礎板と考えられる2枚の板が覆土中に遺存していた。その他の柱穴には見られなかった。掘り方は平面形状が円形または楕円形、断面は逆台形状またはすり鉢状を呈し、規模は径30～40cm、深さ20～50cmである。覆土は凝灰岩質粒を多く含んだ暗茶褐色弱粘質土である。

各柱穴の出土遺物（図16）は、22がロクロ成形のかわらけ大皿、23は常滑窯製品を転用した切り出し痕が認められる転用砥石で、P2より出土。24は青磁櫛掻劃花文皿の底部で、P3より出土。P4からは、25はロクロ成形のかわらけ中皿で、口縁を輪花状に整形しており、推定8弁になるものと推測される。その他の柱穴からはかわらけ小片だけで図示可能な遺物は認められなかった。

d．第3面下～第4面上遺構外出土遺物（図17、図版10）

第3面構築土中及び第4面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。

図17-1～19はロクロ成形のかわらけで、1～14は口径7.4～8.5cmの小皿、15～19は口径11.9～12.8cmの大皿である。20は復元口径12cmを測る手捏ね成形の白かわらけ、21は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗、22は口縁部を輪花状に施してある青磁無文碗、23は褐釉壺の胴部片である。24～26は常滑窯製品で24は甕、25は捏鉢Ⅰ類、26は捏鉢Ⅱ類。27は土器質火鉢、28は凝灰岩質の仕上砥、29は鉄製の刀子、30～37は木製品で、30～35は箸、36は篦、37はヘラ状に加工したものである。38・39は漆器の皿で、38は内面に亀甲花文のスタンプ、39が内面に草花文を手描きしたものである。40は一部漆が付着している用途不明木製品である。

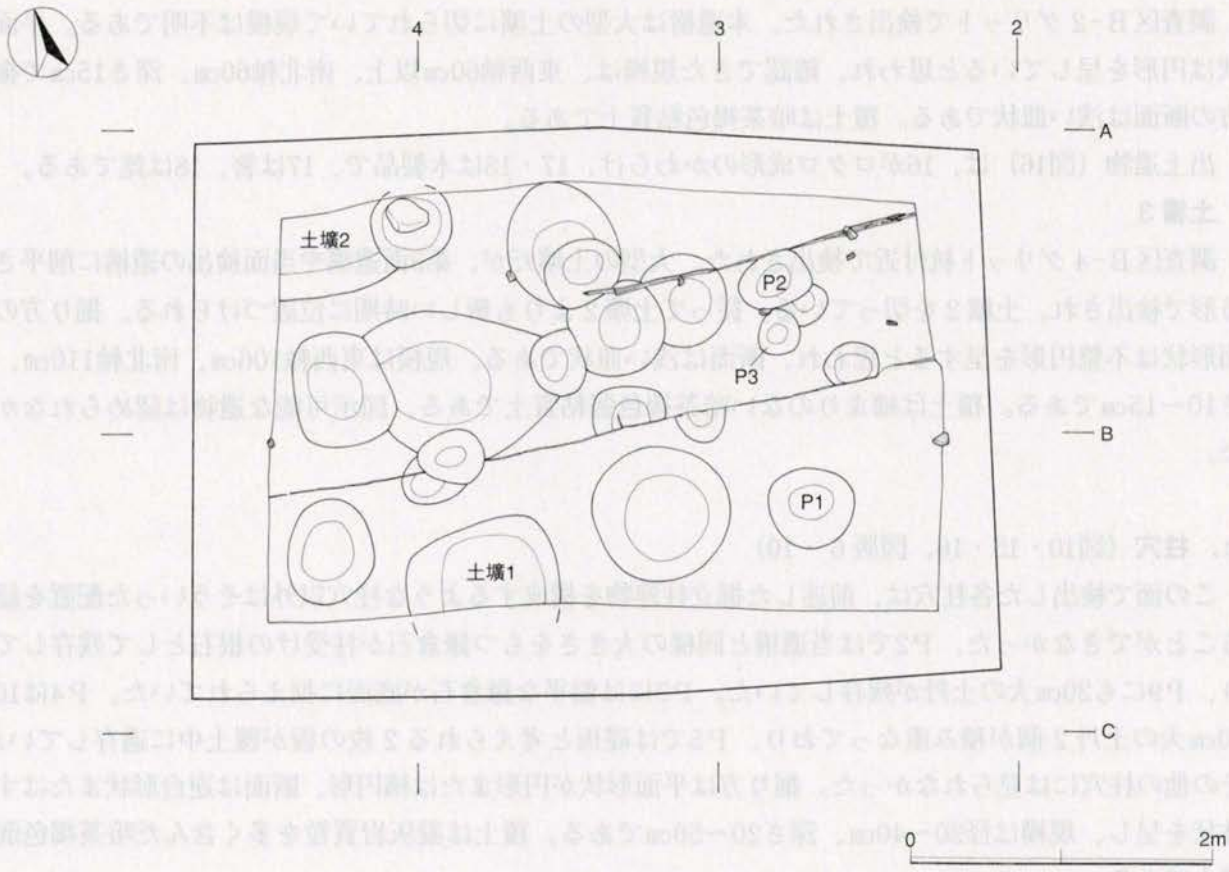


図18　第５面 全測図

５．第５面の遺構・遺物

この面で検出された遺構は網代板壁、土壙４基、掘立柱建物を構成しない柱穴14口である。遺構面の海抜標高は19.30～19.60mである。出土遺物はかわらけ、土器質火鉢、木製品や布が出土している。

a．建物（図18・20、図版７・10）

建物１

調査区Ａ・Ｂ-２～３グリットで検出した。建物形態は網代（板壁）を持つ掘立柱建物であるが、構造的に捉えられないため判然としない。さらに東西に並ぶ柱穴列は調査区ほぼ中央を東西に検出した網代の北側に沿って検出した。網代の軸方位はＮ－92°－Ｅであり、柱穴列も同位置の方位を示す。この網代上部から北側域は10㎝程低く、第4面建物に似た様子が窺え、網代から北側域を建物内と区別した。確認規模は東西２間×南北１間で、東西間の柱間寸法は西から120㎝、140㎝を測る。南北間は160㎝となる。北側の柱穴列は調査区外にあると思われ、調査区内では確認できなかった。各柱穴の平面形状は楕円形または方形を呈すると考えられ、径36～52㎝、確認面からの深さ23～43㎝を測る。掘り方の断面は逆台形状またはすり鉢状を呈す。覆土は凝灰岩質粒・炭化物を少量含んだ暗茶褐色粘質土。また、同じ建物内において調査区北東隅から網代とほぼ同一の軸方位で南側に杭で打たれ補強してある板壁を検出した。長さは226㎝を測る。建物１と関連性はあるのか不明だが、そういった可能性も示唆できよう。

出土遺物（図20）は、各柱穴からは図示可能な遺物は認めることができず、建物内からの出土遺物だけである。１はロクロ成形のかわらけ中皿、２～４は木製品で、２は椀、３・４は端部に漆が付着

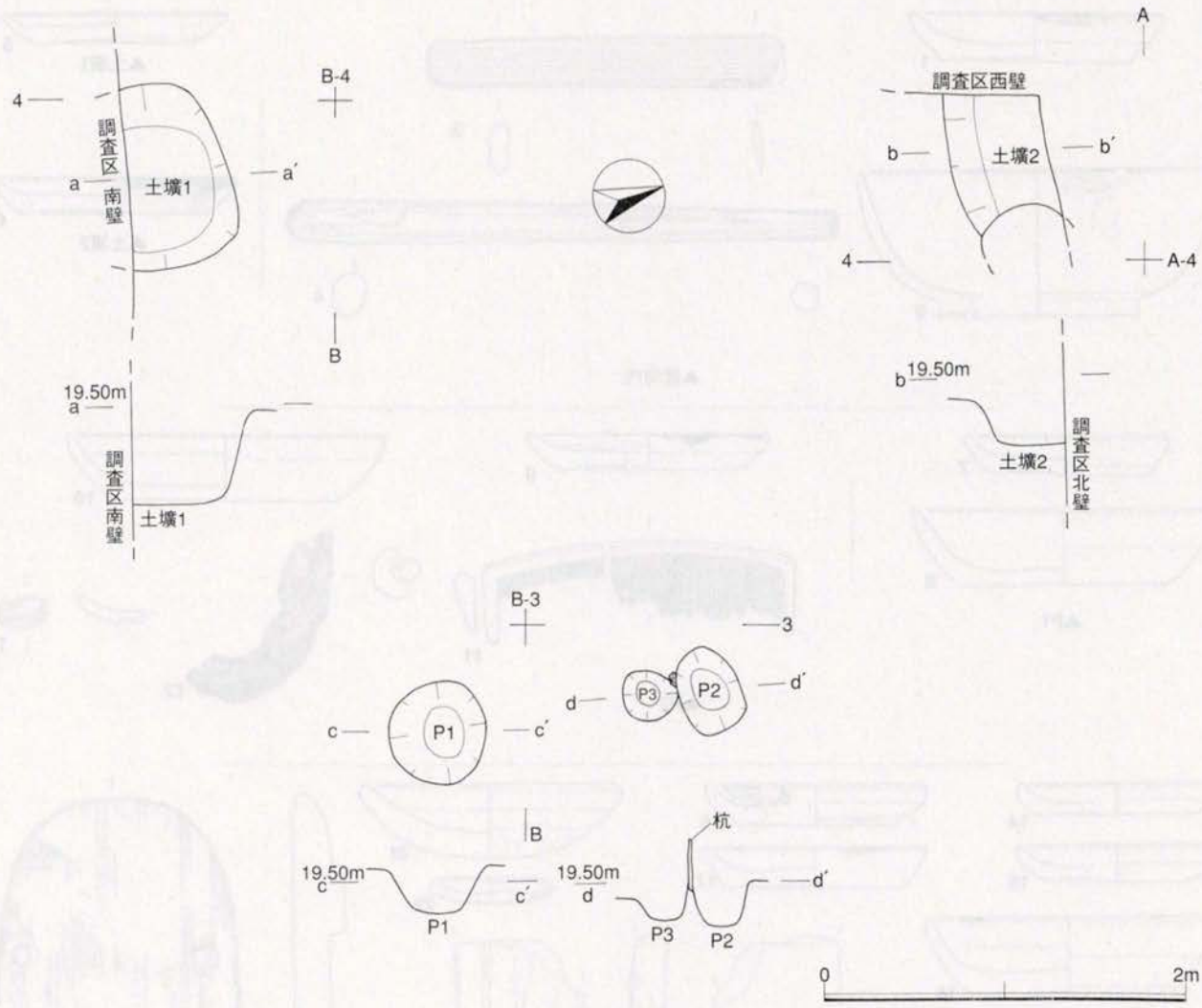


図19　第５面 土壙・柱穴各遺構

しているが用途不明品である。

b．土壙（図18～20、図版7・10）

土壙１

調査区Ｂ-３グリットにおいて検出したが南側部分は調査区外に拡がっている。平面形状は隅丸方形を呈していると考えられ、確認できた範囲では東西径１ｍ、南北径60㎝以上、深さ60㎝前後を測る。掘り方の断面は逆台形状を呈している。覆土は凝灰岩質粒を含んだ暗茶褐色粘質土である出土遺物（図20）は、５がロクロ成形のかわらけ、口径9.2㎝を測る中皿である。そのほかに図示可能な遺物は認められなかった。

土壙２

調査区Ａ-４グリット、北西隅において検出した。東側は柱穴により削平を受け、北・西側は調査区外に拡がっているため、憶測だが平面形状は楕円形を呈すと考えられる。南北径・東西径は削平が激しいため不明である。深さは24㎝を測る。掘り方は逆台形状を呈していると考えられ、覆土は暗茶褐色弱粘質土である。

出土遺物（図20）は、６がロクロ成形のかわらけで外面全体に煤が付着し燈明皿である。

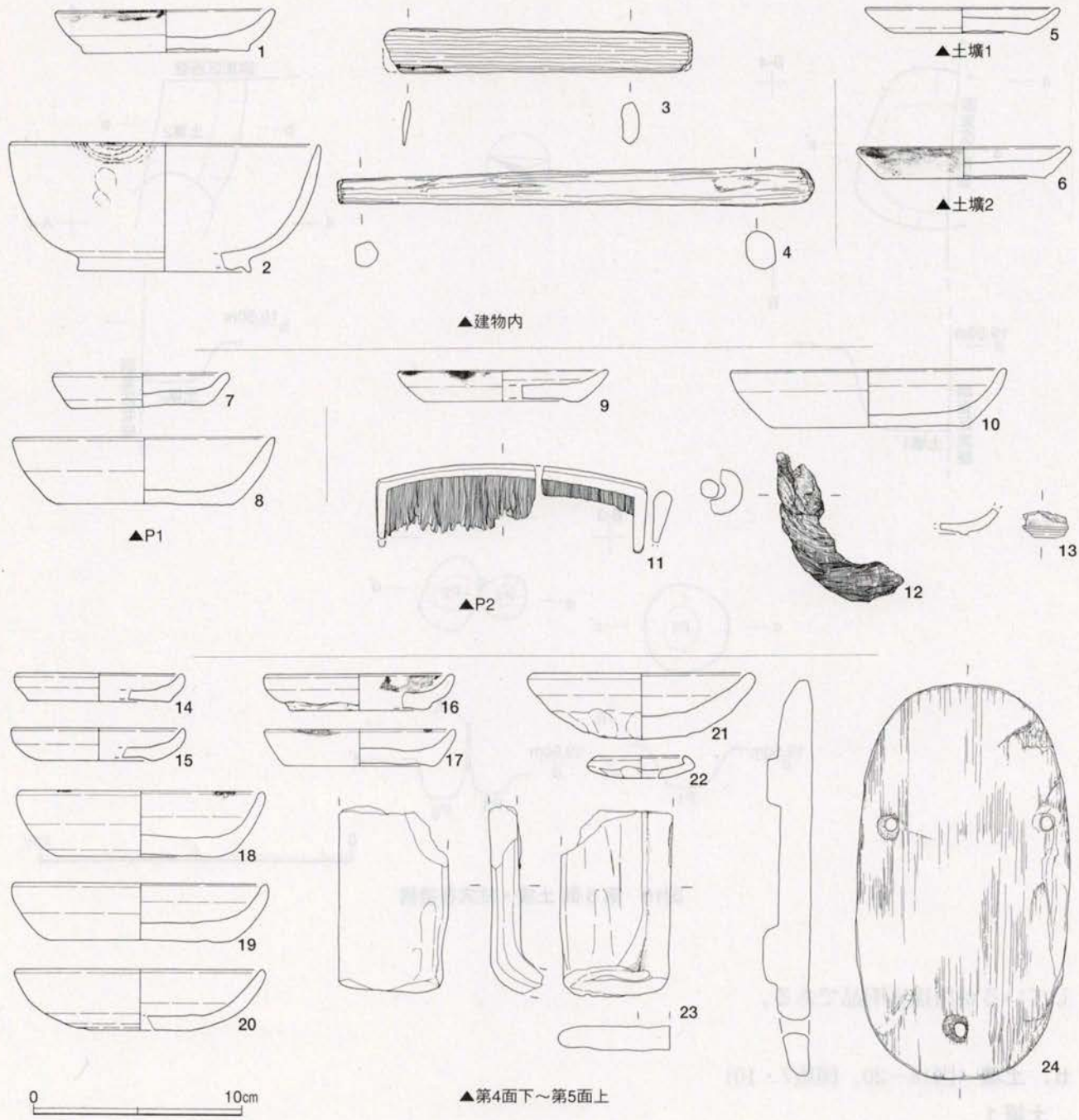


図20　第５面 各遺構・第４面下～第５面上出土遺物

c．柱穴（図18～20、図版７・10）

当面から検出した各柱穴は掘立柱建物などを構成する配置は認めることはできなかった。各掘り方は平面形状が楕円形または不整円形を呈しており、規模は径26～74㎝、確認面からの深さ10～61㎝である。覆土は凝灰岩質粒を若干含む茶褐色粘質土である。

図20-７～13に示した柱穴出土の遺物について簡単に触れる事とする。７・８はロクロ成形のかわらけでＰ1から出土。９・10はロクロ成形のかわらけ、11は黒漆で全体を塗布された木製の櫛、12は捻られ漆で塗り固められている布、13は小片ではあるが外面を黒漆地に朱漆を塗布してある漆器の皿である。9～13はＰ2から出土。

d．第４面下～第５面上遺構外出土遺物（図20、図版10）

第４面構築土中及び第5面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した

図20-14～20はロクロ成形のかわらけで、14～17は口径7.8～9.0㎝の小皿、18～20は口径10.4～12.1㎝の大皿である。21は手捏ね成形のかわらけ、22は口径4.2㎝の極小白かわらけ、23は角型の土器質火鉢、24は連歯下駄である。

表1　遺物観察表（1）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
7-1	第1面　土壙1	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
7-2	〃	かわらけ	(11.6)	(6.4)	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 橙色
7-3	〃	かわらけ	(7.6)	(4.8)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
7-4	〃	かわらけ	12.2	7.2	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
7-5	〃	白かわらけ	／	4.6	／	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 良土 c. 灰白色
7-6	〃	白磁　口兀皿	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰白色半透明　口唇部露胎
7-7	〃	常滑　甕	底部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 褐色 降灰部黄褐色
7-8	〃	常滑　甕	口径（37.6）縁帯幅 2.6			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 暗赤褐色 降灰部黄灰色
7-9	第1面　土壙2	かわらけ	7.8	5.8	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
7-10	〃	かわらけ	11.2	8.0	3.05	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-11	〃	かわらけ	11.2	7.8	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 橙色 f. 燈明皿
7-12	〃	かわらけ	13.6	8.2	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 橙色
7-13	〃	かわらけ	11.2	5.8	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
7-14	〃	かわらけ	12.4	7.2	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-15	〃	瀬戸　折縁深皿	口縁部小片			b. 黄灰色 砂粒 精良土 d. 黄灰緑色 e. 良好 硬質
7-16	〃	常滑　甕	縁帯幅 2.2			b. 暗灰色 砂粒 小石粒 少量 c. 褐色 降灰部緑灰色
7-17	〃	銅製品　銭				f. 元祐通宝 北宋 初鋳 1086 年
7-18	〃	鉄製品　釘	残存長 7.8 ×幅 0.7 ×厚 0.6			
7-19	第1面　溝1	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
7-20	〃	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
7-21	〃	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
7-22	〃	かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
7-23	〃	かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
7-24	〃	かわらけ	(8.0)	(4.6)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 精良土 c. 明黄褐色
7-25	〃	かわらけ	(10.8)	(6.2)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
7-26	〃	かわらけ	(11.2)	(6.2)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
7-27	〃	白かわらけ	胴部小片			b. 微砂 良土 c. 黄褐色
7-28	〃	鉄製品　釘	残存長 7.0 ×幅 0.5 ×厚 0.4			
7-29	第1面上	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
7-30	〃	かわらけ	7.1	4.7	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
7-31	〃	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
7-32	〃	かわらけ	7.2	5.2	1.75	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
7-33	〃	かわらけ	7.4	5.15	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
7-34	〃	かわらけ	(7.8)	(4.2)	1.95	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色
7-35	〃	かわらけ	(10.8)	(6.2)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
7-36	〃	かわらけ	(12.4)	(7.8)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
7-37	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	(14.6)	／	／	b. 明灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色透明 f. 外面鎬蓮弁文
7-38	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片			b. 明灰白色 精良堅緻 d. 緑灰色透明 内外面厚手の施釉 f. 外面鎬蓮弁文
7-39	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文鉢	(11.3)	／	／	b. 明灰白色 精良堅緻 d. 青緑色不透明 f. 外面鎬蓮弁文
7-40	〃	青磁　天目茶碗か	口縁部小片			b. 明灰白色 精良堅緻 d. 明灰緑色不透明
7-41	〃	青白磁　花瓶	最大胴部径（7.6）			b. 明灰白色 精良堅緻 d. 明灰緑色不透明 f. 合わせ型作り 外面印花文
7-42	〃	瀬戸　折縁深皿	口縁部片			b. 乳白色 砂粒 白色粒 良土 d. 明緑灰色 e. 良好 硬質
7-43	〃	瀬戸　卸皿	底部小片			b. 乳白色 白色粒 良土 d. 明緑灰色 e. 良好 硬質
7-44	〃	常滑　甕	縁帯幅 3.0			b. 褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 暗褐色～灰色

表2　遺物観察表（2）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
7-45	第1面上	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 白色粒 多量 c. 灰白色
7-46	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	／	(16.0)	／	b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色
7-47	〃	土器質　火鉢	(43.0)	(32.8)	9.7	b. 灰色 砂粒 小石粒 粗土 c. 褐色～灰色 e. 良好 硬質
7-48	〃	銅製品　銭				f. 景祐元宝 北宋 初鋳 1034 年
7-49	〃	鉄製品　釘	残存長 5.2 ×幅 0.4 ×厚 0.4			
7-50	〃	石製品　砥石	残存長 6.1 ×幅 3.9 ×厚 0.9			c. 灰白色～灰褐色 f. 仕上砥 粘板岩製
9-1	第2面　土壙1	かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色 f. 燈明皿
9-2	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 黄灰色 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 内外面厚手の施釉 f. 外面鎬蓮弁文
9-3	〃	龍泉窯系　青磁鉢	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 暗灰緑色不透明
9-4	〃	瀬戸　小皿	口縁部小片			b. 黄灰色 砂粒 精良土 d. 明灰緑色 内面下位露胎
9-5	〃	石製品 硯	残存長 12.1 ×幅 2.3 ×厚 1.3			c. 灰黒色 f. 粘板岩製
9-6	〃	銅製品　銭				f. 景徳元宝 北宋 初鋳 1004 年
9-7	〃	銅製品　銭				f. 熙寧元宝 北宋 初鋳 1068 年
9-8	〃	鉄製品　釘	残存長 5.7 ×幅 0.8 ×厚 1.0			
9-9	第2面　溝1	かわらけ	8.4	7.0	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
9-10	〃	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
9-11	〃	かわらけ	12.4	7.3	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
9-12	〃	かわらけ	12.8	8.8	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
9-13	〃	かわらけ	12.8	8.9	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
9-14	〃	常滑　甕	口径 (39.0) 縁帯幅 2.4			b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量 c. 暗赤褐色～褐色
9-15	第1面下 ～第2面上	かわらけ	6.6	4.8	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 良土 c. 橙色
9-16	〃	かわらけ	7.2	5.4	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
9-17	〃	かわらけ	7.4	5.2	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
9-18	〃	かわらけ	7.7	5.8	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
9-19	〃	かわらけ	7.3	5.8	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
9-20	〃	かわらけ	7.6	5.8	2.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
9-21	〃	かわらけ	7.6	5.1	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 良土 c. 黄橙色 f. 燈明皿
9-22	〃	かわらけ	7.45	5.65	1.85	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 良土 c. 橙色 f. 燈明皿
9-23	〃	かわらけ	10.7	7.2	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 良土 c. 橙色
9-24	〃	かわらけ	12.3	8.2	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 良土 c. 橙色
9-25	〃	龍泉窯系 青磁天目茶碗	口径 (10.8) 高台径 2.9 器高 5.75			b. 白灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 高台畳付露胎
9-26	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文折縁皿	高台径 10.8			b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄味緑灰色不透明 粗い貫入 高台畳付露胎 f. 外面鎬蓮弁文
9-27	〃	瀬戸　入子	口縁部小片			b. 黄灰色 砂粒 良土 d. 灰色 e. 良好 やや硬質
9-28	〃	常滑　甕	縁帯幅 3.3			b. 明黄褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 黒褐色 降灰部灰白色
9-29	〃	土器質　火鉢	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 粗土 c. 褐色 e. 良好 硬質
9-30	〃	女瓦（平瓦）	残存長 5.1 残存幅 6.9 厚 2.1			a. 凹面斜格子文 離れ砂 凸面横位ナデ 端部ヘラ削り b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗土 e. 良好 硬質
13-1	第3面 建物1-イ	白かわらけ	(8.2)	(7.2)	1.8	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 良土 c. 乳白色
13-2	第3面 建物1-ハ	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 橙色
13-3	〃	かわらけ	12.9	8.4	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
13-4	〃	龍泉窯系　青磁碗	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明
13-5	〃	白磁　小壺	／	(4.6)	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 白灰色透明 外面露胎
13-6	〃	青白磁　合子蓋	(7.2)	／	1.6	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 青緑色透明 口唇部～内面天頂付近露胎 f. 外面印花文・蓮弁文型捺

表3　遺物観察表（3）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
13-7	第3面 建物1-ハ	褐釉 壺 (四耳壺か)	口径 (12.4) 縁帯幅 2.8			b. 灰色 砂粒 白色粒 良土 d. 黒褐色 内面胴部露胎 e. 良好 硬質
13-8	〃	常滑 捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 暗褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 暗赤褐色
13-9	〃	銅製品 銭				f. 皇宋通宝 北宋 初鋳 1038年
13-10	〃	鉄製品 釘	残存長 5.9 ×幅 0.4 ×厚 0.2			
13-11	〃	石製品 砥石	残存長 3.3 ×幅 2.8 ×厚 2.6			c. 黄褐色 f. 中砥 上野産か
13-12	〃	用途不明木製品	長 2.4 ×幅 3.0			f. 中央に穿孔 環状
13-13	〃	用途不明木製品	長 16.3 ×幅 1.9 ×厚 0.7			f. 全体に削り加工 ヘラか
13-14	第3面 建物1-1	かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
13-15	第3面 建物1-2	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
13-16	第3面 建物1-3	かわらけ	12.8	8.8	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
13-17	〃	常滑 捏鉢Ⅰ類	(30.0)	高台径 (14.8)	13.2	a. 貼付高台 b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰褐色 f. 内面磨滅
13-18	第3面 建物1-5	用途不明木製品	長 31.5 ×幅 5.4			f. 全体的に火を受けたのか
13-19	第3面 建物内	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 白針 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
13-20	〃	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
13-21	〃	かわらけ	(8.6)	(6.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 明黄褐色
13-22	〃	かわらけ	(7.6)	(4.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 橙色
13-23	〃	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 白針 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
13-24	〃	かわらけ	7.8	5.6	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
13-25	〃	かわらけ	(12.6)	(8.6)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
13-26	〃	かわらけ	(12.4)	(6.8)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
13-27	〃	白かわらけ	口縁部小片			a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 良土 c. 灰白色
13-28	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	(17.2)	／	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 f. 外面鎬蓮弁文
13-29	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 厚手の施釉 f. 外面鎬蓮弁文
13-30	〃	瀬戸 入子	5.5	3.0	1.7	a. 外底糸切痕 b. 灰白色 砂粒 良土 d. 灰釉 灰白色 e. 良好 硬質 f. 内面夾雑物多量に付着
13-31	〃	常滑 捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色 降灰部暗灰色
13-32	〃	常滑 捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや少量 c. 灰褐色 降灰部暗灰色
13-33	〃	常滑 捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 灰褐色
13-34	〃	常滑 捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 暗褐色 降灰部灰緑色
13-35	〃	常滑 捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 暗褐色 降灰部灰緑色
13-36	〃	常滑 甕	／	(16.0)	／	b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 暗褐色
13-37	〃	常滑 甕	／	(16.4)	／	b. 灰色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 灰色～灰褐色
13-38	〃	鉄製品 釘	残存長 11.9 ×幅 1.2 ×厚 0.2			f. 茎部
13-39	〃	石製品 温石	長 12.0 ×幅 8.5 ×厚 1.7			c. 黒褐色 f. 滑石鍋の底を転用 上方に円孔あり
14-40	〃	木製品 箸	長 17.7 ×幅 0.7 ×厚 0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
14-41	〃	木製品 箸	長 19.9 ×幅 0.5 ×厚 0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
14-42	〃	木製品 箸	長 20.6 ×幅 0.5 ×厚 0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
14-43	〃	木製品 箸	長 22.0 ×幅 0.7 ×厚 0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
14-44	〃	木製品 箸	長 22.4 ×幅 0.7 ×厚 0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
14-45	〃	木製品 箸	長 23.7 ×幅 0.8 ×厚 0.6			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
14-46	〃	木製品 菜箸	残存長 22.2 ×幅 1.0 × 厚 0.8			f. 丸棒状に面取加工
14-47	〃	木製品 菜箸	残存長 22.7 ×幅 0.9 × 厚 0.8			f. 丸棒状に面取加工
14-48	〃	用途不明木製品	残存長 17.8 ×幅 1.6 × 厚 0.7			f. 丸く面取り加工 加工途中か

表4　遺物観察表（4）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
14-49	第3面 建物内	用途不明木製品	残存長10.5×幅1.9×		厚0.8	f. 面取加工
14-50	第3面 溝1	内折れかわらけ	4.7	3.4	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
14-51	〃	かわらけ	(7.5)	(6.0)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 橙色
14-52	〃	かわらけ	(7.5)	(5.2)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
14-53	〃	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
14-54	〃	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色 f. 燈明皿
14-55	〃	かわらけ	(8.5)	(6.7)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
14-56	〃	かわらけ	(13.8)	(9.8)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 赤色粒 白針 小石粒 良土 c. 明黄褐色
14-57	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	(17.0)	／	／	b. 灰色 精良堅緻 d. 暗緑灰色半透明 f. 外面鎬蓮弁文
14-58	〃	褐釉　壺	胴部小片			b. 褐色 砂粒 白色粒 精良土 c. 暗褐色 e. 良好 硬質
14-59	〃	常滑　甕	縁帯幅 1.9			b. 暗灰色 砂粒 小石粒 やや少量 c. 暗赤褐色～黒褐色 降灰部灰緑色
14-60	〃	南部系山茶碗	(13.8)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 やや粗土 c. 灰白色 e. 良好 やや軟質 f. 尾張型
14-61	〃	土器質　火鉢	底部小片			b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 粗土 c. 灰黄色 e. 良好 やや硬質 f. 外底部二次焼成のため剥離
14-62	第2面下～第3面上	かわらけ	(7.2)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
14-63	〃	かわらけ	(8.0)	(6.3)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色
14-64	〃	かわらけ	(7.6)	(6.1)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
14-65	〃	かわらけ	(7.8)	(6.6)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
14-66	〃	かわらけ	(7.2)	(6.0)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
14-67	〃	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
14-68	〃	かわらけ	(7.9)	(5.8)	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
14-69	〃	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
14-70	〃	かわらけ	(11.8)	(7.8)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
14-71	〃	かわらけ	(13.2)	(9.8)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 精良土 c. 橙色
14-72	〃	かわらけ	(13.6)	(8.8)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
14-73	〃	常滑　甕	縁帯幅 1.7			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 暗赤褐色 降灰部灰白色
14-74	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色
14-75	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片（片口部）			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 やや少量 c. 暗赤褐色
14-76	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	(27.6)	／	／	b. 暗褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 暗赤褐色
14-77	〃	土器質　火鉢	底部小片			b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好 軟質
14-78	〃	女瓦（平瓦）	残存長 13.0 残存幅 19.0 厚 2.3			a. 凹面布目痕 凸面縄目痕 横位ナデ b. 灰褐色 砂粒 白色粒 良土 c. 黒灰色 e. 良好 硬質
16-1	第4面 土壙1	かわらけ	(7.8)	(6.1)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-2	〃	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色
16-3	〃	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
16-4	〃	かわらけ	(8.2)	6.1	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-5	〃	かわらけ	(11.8)	(8.4)	2.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-6	〃	かわらけ	(12.0)	(8.4)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
16-7	〃	かわらけ	(11.8)	(8.6)	2.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 小石粒 良土 c. 橙色
16-8	〃	かわらけ	12.2	7.8	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 精良土 c. 橙色
16-9	〃	かわらけ	11.6	7.8	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 良土 c. 橙色
16-10	〃	かわらけ	11.7	8.1	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
16-11	〃	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
16-12	〃	かわらけ	12.8	9.2	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
16-13	〃	かわらけ	9.1	7.1	1.9	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
16-14	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 暗灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 青緑色不透明 f. 外面鎬蓮弁文

表5　遺物観察表（5）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
16-15	第4面　土壙1	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 暗灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰白色 f. 口縁部外面に周回する1条線有り
16-16	第4面　土壙2	かわらけ	(12.2)	(8.7)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
16-17	〃	木製品　箸	残存長20.8×幅0.5×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工
16-18	〃	木製品　箆	長23.3×幅0.8×厚0.3			f. 四角に面取加工
16-19	第4面　P1	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
16-20	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	(15.8)	／	／	b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰褐色 f. 内面煤付着
16-21	〃	銅製品　銭				f. 元豊通宝 北宋 初鋳1087年
16-22	第4面　P2	かわらけ	(12.8)	／	／	b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
16-23	〃	陶片転用砥石	残存長5.5×幅6.1×厚1.0			f. 常滑窯製品の転用品 内面に切り出し痕
16-24	第4面　P3	青磁櫛掻劃花文皿	／	(4.2)	／	a. 削り出し高台 b. 白色 黒色粒 精良堅緻 d. 水青色半透明 外底部露胎 f. 外面櫛掻劃花文
16-25	第4面　P4	かわらけ	8.8	7.4	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色 f. 口縁部を輪花（推定8弁）に加工
17-1	第3面下～第4面上	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
17-2	〃	かわらけ	(7.6)	(6.7)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
17-3	〃	かわらけ	(7.9)	(6.4)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c. 灰褐色 f. 廃棄後に再火されて変色している
17-4	〃	かわらけ	8.2	4.9	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
17-5	〃	かわらけ	8.0	5.4	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 黄橙色
17-6	〃	かわらけ	8.2	6.4	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
17-7	〃	かわらけ	8.6	6.2	1.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
17-8	〃	かわらけ	7.8	5.5	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
17-9	〃	かわらけ	(8.1)	(7.2)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
17-10	〃	かわらけ	(8.5)	(6.3)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
17-11	〃	かわらけ	(8.5)	(5.8)	1.45	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
17-12	〃	かわらけ	(7.4)	(4.7)	1.45	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
17-13	〃	かわらけ	7.8	5.5	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
17-14	〃	かわらけ	(8.2)	(6.1)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
17-15	〃	かわらけ	(12.0)	(7.7)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
17-16	〃	かわらけ	11.9	8.0	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
17-17	〃	かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄褐色 f. 廃棄後に再火されて変色している
17-18	〃	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 黄橙色
17-19	〃	かわらけ	(12.0)	(7.8)	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c. 明黄褐色
17-20	〃	白かわらけ	(12.0)	／	／	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 良土 c. 灰白色
17-21	〃	龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗	(16.5)	／	／	b. 灰色 黒色粒 白色粒 精良堅緻 d. 明緑灰色半透明 内外面厚手に施釉 f. 外面鎬蓮弁文
17-22	〃	青磁　無文碗	口縁部小片			b. 暗灰色 精良堅緻 d. 暗灰緑色不透明 内外面厚手の施釉 f. 口縁部輪花状
17-23	〃	褐釉　壺	胴部小片			b. 暗灰色 黒色粒 良土 d. 暗茶褐色 e. 良好 硬質
17-24	〃	常滑　甕	縁帯幅1.9			b. 灰褐色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色
17-25	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 小石粒 やや多量 c. 明灰色
17-26	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片（片口部）			b. 暗灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 やや少量 c. 暗赤褐色 降灰部灰緑色
17-27	〃	土器質　火鉢	(43.4)	(31.0)	(9.45)	b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好 やや軟質
17-28	〃	石製品　砥石	残存長9.3×幅3.6×厚1.2			c. 明黄褐色 f. 仕上砥 凝灰岩質
17-29	〃	鉄製品　刀子	残存長15.9×幅1.5×厚2.5～3.0			f. 一部刃が残る
17-30	〃	木製品　箸	長20.1×幅0.6×厚0.3			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
17-31	〃	木製品　箸	長20.1×幅0.6×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味

表6　遺物観察表（6）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
17-32	第3面下～第4面上	木製品　箸	残存長20.9×幅0.8×厚0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工
17-33	〃	木製品　箸	残存長21.9×幅0.6×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工
17-34	〃	木製品　箸	長22.0×幅0.6×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
17-35	〃	木製品　箸	残存長23.0×幅0.5×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味
17-36	〃	木製品　筧	長17.7×幅0.5～1.0×厚0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工 先端側を薄く尖り気味に加工
17-37	〃	ヘラ状木製品	残存長23.3×幅1.3×厚0.6			f. 断面多角形に面取加工 先端側尖り加工
17-38	〃	漆器　皿	(7.6)	(4.3)	1.1	f. 黒漆地に朱漆の亀甲花文をスタンプ
17-39	〃	漆器　皿	(9.0)	(6.8)	1.0	f. 外面底部を除き黒漆塗布 黒漆地に朱漆の草花文を描く
17-40	〃	用途不明木製品	残存長38.4×幅1.6×厚0.9			f. 断面多角形に面取加工 一部漆付着
20-1	第5面 建物内	かわらけ	(10.4)	(8.0)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
20-2	〃	木製品　椀	(15.0)	(8.4)	6.1	a. 削出し高台 f. 所々ノミ痕見られる
20-3	〃	用途不明木製品	長14.9×幅2.0×厚0.2～0.8			f. 断面楕円形に削り加工 端部に漆付着
20-4	〃	用途不明木製品	長23.0×幅1.2～1.8×厚1.0～1.4			f. 断面多角形に削り加工 端部に漆付着
20-5	第5面　土壙1	かわらけ	9.2	6.4	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
20-6	第5面　土壙2	かわらけ	10.0	7.8	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 明黄褐色 f. 燈明皿
20-7	第5面　P1	かわらけ	8.4	6.5	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 明黄褐色
20-8	〃	かわらけ	12.4	8.5	3.25	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 明黄褐色
20-9	第5面　P2	かわらけ	(10.0)	(7.4)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
20-10	〃	かわらけ	(13.2)	(9.8)	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
20-11	〃	木製品　櫛	長3.3×幅(12.8)×厚0.3～0.8			f. 密な歯で全体に黒漆を塗布
20-12	〃	用途不明　布	長8.8×幅1.9×厚0.9			f. 布をねじり漆で塗り固めている
20-13	〃	漆器　皿	底部小片			f. 黒漆地で外面に周回する様に朱漆を塗布
20-14	第4面下～第5面上	かわらけ	(7.8)	(6.8)	1.35	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
20-15	〃	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
20-16	〃	かわらけ	(8.8)	(6.4)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 明黄褐色 f. 燈明皿
20-17	〃	かわらけ	(9.0)	(7.0)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色 f. 燈明皿
20-18	〃	かわらけ	(11.6)	(8.0)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 f. 燈明皿
20-19	〃	かわらけ	(12.1)	(8.8)	2.85	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色
20-20	〃	かわらけ	(11.8)	(5.0)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
20-21	〃	かわらけ	(10.4)	(8.8)	3.1	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
20-22	〃	白かわらけ	4.2	5.2	1.05	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 良土 c. 灰白色
20-23	〃	土器質　火鉢	残存長9.1×幅1.0×厚1.1～1.5			b. 明黄褐色 砂粒 粗土 c. 黒褐色 f. 角型火鉢
20-24	〃	木製品　連歯下駄	台部：長19.1 幅10.2 厚1.5 歯部：高2.6 幅9.9～10.1			f. 板目取り

第4章　まとめ

本調査地点は、鎌倉市浄明寺二丁目474番11外に所在しており、現在谷戸の入り口付近にある報国寺に近接している。約30㎡と限られた範囲の調査であったが調査結果から、鎌倉時代を中心とする5時期にわたる生活面とそれに伴う遺構・遺物が検出された。各生活面で検出した遺構や遺物からその年代観と調査で得られた成果を述べる。

第5面は、柱間寸法や構造的に判然としないが網代（板壁）を持つ掘立柱建物の一部と大型の土壙や柱穴を検出した。出土遺物の量は少ないが、出土遺物や第4面との相互年代を考慮すると、検出遺構を含めた生活面は、概ね13世紀前半までの年代観が与えられ、13世紀中葉を中心とする年代が想定される。

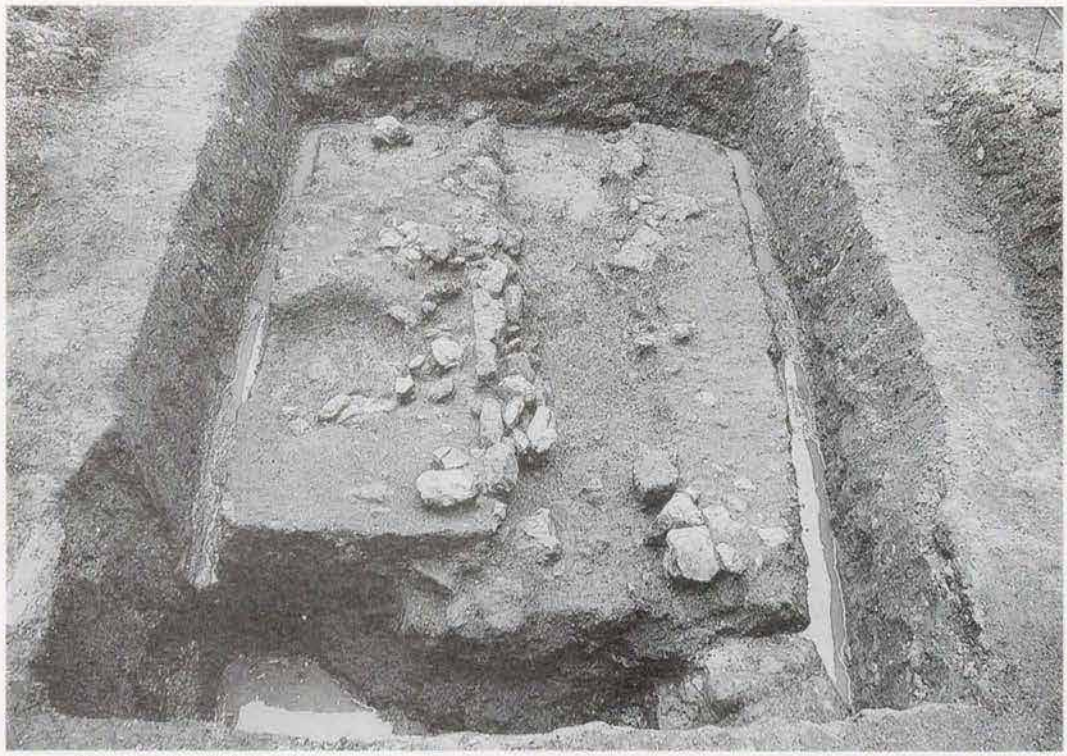
第4面では北側に石（土丹）積みし、それらを杭で補強した構造をもった掘立柱建物を検出した。第3面検出の建物より規模が大きい様相が窺えた。鎌倉市内遺跡でもこれと類似した構造をもった例が確認されている。また、土壙1からは多量のかわらけなどが出土しており、ゴミ穴として一括廃棄されたと思われる。出土遺物ではかわらけ、龍泉窯系青磁鎬連弁文碗、褐釉壺、常滑窯製品、木製品箸や漆器皿などの出土が確認されており、第5面に比べ生活レベルが若干向上したと考えられる。第3面では東西に走る溝とそれに削平される形の掘立柱建物が確認できた。第4面建物廃絶後、暗茶褐色粘質土を基盤とする有機物腐植土により埋め立てられ、新たにほぼ同位置・軸方位で底部に礎板を据えた柱穴が並ぶ掘立柱建物が検出された。建物廃絶後に両脇を土丹・鎌倉石で補強された溝が造成された。この溝は谷戸内部に向かい若干下っている。第4・3面の年代は遺物の組成からみると、前者は概ね13世紀後半、後者は13世紀後葉と位置づけられ、近い時期で連続した生活面であると想定できる。

第2・1面共に第3面で検出した溝と同様の構造で形成されている。主軸方位は若干のズレはあるものの第3面から続く溝を3時期にわたり、踏襲する様相を呈している。この溝については図1-1B地点（浄明寺二丁目474番12）の調査においても確認されている。遺物の組成からみた年代は、第2面～第1面にかけて14世紀前葉～15世紀代の様相を呈しており、連続した生活面と思われる。

以上のように、本調査地点における生活空間の形成は遅くとも鎌倉時代中期より開始され、少なくとも3時期にわたり居住空間を形成していたものと考えられる。また、報国寺は建武元（1334）年の開創（開基説を除く）と伝えられているが、遺構・遺物の変遷から第2～1面は報国寺に関連する時期だと思われ、5～3面においては報国寺開創以前に谷戸の呼称にもなっている宅間氏と関連していた時期・空間かと思われる。報国寺の前身として宅間氏による谷戸開発が行われていたことが推測される。

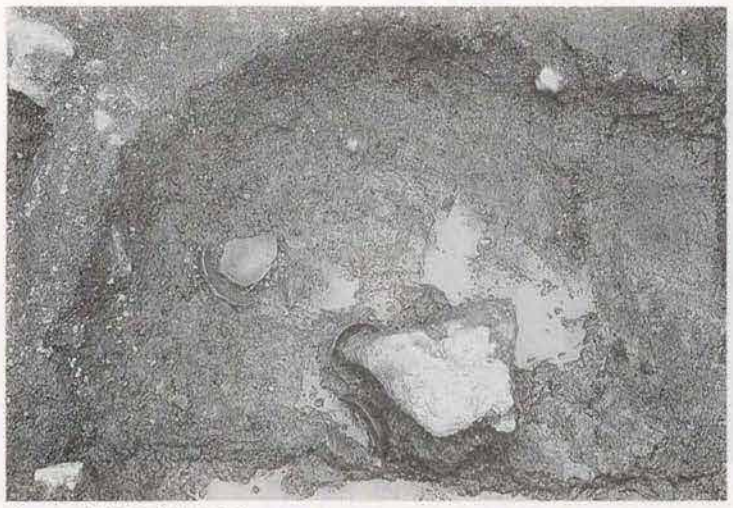
【参考文献】

松尾宣方　1994「公方屋敷跡（No.268）浄明寺三丁目143番地2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』鎌倉市教育委員会



▲ a. 第 1 面全景（東から）

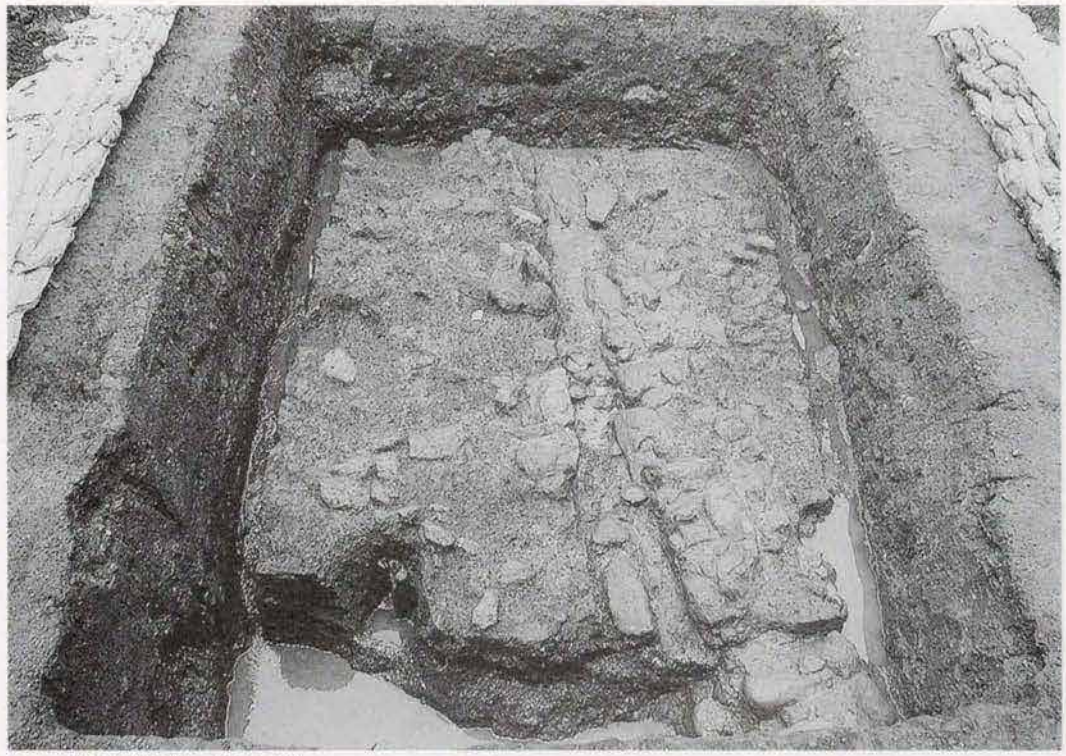
▲ b. 土壙 1（南から）



▲ c. 土壙 2（西から）

▲ d. 溝 1（西から）

図版 2

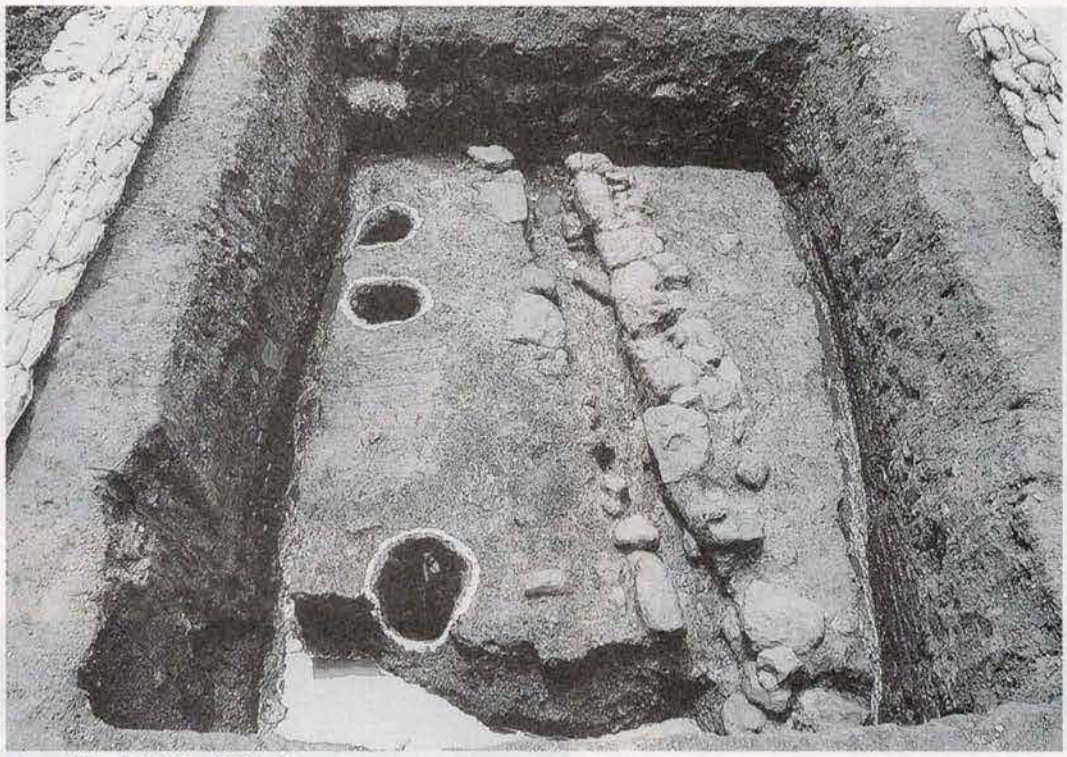


▲ a. 第 2 面全景（東から）

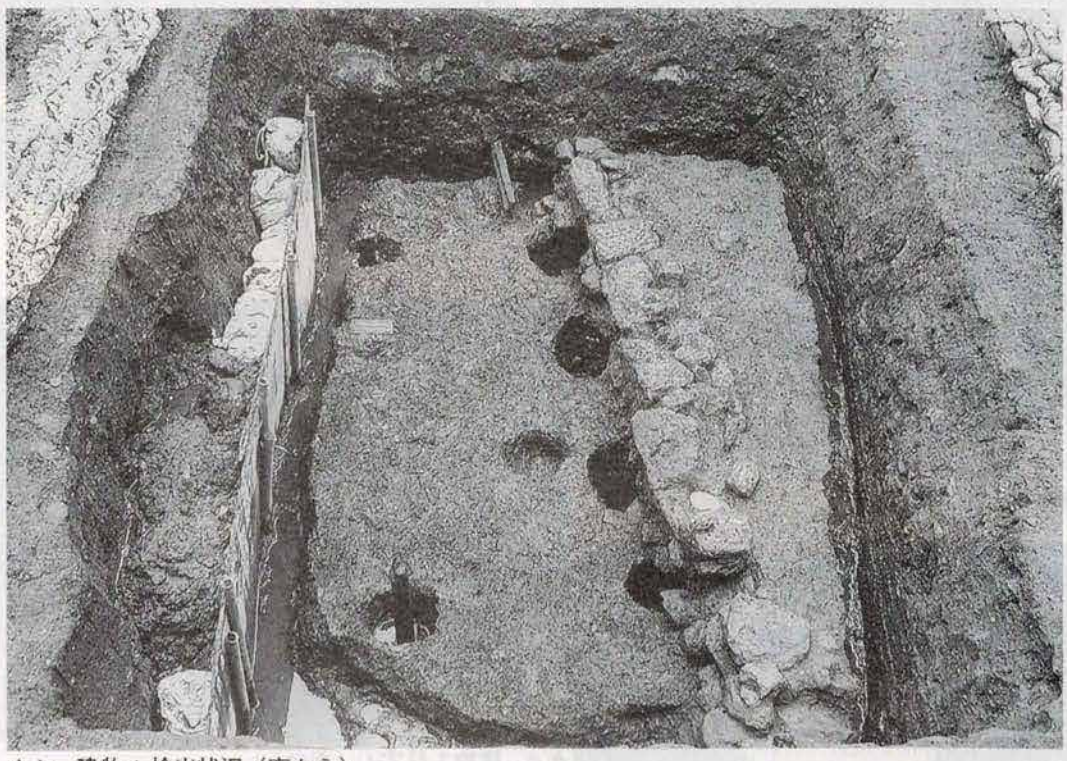
▲ b. 溝 1（西から）

▲ c. 溝 1 かわらけ出土状況（北から）

▲ d. 2 面上 青磁天目茶碗出土状況（東から）

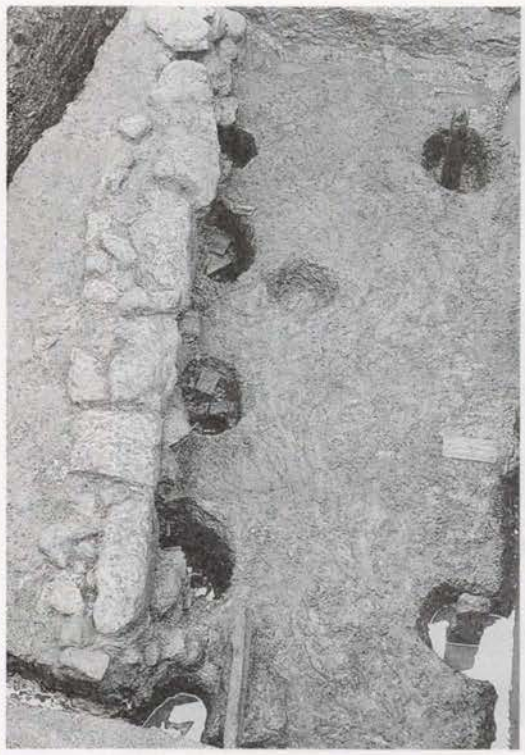


▲ a. 第 3 面全景（東から）

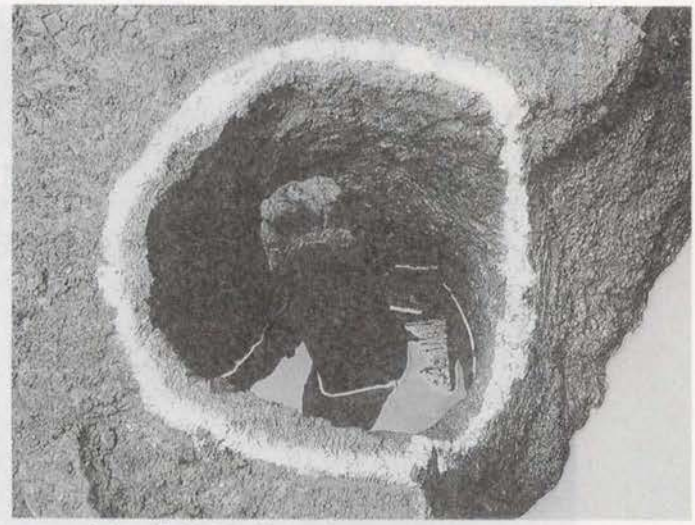


▲ b. 建物 1 検出状況（東から）

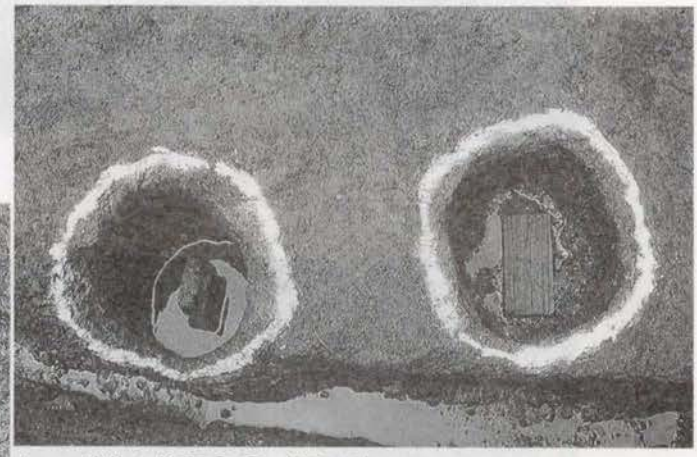
図版 4



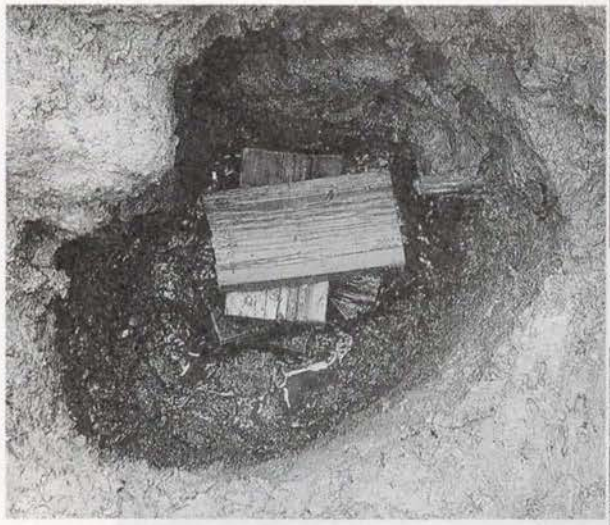
▲ a. 第 3 面建物1柱穴列（西から）



▲ b. 建物 1 柱穴㋑（南から）

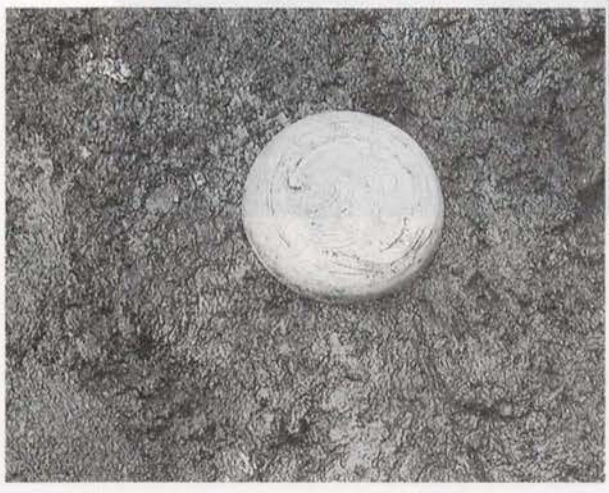


▲ c. 建物 1 柱穴㋺㋩（南から）

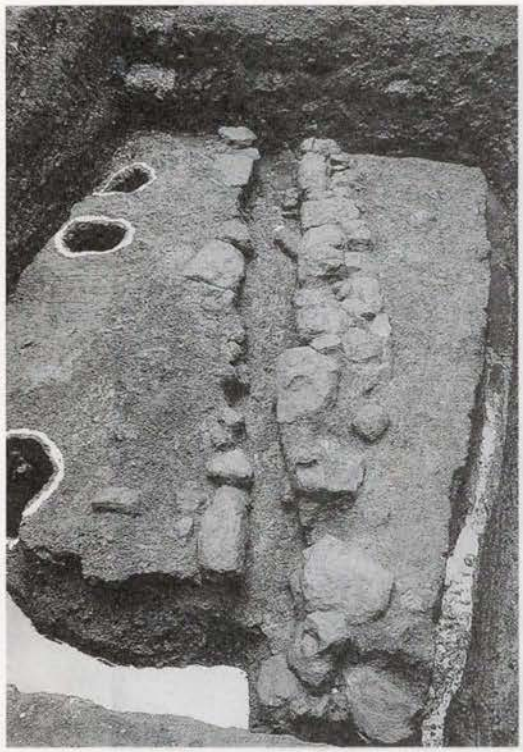


▲ d. 建物 1 柱穴②（南から）

▲ e. 建物 1 柱穴④（南から）



▲ f. 建物内 瀬戸入子出土状況（東から）

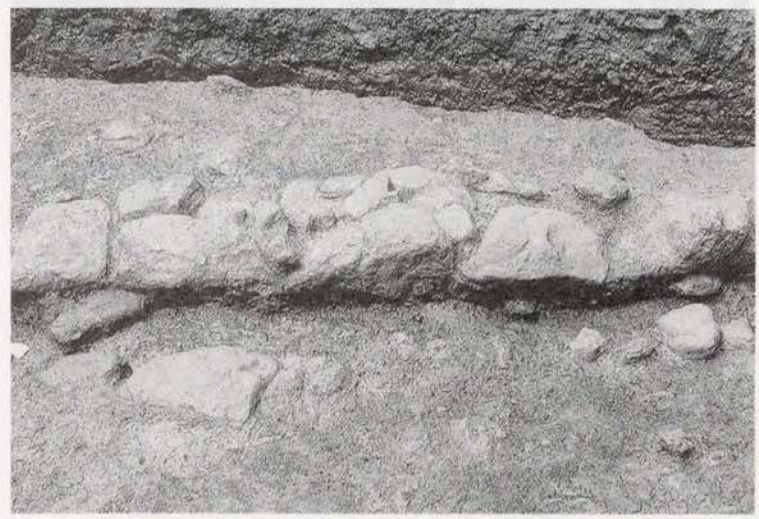


（南から）

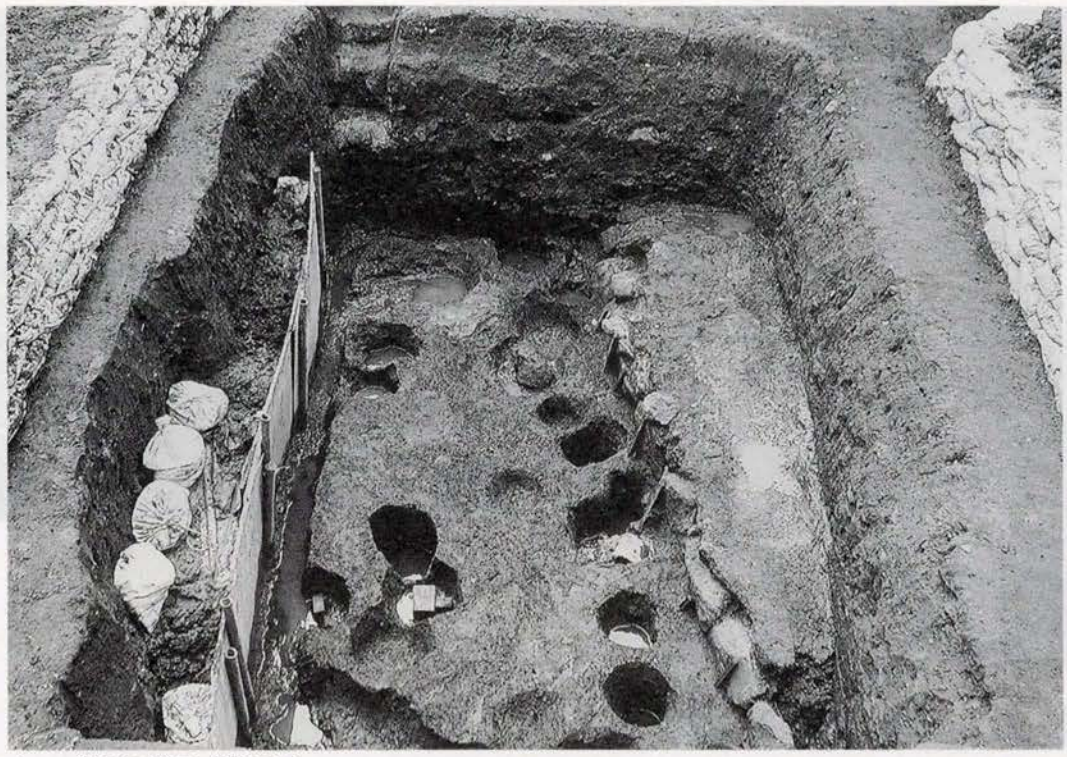
◀a. 第3面 溝1

（東から）

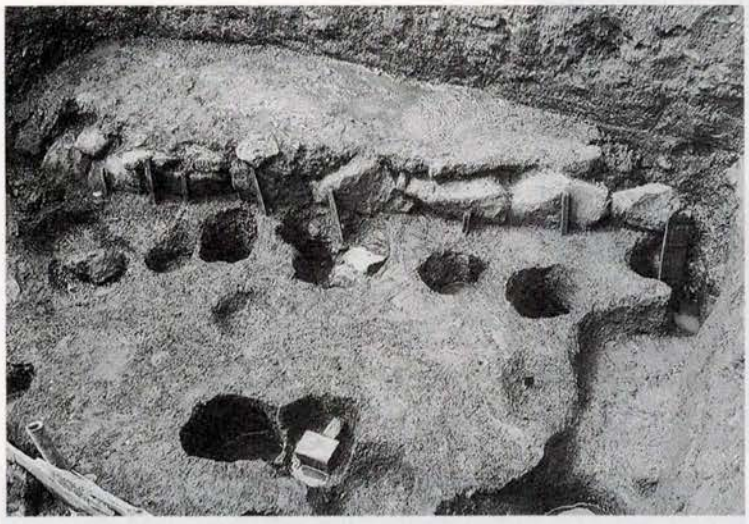
b. 溝1石積み状況（南から）▶



図版 6



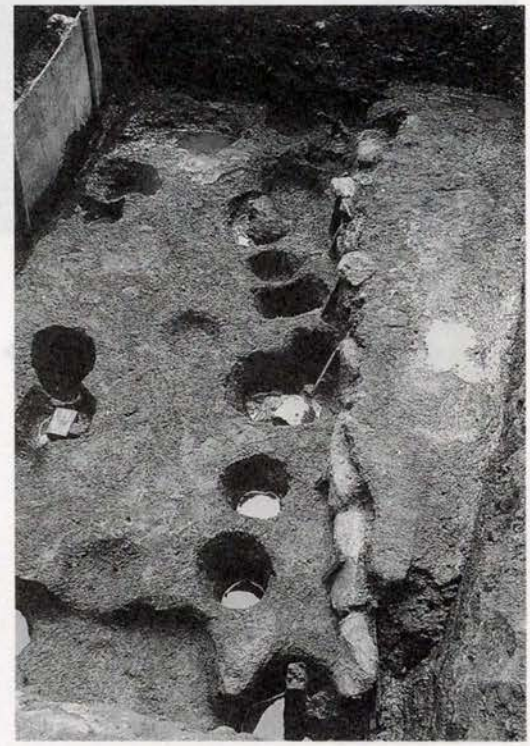
▲ a. 第 4 面全景（東から）

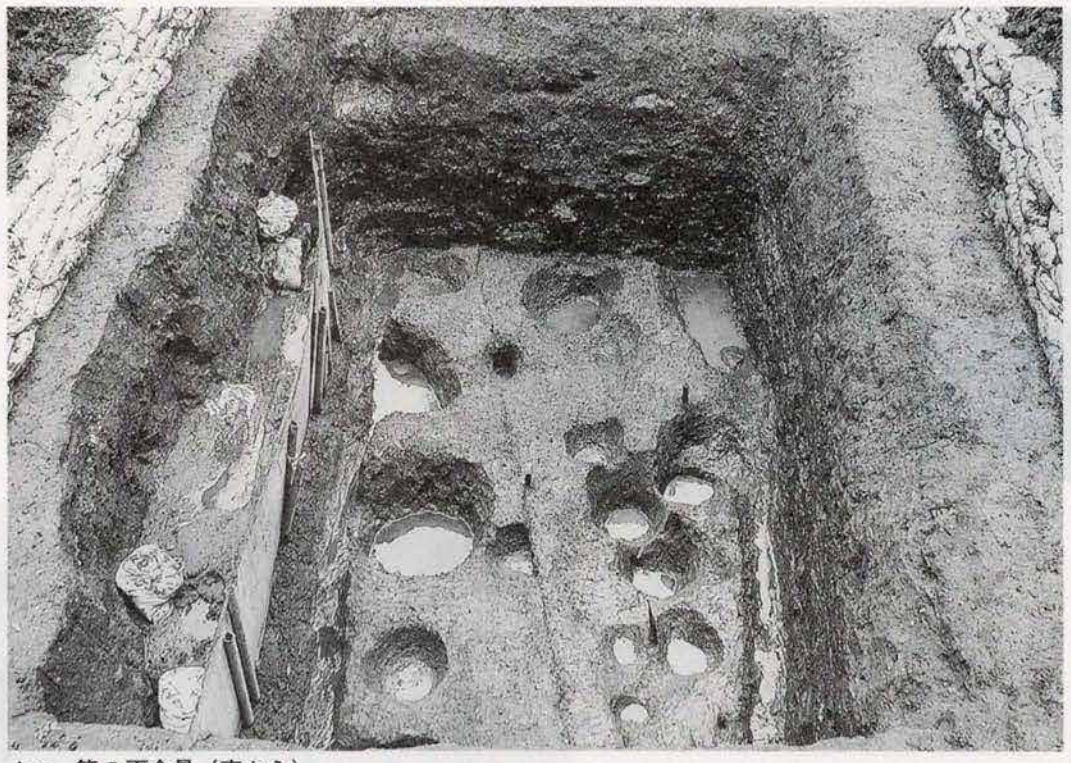


（南から）

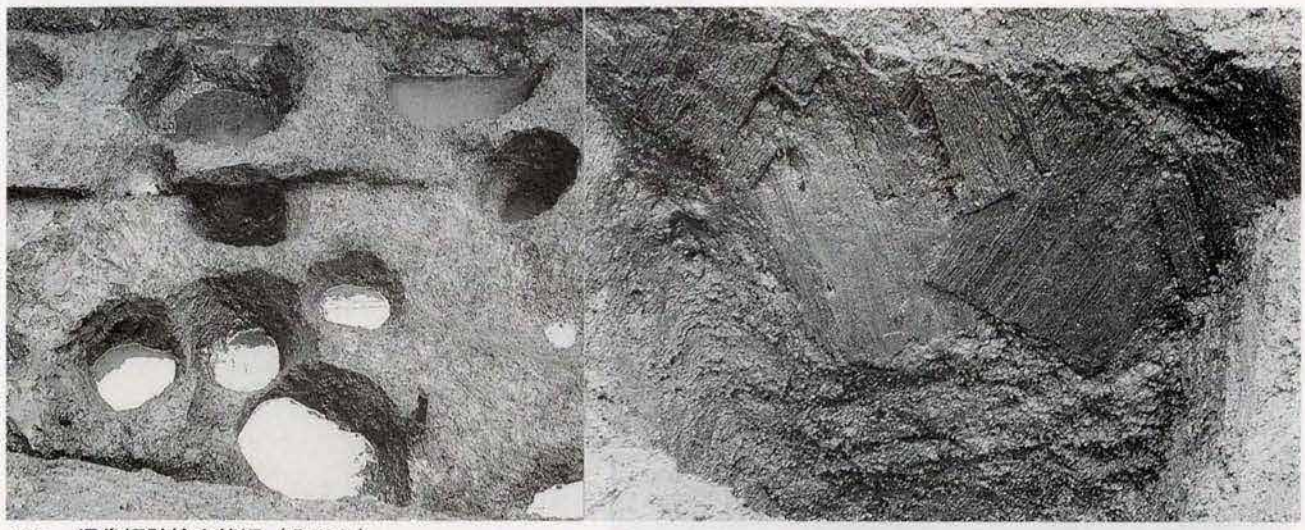
b. 建物 1 北辺石積み状況 ▲▶

（東から）

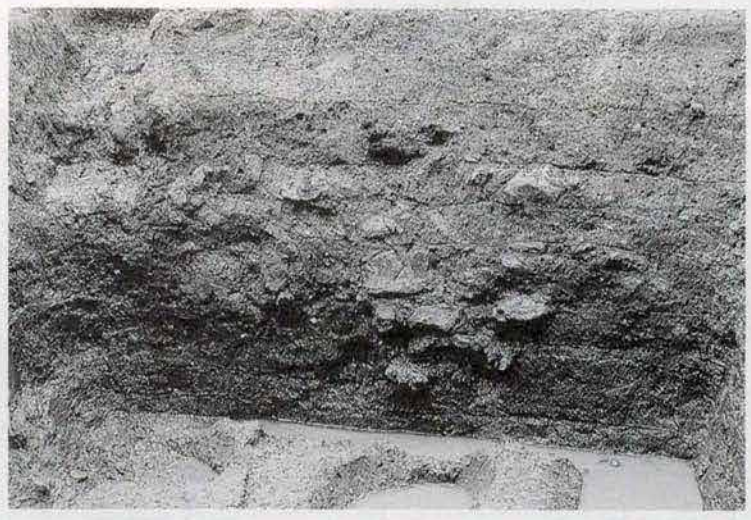




▲ a. 第 5 面全景（東から）

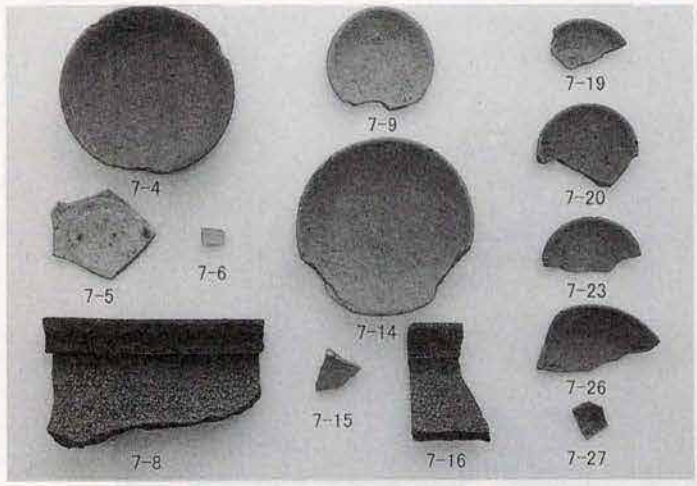


▲ b. 網代板壁検出状況（北から）

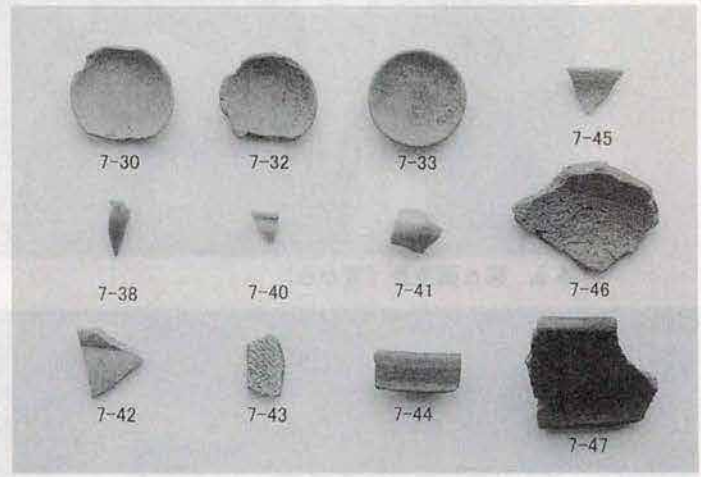


▲ c. 調査区西壁
土層堆積

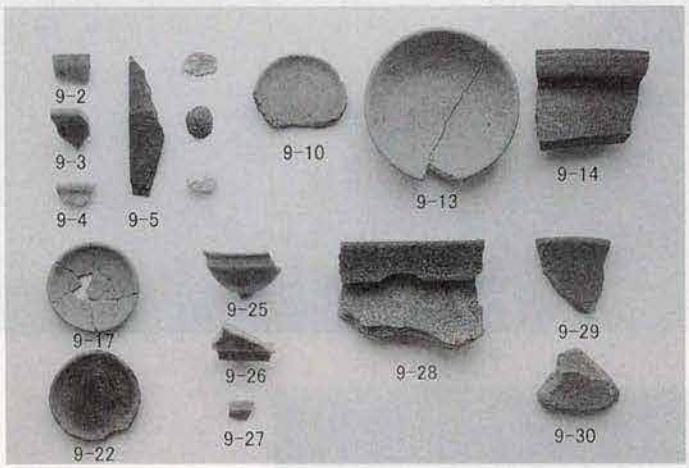
図版 8



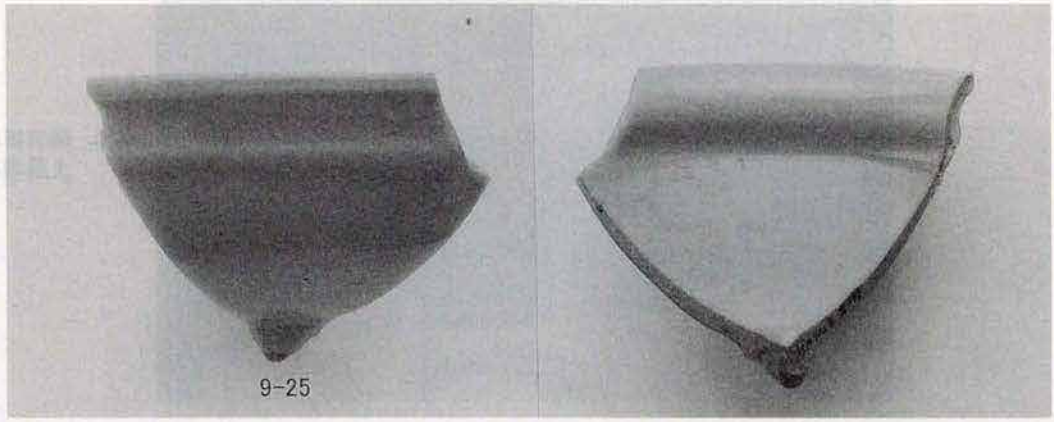
◀▼a. 第 1 面 各遺構・1 面上

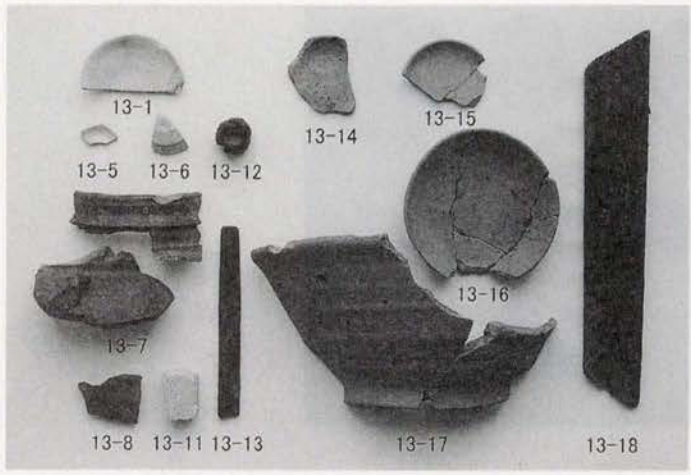


b. 第 2 面各遺構・
▼第 1 面下～第 2 面上

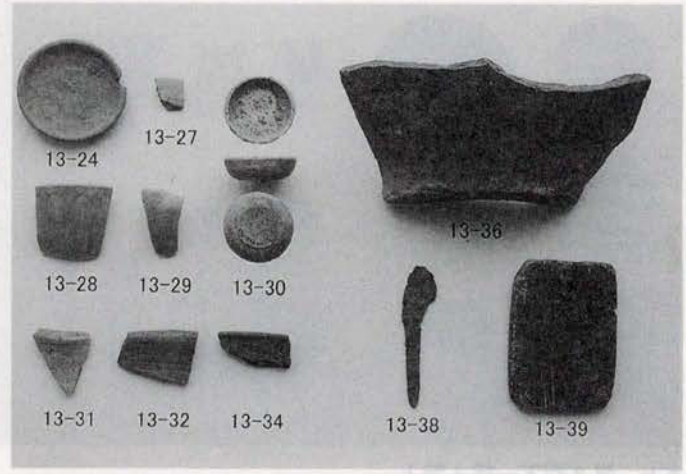


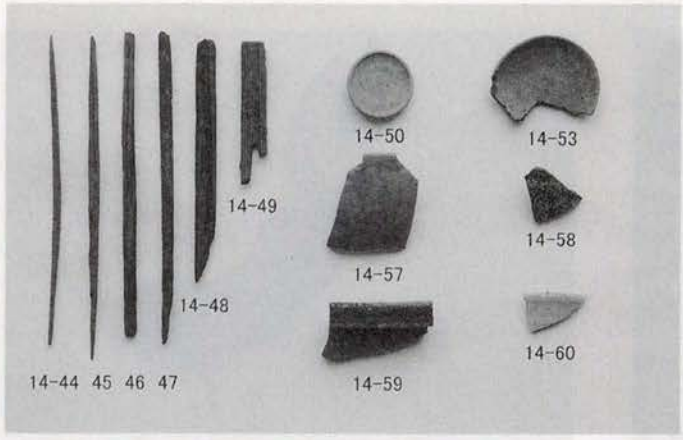
c. 2 面上出土 青磁天目茶碗
▼



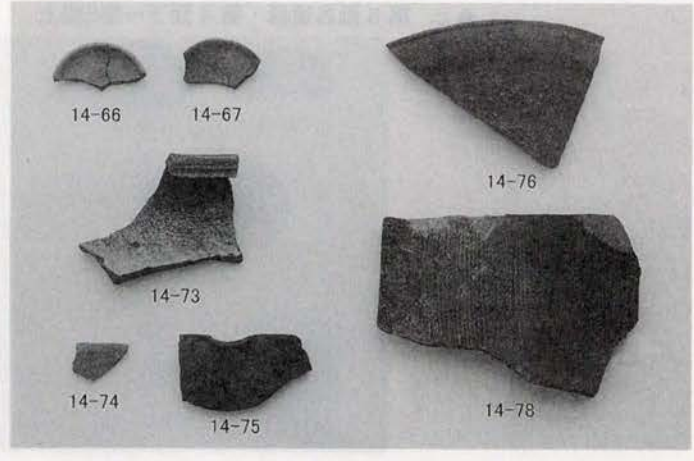


◀a. 第３面 建物１
▼

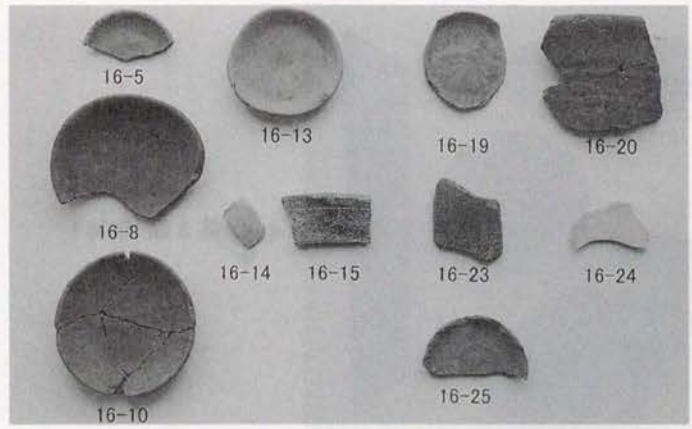




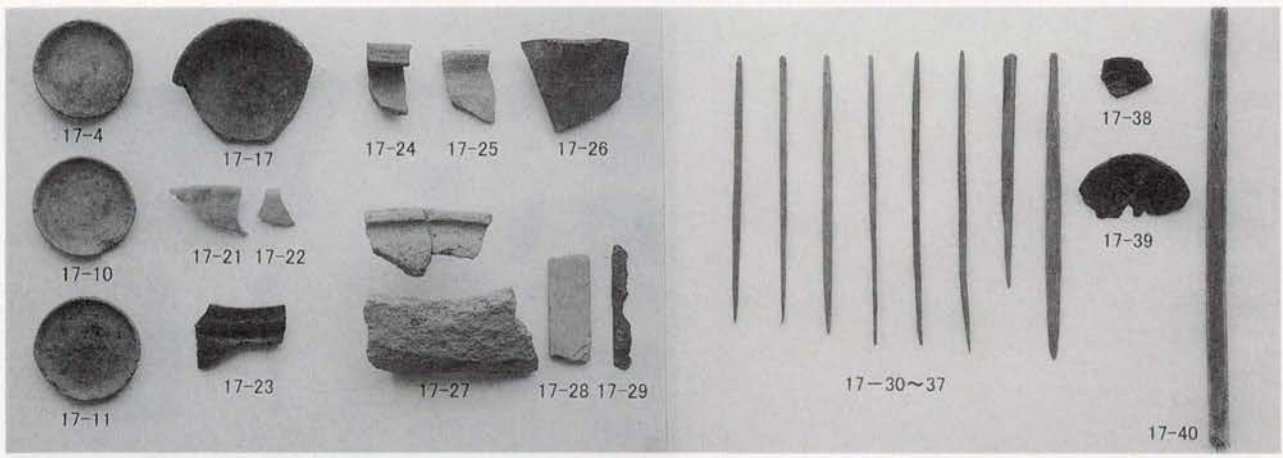
◀b. 第３面 各遺構
▼ 第2面下～第3面上



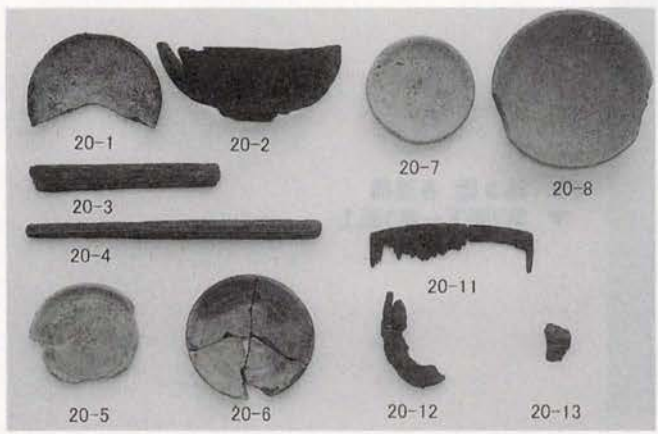
図版10

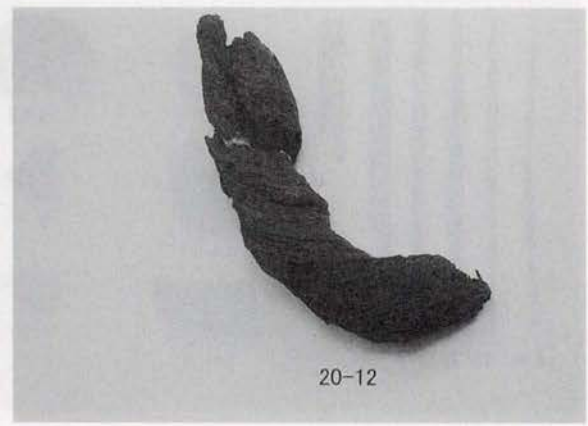


▲a. 第4面土壙・柱穴



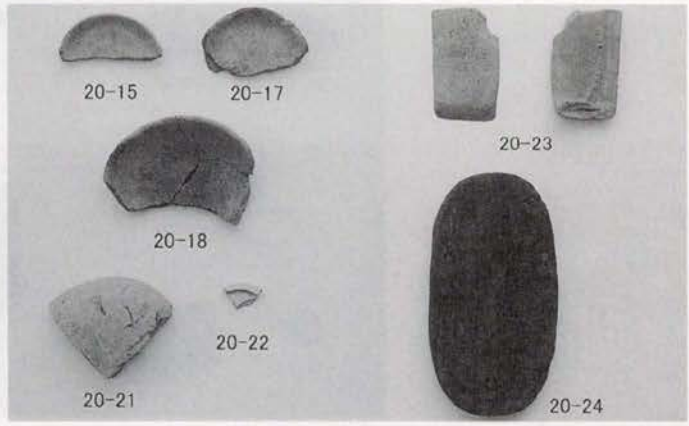
▲b. 第3面下～第4面上





▲c. 第5面各遺構・第4面下～第5面上

▶



報国寺遺跡（ほうこくじいせき）　(No.306)

浄明寺二丁目474番12地点

例　言

1. 本報は、報国寺遺跡（県遺跡台帳No.306）の遺跡内に所在する鎌倉市浄明寺二丁目474番12地点における個人専用住宅（杭基礎構造）建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成15年７月28日～同年8月31日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
   調査担当者：原　廣志
   調　査　員：須佐直子・須佐仁和・早坂伸市・中川建二・椙岡渓音
   調査補助員：宇都洋平・高橋拓也・山口正紀・小野夏菜・野崎美帆（鶴見大学生）、橋本和之・原　考史（国士舘大学生）、銘苅春也
   協力機関名：鎌倉考古学研究所・東国歴史考古学研究所
4. 本報の執筆は、第1～2章まで小野が執筆、原が監修し、第3章については調査員協議のもと小野が稿を草した。
   挿図・写真図版の作成には、須佐（直）・野崎・山口が行い、遺物観察表を山口が作成した。
5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を原・須佐（仁）、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物、図面類、写真類などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
   ・挿図縮尺　全測図：１／50
   　遺構図：１／40
   　遺物図：１／３、１／６
   ・遺 構 図　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している
   ・遺 物 図　－・－・－は釉薬範囲を示す。黒塗は燈明皿付着の油煙煤、漆器の朱漆文様を表現する。手捏ねかわらけ底径の法量は外底指頭痕と口縁部との境、稜部の数値を表している。
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の多くの方々からご助言とご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
   秋山哲雄・大三輪龍彦・加納克己・河野眞知郎・菊川　泉・菊川英政・五味文彦・佐藤仁彦・宗臺秀明・宗臺富貴子・田代郁夫・浜野浩美・福田　誠・松尾宣方・馬淵和雄

目　　次

本 文 目 次

第１章　調査の概要 …… 293
1. 調査の経緯と経過 …… 293
2. 測量軸の設定 …… 293
3. 層序と生活面 …… 295

第２章　検出遺構と出土遺物 …… 298
1. 第１面の遺構・遺物 …… 298
2. 第２面の遺構・遺物 …… 301
3. 第３面の遺構・遺物 …… 302
4. 第４面の遺構・遺物 …… 306
5. 第5a面の遺構・遺物 …… 309
6. 第5b面の遺構・遺物 …… 309

第３章　まとめ …… 322

挿 図 目 次

図１　測量基準点設定図・グリット配置図 …… 294
図２　調査区東壁土層堆積図 …… 295
図３　第１・２面全側図 …… 297
図４　第１面土壙・溝各遺構 …… 298
図５　第１面各遺構・第１面出土遺物 …… 299
図６　第２面溝・柱穴 …… 300
図７　第２面各遺構・第１面下～第２面上出土遺物 …… 301
図８　第３・４面全側図 …… 303
図９　第３面・各遺構 …… 304
図10　第３面各遺構・第２面下～第３面上出土遺物 …… 305
図11　第４面建物１・通路地業堆積 …… 307
図12　第３面下～第４面上出土遺物 …… 308
図13　第5a・5b面全側図 …… 310
図14　第5a面溝・第5b面各遺構 …… 311
図15　第5a面各遺構・第４面下～第5a面上出土遺物 …… 312
図16　第5b面各遺構出土遺物 …… 313
図17　第5a面下～第5b面上出土遺物 …… 315
図18　調査区地点位置図 …… 323

表 目 次

表１　遺物観察表（1） …… 316
表２　遺物観察表（2） …… 317
表３　遺物観察表（3） …… 318
表４　遺物観察表（4） …… 319
表５　遺物観察表（5） …… 320
表６　遺物観察表（6） …… 321

図 版 目 次

図版１　a．第１面全景（東から）……324
　　b．第２面全景（東から）……324
図版２　a．第３面全景（東から）……325
　　b．建物１柱穴（東／北から）……325
図版３　a．第４面全景（東から）……326
　　b．建物１（東から）……326
　　c．建物１礎板検出状況（南から）……326
　　d．通路（西から）……326
　　e．通路地業土層堆積（東から）……326
図版4　a．第5a面全景（東から）……327
　　b．第5b面全景（東から）……327
図版5　a．第5a面木組み遺構1（北から）……328
　　b．溝１（東から）……328
　　c．第5b面木組み遺構２（南から）……328
　　d．土壙１・P2（北から）……328
　　e．調査区東壁土層堆積……328
図版6　a．第１面各遺構・１面上……329
　　b．第２面各遺構・第１面下～第２面上……329
　　c．第３面各遺構・第２面下～第３面上……329
図版7　a．第３面下～第４面上……330
　　b．第5a面各遺構・第４面下～第5a面上……330
　　c．第5b面各遺構……330
　　d．第5a面下～第5b面上……330

第１章　調査の概要

１．調査の経緯と経過

本調査地点は、報国寺遺跡（県遺跡台帳No.306）の東側一角に位置しており、県道金沢鎌倉線から滑川に架かる華の橋を渡り、南へ800m程入った東側に位置した鎌倉市浄明寺二丁目474番12地点に所在している。今回の現地調査に先立ち、個人専用住宅の建設工事についての事前相談があり、工事の実施により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれが予想された。このため鎌倉市教育委員会により確認調査を実施したところ、現地表下70㎝以下に中世遺物包含層及び中世遺構面が存在することが明らかになった。これにより当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、事業者との間で協議を経て文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との調査実施による工程・方法調整の協議及び発掘調査の準備が整った後、平成15年７月28日から１ヵ月の予定で調査面積21.00㎡を対象として発掘調査を開始することになった。

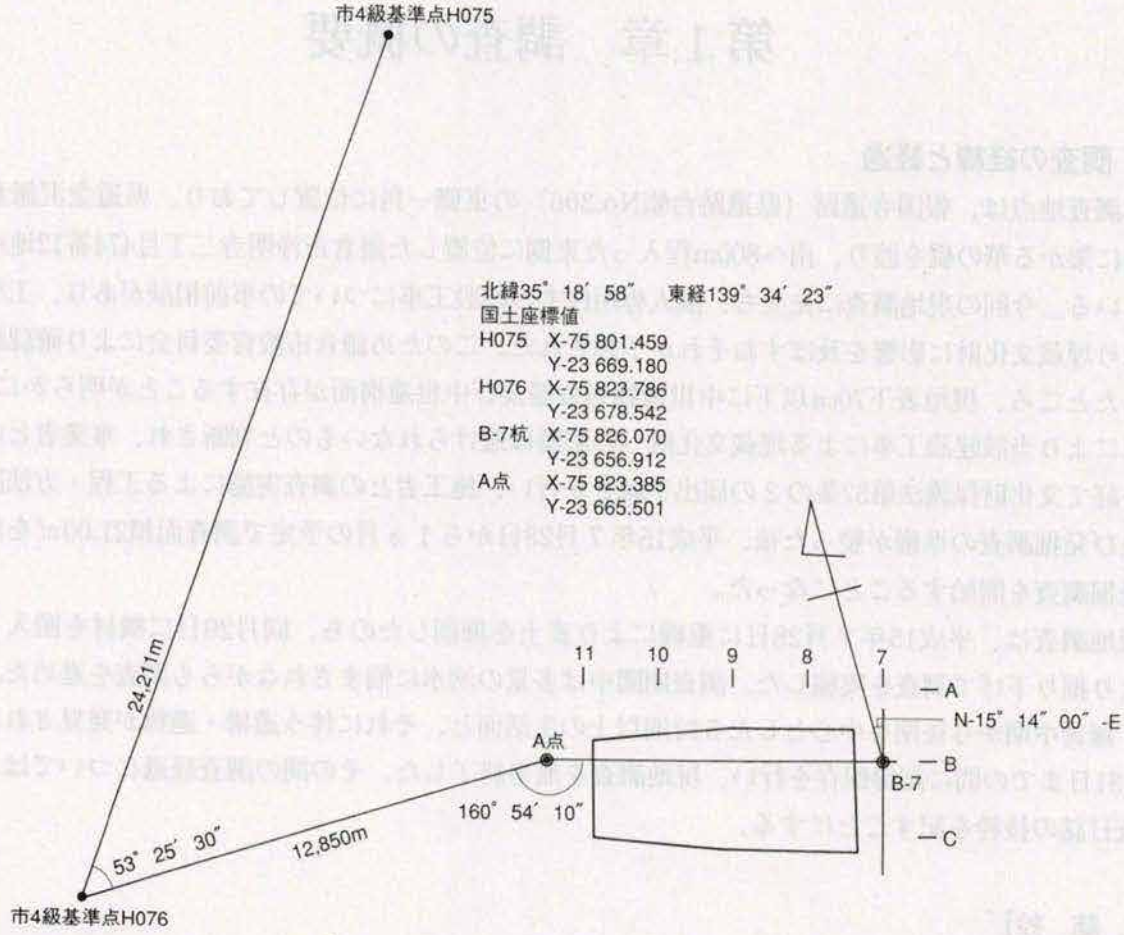
現地調査は、平成15年７月28日に重機により表土を掘削したのち、同月29日に機材を搬入し、人力により掘り下げて調査を実施した。調査期間中は多量の湧水に悩まされながらも調査を進めた。その結果、鎌倉中期から後期を中心とした５時期以上の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。同年８月31日までの間に記録保存を行い、現地調査を無事終了した。その間の調査経過については、以下に調査日誌の抜粋を記すことにする。

【日　誌　抄】

７月28日　重機による表土掘削。
　29日　機材搬入してテント設営。調査区を設定。
　30日　第１面の調査開始。
８月２日　第１面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第１面全測図作成。
　４日　鎌倉市４級基準点を基にして敷地内に測量用基準点を設定。海抜標高を鎌倉市三級水準点から移動。
　６日　第２面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第２面全測図作成。
　12日　第３面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第３面全測図作成。
　19日　第４面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第４面全測図作成。
　26日　第５面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第５面全測図作成。
　31日　現地調査終了。関係各方面に発掘調査を終了した旨を連絡し、機材撤収。

２．測量軸の設定

調査にあたり使用した測量軸の設定は、図１上段に示すように国土座標の数値を用いた。本調査地点の測量軸は東隣の浄明寺二丁目番474番11外地点のグリット配置を踏襲する形にし、同一方眼で調査区内を２mに区割りし、設定を行った。従って、図１のように、南北方向は前回と同じ北からＡ～Ｃの順でアルファベットを付したが、東西方向は前回東から１～６の名称を与えたので、本調査地点では同じく東から７～11の算用数字を名称とした。従って、隣接地点と同じく方眼軸線は測量の便利性と予想される遺構の主軸方位を優先させるかたちで、調査区の形状に即して設置したので、国土座標系には一致していない。なお、市４級基準点の（第Ⅸ座標系）H075・H076、B－５・６杭の国土座標数値は図１



▲測量基準点設定図（S=1:200）
▼グリット配置図（S=1:100）

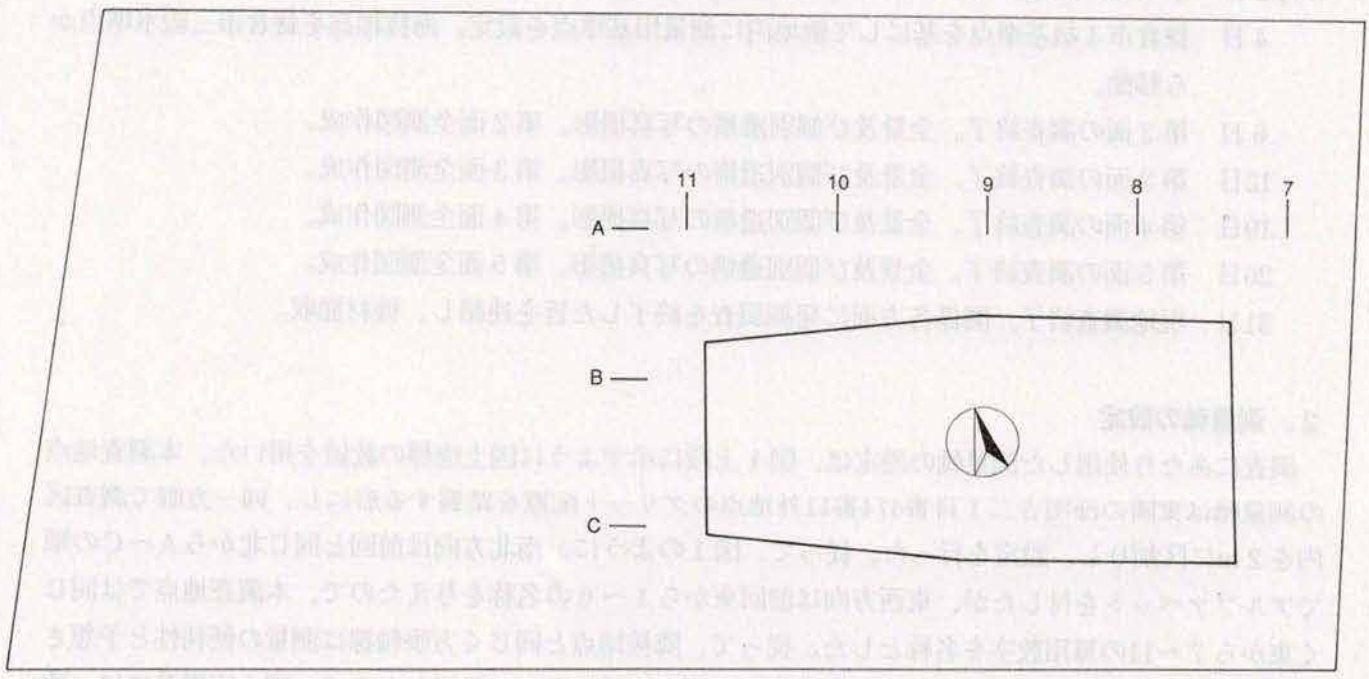


図1　測量基準点設定図・グリット配置図

に示し通りである。

図中の方位はすべて真北を採用し、調査地点の経度・緯度は以下のようになる。

南北軸線：〔N－15° 14′ 00″－E〕

調査地点：北緯〔35° 18′ 58″〕　東経〔139° 34′ 23″〕

海抜標高の原点移動については、谷戸入り口の華の橋を渡ると県道金沢鎌倉線と交差し、そこから東側歩道に位置する花壇の植え込み中に設けられた鎌倉市三級水準点（ＢＭ326）の標高を調査地内のＢ-６杭上に仮水準点として移動した。文章中及び挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準とした海抜標高である。

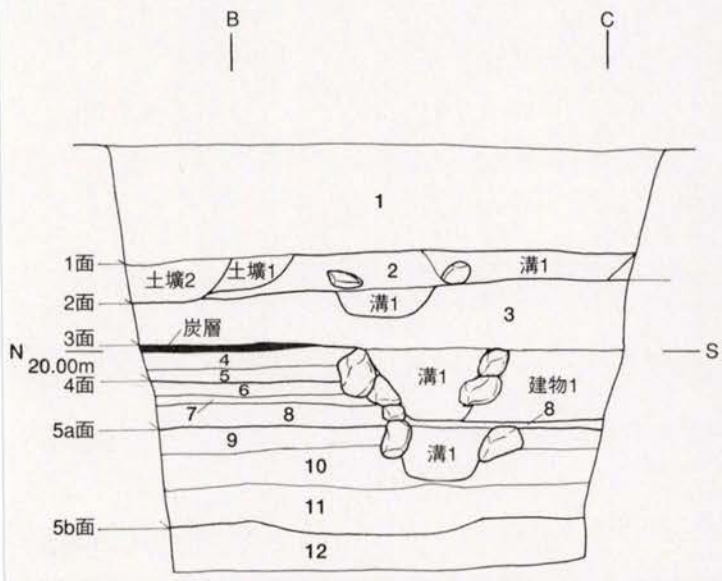
鎌倉市三級水準点〔海抜標高15.437m〕　Ｂ-６杭〔海抜標高21.277m〕

３．層序と生活面

調査地点は現地表の海抜標高が21.30m前後に位置した平坦な宅地である。調査で確認された堆積土層は概ね11層に区分されたがその中で少なくとも５時期以上の生活面が確認された。堆積土層の状況は図２の調査区東壁土層堆積図に示したとおりである。

厚さ55～60㎝程の表土を除去すると、明茶褐色砂質土の土丹粒・凝灰岩質粒を多く含んだ第1面の構築土（２層）を確認した。海抜標高は20.43～20.50㎝で遺構は溝や土壙などを検出した。その後、厚さ約15～20㎝の構築土を除去したあと間層を挟まずに、大・小土丹塊と凝灰岩質粒を多く含む明茶褐色砂質土（３層）の強い地業層の第2面を検出した。この生活面は、西から東に向かってに緩やかに下がりながら傾斜しており海抜標高は20.30～20.40㎝である。

厚さ20～35㎝の３層を除去すると、海抜標高20.00m前後で厚さ４㎝の薄い炭層が検出される。それを除去し、表出したのが暗茶褐色粘質土の小土丹塊・凝灰岩破砕粒を含む第３面の構築層（４層）であ



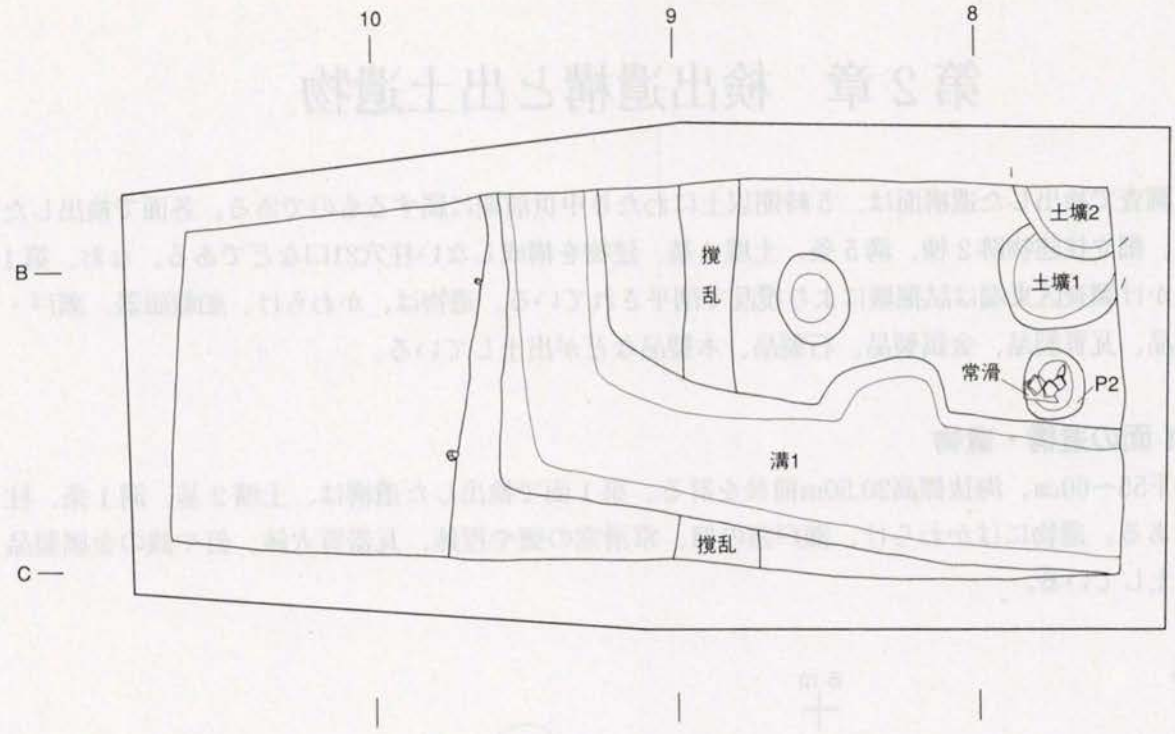
土層注記

1．表土		
2．明茶褐色砂質土	1～3㎝角土丹凝灰岩質粒を多く含む	←1面
3．明茶褐色砂質土	大・小土丹塊　凝灰岩質粒を多く含む 非常に締り有り	←2面
4．暗茶褐色粘質土	小土丹塊及び凝灰岩破砕粒（粗砂）を含む	←3面
5．暗茶褐色粘質土	凝灰岩質粒を多く含む　締り有り	
6．暗茶褐色粘質土	小土丹塊及び凝灰岩破砕粒（粗砂）を含む	←4面
7．暗茶褐色粘質土	小土丹塊及び凝灰岩破砕粒（粗砂）を若干含む	
8．暗茶褐色粘質土	小土丹塊及び凝灰岩破砕粒（粗砂）を含む	
9．暗茶褐色粘質土	小土丹塊及び凝灰岩破砕粒（粗砂）を少量含む	←5a面
10．暗茶褐色弱粘質土	木片、見片、土丹角、粗砂ブロックをやや多めに含む　非常に締り有り	
11．暗茶褐色粘質土	木片、粗砂を多量に含む　締り無し	
12．暗茶褐色粘質土	中世地山、粗砂ブロック、茶灰色粘土ブロックを多量に含む 非常に締り有り	←5b面

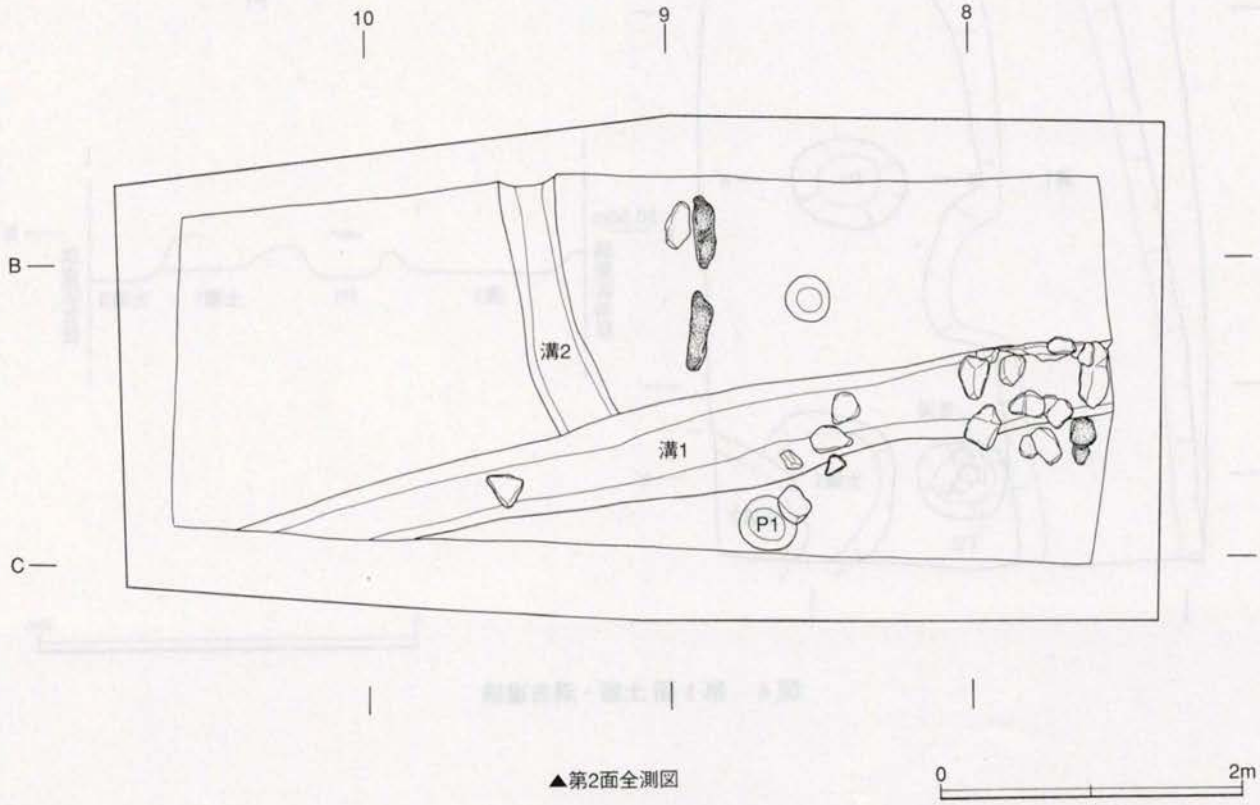
図２　調査区東壁土層堆積図

る。その上で検出された炭層も包含層と考え第３面とした。調査区南側では４層とほぼ同じ海抜標高の掘り込みの溝と建物を検出した。４層を除去すると、暗茶褐色粘質土の凝灰岩質粒を多く含んだ締まりのある第4面包含層（５層）が検出される。５層の除去後、小土丹塊・凝灰岩破砕粒を含んだ茶褐色粘質土の小土丹塊・凝灰岩破砕粒を含む第４面の地業層（６層）を検出した。第４面は７層の暗茶褐色粘質土の小土丹塊・凝灰岩破砕粒を含んだ包含層を挟み８層の暗茶褐色粘質土の小土丹塊・凝灰岩破砕粒を含んだ第5a面包含層から成り立つ。第４面で検出された建物跡は、第３面では踏襲される形になっている。一時期までは建物であるが、埋め戻されその壁を利用して第３面では、溝が造られていた。

海抜標高19.50m前後での小土丹塊・凝灰岩破砕粒を少量含んだ暗茶褐色粘質土（９層）を第5a面の地業層とする。また、９層から調査区を東西にはしる溝を調査区南側で確認したため、この面を第5a面とした。９層を除去すると、非常に締まりのある木片・貝片・土丹角・粗砂ブロックをやや多めに含む暗茶褐色弱粘質土（10層）の第5a面構築土が検出される。10層を除去すると暗茶褐色砂質土の木片・粗砂を多量に含む、締まりのない第5b面上の包含層（11層）が検出される。その下は中世地山の粗砂ブロック・茶灰色粘土ブロックを多量に含む非常に締まりのある暗茶褐色粘質土から構成されている。第5b面の遺構は土壙や柱穴などを検出した。



▲第1面全測図



▲第2面全測図

図３　第１・２面全測図

第２章　検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構面は、５時期以上にわたり中世前期に属するものである。各面で検出した遺構には、掘立柱建物跡２棟、溝５条、土壙４基、建物を構成しない柱穴21口などである。なお、第１～４面にかけ調査区東端は試掘壙により攪乱で削平されている。遺物は、かわらけ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品、木製品などが出土している。

１．第１面の遺構・遺物

現地表下55～60㎝、海抜標高20.50m前後を計る。第１面で検出した遺構は、土壙２基、溝１条、柱穴２口である。遺物にはかわらけ、瀬戸窯の皿、常滑窯の甕や捏鉢、瓦器質火鉢、釘や銭の金属製品などが出土している。

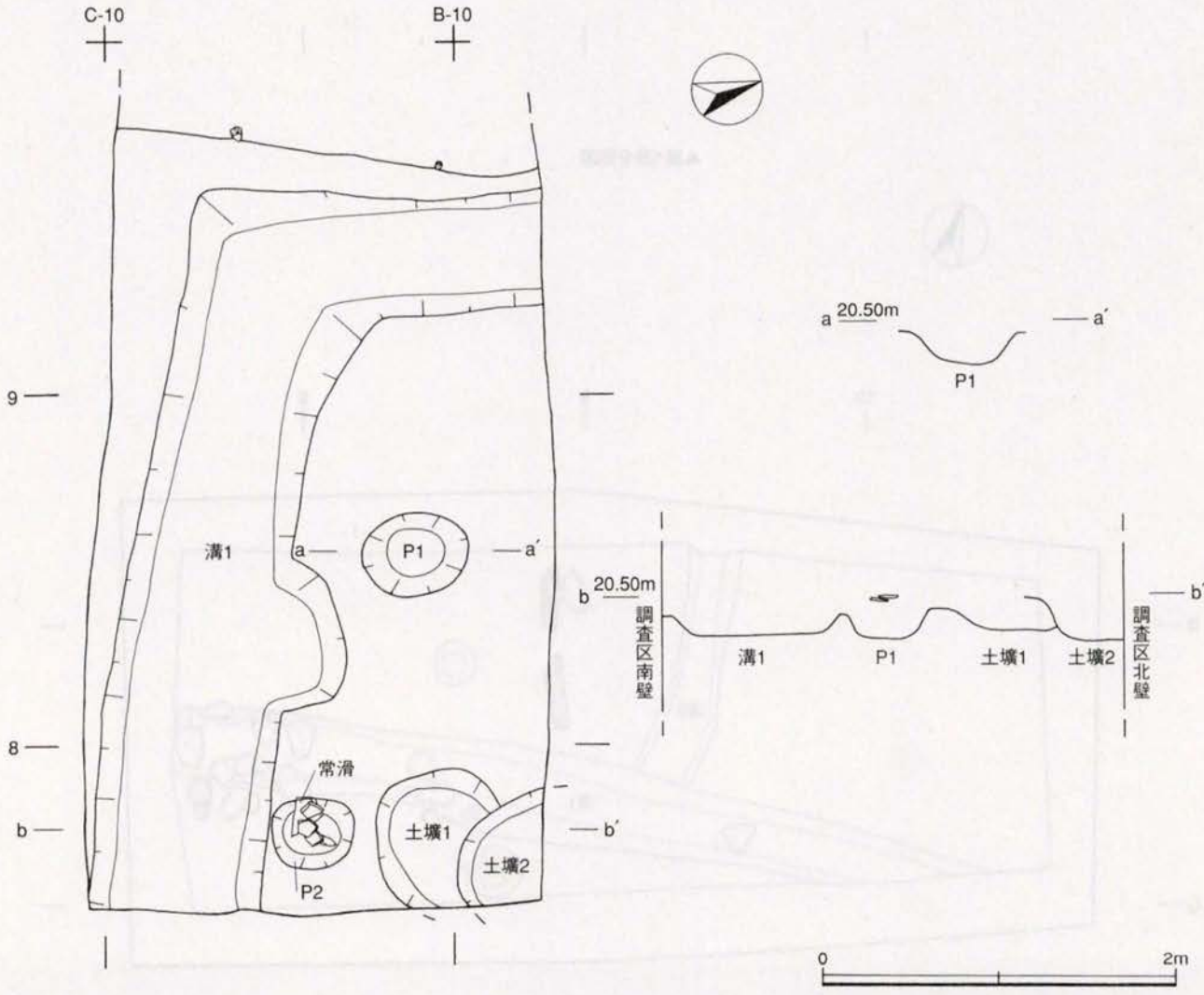


図４　第１面 土壙・溝各遺構

a．土壙（図３～５、図版１・６）

土壙２

調査区北東壁隅、グリットＢ－８で検出されたが北東部は調査区外に拡がるため全体規模は不明である。平面形状は楕円形を呈し、確認規模は東西軸60㎝以上、南北軸50㎝以上、深さ30㎝を測り、断面は逆台形を呈し、覆土は締まりのない明茶褐色砂質土であった。

出土遺物（図５）は１のロクロ成形のかわらけ小皿だけである。

b．溝（図３～５、図版１・６）

溝１

調査区南側に位置し、Ｂ・Ｃ－８～10ライン間に位置する溝であり、Ｃ－10グリット杭付近で北側に折れ曲がり、調査区北壁・東壁に拡がっている。規模は長さ東西420㎝、南北190㎝、上端幅90～100㎝、下端幅70～60㎝、深さ20㎝程で、断面は浅い皿状を呈する。溝底は海抜標高20.30m前後でほぼ平坦に掘られている。覆土は凝灰岩質粒を少量含んだ茶褐色砂質土である。

出土遺物（図５）は２が口径8.6㎝のロクロ成形のかわらけ小皿、３・４は常滑捏鉢Ⅱ類である。

c．柱穴（図３～５、図版１・６）

この面から検出できた柱穴は２口であり、Ｂ－９・10グリット間において確認されたＰ１は平面形状が

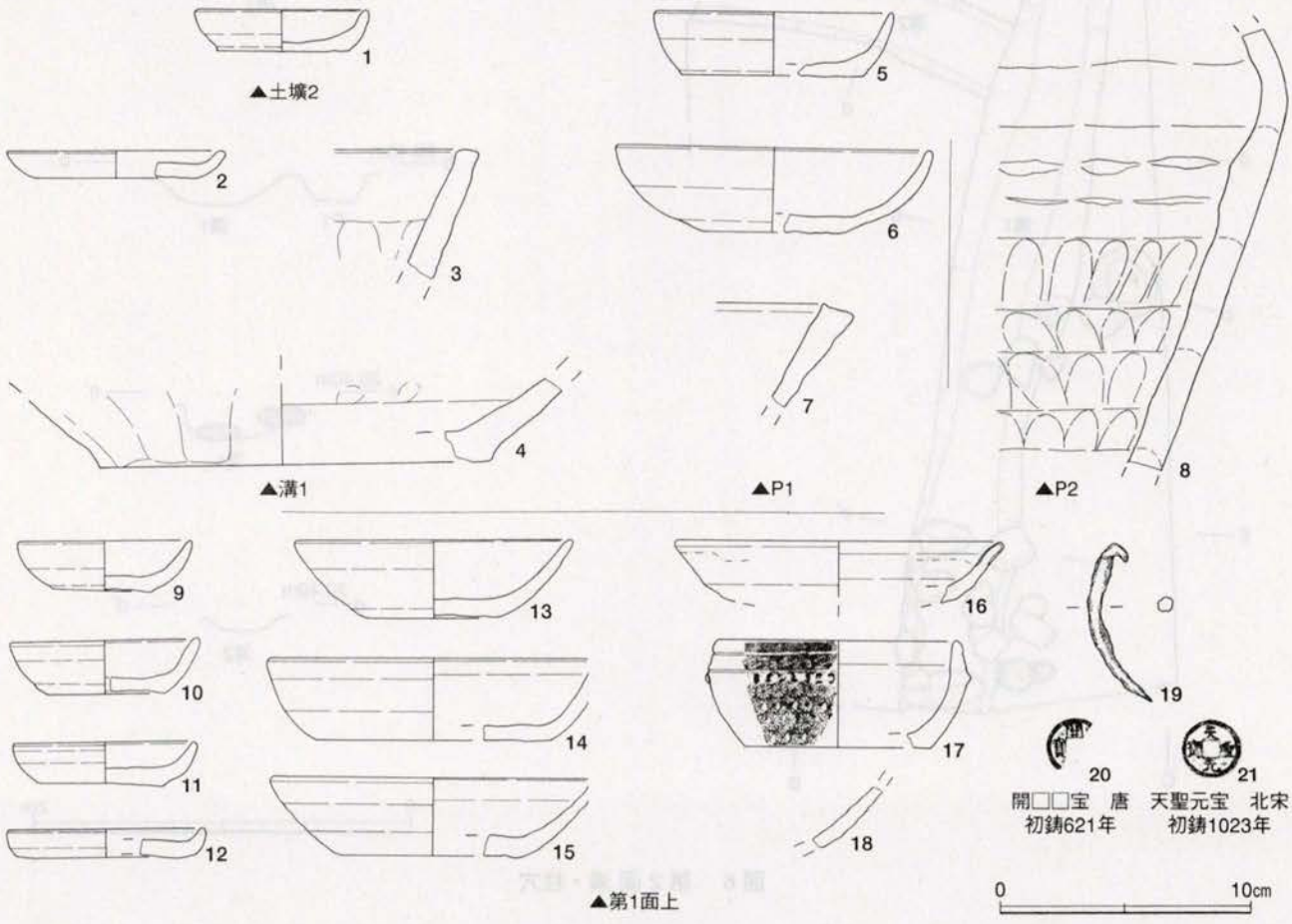


図５　第１面 各遺構・第1面上出土遺物

楕円形である。規模は東西軸25㎝、南北軸30㎝。調査区東側の溝１の北側にＰ2が、円形の掘り方で確認された。断面は両柱穴ともに浅い皿状を呈し、深さ20㎝である。覆土は明茶褐色砂質土で凝灰岩質粒を少量含む。出土遺物（図５）は５・６がロクロ成形かわらけ中皿、大皿で、７が常滑捏鉢Ⅱ類である（Ｐ1）。８は常滑窯の甕である（Ｐ2）。

ｄ．第１面遺構外出土遺物（図５、図版６）

第１面の遺構に伴う以外の出土遺物であり、包含層や確認面検出時に出土した遺物を一括してここに掲載した。

図5－9～15はロクロ成形かわらけである。９～12は小皿、13は中皿、14・15は大皿。16は瀬戸窯の縁釉小皿であり、17は12弁のスタンプ小菊花文の瓦質香炉、18は吉備系土器、19は鉄釘、20は銅銭の「開元通宝」か、21は北宋銭の「天聖通宝」である。

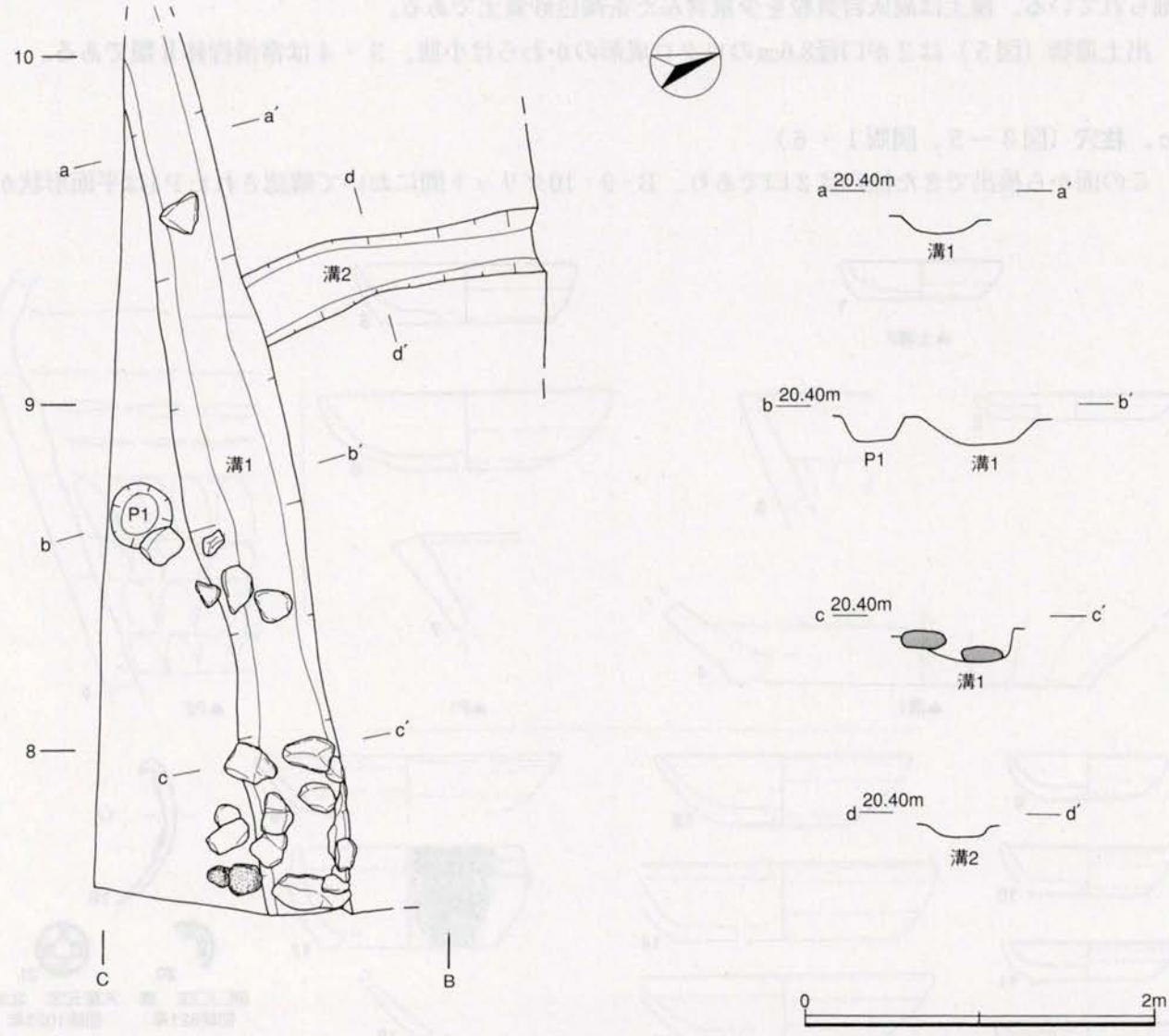


図６　第２面溝・柱穴

2．第２面の遺構・遺物

現地表下70～80㎝でほぼ平坦に構築した地業面を確認することができた。海抜標高20.40m前後を測り、第２面で検出された遺構は溝２条、柱穴２口である。出土遺物にはかわらけ、舶載陶磁器、常滑窯の甕、北部系山茶碗、女瓦（平瓦）である。

a．溝（図３・６・７、図版１・６）

溝１

調査区Ｂ・Ｃ-８グリット間から、Ｃ-10グリットに東西方向に伸びる溝であり、東・西側は調査区外に伸びるため全体の規模は不明である。規模は、確認できた長さが530㎝程、上端（図６の溝から）ａ45㎝前後・ｂ70㎝前後・ｃ65㎝前後、下端は共に（ａ・ｂ・ｃ）30㎝前後で深さはｃが確認面から20㎝で海抜標高が20.14㎝計る。ａが確認面から10㎝前後で海抜標高20.27㎝計る。東側から西側にかけて溝の幅が狭くなり深さも浅くなる傾向が認められた。掘り方の断面は、東側は浅い擂り鉢状で西側にな

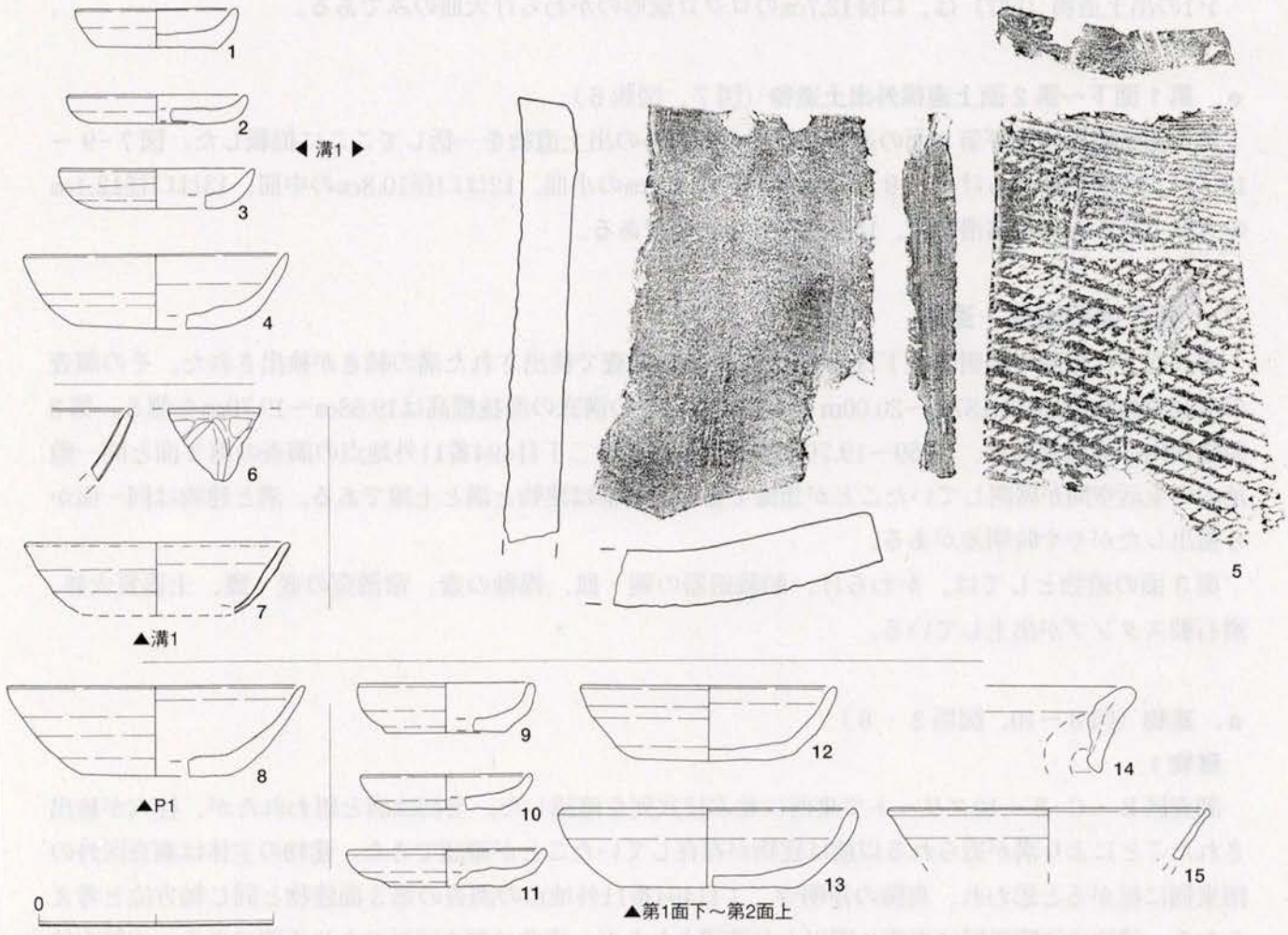


図７　第２面 各遺構・第1面下～第２面上出土遺物

ると浅い皿状になる。覆土は明茶褐色砂質土で拳大の土丹を含む。

出土遺物（図7）は1～4がロクロ成形のかわらけで、1～3は小皿、4は大皿で、5は女瓦である。

溝2（図3・6・7、図版1・6）

調査区中央を南北に走る溝である。北側は調査区外に延び南側は、溝1に切られているため、その規模は不明である。断面は浅いU字形であり、確認できた長さが1.6m、上端幅35～45㎝、下端幅15～30㎝前後、深さ15㎝程である。覆土は明茶褐色砂質土で凝灰岩質粒を少量含む。溝底は海抜標高20.24m前後を計り、ほぼ平坦になっている。

出土遺物（図7）は、6は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文の口縁部、7は白磁の口兀皿である。

d．柱穴（図3・6・7、図版1・6）

検出した柱穴（ピット）は2口で掘立柱建物を構成するような配置は認められなかった。P1の掘り方は平面形状が円形を呈しており、規模は径35～40㎝、確認面からの深さ15㎝程である。

P1の出土遺物（図7）は、口径12.7㎝のロクロ成形のかわらけ大皿のみである。

e．第1面下～第2面上遺構外出土遺物（図7、図版6）

第1面構築土中及び第2面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。図7-9～13はロクロ成形かわらけで、9～11は口径7.4～8.2㎝の小皿、12は口径10.8㎝の中皿、13は口径12.4㎝の大皿である。14は常滑の甕、15は北部系山茶碗である。

3．第3面の遺構・遺物

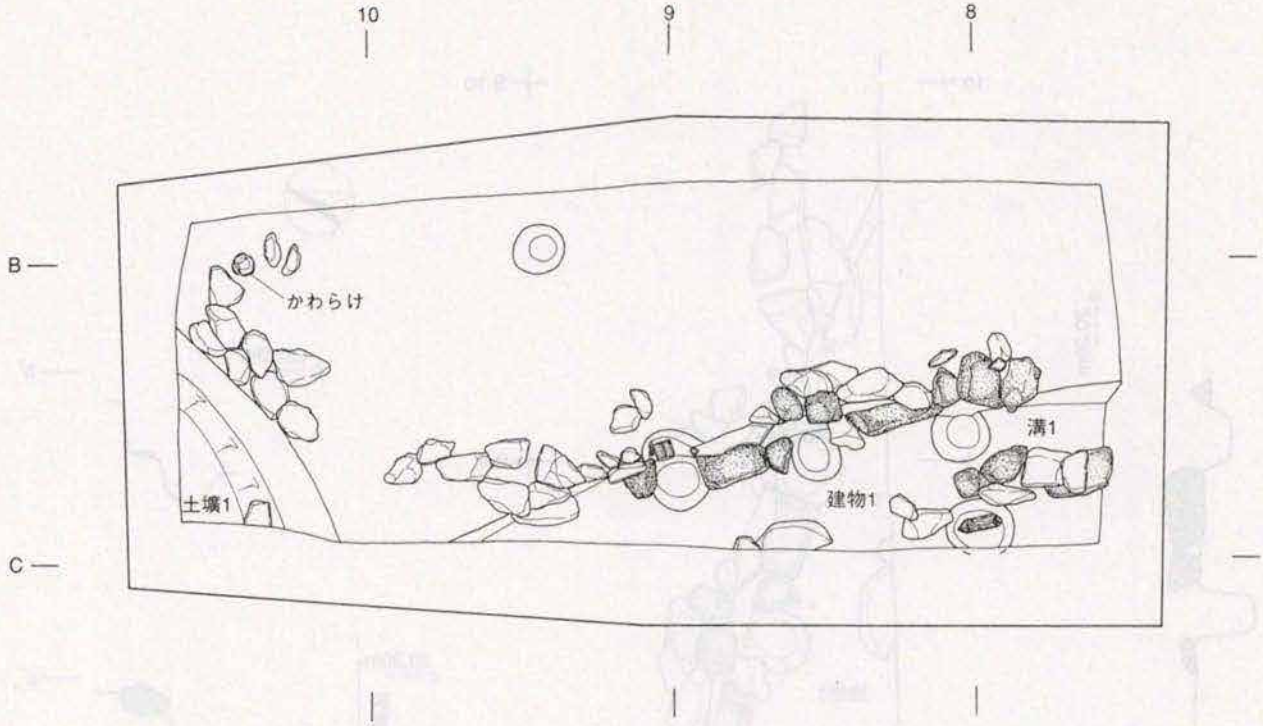
第3面では東隣の浄明寺二丁目494番11外地点の調査で検出された溝の続きが検出された。その調査の溝底の海抜標高は19.87m～20.00mを測り、本地点の溝底の海抜標高は19.68㎝～19.70㎝を測る。第3面建物内の海抜標高は、19.59～19.70mであり、浄明寺二丁目494番11外地点の調査の第3面と同一敷地内の生活空間が展開していたことが想像できる。遺構は建物と溝と土壙である。溝と建物は同一面から検出したがやや時期差がある。

第3面の遺物としては、かわらけ、舶載磁器の碗・皿、褐釉の壺、常滑窯の壺・甕、土器質火鉢、滑石製スタンプが出土している。

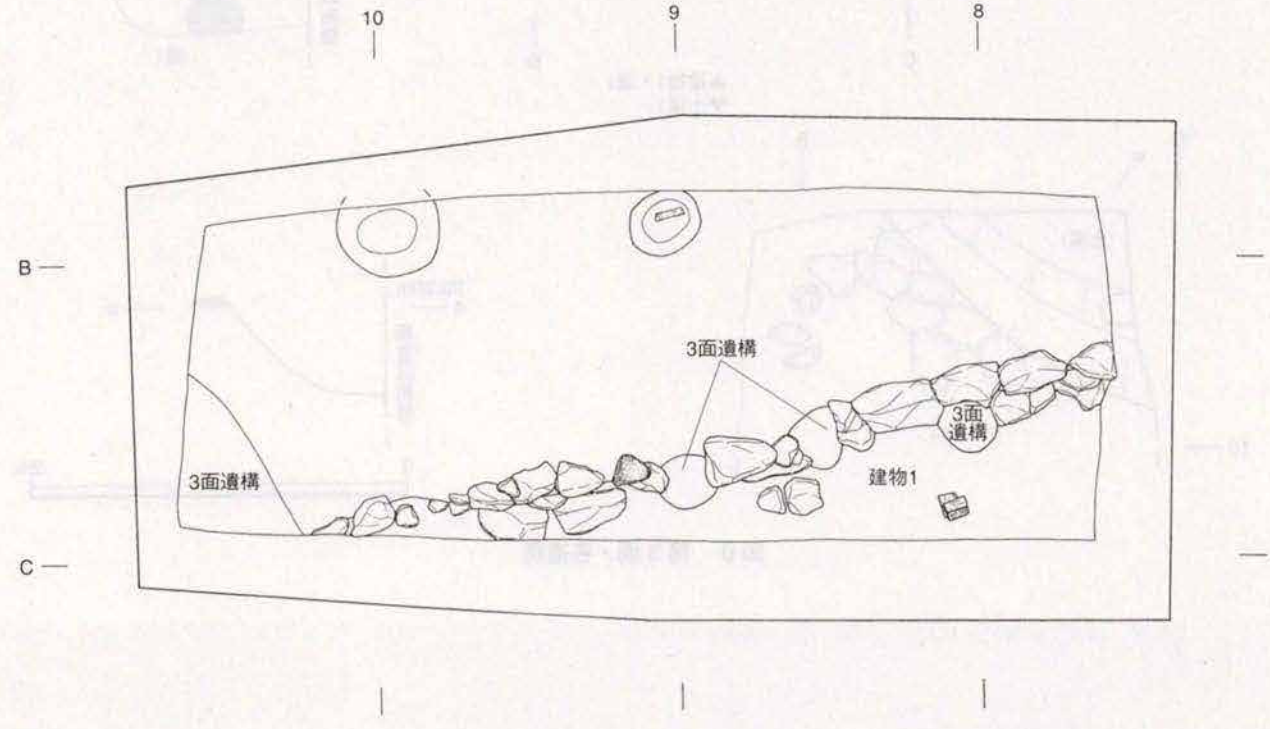
a．建物（図8～10、図版2・6）

建物1

調査区B・C-8～10グリットで東西に並ぶ柱穴列を確認した。当初は溝と思われたが、柱穴が検出されたことにより溝が造られる以前は建物が存在していたことが確認できた。建物の主体は調査区外の南東側に拡がると思われ、東隣の浄明寺二丁目494番11外地点の調査の第3面建物と同じ軸方位と考えられる。建物の柱間規模は東西2間以上が確認されたが、南北は調査区外のため不明である。主軸方位は全体規模が確認できないため、不明である。東西の柱間寸法の芯々距離は194㎝を測る。各柱穴の堀方は短径30㎝、長径36㎝の楕円形を呈し、深さ25～30㎝程である。検出した柱穴1口には柱と思われる角柱が残っているものもあった。長さは、30㎝程で厚さは10㎝前後に加工されていた。建物内の海抜標高は、19.59～19.70mであり、覆土は明茶褐色砂質土で凝灰岩質粒、かわらけ片を含み、締まりがない。出土遺物（図10）は、1～14がロクロ成形かわらけで1～10が小皿、11～14が大皿、15・16は



▲第3面全測図



▲第4面全測図

0 2m

図8　第3・4面全測図

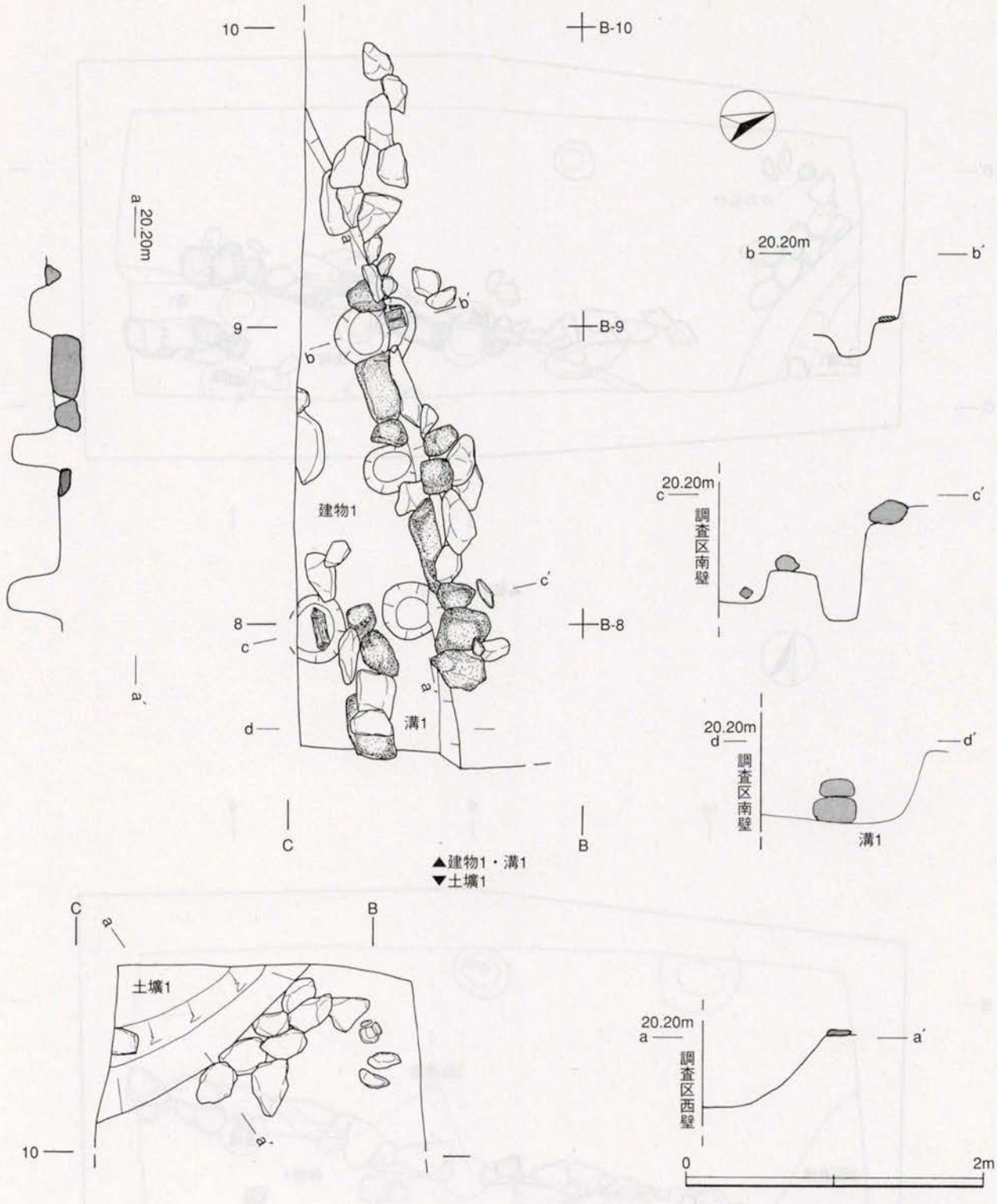


図9　第3面・各遺構

龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗、無文碗で、17～21は常滑窯製品で17は壺、18～20は甕、21は捏鉢Ⅰ類、22は土器質火鉢である。

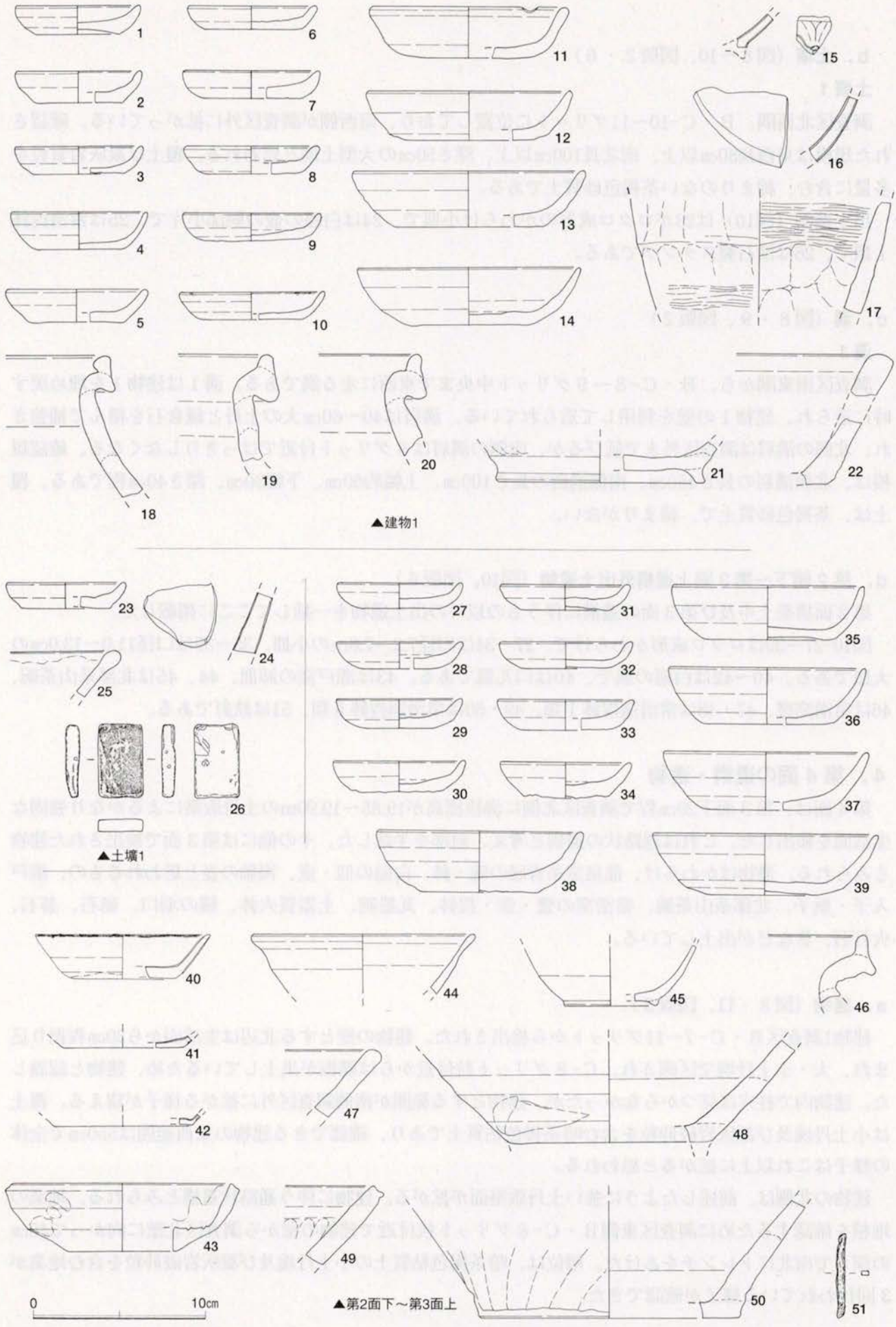


図10　第３面各遺構・第２面下～第３面上出土遺物

b．土壙（図８～10、図版２・６）

土壙１

調査区北西隅、Ｂ・Ｃ-10～11グリットに位置しており、南西側が調査区外に拡がっている。確認された規模は東西長80㎝以上、南北長100㎝以上、深さ50㎝の大型土壙と思われる。覆土は凝灰岩質粒を多量に含む、締まりのない茶褐色砂質土である。

出土遺物（図10）は23がロクロ成形のかわらけ小皿で、24は白磁の壺の胴部小片で、25は常滑捏鉢Ⅰ類で、26は滑石製スタンプである。

c．溝（図８・９、図版２）

溝１

調査区南東隅から、Ｂ・Ｃ-８～９グリット中央まで東西に走る溝である。溝１は建物１を埋め戻す時に造られ、建物１の壁を利用して造られている。溝肩は40～60㎝大の土丹と鎌倉石を積んで補強され、北側の溝肩は調査区外まで延びるが、南側の溝肩は８グリット付近ではっきりしなくなる。確認規模は、北側溝肩の長さ450㎝、南側溝肩の長さ100㎝、上幅約60㎝、下幅30㎝、深さ40㎝程である。覆土は、茶褐色砂質土で、締まりがない。

d．第２面下～第３面上遺構外出土遺物（図10、図版６）

第２面構築土中及び第３面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。

図10-27～39はロクロ成形かわらけで、27～34は口径7.2～7.8㎝の小皿、35～39は口径11.0～13.0㎝の大皿である。40～42は白磁の皿で、40は口兀皿である。43は瀬戸窯の卸皿、44，45は北部系山茶碗、46は常滑窯甕、47・48は常滑窯捏鉢Ⅰ類、49・50は常滑窯捏鉢Ⅱ類、51は鉄釘である。

４．第４面の遺構・遺物

第４面は、第３面下20㎝程で調査区北側に海抜標高が19.85～19.90mの土丹版築によるかなり強固な生活面を検出した。これは通路状の遺構と考え、肩部を半裁した。その他には第３面で検出された建物もみられる。遺物はかわらけ、龍泉窯系青磁の碗・鉢、白磁の皿・壺、褐釉の壺と思われるもの、瀬戸入子・瓶子、北部系山茶碗、常滑窯の甕・壺・捏鉢、瓦器碗、土器質火鉢、鞴の羽口、砥石、碁石、火打石、箸などが出土している。

a．建物（図８・11、図版３）

建物1調査区Ｂ・Ｃ-７～11グリットから検出された。建物の壁とする北辺は生活面から30㎝程掘り込まれ、大・小土丹塊で区画され、Ｃ-８グリット杭付近からは礎板が出土しているため、建物と認識した。建物内で柱穴は見つからなかったが、建物とする範囲が南側調査区外に拡がる様子が窺える。覆土は小土丹塊及び凝灰岩破砕粒を含む暗茶褐色粘質土であり、確認できる建物の東西範囲は550㎝で全体の様子はこれ以上に拡がると思われる。

建物の北側は、前述したように強い土丹版築面が拡がる。建物に伴う通路状遺構とみられる。地業の堆積を確認するために調査区東側Ｂ・Ｃ-８グリット杭付近で建物の壁から調査区北壁に向かって40㎝の深さで南北にトレンチをあけた。層位は、暗茶褐色粘質土の小土丹塊及び凝灰岩破砕粒を含む地業が３回行われている様子が確認できた。

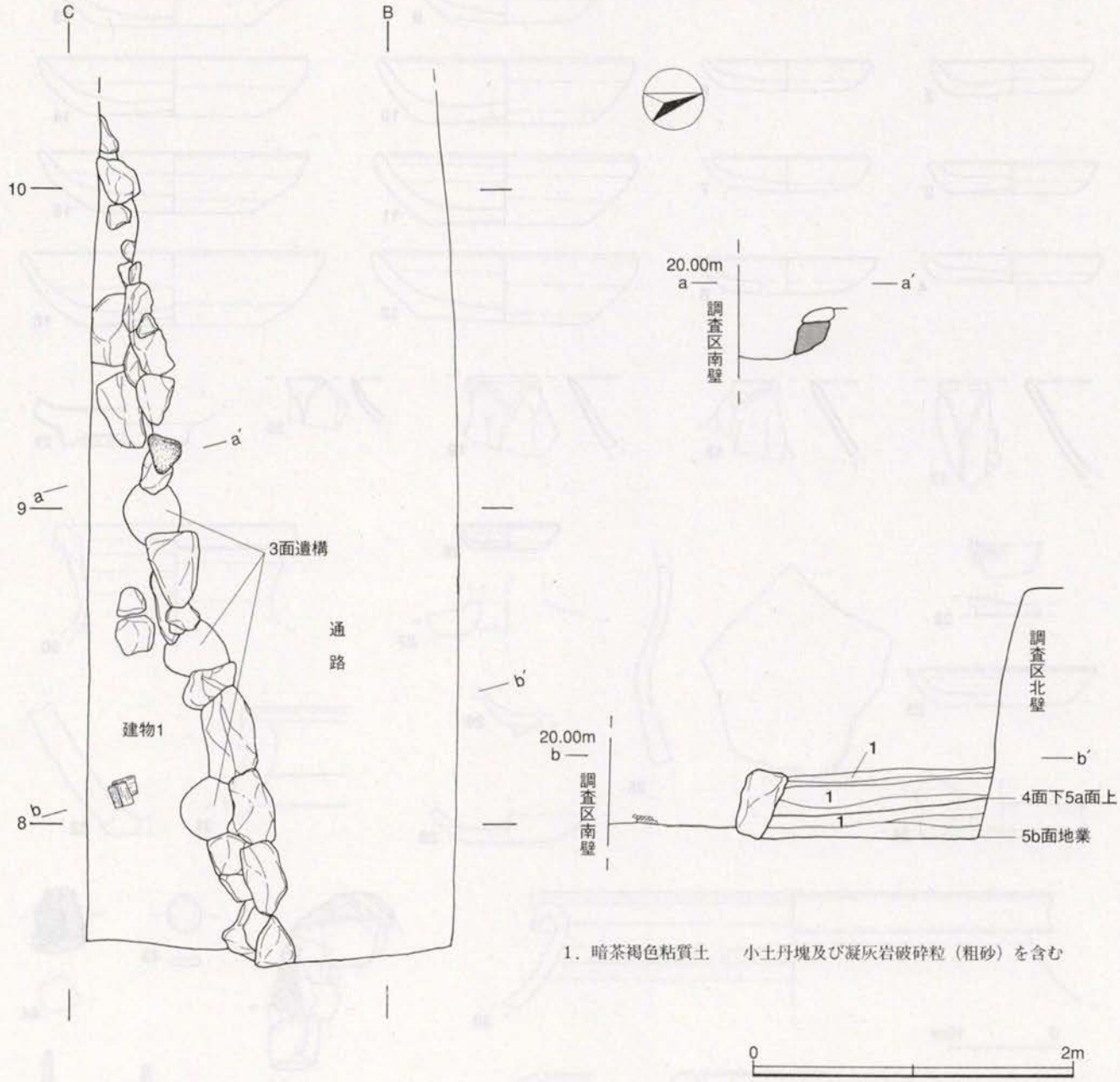


図11　第４面建物１・通路地業堆積

b．第３面下～第４面上遺構外出土遺物（図12、図版７）

第３面構築土中及び第４面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。図12-１～16はロクロ成形のかわらけで、１～８は口径7.4～8.4㎝の小皿、９は口径11.2㎝の中皿、10～16は口径11.8～14.2㎝の大皿である。17～20は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、21は龍泉窯系青磁碗の底部である。22は龍泉窯系青磁魚文鉢、23は白磁口兀小皿、24は白磁壺、25は褐釉の壺と思われるもの、26は瀬戸の入子、27は瀬戸の瓶子、28は北部系山茶碗、29は常滑窯小壺、30～32は常滑窯壺、33は常滑窯甕、34は常滑窯捏鉢Ⅰ類、35～37は常滑窯捏鉢Ⅱ類、38は瓦器碗、39・40は土器質火鉢、41は鞴の羽口、42～44は石製品で42は砥石、43は碁石、44は火打石である。45・46は木製品の箸である。

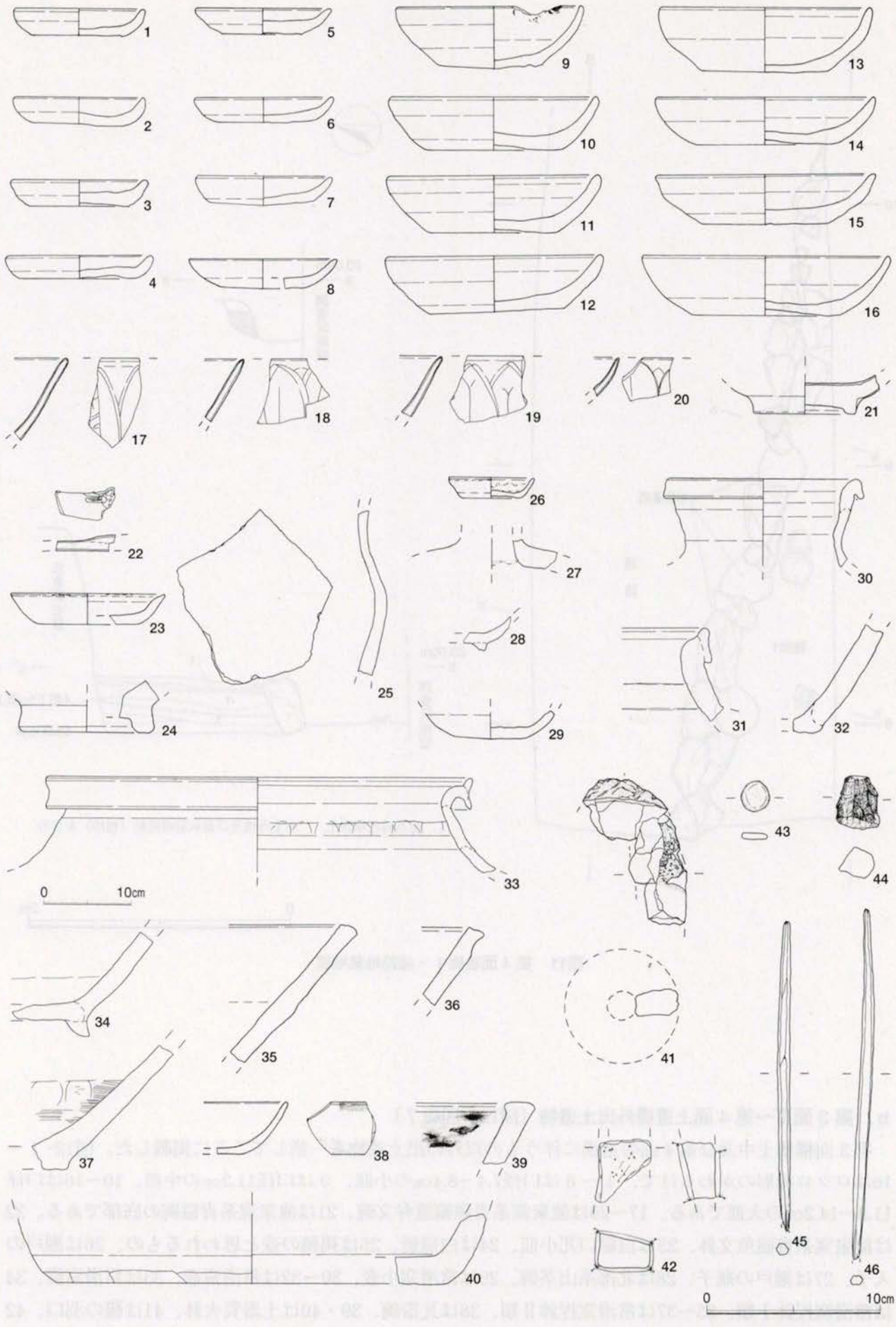


図12　第３面下～第４面上出土遺物

5．第5a面の遺構・遺物

第５面は、第４面でトレンチをあけた時に確認できた小土丹塊・凝灰岩破砕粒を少量含んだ暗茶褐色粘質土の地業面を検出すると、溝１条、遺構の性格がはっきりしない木組遺構などが検出された。第５面の海抜標高は19.44～19.53cmであった。

a．木組遺構１（図13・15、図版４・５・７）

調査区中央Ｂ・Ｃ-９グリットに沿って鎌倉石が積みあげられ、その西には幅２cm程で長さ９cmの薄い板材がもう一つの板材で留められていた様子がみられた。また、鎌倉石と板材の間からは、かわらけが検出され、周辺からは杭が6本確認された。出土状況などをみても、性格ははっきりしない。出土遺物（図15）は、１の口径8.4cmのロクロ成形かわらけ小皿のみである。

b．溝（図13～15、図版４・５・７）

溝１

調査区南側Ｂ・Ｃ-７～10グリットで東西に走る溝であり、東西端は調査区外に延びている。確認規模は長さ３m程で、上幅が約25～30cm、下幅が15～20cmを測り、断面は逆台形状を呈している。確認面からの深さは25～30cmである。溝壁には、大小土丹塊が据えられていた。

出土遺物（図15）は、２～４がロクロ成形かわらけで、２が口径7.6cmの小皿、３・４は口径13.0～13.6cmの大皿である。５は白磁口兀皿、６は白磁皿、７は瀬戸の小壺、８は木製品の曲物蓋である。

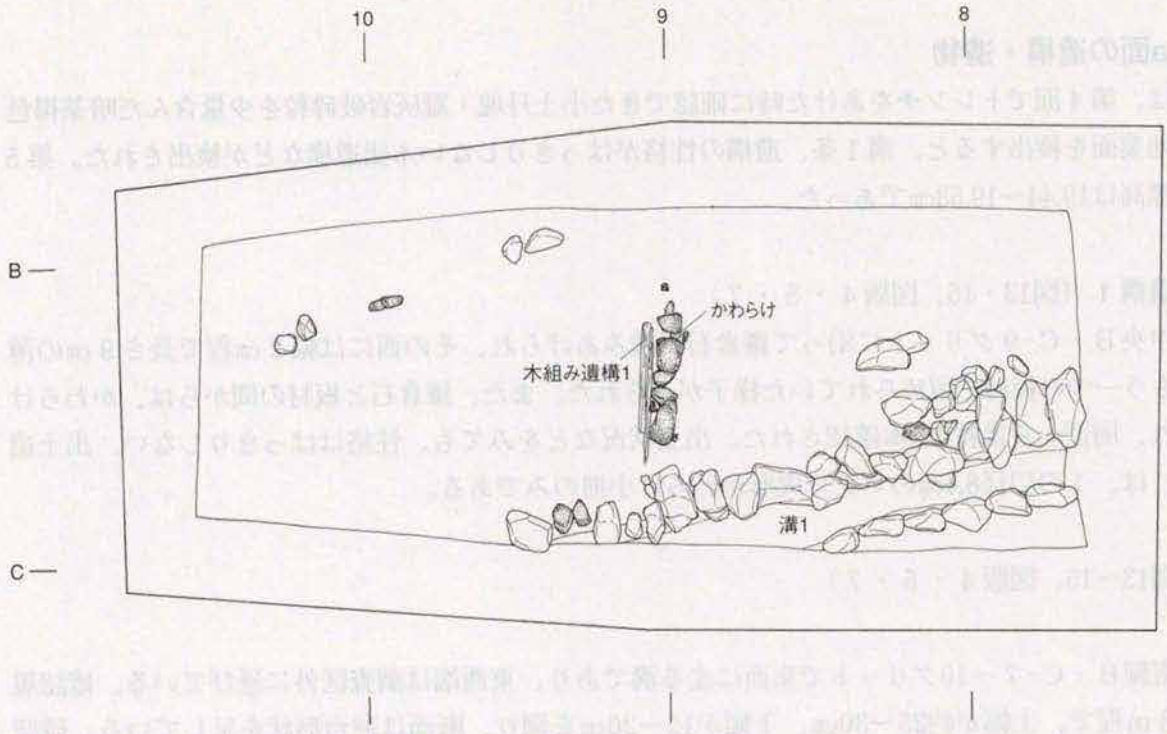
c．第４面下～第5a面上遺構外出土遺物（図15、図版７）

第４面構築土中及び第5a面の遺構に伴うもの以外の出土遺物を一括してここに掲載した。

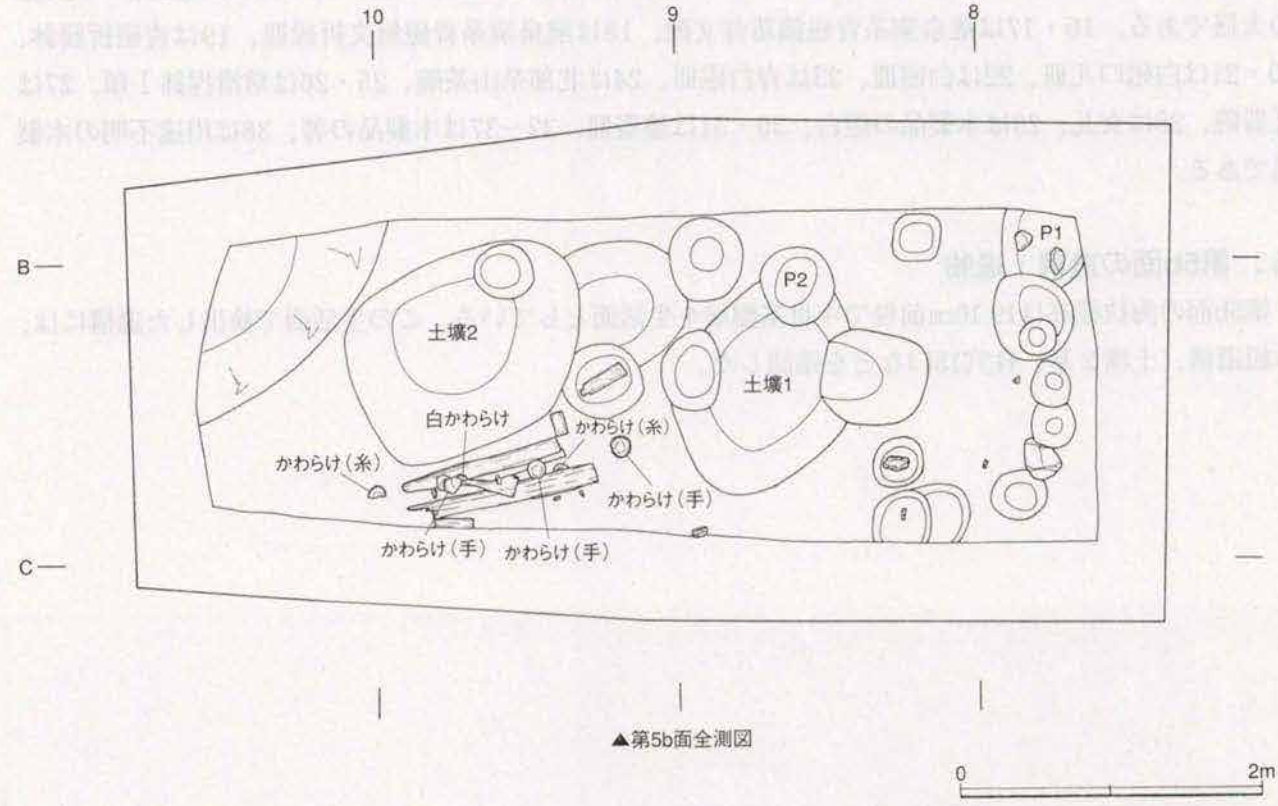
図15-９～15はロクロ成形のかわらけで、９～13は口径7.6～8.2cmの小皿、14・15は口径12.0～12.6cmの大皿である。16・17は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、18は龍泉窯系青磁無文折縁皿、19は青磁折腰鉢、20・21は白磁口兀皿、22は白磁皿、23は青白磁皿、24は北部系山茶碗、25・26は常滑捏鉢Ⅰ類、27は瓦器碗、28は女瓦、29は木製品の燈台、30・31は漆器皿、32～37は木製品の箸、38は用途不明の木製品である。

6．第5b面の遺構・遺物

第5b面の海抜標高は19.10cm前後で中世基盤層を生活面としている。この生活面で検出した遺構には、木組遺構、土壙２基、柱穴15口などを確認した。

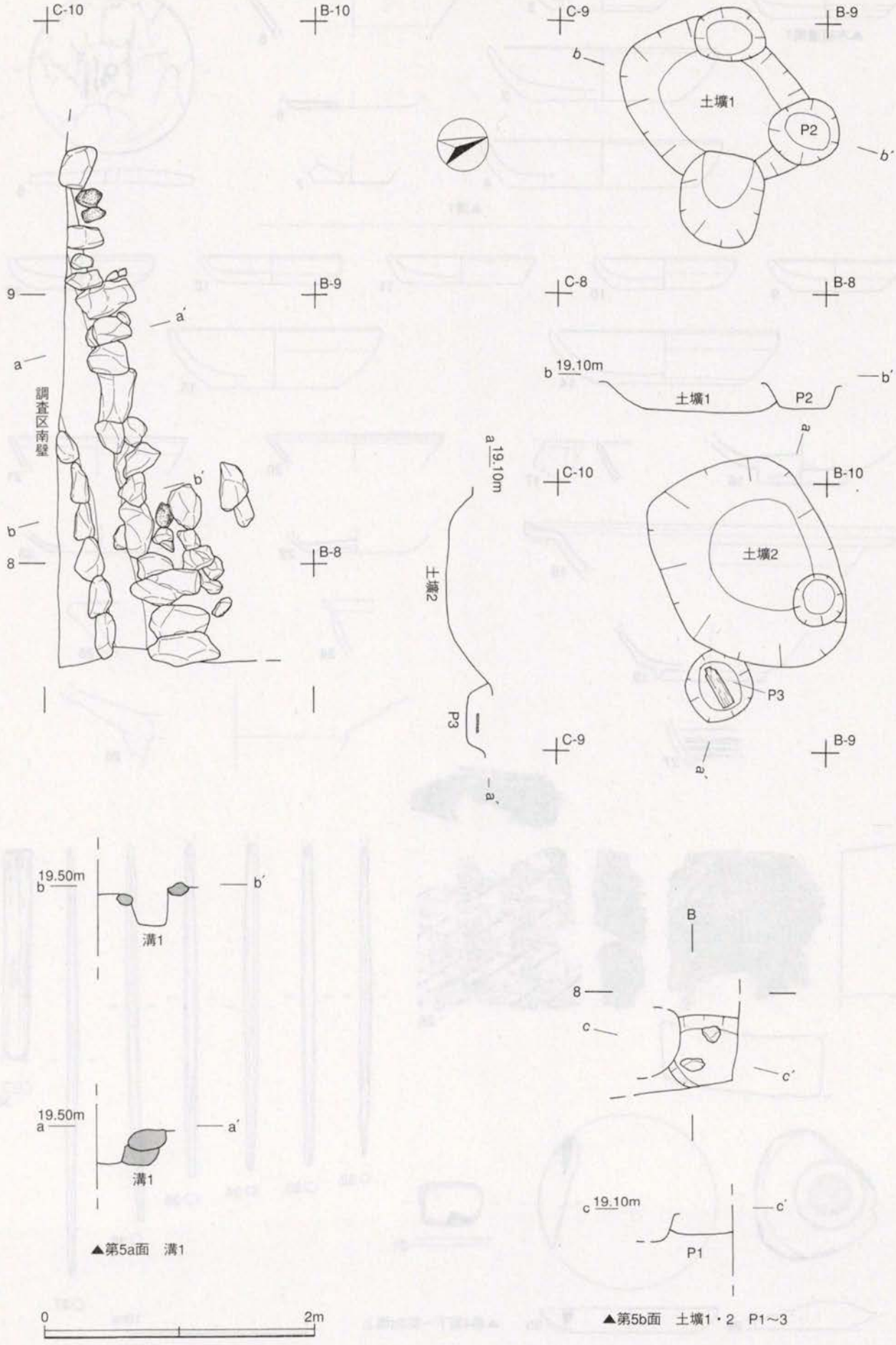


▲第5a面全測図



▲第5b面全測図

図13　第5a面・第5b面全測図



▲第5a面　溝1

▲第5b面　土壙1・2　P1～3

図14　第5a面溝・第5b面各遺構

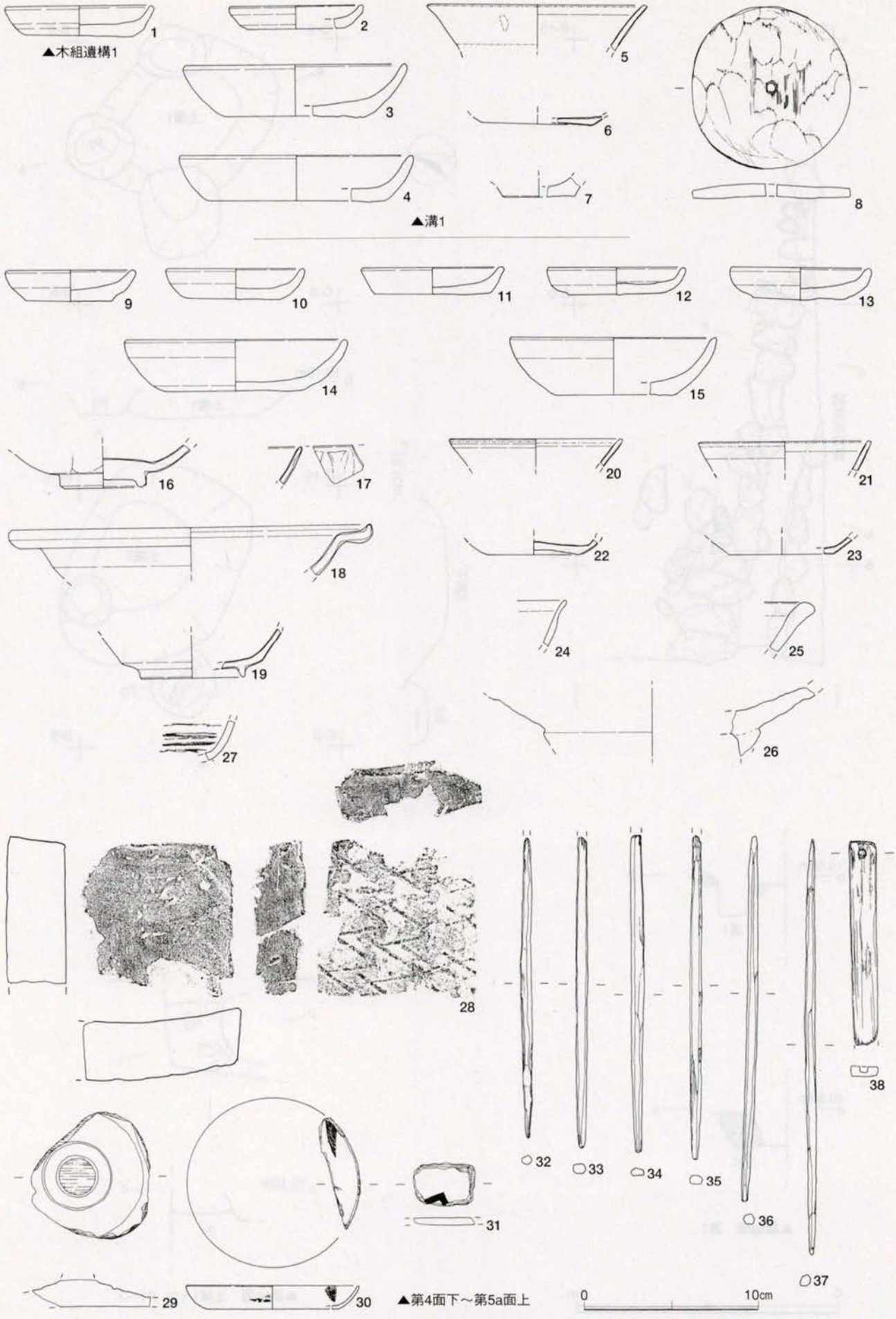


図15　第5ａ面各遺構・第４面下～第5ａ面上出土遺物

a．木組遺構２（図13・16、図版４・５・７）

調査区南西側C-９・10グリット杭付近でかわらけを伴った板材が重なりあって検出されている。板材は長さ110～113㎝、幅10～15㎝で、東西方向に約40㎝の間隔で杭が検出され、板材の周辺には長さ15～30㎝の礎板なども検出された。そのため建物に関連する遺構だと思われる。

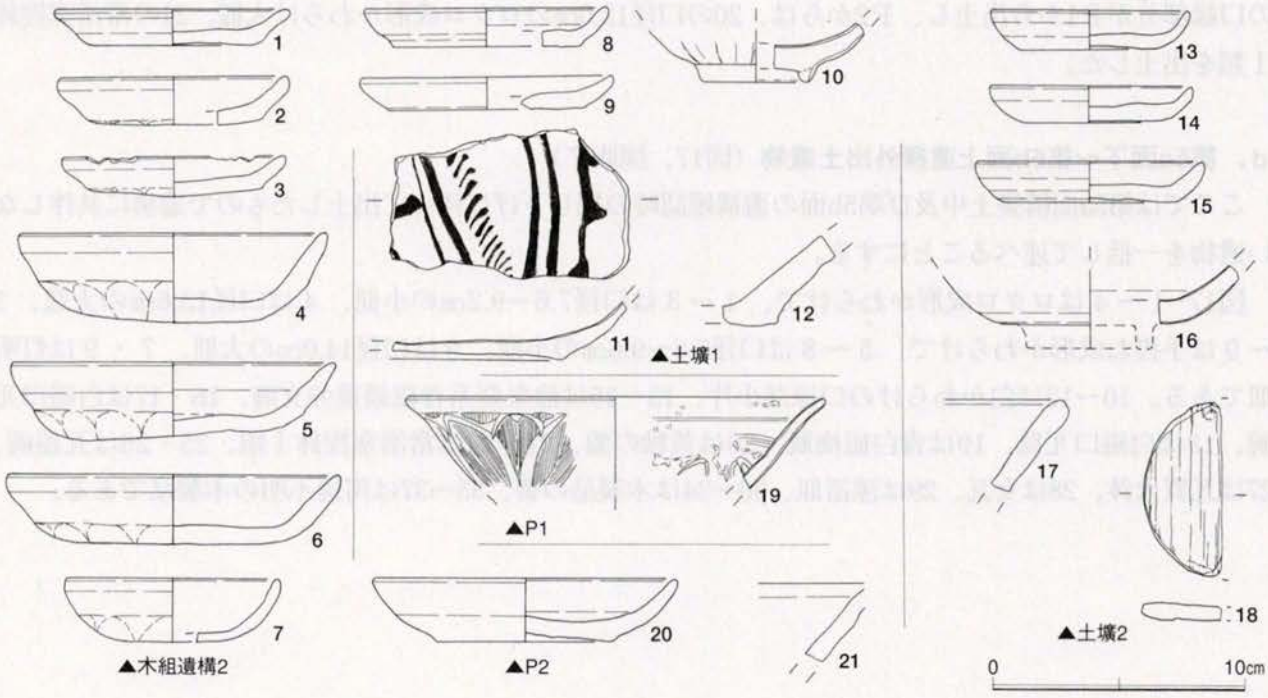


図16　第５ｂ面各遺構出土遺物

出土遺物（図16）は、１が口径9.2㎝のロクロ成形かわらけ小皿で、２～６が手捏ね成形のかわらけで２・３は口径8.8～9.0㎝を測る小皿、４～６は12.2～13.2㎝を測る大皿で、７は手捏ね成形の白かわらけである。

b．土壙（図13・14・16、図版４・５・７）

土壙１

調査区やや東よりのB・C-８・９グリット付近に位置し、柱穴３口に壊されている。平面形状は楕円形を呈するものと思われ、規模は長径150㎝、短径10㎝、深さ20㎝を測る。掘り方の断面は浅い皿状を呈し、覆土は暗茶褐色弱粘質土である。

出土遺物（図16）は、８・９がロクロ成形かわらけで、10は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、11は泉州窯系黄釉鉄絵盤、12は常滑の捏鉢Ⅱ類である。

土壙２

調査区西側に位置し、B-10グリット杭付近で検出された。平面形状は隅丸方形で、規模は長径160㎝、短径120㎝、深さ20～30㎝を測る。掘り方の断面は浅い皿状を呈し、覆土は凝灰岩質粒を少量含んだ暗茶褐色弱粘質土である。

出土遺物（図16）は13～15が口径7.8～9.0㎝のロクロ成形かわらけ小皿で、16は龍泉窯系青磁碗、17は常滑窯の捏鉢Ⅰ類、18は木製品の曲物の底板である。

c．柱穴（図13・14・16、図版４・５・７）

この生活面で検出した柱穴（ピット）は掘立柱建物を構成するような配置は認められなかった。各堀方は平面形状が円形または楕円形を呈する。規模は径50～65㎝、確認面からの深さ15～20㎝で覆土は、凝灰岩質粒を若干含む茶褐色粘質土である。柱穴の底面に、長さ35㎝、幅10㎝、厚さ２㎝の柱受けと考えられる礎板が検出されるものあった（P3）。

以下に図16-19～21に示した柱穴出土の遺物について簡単に触れる事とする。19は青磁櫛掻蓮弁文碗の口縁部分がP1から出土し、P2からは、20の口径12.0㎝のロクロ成形かわらけ大皿、21の常滑窯捏鉢Ⅰ類を出土した。

d．第5a面下～第5b面上遺構外出土遺物（図17、図版７）

ここでは第5a面構築土中及び第5b面の遺構確認時の掘り下げに伴って出土したもので遺構に共伴しない遺物を一括して述べることにする。

図17-１～４はロクロ成形かわらけで、１～３は口径7.6～9.2㎝の小皿、４は口径13.6㎝の大皿、５～９は手捏ね成形かわらけで、５～８は口径7.6～9.6㎝の小皿、９は口径14.0㎝の大皿、７・９は灯明皿である。10～12は白かわらけの口縁部小片、13～15は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、16・17は白磁口兀碗、18は白磁口兀皿、19は青白磁梅瓶、20は黄釉の盤、21～24は常滑窯捏鉢Ⅰ類、25・26は瓦器碗、27は瓦質火鉢、28は女瓦、29は漆器皿、30～34は木製品の箸、35～37は用途不明の木製品である。

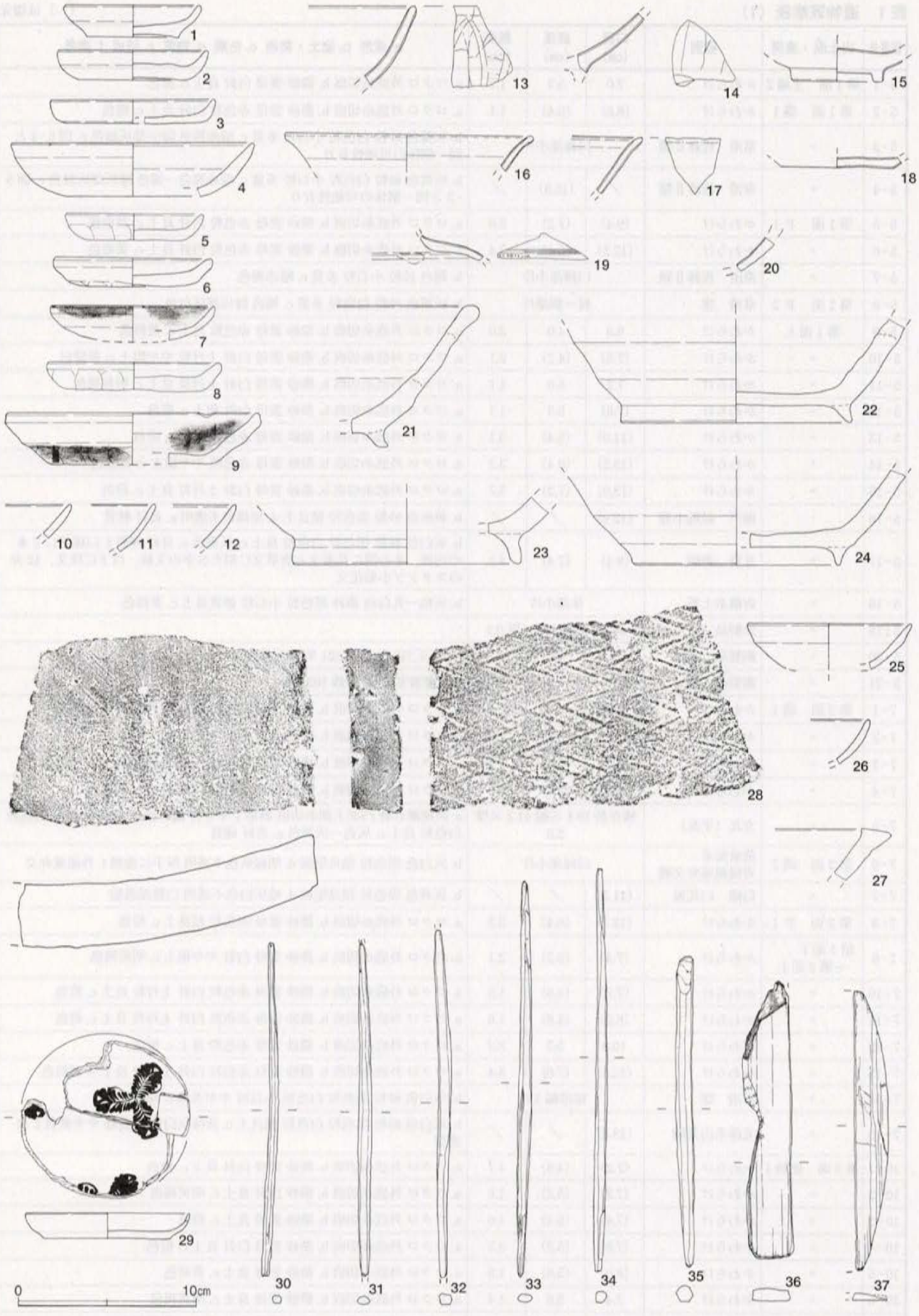


図17　第5ａ面下～第5ｂ面上出土遺物

表1　遺物観察表（1）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
5-1	第1面　土壙2	かわらけ	7.0	5.3	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
5-2	第1面　溝1	かわらけ	(8.6)	(6.4)	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
5-3	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰黄色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 暗赤褐色 降灰部灰緑色 e. 図5-4と同一個体の可能性有り
5-4	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	／	(15.8)	／	b. 灰黄色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 暗赤褐色～褐色 降灰部灰緑色 e. 図5-3と同一個体の可能性有り
5-5	第1面　P1	かわらけ	(9.4)	(7.2)	2.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
5-6	〃	かわらけ	(12.2)	(5.4)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
5-7	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 褐色 砂粒 小石粒 多量 c. 暗赤褐色
5-8	第1面　P2	常滑　甕	肩～胴部片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 褐色 降灰部灰白色
5-9	第1面上	かわらけ	6.8	4.0	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
5-10	〃	かわらけ	(7.5)	(4.7)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
5-11	〃	かわらけ	7.2	5.0	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
5-12	〃	かわらけ	(7.8)	5.3	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 粗土 c. 橙色
5-13	〃	かわらけ	(11.0)	(5.4)	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
5-14	〃	かわらけ	(13.2)	(9.4)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色
5-15	〃	かわらけ	(13.0)	(7.2)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
5-16	〃	瀬戸　緑釉小皿	(12.9)	／	／	b. 黄灰色 砂粒 黒色粒 精良土 d. 黒褐色不透明 e. 良好 軟質
5-17	〃	瓦質　香炉	(9.4)	(7.4)	4.3	b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 良土 c. 灰黒色 e. 良好 硬質 f. 口縁下に2本の沈線、その間に花菱文と唐草文に似たS字の文様、以下に珠文、12弁のスタンプ小菊花文
5-18	〃	吉備系土器	体部小片			b. 灰色～乳白色 微砂 黒色粒 小石粒 砂質良土 c. 茶褐色
5-19	〃	鉄製品　釘	長6.3×幅0.7×厚0.5			
5-20	〃	銅製品　銭				f. 開□□宝 唐 初鋳621年 開元通宝か
5-21	〃	銅製品　銭				f. 天聖通宝 北宋 初鋳1023年
7-1	第2面　溝1	かわらけ	7.0	5.2	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
7-2	〃	かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 橙色
7-3	〃	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
7-4	〃	かわらけ	(11.2)	(6.8)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-5	〃	女瓦（平瓦）	残存長19.1×幅11.2×厚2.5			a. 凹面離れ砂 凸面上部糸切痕 斜格子叩き目 離れ砂 b. 灰褐色 砂粒 黒色粒 白色粒 良土 c. 灰色～灰褐色 e. 良好 硬質
7-6	第2面　溝2	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明緑灰色半透明 厚手に施釉 f. 外面蓮弁文
7-7	〃	白磁　口兀皿	(11.2)	／	／	b. 灰黄色 黒色粒 精良堅緻 d. 暗灰白色不透明 口唇部露胎
7-8	第2面　P1	かわらけ	(12.7)	(6.4)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 精良土 c. 橙色
7-9	第1面下 ～第2面上	かわらけ	(7.4)	(5.2)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
7-10	〃	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
7-11	〃	かわらけ	(8.2)	(4.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
7-12	〃	かわらけ	10.8	5.3	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-13	〃	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
7-14	〃	常滑　甕	縁帯幅3.7			b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 暗褐色
7-15	〃	北部系山茶碗	(13.6)	／	／	b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 精良土 c. 黄味灰白色 e. 良好 やや軟質 f. 東濃型
10-1	第3面　建物1	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-2	〃	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 白針 良土 c. 明黄褐色
10-3	〃	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 橙色
10-4	〃	かわらけ	(7.8)	(5.2)	2.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-5	〃	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
10-6	〃	かわらけ	7.4	5.6	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 明黄褐色
10-7	〃	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色

表2　遺物観察表（2）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
10-8	第3面　建物1	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-9	〃	かわらけ	7.9	5.8	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
10-10	〃	かわらけ	(8.4)	(5.8)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色 f. 燈明皿
10-11	〃	かわらけ	(11.1)	(7.3)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
10-12	〃	かわらけ	(11.7	(7.4)	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
10-13	〃	かわらけ	(13.4)	(8.8)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 良土 c. 黄橙色
10-14	〃	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-15	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	底部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 厚手に施釉 やや粗い貫入 f. 外面蓮弁文
10-16	〃	龍泉窯系 青磁無紋碗	胴部小片			b. 灰色 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 厚手に施釉
10-17	〃	常滑　壺	胴部径 14.2			b. 灰褐色 砂粒 少量 c. 灰褐色
10-18	〃	常滑　甕	縁帯幅 2.2			b. 暗褐色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 黒褐色
10-19	〃	常滑　甕	縁帯幅 2.7			b. 灰色 砂粒 白色粒 多量 c. 黒褐色 降灰部灰緑色
10-20	〃	常滑　甕	縁帯幅 2.5			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 暗褐色 降灰部灰緑色
10-21	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	高台径 12.0			a. 貼付高台 b. 明灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量　c. 明灰白色 f. 内面磨滅痕
10-22	〃	土器質　火鉢	口縁・底部小片			b. 黄橙色～灰色 微砂 雲母 白色粒 粗土 c. 灰褐色 e. ややあまい 軟質 f. 再火のため剥離大
10-23	第3面　土壙1	かわらけ	(6.8)	(5.2)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 橙色
10-24	〃	白磁　壺	胴部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 明灰白色半透明 やや粗い貫入 f. 外面蓮弁文
10-25	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 明灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 やや多量 c. 灰褐色 降灰部緑灰色
10-26	〃	滑石製スタンプ	長 4.2 ×幅 2.6 ×厚 0.7			c. 灰白色～黒褐色 f. 滑石鍋からスタンプに加工途中か 文様不明
10-27	第2面下 ～第3面上	かわらけ	7.2	4.6	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-28	〃	かわらけ	(7.2)	(4.4)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
10-29	〃	かわらけ	(7.2)	(4.4)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-30	〃	かわらけ	7.6	5.2	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
10-31	〃	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
10-32	〃	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 白針 良土 c. 黄橙色
10-33	〃	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
10-34	〃	かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
10-35	〃	かわらけ	(11.0)	(7.2)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 良土 c. 橙色
10-36	〃	かわらけ	(11.4)	(7.8)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 良土 c. 橙色
10-37	〃	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
10-38	〃	かわらけ	(11.8)	(6.8)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 良土 c. 黄橙色
10-39	〃	かわらけ	13.0	7.0	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 橙色
10-40	〃	白磁　口兀皿	(10.0)	(6.0)	2.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄味灰白色不透明 口唇部・外底部露胎 f. 口唇部煤付着
10-41	〃	白磁　皿	／	(7.0)	／	a. 外底糸切痕 b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰黄緑色半透明 外底部露胎
10-42	〃	白磁　皿	／	(8.0)	／	a. 外底糸切痕 b. 灰白色 精良堅緻 d. 明灰白色半透明 外底部露胎
10-43	〃	瀬戸　卸皿	(12.8)	(6.4)	4.0	b. 暗灰白色 砂粒 精良土 d. 明黄褐色～黄緑色 e. 良好 硬質
10-44	〃	北部系山茶碗	(13.0)	／	／	b. 灰白色 砂粒 精良土 c. 明灰黄色 e. 良好 硬質 f. 内面～口縁部外面にかけ自然釉付着 東濃型
10-45	〃	北部系山茶碗	／	(5.4)	／	a. 外底糸切痕 貼付高台 籾殻恨 b. 明灰黄色 砂粒 精良土 c. 明灰黄色 f. 内面自然釉付着 東濃型
10-46	〃	常滑　甕	縁帯幅 2.4			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 暗赤褐色 降灰部灰緑色
10-47	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 褐色
10-48	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類		(12.0)		b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 やや多量 c. 灰色 f. 高台剥離 内面弱い磨滅痕・煤付着
10-49	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 赤褐色 降灰部灰緑色 f. 外面ハケ調整

表３　遺物観察表（3）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
10-50	第２面下～第３面上	常滑　捏鉢Ⅱ類		(15.0)		a. 砂目底 b. 灰褐色 砂粒 白色粒 多量 c. 褐色～暗赤褐色 降灰部灰緑色
10-51	〃	鉄製品　釘	残存長 5.0 ×幅 0.4 ×厚 0.2			
12-1	第３面下～第４面上	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
12-2	〃	かわらけ	7.4	5.4	1.55	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 明黄褐色
12-3	〃	かわらけ	(7.6)	(5.7)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 黄橙色
12-4	〃	かわらけ	8.2	6.5	1.35	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 黄橙色
12-5	〃	かわらけ	7.6	4.7	1.45	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色
12-6	〃	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.45	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
12-7	〃	かわらけ	7.6	5.95	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c. 橙色
12-8	〃	かわらけ	(8.4)	(4.4)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
12-9	〃	かわらけ	11.2	5.6	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色 f. 燈明皿
12-10	〃	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
12-11	〃	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.25	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 橙色
12-12	〃	かわらけ	12.2	7.3	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
12-13	〃	かわらけ	(12.1)	(7.2)	3.65	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
12-14	〃	かわらけ	(12.6)	(7.3)	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
12-15	〃	かわらけ	(12.4)	(7.0)	2.85	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c. 明黄褐色
12-16	〃	かわらけ	(14.2)	(8.4)	3.45	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 橙色
12-17	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 明灰白色 精良堅緻 d. 緑灰色半透明 f. 外面蓮弁文
12-18	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 明灰色 精良堅緻 d. 暗灰緑色透明 f. 外面蓮弁文
12-19	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 灰色 精良堅緻 d. 灰緑色半透明 f. 外面蓮弁文
12-20	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 明灰白色 精良堅緻 d. 青緑色不透明 f. 外面蓮弁文
12-21	〃	龍泉窯系　青磁碗	／	(5.8)	／	b. 明灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 緑灰色透明 外底部露胎 粗い貫入
12-22	〃	龍泉窯系 青磁魚文鉢	底部小片			b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 黄灰緑色不透明 細かい貫入 f. 内面魚文
12-23	〃	白磁　口兀小皿	(8.8)	(5.6)	1.8	b. 明灰白色 精良堅緻 d. 明白青色透明 口唇部露胎 f. 口唇部煤付着 燈明皿として使用か
12-24	〃	白磁　壺	／	(7.2)	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明白緑色透明 高台部露胎
12-25	〃	褐釉　壺か	胴部？小片			b. 灰褐色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 粗土 d. 茶褐色透明 内面白濁 非常に薄く施釉 e. 良好 硬質
12-26	〃	瀬戸　入子	(4.8)	(3.2)	1.2	b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 精良土 c. 灰白色 降灰部灰緑色 e. 良好 やや軟質
12-27	〃	瀬戸　瓶子	顎部径（3.6）			b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 精良土 d. 灰釉灰緑色 e. 良好 硬質
12-28	〃	北部系山茶碗	底部小片			a. 削り出し高台 籾殻痕 b. 灰白色 砂粒 黒色粒 精良土 c. 明灰黄色 f. 内面自然釉付着 東濃型
12-29	〃	常滑　小壺	／	(4.0)	／	b. 灰褐色 砂粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c. 褐色 降灰部緑灰色 f. 外底部ヘラ調整
12-30	〃	常滑　壺	(10.8)	／	／	b. 暗灰褐色 砂粒 白色粒 少量 c. 黒褐色 降灰部灰緑色
12-31	〃	常滑　壺	縁帯幅 2.0			b. 暗灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 黒褐色
12-32	〃	常滑　壺	底部小片			a. 砂目底 b. 暗灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 暗赤褐色 降灰部灰緑色
12-33	〃	常滑　甕	口径（49.0）縁帯幅 3.7			b. 灰褐色～橙色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 褐色
12-34	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	底部小片			a. 貼付高台 b. 灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 灰色 f. 内面上部磨滅 内底部煤付着
12-35	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 暗褐色 降灰部灰緑色
12-36	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 小石粒 多量 c. 暗褐色
12-37	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	底部小片			b. 橙色 砂粒 白色粒 少量 c. 暗赤褐色 f. 内面底部磨滅痕

表4　遺物観察表（4）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
12-38	第3面下～第4面上	瓦器碗	口縁～底部片			b. 灰白色～灰色 砂粒 白色粒 良土 c. 灰白色～灰色 e. 良好 軟質 f. 口縁部外面に煤付着
12-39	〃	土器質　火鉢	口縁部小片			b. 橙色 砂粒 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色 f. 内面煤付着
12-40	〃	土器質　火鉢	／	(23.4)	／	b. 灰白色 砂粒 雲母 小石粒 やや粗土 c. 褐色～橙色 f. 再火を受けている
12-41	〃	鞴の羽口	残存長 8.3 内部径 (1.7) 外部径 (3.3)			b. 橙色～明黄褐色 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黒色～黄灰色 f. 先端部にガラス質の溶着物が付着
12-42	〃	石製品　砥石	残存長 3.6 ×幅 3.0 ×厚 1.9			c. 明黄白色 f. 泥岩製 上野産か 中砥
12-43	〃	石製品　碁石	長 1.3 ×幅 1.6 ×厚 0.3			c. 黒色
12-44	〃	石製品　火打石	長 3.0 ×幅 2.5 ×厚 1.6			c. 明白灰色 f. 全体に打撃痕がみられる
12-45	〃	木製品　箸	残存長 18.0 ×幅 0.7 ×厚 0.8			f. 刃物で断面多角形に面取加工
12-46	〃	木製品　箸	残存長 20.4 ×幅 0.7 ×厚 0.7			f. 刃物で断面多角形に面取加工
15-1	第5a面 木組遺構1	かわらけ	8.4	6.1	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 橙色
15-2	第5a面　溝1	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
15-3	〃	かわらけ	(13.0)	(8.2)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
15-4	〃	かわらけ	(13.6)	(10.1)	2.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
15-5	〃	白磁　口兀皿	(12.6)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰白色不透明 口唇部露胎
15-6	〃	白磁　皿	／	(6.4)	／	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰白色透明
15-7	〃	瀬戸　小壺	／	(4.0)	／	b. 灰白色 砂粒 黒色粒 精良土 c. 灰色 e. 良好 硬質
15-8	〃	木製品　曲物蓋	孔径 0.5 直径 9.2			f. 刃物で円形に加工 中央に穿孔
15-9	第4面下～第5a面	かわらけ	7.6	5.0	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
15-10	〃	かわらけ	8.0	5.3	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 橙色
15-11	〃	かわらけ	(8.2)	(6.7)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 明黄褐色
15-12	〃	かわらけ	7.8	5.4	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
15-13	〃	かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
15-14	〃	かわらけ	12.6	8.0	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
15-15	〃	かわらけ	(12.0)	(6.6)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
15-16	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	高台径 5.0			b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 黄味灰緑色透明 f. 外面蓮弁文 内底に周回する沈線有り
15-17	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 緑灰色不透明 厚手の施釉 f. 外面蓮弁文
15-18	〃	龍泉窯系 青磁無文折縁皿	(21.0)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 暗緑灰色透明 厚手の施釉 f. 無文
15-19	〃	青磁　折腰鉢	／	(6.1)	／	b. 灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 高台畳付露胎
15-20	〃	白磁　口兀皿	(10.0)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 灰白色透明 口唇部露胎
15-21	〃	白磁　口兀皿	(10.0)	／	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 黄味灰白色透明 口唇部露胎
15-22	〃	白磁　皿	／	5.1	／	b. 灰白色 黒色粒 堅緻 d. 明灰白色不透明 底部露胎 f. 内底に周回する沈線有り
15-23	〃	青白磁　皿	／	(6.0)	／	b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明水青色半透明 f. 内底に周回する沈線有り
15-24	〃	北部系山茶碗	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 精良土 c. 灰白色 f. 内面磨滅
15-25	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 やや多量 c. 灰色
15-26	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	底部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 良土 c. 灰色 降灰部灰緑色
15-27	〃	瓦器碗	体部小片			b. 灰白色 砂粒 良土 c. 灰白色～灰黒色 e. 良好 やや硬質 f. 内面暗文
15-28	〃	女瓦（平瓦）	残存長 8.6 ×幅 8.5 ×厚 3.0～3.4			a. 凹面横位糸切痕 縦横位ナデ 離れ砂 凸面斜格子叩き目 縦横位の軽いナデ b. 灰白色 砂粒 白色粒 良土 c. 灰色～灰白色 e. 良好 硬質
15-29	〃	木製品　燈台	残存長 7.4 ×幅 6.8 ×厚 0.6～1.6			f. 破損部分を除き黒漆を塗布　燈台の下部か
15-30	〃	漆器　皿	(10.0)	(7.5)	1.4	f. 黒漆地に朱漆で手描き 鶴文か

表5　遺物観察表（5）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
15-31	第4面下～第5a面上	漆器　皿か	残存長2.6×幅3.5×厚0.4			f. 黒漆地に朱漆で手描き 文様不明
15-32	〃	木製品　箸	残存長17.4×幅0.6×厚0.6			f. 刃物で断面多角形に面取加工
15-33	〃	木製品　箸	残存長18.0×幅0.7×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工
15-34	〃	木製品　箸	残存長18.2×幅0.7×厚0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工
15-35	〃	木製品　箸	残存長18.7×幅0.7×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工
15-36	〃	木製品　箸	残存長21.2×幅0.5×厚0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味に加工
15-37	〃	木製品　箸	残存長24.3×幅0.6×厚0.6			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味に加工
15-38	〃	用途不明木製品	残存長11.3×幅1.6×厚0.6			f. 上端に浅い穿孔
16-1	第5b面 木組遺構2	かわらけ	9.2	6.4	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 やや粗土 c. 黄橙色
16-2	〃	かわらけ	(9.0)	(7.0)	1.9	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 黄橙色
16-3	〃	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.6	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
16-4	〃	かわらけ	12.2	10.8	3.6	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 明黄褐色
16-5	〃	かわらけ	12.8	10.8	3.0	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 小石粒 やや粗土 c. 明黄褐色
16-6	〃	かわらけ	(13.2)	(11.0)	2.9	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-7	〃	白かわらけ	(8.4)	(7.4)	2.5	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 灰白色
16-8	第5b面 土壙1	かわらけ	(9.6)	(7.4)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 土丹粒 やや粗土 c. 明黄褐色
16-9	〃	かわらけ	(10.0)	(7.8)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-10	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	高台径（4.0）			b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 暗灰緑色半透明 厚手の施釉 高台畳付～高台内露胎 f. 外面蓮弁文
16-11	〃	泉州窯系 黄釉鉄絵盤	底部小片			b. 灰黄色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 粗土 d. 黄灰色透明 e. 良好 やや硬質 f. 内面牡丹文
16-12	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	底部小片			b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量 c. 明黄褐色 f. 内面磨滅
16-13	第5b面 土壙2	かわらけ	7.8	5.5	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-14	〃	かわらけ	8.0	5.9	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
16-15	〃	かわらけ	(9.0)	(6.8)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 明黄褐色
16-16	〃	龍泉窯系 青磁碗	底部小片			b. 赤灰色 精良堅緻 d. 暗灰緑色不透明 f. 外面下位沈線有り
16-17	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 粘質 c. 灰色
16-18	〃	木製品　曲物	残存長7.0×幅3.1×厚0.7			f. 底板 側端斜めに加工
16-19	第5b面　P1	青磁　櫛掻蓮弁文碗	(16.6)	／	／	b. 灰白色 砂粒 黒色粒 堅緻 d. 青緑色半透明 f. 内面劃花文　外面櫛掻蓮弁文
16-20	第5b面　P2	かわらけ	(12.0)	(7.0)	2.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
16-21	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b. 明灰黄色 砂粒 白色粒 多量 c. 明灰黄色～茶褐色
17-1	第5a面下～第5b面上	かわらけ	(7.6)	(6.2)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 黄橙色
17-2	〃	かわらけ	(8.4)	6.0	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c. 明黄褐色
17-3	〃	かわらけ	(9.2)	(7.1)	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
17-4	〃	かわらけ	(13.6)	(7.6)	3.05	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
17-5	〃	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.5	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 明黄褐色
17-6	〃	かわらけ	(8.8)	(7.4)	1.6	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 白針 良土 c. 黄橙色
17-7	〃	かわらけ	(9.2)	(4.1)	2.0	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 明黄褐色 f. 燈明Ⅲ
17-8	〃	かわらけ	(9.6)	(7.8)	1.5	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 明黄褐色
17-9	〃	かわらけ	(14.0)	(8.8)	2.95	a. 手捏ね 外底指頭痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 黄橙色 f. 燈明Ⅲ
17-10	〃	白かわらけ	口縁部小片			b. 微砂 良土 c. 灰白色
17-11	〃	白かわらけ	口縁部小片			b. 微砂 良土 c. 灰白色
17-12	〃	白かわらけ	口縁部小片			b. 微砂 良土 c. 灰白色
17-13	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片			b. 明灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 f. 外面蓮弁文
17-14	〃	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	底部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 青緑色半透明 f. 外面蓮弁文

表6　遺物観察表（6）　　（　）は復元

図番号	出土面・遺構	種別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
17-15	第5a面下～第5b面上	龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗	高台径 5.2			b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄味灰緑色透明 高台畳付露胎 f. 外面蓮弁文
17-16	〃	白磁　口兀碗	(13.8)	／	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 白色不透明 口唇部露胎
17-17	〃	白磁　口兀碗	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 黄味灰緑色透明 口唇部露胎
17-18	〃	白磁　口兀皿	／	(6.4)	／	b. 灰白色 精良堅緻 d. 明黄白色透明
17-19	〃	青白磁　梅瓶	肩部小片			b. 明灰色 精良堅緻 d. 水青色透明 d. 外面櫛掻文 周回する2条の沈線
17-20	〃	黄釉　盤	体部小片			b. 灰褐色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗土 d. 黄灰色半透明 e. 良好 硬質 f. 外面二次焼成の為白濁
17-21	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部～底部小片			a. 貼付高台 b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 明灰褐色～灰褐色 f. 内面磨滅 煤付着
17-22	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	高台径（13.0）			b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色 f. 内面磨滅
17-23	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	高台径（12.8）			b. 褐色 砂粒 白色粒 小石粒 少量 c. 褐色
17-24	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	高台径（11.6）			b. 灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石粒 多量 c. 灰色 f. 内面若干磨滅
17-25	〃	瓦器　碗	(9.2)	／	／	b. 灰白色 砂粒 精良土 c. 灰黒色 e. 良好 硬質 f. 内外面摩耗
17-26	〃	瓦器　碗	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 精良土 c. 灰白色 e. 良好 f. 内外面摩耗
17-27	〃	瓦質　火鉢	口縁部小片			b. 灰色 砂粒 白色粒 粗土 c. 黒色 e. ややあまい 軟質 f. 内外面摩耗
17-28	〃	女瓦（平瓦）	残存長 9.0～10.5×幅 15.5～19.0×厚 3.0～3.5			a. 凹面縦位ナデにより布目痕消去 凸面横長の斜格子叩き目 側面ヘラ削り b. 灰色 砂粒 黒色粒 良土 c. 灰白色～灰黒色 e. 良好 硬質 f. 永福寺Ⅱ期瓦 水殿瓦窯
17-29	〃	漆器　皿	(9.5)	(7.2)	1.4	f. 黒漆地に朱漆の手描き 三葉を組み合わせた植物文
17-30	〃	木製品　箸	長 18.9×幅 0.5×厚 0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工
17-31	〃	木製品　箸	残存長 19.0×幅 0.7×厚 0.5			f. 刃物で断面多角形に面取加工
17-32	〃	木製品　箸	残存長 19.7×幅 0.7×厚 0.6			f. 刃物で断面多角形に面取加工
17-33	〃	木製品　箸	残存長 22.8×幅 0.8×厚 0.4			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味に加工
17-34	〃	木製品　箸	残存長 22.7×幅 0.6×厚 0.6			f. 刃物で断面多角形に面取加工 両端尖り気味に加工
17-35	〃	用途不明木製品	長 17.8×幅 1.0×厚 0.9			f. 断面多角形に面取加工 菜箸か
17-36	〃	用途不明木製品	残存長 15.6×幅 2.1×厚 0.8			f. 上端破損部煤付着 腐蝕激しい
17-37	〃	用途不明木製品	長 15.9×残存幅 1.9×厚 0.1～0.4			f. 子供用板草履の一部か

第3章　まとめ

本遺跡は市内北東部、朝比奈へ通じる県道金沢鎌倉線沿いにある鎌倉五山浄妙寺の南方に位置した功臣山報国建忠禅寺の建つ宅間ヶ谷に所在している。報国寺の境内は現在ではこの谷戸の開口部付近だけであるが、『新編相模国風土記稿』によれば旧境内は江戸時代までは広大な寺域であったらしく、それを物語る資料として江戸時代末期（寛文三年：1791年）に描かれた『報国寺境内絵図』には表門の南に仏殿や地蔵堂、西側には中門と客殿・鐘楼・庫裡などが描かれ、谷奥には東禅院や浄蓮庵など塔頭の記載が認められ、この谷戸全域が旧境内域あったことは想像に難くない。調査地点は、古絵図によると旧境内域の中央北寄り、仏殿に近い位置にあたると思われる。

本調査地点からは、中世前期の少なくとも５時期の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見されている。ここでは図18に示したように今回の発掘調査に先立ち調査の実施されたA地点（浄妙寺二丁目474番11地点）の調査成果も参考にして、各生活面から検出された遺構の配置や出土した遺物の年代観から３期に大別し、以下に各期の変遷と年代の概略を述べてまとめに変えたい。

第Ⅰ期－第5a・b面（中世基盤層上）：第５面のうち、5b面では暗茶褐色粘質土の中世地山上面から建物を構成しないピットやゴミ穴の大型土壙などの遺構が重複する形で検出された。これに対して5a面では溝以外に主だった遺構は認められず生活の痕跡が希薄な様子が窺えた。搬入品からみた年代は、遅くとも13世紀第１四半期頃には営為がはじまり、13世紀中頃を主体とした様相が指摘できる。なお、この東西溝の区画及び建物などの主軸方位の状況は次代にあたる第Ⅱ期－第3・4面へと継承されていたことが窺える。

第Ⅱ期－第４・３面：第４面では、調査区南端部に東西位の建物遺構がみられた。建物北端には土丹塊を並べて補強し、北側は土丹小塊や粗砂を交互に版築して通路状の造成を施していた。第３面では建物廃絶後に両側を土丹塊や鎌倉石による乱石積で補強された溝へと変化している。搬入遺物からみた年代は、竜泉窯系青磁蓮弁碗や常滑窯甕編年などから13世紀後半の要素をもつ資料が主体を占め、概ね13世紀末葉までの年代とみて大過ないと思われ、近い時期で連続した生活面を構成していたと想定される。さらに本地点第３面の溝１は図18-A地点で検出した溝の延長にあたるものであろう。従って、Ⅰ・Ⅱ期の遺構と遺物の年代変遷をみると報国寺開創以前の様相が明らかであり、この谷戸の呼称ともなっている宅間氏の屋敷との関連が想起されるところである。

第Ⅲ期－第２・１面：この時期の遺構としては、主軸方位の異なる浅い溝と土壙などが主体を占めていた。両面の搬入品の年代は14世紀前葉にはじまり、15世紀におよぶ。中世以降の攪乱や削平を受けた為に遺物の年代的混乱がもたらされたのではないかと思われる。遺構に伴う出土遺物の年代からみて報国寺に関連すると時期と捉えるのが妥協であろう。

【参考文献】

宗臺秀明　1992　「中世、14世紀かわらけの変遷」『考古論叢　神奈川』第１集
宗臺富貴子　1996　「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について－古瀬戸前期から後期までの出土様相－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』
馬淵和雄　1997　「中世食器の地域性　鎌倉」『国立歴史民族博物館研究報告』71集

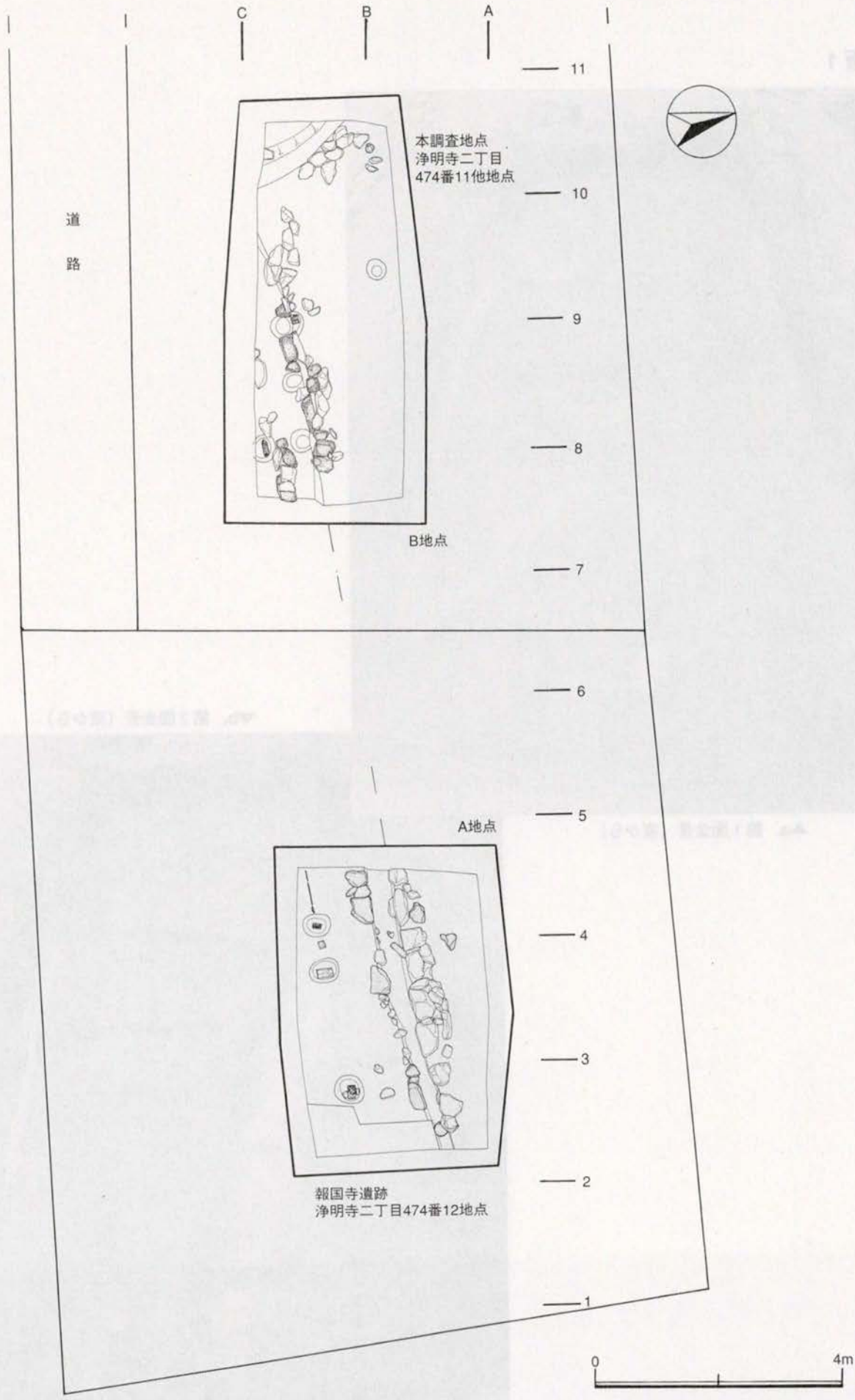
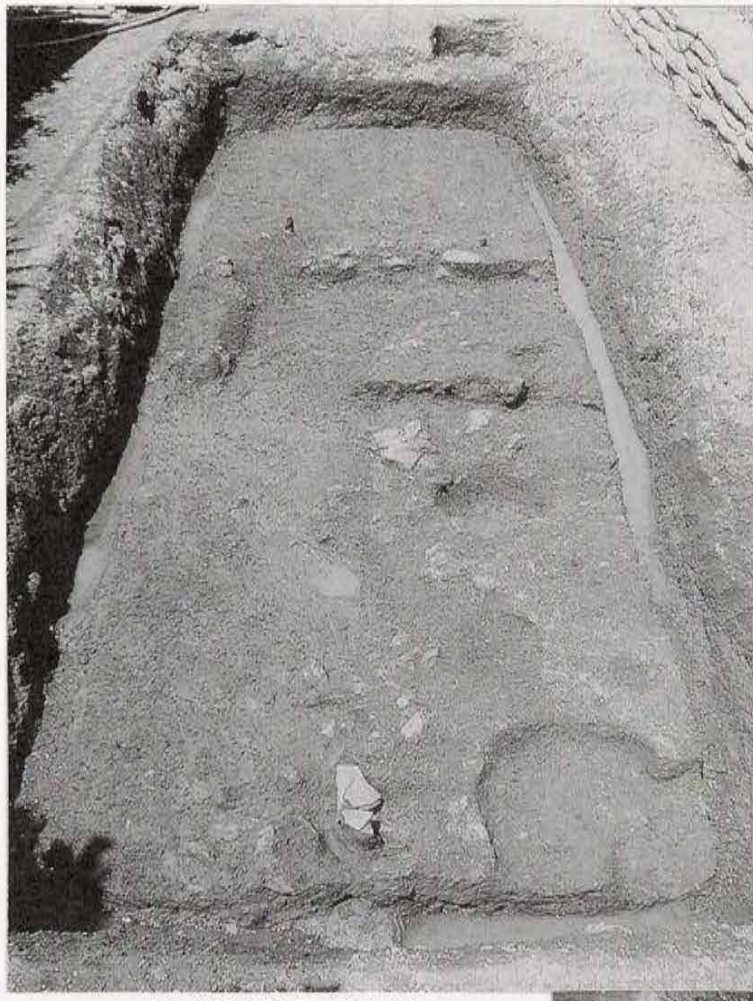


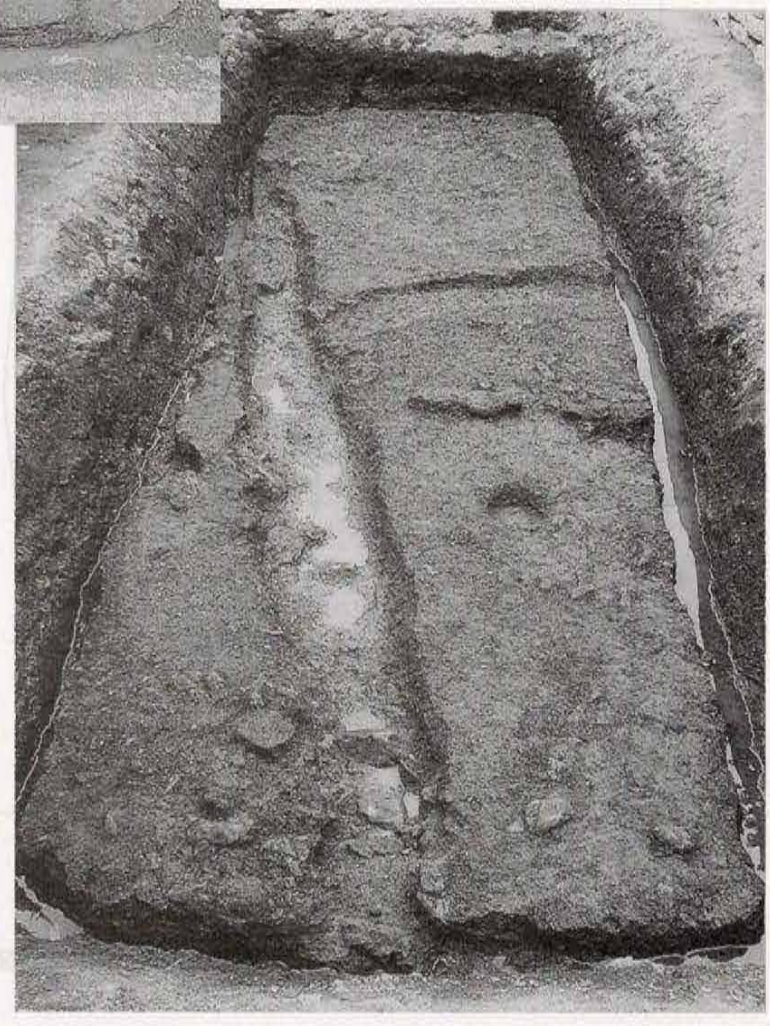
図18　調査区地点位置図

図版 1

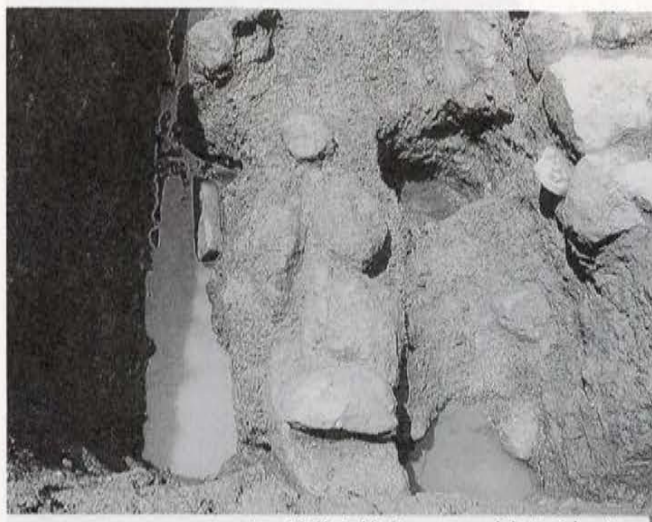


▲a. 第 1 面全景（東から）

▼b. 第 2 面全景（東から）



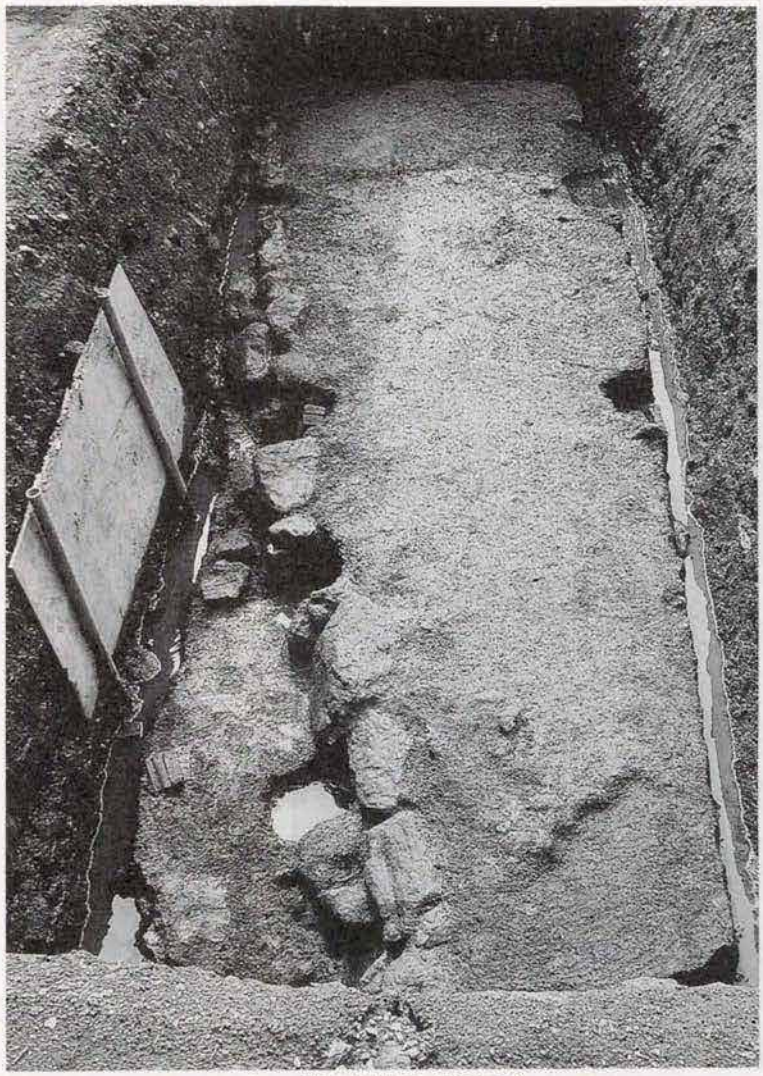
▲a. 第 3 面全景（東から）



b. 建物 1 柱穴　（東から）▲

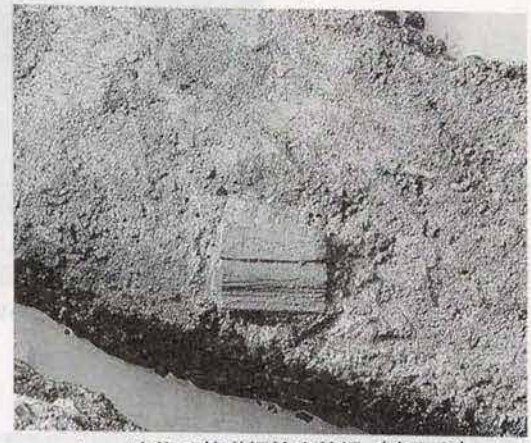
▶（北から）

図版 3

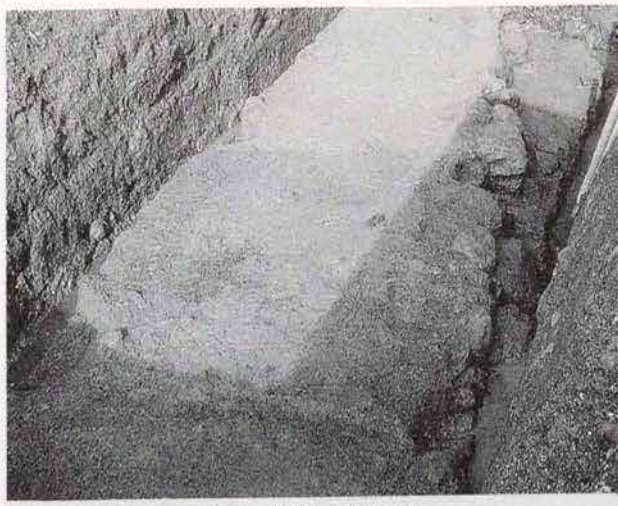


▲a. 第 4 面全景（東から）

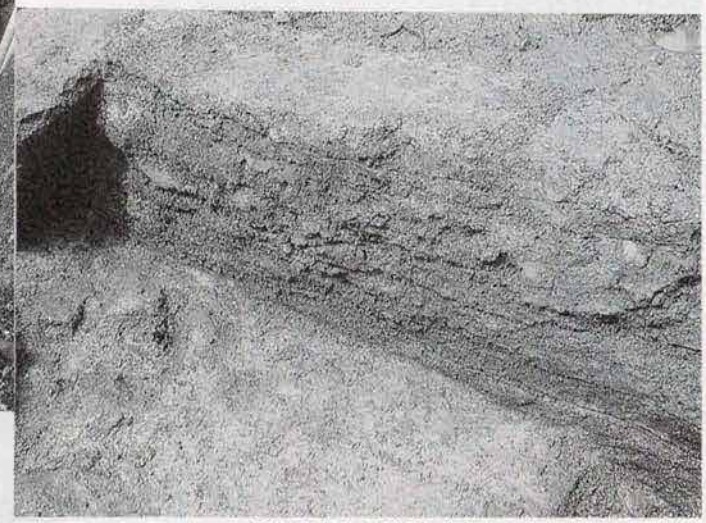
▲b. 建物 1（東から）



▲c. 建物 1 基礎板検出状況（南から）



▲d. 通路（西から）



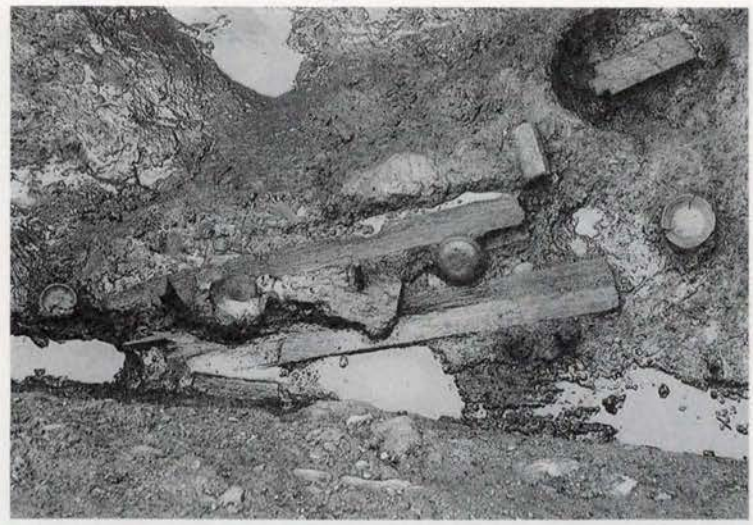
▲e. 通路地業土層堆積（東から）

▲a. 第5a面全景（東から）

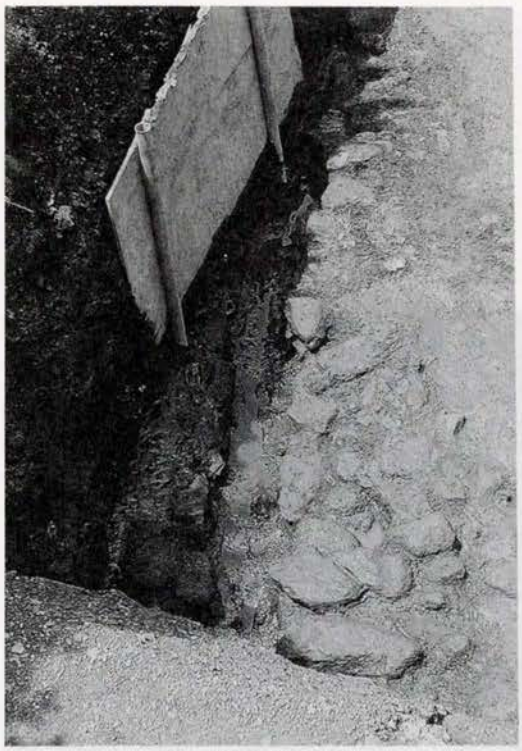
▼b. 第5b面全景（東から）

図版 5

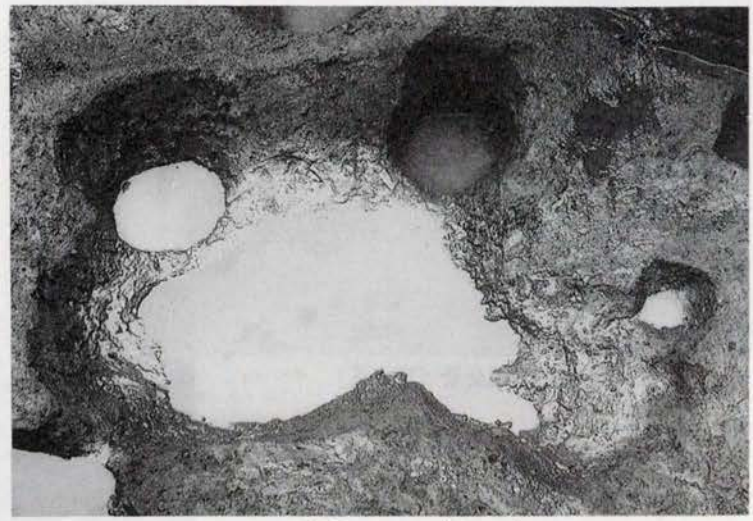
▲a. 第5a面木組み遺構 1（北から）



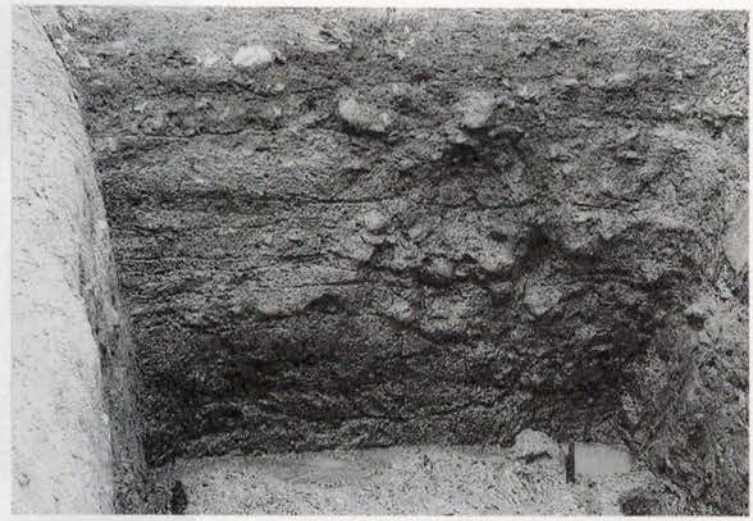
▲c. 第5b面木組み遺構 2（南から）



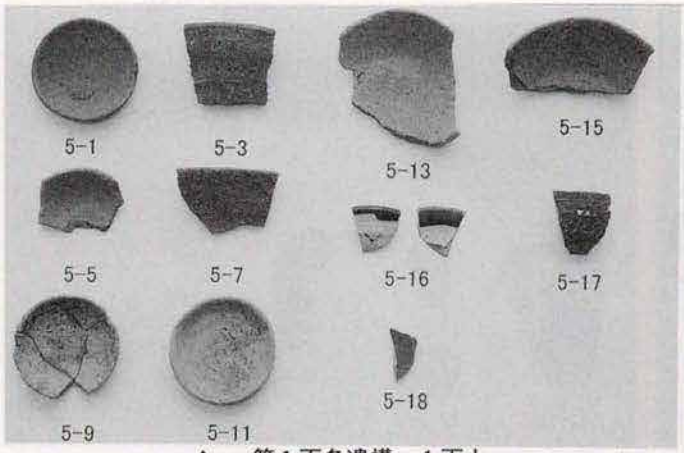
▲b. 溝 1（東から）



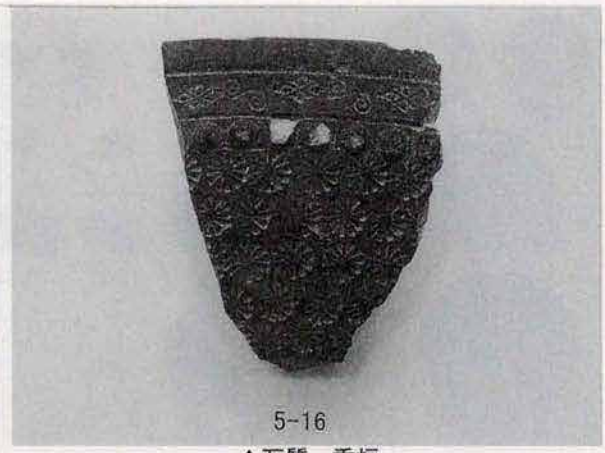
▲d. 土壙 1・P2（北から）



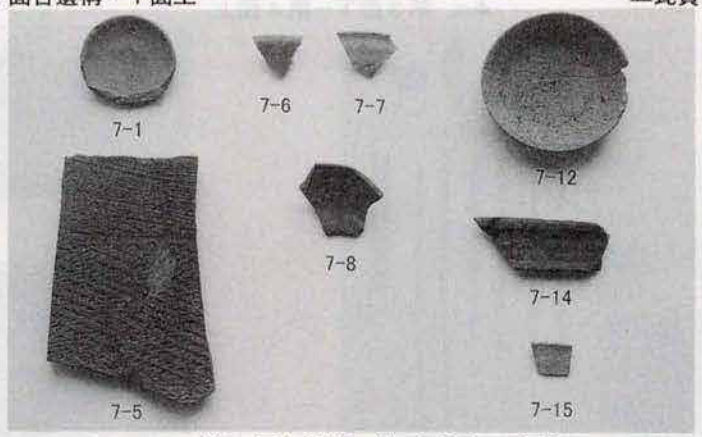
▲e. 調査区東壁土層堆積



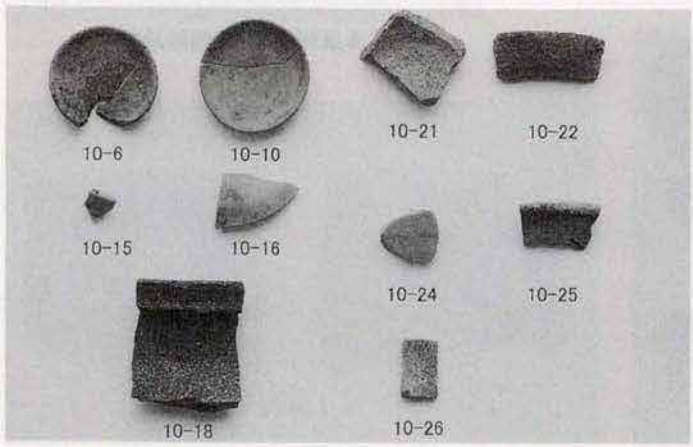
▲a. 第 1 面各遺構・1 面上



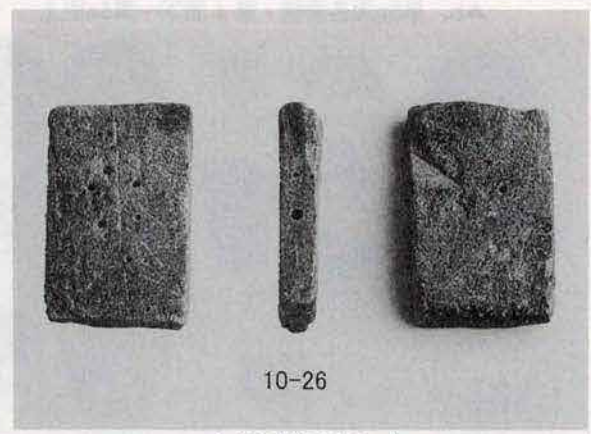
▲瓦質　香炉



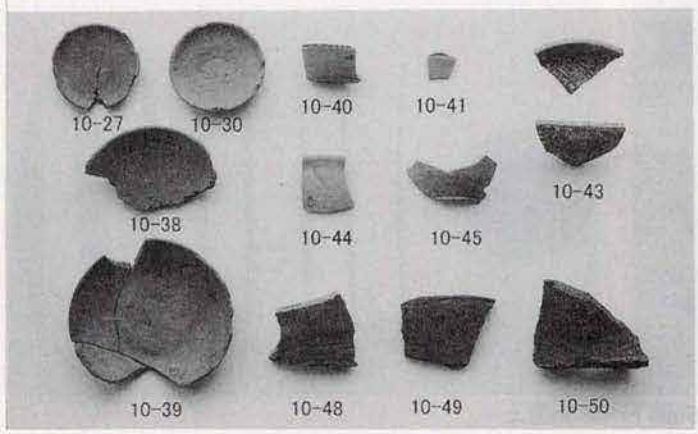
▲b. 第 2 面各遺構・第 1 面下～ 2 面上

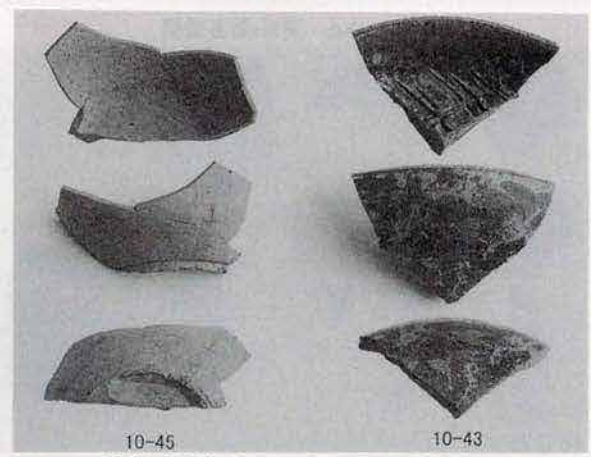


▲c. 第 3 面各遺構・第 2 面下～第 3 面上



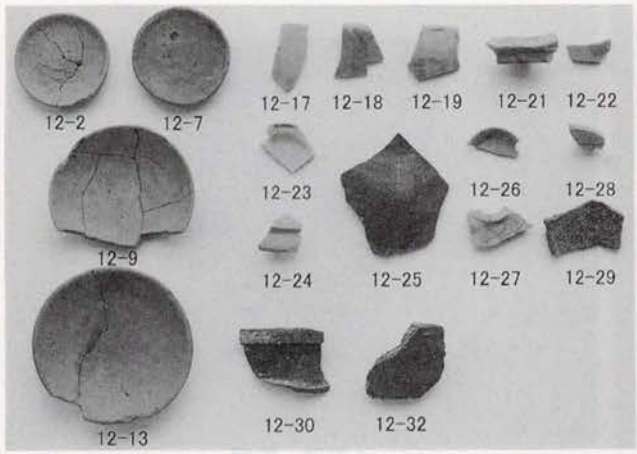
▲滑石製スタンプ

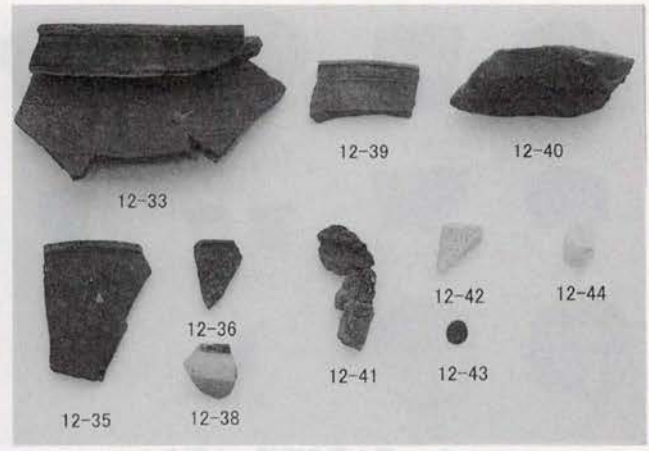




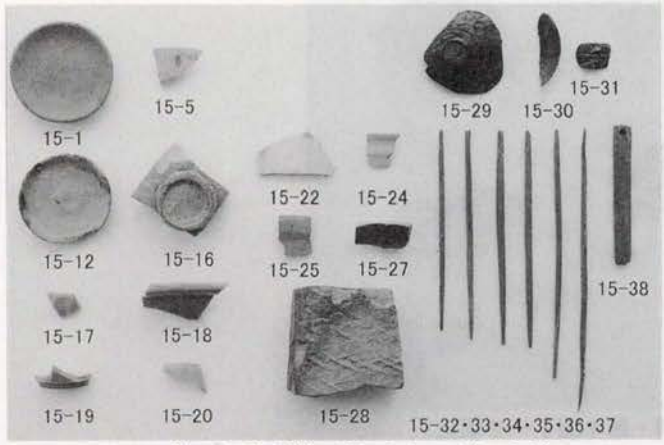
▲美濃系山茶碗　▲瀬戸卸皿

図版 7

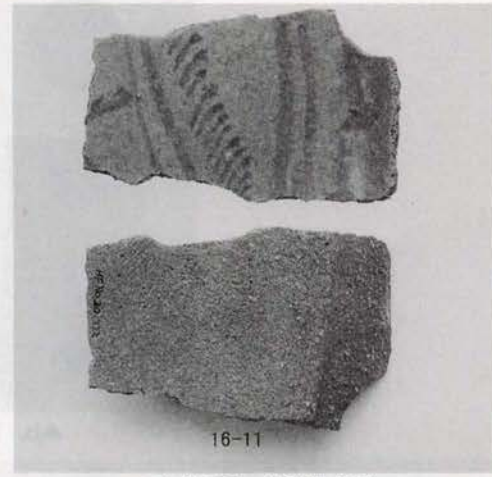




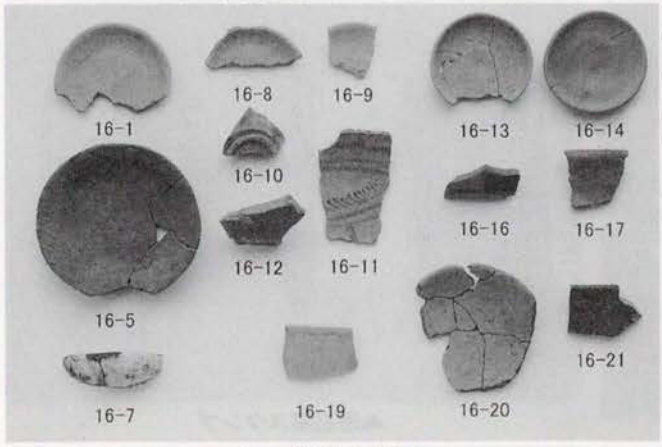
▲a. 第 3 面下～第 4 面上



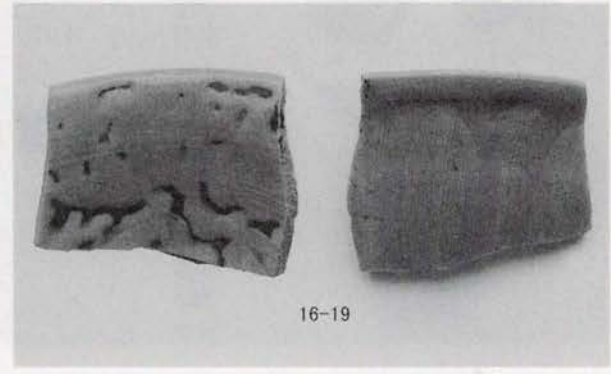
▲b. 第5a面各遺構・第 4 面下～第5a面上



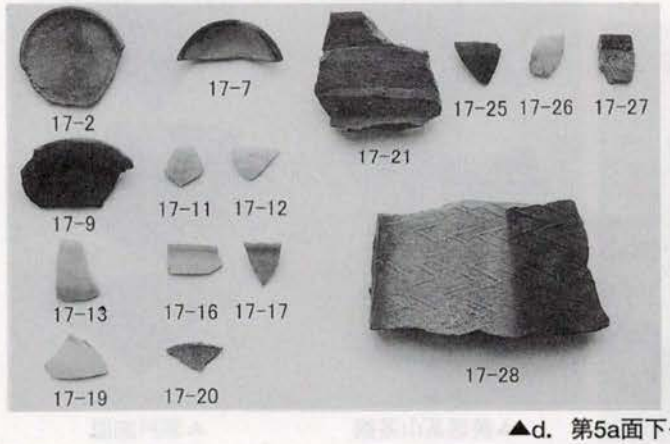
▲泉州窯系 黄釉鉄絵盤

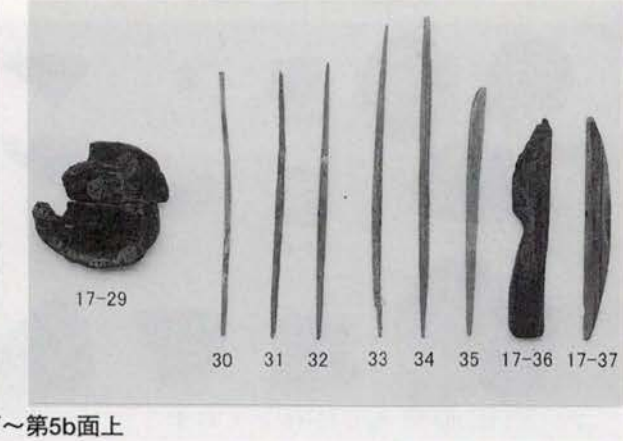


▲c. 第5b面各遺構



▲龍泉窯系 青磁蓮弁文碗





▲d. 第5a面下～第5b面上

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成１８年度調査報告
巻次	２３（第１分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	宮田眞・森孝子／原廣志・山口正紀／馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子・鈴木弘太／宗臺秀明・宗臺富貴子・小泉衣理／福田誠・古田土俊一
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦２００７年３月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 ２８３番の一部	14204	242	35° 31′ 69″	139° 55′ 56″	20030414 ～ 20030611	150.16	自己用店舗 併用住宅 （杭基礎構造）
のうぞうじあと 能蔵寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 ２７４番２の一部	14204	314	35° 30′ 54″	139° 55′ 74″	20030529 ～ 20030721	45.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
あまなわじんじゃいせきぐん 甘縄神社遺跡群	神奈川県鎌倉市 長谷一丁目 ２２７番２５	14204	177	35° 31′ 09″	139° 54′ 15″	20030617 ～ 20030710	36.20	個人専用 住宅 （地下車庫）
えんかくじきゅうけいだいいせき 円覚寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字瑞鹿山 ３９３番３	14204	434	35° 33′ 26″	139° 57′ 97″	20030623 ～ 20030724	36.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
じょうみょうじきゅうけいだいいせき 浄妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺三丁目 ３番２	14204	408	35° 19′ 08″	139° 34′ 17″	20030701 ～ 20030808	37.13	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
ほうこくじいせき 報国寺遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺三丁目 ４７４番１１外	14204	306	35° 31′ 61″	139° 57′ 32″	20030623 ～ 20030725	35.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
ほうこくじいせき 報国寺遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺三丁目 ４７４番１２	14204	306	35° 31′ 62″	139° 57′ 29″	20030728 ～ 20030831	21.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）

所収遺跡名	所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代	道路状以降、掘立柱建物跡、井戸跡等	舶載陶磁器、国産陶器 かわらけ、金属製品 漆器、木製品、石製品等	
のうぞうじあと 能蔵寺跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品等	
あまなわじんじゃいせきぐん 甘縄神社遺跡群	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、土壙、溝跡、 版築面等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品等	
えんかくじきゅうけいだいいせき 円覚寺旧境内遺跡	社寺	中世前期	道路、溝、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載磁器、漆碗・皿等	円覚寺「寺山并門前新御寄進絵図」に描かれた地点で当該期の土地利用変遷を確認。
じょうみょうじきゅうけいだいいせき 浄妙寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	池跡等	かわらけ、瓦等	池跡の確認
ほうこくじいせき 報国寺遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品等	
ほうこくじいせき 報国寺遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　23

平成18年度発掘調査報告（第１分冊）

発行日　平成19年３月30日

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　野崎印刷紙器株式会社